

AC
145
G856
1923
v. 18
pt. 2

**PLEASE DO NOT REMOVE
CARDS OR SLIPS FROM THIS POCKET**

UNIVERSITY OF TORONTO LIBRARY

**EAST ASIAN LIBRARY
UNIVERSITY OF TORONTO LIBRARY
130 St. George Street
8th FLOOR
TORONTO, CANADA M5S 1A5**

續群書類從

第拾八輯下

東京
續群書類從完成會

812042

AC

145

G856

1923

U, 18

pt. 2

續群書類從第拾八輯下目次

物語部

卷第百十三	伊勢物語山口抄	六二七
卷第百十四	伊勢物語宵聞抄	六七六
卷第百十五	伊勢物語惟清抄	七六六
卷第百十六	源氏物語千鳥抄	八四二
卷第百十七	類字源語抄	九〇一
卷第百十八	源氏物語和秘抄	一〇二六
卷第百十九	雨夜談抄〔帶不別注〕	一〇七〇
卷第百二十		

布勢屋乃塵……………一一〇三

源氏物語竟宴記〔省略〕

卷第百二十一

狹衣物語下紐……………一一〇八

日記部

卷第百二十二

春能深山路……………一一九四

卷第百二十三

高野日記頼阿……………一二四六

宗長日記……………一二五二

紀行部

卷第百二十四

室町殿伊勢參宮記……………一二六七

白川紀行宗祇……………一二七六

佐乃々和太利宗碩……………一二八二

美濃路紀行兎庵……………一二八七

卷第五百二十五

湯本紀行

缺

遠江守政一紀行

一二九五

卷第五百二十六

丙辰紀行道春

一三〇六

高野路記奢慶卿

一三二七

續群書類從第拾八輯下目次終

續群書類從卷第五百十三

總檢校保己一集

男源忠寶校

物語部十三

山口記

此物語題號種々儀在之。古註之說。男女物語云々。其子細者伊勢の二字を男女と讀故也と云へり。此義京極黃門奥書に載られず。然間當流に不用處也。又云。業平狩の使として伊勢に下向せられ。齋宮に逢奉る事。此物語の及肝心之間。有此名云々。定家卿同奥書に破之。又同奥書に。此物語名字。非彼筆者。何稱伊勢乎と云へり。以是當流に用る題號は。或說云。伊勢書之。奉宇多御門之由云へり。此儀可然。伊勢は七條の后宮の宮女たる間。彼宮に書て奉りし

作物語也。其内業平身上に在ける事もあり。又万葉集以下の歌。其外さもあらぬ事を。業平を主になして書る處多侍るべし。又或自筆の本の奥書に。此物語古人之說々不同。或稱在原中將自書。或稱伊勢筆作。就彼是有書落事等。上古之人強不可尋其作者。唯可翫詞花言葉而已と侍るにや。黃門の心にも。以往の事なれば。おぼつかなくて思召けるなるべし。雖然於名字用伊勢筆作之義。於心者可翫詞花言葉之義用之者也。學者此義可思者歟。

山口記

春日野の若むらさきのすりごろもしのぶのみ
だれかぎりしられす

此段の詞に。狩衣のすそをきりてやるとは。
はじめて見初たる女に。心ざしのふかさい
ろ見えねばなり。五文字に春日野とをくは。
所春日なればなり。紫は野に生るもの也。下
の句は。そのとききたるかり衣しのぶずり
なり。しのぶはみだるゝものなれば。思ひの
亂るかぎりしらぬよしなり。

みちのくのしのぶもぢずり誰ゆへにみだれそ
めにし我ならなくに

此歌は左大臣源融公の歌なり。たゞ今の返
しに似合たれば。心を付かへてをくれるな
り。本心は上は序なり。誰ゆへにみだれし我
にてはなきものといふは。君ゆへにこそ
みだれそめしかといふ心なり。今の女の返

しに。其ころにては道理かなはず。始てな
りひらのをくる歌の返しに。君故にこそ亂
れぬらむの心なり。源氏物語にも。當座に歌
のことはりをつけかふる事あり。

おきもせずねもせて夜半をあかしては春のも
のとてながめくらしつ

此段の詞に。その女世の人にはまされりけ
り。其人かたちよりは心なんまざりたりと
あり。それをほのかたらひし後よめる歌な
り。おきもせずねもせずとは。おくるともな
く。ぬるともなくの心也。思ひのくるしささ
まなり。かく苦しみて夜をあかして。ひるは
ながめくらす義なり。春の物とては。春は霖
雨かすかなる物なり。又春は春のあはれに
感せられ。世の人みな詠るものなり。大かた
の人さへながめがちなるころ。たぐひなき
人にしのびて逢て。春の雨の霞とも雨とも

わかぬばかり降たるを見ん心かぎりなく侍
るべし。詠と長雨とかねたる歌なり。いかに
も此歌をば時節のあはれと。其人のあかぬ
おもひとを。よくおもひ入て吟味すべし。

思ひあらばむぐらの宿にねもしなんひじきも
のには袖をしつゝも

此歌は二條の后宮の御かたへ。ひじきもと
いふ物を。なりひらのまいらするとて。そへ
たる歌なり。むぐらの宿に思ひをよむこと
は此歌よりよめり。疎屋のかなしきこゝろ
なり。但此歌はむぐらの宿に思ひのあるに
あらず。むぐらの宿におもひある事ならば。
いかでかそれにねがひてねむとはいふべ
き。此歌の心は。業平二條のささきを思ひそ
めしより。なげきはかぎりなく成ゆき。心に
はかなはぬ戀路也。さりとてはおもひもや
まぬかなしみのあまりに。わざと思ひあら

ば玉のうてなにぬるともせむなし。思ひな
くてだにあらば。しき物には袖をしても。む
ぐらの宿にこそねめといへる心なり。むぐ
らの宿もかなしかるべけれども。いまのお
もひにまざるべきの心なり。

月やあらぬ春やむかしの春ならぬ我身ひとつ
はもとの身にして

これは二條のささきのまたみかどにもつか
うまつり給はぬころ。五條のささきの西の
たいにおはしましゝころ。なりひらのしの
びにかよひたてまつりしこと有まじきこと
なれば。むつきの十日ばかりのころ。外にか
くしまいらせられしかば。なりひらちから
なく思ひわびつゝ過し侍りし間に。としか
へり又むつきに成て。梅の花さかりなるこ
ろ。思ひいやまさりになれば。たゞわびて西
のたいにゆきてながむるに。こぞに似るべ

きにも侍らねば。いたづらにあばらなる板
じきに。おもひわびあかしてよめる歌也。心
は月やあらぬとは月もたゞこぞの月。春も

またむかしの春。我身もまたもとの身也。さ
さきにあひ奉らねば。月も去年の月ともお
ぼえず。春もむかしの春ともなく。身も本の

身ともなきといふ心を。文字は三十一字に
かぎり有物なれば。もとの身にしてといひ
すてゝ。心にもたせてをけるところ。業平の
歌のさまなり。なを此歌は梅の花さかりに
去年を思ひ出てといふ心をこめて。うちな
がめて吟じみれば。餘情かぎりあるべから
ず。俊成卿いくたびも此歌の事かきをさ給
へり。たれも心をよく付て見侍るべし。

人しれぬ我かよひぢのせきもりはよひくご
とにうちもねなゝん

此歌はかの西のたいに二條のきささちあはし

ゝとき。しのびかよひ。たびかさなりしか
ば。人をすへてまもらせたまへるのちよめ
る。心はあきらかなり。せきもりとは。我に
さはる人をいへるなるべし。

しら玉か何ぞと人のとひしとき露とこたえて
きえなまし物を

此歌は業平二條のきささをぬすみ奉りて。
大うちを出し夜いとくらきに。草の露をか
れは何ぞと男にとひ給ひしに。そのおりは
業平こゝろもまどひ。身をも我とも思ひわ
かざりしを。御せうとたちうちへ参り給ふ
とて。なく人あるをさゝつけて。とりかへし
給ひし後の歌なり。何ぞととひ給ひしとき。
露ときえなましかば。かゝる思ひあらじの
義也。此歌しら玉かといへる五文字よろし
からず。されども何ぞとうけたるにより。子
細なく侍る也。物の名をもてことうたがひ

いはゞあしかるべし。たとへば松風遠山かななどのさまなり。此註は兒女子のためにかきをく物なれば。かやうのことまで申侍るなるべし。此段は例のつくり事也。

いとゞし 過行かたのこひしきにうらやましくもかへるなみかな

大かたそのまゝ聞えたる歌なり。猶なりひら流罪の身となりて。行すゑなふいなかへおもむくとき。いまだ見もなれぬ海づらを行に。なみのしろうたつも。目にたつさまなるが。うちよするかと見れば。やがてはかへり／＼するが。我歸京はいつをたのむかぎりもなき心あはれにや。此理を思ひ入て。分別あるべきもの也。

しなのなるあさまのたけにたつけぶりをちこち人の見やはとがめぬ

これも同じく流罪のときの事也。心はあさ

まの山は世にかくれなき山なれば。うちみるもたぐひなきに。名におふけぶりの立のぼりたるさま。目もおどろくばかりおもしろければ。をちこち人もこの景氣を見とがめぬことあらじの心也。旅のそらにては月雪雲風もかなしき事はめづらしからず。時にいたりて。またかゝる旅にもあらずば。いかてなど心をのぶること侍るにや。

から衣きつゝなれにしつましあればはる／＼きぬる旅をしぞおもふ

此段の詞に。その澤のほとりの木のかげにありゐて。かれいひくひけり。其澤にかきつばたいとおもしろくさきたりなどいへる詞あり。そのときかきつばたを折句によめる歌なり。心は衣はきてなるゝものなれば。なれにしとはいへども。なれにしといふより。戀の心へやりて見るべし。なれにしつまし

あればとは。思ふ人を都にをきて。はるく
來ぬる思ひの切なる心。あらはにいはで。は
るくきぬる旅をしぞといへる。感ながき
也。旅のそらの思ひ。都の妻を思ふ心も。す
ゑの句にあはれふかくこもれり。これ中將
の歌のさま也。

するがなるうつゝの山邊のうつゝにも夢にも人
にあはぬなりけり

此歌はみやこにてあひ見し人には侍るべけ
れど。罪にあたりて。みやこをいでしより。
行すゑなくはるかに過て。このうつゝの山ま
でまよひ來しに。この山路もつたかえて
うちしげりて。もの心ぼそく。たゞくらき夜
のみちをたどるやうのこゝろなれば。今そ
の人のことをおもへば。うつゝにも夢にも
あはぬ心地して侍る義也。

時しらぬ山はふじのねいつとてかかのこまだ

らに雪のふるらん

此歌は五月のつごもりに。雪のいとしろ
ふれるといへる。その心なり。時しらぬ山は
ふじのねにてありけりと云て。さていつと
てかかくふるらんと。五月の雪をかさねて
不審したる心なり。かく云は此山をほむる
義なり。かのこまだらはむらくの雪なり。
此歌もあさまの山のごとくの旅行をなぐさ
むる心也。

名にしおはゞいざことゝはん都鳥わがおもふ
人はありやなしやと

此段はことにあはれふかく。其感たぐひな
きものなり。まづむさしの國としもつふさ
の國との中に。いとおほきなる川ありとい
ふより。その河のほとりにむれゐておもひ
やれば。かぎりなくとをくも來にけるかな
と。わびあへるにといへり。あはれ淺から

ず。のりてわたらんとするに。みな人京に思ふ人なきにしもあらずとかける詞。しもと云字など心を付べくや。京には見えぬ鳥なれば。わたしもりにとひければ。これなん都鳥といふをさしてと侍る。此詞なを思ひをそふるもよほしとなるにや。歌はわきてこもれる事侍らず。古今集の事書に。此詞を長々とかけり。貫之の心おもひやらるゝものなり。

みよし野のたのむのかりもひたふるに君がたにぞよるとなくなる

此段まことに此歌などにてつくれるものなり。歌の心。みよし野は田多くて。鴈のやどれる所なり。我心の人によるをおもてにはいはで。鴈にいはせたるものなり。此ひたふるとは。永といふ字をかけども。たゞ一向にと云心なり。たのむは田面也。五音なれば憑

かたへ用ゆるによりてかくいへり。返し。我かたによるとなくなるみよしのゝたのむのかりをいつか忘れん

鴈はよるなくものなれば。きみがかたへよるとも。我かたへよるとも。いへるこゝろは。たゞわがかたによるこゝろをよろこぶ義なり。

わするなよほどは雲井になりぬともそらゆく月のめぐりあふまで

ほどは雲井になるとは。我人あひとをさかる義なり。さりとめめぐりあふまでわするなよといふ心なり。月はめぐる物なれば。空ゆく月のと云て。その下心友たちのことをいふなり。此歌拾遺には橘直轄が歌と見えたり。かやうの相違おほきものなり。その集の義にしたがひて心得べきのよし。師説侍りしものなり。此歌は風情おもしろき歌也。

たゞ歌はいかにもすがた肝要の事とぞ。

むさし野はけふはなやきそ若草のつまもこれも
れり我もこれもれり

前の詞に火つけんとすといへる故によめる
歌なり。若草のつまとは。ほのかにもえそめ
たるをいふなり。是は女の歌也。若草のつま
とはいへども。吾妻の心なり。業平も我もこ
もる野なれば。けふはなやきそといへる心
なり。此段殊に作り事也。

むさし鎧さすがに掛けて頼むにはとはぬもつ
らしとふもうるさし

その國の名をさしてよびつけていへる也。
あぶみは武藏より参りそめしにより。むさ
しあぶみといひならはせり。弓は信濃より
参初しかば。しなのゝまゆみといふがごと
し。當時にもあるとなり。此歌は業平みやこ
に思ふ人のかたへやるふみに。むさしあぶ

みと書ことあり。かけて思ふ事也。其のち女
のかたよりをこせたる歌なり。さすがにと
はたのまれがたけれど。さすがに掛けて頼
むにはの心なり。とはぬもつらしとふもう
るさしとは。しのぶ中のあやにくなる心な
り。うるさしは只うきなどゝいふと同事也。
とへばいふとはねばうらむ武藏あぶみかゝる
おりにや人はしぬらん

前の歌のあやにくにして一通になければ。
いかにすべきぞと思ふに。かゝる折にや。せ
んかたなくて。人のしぬるかといふ事もあ
らんといふ心なり。かくのごとき歌おほ
えてもせんなくや。むさしあぶみなど。連歌
にすまじきと云。

中／＼に戀にしなすば桑子にぞなるべかりけ
り玉のをばかり

此歌は萬葉に中／＼に人とならずば桑子に

もならまし物を玉のをばかりといふを。すこしかへて作りたる段なり。戀といふ物は。まづ逢見むこと本意なれど。かなはねばせめてしなばやと思へば。それもかなはず侍るとき。なか／＼かくこひにしなてあらば。せめて桑子にもなるべかりけりと云義也。玉のをばかりは。しばしといふ詞なり。桑子をねがふは。ちぎりのふかきものなればなり。

夜もあけばきつにはめなでくたかけのまださになきてせなをやりつる

前の歌をあはれと思ひて。業平行てねたる夜の歌也。きつとはきつねなり。下畧したる也。せなはおとこをいふ。夜ふかくにはとりのなきて。思ふ人をほどなくかへする。にくき義也。

くりはらのあねはの松の人ならばみやこのつ

とにいざといはましを

此歌はをぐろさきみつの小島の人ならばと云をすこしかへていふ也。あねはの松とは女をよそへいへり。松を女によそへたるときは。その人なるを。下にならばといへるところ。かさね詞也。さそはれても行べき人ならばと。詞をそへて心得ぬれば。しかるべきにや。

しのぶ山しのびてかよふみちもがな人のこゝろのおくも見るべく

此歌はまことになりひらのうたなるべし。女のこゝろの中ばかりかたければかくよめる。大かたはきこえ侍る歌也。なを此心は胸中にしのびかよふみちもがなといふ心也。まことにおもしろき歌也。

手をおりてあひみしことをかぞふればとをといひつゝよつはへにけり

此段有常は淳和。仁明。文德三代はあひ侍りしかども。清和の御代におとろへはてゝ。たづきなさころ。年比の妻堪忍の心なくて。尼になりていなんとするとき。心さまするべきたよりさへなければ。業平のかたへ此よしをいひやり侍りし歌也。四十年のちぎりの心也。此歌の中に。かゝるちぎりをすてゝ。世をのがるゝところのうらみのこゝろこまれる也。

年だにもとをとてよつはへにけるをいくたびをたのみきぬらん

心は年さへ四十年の御ちぎりなれば。そのあいだいかばかりかたのみ給ひけん。しかれば名ごりもさこそおはしますらめと。有常の室の心を。なりひらありつねにいへるこゝろ也。これは女をたすけてよめる歌也。かくいひやりければ。有常。

これやこのあまの羽衣むべしこそ君がみけしとたてまつりけれ

よるの物までつかはすといふに。女のさうぞくなどもそふべき也。それをうれしくもあはれにも思ひてよめる歌也。これやこのあまの羽衣とは。なりひらのをくりたるさうぞく衣どものことを。あまの羽衣とほめてこととはる也。業平のきたまへるみけしなればといふ義也。みけしとは上衣と書。また御衣とも書といへり。たてまつるとは着することなり。車などにのることをいへり。よろこびにたえて又よめる。

秋やくる露やまがふとおもふまであるはなみだのふるにぞ有ける

秋やくる露やまがふとおもふまであるとは。なみだの袖にあまるを云也。そのゆへは秋は人をうれへしむるときなれば。そのこ

ゝろにて秋やくるといへり。露やまがふとおもふまでは。露は山野草木の上にをくものなるを。まがふて我袖へきて。しぼるかと思ふまで袖のぬるゝは。たゞいまのよろこびのなみだにてありけるといふこゝろなり。兩首ながら上にてうたがひて。下にて其理をことはりたる歌也。

あだなりと名にこそたてれさくら花としにまれなる人もまちけり

これはある女のもとへひさしくたえてのち。花さかりに業平の來たるときよめる歌也。業平かねて此女をあだなるやうにいひけるを。いま此歌に我身をさくらになずらへてよめるなり。惣の心。あだなりと名にこそたてれさくら花と。まづよめる義は。さくらはあだなるやうに名にこそたてれど。かう年にまれにとふ人をもまちえて侍れば。

あだには侍らぬものといふ義也。

けふこそずばあすは雪とぞふりなましきえずはありとも花とみましや

なりひらの心には。さくらのあだになきにては侍らず。けふちらぬさきに來ればこそあれ。あすにもきたらば雪とふりぬべし。しかれども木の本などの雪をありとはみるとも。本のさくらとは見まじきものなればといふは。女のうつろはぬさきにきたればこそ。あだにはおはせぬやうなれと。よそへていへる也。

くれなゐに匂ふはいづらしら雪のえだもとをゝにふるかとも見ゆ

これは小町がかたより業平にをくる歌なり。心は好色の人とみれば。いろなき人にこそあれと。業平をいふこゝろなり。くれなゐをば好色にたとへ。雪をばいろなきによそ

そへていへり。返しの歌。

くれなるにほふがうへのしら菊はありける
人の袖かとも見ゆ

此歌は小町が我をけさうしてよめるとは。
業平心得ぬれども。たゞ大かたの歌のやう
によめることを。前の詞にしらずよみによ
みけるとはいへり。此心くれなるにほふ
がうへとは。重りたる心にはあらず。世上に
そのうへになどいふ義也。くれなるに匂ひ
たる處もあり。また本よりの白菊なれば。匂
ふがうへとはよめる也。

あま雲のよそにも人のなり行かすがに目には見ゆる物から

あま雲はよそながらみゆるものなれば。常
に見かはせども。業平のたちよらぬにそへ
ていへる歌なり。

天雲のよそにのみしてふることはわがゐる山

のかぜはやみなり

天ぐものやうに。よそにのみしてへぬること
とは。なをおはします山のかぜがはげしければ
なりといふは。女の別人に心をはすをしりていふ心なり。此女は有常がむすめのよし。古今集に見ゆ。

君がため手をれるえだは春ながらかくこそ秋の紅葉しにけれ

此歌はなりひら大和に侍る女のもとより京へのぼるに。女の心たのまれぬものなれば。うつろひやすからんとおぼつかなさに。かえての若葉の紅葉したるをおりて。付てつかはしける也。君がためたをれるえだのうつろふは。御心さもやあらんといふ義なり。いつのまにうつろふ色のつきぬらん君がさとは春なかるらし

女の返しの心は。たゞいまわかれて行人の。

いつのまにうつろひたまへるかといふ義也。春なかるらしとは。秋になりはてぬるにこそあれとうらむる心也。

出ていなば心かろしといひやせむ世のありさまを人はしらねば

これは業平とたがひに思ひかはして。すみわたりける女の。まことにあだなる物にて。いさゝかのことをうらみて立出ける時よみをける歌也。心は我かく立出るを。世間の人は心かろしとぞいはん。夫婦のあいだのうらみをばしらてと云義也。世のありさまとは。男女の中の事なるべし。

思ふかひなき世なりけり年月をあだにちぎりて我やすまゐし

これは女の立出たるあとに。なりひらのよめる歌也。思ふかひなき世なりけりとは。切に我思ひし人のあさはかに立出たるをおも

ふ心也。年月をあだにちぎりて我やすまゐしと。業平わがうらみを思ひかへして。我にはとがもなしと思へど。年月をへし中に。なをざりにちぎりてや過けん。一かたに女のあやまちをおぼせぬ所。業平の心也。人はいざ思ひやすらん玉かづらおもかげにのみいと見えつゝ

此歌は万葉に。人はいざおもひやむとも玉かづらおもかげに見えつゝわすられぬかも。と云歌をすこしとりかへたる物也。さて心は人は思ひやすらん思はずやあるらんしらず。われは面影にのみいと見えぬる由なり。思ひやすらんうちに。思はずやあるらんといふ心あるなり。またや見んかた野のみのゝと云歌も。又や見ざらんといふ心侍る也。

いまはとて忘るゝ草のたねをだに人のこゝろ

にまかせずもがな

業平の心に。いまは何せんなどおもひて。わすれやせんのか心に。わすれ草のたねを見。こゝろにまかせずもがなとよめり。

わすれ草うふとだにきく物ならばおもひけりとはしりもしなまし

返しの心は。そなたに忘草をうふると聞ば。我を思ふとしらせんとの義也。女のこゝろははかなくて心みじかきを。なりひらはのどかによめる處おもしろき也。

忘るらんとおもふ心のうたがひにありしよりけに物ぞかなしき

これはかの女にまたいひかはして侍けるのち。女の心なをあたにて。我をや忘るらんと思ひうたがはしさに。こしかたよりなをまさりてかなしきといふ心也。

なかぞらに立ゐる雲のあともなく身のはかな

くもなりにけるかな

此歌は前の返しにはあたりても見えず。此心はかの女我身のあたにして。業平の所をたち出しもくやしきに。さらば思ひもとめずして。忘草のたねをだになど。業平をしたふことといふあたなるはかなしきを。またわすれやすらんと。業平の歌侍るを見て。我有様のはかなさを。なかぞらの雲のあともなき様にたとへて。我身をなげきたる歌也。うきながら人をばえしも忘ねばかつうらみつゝなをぞこひしき

うきながらとは。業平のこゝろはうけれど。忘がたければ。かく恨てもなをこひしきの心也。かつはかくと云心也。むかしはかくといふ心にて。かつといへる事多し。古今集にもあまた侍る也。此歌業平見て。さればよと云てと侍れば。我もその心にてこそあれと

云義也。さるほどに返しは行すゑのことに
いへる也。

逢見ては心ひとつを川しまの水のながれてた
えじとぞ思ふ

此歌は上の句はあらは也。水のながれてた
えじとは。水はたえぬ物なれば。それになず
らへて。行末たえじといふ義なり。或義に水
のながれてとは。川島の水はわかれて又あ
ふ物なれば。そのごとくまたあはんのこゝ
ろぞといへり。當流の義は心ひとつを川島
のと云て。島を上用にて侍るほどに。
又下にて島を用にたつとをばさらふ也。

秋の夜の千夜を一よになぞらへて八千夜しね
ばやあく時のあらん

秋の夜はながきものなるを。其千夜を一夜
にせしほどなるを。八千夜ふたりねてや。満
足することのあらんと云る心也。返し。

秋の夜の千夜を一夜になせりとも言葉のこり
て鳥やなきなん

心はあきらかなり。いかにもやさしき歌也。
つゝゐつのゐつゝにかけしまろがたけ過にけ
らしいも見ざるまに

つゝゐつのゐつゝとは。つゝゐのゐつゝと
云は。なをたらざるほどに。つ文字をそへ
て。つゝゐつのゐつゝとよめり。唯かさね詞
也。惣の心は業平と此女といとけなき時。た
けなどをぬげたに。いかほどにならばなど
契りけるなるべし。おとなになりてかく讀
り。此歌の一二句を古註にわづらはしく云
り。不用事也。定家卿の歌に。つゝゐつのゐ
つゝのつらゝとけぬまにはやくもうつる冬
のかげかなとあり。重詞なるべし。女の返
し。

くらべこしふりわけ髪もかた過ぬ君ならずし

てたれかあぐべき

ふりわけ髪とは童女のかみ也。かた過ぬとは。年をへて漸々かみあげするほどになる心也。女のさかりたちなどするとき。髪あげとて。髪をそゝぎかざりをするやうのことあり。君ならずしてとは。かならず男のするわざにはあらねど。業平ならて誰か手をもふれんの心也。

風ふけばおきつ白なみたつた山夜半にや君がひとりこゆらん

おきつしら波とは。ぬす人此山に立所なるによりて云付たると。顯註密勘に顯昭が云。但し今案に。立田といはんとて。おきつ白波といひ。白なみといはんとて。かぜふけばといふにてこそあらめと云て。萬葉にいせの山のべの御井にてよめる歌に。わたつ海のおきつしら波たつた山いつかこえなん妹が

あたり見ん。といふをひけり。定家卿此今案可興可仰。やまとにはあらぬから衣のたぐひなりといへり。此歌はころもへずしてあふよしもがなといはんため。上はいひたるもの也。さて此女さしもうらむべき理を思はて。業平をたかやすへ出しやりて。我身をやさしくけさうして。琴をかきならし。夜半にや君がひとりこゆらんといへり。あはれたぐひなくや。歌の詞がらまたたぐひなくや。清輔奥義抄に云。此歌貫之は歌の本と云りと侍り。いかばかりのことに侍らん。君があたり見つゝをらん伊駒山雲なかくしそあめはふるとも

是は萬葉の歌也。高安の女業平のおはしける大和のかたを見て。此歌をおもひよりて詠じたるなるべし。

君みんといひし夜ごとに過ぬればたのまぬも

のゝこひつゝぞふる

これは同じ女のかたへ業平ちぎりて。たび／＼過しころ。ふるき歌をよめるといへり。心は誠にあはれ也。

あらたまの年のみとせを待わびてたゞ今夜こそにぬまくらすれ

是はなりひら朝家のみやづかへをする人なれば。女のもとへみとせゆかざりしころ。また男の心かけたるにあはんと思ひける折しも。業平來て門をたしかせしとき。よみてをこせる歌なり。かくいひ出したりければ。業平。

あづさ弓まゆみつき弓としをへて我せしかごとうるはしみせよ

あづさ弓まゆみつきゆみとはかさね詞也。年をへてとは三とせの其間の事也。弓はひくといふ心也。惣じての義は。君にこゝろ引

てよりこのかた。年をへてといふ心也。下の句我せしかごとは。汝がせし誓をうるはしみせよと也。かごとはちかひ也。うるはしみせよとは。眞實にして變ずるなと云心也。あづさ弓ひけど引ねど昔よりこゝろは君によりにし物を

女の返しの心は。君がこゝろは我に引も引ずも。我心はむかしより君による義なり。弓はひけば本末よるものなればかくいへり。あひ思はでかれぬる人をとめかね我身はいまぞさえはてぬめる

女業平をしたひゆけどかなはて。岩にをよびの血して書し歌也。心はあきらかなり。

秋の野にさゝわけし朝の袖よりもあはてぬる夜ぞひぢまさりける

是は業平小町がもとへかよふことしげれど。あはずしてかへりのみしければよめる

歌也。殊の野の篠わくる朝の袖は。露しげきものなれば。小町があはでのみかへす夜の袖。ひぢまさりぬるの心也。

みるめなき我身をうらとしらねばやかれなであまのあしたゆくくる

此歌は小町が返しなり。心はみるめなきとは。我業平に見えぬことなり。それはなりひらにうらみあればあはぬを。我身をうらめしとはしらで。あしもたゆきばかりおはしますと云義なり。我身とは業平の我身なり。おもほえず袖にみなとのさはぐ哉もろこし舟のよりしばかりに

おひほえずとは思ひがけず也。もろこし舟のよりしばかりのし文字は。過去にあらず。やすめ字也。當時はかやうによみ侍らず。惣はなみだのおほき義也。

我ばかりもの思ふ人は又もあらじとおもへば

水のしたにも有けり

是は業平ゆへもの思ふ女。たらひの水に我かげのうつるを見てよめる歌也。心はあらはなり。

水口に我や見ゆらんかはづさへ水のしたにてもろこゑになく

此女のよめるを聞て。業平のよめる也。かはづは水口にひとつなけば。惣の田のかはづなく物也。そのおもふ人は水口にかはづのよる心也。そのごとく我や水口にみゆらんとは。そなたはおもひの本人ぞといふ心也。などてかくあふこがたみに成にけん水もらさじとむすびしものを

是はいろこのむ女の業平の所を出てのちの歌也。あふこがたみとは。逢期のかたきをなげく心也。しかもかたみは籠をよせてよめり。水もらさじとむすぶとは。籠は竹にてく

むを結といへり。ふたり水もらさじとむす
びしちぎりを。いかでかとうらむ義也。俗に
籠に水をくむと云様の事也。

花にあかぬなげさはいつもせしかどもけふの
こよひにける時はなし

是は春宮の女御の染殿の後の四十の賀をせ
させ給ひし事也。花の賀とは花の時分なれ
ばいふなり。雪の時分するを雪の賀と云が
ごとし。歌の心は。花にあかぬなげさは春ご
とにあれど。けふの花のとき。一しほ花を思
ふ心切なる義也。下の心は戀也。人を花にな
ずらへて云也。

あふことは玉のをばかりおもほえてつらさこ
ゝろのながく見ゆらん

玉のをばかりとは。しばしと云心也。歌はあ
らはなり。

罪もなき人をうけへばわすれ草をのがうへに

ぞあふといふなる

前の詞。業平をある女のよしや、草葉よなら
んさがみんといひけるを聞てよめり。うけ
へばとはのろひごとなり。とがなきものを
かくいはゞ。そなたの身にこそをはめとい
ふ心也。

いにしへの賤のをだまきくり返しむかしをい
まになすよしもがな

むかしといにしへと一首にあるは。其用に
よりてくるしからず。但當時はあしかるべ
し。歌のこゝろはむかしのちぎりをしたふ
心也。

あしべよりみちくる鹽のいやましに君にこゝ
ろを思ひますかな

是はつの國のあしやにありける女。業平の
京へのぼるとき。業平の思ふいろのなきを
うらみけるとときよめり。うへには見えねど

も。思ふ心の下にふかきを。あしべにみつ鹽にたとへたる也。

こもり江におもふ心をいかてかは舟さすさほのさしてしるべき

女の心は下には思ふ心ふかくとも。それをばさしていかゞしるべきといふ心也。思ふいろをあらはにしらまほしき心也。こもり江とは古江などの事なり。

いへばえにいはねば胸にさはがれてこゝろひとつになげくころかな

つれなき女に業平つかはしける歌也。心はいへばえいはれず。いはねばまたむねのうちさはぎてくるしき義也。

玉のをゝあはをによりてむすべればたえてのちもあはんとぞおもふ

此玉のをはしばしのことにもあらず。またいのちの事にもあらず。只をといはんため

也。あはをとあはせたる緒也。むすべればとはちぎりのこと也。あひたる緒はたえはてぬ物なれば。我ちぎりもさやうにあらまほしき義也。

谷せばみ峯まではへる玉かづらたえんと人に我おもはななくに

上は序也。かづらはたえぬ物なれば。たえんとおもはぬ心をなずらへ云る也。此歌は萬葉の歌を少かへてつくれり。心はあきらか也。

我ならで下ひもとくなあさがほのゆふかげまたぬ花にはありとも

色このみする女の心もとなきにつかはしける也。心はあきらかなり。歌のさまえもいはずやさしき歌なるべし。返し。

ふたりして結びし紐をひとりしてあひ見るまではとかじとぞ思ふ

前にうたがへば陳じて云心也。我心ひとつにてちぎりを變ずまじき心也。

君によりおもひならひぬ世中の人はこれをやこひといふらん

なりひら有常をまちわびてよめる也。心はあきらか也。

ならはねば世の人ごとになにをかこひといふとこひし我しも

有常が歌の心は。我もこひといふことはならはねば。世上の人ごとに何をこひと云どとこひ來つる。我も業平を切に思ふゆへにこひするよし也。

出ていなばかぎりなるべみともしけち年へぬるかとなくこゑをさけ

崇子内親王かくれさせ給ひし時。葬送を見んとて。業平女車にのりて出しとき。源の到女車とみてよりきて。ほたるを車に入て。の

れる人を見むとする時。その螢を業平のゑにてよめる歌也。出ていなばかぎりなるべみとは。此内親王葬所へ出給ひて。此世のかぎりなるべし。其を世の人なげきていふ事は。年へたまへる人かはとてなく聲をさけと也。若くてうせ給へるを。みな人なげく聲のことなり。さけとは到が似合ぬけさう心をいさむる心なり。ともしけちとは。螢の火をけすことなれど。いのちの事也。

いとあはれなくぞ聞ゆるともしけちさゆるものとも我はしらずな

到の返しの心。なく聲をさけと云をうけて。いとあはれになくぞ聞ゆると云る也。さゆる物とも我はしらずなとは。一切衆生は法界の五大がむすばゝれて人となれるもの也。分散すれども。法界五大の火なれば。常にきゆることはなしと云心也。

出ていなば誰かわかれのかたからんありしに
まさるけふはかなしも

此段はある人むすめをもちたるを。業平か
よふところにて思ひかけたるあり。我むす
めの心にも。業平に心をやかはさんとおも
ひて。外へをひやりし時の歌也。出ていなば
とは。女の出たる義也。たれかわかれのかた
からんとは。我もまた此世にあるべきなら
ねばと云心也。さればありしにけふのおも
ひはまさりける義也。

ひらささの色こき時はめもはるに野なる草木
ぞわかれざりける

これは業平の家にをさ給へる女のいもう
と。いやしき男もちたるが。其おとこのうへ
の衣をはるとて。はりやりしことをさして。
ろうさうのうへの衣をつかはすときの歌
也。ひらささの色こきときは。我ちぎれる女

の寵愛のとき。そのゆかりみなわかたずあ
はれなる心也。野なる草木とは。ゆかりのこ
とをよめる也。ひらささの一もとゆへにむ
さし野のといふと同じ心也。

出てこしあとだにいまだかはらじをたがかよ
ひ路といまはなるらん

あだなる女を業平心もとなく思ふ義也。誰
をか通すらんの心也。

ほとゝぎすながなく里のあまたあればなをう
とまれぬ思ふものから

是は賀陽親王のかたにつかひ給へる人に。
業平しのびてかよひけるを。此かやのみこ
此女に心かはし給ふをさして。業平のよめ
る也。ながなくは。なんぢがなく里のあまた
あれば。なをうとましく思ひはすれどもと
云心也。ほとゝぎすに女をなずらへよめる
也。

名のみたつしてのたをさはけさぞなくいほり
あまたとうとまれぬれば

してのたをさはほとゝぎすの別名也。心は
名をのみたてゝ。いほりあまたとうとみ給
ふがつらさに。けさぞなくといふ義也。けさ
は今といふ心也。

いほりおほきしての田長はなをたのむ我すむ
里にこゑしたえずば

わがすむ里にだにたえずをとづれば。通す
るかたありとも。たのむべき心也。

出てゆく君がためにとぬぎつれば我さへもな
くなりぬべきかな

是有常が女業平の室にて侍りしころ。有
常いなかへ下りけるとき。女のさうぞく出
すとして。此歌をなりひらよみて。裳の腰に付
てつかはし侍る歌也。我裳をぬぐにては侍
らねど。我さへもなくといふに付て。ぬぐと

はよめり。もなくはわざはいなきの心也。人
をいはひて。我もあしからぬよしの義也。も
は裳の字也。もなくと云に。此心万葉五卷に
見えたり。依事多略する也。

ゆく螢くものうへまでいぬべくば秋かぜふく
とかりにつげこせ

此段はある人の業平をこひてうせしのち。
そのいみに業平こもり侍りしころ。みな月
のつごもりのおりふし。小夜ふけて尺涼い
たりて。暑氣の心露ばかりものこらず。うら
ふくかぜも。たゞ仲秋の天の心地するに。ほ
たるの高くあがるを見て。かりもはややが
てくべき心ちして。身にしむばかりの空を
ながめてよめる歌なり。景氣まことにこゝ
ろにうかぶ歌也。

くれがたき夏の日ぐらしながむればそのこと
なく物ぞかなしき

此歌は前のと同時にはよまぬ歌とみゆ。そのことゝなくとは。春秋などは物のあはれも心にうかぶ。夏の空はさしてあはれと思ふべき景氣もなければ。我ゆへうせし人のあはれを思ふゆへ。このごろの空も物かなしきなり。またかの女は一度の見る目もなく。まして心の中もしらず過にしなれど。我ゆへうせし人なれば。こもりぬれど。とありしとも。そのかうありしと思ひ出すことなきゆへに。其事となく物ぞかなしきと詠るにや。

目かるともおもほえなくに忘らるゝときしなれば面かげにたつ

此歌は有常ひとの國へくだりしのち。忘やし給ひけん。世間の人の心は。目かるれば忘れぬべき物にこそなどいひのぼせしとき。業平よみてをくりし也。忘らるゝときなく。

おもかげにたてば。目かるゝともおもほえぬよしの心也。

大ぬさのひく手あまたに成ぬればおもへどこそたのまざりけれ

業平を思ふ心はあれど。あだなりと思ひて。女のよむ歌なり。大ぬさとはさかきにあさのをゝつけたる物也。御稜などするときは。人ごとに大ぬさをとりて。身をはらひなどしてとりわたす物なり。ひとりの手にとまらぬものなれば。業平のこゝろたのまれぬをよそへたり。

大ぬさと名にこそたてれながれてもつゐによるせはありてふものを

引手あまたの名にたてど。大ぬさは御稜の後ながせば。一かたによる所あり。我も君が身をつゐのよるせぞといへる心也。

いまぞしるくるしき物と人またん里をばかれ

ずとふべかりけり

紀利貞が阿波介に成て下りし時。はなむけ
せんとて。業平のまち給へるに。をそく來け
ればよみたまへる也。人まつことのくるし
きを思ひ出て。人待といふ里をば。かれずと
ふべかりけりと云也。

うらわかみねよげにみゆる若草を人のむすば
んことおしぞ思ふ

ねよげに見ゆるとは。ねぬるをかねたり。い
もうとのいつくしきを見て。人のちぎりと
なるべきをおして思ふ心也。

初草のなどめづらしきことの葉ぞうらなく物
をおもひけるかな

はつ草は若草といふ返しなればなり。めづ
らしきことの葉ぞとは。兄の身にて。かゝる
ことの葉のあるを思ひかけぬなれば。など
めづらしきとよみて云也。下の句はこのか

みのことなれば。かゝる人ともしらて。たの
み思ひつるの心也。

鳥の子を十づゝとをはかさぬともおもはぬ人
を思ふものかは

前の詞にうらむる人をうらみてと云り。百
のかいこをかさねんことはあるまじきこと
なり。それはかさぬることありとも。思はぬ
人を思ふべき物かはと云心也。これより次
の歌。みなあるまじきことをとり出て。それ
はありともと云歌なれば。註に及ばずと也。
朝露はさえのこりてもありぬべしたれかこの
世をたのみはつべき

ふく風にこぞの櫻はちらずともあなたのみぶ
た人のこゝろは

行水にかずかくよりもはかなきは思はぬ人を
おもふなりけり

行水とすぐるよはひとちる花といづれまでて

ふことをさくらむ

此すゑの歌。前にここの櫻。ゆく水など歌をとり合よめり。行水も。すぐるよはひも。ちる花も。みなしばしまてと云ことをさかぬもの也。そのごとく思はぬ人を思へといへばとて。さくべきにあらずと云り。此五首は

男女たがひにうらみあひてよめる歌也。

うへしうへば秋なき時やさかざらん花こそちらめ根さへかれめや

人の庭に菊うへけるときよめる歌也。うへしうへばとはかさね詞也。うふるとうふるならば。もし爍のなき時やさかざらんの義也。秋と云爍はさくべきの心也。おもしろくよめる歌也。

あやめかり君はぬまにぞまどひける我は野に出てかるぞわびしき

人のかざりちまきをこせたるよめる歌也。

あやめにてちまきをばまかぬ物なれど。當日のものなれば。歌によみよき物にて詠ずるなり。君はあやめを心ざし。我はかりをしつつかはす心也。

行やらぬ夢路をたどるたもとはあまつそなる露やをくらん

つれなかりける女にいひやりけると有。心は夢中にかよふみちの心のまゝならで。たどるたもとは。天より下る露やはをく。思ひの露こそをけと。夢の中までくるしきことをかこつ心也。

思はずはありもすらめど言の葉のおりふしごといたのまるゝかな

女をえうまじうなりはてゝのちによめる歌也。思はずこそ成はてつらめど。こしかたのわすれがなくて。折ふしごとにしのぶ心也。我袖は草のいほりにあらねどもくるれば露の

やどりなりけり

前の詞に。ふして思ひおきて思ひ。思ひあま
りてと侍るに。此歌は大様にたがふさま
也。但切におもふ人ゆへのなみだは。十二時
中かはくべき理なし。是はその時にあたる
夕暮のさま也。

戀わびぬあまのかるもにやどるてふ我から身
をもくださつるかな

こひわびぬとは。いかんともせぬ思ひのさ
はまりたるを云也。さるほどに我から身を
もくださつるかなと。うちなげく義也。

あれにけりあはれいく世の宿ならんすみけん
人のをとづれもせぬ

是は業平の家の長岡にて。桓武天皇の内親
王同じところにあまたおはします。その宮
の女ども業平の所へゆきたるに。業平うち
へかくれぬればよめる。あるじのなき家の

心をよみ奉る歌なり。詞づかひおもしろき
歌さま也。

むぐら生てあれたる宿のうれたきはかりにも
鬼のすだくなりけり

女の歌にあれたる宿のさまを讀ば。業平も
我宿なればむぐら生てなどよめり。かりに
もおにのすだくとは。かゝる宿はたゞかり
そめにも鬼のあつまるより外にとふ人もな
しとよめり。女をさして鬼といふ事常の義
也。愁也。

うちわびておちほひろふときかませば我も田
づらにゆかましものを

此女どもほひろはんなど。所の秋の折ふし
なれば。云あへるを聞て。我も田づらにゆか
まし物をと。時のあいしらひおもしろき也。
すみ侘ぬいまはかぎりとしんざとに身をかくす
べき宿もとめてん

前の詞に。ひんがし山にすまんといへる。隠遁の心也。

我うへに露ぞをくなるあまの川とわたる舟のかひのしづくか

同段に物いたくやみてしに入たりければと有。たえ入たるに。面に水をそゝぎていき出たれば。大かたの露にはあらじ。あまの川わたるかひのしづくなどにてやあるらんといふ心也。古今に鴈のなみだやおつらんと云同事也。

さ月まつ花たちばなの香をかげばむかしの人の袖のかぞする

たちばなは五月をまちてさく物なれば。五月まつと云り。むかし見し人なれば。さかりなるたちばなによそへいへる也。

そめ川をわたらん人のいかでかは色になるてふことのなからん

女のすだれの中にして。業平を色このむ人ぞといへるとき讀り。心はあらはなり。

名にしおはゞあだにぞ有べきたはれ島なみのぬれぎぬさるといふなり

女業平を色このみのすきものといふをきいて。色になるてふことなどなからんといへば。それををとして。色このむと云名におはゞさにあらじ。たはれ島にうちかへる波をよそより見れば。しら衣のやうなれど。まことはさはなくて。たゞ波のぬれ衣なればといへるこゝろ也。

いにしへの匂ひはいづらさくら花こけるからともなりにける哉

是は業平の我身のむかしにかはりたるを述懐の歌也。古註に小町を業平のいへるとかける。見ぐるしきことなり。

これやこの我にあふみをのがれつゝとし月ふ

れどまさりかほなみ

これは業平の所をうかれ出し女にあひて。我身のをとろへたるさまを。前の歌に業平のよみたまへるを。女ははづかしと思ひて。返しもせざりし時よめるなり。心は我にそふことをうしと出し人の思ひますこともやと思へば。とし月をへても。思ひまさらてつれなさよと云心なり。これまた古註の義こゝろつたなくや。

もゝとせに一年たらぬつくもがみ我をこふらしおもかげにみゆ

此段は世心つきてやうやくおひ行女。色にふけりたるが。あらぬゆめがたりをしける。その子あはれみて業平にかたりければ。なさけふかき心にて行あひしのち。此女業平のかたへ行て。かひを見せし時よめる也。此女百年に一年たらぬほどの思ひしたる也。

我をこふらしとは。その女我をこふるおもかげにたつの義也。世心つくとは男になる義也。此歌はたゞざれうたなり。

さむしろに衣かたしきこひもやこひしき人にあはてのみねん

かの女のよめる也。心はあきらか也。上は古今の歌也。是も作り事なるべし。

ふく風に我身をなさば玉すだれひまもとめつゝいるべきものを

おもひかけたる人の有ところをさへしらねば。思ひわびてよめる也。心はあきらかなり。

とりとめぬ風にはありとも玉すだれたがゆるさばかひまもとむべき

とりとめぬ風のやうにおはしますとも。ゆるしてこそと。おさへたる歌也。

思ふにはしのぶることぞまけにけるあふにし

かへばさもあらばあれ

なりひら切に思ひかけしを。二條のきさき
かくなせそなど侍りしときよめる歌也。心
はあきらか也。

戀せじとみたらし川にせしみそぎ神はうけず
もなりにけるかな

業平の心にもあるまじきとを思ひわびて。
おもひをやめたまへと。はらひなどせしに。
いとゝおもひのせんかたなき時よめる歌な
り。古今には不逢戀の内に入る也。

あまのかるもにすむ虫のわれからとねをこそ
なかも世をばうらみじ

業平のしのびの名あらはれて。ながしつか
はすべきよしのこといできて。二條のきさ
きをば染殿のきさきのかたにをさすゐらせ
て。いさめたまへる時よみ給へる歌也。上は
序也。我からとねをこそなかもとよめると

ころ。此道の肝心也。我からと思へば。人に
うらみといふことをおもふことなきものな
り。人にうらむる事なければ。和のみにちよ
くいたる也。返く此我からといふこと。此
世後世のため。また能知才覺のみにちにも
たるべきの理なり。

さりともと思ふらんこそかなしけれあるにも
あらぬ身をしらずして

なりひらのひとの國よりと云は。除名せら
れてのち。流罪の國にさだまる也。そのさだ
めありて。しかもまたみやこにあれど。國さ
だまれる心にて。ひとの國よりとかける。こ
れはなりひら笛をふき野曲などして。もし
やきても逢給ふこともやと。思ひうかれた
るさまを聞て讀給へる歌也。

いたづらに行てはきぬる物ゆへに見まくほし
さにいざなはれつゝ

是も我心のむかふをたのみて。行かへり行
かへりする心を業平のよめるなり。此歌人
丸の歌と云り。可尋之。

なにはづをけさこそみつの浦ごとこれや此
世をうみわたるふね

此段業平つの國にしろ所あるによりて。み
やこより行平を初にて。しる人おほく下侍
りしをとまひて。難波のほとりに行て。道
遙せられける時の歌也。なぎさに舟どもの
あるを見てとあり。上の句は所の眺望也。け
さこそと云は。あしたに見えたるさま也。こ
れや此世をうみわたるとは。あまの世にふ
るをあはれむ事に。みな人の世をわたるを
思ひつゝけたる心也。これをあはれがりて
とは。業平の歌に感じたる心也。

きのふけふ雲の立まひかくるふは花のはやし
をうしとなりけり

是も前のことをまた一段に書たりと見ゆ。
きのふけふと云に心あり。惣の心は。二月ば
かりの餘寒に。此山かさくもり。みな人のみ
る目にさはりつるがはれ行を見れば。木ず
えどもの雪。さらに花のはやしのやうにみ
えたるをながめて。時もこそあれ。きのふけ
ふこの山を雲のかくしつるは。花のはやし
を人に見せんことをうしと。雲が思ひける
よといふ心也。うしと思ふとは。雲がねたむ
心也。狂雲妬佳月と云たぐひ也。

かりなきて菊の花さく秋はあれど春のうみべ
にすみよしのはま

此所の眺望の折節春のけしきたぐひなきを
いはんとて。鴈なきて菊の花さく秋はあれ
どと云り。菊鴈は世間の義也。

君やこし我やゆきけんおもほえず夢かうつゝ
かねてかさめてか

是は業平狩のつかひとして伊勢尾張へくだりし時。齋宮にあひ奉りし朝のことなり。心ははかなき逢夜のさま。おもひ分ぬ心まどひの義也。君がきてあひけるか。我行てあひけるかと云。此二句の心をすゑにみな云のべたる物也。終に心におもひ分ぬ理也。

かきくらす心のやみにまどひにき夢うつゝとはこよひさだめよ

上の句は齋宮の歌とひとつこゝろまどひの様也。下の句はゆめともうつゝともこよひあひてさだめよと云心也。世人さだめよと古今にあれども。この物がたりにては。こよひといはではおもしろからず侍る也。

かち人のわたれどぬれぬえにしあれば
たゞ一夜にてあはぬ心を。あさき縁と云心にて。わたれどぬれぬえにしといへり。縁と江とをかねたる也。

またあふさかのせきはこえなん

つい松は續松也。すみはさえずみ也。さかづきのさらにかける下の句也。またあふ坂とは。業平歸京にこゆべき山也。それをあふこによそへて。齋宮をなぐさめたてまつる心也。

みるめかる方やいづこぞさほさして我にをしへよあまのつりふね

是はなりひら尾張の國へ行とて。大淀のわたりにて。齋宮のわらはべにいひかけたる歌也。みるめかる方やいづことは。齋宮のわらはなれば。宮の御ことを我にをしへよと云也。わらはをつり舟によそへて云る也。

ちはやふる神のいかさもこえぬべしおほみや人の見まほしさに

此歌は齋宮の女房のほのすきたるが。業平にやりたる歌也。大宮人にだにあはゞ。神の

いかきもこえんの心也。大宮人とはなりひらを云也。

戀しくばさても見よかしちはやふる神のいさむるみちならなくに

神のいさむる道ならぬとは。いざなぎいざなみの夫婦のかたらひし給ひしより。やをよろづの神も。戀のみちはいさめとめぬ事ぞといふ心也。

大淀の松はつらくもあらなくにうらみてのみもかへるなみかな

心は大よどの松のもとへ。なみのよせ來てはかへりくするが。松をうらむるやうなれば。松は波のためにはつらくもなき物を。何ゆへうらむるぞと云義也。かくいふ心は業平の齋宮をうらみたてまつることを。かくなずらへよめる也。松をば齋宮の我身によそへ。波をば業平によそへたるもの也。

目には見て手にはとられぬ月の中のかつらのごとき君にぞありける

そこにはありときけど。せうそこをもえいはぬ女に。業平のつかはす歌也。心はあらは也。此歌は萬葉の歌をすこしとりかへたる也。

岩根ふみかさなる山はへだてねどあはぬ日おほくこひわたるかな

此歌はやがてあらはに聞え侍り。但それはあまりにやすくや。此歌は相思ふ中は山川をへだてゝもかよふならひなるを。我中は岩根ふみかさなる山もへだてねど。相見ることなきをかなしむ心也。

大淀のはまにをふてふみるからにこゝろはなぎぬかたらはねども

これも業平いせの國にいきてあらんと云けるととき。齋宮の歌也。上の句は序歌也。たゞ

見るからになぐさむものぞ。かたらはねど
ゝ云心也。業平のあまりにしたひまいらせ
たまへるを。いひのがれんとてよめる歌也。
なぎぬとはなぐさむ心也。業平のすきこゝ
ろをなぐさむる義也。見るからにとは。一た
び見え給ひし心也。

袖ぬれてあまのかりほすわたつ海のみるをあ
ふにてやまんとやする

上三句までは序也。みるをあふにてとは。ほ
のかに見しをうらみにてやめとや。我はい
かでさてやみなんとなをしたふ心也。

岩まより生るみるめしつれなくばしほひしほ
みちかひもありなん

みるめしつれなくとは。みるはいつもみど
りにて變ぜず。我をつれなくと云る其ごと
く。心中不變ならば。世は鹽のみちひのやう
にかはる理ありとも。心ひとつはしづかに

してよるべきの義也。これも業平をいさめ
たる歌也。

涙にぞぬれつゝしぼる世の人のつらきこゝろ
は袖のしづくか

鹽のみちひにはぬれぬ物を。人のつらきゆ
へにこそ。袖のしづくはあれといへる心な
り。

大原やをしほの山もけふこそは神代のことも
おもひいづらめ

これは二條のきさき春宮のみやすどころと
申ける時。をしほの明神は春日にて。うぢ神
にてましませば。まいり給へる時。業平の歌
也。けふこそは神代のことも思ひいづらめ
とは。明神の御慮をさしていへり。そのゆへ
は神代に日の神とあまのこやねの御神は君
臣合体のちぎりましませり。いま又春宮は
日の神の御す。みやすところは藤氏にて

おはしませば。神代のちぎりかはらぬは。たゞむかしと同事也。ほのかなりし昔のちぎりを。二條の後も思出し給はんの義也。

山のみなうつりてけふにあふことは春のわかれをとふとなるべし

此段は文德天皇の女御多賀幾子といへる。

西三條右大臣良相の女なり。その女御うせ給ひて。安祥寺にて御わざ侍りし時。さゝげもののおほく侍りしが。山などのごとく侍りしを。此女御のせうと右大將常行おはしまして。御わざを題にて。春の心ばへある歌たてまつらせ給ふとき。業平よめる歌なり。さゝげもののおほきを。まことの山のうつりて。けふのわかれのあとをとふと讀り。さゝげ物は捧物也。

あかねども岩にぞかふる色見えぬこゝろを見せんよしのなければ

是は山科の禪師の宮のかたへ常行のおはせし時也。島このみ給ふ君なればとて。千里のはまより父右大臣へまゐらせける石を。みやこよりとりよせて。禪師のみこへたてまつり給ひし時。岩に書付たる業平の歌也。心は色見えぬ心をしらせんよしのなければ。此石をたてまつるもあかねども。此石奉るも不足なりといふ心也。此段も前の段のたぐひ也。

我門にちひろある陰をうへつれば夏ふゆたれかかくれざるべき

是は行平の女のはらに。清和天皇の御子貞數親王生れ給ひし。それを我門にちひろある陰をうふるとは云也。ちひろの竹は仙家の竹なれば。壽命をいはふ心也。惣じて竹は王道のたよりある物也。まづ上下のふしをたがへぬ事。第一王道也。またすぐにして空

虚なるところ。又王道の肝要の御心也。夏冬たれかとは。此御かげにかくれて。寒暑のくるしみを一切衆生わするべき心也。此御子天位につき給への祝事也。

ぬれつゝぞしゐておりつる年の内に春はいくかもあらじと思へば

此歌は三月の晦日に。人に藤をおりてやる時の歌也。ぬれつゝぞしゐておりつるとは。花をも春のかぎりをも賞する心也。春はいくかもとは。つごもりの歌にいかゞなれど。歌人の心はきふくはいはて。歌の姿を本とする故也。年の内とは一年中の心也。雨をも藤をもいはざる所。むかしの歌のならひ也。鹽がまにいつか來にけん朝なぎにつりする舟はこゝによらなん

前の詞に此殿のおもしろきをほむる歌と云によくかなへり。此おとどはとくいかめし

くいきほひある人にて。よろづおもしろきことをこのみ給へる中に。みちのくのしほがまをうつして。毎日しほをやかせられし。第一のことなれば。此ところをすなはちまことの鹽がまにして。いつか來にけんといへり。こゝを鹽がまの浦にするほどに。つりする舟もこゝによれとよめる。奇特の心也。世の中にたえてさくらのなかりせば春のこゝろはのどけからまし

惟喬のみこかた野のかりをし給ふ時。なぎさの院のさくらをかざしにして。上中下の人歌よみける時。業平のよめるなり。たえてさくらのなかりせば。春のこゝろはのどけからんとは。さくらを待より。散はてゝあとをしたふまで。春のうちは花に心ののどかならねば。さくらなくばのどかならむといへり。花に心のふかく貪したるなり。

ちればこそいとさくらはめてたけれうき世
に何かひさしかるべき

業平のあまりに花に着したる心を。有常さ
らふてかくよめり。めてたけれとは。愛した
けれといふ心也。あかぬ心は散によりての
心也。下の句まことに理ふかくはづかしき
歌也。

かりくらしたなばたつめに宿からんあまのか
はらに我はきにけり

これは惟喬のみこかた野をかりて。天のか
はのほとりにいたるを歌によみて。さかづ
きはさせとのたまへばよめる。心はあきら
か也。

一年に一たびきます君まてば宿かす人もあら
じとぞ思ふ

一年に一たびきます君とはひこぼし也。そ
れを待間は。宿かす人あらじといへる也。こ

れは有常が返し也。

あかなくにまだきも月のかくるゝか山のはに
げていれずもあらなん

かくよめるは。みなせの宮にて。三月の十一
日の事也。みこゑひてうちへいり給ひなん
とせしおりの心也。歌は義なし。

をしなべて峯もたいらに成なゝん山のはなく
ば月もいらじを

有常みこにかはりてよめる歌也。

まくらとて草引むすぶこともせじ秋の夜とだ
にたのまれなくに

是はこれたか都にかへり給ひて。その宮に
ての事也。なをみこ人々をしたひ給ひし時。
業平のよめる也。三月つごもりの夜なれば。
秋の夜などのやうに。夜ながきころにも侍
らねば。まくらをむすばじと云心也。春のわ
かれをしたふ心のふかささま也。その夜の

様を此歌にておもふべきもの也。

忘れては夢かと思ふおもひきや雪ふみわけて君を見んとは

惟喬親王貞觀十四年七月出家したまひし翌年。業平正月に小野へまいり給ひし時。ひるの山のふもとにて。雪いとふかゝりしをしのぎてまいり給ひて。いにしへのことなどきこえし時よめる歌也。此みこは文徳第一の御子にて。位につき給ふべきを。あまつさへ世をのがれ。山ふかき御むろに。つれづれとこもりおはしますを見たてまつりたまはん。業平の忘れてはゆめかと思ふとのべ出す心。たゞいまも其夜のあはれうかぶ歌にこそ。

老ぬればさらぬわかれのありといへばいよいよ見まくほしき君かな

業平の母伊豆内親王より。とみのことにて

いひをくる歌也。君とはなりひらをいへり。心はあきらか也。

世中にさらぬわかれのなくもがな千代もといのる人の子のため

我身ひとつにいはで。世間の人の上にかけていへる。尤おもしろし。我母のこゝろ也。思へども身をしわけねばめかれせぬ雪のつもるぞわがこゝろなる

此五文字色／＼のことをいひて後にいふ心也。業平の心には。月をかさねても。みこの御方にあらまほしく思へどもと云心也。朝家の奉公の身なれば。身を分るはかなはで。思ひつゝかへらむとするを。此雪かきくらしふりければ。都へかへりがてにするたゝりとなれば。此雪のつもるが我心也と云心也。めかれせぬとは。はれまもなく降雪の心也。

いまゝでに忘れぬ人は世にもあらじをのがさ
まゝとしのへぬれば

世にふれば此理のあるよしの義也。かく云
は我はひとり身をわすれぬ心也。

あしのやのなだの鹽やさいとまなみつげのを
ぐしもさゝずきにけり

此歌新古今になりひらの歌也。此物語にて
はたゞむかしの歌と心得べし。いやしきも
のは髪などけづることもせぬ義なり。さゝ
ずきにけりとは。かみに昔はくしをさす事
侍る間かく云也。

我世をばけふかあすかと待かひのなみだのた
さといづれたかけん

此歌は行平ぬの引のたきをみてよめり。我
世をばけふかあすかとは。命のことにはあ
らず。行平我身の時にあはずして。いたづら
にあかしくらすほどに。我世をばはやけふ

かあすかにきはまりたる身と思ふ間。なみ
だと此たさとは。いづれたかゝらんと云心
也。

ぬきみだる人こそあるらし白玉のまなくもち
るか袖のせばさに

たきの白玉の緒ときてみだすやうなるを見
て。この外上に玉のをゝぬきて。みだす人ぞ
あるらんとはいへる心也。めづらしき心なり。
下の句袖のせばさとは卑下の心也。まなく
もちるかと云は。袖にあまるばかりなるを。
過分に思ふ心にいへり。

はるゝ夜のほしか河邊のほたるかも我すむか
たのあまのたく火か

これは布引のかへさに。あしやの浦にたく
いさり火の。ことのほかに數もなくおほき
がおもしろきを見て。はるゝ夜の星か。また
河邊のほたるか。またあまのたく火かとい

へり。みつながらうたがふ心は。大形のいさ
り火に見えねばなり。眺望の心也。

わたつ海のかざしにさすといはふも、君がた
めにはおしまざりけり

みるを海神のかざしにとりなしていへるは
面白也。さすとは海神の愛し用るものと云
心也。惣のこゝろは。海神の愛しおしみる
ものながら。都人のためにはおしまてよす
ると云心也。

大かたは月をもめてじこれぞこのつもれば人
の老となるもの

大形といふ詞。心得らるゝ様ながら。その心
をいへばいはれぬもの也。おほむねといふ
ほどのこと也。こまかにいはゞ。十の物七つ
八つなど。世上に云事の侍るやうに。こゝろ
えべきにや。月をもめてじとおもひなした
る義也。人の身にはかならず思ふべき事の

あるに。くる秋ごとの月をのみめてきて。い
たづらに老となりて後。我心を思ひかへし
て。これぞ此と思ひおどろきたる心也。

人しれず我戀しなばあぢきなくいづれの神に
なき名おほせん

我戀しなば。我ゆへと思はて。いかやうの神
のとがめにて死にたるなど。神になき名
をおほせていはんと云心也。あまりに人の
うらめしきまゝに。をして人の心をさつす
る義也。

さくら花けふこそかくも匂ふらめあなたのみ
がたあすのよのごと

女のあす物ごしにてあはんといふに。さく
らにつけてやる也。心はあらはなり。

おしめども春のかぎりのけふの日のゆふぐれ
にさへなりにけるかな

ことはりあらはなり。こまかなる歌の詞に

や。

あしべこぐたなゝし小舟いくそたび行かへる
らんしる人もなみ

此女の所へ行来るよしをだにしらぬ心を。
あしべこぐふねの。かれとしれぬにたとへ
いふ也。

あふなく思ひはすべしなぞへなくたかさい
やしきくるしかりけり

此五文字心得がたき也。今案に。源氏物語に
あふなくといふ詞あり。念比なる義也。又
はまことになどいふ心也。五文字あいうえ
を五音にて心得べし。誠に思ひはすべしな
ぞへなくは。定家卿の義なずらへなく也。心
はたかきもいやしきも。戀のおもひはたゞ
一つ心なる義也。

秋の夜は春日わするゝ物なれやかすみにさり
や千重まざるらん

此段は業平のもとかたらひし人。別人に嫁
したるに。子ある中なりければ。いまもいひ
かはしけるに。此歌をよみてをくりしなり。
當時秋なれば。秋を今の男にたとへ。業平我
身をば過にしかたなれば春にたとへて。我
よりもいまの男をば。千重も思ひまざるら
んといへる心也。

千々の秋ひとつの春にむかはめやもみぢも花
もともにこそちれ

心はいまの男千人も業平ひとりにはをとる
べくの心也。むかはめやは對すまじきの心
也。もみぢも花もともにこそちれとは。男の
心はいづれもたのまれぬべき理ならねばの
よしをいへる心おもしろくや。心をやすん
ず義なり。

ひこぼしにこひはまさりぬ天の河へだつるせ
きをいまはやめてよ

これは業平物ごしに女にあひてよめる也。
ひこぼしはまことに一年に一夜逢ならひに
て悲しけれども。それも逢夜になれば。さは
ることなきを。我は色々思ひをつくして。た
ま／＼あふ時も物ごしなれば。ひこ星にも
まさりたる戀と云也。此歌にめててあひに
けるとぞ。

秋かけていひしながらもあらなくに木葉ふり
しくえにこそありけれ
見ずもあらずみもせぬ人の戀しくばあやなく
けふやながめくらさむ
しるしらぬ何かあやなくわきていはんおもひ
のみこそしるべなりけれ

見ずもあらずの返し也。しるしらぬとは。い
なともせとも。(マ懸)あぢきなく何かいはん。あひ
もあはずも。思ひこそしるべにならめとい
へる心也。

わすれ草生る野べとは見るらめどこはしのぶ
なりのちもたのまん

これは後涼殿のはざまを業平通る時。ある
つぼねより。わすれ草を忍草とや云とて。出
させ給へばよめる歌也。此心は業平こなた
を忘るやと心見給ふ義也。忘たるを忍ぶと
やいはんとて出させ給へば。其心を業平し
りてかく讀る。忍草忘草別々にあり。また一
草をも忍とも忘ともいへり。此歌はそのこ
ゝろにかなへり。

さく花のしたにかくるゝ人おほみありしにま
さる藤のかげかも

此段行平の所にて在中辨良近を請じて。さ
けのみ歌よみける時。業平のよめる也。かめ
にさしたる藤のしなひ三尺六寸ありけるが
ためしなさと。忠仁公の元祖にもこえてさ
かり也と。取合せてなずらへよめる也。

そむくとて雲にはのらぬ物なれど世のうきとどよそになるてふ

世をそむけばとて。雲風などにのることはなけれど。そむくとなれば。世のうさは餘所になると云心也。業平齋宮の世をのがれ給ふをうらやみてよめる歌也。

ねぬる夜の夢をはかなみまどろめばいやはかなにもなりまざるかな

ねぬる夜の夢とは。ほのかに人にあへることなり。其まゝにてはかなければ。まことの夢にも見ゆるやとうちまどろめば。ねもいらす夢も見えねば。我こゝろのいよくはかなさのまざる心也。

世をうみのあまとし人を見るからにめぐはせよともたのまゐる哉

目ぐはせとは。目にて心をかはす義也。齋宮の尼になり給へるを。海邊の海士になすら

へてよめる也。

白露はけなげなゝんきえずとて玉にぬくべき人もあらじを

業平のある女のつれなきに。かくては死ぬべしと云やりたりけるによめる。玉にぬくべき人もあらじをとほ。取用る人もあらじと云心也。かく云は業平をそむかぬ心也。

ちはやふる神代もきかず立田川からくれなるに水くゝるとは

此歌は立田川に。神無月ばかり。みむろの山の嵐はげしきころ。紅葉ことくくちりて。此川うづもれはてたるとき。水はたゞくれなるをくゝるやうに見ゆるを。いはんかたなきにより。神代にこそ神通自然の事はありと聞。それもたゞいまのやうなる興はきかずと云心也。

つれくゝのながめにまざるなみだ川袖のみひ

ぢてあふよしもなし

此歌は業平のいもうとを敏行の思ひ初しころよめり。つれくといひとりながめられたれば。いと涙川も水まされば。袖のみぬれて逢事のなさをなげく也。

あさみこそ袖はひづらめなみだ川身さへながるときかばたのまん

心はあさらかなり。身さへながるといへる。優なる歌也。

數く／＼に思ひおもはずといがたみ身をしる雨はふりぞまされる

敏行女をえて後やる文に。雨のふるを見わづらひ侍るなど。女のかたへ云やりける。此女は業平のいもうと也。それにかはりて業平よめり。數く／＼とは思ひおもはずといはんとていひ出たる詞也。思ひおもはずもあればやとひがたくなれる。眞實思はゞ。雨に

さはるべきことにもあらず。見わづらふと云を。身をしる雨ふりまさるといふ心也。身をしる雨とは。雨によりて身をしる心也。風ふけばとはに波こそ岩なれや我衣手のかはくときなき

女の業平をうらみてよめる歌也。心はあらは也。つねのことくさとは。何となくくちすさびのやうによめる也。

宵ごとに蛙のあまたなく田には水こそまされ雨はふらねど

なりひらの返し也。蛙のあまたなく田とは。田をば女の方のことによそへて。あまたの人に御心かはす故にこそ。御袖の水はまされと云也。まさるとは涙なり。雨はふらねどとは。業平の我方の思ひならねど、云心なり。さゝをひける男とは。かはく時なきと女のいふを。我ごとく業平の思ひえたる也。此

うた面白からず。例の作り事なるべし。

花よりも人こそあだに成にけれいづれをさきにこひんとかみし

友たちの人をうしなへるがもとにやると云へり。たしかに心得がたし。古今には人の花をうへける。その花さかぬに身まかりければ。紀義行がよめると見えたり。それは心もあきらかに。又あはれもふかし。こゝにても大形そのごとくに見侍らんは。

思ひあまり出にし玉のあるならん夜ふかく見え玉むすびせよ

これは業平を女の夢に見たるよしいへるとき。よみてをくりける歌也。夢はたましひの所作なれば。我君を思ふ玉しひぞみえつらん。玉むすびをせよと云へる也。かく云は我玉しひをそなたにむすびとめてをけとしたふ心也。玉むすびとはうかれたる玉なとみ

わたるをまじなひすること也。

いにしへはありもやしけんいまだしるまた見ぬ人をこふるものとは

歌はなりひらのよめるなり。こゝろはあらは也。

下紐のしるしとするもとけなくにかたるがごとは戀ずぞあるべき

人にこひらるゝには。ひもの とくることあるに。さもなければ。そなたの云ごとくに。色こひぬにこそあれと云心也。又業平の返し。

戀しとはさらにもいはじ下紐のとけんを人はそれとしらなん

大形心はあらは也。されど前に人をこふるよし云やりたる。そのしるしとするひもしとけねば。さもあらじと返しにあるほどに。我思ふ心は切なれば。紐のごとくはとけん

と思ふほどに。ともかくも詞に出てはいはじ。紐とけば我思ふとしれと云心なり。

すまのあまの鹽やく煙風をいたみ思はぬかたにたなびきにけり

女のことさまになうけるととき。業平のよめる也。心はあきらか也。されど人の心の變ずる所を。ともかくもいはで。鹽やくけぶり風をいたみ思はぬかたにといふ所。まことに意詞幽玄。至極の歌なるべし。

長からぬ命のほどにわするゝはいかにみじかさこゝろなるらん

業平ひとりゐて。我ぬる女のことをよめる也。此歌三十一字の中に。長短の二字をよみ入てはあしかるべきに。しかも意詞優に明なること。心おもしろき歌也。

おきなさび人ながめそかり衣けふばかりとぞ田鶴もなくなる

せり川の行幸のとき。行平大たかのたかゝひにて。かり衣につるをすりてきたるが。はなやかなるさま也。その時六十九の年なれば。大たかのたかゝひにまいること。我身に似合ず侍れど。けふばかりは君の行幸のめでたきにより。かくはなやかに装束きたるを。人ながめそといへる也。おきなさびとは。老てわかやきたるさま也。

おきのゐて身を焼よりも悲しきはみやこ島へのわかれなりけり

業平みちのくより京へのぼりける時。女のよめるといへり。おきのゐみやこ島といふところにてとあり。古今に小町が歌とみゆ。波間より見ゆる小島のはまびさしひさしくなりぬ君にあひ見て

萬葉にははまひさぎとあり。すこし取かへたるばかり也。上は序也。歌の心はあきらか

也。

我見てもひさしく成ぬすみよしのさしのひめ
松いく世へぬらん

我見てもは業平の心也

むつましと君はしらなみづがきのひさしき
代よりいはひそめてき

むつましと君はしらなみとは。業平に神の
勅ある也。しるべき物と云心也。下の句はあ
らはなり。前の詞に御神けぎやうし給ひて
とは。あらはれ給ひて也。現形したまふ也。
玉かづらはふ木あまたに成ぬればたえぬこゝ
ろのうれしげもなし

玉かづらとは草のかづら也。玉はそへ字也。
たよりにしたがひて。何の木にもかゝる物
なるを。業平の心によそへて。たえぬもうれ
しからずと也。たのみがたき心をいふ也。
かたみこそ今はあだなれこれなくばわするゝ

ときもあらましものを

あふみなるつくまの祭とくせなんつれなき人
のなべのかずみん

此段は女のまたよへずとは。いまだ男にも
あはじと思ふを。業平の思ひかけたれば。あ
へる男あるよしを聞てかくよめり。さては
男ひとりのことにもあらじと云義也。つく
まの祭には。女男にあひたる數なべをかづ
きてわたると云事あるよし云やれり。此女
出てなべをかづくことあらじとなれども。
世のたとへにいへる也。うらむる心也。

鶯の花をぬふてふかさもがなぬるめる人にさ
せてかへさん

梅つぼより出る人の雨にぬれて行ば。梅の
花がさをおもひよせて業平かくよめり。返
し。

鶯の花をぬふてふかさはいな思ひをつけよほ

してかへさん

梅の花がさはいやなり。思ひをつけよとは。心ざしをつけよ。さあらばその心ざしを報ぜんと云心也。ほしてかへさんとは。ぬるゝといふ返しなれば。ことばの縁なり。心は報ぜんの義也。

山城の井手のたま水手にむすびたのみしかひもなき世なりけり

女の業平にちぎりて變じたるにつかはす歌也。井手のたま水を取り出すは。むかし井手にて女をちぎりて。帶をつかはして。つゐにをとづれもなかりし時。女思ひわびて。玉水に身をなげしことあり。變じたるこゝろゆへ。かくいへる也。

年をへてすみこし里を出ていなばいとゞふかぐさ野とやなりなん

深草にある女を。かれがたに成てかくよめ

り。心はあらは也。

野とならばうづらと成て鳴をらんかりにだにやは君はこざらん

かりにだにやは。かりそめのたよりに。もやよらんの心なり。此かりを狩場によそへていへるはよろしからず。

おもふ事いはでたゞにややみぬべき我とひとしき人しなれば

此歌を古註にはいろ／＼理をつけて云也。當流にはしり侍らず。前の詞にも。いかなりける事を思ひけるおりにかと云。歌にもいはでたゞにと侍れば。とかくいはい。あたるまじき心也。いはねば萬法にはづれずと云べからん。

つひにゆく道とはかねて聞しかどきのふけふとは思はざりしを

古註にきのふまではけふとは思はざりしを

と云て。心あまりて詞たらぬ歌といへり。當流にはうちまかせて。たゞきのふけふとは思はざりしをといへり。まことにあはれもふかくや侍らん。これ世上の人ごとのころなるべし。たゞそのまゝの義なるべし。かへすゝ知べくこそ侍らめ。

此一冊者延徳之初。防州山口にして此物語

之講釋之後。初心之輩所望之間書之。然者形見之やうなる事共なるべし。於餘情者筆舌難及。唯任其耳。但又云。雖損字落字可有之候。本まかせに書之候。

宗祇在判

〔右伊勢物語山口抄舊本闕今以流布印本補之〕

續群書類從卷第五百十四

物語部十四

伊勢物語宵聞抄

一此物語を伊勢といへる事。古註の儀には男女の物語といへり。其故は伊勢の二字をおとこをなんとよむによれりと云り。其下に種々の儀をたつ。當流に不用之。定家卿の奥書に無所見故也。

一伊勢物語といへるは。業平狩の使に伊勢にくだりし時。齋宮にあひたてまつりし事。此物がたりの肝心なり。依之此名ありと云儀有て。是を信ずる輩。結句狩使の事をはじめにかける本有。定家卿皆以破之。又所不用當

流也。惣じて此物がたりの作者。故人の説不同也。あるはなりひら自記と號し。あるは伊勢といへる女のかけるよしみえたり。仍定家卿も難決由奥書在之。しかはあれど非彼筆者。何稱伊勢哉と侍れば。黄門の心も伊勢筆作をもつて此物語の題號とさだめらるゝよしみえたり。されば當流之儀是也。

一伊勢が筆作におきても。ある説宇多御門へ奉るよしを云り。當流に不用之。當流になつる所は。伊勢といふ女。七條后宮へ業平一期の事をかたりたてまつる事をしるせりと定

之。此うちになりひら自記の詞も相交り。所詮たゞ作物がたりと見侍るべき也。されど源氏物がたりの様にはあらず。業平一期の事をかけるうちに。少々舊哥などを取よせてかける所は。皆作物語の作法也。一條禪閣の御註にも作物がたりのよしみえたり。作者は伊勢が書るよし可心得なり。仍此題號うたがひなき者也。

一
むかし

作物語なればむかしと書るゑ。遠近によらず。過ぬるをむかしといふなるべし。伊勢集のはじめの詞に。いづれの御時にか。大みやす所とかけり。今時の事をもむかしと云り。心はおなじきにや。一條禪閣御説にも。昨日はきふのむかし。去年はことしのむかしなりと云。又むかしといふ詞に。なりひらの哥の躰こもる事あり。可受師説。

おとこ

在中將の事也。段々いづれも業平なるべし。うゐかうぶりして

元服の事也。古註には承和七年十六歳と云。業平元服は傳に年月日と書て。年も月も日もみえざるべし。依之年月をいつといふと不可用之。又叙爵の説業平廿五之時也。是又不用所也。又古註之儀に。うゐかうぶりして。ならの京にかりしたるとつゞけてみるにや。當流には不然。うゐかうぶりしてとは。業平元服のはじめを云り。又其後いつにても。ならの京に行てかりしたる事を。かりにいにけりと記たるなり。うゐかうぶりの事をはじめにかきて。すゑに終焉の事をかけり。是則此物語一部の肝心也。

しるよしして
奈良に業平の領知のありしなり。別に無所

見とも。此物がたりに記たるうへは其分なるべし。其上業平は平城の御孫也。南都に領知有べき事勿論也。

かりにいにけり

業平なにとなくかりをしてあそびたるなるべし。一禪御説。むかしはこゝろのまゝにかりをしけるなり。

なまめいたる

ほめたるとば也。媚。此字也。

はらからすみけり

此兄弟の女誰ともなし。此物語のうへに誰と名のあらはれたるはいふに及ばず。名のあらはれぬをば。誰ともなくてをくべし。當流如此。和歌のよみ人しらずのごとし。古註には此兄弟の女を有常女と云。不用之。一禪御説同當流也。

かいまみてけり

垣間見也。只物ごしなどにほのかにみたる心なるべし。如此いへるゆうなるべし。

おもほえず

かゝる故郷によき女のあるを見そめたるこゝろ也。

いとはしたなくて

あれたる所にかゝる人の思ひの外にある心也。たとへばよはき物につよくあたるなどを。はしたなしといふがごとし。いたはる心也。強字也。

心ちまどひにけり

おもひをかけたる心也。

かりぎぬのすそをさりて

思の切なる躰也。みだれたる思ひをしらせんために。しのぶずりのすそをさりて。うたをそへてつかはすなるべし。

しのぶずり

むかしはかり装束にすりかりぎぬをも用たる也。一禪御説同之。

春日野のわかむらさきのすり衣しのぶのみだれ限しられず

かすがのゝわかむらさきとは。所春日野なれば也。若紫とは女をたとへいふ也。しのぶのみだれかぎりしられずとは。忍ずりはみだるゝ物なれば。思ひのかぎりしらぬよしをよそへて云也。

をいつきて

人に追付などしたるとは不可心得。彼女の行たる所をしたひて尋つかはす心也。

ついでおもしろき

川原左大臣の哥を今女の返哥に用たるは。

ついでしかるべき事とやおもひつ覽といふこゝろなり。

みちのくの忍もぢずり誰ゆへにみだれそめに

し我ならなくに

融公の哥のこゝろは。誰ゆへにかみだれそめし。君ゆへにこそみだれぬれといふ儀也。上句は序也。古歌にはみな序哥とて。何事にてもいひて。すゑにわが心を述なり。といふうたの心ばへなり。女の返しの註也。みちのくのうたの心。河原左大臣の作意を用かへて返しにしたる事也。いま女のこゝろはたれゆへの思ひにてあるらん。我ゆへにてはあらじと也。源氏玉かづらの巻にも。おなじうたをいひかふる事あり。そのほか此儀おほかるべし。

いちはやき

早卒也。うちつけなる心也。

みやび

なさをかはす心也。定家卿註也。

一^ニむかしおとこ有けりならの京はなれ

桓武天皇延暦三年ならぬ京より今の京にうつらんとて。先長岡に都して。平安城の西京より次第に東京を首尾せし時分事也。先首尾したるにしの京に有ける女と也。

西京に女ありけり

此女誰ともなし。古註には二條后云々。不用之。やむごとなき人なるべし。

その人かたちよりは心なんまざりたりける誠世にすぐれたる人なるべし。かゝる人なれば。業平のこゝろをつくしたるも。とはりなりとみるべし。

ひとりのみもあらざりけらし

おとこある人と云也。

まめおとこ

實なる人をまめ人と云心也。そのゆへは人のつまに思ひをかけこゝろをつくすは。眞實に切なる思ひある故也。大かたの思ひに

てはかくあるべからずと也。又云。なりひらを實なる人と云心也。

雨そぼふる

春の雨のおりふしのやうを思ひ入てみるべし。

おきもせずねもせてよるをあかしては春の物とてながめくらしつ

心はたゞぬるともなく。おくるともなく。夜をあかして。ひるは又春のならひに長雨しくらしたるよし也。詠にあらず。長雨なり。されどをのづからながむるこゝろもあらは也。是業平の哥のさま也。前のとばをよく工夫して思ふべし。猶以餘情無限物也。なをざりに見侍るべからすとぞ。

三
一むかしおとこ有けりけさうしける女

思ひをかくる心也。二條后也。詞にみえたる也。業平好色の名譽の事なれば。名をあらは

していへるにや。

ひじきも

海草也。文などのたよりにそへてまいらす
るなるべし。むかしはかゝる物などをもつ
かはす歟。

思ひあらばむぐらのやどにねもしなんひじき
物には袖をしつゝも

心はかばかりたえがたき思ひあらば。ひつ(き)
しく物には袖をして。むぐらのやどにても。
思ひなくてだにあらばありなんと云心也。
思ひあらば玉のうてなもかひなし。むぐら
のやどもまさるべき心也。むぐらのやどに
おもひのあるやうには。此うたの心はなし。
此哥はじまりて後々のうたには。むぐらの
やどに思ひのある所のやうによめり。疎屋
の心也。むぐらのやどに思ひのあるやうに
見侍れば。思ひをこのむ儀になるえ。よく工

夫すべき物也。

二條後のまだみかどにも

伊勢がかける詞なるべし。業平の所行をた
すけて。たゞ人にての時とかけると云々。又
女御以前の時分の事にもや侍らん。

一四むかし東の五條に

今京の東京の事也。

大后宮

染殿后也。清和母后也。五條の後共申。

西のたい

染殿御所内の西對也。二條の後を此たいに
をきたてまつり給へり。

ほいにはあらで

あらはにはあらでなり。又本意にはあらで
なり。

ゆきとぶらひける

密通事なり。

ほかにかくれにけり

業平密通不可然故也。古注に長良卿のもとへと云々。さもやありつらむ。

なをうしと思ひつゝ

猶憂と也。大方もかよひがたき人なるに。あまさへほかにかくれたれば。なをうしと思ふなり。

思ひつゝなん

つゝといへるとばにて。ほどをへたる心あり。思ひくゝて月日のうつりたる心あり。されば又のとしの正月と次の詞にかけり。

又のとしのむ月に

時節におどろきて。思ひの切になる心也。去年のこの比までは通じたる事など。さまたまにそのかんを思ふべし。

むめの花ざかりに

世間の梅のさかりなり。にしのたいの梅に

あらず。これこゝろのもよほしなり。

あばらなるいたじき

あれたるいたじきなるべし。此時のかなしき身にたよりあり。

月やあらぬ春やむかしの春ならぬわが身ひとつはもとの身にして

此哥月やあらぬはとがめていへる也。心は月もみし世の月。春もむかしのはる。わが身も又もとの身なりといふ心也。みなこしかたにはかはらぬを。后にあひたてまつらねば。月もあらぬ月におぼえ。春もむかしの春ともおぼえず。我身ももとの身とも思はぬよし也。それをいはんとすれば。文字は三十一字かぎりあれば。そのまゝ心にてもたせてをく所。心はあまりて詞はたらずの心也。此うた猶言語の及所にあらず。俊成卿の筆跡をみて工夫あるべき者也。

夜のほのゝと

此詞を思ふべし。夜ふかくもかへらざる心
尤あはれなるべし。其人故此所をしたふよ
し也。

^五一むかしおとこ有けりいとしのびて

前の段とおなじ。二條後の事也。

人しげくもあらねど

忍てかよふみちなればなり。

あるじさゝつけて

染殿の後のさゝつけてなり。

人しれぬ我通路の關守はよひ／＼ごとにうち
もねなゝむ

五文字はつねの人しれぬ身など其心也。こ
とはりは明也。よく吟じて。いづれのうたを
も。其心をするべきとなり。

心やみけり

心やましき也。染殿後の心に。すこし業平を

いたはり。憐愍のやうなる心也。
せうとたち

二條後の兄弟たちのと也。

^六一むかしおとこ有けり

女のえうまじかりけるを。えがたきなり。二
條後の事也。

ぬすみいでゝ

思ひのあまりに。女をさそひいでゝゆくな
るべし。

あくた川

内裏の中なる川也。ちりなどをながすと云
々。まことに一禪の御註にも。此事を一説と
て如此あそばされたり。實には此名なし。作
物がたり作法にや。

草のうへにをきたりける露を

おりふしのみちの躰なり。かゝる道などな
らひ給はぬ故に。露などをもとひ給へるに

や。心のまどふさま也。

ゆくささとほく

ゆく道もとをく。思ひも亂たる時なれば。こたへもせぬ也。

おにある所

女をとりかへしたる人をおにといへり。末の詞にみゆ。古註鬼間事不用之。たゞおそろしき心なるべし。又は心なき所の心也。

神さへいといみじうなり

此時神なり雨ふりて。かなしき事とりあつめたる心也。

くらに

いづくにても人なきやうなる所にや。座字をくらしもよむと也。此儀可然。一禪御説同之。

弓やなぐひを

心のたけき躰をいへり。一禪御説。此時業平

は近衛司なればと云々。此夜弓矢を負べきといか。只近衛の儀にはあらで。作事なれば面のまゝにや侍らん。

はや夜も明なんと

此時は夜をはやく明よと思べき事ならず。されども思ひのみだれに忙然としたるなるべし。

鬼はや一口に

こゝに人ありときゝつけたる人の一言によりて。女をとりかへしたる事を一口といへり。余説不用之。

あなやと

女の詞なるべし。かなしむ心也。

あしずりをして

切にかなしむ心也。

白玉か何ぞと人の問し時露とこたへて消なまし物を

五文字に如此よめるは侍らず。此哥にとりては。なにぞとうつしいへばくるしからざる也。心はしら玉とやらん。なにぞとやらんとひしときと云心也。其時の思ひのみだれにかへしせざりしと。尤切なる心也。そのおりきえたらばと云に。今の猶ふかき心みゆ也。(る説)

いとこの女御の御もとに

染殿後の御方なり。禁中にての事也。

堀川のおとゞ

二條の後の兄昭宣公也。

太郎國經

二條後の兄。昭宣公にも兄なり。

まだ下らうにて

殿上人の時分なるべし。

^七一むかしおとこ有けり京にありわびて

業平流罪の時の事也。當流の説。東國下向の

分なり。古註に種々譬喩不用之。只作物がたりなれば。そのまゝ見侍るべし。定家卿奥書。可翫詞花言葉而已云云。此詞肝心也。山海處々旅懷可思惟之。

波のいとしろう

此詞又有感也。都をはなれて。よろづ物かなしかるべきときは。なみのしろくよせかへるも。めにたちてあはれなるべし。

いとゞしく過行かたのこひしきにうら山しくもかへるなみ哉

此哥は心あらはなり。波のよせてはかへりくするをみて。都を思ふ心もよほさるゝ様なり。哥さまあはれふかく侍り。よく吟味すべし。理のやすくきこゆるうたをば。猶ふかく思入て見侍るべしとぞ師説申されし。

^八一むかしおとこ友とする人誰ともなし。

すみところもとむとて

都に住わびていへる也。

しななるあさまのたけに立煙をちちり人の
みやはとがめぬ

此うたはあさまの山の奇妙なるところをよ
みたてたるなり。業平みやこにのみすみて。
かゝる山のさまなどめづらしきに。名にを
ふけぶりのおもしろきを。わが心にかひじ
て。遠近人も是をあはれと見ざらましやと
いふ心也。旅はかなしき物なれど。時にあた
りての興は又さる事也。ふかく工夫すべし
とぞ。

一^九むかしおとこ身をえうなきものに

なりひらは王孫三代の人ながら。官位もあ
さく。結句流罪の身となれり。仍用なき身と
なるよし也。

もとより友とする人

上の段に友とする人と云るによりて也。

みちしれる人もなく

業平のみならず。同道の人も道を分明にし
る人なきよし也。又道をしるべき人なりと
も。此時の思ひには迷心あるべし。まして此
人々のみちしらぬとはり也。あはれふかく
おもひさとるべし。

三河國

あさまなどをすぎて。此國にうつり行程な
り。

水ゆく河のくもて

水縦^三に行所なるべし。

橋を八わたせる

はしを八わたすにあらず。くもてのあまた
あるなるべし。

木の陰に

羈中のさま。よくく心をやりて思ふべし。

かれ飯

旅行にあるさま也。有間王子^{孝徳御子}なども。家

にあればけにもる飯をなどよみ給へり。旅

客のさまおもしろくもあはれにも侍にや。

そのさにかきつばた

おりふし此所にて花をみたる躰有興にや。

から衣きつゝなれにしつましあればはるく

さぬる旅をしぞ思ふ

此うたにきつゝ。はるく。つましあれば。

みなころものえんの字也。常のうたならば

秀句おほくてあしかるべし。これはかきつ

ばたを折句にをけばくるしからず。哥よむ

人これを思ふべし。さてうたの心は。大方も

たびのならひは。おりにふれとにしたがひ

てかなしきを。思ふ人をみやこにとめさ

ぬれば。思ひの切なるよし也。

ほとびにけり

ふかくかんじたる涙の心にてかく云り。

ゆき／＼て

遠江を過たる心なるべし。

うつ山に

山中の道のさま。此時の人々の思。そのおり

ふしをよく心をやりて工夫すべし。

つたかえてはしげりて

葉しげるとよむ説あれど。はの字をてにを

はによみてかむあり。

すゝるなる

心ならざる也。又辛字をもよむ。

す行じやあひたり

修行者。古註には遍照又寂蓮など云り。不用

之。當流誰ともなし。

するがなるうつの山べのうつゝにも夢にも人

にあはぬなりけり

上は只所うつの山なればいへり。序哥也。夢

にも人にといはんためなり。心は夢にだに
その人をあひみぬなげきをいふ也。うつゝ
にもとは。うつゝの山をうけていはんためな
り。かやうのこと師説ならではたがふべき。
又の説。もと逢みし人なれど。たち放きぬれ
ば。夢うつゝともにあひみたる人とも思は
ぬ心也。尤面白也。

ふじの山をみれば

時は五月也。奇異なる山の雪をみたる心な
り。

時しらぬ山はふじのねいつとてかかのこまだ
らに雪のふるらん

五月に雪あれば。時しらぬ山はふじのねな
りけるといふなり。そのころをかへして。
さてもいつとてかかくふれるぞといへり。
かのこまだらはむら／＼の雪なり。此うた
もあさまの山のごとく。此山のたぐひなき

を興じてよめる也。かやうのうたはとがら
をよく思ふべしとぞ。

こゝにたとへば

上の富士の註也。追而註するうへは。都にて
ひゑの山にたとへていはんことうたがひな
し。

はたちばかり

十重ばかりなどたとへていはゞ。なをとた
らぬ心にて。廿ばかりと云り。

しほじり

俊成卿説。定家等不分明云々。此儀殊勝也。此
物語一部の肝心也。學者工夫すべしとぞ。

大なる河あり

業平旅行の躰。こゝにもとまらず。かしこに
もやすらはず。遠國にいたり都は遠くなる
に。結句大河にむかひて。此川をわたりて又
いととをくへだゝりゆかむを思ふべし。故

に大なる川と云る詞に心あるべし。以下のとばども。いづれもあはれふかく。よく工夫すべし。餘情かぎりなきものなり。

わたしもりはや舟にのれ

舟にものりかねたる程也。心のすゝまざる儀也。是又なをさりに見侍るべからずとぞ。

しろき鳥の

都鳥の背はくろく腹はしろし。

鴨の大きなる

鴨のやうにて大なるとりといへり。鴨の勢分なるにてはなし。又は鴨のほどなるといふこゝろなり。

名にしおはゞいざことゝはん都鳥我思ふ人はありやなしやと

此うたはたゞむさしとしもつふさの中に。大なる川ありといふより。みな人物がなしくてといひ。さるありしもしろきとりとと

ばにいひたるを。此うたのこゝろにこめて見侍るべきなり。かぎりもなき餘情侍るべし。

舟こぞりて

傍人も感涙を催すなり。舟中の人くも也。

⁺一むかしおとこむさしの國

此國にある女誰となし。

ちゝはと人に

女の父の心には。なりひらにあはせん事を過分に思ひて。と人にといへる也。なを人とは大方種姓たうとからぬ家の人なるべし。一禪御説同之。

はゝなむ藤原

四姓の中にも。藤氏は賞翫なればかくいへり。家のたかく思ひあがりたる人は。斟酌の心もなく。風流なる人にあはせんと思なるべし。

あてなる人

勝人也。ほめたる儀也。

むこがね

むこの器量也。源氏物がたりにも。ささきになるべき人を后がねと云同之。

よみて

よむてとよむ也。是よみくせなり。

みよしのゝたのむの鴈もひたぶるに君がゝたにぞよるとなくなる

心は業平をむこにとらむと思ふ心ふかさゆへに。所みよし野にて。鴈おほきところなれば。鴈も君が方によるとなくぞとよめり。た

ゝ我心をかりにいはする也。

我方によるとなくなるみよしのゝたのむのかりをいつか忘ん

此返しは前のうたに我を思ふ心みえたれば。その心ざしをいつわすれんとなり。

^{十一}一むかしおとこゝ

友たち誰ともなし。

忘なよ程は雲ゐになりぬとも空行月のめぐりあふまで

此うた拾遺には橘の忠もとが哥とみえたり。かやうの事は此物がたりにおほし。此物がたりにては業平のと心得べし。ほどは雲ゐとは。遠ざかるともと云儀也。めぐりあふまでとは。我たちかへりてあふまでわするなと云儀也。月によそへていへり。

^{十二}一むかし人のむすめを

誰ともなし。

むさし野へゐてゆく

此段のさまとに作物がたりとみえたり。人をぬすみてといへるにつきて。からめられにけりとも。又火つけんとすともかけるなるべし。此物語の誹諧也。

みちくる人

滿來なり。

むさし野はけふはなやきそわかぐさのつまも
こもれり我もこもれり

此段の詞。かゝる哥あれば。つくりごとに云
るなり。哥の心はあらはなり。つまは我つま
也。

女をばとりてともに

^{十三}國のかみ女をぐして行なり。

一むかしむさしなる男

業平と也。

京なる女

誰ともなし。古註四條后云々。四條后といふ
事不用之。其上清和の御時立后の事なし。

さこゆればはづかし

戀路のわりなさならひ也。

むさしあぶみと書て

かけて思ふといふこゝろなり。むさしあぶ
みといふ事は。其國より都に奉りそめたる
より。此名を用るにや。むかしはその國より
たてまつりはじめたる物をば如此號する事
有。一禪御説同。信濃のま弓と云も。其國の
御調の所也。

むさしあぶみさすがに掛けてたのむにはとは
ぬもつらしとふもうるさし

かけてたのむといはん枕詞也。とはぬもつ
らしとふもうるさしとは。思ふ中のさすが
しのぶ事ある故也。まことに戀路のわりな
きさま也。

たへがたき心ちす

女のうたの心。とにかくにたへがたくくる
しきと也。

とへばいふとはねばうらむさしあぶみかゝ
る折にや人はしぬらん

心は思ひの一方になければ。いかさまにせんと思ふにも。猶たへわびぬ。かやうのとのある折にや。人のしぬるといふともあるらんと云儀也。

^{十四}一むかし男みちのくににすゝろに

すゝろとは心ならずの儀也。

そこなる女

誰ともなし。

中／＼に戀にしなければは子にぞ成べかりける玉のをばかり

心は戀といふ物にあひみるとをたのむに。さも侍らねば。せめてしなとも思ふに。それも又かなはぬ心也。されば中々にこひにしなであらば。せめて桑子にもならばやと云也。桑子はちぎりふかき物也。又命一とせをすぎざる物なれば。とり合てかくねがふ也。このうたは萬葉にあり。是又作事也。玉

のをばかりとは。しばしのほどもと云心也。夜もあけばきつにはめなてくたかけのまだきになきてせなをやりつる

きつとは狐也。下略也。くたかけは家の鶏といふ心也。但庭鳥と心うる至極也。心は夜ふかく鳴て思ふ人をかへせば。狐にくはせんといへる也。此段みな作物語也。

くりはらのあねはの松の人ならば都のつとにいざといはましを

是もをぐろさきみつのこじまの人ならばといふ哥をいひかへてつくりたる也。心はあねはの松をその人にたとへて。さそはるべき人ならば。いざといはまし物をと云也。又予今案あり。しかはあれど。云いてんとは憚ありてさしをき侍ぬ。

よろこぼひて

東國の詞のさまあり。

思ひけらしとぞ。

おとこの思ひけるよと。女のいひてよろこ
びたる文なり。

^{十五}一むかしおとこなでうとなき人

なにはかりの人にもあらずといふ心也。枕
草子源氏物がたりにも。させる人にあらざ
る人とみゆ。

あやしうさやうにて

人のめなればかくおもへり。

忍山忍てかよふ道も哉人のこゝろのおくもみ
るべく

しのびてかよふ道もがなとは。人の胸中に
忍てかよふみちもがなといふ心也。尤めづ
らしうして。しかも詞やさしさうたなり。こ
れらは誠業平の哥なるべし。おほく古哥を
わざとつくりて。業平とかけるおほかるべ
し。

さるさがなき

惡也。不祥也。

えびす心

たはむかたなく。すぐなるやうの心也。さや
うの心にて。をしたるふるまひなどありて
は。いかゞはせんとおもへる也。せんのは
は文字をそへたるばかり也。

^{十六}一むかし紀有常

業平のしうと也。又朋友也。

三代の御門

淳和。仁明。文徳。

世かはり

清和の御時の事也。有常は惟喬方によれる
人也。惟喬は名虎が女靜子の腹にておはす。
有常は名虎が子也。

よのつねの人のともあらず
女也。おとろへたる躰也。

あてはかなる事を

風流なる事也。有常が性をほめたる也。

こと人にもにず

世のつねの人は貧てはへつらひ。富てはあ
ざる也。有常はさもあらずとなり。

よのつねのともしらす

世務をもしらぬとなり。

とはなれ

ふうふ中をはなるゝ心也。常の字也。又は床
也。いづれも離別の心也。

あねのさきだちてなりたる

有常が妻のあね也。

おとこまことにむつまじき事こそ

有常が妻の性をもはしからず。かゝる時節
を堪忍せずしてはなるゝをもつてしりぬ。
平生も有常が心にまことにむつまじと思は
ずもありぬべし。されどもわかるゝはあは

れなるべし。

ともだち

業平のと也。思ひわびてと書る詞心あるべ
し。思あまりて業平の方へもいへる也。

手をおりてあひみしとをかぞふればとをとい
ひつゝよつはへにけり

心はたゞ有常我妻四十年のちぎりなる儀な
り。女のこゝろなき事。此哥のうちにこもる
なり。

よるのものまで

種々のものを送るとみえたり。

年だにも十とて四はへにけるをいくたび君を
たのみきぬらん

心はとしさへよそぢのちぎりならば。いか
にそのうちに君をもたのみけんを。今たち
わかるゝ心さこそと。妻の心をたすけてい
へるなるべし。

是や此天の羽衣むべしこそ君がみけしとなて
まつりけれ

業平いろ／＼の衣などつかはしたるを。あ
はれにしかもうれしさのあまりにかくいへ
り。心はこれやあまの羽衣ならむと。先大や
うにほめて。ことはりえけり。君がきたる衣
なればと自問自答したる也。みけしは上衣
也。又御衣也。

よろこびにたへて又

一首にて猶不足なるにて也。

秋やくる露やまがふと思ふまであるは涙のふ
るにぞありける

秋やくるとは。秋は人をうれへしむる時な
れば。秋が来て我袖をしぼるか。又大方の草
木の露がわが袖へまがひきてぬらすかと思
ふまで。我袖のぬるゝは。只今の悦の涙なり
けりと云心也。是も我心などひを我と思え

たる心也。
一年十七ごろ

此段にむかしと言字なし。書おとしたるか。
又年頃と云るにて。昔の心ある歟。只書落に
や。

をとづれざりける人

業平也。あるじの女誰ともなし。

あだなりと名にこそたてれ櫻花年にまれなる
人もまぢけり

おもてのこゝろは。櫻はちりやすくあだな
る名こそたてど。かくまれにくる人を待つ
つければ。あだにはなしと云也。下の心はな
りひら此女をあだなりとかねていひけるを
思ひていへる也。我はあだならぬよしを云
る也。

今日こずばあすは雪とぞふりなましきえずは
ありとも花とみましや

業平女のいへる所をうつて。今日わがきたればこそあだにはなきやうにあれ。あすは雪となるべし。それは木のもとに雪とはみゆとも。花とはいかゞみんといふ也。下の心は女のかはらぬさきにきたればこそといふ心也。あすにもならば。人の物ともなりなん。さあらばその人とはみるとも。我物とはみまじきの心也。

一十八むかしなま心ある女

をんなとは小町也。此段誰ともみえざれども。なりひらのかたへ哥を送などする事。業平好色の名譽なれば。小町と名をあらはす也と云なり。なま心とはよからずあしからずと云ほどの心也。

さくの花のうつろへる

すこしうつろひてしろき花なるべし。うたにみゆ。

くれなるに、ほふはいづら白雪のふだもとを
ゝにふるかともみゆ

しら雪は中將の心のいろみえぬを云也。白色は色の本躰にて。うつろふ色のなき故也。中將をかんべんしたる哥也。好色の人とみれば。さもなきといふ心なり。

しらずよみに

小町がうたを送りたる心を。なにゆへとも
しらぬよし也。大かたは業平もしるべけれども動ぜぬ心也。

紅に、ほふがうへの白さくはおりける人のそ
てかともみゆ

紅もたゞみるめのたゞち也。又しろきもそのまゝなり。それをおりてをこせたるゆへに。おりける人のそでとはいへり。しらずよみによみけりと云。心えながらしらぬよししたるなり。さくには白衣佳人などいふ事

あればなり。

十九 一むかし宮づかへしける女のかたに

染殿の御かたなどにや。そのゆへは業平は
忠仁公に家禮也。されば染殿后などへも通
しぬるにや。ごたち。染殿后の内などの女ど
もの中にてもや侍らん。

あま雲のよそにも人の成行かさすがにめには
みゆる物から

天雲のよそとは。空はとをき物なれば。よそ
といはむためなり。人のみえながら我にち
かづかぬをかくよめり。

天雲のよそにのみしてふるとは我ゐる山のか
ぜはやみなり

我君がかたによらてへぬるは。そなたのあ
るかたの風のはげしければなりと云ふ心な
り。風のはげしきとは。と人のかよふとを云
也。此女古今にありつねがむすめ也。

二十 一むかしおとこやまとにある女

誰ともなし。

宮づかへする人

なりひら也。奈良故郷などへかよひて。今京
にかへりまいりける也。

紅葉のおもしろさ

若葉のいろこき也。

君が爲たをれる枝は春ながらかくこそ秋のも
みぢしにけれ

君が心もしうつろふか。君がためにおれる
枝のかく紅葉するはと。女の心をうたがひ
ていひなせるなり。

返事は京にきつきてなん

此詞はみちすがら此返ごとをまつ心みえたり。
うたなどを思人のかたへつかはしては。
みちすがら返しを待こゝろあるべし。
いつのまにうつろふいろのつきぬらん君がさ

とには春なかるらし

是は又女たちかへりてあとこの心をうたがふ也。さればいつのまにうつろふいろのつくぞ。かゝらば君が里にははや秋になりはてけるよと云心也。

三十一
むかし女いとかしこく思ひかはして

女誰ともなし。又小町などにもや。

いかなる事かありけん

かはるべきとを不審する心也。

出ていなば心かろしといひやせん世の有さまを人はしらねば

女男のあひだの恨あるをばしらで。世の中の人はいは此家をうかれゆくを心かろしとぞいはんと云心なり。いさゝかなるといふあれば。女の定心ならぬ也。

けしう心をくべき

帷字の心也。あやしむ也。

門にいてゝと見かう見

こゝの詞ども。上に心をくべき事もおぼえぬをといへるにかなへり。

思ふかひなき世なりけりとし月をあだにちぎりて我やすまひし

上の二句は此女をふかう思へど。立いてぬれば。思ふかひなき世なりけり。人の心はかくある物なりけりといふ心なり。さてとし月をと云より我心をいへり。もし又我もあだにちぎりてやありけん。一方に人にとがをさせずよめる也。是中將の心なり。世上の儀にも叶哥也。

人はいざ思ひやすらん玉かづら面影にのみいとみえつゝ

此思ひやすらんとは。我をもしあはれとも思ひやすらむ。又思はずやあらん。我はわすれがたければ。おもかげにみゆると云心也。

玉かづらは女のかくるものなるにより。万葉にもおもかげとよみならはせり。思ひやすらんは。又や見んかたのゝみのゝと云おなじ心也。

此女ねんじわびてにや

上の詞にいさゝかなるとにいてゝいにしも。堪忍のこゝろなきによりてなり。又今男のかたへうたを送などするも堪忍せぬ性なり。

今はとてわするゝ草のたねをだに人の心にまかせずもがな

今はとてとは。中將のこゝろに。かぎりと思ひなし忘やすらん。さもあらずもがなと云心也。忘草の種を心にまかするとはわするゝ事也。

忘草うふとだにきく物ならば思ひけりとはしりもしなまし

うふとだにきくならばとは。忘んとするは思ふ心のあるゆへなり。されば女の忘草をうふるときかは。おもふとしらむといふ心也。

又くありしよりけにいひかはして

又あひかたらひける也。

忘るらんと思ふ心のうたがひに有しよりけに物ぞかなしき

心はいまは思ひかはせども。かねてあさはかに立出し人なれば。なをうたがはしきゆへに。ありしよりまさりてかなしと云也。

中空に立ぬる雲のあともなく身のはかなくも成にけるかな

此哥心は此女中將の所をさせるふしもなくてうかれいて。さらばそのまゝにもなく。たちかへりしたがひなどして。さらに定なき我身のありさまを。中ぞらの雲の定なきに

よそへていへるなり。我心を觀ずる也。
といひけれど

又別くの世になりたる也。此詞は哥より
つゞけてみるべし。哥に身を觀じぬれども。
又定心なき事を云り。

一^ニむかしはかなくて

女誰ともなし。はかなくなにとやらんして
絶たるなるべし。

うきながら人をばえしも忘ねばかつうらみつ
ゝ猶ぞ戀しき

これは人をつらしとは思へどもえわすれね
ば。かく恨ても猶こひしといへり。かつとい
ふ詞は且にはあらず。むかしはかくといふ
におほくつかへり。

さればよといひて

同心したる儀也。業平もかく思ふと也。女の
うたをやがて返しなどのやうにいへる心な

り。さて又我心をおこしてよめる也。
逢みては心ひとつをかはしまの水のながれて
たえじとぞ思ふ

心ひとつをかはしまは。心をかはす儀也。水
のながれてとは。水はたえぬ物なれば。その
やうにながらへてかはらじといへる心也。
われて又あふと云儀をば當流に不用。河島
を二度の用にたつるはあしき故也。

といひけれどその夜いにけり

けれどこの詞は。歌には行すゑの事をとく
契たる哥也。かくはいひけれど。やがてその
夜行てねたると也。思ひかねたる心にや。

秋の夜のちよを一夜になずらへてやちよしね
ばやあく時のあらん

これは心明也。只人にあく世あらじといふ
とをかくよめり。箸鷹のとかへる山の椎柴
のはかへはすとも君はわすれじ。などいへ

るうたのたぐひ也。

秋の夜のちよをひとよになせりともとばのこりて鳥や鳴なん

これも心は明也。詞のこりてとは。猶のこりおほかるべきと云儀也。心やさしき哥なるべし。

二十三

一むかしぬ中わたらひ

田舎にかよひ住事也。ならの京などにや。一向にすむにはあらず。

人の子ども

男は業平也。女は有常が女と云り。いかゞ。たれにてもなり。

つゝゐつのゐつゝにかけしまろがたけ過にけらしなにもみざるまに

つゝゐつのゐつゝとは重詞也。あづさゆみまゆみつき弓といひ。みよしのゝよしのゝ山といふがごとし。上のつゝをばすまして

よむべし。これは例の作物語なるべし。如此哥古哥にあるを。中將のと書なせり。此五文字古註説あやまれり。調五とかくなどいへる事大なる相違也。定家卿のうたにも此五文字有。

まろがたけ

たがひに身のたけをばいかほどに成たらん時。ちぎりをはすべしなどいへるなるべし。としはいくつにてもなり。

くらべこしふりわけがみもかたすぎぬ君ならずしてたれかあぐべき

是も前のうたにて其心あらは也。かみをあぐといふは。女おとなになればかならずする事也。心は君が手をふれんと云心也。可契儀也。

女おやなく

古註説は。おや時をうしなひて。なきがごと

くになりたる也云々。當流にはまとなく成たるごとくにても。又なきがごとくにてもあるべし。

もろともにいふかひなくてやはとて

男女ともにかやうにたづきなくてありへんもいかゞとて。をのゝいかやうにもしかるべきかたに成なんなど云心なるべし。大和物語にも。あしからじよからんとてぞわかれけるなにかなにはのうらはすみうき。などよめる人の心も此心也。此段のこゝろもなりひらのこゝろあさきにはあらず。女を憐愍の心なるべし。

思ふたがひて

業平をいだしやりなどするも。又さすがにうたがはしく思ふなるべし。

いとようけさうして

身をつくるひやさしささまなり。古今には

琴をかきならしてなどあり。とにあはれなるべし。

風吹ば興津白波たつた山夜はにや君がひとり
こゆらん

おきつしらなみは。盜人の事にむかしよりいへり。しかあれど是はたゞたつといはんとして。興つしら浪と云。興つしらなみといはんとて。風ふけばといへる是序也。心は此女まづしくなりて。業平とあひそふ事をもはおなげきて。二道のうらみをも思はず出したてゝ。國をへだてゝ過ゆく山のおぼつかなきに。かゝる夜はしもひとりやこゆらむといへる心を。よく思入て吟味すべし。貫之も此哥は歌の本といへり。よく思ふべし。猶しらなみの立田の事。顯註密勘に顯昭が今案。万葉にわたつ海の沖つしらなみ立田山いつかこえなん君があたりみん。是は

伊勢山の邊の御井にてよめり。序哥なれば
盗人にあらじといへり。定家卿此今案可興
可仰。やまとにはあらぬから衣のたぐひな
りと同心し給へり。

心にくゝもつくりけれ

心にくきさまにつくりてみせしとなり。

てづからいひかゐ

古註には實にとるにはあらず。成敗する心
也と云々。當流には此事は物がたりの誹諧
也。成敗するにても幽玄ならず。たゞそのま
ゝ可心得。

君があたりみつゝをゝらん伊駒山雲なくし
そ雨はふるとも

是は萬葉哥也。古哥を我思ふ心にあへば詠
じ云事常のと也。あはれふかきさまにや。次
にたのまぬものゝと云うたも古哥也。心明
なれば註に及ばず。

やまと人こむと

業平の事也。此段に有常が女と名をあらは
すは。貞女の名譽をしらする故也といへり。

^{二十四}おぼつかなし。誰にても也。

一むかしおとこかたゐなか

田舎はいづくともなし。男は業平也。

みやづかへに

京へのぼるを云也。朝家奉公也。

いとねん比に

と人に契る也。

此男きたり

業平の來也。

此戸あけ給へ

門などたゝかせたるさまにや。

あら玉のとしのみとせを待わびてたゞこよひ

こそ新枕すれ

此哥男絶たりとも三とせはまつべき事。さ

だまれる儀にや。みとせもすぐれば。他人に
新枕すると云心也。但まことに新枕せんには
かやうにもいひがたし。只中將を恨ていへ
るにや。前のとばゝ態かやうにかくこと。此
物がたりにおほし。

梓弓ま弓槻弓年をへて我せしかごとうるはし
みせよ

ゆみを三つゝくると。古註には三年といふ。
不用之。重詞也。神樂の哥にも。弓といへば
しななき物をあづさ弓まゆみつきゆみしな
こそあるらし。といへるがごとし。としをへ
てといふに。みとせのこゝろは侍る也。さて
うたの心は。君に心ひきて年をへぬるを。其
あひだのちかひを君うるはしくせよといふ
儀也。うるはしきとはまこと也。かごとはち
かひ也。

梓弓ひけどひかねどむかしより心は君により

にしものを

心は君が心は我にひきもひかずも。我心は
むかしより君によるといへる儀也。弓はひ
くときは本すゑの我かたへよる物なれば。
詞のえんによるといふたよりある也。

しりにたちて

したふ心の切なる也。

清水のある所

子細なし。自然の儀也。

およびのちして

指の血也。途中の故なるべし。心はたゞ切な
る儀也。又途中にて筆墨に及ばぬ儀歟。

あひおもはてかれぬる人をとめかね我身ぞ
今は消はてぬめり

我は思へど人はおもはぬをあひおもはぬと
いふ也。我身消はつるとは。まことに死するに
はあらず。思のかぎりなるをいふ也。次のと

ばにいたづらに成にけりと云も。思ひのか
なはぬ心なり。

^{二十五}
一むかし男さすがなりける

女業平を恨みたる心あるにより。あはんと
おもへど。さもなき心也。

秋のよのさゝ分しあさの袖よりもあはてぬる
よぞひぢまさりける

あはてぬるよとは。人のもとへいけども。あ
はぬかへさの事也。あさのそてとは朝袖也。
心は秋の野も篠も朝も露おほき物なれど。
猶あはぬよのかへるさの袖はぬれまざるよ
し也。

色このみなる女

誰ともなし。古今には此哥を小町と有。

みるめなき我身をうらとしらねばやかれなて
あまのあしたゆくゝる

みるめなきとは。此女中將にみえぬ儀也。み

えぬは中將にうらむる事あればなり。され
ば我みえぬはそなたの科にてあれば。わが
身をうらめしとはおもはて。などあしたゆ
きばかりはきぬるぞといへる心也。我身と
は男のわが身なり。

^{二十六}
一むかし五條わたり

女とは二條后也。

わびたりける人

染殿后也。返事とは業平のうた也。業平二條
后に思ひある事を。染殿后あはれみわび給
し也。戀路なればかゝる事にもあはれをか
け給ふなるべし。それをよろこびたるなる
べし。

おもほえず袖にみなとのさはぐ哉もろこし舟
のよりしばかりに

中將二條の后に密通の事は。染殿后いまし
めたまふべきを。あはれみ給ふ所のうれし

、さにおつる涙を。おもほえず袖にみなとの
さはぐ哉といへり。猶ふかう悦の涙をいは
むとて。もろこし舟もよりし計にと云也。よ
りしのしはやすめ字也。當時は此やすめ字
侍らぬにや。豐玉姫のほゝてみのみことを
戀て。あか玉のひかりはありと人はいへど
君がよそひしたうとく有けり。此哥し文字
同心なり。

二十七
一むかし男女のもとに

女誰ともなし。

ぬきす

盟のうへに竹をあみて。へりなどをさした
る物なり。それを上にわたして。そのうへに
て手をあらふ物也。水のしづくをちらさじ
の心也。

たらいのかげに

てあらふ女のかげ也。

我斗物思ふ人は又もあらじとおもへば水のし
たにもあるかな

心は水のかげにうつりたるを。又もあらじ
とおもへばありとよめり。

水口に我やみゆらん蛙さへ水のしたにてもろ
こゑになく

蛙は水口に一なけば惣の蛙のなく物也。な
きやめば又なきやむ也。されば惣の蛙のな
くは水口の蛙のなくゆへなり。そのこゝろ
をとりて。そなたに思のあるは。我思ひのゆ
ゑぞといふ心也。我こそおもひの本人な
れと云心也。

二十八
一むかしいろこのみなる女

誰ともなし。

などてかくあふこがたみに成にけん水もらさ
じとむすびし物を

あふこがたみとは。あふかぎりのかたきな

り。期字なり。それを籠によそへてよめり。
心は切にちぎりし事は。かたみにくみたる
水のごとくあとなきよし也。

^{二十九}
一むかし東宮女御

二條后事也。春宮の母の女御なれば也。陽成
院は貞觀十一年二歳にて立太子。

花の賀

花の時は花の賀と云。紅葉の賀など云は秋
なれば也。一禪御説。染殿后四十賀をいとこ
の女御し給ふなるべし。いとこの女御とは
二條后なり。

めしあづけられ

業平奉行などにて申沙汰しけるにや。業平
は忠仁公染殿などへ家禮なる故也。

花にあかぬなげきはいつもせしかどもけふの
こよひににる時はなし

面は御賀のときのめでたきけふのさまをい

へり。下の心は二條後の御ことを花にあか
ぬといへり。けふのこよひと云を。つよくは
あたりていはで。大やうにうちながめて云
べし。餘情かぎりなし。

^{三十}
一むかしはづかなりける

ほのかに逢たる女なるべし。

逢事は玉のをばかりおもほえてつらき心のな
がくみゆらん

あふ事は露ばかりにて。思ひは切なる心な
り。誠に哀ふかき哥也。戀路の本意にや。よ
く吟味すべし。

^{三十一}
一むかし宮のうち

禁中の事也。わたりけるは業平也。前をすぐ
る儀也。

よしや草葉よ

かくいふ心は。春の草の若葉なるも。秋にい
たりて枯行とを思ひて。業平によそへてい

ひ出して。うらむる心也。一禪御説。人のなきあとには草のおふる心とぞ。

罪もなき人をうけへば忘草をのがうへにぞおふといふなる

つみもなきはとがもなき我身をと云也。うけへとはのろふ心也。女のふかくうらむるをかく云なす也。をのがうへにとは。還着於本人のこころなり。とりわけ忘草といふは。この女中將忘けるをうらみて。よしや草ばのなど云にや。

ねたむ女も

かくいひかはすを。かたはらにねたむ人もあるべし。是も女の心のならひなるべし。

^{三十二}一むかし物いひける

年ごろありてとは。絶て後の事也。

いにしへのしづのをだ巻くりかへし昔を今になすよしもがな

此哥いにしへとむかしは同事也。むかしのうたはかやうに云り。心はたゞ中絶たる人をたちかへりしたふ心也。

なにとおもはずや

伊勢が詞也。この人々の行衛しらねばかく云にや。

^{三十三}一むかしむはらのこほり

あしやは業平の領知にて。京よりかよひけるなるべし。

このたびきては又もこじと

業平の京へ上て。又はこじと女の思ひて。わびたるけしきをなぐさめて。業平よめる哥也。

あしべよりみちくるしほのいやましに君に心を思ひますかな

此哥は万葉のうたにすゑすこしかはれり。女の心をなぐさめて。中將古哥をすこし引

かへていへるなるべし。あしべにみつるし
ほは。うへにみえねど。ふかき物なれば。我
思ふころをたとへいふ也。

こもり江に思ふ心をいかてかは舟さすさほの
さしてしるべき

こもり江とは古江などの草あひてみえぬを
いふ也。心は下にふかく思ふ心はさもこそ
あらめ。それをばさしていかにしるべきと
云心を。舟さすさほのと云る也。あらはに思
ふ心のしらまほしきよし也。

よしやあしや

子細なしなどいふ心にや。

^{三十四}
一むかしつれなかりける人の

誰ともなし。

いへばえにいはねばむねにさはがれて心ひと
つになげくころかな

心はいはむとすれどいはれず。さていはね

ば又むねにみちて。思ひの切なる心也。され
ばこれによりて心一をなげくとは云也。つ
れなら人にと詞にあるに。よく心かなふに
や。

おもなくて

つれなき人のかたへしゐての心也。はづる
心也。

^{三十五}
一むかし心にもあらでたえたる人

たれともなし。

玉のをゝあはをによりてむすべれば絶ての後

あはんとぞ思ふ

玉のをはいのちなれど。こゝにてはたゞを
といはんためなり。あはをとあはせたる
をなり。心はかたいとなどのやうにはなく。
たえてもたえはてぬ物なれば。かくこそよ
そへよめり。

^{三十六}
一むかしわすれぬるなんめりととひとしける

とひととはひうらむる心也。

谷せばみみねまではへる玉かづらたえんと人に我思はなくに

此哥は萬葉に。谷せばみみねにおひたる玉かづらたえんの心我は思はず。といへるうたをすこしかへてかけり。心はたゞたゆまじきといふ心也。上は序哥なり。これも作物がたりの心也。

^{三七}一むかしいろこのみなる女

好色にてあだくしき女なるべし。誰ともなし。

我ならで下ひもとくなあさがほの夕かげまたぬ花にはありとも

我ならで下ひもとくなとは。他人にちぎるなといふ心也。花にもしたひもなどいへばかくいふ也。あさがほの夕かげまたぬとは。女のこゝろのあだにして。夕をもまたず。か

はりやせんといふ心をかくよめる也。

ふたりしてむすびしひもをひとりしてあひみるまではとかじとぞ思ふ

此哥は前にうたがはれぬる心をちんじてよめる哥也。ふたりして結しとは。たがひの契を他にうつすまじき心也。前のうたはいふに。此哥はいやくや。

^{三六}一むかし紀有常に

業平有常が家に行て待に。をそかりしに。後によみてやる哥也。

君により思ひならひぬ世中の人は是をや戀といふらん

有常を待わびしと故に。世中に戀といふと思ひならふと云也。

ならはねば世の人ごとにになにをかも戀とはいふとゝひしわれしも

我も戀といふ事をならはねば。世の人にと

ひつるを。君を思ふ心ゆへに。我も戀をしる
といふ儀也。詞は別なれど。心は同やうの哥
也。

三十九
一昔西院のみかど

淳和天皇の御事也。依遺勅御骨を西山に納
奉る。故號西院。

たかいこと申

崇子内親王也。淳和御子。承和十五年五月十
五日薨。

その宮のとなり

崇子内親王の宮の隣也。男は業平也。

御はふりみひとて

はうぶりと可讀にや。みんなあはれにも
思ひ奉る心なるべし。

ひさしくゐて出たてまつらず

未將出也。さう所への事也。うちなきてと
は。あはれをかけてかへらむとせし也。

あめのしたのいろこのみ

源のいたる。源致。嵯峨天皇の御子定。至。
舉。順。

此車を女車とみて

業平の女とのりたる車の事也。

車なりける人

女なり。誰とはなし。

ともしけちなんずる

如煙盡燈滅の心也。

のれるおとこのよめる

業平也。

出ていなばかぎりなるべみともしけち年へぬ

るかとなくこゑをさけ

いてゝいなばとは。この宮鳥邊野にいてゝ

いなば。此世のかぎりなるべきといふ心也。

ともしけちとは。今螢をけす事を。いのちの

きゆるにたとへよむ也。さてとしへぬるか

となくこゑをきけとは。此別の時みな人の
なげく心は。老たる人の死するはせめて也。
此宮年をへ給へるかとはなくこゑをきけ
と。いたるに云なり。

いとあはれなくぞきこゆるともしけちきゆる
物とも我はしらずな

いとあはれなくぞきこゆるとは。業平のう
たになくこゑをきけといふをもつて。泣ぞ
きこゆるといへる。中將のなくこゑをきけ
といふ返しなればかく云也。此下は命はき
ゆるといへども。法界の五大の火はきゆる
物ともしらずと云心也。人の一身は地水火
風空にむすばれて。人身をうくる物なり。此
姿をうけたるも法界の五大なれば。死する
も又空からずと云也。是即非眞滅の儀也。
なをぞ有ける

直の心なり。すぐによめると云心也。

いたるは順がおほちなり

此詞心得がたし。順は村上時分の人也。後人
の註したるにや。但諸本如此。

みこのほいなし

此詞又上につぐかず。猶ぞ有けるのつゞき
にや。心は内親王のため本意なき儀なり。な
げくべき事なりかし。時宜にかなはぬを嫌
也。

一むかしわかきおとこ^{四十}

けしうはあらぬ女をとほ。下すしからぬ也。
女を思ひける也

業平の此女の家にかよふ所とみゆ。

人の子なれば

業平の事也。さる人の子なればといふ心也。
をひやらむとするをとどむるいきほひな
く。ふかく恨心もなき事をほめて云り。此心
殊勝也。

女もいやしければ

上詞には下すしからぬとあり。こゝにいふ
いやしきは年わかき事也。朝廷莫如爵。郷黨
莫如齒。

思ひはいやまさるに

業平の思ひ也。

をひうつ

女をへだていさむる心也。

ゐていてゝいぬ

女をおやのゐていだす心也。

いてゝいなば誰かわかれのかたからんありし
にまさるけふはかなしも

五文字は彼女をゝひいだす事也。たれかわ
かれのかたからんとは。我も世にありへん
事あるまじければ。我もわかるべきと云心
也。さればありしにまさるけふはかなしも
と云り。こしかたはたのむかたあればなり。

たえいりにけり

悶絶したる事。

おやあはてにけり

女のおやの事也。

しんじちに

まめやかにとよむべしと云々。不用之。

猶思ひてこそ

業平を思ひてこそと也。

むかしのわか人は

伊勢が詞也。今の翁とはわか人に對してか
けり。世の末の人は人を思ふ事もふかゝら
ぬよし也。

^{四十一}一むかしはらからふたりひとりはいやしきお
とこ

誰ともなし。

ひとりはおてなるおとこ

業平事也。此女は姉なるべし。

うへのきぬ

袍の事也。

さるいやしきわざも

三従の心也。

ろうさうの

六位袍なるべきにや。

紫のいろこき時はめもはるに野なる草木ぞわかれざりける

むらさきの色こきとは。わが思ふ女に寵愛の時をいふなり。思ふ人ひとりゆへに。そのゆかりをみなあはれと思ふよし也。むらさきはむさしのなどにある草也。女にたとへたる物也。野なる草木とはゆかりの心なり。むらさきのひともとゆへもおなじ心也。

^{四十二}一むかしおとこいろこのみなる女を

好色なる女なるべし。

にくくははたあらざりけり

好色にてあだなれども也。此段の詞よくよく分別してみるべきなり。

猶はたえあらざりける中なりければ

又うちたのむべき中ならずとなり。

いてこしあとだにいまだかはらじを誰かよひぢと今はなるらん

是はわが思ふ人のたのもしげなき事をいふ也。我たちいてば。あとよりやがて人をもかよはさんとうたがふ心也。

^{四十三}一むかしかやのみこ

賀陽親王。桓武第七御子也。

人なまめきてありけるを

賀陽親王のおぼしめす女に。業平のなまめく事也。我のみと思ひけりとは。業平の我のみと思ひたる儀也。

又きくつけて

賀陽の御事をなりひらのきくつけたる也。

ほとゝぎすのかたを

繪にかきたる也。

時鳥ながなく里のあまたあれば猶うとまれぬ
思ふものから

心は思ふ人の我にのみちぎらて。他人に心
かよふ儀也。其を時鳥によそへて。なをうと
まれぬとは。切にはおもへど。うとましきと
云心也。うとましきはうらむるなり。

けしきをとりて

業平の氣色をとりて也。

名のみたつしてのたおさはけさぞ鳴いほりあ
またとうとまれぬれば

してのたおさは時鳥の別名也。名のみた
つとは。時鳥のあまたのさになくよしの
名の立なり。これも時鳥をわが身にそへて
よめり。心はよそにかよひてはなかず。うた
がはれてうらめしさに。けさぞなくとよめ

り。けさはいまと云心なり。かならず朝には
あるべからず。

庵おほきしてのたおさは猶たのむ我すむかた
にこゑしたえずば

心はかよふかたあまたありとも。我をだに
思ひすてずば。なをたのむと云心なり。
四十四一むかしあがたへゆく人に

有常とみゆ。

うとき人にしあらねば

業平は有常がむこ也。

女のさうぞく

裳からぎぬなるべし。

あるじのおとこ

業平也。

いで、ゆく君がためにとぬぎつれば我さへも
なく成ぬべきかな

君がためにとぬぎつればとは。はなむけの

心也。我さへもなくなるとは。きたるものをぬ
げば。裳なくなると云儀也。猶われさへもな
くとは。われもわざはひなくなるといふ儀
也。人をいはへば我もわざはひなきの心也。
喪の字をわざはひとはよむなり。此もなく
と云心萬葉五卷にあり。

此哥は

此時此やうを題にて哥よむべきと。常の題
などにかはりて逸興なる事也。よまむも難
儀なるべければ。心とめてよますると也。
此哥を業平によまする時の心なり。

^{四十五}
一むかしおとこ人のむすめ

古註には良相女云々。不用之。たれにてもさ
るべき人なるべし。

物やみ

物思ひの病となる心也。

つれ／＼とこもりをりけり

忌にこもる心也。我ゆへ死たる人なれば。義
をたがへぬ心也。

六月卅日

此段詞以下よく／＼可思惟之。時節の氣。暑
熱のくるしさやう／＼散じて。夜ふけて涼
風うち吹たる時節を思ふべし。

ゆく螢雲のうへまでいぬべくば秋風吹とかり
につげこせ

此哥心尤餘情おほく感情ふかき哥也。古註
などにいへるはいかとぞ。あつきころほ
ひ。よひはあそびて。さ夜ふくるころ。風い
と身にしひばかり吹て。すゞしささらに中
秋の天の心したるありふし。ほたるのたか
くとぶをみて。はやかりもわたるべきほど
の心ちすれば。かりにつげこせとよめる也。
いかにも吟味して。時の景を思ふべきにや。
暮がたき夏のひぐらしながむればそのとゝな

く物ぞかなしき

これはさしむきてきこえ侍り。別のこゝろなし。いみにこもりたる折ふしのこゝろを思ひあはせて料簡すべし。前の哥とおなじときにはよまざる哥とみゆ。工夫すべき物也。なをそのとゝなきに心あり。

^{四十六}一むかしおところるはしき友

業平の友也。とに思ひかはしたるにや。

人の國へ

受領などにや。月日のへにける事と讀まるべし。

忘ぬべき物にこそ

我忘れずと云詞也。

めかるともおもほえなくにわすらるゝ時しなければ面かげにたつ

めかるとは。みる事のへだゝる儀也。心は國さとをへだてゝも。我はめかるともおもほ

えずと也。いかむとなれば。わするゝ時なけ

^{四十七}れば。いつもおもかげにたつと云心也。

一むかしおとこねんごろにいかでと思ひける女

此女あだなりと業平を思ふ也。

大ぬさのひくてあまたに成ぬれば思へどえこそ憑ざりけれ

大ぬさとは幣帛の事也。又大ぬさは櫛に麻の苧をながく付たるをいふ。大麻とかけり。ひくてあまたとは。これかれとりかはし祈をする故にいへり。哥の心は思ふ人のこゝろあまたにうつれば。たのまれずといふ心也。返しはひくてあまたのなにはたてど。つゐに一方による所ある物をと云心也。つゐには君が方によるべきの心也。

^{四十八}一むかしおとこ

今ぞしるくるしき物と人またん里をばかれず

とふべかりけり

心は人を切に待わびぬる時。人またむさとをばかれずとふべき物なりと。我心に領解したる心なり。惣別の世の事をいへる也。ひとり四十九をばさぬ也。

四十九一むかしおとこいもうと

業平のいもうとなり。

うらわかみねよげにみゆるわかくさを人のむすばん事をしぞ思ふ

ねよげにみゆるとは。ぬると根と兼ていへるなり。心は我いもとなれば子細なしとみれど。他人いかゞおもはんやと。猶いもうとをあはれむ心也。人のむすばんとは。人のちぎらむことを思ふ儀也。又の儀いもうとをけさうして云る心もあり。

初草のなどめづらしきとの葉ぞうらなく物を思ひけるかな

などめづらしきとは。初草といふえむの詞なり。心はあまりに我をあはれむところのかたじけなさをいふ也。大かた世中に人をあはれむよりもこえて。中將の思ふ所をこれほどまではなどめぐみけるぞと云心也。うらなくものとは。うらもなくそこにとをりて。我を思ひけりと云心也。此心奥にあらはるべし。又業平のけさうしたるを。とがめてよめる心もあり。

五十

一むかしおところらむる人をうらみて
女五十の業平をうらむるを。又なりひらのうらみてなり。

鳥の子を十づゝとをはかさぬとも思はぬ人と思ふものかは

此鳥の子の事。百卵をかさぬるといふ事もあり。又九子をかさねたるともあり。但此うたに云所は本文をば用ず。たゞあるまじき

とをいひ出たる也。さればかくあるまじき事はありとも。おもはぬ人をば思ふ物かはと云心也。

朝露はさえのこりてもありぬべし誰か此世をたのみはつべき

是もたゞあるまじき事を云り。たれかこの世をたのみはつべきとは。人のこゝろを憑はつまじき儀なり。此世とは夫婦の間の世の事也。

吹風にここの櫻はちらずともあなたのみがた人のこゝろは

心おなじ。

行水にかずかくよりもはかなきはおもはぬ人を思ふなりけり

心おなじ。

行水と過るよはひとちる花といづれまてゝふとをさくらん

行水も過るよはひもちるはなも。しばしまてといふ事をばさかぬ物也。人のこゝろも又同事なるを。しゐて猶思ふ事はかなきといふ心也。

あだくらべかたみに

伊勢が詞也。

^{五十一}一むかし人のいゑに

其家誰ともなし。

うへしうへば秋なきときやさかざらん花こそちらめねさへかれめや

うへしうへば重詞也。されどすこし心あるべき也。心はかくうふるとうふるならば。秋のなきときやさかざらん。秋といふ事のあらむかぎりはさくべしと云心也。うへたる花を賞する心也。人の梅さくらなどにても。花うへたらむときの哥など。これにて思慮すべし。此哥おもしろく侍る物也。

五十一
一むかしかざりちまき

五月五日いろ／＼のいにてむすびたるちまき也。

あやめかり君はぬまにぞまどひける我はのに出てかるぞわびしき

あやめにちまきをするとはなけれど。當日の事なればかくよめり。心はあやめはぬまにてひく物なれば。我方へ心ざしたるを切に思ふ心也。われは野にいてゝとは。きじをやれば。野にて心ざしをいたすよしなり。

五十三
一むかしおとこあひがたき女に

此詞尤切なるとみゆ。大方の人なりともあるべきに。あひがたき人にあひたる時のころを思ふべし。

いかでかは鳥のなくらん人しれず思ふ心はまだよふかきに

此哥はかくれたる所なし。たゞよくとがき

に思ひあはせて見侍るべし。心あはれふかきうた也。おもふ心の夜ふかきは。のこりおほき心也。

五十四
一むかしおとこつれなかりける女に
女誰ともなし。

行やらぬ夢路をたどる袂にはあまつ空なる露やをくらん

行やらぬゆめぢとは。ゆめのうちにも行かよふ事やすからねば。ゆめぢをたどるそてには。大かたの天津空なる露やはをく。かなしき思ひの露こそをくらめと云心也。露やをくらむといふをとがめていへば心得らるゝなり。後撰には天津そらなきとあり。心おなじ儀也。かやうの詞初心にては心得がたき物也。能々工夫あるべき物也。

五十五
一むかしおとこ思ひかけたる女
女誰ともなし。

思はずは有もすらめどとののはの折ふしごと
にたのまるゝかな

今は思はずこそあるらめど。こしかたの
のはのたのまるゝよし也。古今に。よしや人
こそつらからめはやくいひてしとは忘じ。
といふ同心也。世上の事にもこのこゝろよ
く思ふべき心也。

^{五十六}
一むかしおとこふして思ひこ

此詞切なる心也。

我袖は草庵にあらねどもくるればつゆのやど
りなりけり

此哥の詞は切にして。哥は大やうにきこゆ。
但此心は秋の夕ぐれなどの草葉の露をきあ
まりて。万物あはれなる折ふし。物思ふ身の
うちながめたるに。袖のうへはいつもの露
けさなれど。たゞ今みる所をかむじて。草の
庵にあらねど。くるれば露のやどりになり

にけりといふよし。あさく意得ぬれば詞に
相違す。

^{五十七}
一むかしおとこ人しれぬ物思ひけり

戀わびぬあまのかるもにやどるてふ我から身
をもくだきつるかな

此五文字誠以肝心也。とし月をかさね。よろ
づに心をいたましめ。身をつくしけれどか
ひなければ。うちかへし思ふところを戀わ
びぬとはいふ也。されば我から身をもくだ
きつるかなと。うちなげきたる心也。

^{五十八}
一むかし心つきて

業平の好色に心をつくしたる事也。

宮ばら

長岡に伊豆内親王の宮ありし。そのほとり
の宮たちの事也。桓武御子に内親王あまた
おはします。その宮の事にや。宮ばらといひ
けるとは宮のおほき心也。純子。萬子。桂子。

中野内親王。高津内親王等也。いづれも桓武の御子なるべし。

こともなき女ども

よろしき女どもなるべし。皆つかはれ人也。

田からむとて

おりふし秋のと也。なりひらに云よらむとて。たはぶれにいへるとばなり。ゐ中びて書なしたる也。

すきものゝしわざや

なりひらの家づくりなどのおもしろきをいふ也。

あれにけりあはれいく世のやどなれやすみけん人の音づれもせぬ

あれにけりとは。あるじなき所をあたりてよめり。あれにけりといふによりて。あはれいく世のやどにてかあるらむとは云也。末句になりひらかくれてをとせぬことをいふ

也。

むぐら生てあれたるやどのうれたきはかりにも鬼のすだくへけり

此五文字はあれにけりといへる返しなれば。それに同じてむぐら生てあれたるやどいへり。うれたきは愁也。憂也。心はかゝるやどりのうれはしきは。たまさかにも鬼のあつまるよりほかはとふ人もなしと。女のうたにあたりてよめり。おにとは女のと也。あだちの原のくろづかにおにこもれりとさくはまとか。といふも女の事を云り。外面似菩薩。内心如夜叉ともいふ云り。

ほひろはん

前に田からむといひしと葉の末也。これもたはぶれ也。古註に顯る心とは不用之。前にも女の思ひは顯たり。

うち侘ておちぼひろふときかませば我も田づ

らにゆかまし物を

これは女どものほひろはんといふに順じて
いへる也。此儀業平の心也。此段は此物がた
りの誹諧也。如此所をよく思慮すべき也。

^{五十九}
一むかしおとこ京をいかゞ思ひけん

業平左遷の時分なるべし。先都をいでゝ東
山にありしにや。

すみ侘ぬ今はかざりと山里に身をかくすべき
宿もとめてん

心は明也。後撰には爪木こるべきと入にや。

物いたくやみて

物思ひの病氣となりて絶入したるにや。

水そゝぎなど

以凉水灑面となどの心也。

我うへにつゆぞをくなる天川とわたる舟のか
ひのしづくか

是は面にそゝぎたる水をよめり。すてに絶

入するほどの身のいきいてたれば。大かた
の露にはあらじ。天川をとわたるかいのし
づくなどにてやあるらんと云心也。

^六
一むかし宮づかへいそがしく
朝家奉公事也。

心もまめならざりけるほど

業平の眞實に女を思はざりける時分と也。

いゑとうじ

古註には小町と云々。誰にても侍也。

宇佐使

御代一度奉幣の使あり。こゝに云は清和の
御代なり。貞觀のはじめにや。

あるくにの

いづれのくにゝてもなるべし。

しさうの官人

祇承。驛廳にありて御使の雑事などする人
也。

五月待花橘のかをかげばむかしの人のそてのかぞする

五月を待てさく物なれば。五月まつと云り。卯月の心にはあらず。心はたゞむかししりたる人といはんとて。むかしの袖のかぞといふ也。

思いてゝあまになりて

此時身をかへりみておどろく心より。あまになりて山にも入けるにや。

^{六十一}

一むかしおとこつくしまで

是も宇佐使の時の事也。

すだれのうちなる人

いづくの誰ともなし。

染川をわたらん人のいかでかは色になるてふとのなからん

そめ川といふ川なれば。わたる人いかでいふ。ろにならざらんといふ。

名にしおはゞあだにぞあるべきたはれしま浪のぬれ衣きるといふなり

これは白浪の此しまにうちかくるが。よそよりみればしらぎぬのやうなれど。ちかくみればさもなき也。そのこゝろをもちてよめる也。其故はいろこのむといふ人ぞとなりひらをいふは。かむべんしていへるを。やがていろこのみの返しをしたるを。女かくよめる心は。名にしおはゞそらごとにてあるべし。たはれしまもよそよりはしらぎぬやうにみゆれば。^(と嘆)まとはさもなければ。いろこのみといはゞ。さもあらじとおとしてよめる也。

^{六十二}

一むかしとしごろをとづれざりける女

業平のかたへ久しくをとせぬ也。女はたれともなし。心かしこくやあらざりけんとは。あだなる人となり。

はかなき人のことにつきて

中たちの言よく云につきていにける事也。

もとみし人のまへに

業平のまへにての事也。

いにしへのにほひはいづらさくら花こけるか
らともなりにけるかな

こけるからとは。さくらの花をこきちらし
たる枝の事也。業平わが身むかしのやうに
もなくなれる事を。花なき枝によそへて云
る也。

いとはづかしと思ひて

業平はわが身のとをかくよめるにも。女は
はづかしと思ふべし。

是や此我にあふみをのがれつゝとし月ふれど
まさるかほなみ

我にあふみをのがれて。とし月をふれど。思
ひなをす事なきといはんとて。まさるかほ

なき人なりけりとよめる也。もとなりひら

の所をたちいてたる女なれば。我を思ふ事

のもとよりはすこしもまされるやとおもへ

ば。さもなきよしをうらむる也。女をおとし

てよむにはあらざるべし。是當流の本意也。

六十三
一むかし世心つける女

嫁したる女の事也。

子三人をよびて

誰ともなし。古註三人の名。悉無正躰跡也。

不用之。其名をいひて詮なき事は。實なる事

も無曲。田(ま)して是はあらぬ事也。

百とせに一とせたらぬつくもがみ我をこふら

し面かげにみゆ

此うた九十九になるにはあらず。我心につ

かず。すまじき女なれば。もゝとせに一と

せたらぬほどの思のしたるなるべし。され

どそれをもすてぬ所。業平の人をあはれむ

情ふかきなり。次の段にその心みゆ。

男あはれと思ひてその夜ねにけり

哥にて男女の中をやはらぐる事みえたり。

世中のれいとしておもふをば思ひおもはぬをばおもはぬ物とは

世上の人は我切に思ふをばおもひ。さもおも

もはぬをばおもはぬを。業平は分別なく人

を思ふ心也。業平の性をいへり。此段又誹諧也。源氏物がたりに源内侍などのたぐひ也。

^{六十四}一むかし男女みそかに

吹風に我身をなさば玉すだれひまもとめつゝいるべき物を

風はいづくにもひまある所をもとめ入ものなれば。かくねがひ云也。入べき物をと

とばに切なる心あり。よく思ふべし。まことにあたらしき哥也。

とりとめぬ風には有とも玉すだれたがゆるさ

ばかりまもとむべき

とめがたきかぜのごとくなりとも。ゆる

してこそいらめと。猶をさへてよめる也。

^{六十五}一むかし大やけおぼして

大やけとは清和御門の御事也。おぼしてとは寵愛したまふなり。

色ゆるされたり

三位に叙したまふ事にや。此人は二條后也。傳にも三品の事とみゆ。一禪の御註には。中

らうなどのあやをりものをゆるさるゝと有。

いとこなりける大みやす所

染殿后事也。

ありはらなりけるおとこ

業平なり。

女かたゆるされたる

好色の事也。

さうしにありたまへば

上つばねより本のさうしへ出給ふ事なるべし。

なにのよき事と思ひて

又さとへ出給ふをなにと思ひて。それこそよきとよと思ひて又里へ行也。

つとめて

後朝のやうにきこゆ。然而さとはみえず。早朝にも行たるにや。二條後の御もとへ也。

とのもづかさ

女孀云々。きよめなどする女也。後の父長良卿の許に。女孀のあるべき事如何。大家などへは行かよふにやと云々。

くつはとりて

しのびたる儀にや。

師説又一禪の御説も。つとめてとのもづかさのみるに。くつはとりておくになげいれ

てと侍るを。二條后のかたへ早朝にも業平かよひけるよし侍り。但今案は。二條后にかよひて。つとめて殿上へ業平かへりての事とみゆ。然ば女孀のみる所も大内なれば不審なき物歟。此儀三西御同心也。

身もいたづらになりぬべければ

業平の身をかへり見たる也。前にいへるは后の我身をのたまふ心也。

陰陽師かむなぎよびて

一段心をこして祈る也。はらへのぐなど。

つねのどくなるべし。古註には諸々ありと云々。不用之。

戀せじとみたらし川にせしみそぎ神はうけずもなりにけるかな

猶いやましにこひしければ。神はうけぬにやといふ也。此歌古今には不逢戀に入なり。此物がたりの歌勅撰に入時。心かはるとお

ほし。可受師説。

この御門は

清和御事也。三代實錄云。清和天皇。鷹犬之遊。漁獵之娛。未嘗留意。風姿甚端嚴如神性。定家之本註之。又佛法に歸し給ふ。殊勝の御心也。

女いたぢなきけり

二條后みづから嗟歎の心なり。段々の次第は前後不定。

くらにこめてしほり給ふ

おくふかきやうなる所にや。しほるとはいさめしほる儀也。

あまのかるもにすむし。の我からとねをこそなめ世をばうらみじ

上句は序哥也。心はたゞ我からとねをこそなめ。世をばうらみじといふ也。此我からと云所。尤道の肝心也。我からぞといふ所に

心をかくれば。げに人をも世をもとがと思ふべき事なし。人をうらみざるは和の至極也。和は又世をおさめ身をおさむるの中たち也。此哥を忘れず。人はおもふべきことにや。此女君我心を思返し。世はうらみじとよめる心。尤ありがたき物也。

男は人のくにより

當流の儀は。左遷の事さだめらるといへども。いまだ都にありし時の事也。左遷の所さだまるによりて。人のくにとは云也。古註の儀は不可然。

あはれにうたひける

詠吟なるべし。又郢曲にや。

さりとともと思ふらんこそかなしけれあるにもあらぬ身をしらずして

此哥は業平さりと我にあはんとぞ思ふらん。我はあるにもあらで過ぬる物をとうち

なげく心也。まことにあはれふかささまにや。

いたづらに行てはきぬる物ゆへにみまくほしさにいざなはれつゝ

心は明なり。此哥は人丸がうたといへり。業平只今の我心にあたれば。是をうたひけるにぞ。

水尾御時

清和山城水尾に御隠遁云々。御廟の山今に其所にあり。

^{六十六}一むかしつの國にしる所ありけり

芦屋のさとは業平領知也。

あにちと

業平兄弟。行平。守平。仲平等にや。

なぎさをみれば

其興思やるべし。

なにはづをけさこそみつのうらむに是やこの

よをうみわたる舟

今朝こそみつのうらとは。必朝にはあらず。あらたにみえたるさま也。此哥は業平我兄弟その外しる人をもともなひて。此所にうち出たるさまを。先心によく乗て見侍るべし。さるにあまのを舟のはかなうあるはうかび。あるはなぎさなどにあるをみて。其興あるさまの心にうかべるが。しかも又世をわたることわざのあはれを思ひてよめる也。是や此世をといへるは。たゞいまあらたにみたるさま也。よく吟じて心得べし。猶眺望を本にして。末に觀する心を思ふべし。

これをあはれがりて

^{六十七}かんじたる儀也。

一むかし男せうようしに

前段のつゞき也。せうようはあそび也。

いづみのくにへ

さしていづれの所とはなし。

伊駒の山

おもしろき山也。良暹法師。わたのべの大江のみねにやどりして雲ゐにみゆる伊駒山かなとよめる。其意にて分別すべし。眺望面白也。

たゞひとり

業平なり。

昨日けふ雲の立まひかくろふは花のはやしをうしとなりけり

心は此山の梢の雪。さらに花ぞとみえて面白を。雲のかくすは。花のはやしをねたみて。雲がかくすなりけりといふ儀也。かくろふはかげろふにはあらず。かくすなり。さてきのふけふといふは。時しもこそあれ。これかれせうようする時分にかくせば。あやに

くなる雲のさまやといふ心より。ねたく思てかくすかといふ心出来たるなるべし。これ作意の行所也。狂雲妬佳月。此心歟。
六十八一むかしおといづみのくにへ

前の段と同時に。又一段に書なしたる也。

住吉の郡

住吉の名を三いへる事。所の眺望をいはんためなり。

鴈鳴て菊の花さく秋はあれど春のうみべにすみよしのはま

かりなきてさくのはなさくとは。世間の秋の興也。春のうみべは當季の景也。それにしかもすみよしなれば。おもしろかりし秋にまざるよし也。此鴈菊住よしにてありしにはあらず。惣じての秋の興なるべし。定家卿。けふぞみる春の所の名なりけりすみよしのさとすみよしのはま。しら菊のにほへ

る秋も忘草あふてふさしの春のうらかぜ。
此二首にて當所の景をよく工夫すべき也。
みな人くよます

此哥を感じたる心にてやみたる也。

一むかしおとこかりの使の事

古註の儀。官司に尋ぬるにも不覺悟云々。一條禪閣御説にも其儀別なり。狩の使とは光孝天皇御代にも諸國に勅使をもつて狩せさせ給ふ事あり。仁和元年三月。同二年二月也。今のかりの使も其類なるべし。然とも業（音敷）平伊勢尾張兩國の勅使なりと意得べし。天子もかりしまします事ありき。それより狩の使もをこる也。古註に狩の使の事さまたまの曲説を云り。皆以惡説也。一切不用之。

齋宮なりける人のおや

親とは染殿后。

齋宮繼母也。

齋宮は恬子内親王也。

文德天皇御子なり。一禪御説には。おやとは

惟高みこの母靜子事也。惟高と齋宮恬子と一腹なれば也。しかれども染殿に業平家禮なれば。御詞をくはへらるゝにや。

二日といふ夜

業平下向して二日め也。

われてあはんといふ

わりなくあはんと也。

女もはたあはじとも思へらず

すき心にてあはじと思はぬにはあらず。う

ゐくしくて思惟なき心也。末にみゆ。

つかひざねとある人

使器用と也。

子ひとつ

一時を四刻にわる事あるによりて如此云り。

月のおぼろなる

狩使の例は多分二月三月也。これも春なる

べし。古註五月四日夜と云々。子刻に月あるべからず。不用之。

またなに事もかたらはぬに

實にあひたる事なれども。夢のやうなる心にてかくかけるなり。天川あさ瀬しらなみたどりつゝのうたも。ほどなく別たる儀也。（高階茂緒の子に師尙といへるは。實には業平の息也。齋宮の御腹也。）

我人をやるべきにあらねば

はゞかりやすらひたる心也。

君やこし我や行けんおもほえず夢かうつゝかねてかさめてか

此哥はたゞ君やこし我やゆきけんの二句也。おもほえずといふより下句は。みな上の二句をのべたる也。よくこの心を見侍るべき也。只夢のたゞちのさまなるべし。

かさくらす心の闇にまどひにき夢うつゝとは

一説よひと
今夜さだめよ

此哥上句はたゞ前哥心也。夢ともうつゝともこよひさだめよといへるは。夕さりあひてさだめよと云心也。古今には世人さだめよと云り。此物がたりにも兩説を付侍れども。今夜尤返哥の心すぐれたるにや。こよひあひてさだめよの心也。

くにのかみ

齋宮寮のかみを兼したる人也。

もはら

事也。

かち人のこ

あさき江也。浅き縁といふ心也。

つい松

續松のきえ墨にて書たる也。おりふし有けるにや。

又あふさかの

又あふべきと云心也。業平歸京のみに。相坂をこゆべければ。そへてよめり。

一^七むかしおとこ

前段同時事也。

大よどのわたり

尾州へおもひく道也。

わらはべに

女童也。

みるめかるかたやいづこぞさほさして我にをしへよあまのつり舟

心は齋宮を今一度み奉らん事ををしへよと。彼宮のわらはべなればいへる也。是思ひの切なる心也。小野篁が八十島かけてこぎ出ぬと人にはつげよあまのつり舟といへる哥のたぐひ也。

一^七むかし男伊勢齋宮に

前段の事也。

内の御使

狩の使の次なり。

すきとは

數奇ごと也。あだなる女のさま也。

千早振神のいかきもこえぬべし大宮人のみま
くほしさに

上句は拾遺に人丸が哥也。大宮人は業平を云也。けそうする心也。人をだにあひみば。こえがたきいかきをもこえんと也。

戀しくばきてもみよかしちはやふる神のいさ
むる道ならなくに

上句は明也。神のいさむる道ならずとは。いざなぎいざなみのみことのとわざより。八百万神だちもとめいさめぬ道なればかく云也。

一^七むかし

女とは齋宮也。前段同事也。

大淀の松はつらくもあらなくにうらみてのみ
もかへるなみかな

此哥は彼うらの松のもとなどへ。なにとな
くうちよするなみのかへりては又よせ。よ
せてはかへるが。松はとがもなければ。うら
むるやうにみえたるさまをよめる也。それ
を齋宮のわが身にはとがもなきを。業平の
うらむるよしをなずらへていへるなるべ
し。

七十三
一むかしそこには

めにはみててにはとられぬ月のうちのかつら
のごときゝみにぞ有ける

此哥も万葉のうたにすこしかはれり。例の
伊勢が作物がたりの意趣也。思ふ人を月の
かつらによそへて云也。

七十四
一むかし男

岩ねふみかさなる山はへだてねどあはぬ日お

ほくこひわたるかな

此哥はさしむきてそのとはりあらはなり。
されどそのごとくにては無曲にや侍らん。
今案。あひ思ふ中は山海をへだてゝも。あふ
ならひある物を。我中は岩ねふみかさなる
山もなきに。あはぬ日おほく戀わたる事よ
と云にや。

七十四

一むかしおとこ伊勢國にゐていきてあらんと
我心の我身をひさるて也。いきてあらんと
は伊勢にゆかんとなり。杜詩。

大淀の濱に生てふみるからに心はなぎぬかた
らはねども

上の二句例の序也。心はみるばかりにても
心はなぐさむならひぞ。かたらはずともと。
業平のわりなき心をいさめて。思ひやみね
と云る儀也。

袖ぬれてあまのかりほすわたつうみのみるを

あふにてやまんとやする

是も上三句は序也。心はみるをあふ事にし
て。人はやまんとやする。我心はいかてさて
はやみなんと云心也。

岩間より生るみるめしつれなくばしほひしほ
みちかひも有なん

みるは岩よりあふる物なればかく云り。み
るめしつれなくばとは。みるめはつねにみ
どりにて不變の物也。そのどくわれもつれ
なくて。思ひをする心なくば。人のこゝろは
變じかはるともよかるべきと云儀也。源氏
物がたりに。千尋ともなにかたのまんさ
だめなくみちひるしほのいどけからぬをと
いへるも。人の心をしほのみちひにたとへ
云也。これ業平の思ひをやめといふよし也。
(上脱載)
かひあるはよらむのこゝろ也。

涙にぞぬれつゝしほる世の人のつらき心は袖

のしづくか

此返事はしほのみちひには袖はぬれぬ物
を。世の人のつらき心や。そでのしづくとは
なれるといへる心とぞ。

世にあふ事かたき

一度あひたりし後はつゐにつれなし。齋宮
の數寄心ならぬ所こゝにてみえ侍り。一夜
のちざりにて懷妊ありしもさるべき宿縁に
や。又業平の名譽の事也。神に通じたる證據
也。その末孫は今の高階氏にいたるまで。太
神宮に詣する事もかなはず。そのしるし掲
焉也。すでに今年延徳三年辛亥にいたりて
六百十二年也。

七十六

一むかし二條后まだ春宮御息所と申ける時
陽成院春宮の御時也。貞觀十一年二歳にて
立太子云々。

氏神にまうて給

大原野に春日勸請也。嘉祥三年閑院左府冬嗣の申沙汰歟。爲藤氏守護云々。

まうで給

社參事也。

このゑつかさ

在中將事也。此時不可任中將也。後に極官を記したる歟。此時分右馬頭たるべし。若又兼少將歟。二月上の卯日。十一月中子日。(上説歟)つりの事あり。文徳御時仁壽元年初而祭の事あり。そのまつりは藤氏の後の宮よりをこなはるゝ事あり。

あさな

業平也。

大原やをしほの山もけふこそは神世の事も思ひいづらめ

神代のともとは。天照太神とあまのこやねのみことは。陰陽二神の末。君臣合躰の神に

おはしませば。をしほの山もけふの御まいりをうれしくみるらんと云也。春宮の御母儀なればかく云也。下の心は二條后にあひたてまつりし事を。神世のともとは云り。むかしのとゝいはんとて。神代といふ也。

^{七十七}一むかし田むらのみかどゝ申

文徳天皇御事也。田邑山陵の名也。在所未詳。

女御たかき子

多賀幾子。忠仁公御弟西三條右大臣良相女。文徳の女御也。天安二年十一月逝去云々。

安祥寺

山科にあり。五條后順子建立也。

右大將常行

良相の一男。多賀幾子の兄也。貞觀八年任右大將。此段は貞觀八年已後事なるべし。彼女御天安二年十一月薨之説おぼつかなし。天

安事誤歟。

右馬頭

業平此時爲右馬頭。貞觀七年任。

めはたかひながら

目將也。かひをつくる心なり。

山のみなうつりてけふにあふ事は春の別をとふとなるべし

心は數／＼のさゝげ物の山のごとくなるを。則まことの山もけふのわかれをかなしむやと云心也。哥のさまゆうにみえねど。とけて其故ありとみゆる也。

いまみればよくもあらざりけり

●此詞業平自書とみえたり。

一むかし^{キナ}たかきこと申す女御

上におなじ。貞觀八年の以後の事なるべし。

禪師のみこ

人康親王也。仁明第四御子。母良相妹順子。

常行のいとこ也。貞觀元年五月入道。同十四

年薨。^{四十}二。

いてゝたばかり給

思案し料簡する心也。

たゝなをやはあるべき

此石をいたづらにそのまゝはいかてたてまつるべきの心也。

三條のおほみゆき

清和貞觀八年三月廿三日。右大臣良相の百花亭に行幸の時的事也。おほみゆきとは御行幸也。しかれば常行の大將の任。業平右馬頭任。禪師の御子の出家の年記。此行幸の年。此四を以てみるに。女御の薨貞觀八年已後たるべし。

右馬頭

業平也。

あかねども岩にぞかふる色みえぬ心をみせん

よしのなければ

哥心は人を思ふ心はいろみえぬ物なれば。かくても満足する事はなけれど。我心を岩にかへてみせたてまつるよし也。かふるはあらはしみする心也。此哥詞づかひ其故あり。只今奉る石に書付歟哥に。(符)うつくしひれたるなどは不似合やあらん。

七十九

一むかしうぢのなかにみこむまれ給に

在原氏の中に也。行平の女のはらに。清和の御子貞數親王生れ給也。古註に四條后云々。后號事無所見。不可然云々。

御うぶやに人々うたよみけり

うぶやの三ヶ夜七ヶ夜など祝事也。必うたよむ事あり。

御おほちかたなりけるおきな

生れ給へる御子の御おほち。行平の方なる業平のよめる哥也。

我門に千尋あるかけをうへつれば夏冬たれかくれざるべき

わがゝどは在原氏の一門の事也。ちひろあるかげは仙家の竹也。壽命をいのる心也。竹は空虚にして直に。しかも上下の節ある物なれば。王道の心に叶也。夏冬は寒暑いづれも愁の時を此陰にてわすれんと云心也。猶心の空虚なる事哥人思ふべく哉。

これは貞數のみこ註也。

貞數親王。延喜十三年薨。四十二とみえたり。貞觀十四年誕生なるべし。一條禪閣御勘には。貞觀十六年誕生。延喜十六年薨とみえたり。

一むかしおとろへたる家にと

誰家ともなし。

人のもとへおりてたてまつらすたが方へともなし。業平のまいらする也。

ぬれつゝぞしゐて折つる年の内に春はいくかもあらじとおもへば

雨と藤とをばまへの詞にゆづりてよめる也。やよひのつごもりを春はいくかもといへる。たがうやうなれど。哥は如此大やうなる所おほし。心はやよひのつごもりに雨のふる日。おりて人につかはす事。春をもしたひ花をも愛し。人をも切に思心也。如此事いかにも思慮して吟味すべき也。

^{八十一}一むかし左大臣源融

嵯峨第十二源氏。貞觀十四年八月任左大臣。寛平七薨。此段貞觀十四年已後事なるべし。

家いとおもしろく

河原院さま也。

菊の花うつろひさかりなる

盛に又うつろふもある也。

もみぢのちぐさに

色々なる心也。

かたゐおきな

かたくなしきおきなといふ心也。業平自書詞なるべし。

板じきのしたに

座の末の心也。親王公卿の下なるべし。

人にみなよませはてゝ

卑下のよし也。

しほがまにいつかきにけん朝なぎにつりする

舟は浦によらなん

いつかきにけんとは。こゝにいたれば。則しほがまに侍れば。いつかきにけんと云也。はからざるに來たる由也。さればこゝをしをがまによくなして。つりする舟もこゝによれと云る也。此おとゞしほがまをうつしたる所をよく賞したる也。さればこの殿のおもしろきをよめる哥に相叶也。

みちのくにいきたりけるに

此詞註也。みちの國にいきたるとは。業平にかぎらず。誰人にても。如此おもへるなるべし。殊此うらの名譽也。

一むかしこれたかのみこ

惟喬。文德第一。母名虎女。後號小野宮。

右馬頭

業平也。貞觀七年任。其已後事なるべし。

時代へて久しく成にければ其人の名を忘にけり

伊勢が詞也。官位のいやしきをいたはりて書る也。王舍をいて三代なれど。其ともみえぬ心也。

かりはねんごろにもせて

其様幽玄也。

なぎさの家

なぎさの院の事也。その院の櫻同所也。

世中にたえてさくらのなかりせば春の心はのどけからまし

心はたゞ花に着したる儀也。春きたりてはいつかはとまち。さけば心をつくし。うつろへば雨風を恨み。ちりはてぬればなごりと思ふ心あれば。春のころつゐにのどかならぬにより。絶てなくばのどかならんといふ心也。

又人の哥

有常哥也。此哥上中下みなよむとあれど。心は業平の哥の返哥也。

ちればこそいと櫻はめてたけれうき世になにか久しかるべき

是は業平の花にあまりに着したるを思ひてよめる也。めてたけれとは愛したけれといふ心也。うき世になにか久しかるべきといふ心。尤人の可思所也。

御ともなる人

誰ともなし。

天川といふ所にいたりぬ

尤所おもしろかるべし。

右馬頭おほみきまいる

業平の酌をしたる也。

狩くらし七夕つめにやどからん天川原に我は
きにけり

かりして天川原にきたれば。七夕にやどを
からむと云也。七夕つめは七夕つまなり。

返しえし給はず

早卒に返哥をえし給はぬにや。又業平のう
たをふかくかむじ給心歟。有常は宮の御か
たの人なれば返ししける也。

一とせに一たびさます君までばやどかす人も
あらじと思ふ

一年に一たびさますとは彦星の事也。その

きたらんをまつ所なれば。こゝにやどかす
人あらじと云也。

十一日の月も

おりふし月の入よし也。

あかなくにまだきも月のかくるゝか山のはに
げていれずもあらなん

心は明也。此哥をたゞ月を惜むうたに。山の
はにげてなどいはい。わざとめかしくて。よ
ろしかるまじきにや。こゝにては時の興に
乗するさま。尤めづらしかるべし。

をしなべてみねもたひらになりなゝん山のは
なくば月もいらじを

心は明也。

^{八十三}
一むかし水無瀬に

日ごろへて宮にかへり給ふ。京宮にかへり
給也。

この右馬頭心もとながりて

さま／＼かやうにとどめ給を。いかなるにかと思ふよし也。

枕とて草引むすぶ事もせじ秋の夜とだに憑まれなくに

草引むすぶ事もせじは。今夜いねじと云心也。春の夜のあかぬ心をいはんとて。秋のよとだにたのまれなくにと云り。みじかきを惜むこゝろなり。

時は三月のつごもりに

三月正當三十日。風光別我苦吟身。共君今夜不須睡。未到曉鐘猶是春の心にかなへり。

かくしつゝまうてつかうまつりけるを思のほかに

此段ことにあはれ也。さかりなる花のちりぬる心ちす。よく／＼思べし。惟喬貞觀十四年七月出家。寛平九年二月二十日薨。號小野宮。

ひえの山のふもとなれば

所のさま。雪のふかゝるべきことさもあるべし。以下の詞どもあはれふかし。よく思慮すべし。

御室

おこなひし給ふ室也。

つれ／＼と物かなしくて

かゝる所のさまは。大かたの人なりとも哀なるべし。いはんやこのみこ風流なりし君の世をそむき給心をよく／＼工夫すべし。猶つれ／＼といふうちに。惟喬の一生の事こもるべき也。

忘てはゆめかとぞ思ふ思ひきや雪ふみ分て君をみるとは

此哥は業平このみにいにしへより心をよせ奉りて。水無瀬交野などのかりばのともにもしたがひ奉りて。朝夕なれたてまつり

し事などを思ひ。又位にもつき給ふべき君のかく世をのがれ給心。此うちにもるべし。此哥ことによく沈吟して工夫すべきなりとぞ。

なくくきにける

^{八十四}此時の心切なる儀也。

一むかしおとこ有けり身はいやしなから卑下詞也。

は、なん宮なりける

伊登内親王。桓武皇女。貞觀三年九月薨。

京に宮づかへしければ

業平朝家奉公事。清和御時也。

ひとつ子にさへありければ

業平の兄弟はおほけれど。伊登内親王のためには一子也。

とみの事

俄なる事也。病などの事を告しにや。

老ぬればさらぬわかれの有といへばいよくみまくほしき君哉

さらぬわかれとは辭せぬ別と云儀也。心は明也。

世中にさらぬ別のなくもがなちよもといのる人のこのため

上は明也。千世もといのる人の子のためとは。我上をば云ず。一切の人の子のこゝろをよめる。されば世中にさらぬわかれのなくもがなといへる也。かくいふうちに我心はこもるなるべし。

^{八十五}一むかしおとこありけりわらはよりつかうまつりける君

惟喬の童の御時より業平つかへしなり。これたかのとしに。業平は廿餘ばかりのまさり也。

ことだつとて

祝言也。だつはとばのたすけ也。

思へども身をしわけねばめかれせぬ雪のつも
るぞわがこゝろなる

此思へどもといふ詞よく思ふべし。心はこ
のみこにしたがひ。つねはまうてもし。又し
ばしもあらばやとは思へどもと云心也。さ
れど君につかへてひまなき身は。身をわく
るならひなければ。たちもかへらんと思ふ
に。此雪かきくらしふれば。都へけふかへら
ずともくるしからじと思へば。この雪のつ
もるぞ。わが心をしりてつもるぞとよめる
也。

^{八十六}
一むかしいとわかき男わかき女を

女誰ともなし。

今までに忘ぬ人は世にもあらじをのがさまざ
まとしのへぬれば

此哥は理明也。我は忘ぬよしをいへる也。

あひはなれぬ宮づかへに

いづくの事ともなし。但染殿二條後のあひ
だなるべし。

^{八十七}
一むかし男つのくに

あしやは業平家領なりき。

むかしのうたに

芦のやのなだのーほやきいとまなみつげのを
ぐしもさゝずきにけり

上句は明也。つげのをぐしもさゝずとは。い
やしさものゝいとまなきゆへに。髪をもけ
づる事もなきよし也。万葉に。しがのあまの
めかりしほやきいとまなみつげのをぐしも
とりもみなくに。といふを少とりかへたる
也。新古今に業平のうたとみえたり。此物が
たりにてはたゞむかしのうたと心得べし。
そこのさとをなんよみける

あしやのさとのむかしをよめると也。むか

しの事を註たる也。

こゝをなんあしやのなだといひける

當座云たる詞也。

なま宮づかへしければ

なまじぬ也。時にあはぬ儀也。ゐ中ずみしたるも同心也。

ゑふのすけどもあつまりきにけり

誰ともなし。兵衛等なる人なるべし。

此おとこのこのかみも

行平也。兵衛督なる時なるべし。

いざこの山のかみにありといふ

いざ此山也。いざとはさそふ詞也。

その瀧物よりとなり

瀧をほめたる也。萬物に勝たるよし也。源氏

物がたりにも此類あり。

ながさ二十丈ひろさ五丈ばかりなる石のおもてに

彼瀧のさまたさに如此とぞ。

わらうだ

圓座なり。

かのえふのかみ先よむ

行平事也。

我世をばけふかあすかと待かひの涙の瀧といづれたかけん

此哥は在原氏の時代にあはずして。都にもひまありて。かく田舎わたらひする事を思てよめるなり。臣下非王命不越堺の心也。けふかあすかとは。必命のかぎりのみにはあらず。我世はやたのむかたなきを。けふかあすかとまつかひと云心也。待かひは待あひだ也。下句は世のうき涙を瀧といづれぞと云る心也。

あるじ次によむ

あしやのさとのあるじ業平也。

ぬきみだる人こそあるらしゝら玉のまなくも
ちるか袖のせばきに

心は此たきのしら玉をみだるやうにこぼれ
おつるをみて。ぬきみだる人こそあるらし
といふ也。たとへば水精などのいとにぬき
たるを。いとをぬきてみだしたるやうなれ
ばかくいへり。下句はかゝる玉のほどなき
そてにおつる事よと卑下してよめる心也。
哥のさまはかはれど。これも述懐のこゝろ
也。

かたへの人わらふとにや

入興の儀也。

かへりくるみち遠く

あしやより布引への間三里ばかり也。

うせにし宮内卿もちよしが家のまへ

其家此道にあるべし。もちよし。系圖不分
明。所用はなけれど。餘情にはなり侍るべ

し。

やどりのかたをみやれば

あしのやのさとをみる也。此時興思ひやる
べし。

はるゝ夜の星か川べのほたるかも我すむかた
にあまのたく火か

心はあしやのさとのいさり火數もなくみえ
て。所のさまもおもしろき當意をよめり。は
るゝ夜のほしかといへる。珍重なる五文字
也。いさり火とはみれども。みるめの奇異な
る所をほめんとて。星か川べのほたるか。あ
まのたく火かなどうたがひ云る也。古今に。
秋風の吹上にたてるしらぎくは花かあらぬ
か浪のよするか。などいへる心におなじ。

家にかへりきぬ

あしやの家也。

つとめて

早朝也。

女かたより

業平の家の女中より也。

たかつきにもりて

高土器と書る也。むかしはつちにてつくり

しにや。

わたつうみのかざしにさすといはふも、君が

ためにはあしまざりけり

わたつうみとは海神の事也。みるを海神のかざしといへる。あもしろきにや。いはふとは海神の愛するやうのころ也。哥の心は海神の愛し用る藻なれど。今日の君がためには惜まずよせたるよし也。君とは行平其外の客來也。

あまれりやたらずや

伊勢が詞也。批判する詞也。少はさし過たるさまなりといふ心にや。あしやなればる中

人とかけり。

^{八十六}一むかしいとわかきにはあらぬ

業平の友だち也。

それが中にひとり

業平の事也。

大かたは月をもめてじこれぞこのつもれば人

の老と成もの

此五文字先は心得がたきにや。大概などいふ心歟。しゐていはゞ。十の物を七八など云儀か。我身を思ひとりたる心にあたる也。月をもめてじとは。當座月にむかへば云り。なににても物一にどんして。一身をわするゝ心のをこたりのつもれば。如此老となる所を思ひかへして。月をもめてじとよめる也。此哥などは業平のうたにはすぐれたるにや。古今にもみゆ。是をよく沈吟せば。人々の教戒のはしたるべしとぞ。

八十九
一むかしいやしからぬおとこ

業平也。

我よりはまさりたる人を

誰ともなし。やんごとなき人なるべし。

人しれず我戀しなばあぢきなくいづれの神になき名おふせん

心はその人を思ふとも。人しれずしてこひしなば。わが思ふ人はいづれのかみのとがめに死たるとかいはん。うちなげき思ふ心也。およばぬこひちにいたつらに心をくだき。つゐにむなしくならんあとまでを思ふ心。尤あはれあさからず。

九十
一むかしつれなき人を思ひわたるとは

業平の心也。

櫻花けふこそかくはにほふらめあなたのみがたあすのよのこと

心はあひがたき人のあひなんといふをうれ

しながら。猶たのみがたき心をよめり。前の詞にて心あらはなり。

といふ心ばへもあるべし

上の哥のこゝろを釋たる伊勢が詞也。

九十一
一むかし月日のゆくをさへ

此詞に物思ふ心みえたり。さへといふ詞心あるべし。時節のうつるもかなしかるべし。三月も盡にていと切なるべし。

惜めども春の限のけふの日の夕ぐれにさへ成にけるかな

哥の心は明也。夕ぐれにさへと云る所。切に思ふべし。物思ふ身のうへに。春さへくれゆく心をふかく思慮すべし。

九十二
一むかしこひしさに

あしべこぐたなゝしを舟いくそたび行かへるらむしる人もなみ

たなゝしを舟とはちいさき舟也。あしべこ

ぐは舟のかくれてみえぬなり。心は我思ふ人のもとへゆきてはかへり／＼すれども。人もしらぬを。あしのなかにこゝ舟のみえぬによそへて云る也。

^{九十三}一むかしおとこ身はいやしくて

業平卑下也。

になき人とは

やむごとなき人なり。

すこしたのみぬべきさまにや

猶心づくしなるべきほど也。

あふなく／＼思ひはすべしなぞへなくたかきい

やしきくるしかりけり

此五文字其心得がたし。たとへば源氏物がたりにおうなく／＼といふに同じ。ねんごろなる儀也。又まことになどいふ心也。なぞへなくとは平等の心なり。なぞへに物などをくはかたさがりなるを。すぐにをけば平等

になるやうの事也。惣而の心はたかきもいやしきも。戀ぢのかなしみはおなじくるしさなるよしをよめる也。又なぞへなくとはなずらへなくといふ儀也。是もひとしき心也。定家之勘也。

むかしもかゝる事

今かくあればむかしもと註せり。

^{九十四}一むかしおとこ有けり

其おとこすまず。業平女を離別したる也。

のちにおとこありけれど

たれともなし。

ろうして

漏の心也。つゝまずもらす也。

秋の夜は春日わするゝ物なれやかすみ霧やちへまざるらん

秋の夜とは今のおとこを云り。此時秋なれば當代のおとこをいふ心也。春は過さりた

る故に。もとの男をたとへ云也。霞は春の物。霧は秋のものなれば。我より今のおとこを思ふやと恨み云也。

千々の秋ひとつの春にむかはめや紅葉も花もともにこそちれ

心は今のおとこ千人をあはせても。業平一人にはおよばじと云也。先上句をかく云て。下の句の心はかくはおもへども。おとこのころのいづれもたのまれぬ事をいはむとて。もみぢも花もともにこそちれと云り。又世間につるに此理あるところをかくよめるおもしろくや。心をやすんずる儀。よく思慮すべし。

^{九十五}一むかし二條后につかうまつるおとこ

業平は忠仁公に家禮云々。染殿にも二條后にもつかへけるなるべし。

おもひつめたる事

此ほど又久しく思のつもりたるなるべし。彦星に戀はまさりぬ天川へだつる關を今はやめてよ

七夕はまれのちぎりなれど。そのよになれば。かならずさはりなきを思ひて。ひこぼしに戀はまさりぬと。物ごしにてあひがたきをうらむる也。

^{九十六}一むかしおとこに

女身にかさ一二いできにけり。六月のころなれば。溫氣の時分など。身もくるしく時節もえんならぬ心也。心下の詞にみゆ。身にかさひとつふたつといへるは。契をいひのべんの心にや。古註太不可然。

その人のもとへいなむす

業平のかたへゆかんといふ事のきこえたる也。

此女のせうと

たれともなし。

かへての初紅葉

初秋の比。折ふしありけるなるべし。

秋かけていひしなからもあらなくに木葉ふりしくえにこそ有けれ

此哥は前の詞に秋かぜ吹たちなるときあはんといひし。我ことのはのおもはずさもなきをなげきて。木葉ふりしくえにこそとよめり。えには江と縁とをかねたり。木葉のたまる江はあさくなるものなれば。あさきえんといへる也。

とかきをきてゝ

前の詞にをこせたりとあれど。そのときつかはしたるにはあらず。

けふまではしらず

業平のしらぬ也。行末もしらぬよし也。

あまのさかてをうちてゝ

古註に種々儀あり。不用之。一禪の御説には。彦火々出見尊の兄の尊に釣はりをさかてにかへすとて。のろくしき詞をのたまへるを引たまへり。さもありぬべし。當流のこゝろは。海人のかづきするときは。さかさまに入とて。手にてなみをうちて入也。そのとわざくるしき物なるを。わが思によそへてうらむる儀也。詞に出して切にうらむるを。のろうといひなせり。是作物がたりの作法也。此物がたりはいかにも幽玄にみなすべき事とぞ。しかれば物こはいへる事をも。やはらかにいふべき事なるべし。

むくつけき事

業平身づから思ひいふ也。ふかくうらむる心よりかく思ふ也。

人ののろひごととはゝ

業平のいへる也。うらみの切なる故にさま

く思ふ也。女の性はよはきものなれば。か
ゝるふかさうらみには。なびきおそるゝと
やあらんと思ふ心にや。

^{九十七}一むかし堀川のおほいまうち君

昭宣公基經。貞觀十四年八月廿一日右大臣

左大將。卅七。

四十賀九條家にて

堀川左大臣家九條にもあるにや。又所々う
つり住給けるにや。四十賀は貞觀十七年也。
中將なりけるおきな

業平は元慶元任中將也。此賀時は未可任中
將也。所詮業平の極官なれば後にかける詞
也。此類おほし。

櫻花ちりかひくもれ老らくのこんといふなる
みちまがふかに

ちりかひくもれとは。かきくもれといふ心
なり。老のくるみちをいとふ心也。まがふか

にといふ。か文字を賀のうたによみ入たる
を。俊成定家その興あるよしをいへり。是は
自然のとはり也。

^{九十八}一むかしおほき大いまうちぎみ

忠仁公。天安元年二月十九日太政大臣。^{五十}一。

つかふまつるおとこ

業平也。

梅のつくり枝に

おりふしつくり枝ありしにや。烏柴の心也。
我たのむ君が爲にとおる花は時しもわかぬ物
にぞありける

時しもわかぬとはつくり花の梅なれば也。
またさじをたて入てよめり。忠仁公をいは
ふ故に。君がためにおれば。はなもときはに
なれるぞといふ也。今さける花をも。いはひ
によせてはかくいふべき也。

^{九十九}一むかし右近の馬場のひありの日

一條大宮より東は左近。にしは右近。

ひをりのひ

僻案抄のごとし。五日は左近のひをり。六日は右近のひをり也。褐を引折てきる故云々。

又古今集にも此事有。

たてたりける車

むかしひをりのひ。人々見物しける也。

みずもあらずみもせぬ人のこひしくばあやなくけふや詠くらさん

一二句はたゞほのかにみたる心也。惣のころはかくはづかにみそめたる人わすれがたくば。あぢきなくやながめくらさむと云儀也。

しるしらぬなにかあやなくわきていはん思ひのみこそしるべなりけれ

しるもしらぬとも。なにかいはん。思ひこそしるべよといふ也。業平の思ふころふ

かくば。あふ事のためよりとはなるべき心也。

しるしらぬとは領掌不領掌の心也。あやなくとは。かひなき事をあぢきなくなど云る心也。

のちはたれとしりにけり

後にあひたるよし也。

一むかし男後涼殿のはざまをわたりければはざまとは御殿のあひだ也。

やむごなき人とは

誰ともなし。

忘草をしのぶ草とやいふとて

業平の通まいる所にや。とひたる心は。業平の通しあたりをはや忘ぬらん。されどもなをしのぶよしにてしたふとぞ。いつはりてこたへむずらんといふ心なり。

忘草おふるのべとはみるらめどこはしのぶなり後もたのまん

心はそなたには我わするゝとやみたまふらん。我はこひしく思へば。此後もたのまむと云心也。忍草わすれ草は別の物なれども。又一草をもしのぶともわすれともいふと云り。この哥はその心によるにや。

^{百一}
一むかし左兵衛督なりける
まさちか

良近。貞觀十三正月右中弁。十六年轉左。系圖には不分明人也。

その日はあるじまうけしけり

あるじは行平也。

あやしき藤のはな

奇異なる藤と云儀也。

花のしなひ三尺六寸なり

詞にあやしきふじのはなとかけるうへは。

三尺六寸ばかりありけるなるべし。ありがたき事なれば也。

あるじのはらから

業平の事也。あるじしたまふとは。一献などの事也。

もとより哥事はしらざりければ

卑下也。

さく花の下にかくるゝ人をおほみ有しにまさる藤のかげかも

さく花のしたにかくるゝとは。忠仁公のかげをたのむ人おほき心也。ありしにまさる藤のかげとは。三尺六寸の藤なれば。大かたみし藤にまさる心也。又忠仁公の榮花の先祖にもこえたる心也。下には風の心もありぬべしとぞ。

などかくしもよむと

^{百二}
その座の人々のとひける也。

一むかしおとこ有けりうたはよまざりけれど世中を思しりたりけり

哥よまぬとは卑下也。此詞をみるに。うたを
よまむ人は世のとはりを思ひしるべき事と
みゆ。哥よまん人肝要とまもるべき心也。

あてなる女の

伊勢齋宮也。

しどくなりければ

親族也。一夜ちぎりありて。子もありしな
なれば親族と云り。あらはにははゞかりて
かく書り。

そむくとて雲にはのらぬ物なれど世のうき事
ぞよそになるてふ

心はかならず世をそむくとて。雲風にのる
事はなけれども。のがるとなれば。うき事は
よそになると云儀也。心は齋宮の世をのが
れ給心に。うらやむやうの心也。

齋宮の宮也

伊勢が詞也。

百三
一むかしおとこまめに

實要とは重ていへる詞也。業平の事也。

深草のみかど

仁明帝に業平つかへし也。

心あやまりやしたりけん

上詞に實要といへるによりて此詞有。

みこだちの

何のみこにてもなるべし。

ねぬるよの夢をはかなみまどろめばいやはか
なにもなりまさる哉

ねぬる夜のゆめとは。ほのかにあひみし事
なり。あかぬわかれのなごりをしたひて。も
しまとの夢にやみえむとうちまどろめる。
わがとわざのはかなきを。いやはかなにも
なりまさるかなといへる也。

さるうたのきたなげさよ

卑下也。

^{百四}一むかしとなる事なくて

さして世をのがるべきふしなくて。あまに
なり給よし也。

世をうみのあまとし人をみるからにめくはせ
よともたのまるゝ哉

よをうみのあまとは。世をうく思ひて。あま
になれる人の事也。めは海にある物なれば。
めくはせよと云也。目をたがひに見あはせ
て。心かよはす事也、

^{百五}一むかしおとこかくてはしぬべしと

白露はけなげなゝん消ずとて玉にぬくべき
人もあらじを

さえば消よとなり。玉にぬく人もあらじと
は。露は玉にゝたる物也。玉をばつらぬきも
つ物なれば。それによそへて愛し用る人も
あらじと。業平をいひはなつ心也。つゆをな
りひらによそへて云る也。

なめしと

びんなき事也。やむごとなき人を思かくる
儀也。

^{百六}一むかしおとこみこだちのせうえうし給所

立田川よりまへなるべし。みこだち。誰とも
なし。

千早振神代もさかず立田川から紅に水くぐる
とは

此哥はたつた川に紅葉のちりしきて。川の
おもてもみえぬばかりなるに。水はたゞ紅
をくぐるやうにみえたる。當意即妙のさま
をほめて。神世にもかゝる事はさかずとい
へる也。神代は神通自在の世なれど。其代に
もさかぬよし也。此哥業平のうたには心詞
かけたる所なくいへる哥也。かやうのはま
れなるべし。

^{百七}一むかしあてなるおとこ

業平也。おとこのもととなる人とは。なりひらのいもうと也。初草の哥よみし女也。

敏行

名虎女の腹の子也。貞觀九少内記。十二年任大。

文もおさくしからず

いまだ手のよからぬ也。

とばもいひしらず

艷書など書事のういゝしき也。

哥はよまざりければ

よくもよまぬなるべし。

あんをかきて

業平の妹の事をねんごろに思ふよしみえたり。初草の段の心こゝにみえ侍るべし。

つれづれのながめにまさる涙川そてのみひちてあふよしもなし

つれづれのながめとは。しづかに心のうつ

るかたもなく。女を思ひぬたるおりふしのながめ也。うたの心は明也。

あさみこそ袖はひづらめ涙川身さへながるとさかば頼まん

男ふみをこせたり

此詞又こと時の事也。敏行なり。此詞より又一段とみえたるよし。堯孝法印もいへるとぞ。

えて後の事也

女を我物にしての心也。そのうちおとこのやるふみなり。

數ゝに思ひ思はずとひがたみ身をしる雨はふりぞまされる

かずゝにとは。思ひもおもはずもと云詞のおこりなり。心はまことには思ひもせよ。おもはでもあれ。はやとひがたくなれば。我身をしる雨はふりまさるぞと。今ふる雨を

かくよみなせり。涙にはあらず。

しとゞにぬれて

いたうぬるゝ心也。禪閣御説。衣の身につく

ほどぬるゝ事也云々。

^{百八}一むかし女

誰ともなし。

風吹ばとはに浪こす岩なれや我衣手のかはく
ときなき

とはに浪こすとは常住と云心也。とはのは
にぐるべし。うたのこゝろは。風吹ば常にな
みこす岩のごとく。我袖のかはかぬよし也。

つねのことぐさに

女のつねのこと草のやうにいふをさゝて
也。男は業平也。

よひごとに蛙のあまたなくなたには水こそまさ
れ雨はふらねど

よひごとにとは。たゞよごとにと云心也。か

^{百九}也。

一むかしおとこともだちの人をうしなへる
業平のともだちのもとへなり。人をうしな
ふとは。女などにをくれたる也。

花よりも人こそあだに成にけれいづれをささ
にこひんとかみし

心は花も人もあだなる物なれど。その人獨
はかなくうせたるを哀て云る也。そのぬし
ありし時は。花をささに戀んとも。人をささ

にこひんともやはかみし。思ひのほかの事
にもこそなどとぶらひ云心也。

^{百十一}
一むかしおとこみそかに

思あまりいてにし玉の有ならん夜ふかくみえ
ば玉むすびせよ

出にし玉のあるならむとは。夢にみえたる
よしを女のいへばかく云也。夢は玉しぬの
かよふなり。わが君を思玉しぬのみゆるに
てぞあるらむ。その玉を君むすびとめよと
云也。しらぬ玉しぬのみえたるときは。玉む
すびとて。まじなふ事あるならひを思てよ
める也。

^{百十一}
一むかし男やむごとなき

誰ともなし。此女のもとに。なくなりたる人
の事をとぶらふよしにて。わが思をよみあ
らはしたり。

いにしへはありもやしけん今ぞしるまだみぬ

人をこふる物とは

まだみぬ人をこふるはわりなき事也。いに
しへはさやうの事もやありけんとは。今の
世には我のみかゝるわりなき思ひをこそす
れといひやれる心也。

下ひものしるしとするもとけなくにかゝるか
どはこひずぞ有べき

したひもは人にこひらるゝ時とくる物也。
されば其しるしとするひもゝとけねば。そ
なたのいふどくは。こひしとおもはぬにて
こそあれと云る也。

戀しとはさらにもいはじ下ひものとけんを人
はそれとしらなん

此返しは女のうたにいふどくには。こひし
からねばこそひもはとけず侍れといふを。
とかくさわがで。女の心にうちまかせて。し
たひもとけばこひしとしれと云る也。かく

いふ心は。我思ひ切なれば。かならずひもと
けむと思ふ心ある故也。

^{百十二}
一むかしおとこねんごろに

とさまになるとは。他人に心かはす也。

すまのあまのしほやく煙風をいたみおもはぬ
かたにたなびきにけり

心はと人になびくを。しほやくけぶりにた
とへ云也。此哥又餘情ふかくやさしき哥也。

^{百十三}
ことばづかひなどよく思ふべしとぞ。
一むかしおとこやもめにてゐて

業平を思ひすてたる女のありし時なるべ
し。

ながゝらぬ命のほどにわするゝはいかにみじ
かき心なるらん

心は明也。此哥にとりて殊勝の心あり。その
故は一首のうちにながからぬといひて。又
みじかきなど。長短の字をとり入たらば。い

やしくなるべきを。さもきこえず。きはめて
幽玄のすがたなれば。誠上手のことわざと
みゆる也。かやうのこゝろをよき哥をよま
ん時は思ふべきにや侍らん。

^{百十四}
一むかし仁和のみかど

業平没後事也。仁和二年芹川行幸御狩也。定
家卿奥書に此段の事みえたり。在原氏の事
なれば書加たる也。伊勢が書加たる段也。仁
和御門光孝天皇仁明第七御子也。芹川行幸
は嵯峨天皇行幸例也。さがの山みゆきたえ
にし芹川の哥も。仁和二年行幸時の哥也。作
者行平也。

さる事にげなく

行平此時六十九歳なれば也。

もとつきにけること

鷹飼のみにちに達たる人と也。

袂にかきつけゝる

翁さび人などがめそかり衣けふばかりとぞたづもなくなる

言はおきなさびとは老てさればみたるやうの事也。行平けふの出たちわかやかなるを云り。されば人などがめそ。かくありがたき行幸のうれしきにより。けふばかりはかやうにいでたつよし也。たづはかりぎぬにされる故也。

御けしきあしかりけり

此時みかど五十七歳にましますによりて也。仁和二年也。萬事時のけしきをはからひ思惟すべき事也。風雅の道のみならず。交會などに用心すべし。殊勝のをしへなり。ある註には。此哥を滋春がけふはかりとぞと吟じかへて。御氣色なをりたり。滋春高名の事なれば。此物がたり中に記すと云々。此事大不可然。定家卿も其さたなし。禪閣も御

^{百十五}許容にあらざる説也。
一むかしみちのくにゝて

業平流罪の時の事なるべし。前の一段は業平没後の事を書加たる。又おもしろし。

男女すみけり

夫婦なりし事也。

をきのゐて身をやくよりもかなしきは都しまへのわかれけり

心。此みやこじまを人のわかれてのぼるかなしみは。をきのゐて身をやくよりもまされりといふ也。これらもつくり物がたりの儀也。古今には小町が哥也。

^{百十六}一むかしおとこすゑろに

京に思ふ人とは女のかたへなるべし。

浪まよりみゆるこじまのはまひさし久しく成ぬ君にあひみて

はまひさしとは。たかきまさごのくづれた

るなどが。ひさしのむくなるよしとぞ。禪閣御説。はまひさしとは。とまひさしなどのむくなるべしと也。師説は眞砂の儀也。但人の所存にしたがふべし。哥の心は明也。

なに事もみなよくなりにつけり

文に書たる詞なるべし。業平の身になに事もなく。くるしからぬよしをいひつかはす心也。やすく思へとの心にや。馬上相逢無紙筆。憑君傳語報平安などの心なるべし。

^{百十七}一むかしみかどすみよしに

文徳天皇天安元行幸也云々。此事國史等に不記云々。但此物語に記たるうへは其分なるべし。源氏物語などにも如此儀を禪閣たて給へり。此事新古今にも撰入られたり。此物語を證據に入也。

我みても久しく成ぬすみよしのさしのひめ松いく世へぬらん

心は明也。作者は業平也。ひめ松はたゞ松と云儀也。異説ありといへども信用にたらずとぞ。とはりのつかぬや可然侍らん。

けぎやうし給て

現形也。けぎやうとよむべし。

むつましと君は白波水がきの久しき世よりいはひそめてさ

むつましと君はしらずやいふ心也。猶しるべき物をと云心也。みづがきはひさしきと云枕詞なり。久世より祝そめてさとは。當社垂跡の御事也。此哥猶可受師説。

^{百十八}一むかしおとこわするゝ心もなしまいりこむ

と

業平のかたより女のかたへかく云也。業平よりかみなる人にや。

玉かづらはふ木あまたに成ぬればたえぬ心のうれしげもなし

玉かづらは草のかづら也。玉はそへ字也。はふ木あまたとは。人の心のこれかれにまとはる儀也。されば我にたえぬもうれしからずと云也。絶ぬはかづらのえん字也。

^{百十九}一むかし女のあだなる男とは
業平事也。

形見こそ今はあだなれこれなくばわするゝ時
もあらまし物を

心は明也。あたなれは仇云々。古今集にはあ
たをにごりてよめる也。定家卿儀也。彼卿哥
に。形見こそあだの大野の萩の露うつろふ
いろはいふかひもなし。所詮此物語にもに
ごりてよむべき也。

^{百二十}一むかし男女のまだよへず

未嫁人事也。業平の心をかけたる女なるべ
し。

人のもとへ物さこえてのち

此女のと人に契事有て後に。業平のかたよ
りつかはす哥也。

あふみなるつくまのまつりとくせなんつれな
き人のなべのかずみん

此故事は人のあまねくしることなれば。書
付るにおよばず。心はわれにつれなくみゆ
れど。人には心かはすめれば。その人の數も
みゆべしと云心也。

^{百二十一}一むかしちとこ梅壺より人のまかり出るとは
誰にても業平の友なるべし。

鶯の花をぬふてふかさもがなぬるめる人にさ
せてかへさん

花をぬふてふとは。催馬樂に。青柳をかたい
とによりて鶯のぬふてふかさは梅の花が
さ。といふをとりてよめる也。梅つぼよりと
いふに付て云り。ぬるめるはぬるゝ也。

鶯の花をぬふてふかさはいな思ひをつけよほ

してかへさん

梅の花笠よりも心ざしをつけよといふ心なり。世中はたゞ心ざし肝要の儀也。ほしてかへさんとは。前のぬるゝといふ詞につきて云り。心はそのころざしをつけば。我もそれをほうぜんと云心也。

^{百三十二}一むかしおとこ

山城のゐでの玉水手にむすびたのみしかひもなきよなりけり

たのみしかひもなき世なりとは。下帶の物がたりにも。約を變じたる事ありと云々。

^{百三十三}一むかし男深草にすみける女

誰ともなし。古註に二條后といへり。清和崩御後事云々。大なるあやまりの説也。不可用之。清和御門は業平逝去後までましませり。年をへて住こし里をいてゝいなばいと深草野とや成なん

心は業平いまはと立出ぬれど。猶女をあはれむよし也。

野とならばうづらとなりて鳴をらんかりにだにやは君がこざらん

此哥は業平あきがたになりてたちいづるを。うらむる心なくして。かりにもたちやよらむと云る心。尤あはれふかし。此かりにだにを狩といふは不用之。

めてゝゆかんと思ふ心なくなりけり

^{百三十四}哥は男女の中を和ぐるの理なり。

^{百三十五}一むかしおとこいかなりける事を

思ふ事いはでぞたゞにやみぬべき我とひとしさひとしなれば

しゐて理をつけば口惜かるべし。古註に種々説あり。當流一切不用之。儀をいはざる所。肝心の心あるべし。

^{百三十五}一むかしおとこわづらひて

辭世の時なるべし。

つゝるに行道とはかねてきゝしかどきのふけふ
とはおもはざりしを

此哥ある説に。きのふまではけふとおもは
ざりしをといひて。心はあまりて詞はたら
ざるとはりをつけ侍る如何。當流の心はう
ちまかせてきのふけふとおもはざりしを
と。世間のことはりをよめるときゝ侍りし。

〔以下慶長印本奥書〕

此一冊可書進之由。蒙 勅定之時。子細看

之。談宗祇法師。所々令添削畢。

夢菴子

右抄者肖柏老人所傳之作也。仍號之肖聞抄。

依 後土御門院仰手自書進之云々。爾降世皆

弄之。猶元凱注左氏也。彼翁者予祖之餘流廣

弟也。今爲校讎。亦有故者乎。

新刊之時
作三策了。

慶長巳酉季春上浣

也足叟素然

〔右伊勢物語肖聞抄以慶長印本校合〕

續群書類從卷第五百十五

物語部十五

伊勢物語惟清抄

伊勢物語者在原中將之所作也。或以爲伊勢之作也。世存兩說。未決可否。蓋所詠中將。而所述伊勢乎。大率雖賦好色事。玩味之則有含仁者。有懷義者。有存禮者。有感時憂世者。有詠飛花落葉而觀無常者。其歸不一耳。愚見于前。宵聞于後。釋而辨之者既已詳矣。古來詞人歌士唯以情艷論之。猶如唐王建宮詞之類。是可忍乎。今玆大永二載夏五月五日。逍遙老人講此書。以篋鞍後學矣。鉅鄉高客戶履日滿。如腐儒亦齒其末席。以聞得未曾聞。厥談塵之妙。言淺而義深。理

近而旨遠。至若錦其心綉其口。以含蓄不盡之意於言外。則非義精仁熟。輒難貫通。烏虜千載之下。雖曰令中將而復生。亦靡歛衽間言而可尙矣。予雖不敏。其盈耳者書十之八九。暇日屢就老人以糾謬。所謂貧兒慕富也。吁予已耄矣。豈秉燭夜行乎。所希者末子弟讀之。而可知倭歌之爲道不下周詩也。苟有知則必曰。孔孟業平易地皆然。不亦悅乎。林鐘庚寅。金紫光祿大夫拾遺宣賢自序。

伊勢物語惟清抄上

凡書を講ずるに。先題號のこゝろを述る事さ
だまれる義へ。是を伊勢物語と號する事。京極
黃門の奥書に見えたり。彼卿の奥書にいはいはく。
抑伊勢物語根源。古人説不同。或曰在原中將自
記云々。因茲有謙退比興之詞等。

謙退とはかたいおきなといひ。又哥の詞し
らざりけんはなどいひ。卑下してかけるた
ぐひをいふ。比興とはいさゝか興じて誹諧
のさまにいへるたぐひをいふ。賦比興の心
にはあらず。

又はいはく。伊勢が筆作也。

或云。生年十三。幼にして書之。

似彼家集文牋。是故號伊勢物語。

伊勢が家の集に。いづれの御時にか有けん。
おほ宮す所と聞えける御つぼねに。大和に
おやありける人さふらひけりと書けり。此
物語におぼめいてかける事。筆勢彼家集の

文牋に似たりとぞ。

以此兩説案之。更難決之。心中秘密。身上興言。
他人推而難注之。可謂其自書歟。

心中秘密とはみそか事をいふ。身上興言と
は興じてたはぶれいへる事をいふ。

但疑万葉古風之中。多載撰集之歌。

此物語に万葉の哥代々撰集の哥をのす。
仁和聖日之間。粗記臨幸之儀。

せり川行幸の事をのす。是は業平没してよ
りはるかに後の事へ。

此等事又不審。伊勢家集其端文牋偏以同之。是
又見先達舊記。庶幾其牋歟。兩不知之。

先達舊記とは。伊勢が舊記の文法を後人が
見て。其様をこひねがふて此物語牋にかけ
る歟。

加之此物語名字非彼筆者何稱伊勢乎。或説云。
爲狩使下向伊勢。仍有此名。其説又難信。始則

戴南京春日之詞。

かすがの里にしるよしして。かりにいにけりとかけるをいふ。

次又注西對夜月之思。

月やあらね春やむかしの哥をいふ。

富士山之雪。武藏野之煙。凡非伊勢國事。

此事はならひあり。前途をとげんにや。

多以爲此物語之肝心。仍兩說有不審。古事只仰而可信。又或說後人以狩使改爲此草子之端。爲叶伊勢物語之道理也。件本狼籍奇恠者也。伊行所爲也。不用之。

伊行は世尊寺曩祖也。建禮門院右京大夫父也。

今師說に用は。伊勢がかくといふ儀也。古き說に伊勢の二字にあとこ女といふ字訓あり。男女の物語なれば。伊勢物語と號するといへり。信用にたらず。又此物語に十卷の注

有。又知顯集とて經信卿の注也といへども。いづれもひとつとしてまゝ有となし。此等の注をば後成恩寺皆能破してをき給へり。

むかしおとこ

昔とは大古をもいふ。近古をもいへり。又今日はあすのむかしになり。きのふはけふのむかしになる。今の事をもむかしともかくべき也。源氏にいづれの御時にかと書も。昔とをかん爲也。尙書に古者伏羲氏之王天下也とかくも。古といふを上にかうぶらしめたり。男とは業平也。むかし男と古注につけて。業平をむかし男といふなりといへる儀はわろし。昔とよみさりて男とよむべし。うゐかうぶり

禪閣はうゐかうぶりは叙爵の事とあそばせり。しかれども師說にはたゞ元服の事とす。

人の出身のはじめ。俗躰の定る所。元服の初より終焉のゆふべまでの事を此物語にかける也。

ならの京春日のさとに

うゐかうぶりして。ならの京春日のさとに狩するとつゞけて見るはわろし。うゐかうぶりははじめのと。かりするは其後いつにも有べし。ならの京は平城天皇もおはします。業平は平城の御孫。

しるよしゝてとは

業平の知行のありし。ならの京ははやこの京へうつされて舊都になれども。いまだ業平の舊宅もあり。領知もあり。程に。狩しに行てあそぶ。

そのさといとなまめいたる

なまめくとは最媚とかけり。うつくしくゆうげんなる躰。はらから。おとゝひの事

也。古註に在常が女兄弟有事をいふと也。用べからず。

このおとこかいを見たり

かいを見とは源氏におほき詞。日本紀より出たり。かきのひまよりのぞき見たる心。是はのぞくとは見べからず。物ごしにほのかに見たる心なるべし。

はしたなくて

よはき物につよくあたる事などをはしたなしといふ。此古郷のあれたる處に。かゝるさやしやなる女の有は。似合ざるやうなるをいへり。

こゝちまどひにけり

はや心をかけたるをいふ。

かりぎぬのすそをきりて

旅の事なり。又馬上の事なれば。かりぎぬのすそを切て。哥をかきてやるなり。又は心ざ

しのせつなるを見せん爲へ。

しのぶずりのかりぎぬ

指符友

もとはかり装束にすりかりぎぬを賞して用

ひし事へ。

かすが野の

女をむらさきにたとへたり。是は序哥也。しのぶのみだれかぎりしられずといはんとて。春日野のわかむらさきのすり衣とはいへる也。此女をほのかに見てしより。我みだれたる心のかぎりもしられずといへり。

となん

かくよみてやるとへ。

をひつきて

女の方より哥の返事をやる事をいふ。追付てとはをはへてやるにはあらず。狩の事なれば。業平の行所を尋てやるをいふへ。

ついでおもしろき事ともや

融公哥を其まゝ返哥に用んは。ついて面白きとおもへるか。

みちのくの

古今に河原の大臣の哥として入たり。融公の作意は。誰ゆへにみだれそめにし我にてもあらず。そなたゆへにこそみだれそめぬれといふ心へ。其心を今女の返事に用ればあはず。さる程に心を用ひかへて。今の返哥にはするへ。そなたにしのぶのみだれかぎりしられずといへるは。誰ゆへにてあるらん。我ならなくにとは。我ゆへにては有まじきとへ。

といふ哥の心ばへなり

哥の心を用かへたるを云。禪閣ふるき哥を其まゝのせたる事。毛詩などをそのまゝ賦するに准ずべきにやとあそばせり。

いちはやき

早速へ。卒に哥を書てやり。卒に返しするをいふ。

みやび

みやびをかはすなどいひて。ゆうゑんにけさうするをいふ。

河原大臣の哥へ。左大臣源融。寛平七年八月薨。七十二。定家勘物へ。於在中將非幾先達如何とは。業平の融公を先達として。その哥を取てよむべき人にあらずと云心へ。みちのくの哥を本哥にとるにあらず。返哥と見せんための勘物へ。

ひかし男ありけりならの京ははなれ此京は人の家まださだまらざりける時

ならの京をこの京にうつさるゝ時に。先西京をひらひて後に東京をひらけり。去程に東京にはまだ人の家ゐも定まらざりしへ。

世人

定家卿自筆にも古本にも世人とあり。然共御諱なれば世の人とのゝ字を入てよむ歟。又只人とよみて。世の字をすつるかなるべし。五經に國人をくにたみとよむ類なるべし。

その人かたちより心なんまさりたりける

世人にはまされりと。先容儀たひはいをほめて。かたちよりは心なんまさるといふは。世にすぐれたる人と聞えたり。

ひとりのみもあらざりけらし

主ある人なり。

まめむところち物かたらひて

まめは實の字へ。好色は實人にては有まじけれ共。業平の自辭なればかく書へ。

雨そぼふる

舊くはぶると濁れり。濁べからざるやうにおぼえたり。

おさもせず

夜はおさもせずねもせぬやうにてあかして。
晝は春の物とて長雨しくらしつといへり。
ながめはながむるといふ心をのづからこも
れり。

三
むかし男ありけり

ひじきも。ふみなどの次でに参らするへ。細
々申入る所なれば。加様の物をもたてまつ
るにや。

おもひあらば

常には此哥の心を。思ふ人だにあらば。葎の
宿になりともねぬべし。引敷物には袖をし
てもとよめり。其心は万葉に。玉しける家も
なにせん八重むぐらしげれる宿にいもとし
すまば。といふ哥の心へ。然といへども左様
にしては心あささ歟。此心はおもひなき身
にてあらば。葎のあれたる宿に袖をかたし

いてぬるともたんぬなり。おもひあらば玉
のうてなもかひなしといふ心也。其心は万
葉に。なにせんに玉のうてなも八重むぐら
はへらん宿に獨こそねめ。といふ哥の心へ。
惣じてむぐらのやどにおもひの有やうには
見べからず。

二條のきさきのイ
まだみかどにもつかうまつり給はて

物語の作者が前を訓尺する也。いさゝか業
平をいたはりて。たゞ人にておはします時
と云り。又實にはたゞ人にておはします時
なるべし。五節の舞姫たてまつるは十七歳
の時へ。入内は其後なれば。たゞ人といへる
もさも有べし。

四
むかし東の五條

東京の五條へ。

おほささいの宮

染殿の後へ。順子を五條后と申す。染殿の後

をも五條后と申す。

にしのたいにすむ人

染殿のすみ給へる所のにしの對へ。二條后

この對にすみ給へり。

ほいにはあらず

あらはにはあらてといふ心へ。ほに出ると

はあらはるゝことをいふ。ほいにはあらず

は忍てと云儀へ。又本意にはあらてといへ

り。それも儀消すれども。只あらはにはあら

てといふ方まざるにや。

人ゆきとぶらひけり

業平の密通するへ。

ほかにかくれにけり

密通をはぐかり女他所へうつるへ。其在所

をばしれども。行尋んよすがもなし。

なをうしとおもひつゝ

つゝといふ詞にて程ふる心あり。

こぞをこひて

去年のこの比までは。西對まで參りし物を

とおもひ出せるなり。

たちて見いてみ

みはやすめ辭也。ふりみふらずみとおなじ。

あばらなるいたじき

おちあれたるやうにも有歟。又あながちさ

はなくとも。人のすまず主人のなき所は。あ

れねどもあれたるやうなる物也。業平の心

に。其人のなければ。あれたるやうにおぼゆ

るなるべし。

月やあらぬ

業平の哥にをひても言語道斷の秀逸也。月

やあらぬとは。月をとがめて。月は去年の月

にてはなきか。春はむかしの春にてはなき

かと。春をもとがめて。更に去年に似ざる

は。なにとしたる事ぞといふ心へ。下句を後

成恩寺わが身ひとつはもとの身にてありと
あそばせるか。それは此哥に餘情なき也。我
ももとの身にてなきかと思へるが。我身は
もとの身にてあるよと。かく見べき。師説
にわが身ひとつはといふはの字をすてゝ見
よといへり。俊成卿は哥の事をいへるには。
彼月やあらぬ。むすぶ手のしづくににざる。
此等を手本にいへり。

夜のほのくくとあくるに

爰に心をとめたるほど。夜のほのくくとあ
くるまで居て。いつまでこゝにあるべきと

て。なくく歸るなり。

東五條わたり

五むかし男ありけりイ

上にいへると同所。

いとしのびていきけり

二條の後に密通。

みそかなる所

隠密したる所なり。

ついぢのくづれより

つゐぢはつゐがき。門よりもを入ずして。

あらぬ道をもとめてかよふ。此物語の面
白きといふ事。古今にてしれたり。物語の詞
を其まゝ入たり。古今にはこゝをかきのく
づれよりかよひけりとかけり。是又貫之が
奇特なる筆。是は物語なればわらはべの
ふみあけたるつゐぢのくづれよりとかける
。

あるじ

染殿の后。

人しれぬ

哥にとなる義なけれども。よく心をつけて
吟味すべし。心につよくわびていへる所有。
あはれなる哥。うちねなくんはうちもね
よかし。

いといたうやみけり

染殿の後のあはれとおもひて。業平を憐愍の心有之。

二條の後

物語の作者の詞之。

せうとたち

二條の後のおとゝいたち也。

女メのえうまじかりける

得がたき女之。二條の後の事之。

からうじてぬすみいでゝ

あもしろうして女をぬすみ出て行。

あくた川

作り物語なれば。禁中のあくたながす川など云儀にも及ばず。只あくた川といふ川にてをくべし。

草の上にをきたる露をかれはなにぞとなん

夜ふかくかゝる道など見給へる事なけれ

ば。露をなにぞとなん問給へり。

ゆくささおほく

行路の遠をいふ也。

おにあるところ

下の詞がきに見えたり。

あばらなるくら

くらは座の字也。人もなきやうなる所なるべし。

べし。

おとこ弓やなぐぬをおひて

近衛司はゆみ矢を帶して雷鳴陣に候すれば。業平もさあるにや。

はや夜もあけなんと

人をぬすみて行には。夜を長かれところ思

べきに。雷なり雨ふりて物すさまじき折な

れば。夜もはやくあけよかしと思ふなるべ

し。

あなやといひけれど

あなやといひけれど

女のあゝといへるこゑ也。

あしずりをして

あはれにたへたる躰也。

しら玉か

草の上にをきたる露をかれは何ぞと問ひし時。返事も申さずして。そのまゝ來りし事とおもへば。是さへ後悔なり。白玉やらんなにやらんと問れし時。露とこたへてきえてな^{ほとん物}しといへり。古哥になにかと疑ふ字はなし。^(其無)今連歌などにおほくする事也。秋風のふきあげにたてる白菊は花かあらぬかなみのよするか。如此などは尤よむべきなり。こゝも白玉かなにぞと。よくうけてよめれば。此哥には難なし。此哥を新古今哀傷の部に入たり。まことに鬼もくはざるを哀傷に見るは。誠にくいてなき物にしなして入たる事也。

二條の後のいとこ

染殿の後なり。

二條の後。勸云。高子。元慶元年正爲中宮。廿六。イ

ほり川のおとこ

昭宣公也。二條后兄。

忠信猶子に成給へり。イ

太郎國經

昭宣公の兄也。下臈とは雲客の時也。

京^七にありわびてあづまにいさける

業平の左遷の事沙汰ある事なれば。その時

歟。又たゞも行ける歟。

いとゞしく

波のうちよせてはかへりくするを見て。

我は都にすみわびて。ゐ中もとめするに。あ

のなみはうら山しくもかへるよとよめり。

餘情あり。當位即妙の哥也。山海所々旅懷可思惟。勅撰の詞なにもみ

えた。イ

友とする人ひとりふたり

世にすみわぶる人なれば。なにかは友もお

ほかるべきや。

しななる

あさまのたけのけぶりのおもしろきをはじめて見るに。さてもえこらへぬよと我心に感じて。おちこち人の見とがめざらんやといへり。

身をえうなきものにおもひ

業平のわが身は世の用にたつべき物にもあらずとおもひくだす。

みちしる人もなくて

業平のみならず。友とする人も道を分明に

しらざる也。

三河 阿久根といふ所にいたりぬ是より下は伊勢イ云上の注也イ
水ゆく川のくもてなれば

水の縦よこにゆくをいふ。

はしをやつわたせる

八にはかざるべからず。水ゆく川が縦横なるに。はしをあなたこなたへかけたるをいふなるべし。物の數をば八をかざりにして

いふ物なればかくなん。

かれいひくひけり

家にあれば器にもるいひを草枕旅にしあれば椎の葉にもると。有間の王子よみ給へり。からごろも

きつゝ。つまし。はるゝ。皆衣の縁。常の

哥にとりては秀句おほくしてきらふべし。

是はかさつばたと折句におく程に。かくよ

まではかなはざるにや。大かたの旅なりと

もかなしかるべきに。いはんや故郷におも

ふ人を残しをきぬれば。一しほにかなしき

とよめり。

かれいひの上になみだおとして

かんるいをもよほす。

ゆきくゝてするかの國にいたりぬ

みかはをすぎてするがにいたる。

つたかへてはしげり

葛鶏冠木は茂と。はをてにはによむべし。葉しげりとよむは辭をとれり。五月末邊の躰え。

す行者

たれやらんと見べし。

京にその人の

よき便宜なれば。ふみをとづけたり。

するがなる

夢にもあはぬといはんために。上句をば云り。哥の心はうつゝの事はいふに及ばず。夢にもおもふ人にあはぬといへり。なりけりといひつめたるがおもしろくおぼえ侍り。

時しらぬ

山の名譽をいひたてたり。時しらぬ山はふじのねにてありけり。こなたは五月つごもり。既に六月になるに。いつとおもひてか。富士のねに雪はふるらんといへり。かのこ

まだらはむら／＼ふる雪也。此哥も淺間の山の
ごとくのとぐひな
きをほめて
讀るゝイ

ひえの山をはたちばかり

山の高さは都のひえの山を十ばかりといへり。それにては事たらぬ程に。二十ばかりといへり。

しほじり

勸物に見えたり。「或説云。鹽尻と云物あり。其尻似此山。此物語之習。故好卑詞。寂蓮殊用此説。或本はしりしほの。先人の命雖爲鹽事凡卑也。不可用之。心得ずとてありなん。往年有尋問人。慥不知由云々。御講」鹽やくにしたる物ありてかたまれるが。此山のなりに似たり。これをしほじりといふ。寂蓮は此説を信用すれども。定家卿は此事さらに和哥の潤色にあらず。しらぬにてをくべしとかけり。此儀哥道の一のをしへ。殊に

絶妙なるにや。

しもつふさの國との中にいとおほきなる川あり

大なる川とかける。尤おもしろし。此川をこしては。いよく古郷はとをくなるべしとおもへる心あり。

わたし守はや舟にのれ

はや日もくるゝに。早く舟にのれといふ。

みな人物わびしくて

友とする人も。舊里のへだゝる事を思へるならん。

しぎの大ききなる

鳴のやうにて。それよりは大きな鳥といふ心。

名にしおはゞ

此鳥をとへば都鳥といへり。我古郷の名にて。しほなつかしくおもへり。名にしおふ

事ならば。都の事とふべし。我思ふ人はありやなしやと。都といふ名をかこちてよめる也。

〔とありければ舟こぞりて鳴にけり

かたはらの人も感涙をもよほす心。舟中の人々也。い〕

⁺ちゝはと人に

父は此女をと人にあはせんとおもへるを。

母は業平にあはせんとおもへり。

ちゝはなを人

さしてもなき人をなを人といふ。俗姓なき人。

母なん藤原

四姓の中にも藤氏はたとし。さる程に母はあてなる人にあわせんとおもへり。

このむこがねによみてをこせり
かねは器量なり。

(以下世四字イ无)

よみてとよめり。源氏物語に后がねともあり。おなじ類へ。

みよし野の

たのもは田面へ。かりがねも君が方へよるとなくぞといふは。そなたへ心のひくといふ心へ。

わが^{せとかみか}かたに

我かたによるとなくといへるは。それこそ本望なれ。その心ざしをいつかわすれんとへ。

人の國にても

他國にてもかく好色の事やまずといへり。

わ^{十一}するなよ

拾遺には橘の直幹が哥と見えたり。これには業平の哥とす。かやうに古哥又万葉の哥などをかへてかく事おほし。ほどは雲井とは。遙にへだゝるといふ儀へ。我立かへりて

又あはんまでわするなといへり。
人のむすめをぬすみて

殊に作り物語の段なれば。なき事をかけるへ。

國の守にからめられにけり

人をかどはかすとて。國のかみにからめらるへ。

みちくる人

満くる人へ。逍遙院御講。昭明院御講。道クル人。兩説。

むさし野は

此哥のあるよりして。此段をばかき出せり。

つまとはこゝには男をつまといふへ。古今には春の部に入て。春日野とかへて眺望の哥とす。

「うはがきにむさしあぶみと。かけておもふと云心へ。むさしあぶみと云事は。もとは其國よりまいらせつけたる物をそのまゝ號す

る。さぬき圓座などいへるたぐい。京なる女。古注に四條の后と云々。清和の御時立后の事なし。不可然と云々。」

^{十三}むさしあぶみとかきて

かけておもふといふ心也。むさしあぶみといふ事は。もとは其國より參らせつけたる物をそのまゝ號する。さぬき圓座などいへる類。

むさしあぶみ

さす。かくる。皆あぶみの縁なり。そなたをさすがにたのむには。とはぬも心にかゝり。とふも又心にかゝると。

とへばいふ

とへばうるさいといふ。とはねばうらみをなす。進退らわまりたる所。かゝる時にや人は死するものにてあるらんと。

^{十四}中／＼に

万葉

中／＼に戀に死なずしてあらんならば。せめてかいこになりとも成たきと也。かいこははかなけれども。妹背の契りふかき物なれば也。又は命一年をすごさる物なれば。戀にしなずば。年をこさずして。としの内になに共なりたきと也。玉のをばかりは。ちとの程なりともといふ儀也。

哥さへぞひなびたりける

ゐ中人しきと。

さすがにあわれとや

業平の人をすてぬ心。

夜ふかくいてにければ

心とめんやうもなきが。夜ふかく出にけるなり。

夜もあけば

鶏がなかなずばしほしもとどまるべきに。夜ふかくないて。人をかへすほどに。夜もあけ

ば狐にくわせんといふぞ。くたかけは家鶏
え。只かけとばかりもよめり。万葉。十一。里
中になくなるかけのよびたてゝいたくはな
かぬかくれづまかも。

くりはらの

をぐろさきみつの小島の人ならば都のつと
にいざといはましといふ哥を。上句をかへ
ていへるえ。松のごとく主もなき人ならば。
都のつとにさそはん物をとえ。

よろこぼひて

悦なり。

おもひけらしとぞ

^{十五}業平の我をおもひけるとえ。
なでうことなき人

人をあなどりていふ辭え。させる人にもあ
らざるをいふ。

あやしうさやうにて

此女を見るになびかんとも見えず也。
しのぶ山

うち見はさうさなきやうなれども聊見處あ
り。忍てかよふ道と云は。人の心の中へしの
びてかよふ道もがなといふ心え。しからば
人の心のおくも見るべき物をと也。

めてたしとおもへど

あわれにおもへるなり。

えびすごゝろ

えびすはたはむかたなくつよき所あり。左
様のふてたる心をもて。をしたる儀ありて
は。いかゞはせんと思へるえ。せんはのはの
字やすめ辭也。

^{十六}紀有常

名虎が子え。

みよのみかど

淳和。仁明。文德。

時にあひけれど後は世かはり

文徳第一の皇子惟喬親王をまうけ奉るは名虎が女^へ。この親王御位につき給ば。有常はさかへなんを。第二の皇子清和の御位につかせ給しかば。名虎かたのものは衰へぬる^へ。大かゝみに藤氏がさかふるほどに。紀氏はいかんとてかなしめり。

よのつねの人のごとくも

よの常の人の如くにもあらず衰る也。

あてはかなる

風流なる事をこのむ^へ。世上の儀などにかけしろう事なきをいふ。愚見抄には。あてはかはあてかいはかなき事とあそばせども。あまりに訓尺したるやう^へ。

と人にもにず

常にはま^食としてへつらひ。富てをぐる物なるが。さもあらざる^へ。

よのつねのともしらず

世務などの事をもしらずしてあり。

とこはなれて

夫婦の常をはなる^へ。夫婦は身の一期そふべきに。わかるゝは常はなる^へ儀^へ。

あねのさきたちてなりたる

姉のさきたちて尼になりたる所へゆく。

おとこまどにむつまじき事こそ

此ほどもむつまじき事はなかりし^へ。

友だち

業平^へ。

手をおりて

四十年あひそふたるものが^{つイ}。とこはなる^へ。

所の名残を。いかにと推量あれといふ心^へ。

かの友だち

業平の^{也イ}有常が文を見てあはれとおもひて。しな^への^へおくり物をやる。よるの物まで

といふまでの字にて。と物をもやると見えたり。

年だにも

女の上をたすけていへり。なれたる事さへ四十年にならば。今こそなにごとをもえせずとも。四十年のうちには。いくたびか君を頼て。其かげにては有つらんと。わかるゝ心さこそと云り。

是やこの

有常悦て又よみてやる。業平の夜の物までをくれるは。此世の衣裳とはおぼえず。是や眞實天の羽衣なるらんといいて。げにも業平の衣裳なれば。天の羽衣とおもふもとはりなりといへり。

よろこびにたへて

一首にては心たらぬほどに。又一首そへたり。

秋やくる

秋は物かなしく人のうれへをもよほす時え。しかれば秋の來り袖をしぼる歎。露のをきて袖をぬらす歎とれもへば。今我が悦にたへずしておつる涙にて有けりとなり。

年としごろをとづれざりける

此段にむかしといふ字なし。書おとせる歎。又年ごろにてむかしともたせたる歎。作者の心はかりがたし。

あだなりと

古今には春の部に入て戀の哥にあらず。花をばあだなるものと名にたちしが。かやうに年にまれなる人をも待ける物にて有よといへり。もと業平の女にあひたりし時。此女をあだなる人といひし事ある歎。それを今おもひ出して。我はあだにあらずといふ心をよめる也。

けふこずば

けふ我きたればこそ花とも見れ。あす來らば木のもとの雪とはみるとも。花とはみるべからず。今日女のうつろはぬ時に來ればこそ其人とはみれ。あすうつろひて後來らば。其人とはみるべからずと云。

なまこゝろある女なまこゝろしきと云心。生の字の心。

物ずきの女なり。小町といふ一儀あれども。惣じて段々の女を。これはたれ。かれはそれといはん事。たとひたしかに知ともおぼつかなし。とに時代をへたる事を。いかんとして慥に知べきや。習處集のよみ人不知と同じといへり。よみてあれども。其集にては其まゝよみ人不知にてをくべし。

男ちかうありけり

業平その女のとりにある也。

こゝろみんとて

業平の心をひいて見んとおもふ。

くれなゐに女

いさゝかうつろふ所はくれなゐに見ゆれども。大かたは枝に雪のふりかゝるヤイかとみゆると云。白は色の本にて。うつろふ事なき正色なり。白雪を業平の心の色見えぬにたとへたり。更に業平の心はこなたへうつらぬといふ心云。

しらずよみに

此哥は我心を勘弁してよむとしれども。しらぬよしにてよめり。ちとも動ぜず返事せんため云。

くれなゐ業平

紅にほふ白菊は。おりける人の袖もかくぞあるらんとおもひやると。いさゝかも動ぜずよみてやる云。「菊に白衣佳人と云事あれば云。」

宮^{十九}づかへしける女

染殿の後の御事^ニ。業平は忠仁公へ家禮申さる。染殿の後は當代母后にておはしませり。ごたちなりける人とは。染殿の後の召仕はるゝ女^ニ。

あま雲の

あま雲のよそとつゞくるは。そら^{はイ}に高き物なれば。よそといはん爲^ニ。女の目には業平をいつもみれども。業平は女をそこにある物ともおもはざるをいふなり。

あまぐもの

我がよそに有て近づかぬは。そなたに風のはげしき故^ニ。風がはやきほどに。雲のありぬんやうもなきといふは。そなたには主があるほどに。我ちかづかんやうなきといふ

心^ニ。此女古今^ニに有常が女也^イ

やまとにある女

ならの京に有女にや。

宮づかひする

業平の事^ニ。ならの京より今の京へ歸る^ニ。

君がため

君が爲にとおもひておれる枝の。春ながらかくもみぢするは。君が心のうつろふゆゑにやと云心^ニ。

返事は京にきつきて

返事を今や^{と道すからまつ心見えたりイ}くると。道すがら待きたる

心^ニ。

いつのまに

上のかくこそ秋の^{と道す}もみぢしにけれといふを。そのまゝうけて。いつのまにそなたにはうつろふ色のつきけるぞ。さてはそなたには春もなくなりけるやとなん。

かしこくおもひかはして

よくおもひあへるなり。

いさゝかなる事

女の堪忍もなき性にて有歟。

出ていなば女

こゝを出ていなば。我を心かるキイひものと人のいひやなさん。えかんにんせぬいはれのあるを。人のしらざればといへり。

けしう

あやしく之。私云。惟の字の心なりと云々。イ

おもふかひ

加様に出ていなんとは。おもひの外の事也。誠に思ふかひなき世なりといへり。但身にはおぼえねども。我にも又あやまりやあるらん。随分年月を契ると思へども。もし不足なる事もありぞしつらん。我やあだにもちぎりしといへり。

「といひてながめをり。程をへたる心之。」

人はいづ業平

おもひやすらんは。おもひやすするらん。おもひやせざるらんといふ心之。出ていにける女の我をおもひやすするらん。おもはずやあるらん。面影にのみいと見えぬると之。玉かづらは女のかくる物なれば。万葉にも玉かづら面影とつゞけてよめり。又や見んかたのゝみのゝ櫻がり花の雪ちる春のあけぼのとよめるも。又や見ん又や見ざらんといふ心之。萩の哥に又や見ん又や見ざらんと。家隆のよまれたれば。定家のかやうにはよまれまじき物をと難じたる事あり。

ねんじわびて

おとこのかへれといひやすするらんとおもへども。さもなきほどに。こらへかねてよみてやる。

今はとて私云。上詞にいさゝかなるゝとに出ていにしも。堪忍のなきよりて。又今おとこのかたへ哥をおくるかとするを堪忍せぬ性なり。

我出て來たるに。今はさらばさもあれとて
うちをくは。忘草を生じて。我をありとだに
も思はぬもの。あはれ忘草を人の心に生
ぜずもがなと云り。

返事
わすれ草 此段又立田山
の明眼也。イ

上の哥をはたらかさずしてよめり。おもひ
ある上にこそわすれ草をばうへれ。忘れ草
をうゆるならば。我思ふといふ事をば知べ
しといへり。又そなたにも忘れ草をうゆる
ならば。こなたをわすれぬと知べしと。

ありしよりけにいひかはして

新古今
わするらん 業平
もとよりも猶あひかたらひけり。

今又かたらへども。又や我をすてゝいなん
と。人の心のうたがはしさに。ありしより猶
すぐれて物かなしきと。けにとはすぐれ
てといふ心。

なかぞらに女

女の我心を觀じてよめる。我心かるき事
をして。さしもなき事にいてゝいにしか。さ
らば其まゝにてもなく。こらへかねて立歸
りたるは。雲のねもなく半天にたゝよふが
むくといへり。

をのがよゝになりければ

離別して別々の世になるをいふ。

うとくなりにけり

いもせの契りもなきをいふ。

世
うきながら

一たびわかれて後に。うき物にはおもひは
てたれども。猶えわすれざれば。かく恨つゝ
猶こひしといへり。かつはかつゝにあら
ず。かくといふ心。古今に。かつこえてわ
かれもゆくかあふ坂は人たのめなる名にこ
そありけれとよめるも。かくこえてなり。

さればよいひて

業平のこなたもさやうにありといふ心へ。

あひ見ては

こゝろひとつを河しまといふは。又よそへもやらす心をはす儀へ。水はながれがたえぬ物なれば。其どくにたえまじきとへ。河島は川の中に有島へ。河しまはゆきめぐりてあふ物へ。わかれて又あふといふ儀あれども。次なる説へ。

とはいひけれど

哥には行末をかけて契れども。念せずしてやがてその夜いにけり。いにけりはいきけり也。狩にいにけりもいさけりへ。

いにしへ行さきのとども

後成思寺是より一段にきり給へり。定家卿の自筆の本にも。是をあけてかけり。されどもこゝはよみつゞけて見べきにや。このか

はりに依て。愚見抄よりも一段すくなく見ゆるへ。

秋の夜の

秋の夜の千夜を一夜にして。それを八千夜ねたりともあくべからずとへ。深切にいはん爲へ。

秋の夜の

心分明へ。

^セ三
ぬ中わたらひ

常にはぬ中にぬずして。時々ぬ中へ下るをいふ。

つゝ井つの

つゝ井の井つゝといはん爲へ。此外別義なし。文字よみばかり也。

くらべこし

髪をあぐるへ。女は其年きたれば笄するへ。上と同。

女おやなく

女親の卒する。又は親のなきが如くなる。
え。

もろともにいふかひなくて

たがひにいふかひなき躰にてあらんより。

もろともによき方にゆかんと。大和物語
に。あしからじよからんとてこそわかれけ
れなにかなにはのうらはすみうき。とよめ
る心。

あしとおもへるけしきもなくて

嫉妬する氣色も見えざる。

いとようけさうして

古今をかきならしてとなり。

風ふけば

白波は盗人の事。たつ田山に盗人の有を
いふといへり。顯注密勘に注するに。たつた
山といはんとて。あきつ白波とつゞけ。なみ

たつといはんとて。あきつ白波とつゞけ。風
ふけばとをける。云々。盗人を白波といふは
莊子より起れど。綠林白浪といへり。此哥を
ば盗人の事と見ずして。枕詞と見たるが面
白き也。定家卿も左様に見るを感ぜられた
り。哥の心は風波はげしひ時に。たつた山を
こえて。艱難をへて君がひとり行事よとい
ふ心。

はじめこそ心にくくもつくりけれ

心にくきさまにつくりし。

手づからいひかひとりて

手づから取事はあるべからず。ほどらひを
はからふをいふといへども。其はなを優な
らず。たゞそのまゝに見べし。物語の俳諧の
やうなれども。さぞ有つらん。

君があたり

いこま山は高さ山。わたのべのおほえの

きしにやどりして雲井に見ゆるいこま山かな。と能因がよめる。

やまと人

業平。此段をば紀有常が女の事といふは。

貞女の所をあらはさん爲。

^{廿四}かたゐ中にすみけり

業平の事。

宮づかへしにとて

京へ上るなり。

みとせこざりければ

令に夫が外蕃にありて來らざるに。子あれば

五年。子なければ三年にして。嫁をあらた

むる事をゆるせり。さやうの心にや。

この男きたりけり

業平來る。

此戸あけ給へと

門などたゝく歟。

あら玉の

かくす所もなくいへり。

あづさゆみ

弓を三つにけたるは。三年の心など云はしからず。只かさね詞。弓といへはしな。きものをあづさゆみまゆみつき弓しな。そありけれ。と神樂の哥によめり。ひくといはんとて。弓を三ついへり。君に心ひいて年をへぬるほどに。我せしちかいをうるはしくせよと。

あづさゆみ

そなたの心我はひくやらんひかざるやらん知らぬ。我はむかしより心君によるといふ。

をよびのちして

をよびは小指なり。

あひおもはて

此にて死にはあらず。

^{廿五}あはじとも

あふまじきともいひはなたぬえ。

さすがなりける

業平を戀る心ある歟。さすがされはなれたるやうには見えざるこ。

秋の野に

秋の野も朝もさしも露おほき物なれども。たづねいきて。あはて歸る夜の袖は。猶ぬれまざるとなり。

みるめなき

我身をとほ男の身をさしていふ。我見えぬはそなたへうらみあるゆへなり。そなたの身を恨めしいとしらざるにや。かれずあしたけさばかりなど來るぞとこ。古今には小

^{廿六}町が哥と見えたり。

五條わたりなりける女

二條の后こ。

わびたりける人

染殿の后こ。業平のあらぬおもひする事をふびんにおもひ給へる。其とに業平のよめる也。

おもほへず

戀路は及ばぬ事をおもふならひなれ共。染殿後のいましめ給べきを。我心をいしはかりてあはれみ給ふを。ありがたきよろこびのなみだをながすなり。よりしのし文字はやすめ詞こ。過去のしには非ず。

^{廿七}ぬきすを

たらひの上に竹をみすのやうにあみて。へりをさして。それを打わたして手水つかふ物こ。

我ばかり

たらひの水にかげのうつりたるを。水の下

にも又もありといへり。

みなくちに

水口に蛙が一なければ。惣の蛙がなくえ。鳴やめば又惣がなきやむえ。水口のかはづがなければ。惣のかわづがなくやうに。我がおもひがそなたに有によりて。そなたの思ひが有え。我おもひがそなたの思の初になるなり。

もろこゑ。^清

な^{世八}どてかく

あふこは逢期え。それをかごによせてよめり。なにとてあふとのかたくは成つらん。さしも水もらさじとこそ契しか。かごに入たる水のあとなきごとくなれるよと也。

春宮^{世九}の女御

春宮の母儀の女御え。二條後の御事え。

花の賀

別に无訓尺。文字讀斗也。

めしあづけられたり

業平の奉行などする事え。

花にあかぬ

上には御賀の躰をよめり。底には花にあかぬとは。二條后御事え。かゝる折にもまぎれぬおもひの有所をいへり。此花の賀はたが御賀といふ事しらざるえ。

あふ^世とは

玉のをばかりはいさゝかばかりえ。あふ事は露ばかりにて。つらき心はながしといへり。あふことは玉のをばかり。名のたつはよし野川のたきつせのごとくえ。

宮^{世二}のうち

禁中え。

よしや草葉よ

業平の盛なりとも。秋風の吹て。しほるゝ時あらん物をといふ心え。

つみもなき

うけへとはのろふ心え。とがもなき人をの
ろはゞ。還着於本人のとはりにて。忘草はそ
なたの上におふべしとえ。

といふをねたむ女

^{冊二} かくいひかはすを又ねたむ女もあり。

いにしへの

いにしへとむかしとは同事え。今などかや
うによまんはよろしからず。これはむかし
のしづのをだまきといひて。むかしを今と
いふほどに。句をへだてゝ心がかわる也。

なにとおもわずや有けん

女は何とも思はずや有けん。

^{冊三} 此たびいきては又はこじ

業平の京へのぼらば。又は問はれまじき氣
色とおもへるを。女をなぐさめて。業平のよ
めるえ。

あしべより

万葉に。あしべよりみちくるしほのいやま
しに思か君がわすれかねつるとよめり。こ
れは下句ばかりをかへたり。あしべの鹽は。
上へは見えね共深き物え。上にはうすく君
をおもふやうに見えてぞあらめど。底には
ふかくおもふ心有とえ。

こもり江に

こもり江はふるき江え。落葉もつもち。草も
しげりて見えぬ江をいふえ。眞實のしたの
心をば。何としてさしては知べきぞ。さりと
ては浅く見えたるを。あはれさして深き心
を見ばやとえ。

よしやあしや

^{冊四} 子細なくよみたり。

いへばえに

詞がきを心にをひて此哥をば見べし。いは

んとすればえもいはれず。又いはねばむねにみちて。おもひがむねにさはぐやう。去ほどに心一になげくといへり。

おもなくて

此つれなき人に。なにとよみてやるとも。なびくべきにあらずとおもへども。しいてよみてやる也。

^{卅五}玉のをい

玉のをとは命をいへども。これにはたゞ緒と云はんためなり。あはをと合たる緒へ。かた糸はむすぼるゝが。堅く合てよりたるは。引はなせども。やがてもとのごとくよれあふて。たえはつる事なし。其ごとくにたえて後も又あはんとよめり。

^{卅六}谷せばみ

万葉の。谷せばみ峯に生たる玉かづらたえんの心我はおもはぬ。といふ哥をすこしか

へて云り。谷ひろくば。よそへははいまとはりても行べきが。せばき程に。峯までおふる。たゆまじきといふ心をよめる。

^{卅七}うしろめたくや

好色の女なれば。あふてもうしろめたくやあらんと思へり。

我ならて

夕かげまたぬとは。女のあだなるをいふ。我ならて人に契るな。夕かげまたずしてかはるやうに。あたにはありともと云り。

ふたりして

女の陳法してよめる也。そなたよりいふに及ばず。二人してたがひに契りしを。一人してはとくまじきとは。他にうつるまじきと云。

^{卅八}かりいきたるに

業平有常がもとへ行けるに。有常よそへ行

てをそく歸るゑ。

君により

君をまつによつて。けふ初ておもひならひぬ。世の中の人のかやうなるをや戀といふらんとぞ。

ならはねば

我も戀といふ事をならはねば。世の人ごとになにを戀といふぞととひ來るゑ。

^{世元}西院の御門

淳和天皇の御事ゑ。

たかいこ

勸物にみゆ。

御はふり

はうぶりとよむべし。

いと久しうして

しばらく逗留ありて出し奉るゑ。

此車を女車と見て

業平の女とのる車ゑ。

ほたるをとりて

五月の比なれば。螢を紗のふくろなどに入てもつ歟。

出ていなば

今崇子の親王を葬り奉るが。鳥部野へ出給はゞ。是が限りにてましますべし。ともしけちとは如煙盡灯滅の心ゑ。命のきゆるをいへり。年へぬるかとは。此宮は年をへ給へる事にもあらず。わかくして世をさり給ふ事。世間の無常はかゝる物なりと。皆人のなきなげくこゑをきけとぞ。

いとあわれ

なくこゑをきけとよめるをうけて。誠哀になくこゑの聞ゆるよといひて。さりながら我はさらに眞實に寂滅とはおもはず。一切衆生は法界の五大をかりにむすんで來れ

り。法界の五大は消るものとは我はあもはずと。是則非眞滅心。

なをぞありける

なをは直之。ありのまゝすぐによめる。定家卿自筆には猶之。是もよき。

いたるは順がおほぢ

是一の不審。古き本にも註のやうにちとさげてかけり。註に見ても心得がたし。順は天曆の帝の時の人。延喜の時分よりも有て。天曆の比の人歟。遙に後の順が事を此物語にのする事いか。もし後人の書歟。いたるが系圖をいはんとて。順がおほぢとは書なるべし。

みこのほいなし

あめの下の色このみの哥にては猶ぞありける。みこのほるなしと。上につけて見べきにや。其心は崇子の親王の爲にはあまりほ

いなし。死給へるもそれまでよとよめるは。あまりなりといへり。

けしうはあらぬ

源氏にてはけしうを清くよめり。

人の子なれば

業平をいふ。

とむるいきおひなし

をひやらんとするを。をしてとめんとも

せざる。

女もいやしければ

年のわかさをいふ。郷黨莫如齒の心。

をひうつ

逐の字。儒書史漢にも逐ををひうつとよ

めり。

血のなみだ

つよく哀さには血の涙ながしなく也。大和物語に。僧正遍昭泊瀬にて血になきし事あ

り。

出ていなば

此女を追出さば。我も又此世に跡をとめ
まじきほどに。我もわかるべければ。別はか
たからずと云。さあればありしにまさりて。
けふはかなしきと云。

おやあはてにあり

女のおや云。

猶おもひてこそいひしか

業平のと思ひ申てこそよそへはやれと云
云。

むかしのわか人

^{四十一}わかうどいよめり。
はらから

兄弟云。

あてなる

業平云。

いやしきわざ

女は三従とて。中年にしては男にしたがひ。
加様のいやしき事をもするなるべし。毛詩
にも服澣濯之衣をと云り。

ろうさう

六位袍云。

むらさきの

紫をば女にたとふ。業平の女に寵のふかき
時は。其ゆかりまでもわけられずあはれに
おもふと云。野なる草木とは其ゆかりを云。
むさし野の心なるべし

むらさきの一もとゆゑにむさし野の草はみ
ながらあはれとぞ見る。といふ哥と同心云。
^{四十二}にくくはたあらざりけり

我ばかりをたのむまじきものと知ながら。
にくからぬなり。

さりとていかで

うしろめたくあるとて。其まゝゆかずして
もゐられぬえ。

なをはた

うちたのむべきやうにもなきえ。

出てこし

此色このみの女は。我出てこし跡より。誰人
のかよひぢとか今はなるらむとえ。

^{四十三}
かやのみこ

勸物に見ゆ。榮花物語に。むかしかやのみこ
といひし人こそ。さいくはかしこかりけり
と書り。

人なまめきて

業平え。

又人さゝつけて

業平の我のみにおもひたるに。かやのみこ
の御寵愛と聞つくるえ。

ほとゝぎすながなく

ながなくは汝がなくえ。郭公汝がなく里が
あまた有ほどに。うとまんとおもへども。猶
思わるゝと云り。

けしきをとりにて

我をうたがふかと。業平のけしきをとるえ。

名のみたつ

しでの田をさは時鳥の別名え。古今に。いく
ばくの田をつくればか郭公しでの田をさを
あさなくよぶ。此哥は時鳥ならで別にし
での田をさとあるやうに聞え侍りと。禪
閻のあそばせり。此哥にて別名とは決せる
え。ほとゝぎすのなく里あまたあると名に
たつる程に。そのゆへに我はいまなくと云
り。けさは今といふ心え。

いほりおほき

よしそなたにはいほりあまたにありとも。

我にだにたへぬならば。なをたのまんとい

へり。

^{四十四}あがたへゆく人

ゐ中へ下る人へ。有常が事なり。

うとき人にしあらざりければ

業平は有常がむこなれば。うとき人に非ず

といへり。

いゑとうじ

我妻をいふ。

女のさうぞく

裳からぎぬのやうなる物へ。

出て行

出て行人の爲に。衣をぬぎてやれば。我さへ

もなくになると。もは喪の字へ。喪の字をば

わざはゐとよめり。衣裳のもなくといふを

もて。禍なくといふ心をよめり。人によき事

をあたふれば。我にもよき事あり。陰徳陽報

也。万葉に。玉きはるうちのかぎりは。たひ

らけく安けくあらし。ともなくもなくやあらんを。世の中のうけくつらけくとあり。もなくに。裳の字をかけり。

此哥はあるが中に

時の花に對し月にむかひて。其當躰をば誰

もよむものへ。是は旅行の人に女の裝束を

^(い脱敷)たすとよめば風情もなし。一大事の難題な

るを。やすくおもしろくよめるへ。

はらにあぢはひて

業平の沈吟してぞ案じつらんとへ。

^{四十五}人のむすめのかしづく

いつきの女へ。

かくこそおもひしかと

此女めのとがなくなに。ざんげするなるべし。

なくくつげたり

女のおやが業平の方へ。御出有て御らんじ

て給はれといふへ。

つれ／＼とこもりをりけり

業平の仁心へ。一目も見ぬ物なれ共。いみにこもりをるへ。

時はみな月

六月下旬の比へ。よひは納涼するへ。

夜ふけて

六月晦日なれば。はや秋風もとづるへ。

ほたるたかくとびあがる

なにとやらん風情がおもしろき也。

行ほたる

後撰には秋の部に入たり。鴈を本にしたるにや。これは夏の哥也。

よひのほとは

暑氣甚しきやうなるが。夜ふけて身にしむ風の吹て。仲秋八月の天のやうにおぼゆるに。折節ほたるたかくとぶへ。藁葭水暗螢知夜の舛へ。とく鴈をももよをしたてよとい

ふ心へ。

くれがたき

忌にこもる舛へ。上の哥は夜の哥へ。是は晝の舛をよめる哥へ。其事となく辭面白し。我を思ふゆへになくなると云。人の忌にこもれるが。あひそふたる事もなし。何事を名残にせんともなきに。かなしきは其事となく物ぞかなしきなり。

^{四十六}うるはしき友

業平の友也。明友の交は親子よりもむつまじきものへ。

人の國へいさける

任にをもむくに。一任四ヶ年や五ヶ年なり。さやうの時のと成べし。たゞ隨意に人の國へ下には有べからず。

月日へてをこせたるふみ

ぬ中よりをこせたるふみへ。毛詩にも一日

不見如三秋兮といへり。

めかるればわすれぬべき

さいく見えしたかはねばわするゝ物之。

めかるとも

こなたはめかるともおぼえず。わするゝ時
しなれば。つねく面影のはなるゝ事な
しと之。

^{四十七}
おほぬさの

太麻は祓の具之。あれこれの手をふるゝ物
之。あれ是が引手おほき程にたのまれずと
之。

おほぬさと

太麻はあれこれの手をかくる物にてはあれ
共。祓してながせばよるせあり。つゐのよる
せにはそなたをこそ思へといへり。

^{四十八}
むまのはなむけ

旅へ行人に馬のはなむけせんとすれば。を

そく来るを待なり。

今ぞしる

人を待事は苦しき物之。人にまたるゝとい
は。萬事をさしおきて行べき事にてある
よと。我心に領解する之。此句法面白。

^{四十九}
うらわかみ

常には業平の妹をけさうしてよむといへど
もしからず。妹をふびんにおもひて。憐愍の
心にていへる之。ねよげは草の根によせて
ぬる方を云り。我妹を子細なしとしれども。
人の心は万差なれば。なにとる幸をもひか
ずしてやあらんと。心くるしくおもふ之。此
心末にて見えたり。

はつ草の

めづらしきといはんとて。初草とをけり。業
平のおもひもよらず詞をかくるものかな。
此ほどまでうらなく底に徹して。我事を思

ふ事のありがたさよと。源氏のあげまきに。にほふ兵部卿の宮の一品の宮に繪見せ參らせらるゝ時。うらなく物をといひたるを。ひめ君もされてにくゝおぼさるゝといへり。

五十
うらむる人を恨て

人の方より業平を恨て。其人をうらみ返す。是より四五首は有まじきと共をつらねてよむ。

鳥のこを

卵を一ツかさねんも。すべりてなりがたし。百のかいこはなにかかさねらるべきぞ。有まじき事をいふ。世間のあふなき事を累卵といふ。文選註に説苑を引。晋平公が時に九層の臺を作る。荀息がこれを諫めんとて。臣はよく碁子を十二かさねて。其上に卵九をかさぬる事をする。と云。平公云。それはあ

やうき事。荀息云。是あやうからば。公の九層の臺を作て百姓を煩す。是甚あやうき事。と云。平公領解して臺作る事を止たり。文選注には平公を靈公とし。碁子の術するといふ物を孫息としたり。こゝは故事機縁の方にはあらず。成まじき事にいふ。縦有まじき事はありとも。思はぬ人を思ふといふ事は有まじきと。

あさ露は

雷光朝露はあだなる物に云り。露は朝ばかりをいて。日影に消てのく物。自然あさ露は消殘ても有ぬべし。いもせの中などは頼みはつまじきと。

吹風に

今年の櫻なりとも。ちらずしては有がたし。去年のさくらは何か殘る事の有べきぞ。それは殘る事有とも。人の心はたのみがたし

と也。去年の櫻といへるは。一重起していへる也。

ゆく水に

經文に。亦如畫水。隨畫隨合。

行水と

前の哥にいへる物を取集てよめり。日月のゆくは山水のどし。過るよはひ又とゞめられず。散花さゝへがたし。是等は思ふばかりの袖あつてもとめられず。いづれもまてといふ事をさかざる物也。

あだくらべ

物語の作者の詞也。

しのびありき

身を治ずして。好色をもてありくものゝしける事と云り。

伊勢物語惟清抄下

^{五十一}うへしうへば

うへしうへばとはかさね詞也。うへをくならばと云心也。春秋はきはまる限なし。此花を植をくならば。秋のなからん事はしらず。さかぬといふ事は有べからず。花こそちるとも。根のかるゝ事はあるまじき也。千秋万歳たるべしと云り。人の花などうへたらん時は。此心をもてよむべし。

^{五十二}かざりちまき

粽を糸などにてまきたるをいふ。拾遺の詞などに有事也。

あやめかり

あやめにて粽をする事はなけれども。今日あやめを賞する日なればかく云り。先かざり粽をこせたるを謝したり。そなたはぬまにまよひ出て粽をして給はれり。我は野に出て狩をするとして雉をやる也。

あひがたき
五十三

詞がきを心におひて。此哥を見れば勢あり。細々あひあふて物語せんだにも。其殘多からんに。あひがたきにあへる心さぞと思ふべし。

いかでかは

餘情あり。

行やらぬ
五十四

たどるゑ。天福本にはたのむとあり。せめて夢にあはんとおもへば。夢にもあはずしてたどるほどに。たもとに露をくゑ。此たもとの露は常のあまつそらなる露にては有べからず。おもひの露こそをくらんとゑ。露やをくらんといふをとがめて見べし。後撰にはあまつそらなきと有。

えうまじう
五十五

つゐに我手にまはるべきやうなきを云。

おもはずば

そなたには有つる物とも思はずも有やすらめど。こなたにはこしかたのとばの。折ふしどにたのまるゑ。

ふしておもひ
五十六

詞がき深切なり。哥はあさくとして。詞書に相應せぬやうに見えたれ共深き哥ゑ。

我袖は

わが袖はなべての露もをきあまりたるやうゑ。草の庵をみれば。ふかき露のやうなれ共。我袖はそれよりも猶まさりてふかき露ゑ。いづれも干がたき露をいふ。

戀わびぬ
五十七

五文字が肝要ゑ。年月いかさまにせんと思來れ共。何のかひもなく打過て。すぢなきとに辛苦して年月を送たり。是は我から身をもくださつるよと。身を觀じてよめり。

五十八

こゝろつきて色このみ

物おもひに心をつくしたるなり。

宮ばら

不審。

「長岡に伊豆内親王の宮ありし。そのほとり
の宮の事にや。宮ばらとかけける。宮をゝき心
也。純子。万子。桂子。中野内親王。高津内親
王など也。」

ともなき女

宮づかへの女ども也。

田からむとて

業平のすむところをも見。又いひよらんと
ていへる詞也。此段誹諧のやうに書なせり。

すきものゝしわざや

業平の家居の興あつてすみなせるを云。

あれにけり

業平のかくれたる程に。あるじのなき心に

て。おさへてあれにけりといふ。あるじもな
く人もなきは。いくよの宿にてかあるらん。
住けん人のをとづれもせぬよと云り。

むぐらおひて

前にあれにけりといふ哥をうけていへる
也。鬼とは女をいふ。むぐらおひてあれたる
宿のうれはしきを。女どものあつまるが。更
に本望にもあらずとよめり。女を鬼といふ
は。あだちのはらのくろづかに鬼こもれり
といふはまとか。とよめるも女のと也。

ほひろはん

前に田からんといひし程に。又こゝにもほ
ひろはんと云。

うちわびて

そちにをちぼひろふと云。我も同道せん物
をと。悉皆誹諧也。

五十九
京をいかゞおもひけん

前にも京やすみうかりけんとありし也。

すみわびぬ

義はあらはへ。後撰には爪木こるべき宿もとめてんとあり。俊成卿の。すみわびて身をかくすべき山里にあまりくまなき夜半の月かな。今はとてつま木こるべき宿の松ちよをば君と猶いのるかな。二をとれり。

おもてに水そゝぎ

冷水灑面の心へ。絶入する物には。面に水をそゝげば蘇生する也。

我うへに

水をそゝがれていき出て。是は世のつねの露にはあらじ。天河のとわたる舟のかいのしづくにてぞ有らむとへ。

いきいでたりける

絶入して哥よむ事かたかるべきにや。造次顛沛其道をわすれぬ所の奇特なるものへ。

宮^六づかへいそがしく

朝家奉公の身にして。家に入事なきを云。

こゝろもまめならざりける

業平の家をかへりみる事なさへ。

まめに思はんといふ人に

ひとりずみのやうにあらんよりは。よく思はん人あれば。それにつけなど。媒のいへるについて。人の國へいにけり。

此おところさのつかひにて

業平の宇佐の使にたてゐるへ。上古は宇佐へはしげく使たてり。何時も朝家に事のあれば。使をたて給ひて尋申されて。其神勅によりて定られしへ。然るを孝謙天皇惠美押勝道鏡法師が事などに亂りなる事をしませば。向後返答申すまじきとて。其よりして神勅は止りしへ。されども猶朝家に重事の有時は。宇佐へ使をたてらるへ。又代のはじめ

にも使たり。こゝは代の始の事か。又たゞの時の事か。

ある國の

道すがらの國なるべし。中國たるべし。

しその官人

しそのは祇承也。職掌の官の下に。しそのの官いくたりもあり。まかなひなどをする者。宇佐の使に限らず。齋宮などにもあり。

女あるじに

もとの家童子がしかと見んために。酌をとらせよといへり。

かはらけとりて出したり

宇佐の使の祇承の官人なれば。異儀に及ば

ざるにや。

さ月まつ

さ月まつといへるとて。卯月とは心得べからず。橘はかならず五月にさく物なれば。花

橘といはむとて。さ月まつとをけり。もとしたりたる人にいはんとて。むかしの人の袖の香と云り。

あまになりて

よからぬものゝいひなしに依て。ゐ中に居ておちぶれたる事を面目なしとおもふにや。

^{六十一}つくしまていきたりける

是もうさの使の事か。

これはいろこのむ

業平を見て。あれこそ色このみのすき物よといふ詞え。

そめ川

つくしにそめ川といふ川有。そめ川をわたりて來たるほどの人が。色にならぬは有べからずと云り。色このみといふを。さやうになくてはと云え。

名にしおはゞ

色このみといふを。さはなしと業平の陳ぜ
ば。又別にもいふべきに。色好なりとうけこ
えるほどに。をさへてよめる。そなたから
好色とうつて出していはゞ。させる好色に
てはあるべからず。たはれしまをよそから
見れば。なみのかくるが。白絹のやうにみゆ
れども。近く見ればさもなし。そなたに色こ
のみと名にしおはゞ。そらごととなるべし。た
はれしまの白絹のやうなどいへるが。さも
なきがごとくなるべしと也。

^{六十二}をとづれざりける女

業平のかたへをとづれざる。

こゝろかしこくや

媒のよさまに物をいふによそへゆく。

いにしへの

我身はをとろへて。むかしの匂はいづくへ

か行らん。花などをこきちらしたるやうに
なると覺る。

これやこの

我にあふ事をのがれて年月をふる程に。お
もひなをさんかとおもへども。おもひなを
す事もなさ。我を思ふ事のまざるかとお
もへ共。さもなしと。女をあてゝいふやう
に見る儀は。業平の性にあらず。

^{六十三}世ごゝろつける

世界へ心おほきやうなる儀。

まとならぬ夢

見ぬ夢を見たりといふ事。

けしきいとよし

歡然たり。

こと人は

三郎なる子の心。我母をと人にあはせん
も思はしからず。在五中將にあはせたと

思へり。

狩しありきける

業平のかりえ。

もゝとせに

あながちに九十九といふ儀にあらず。つよく年の老たるといはん爲え。つくもがみとは。髪をみじかくして。藻などのごとくなるを云。

いてたつけしき

業平のさらばいかと出たつけしきを此女の見て。むばらからたちにかゝるをもしはず。家ににげ歸る。

男をんなのせしやうに

女の所へ行ぞ。女のせしやうにかいま見したり。

さむしろに

けぢめ見せず

業平の性をかけり。人は好惡が別なる物なるに。なりひらはけぢめ見せぬ人なりと云り。

^{六十四}ふく風に

風はいづくにもすきひまあれば吹入るもの。我身をふく風になさば。ひまもとめて入て見ん物をと云り。

とりとめぬ

隙もとめつゝ入べきと云ををさへて云り。風は手には更にとられぬ物え。取とめぬ風なりとも。玉すだれの隙をこなたがゆるして。もとめさせんにこそ入べけれど云り。

^{六十五}おほやけおぼして

御門の御寵愛ありて召仕る女え。

色ゆるされたり

禁色をゆるさるゝえ。

大みやすん所

染殿の後へ。

在原なりける男

業平へ。

女かたゆるされたり

業平は好色の方ゆるされたりと。舊からよめるが。此はわかい上達部の中に。女のある簾中に召入て仕ふ事などゆるさるゝ事を云へ。

女いとかなわなる

我身のために然べからず。又はそなたの爲もいかゞと。諫していへるへ。

思には

分明へ。

ざうしにあり給へれば
つぼねより出るへ。

れいのこの

業平へ。

なにのよき事と思て

女のさとへ行こそよき事よと。業平のおもへるへ。

とのもづかさ

此儀をもと事外に勞していかゞみんと云り。後の里は長良卿へ。そこには主殿司は有まじきなどいへり。こゝはやすく心得られたる所へ。むかしは宿侍とて。藏人頭以下雲客はみな殿上に宿直するへ。殿上に夜は幕をたれて。臺盤を取のけてうへふしするへ。晝は幕をまきあぐるへ。この時業平の殿上にある躰をして。女のさとへゆいて。あくる日とく歸るへ。主殿司のみるに。晝を奥へなげ入て。夜はこれにつめたるかほして居へ。かやうに見れば。なにの造作もなきにや。

戀せじと

古今には不逢戀に入たり。

くらにこめて

ぬりごめなどの内にをくえ。しほるとは。責

勧するをいふ。

あまのかる

我からとねをなひて。世をば恨むまじきと

也。哥よまん者は此哥を心に持べき事なり。

唯人は我からとおもふ心あれば。恨みを人

にはかけぬ物え。

さりとともと

業平の我にもしやあふとぞおもひてするら

ん。我身は此哥に有にもあらぬ躰なる物を

と云り。

いたづらに

古今にあり。人丸哥え。

水尾

勘物にみゆ。

^{六十六}津の國にしる所

業平の知行なり。

あにおとゝ

業平兄弟五人有。行平。守平。仲平。大江音人
え。

なにはづを

けさは今朝にあらず。今こそといふ心え。舟
のなぎさにかゝるも有。海士のれうするも
有。行も有。歸るもあり。たゞはかなく浮も
あり。是を見てよめるえ。

^{六十七}せうえうしに

前段の次え。

きさらぎばかり

二月餘寒の時分え。

きのふけふ

折ふしもこそあれ。昨日今日雲のいこま山
をかくすは。此雪のおもしろく木ずゑに見

ゆるは花のごとくなるを。此花のはやしを
おしみて立かくすかと云り。狂雲妬佳月の
心之。

^{六十八}
いづみの國へ

是も前段のつゞき。

すみよしの郡

只すみよしのはまを行とばかりには。餘情
有まじきに。すみよしの郡住吉の里すみよ
しのはまとおもしろくかけり。京極黃門。け
ふぞみる春の海べの名なりけり住吉のさと
すみよしのはまとよみ給へり。住吉郡は今
はなし。上古のなをかへたる事多ほどに。此
物語の時分までは有ぞするらん。

かりなきて

住吉に鴈なき。すみよしに花さくをよむに
はあらず。世間の秋の景氣を云り。世に鴈な
きて菊のはなさく秋はあれども。今春の海

べにすみよしのはまは。なをまさりたりと
いふ心之。

みな人によます

感慨をおこして。是に及も有まじければ。贈
答申さんに非ずとて。みな人々哥をよまざ
る之。

^{六十九}
かりの使

此段事題號の時述たり。伊勢物語と云題號
に合せん爲に。此段を端にあめる本有。これ
は伊行が所爲之。用ひざる説之。狩のつかひ
とは。昔は諸國へ狩をさせん爲に。勅使をた
てらるゝ事。國史にのせたり。業平は今伊勢
尾張の兩國の狩の勅使に行之。異朝にも巡
狩とて。自身國々をめぐりてかりするは。其
國の治否を見んため之。此國も一任三年に
て。吏務をもしつべき器にたへたるものに
國をもたしむるに。當任のものなにと國を

治るぞ。又民もしたかうかを見せん爲に。狩の使としてつかはさるゝ事なるべし。

齋宮なりける人のおや

齋宮は^(宮脱殿)怡子内親王^之。惟高親王と一腹也。其齋のおやは紀靜子^之。されども此ねやをば染殿后と見べし。齋宮繼母^之。繼母なれども齋宮を實子のやうにし給へり。

ねんごろにいたわりけり

京よりいへるとて。別して心をそへられたり。

われてあはんと

われても末にあはんとぞおもふと。崇徳院御製たり。わりなくあはんといふ心^之。

女もはたあはじともおもへらず

あさなき時より齋宮にて。夫婦のかたらひをも知給はねば。あふまじき事ともおもひ給はざる^之。

女のねやちかく

ねやもちかくと。もの字有もあり。なきも有。

月のねぼろなるに

狩の使は大略春二三月^之。古注五月四日と有歟しからず。

また何事もかたらはて

たしかにあひ奉るとかゝず。されどもあひ申事^はありぞしつらん。

君やこし

君やこし我やゆきけんの二句のみ^之。そなたがこちへくるか。我そなたへ行か^と。此二句を下句にていひのべたり。

かさくらす

君やこし我や行けんといへる事。我もなにともおぼえず。夢かうつゝか。今夜あふて定めよと云り。古今には世人さだめよとあり。

よ所に定めよといふ心へ。此にも兩説を付たれども。こよひは猶まされるなるべし。

國のかみ

國の守にて齋宮の守を兼ねたる人へ。

夜一と酒のみ

饗應するへ。

もはら

專一にあひ奉らんとする事もえせざるへ。

おはりの國

伊勢の狩はてゝ尾張へ行へ。

ちのなみだ

懇切の所をいはんとて。血の涙とかけり。

かち人

上句ばかり書たり。心は淺き縁といはん爲へ。一夜あひ見たるを云。是等を連歌の起りにするにや。

ついで松

たい松へ。續松と書へ。松を相ついてもす程についで松といふ。其きる墨にてかくへ。

又あふ坂の

又あひ奉る事のあらんと云心へ。

か^そりの使より

前と同時の事へ。尾張へ行て又伊勢へ歸る時へ。

大淀のわたり

伊勢と尾張の道へ。

みるめかる

齋宮を今一度見奉らん事を。我にをしへよと云心へ。わたの原八十島かけてこぎ出ぬと人にはつげよあまの釣舟。と小野篁が配所へをもむく時よめり。物を問事も。そこに熟したるものに問ずしては知がたし。みるめかる方を問ふならばあまへ。春日野のとぶ火の野もり出て見よ今いくかありて若菜

つみてん。若菜はいつもえんどと問はんならば。野守が案内者たるべきと。

内^{七十一}の御使

同狩の時の事歟。又いつにても只御使の時歟。

千早振

神のいかさはこえん事にあらね共。越て成共業平を見たきといへり。垣を越るは法度をそむく心と。法度を越ても見たきと云心と。

戀しくば

こひしくばこなたへ來ても見よかし。神のいさむる道にもあらずと。天の浮橋にて女神男神となりしより。神の制する道に非ずと。

大^{七十二}よどの

大淀の浦に松の有を。其本に浪のよせかへ

りくするは。恨みあるやうなれども。さらに松はつらくもなしと云は。業平の我をいみじく恨みらるれども。我に恨みん事はなしと云心と。

目^{七十三}には見て

月の桂を女にたとへて云り。

いはねふみ^{七十四}

千山万水をへだつれども。心のかよふ道あればあふ事あり。我中には山川をへだてざれども。あはずして戀わたる。

伊勢^{七十五}の國

我身をひきゐていきてあらんと。

大淀の

みるからにといはんとて。大淀のはまにあふてふとは云り。心はなぎぬとは。心はなぐさみぬ。かたらはざれども。見るばかりにても。心はなぐさむと云り。

袖ぬれて

序哥へ。みるをあへにしてやまんとするか。
我心はみたるばかりにてやまずとへ。

岩まより

みるは岩間より生る物也。みるはみどりに
て不變物へ。心だに不變にあらたむる事な
くば。たれかあはざらん。人の心は變じかは
るともよからんとへ。みちひる鹽ののどけ
からぬをと。源氏にも云り。

なみだにぞ

我袖はしほのみちひにはぬれず。そなたの
つらき心が袖のしづくとなりてしぼると
也。

世にあふ事

面白趣向へ。

春宮^{七十六}のみやすん所

東宮の母儀をいふ。

氏神

大原野の社は。閑院冬嗣公の初て我氏の神
春日を勸請申されたり。藤氏の后宮は必行
啓あり。五條后順子始て行啓也。

近衛づかさ

業平此時はまだ羽林にては有べからず。後
に極官を書か。作物語なれば何共書べし。

大原や

たけの有優なる哥也。東宮のみやすん所行
啓ある程に。天照大神と春日明神との契り
たまひし。相殿の昔をおもひ出すらんと也。
底には二條後のたゝ人の御時參り通せし事
を。思しめし出すやと云心へ。神代とはもと
の心也。久といはんためへ。風の哥などは是
等ぞ本なるべき。上ははたとして。底に心を
つけて見れば。心の深き所有へ。江次第にも
東宮行啓の所にのせたり。名譽にや。

七十七
むかし田村みかど

文德天皇を申奉る。

安祥寺

人々さげ物

寶物とて。御願の時。宮々公卿殿上人の參ら
するもの。或はうち枝につけ。或は木の枝
に付たり。

山もさらに堂のまへに

おもしろくかけり。動ぜぬ山が俄にうごき
出たるやう。

右の馬のかみ

業平。

目はたかひなから

目將かいをつくりながら也。後成恩寺目は
違ながらと見給へり。山のうごき出たるや
うに見えたりと云は。業平の目はたかひな
がら。

山のみな

山もけふ別をかなしむなるべしと。

よくもあらざりけり

是等業平の自記と見えたり。今見ればよく
もあらず。其時はよかりしやらん。人のあは
れがりけりと。

七十八
山科の禪師

人康親王。勘物に見ゆ。

よるのおまし

出てたばかり給ふ

三條のおほみゆき

清和天皇の西三條の百花亭へ行幸有し事
。此行幸のために。紀伊國の千里の濱の石
を取よするに。行幸以後到來するほどに。人
の局の前にすてをかれし。

さしよりは見るはまされり

物は聞しよりは見をとりする物なるが。此

石は聞しよりは見まされりと云。

右の馬のかみ

業平云。

あかねども

是にて満足する事はなけれ共。我心を岩にかへて見せ奉ると云。

氏セナの中に

在原氏の中に親王の生れ給ふ云。行平の女の腹に貞數親王の生れ給ふを申云。貞數親王は業平の甥にあたり給へり。

御おほぢかた

貞數親王の御おほぢは行平云。行平方なる男とは業平云。

我がどに

千尋の竹は仙家に有。竹は空虚にして廉潔云。仙家の竹の千尋有やうに。久しくあらんと云心也。夏冬は嚴寒炎熱にして人の苦痛

なる時云。夏の炎天にも冬の極寒にも。此陰にかくれば。愁なくして千秋萬歳ならんと云心云。

ひかしをとろへたる家

ぬれつゝぞ

雨をばぬれつゝといひ。藤をばしゐて折つるといひて。雨をも藤をもいはざるは。詞がきに讓れば云。やよひつごもりを。春はけふのみとよみては曲なし。春はいくかもあらじといへる尤面白し。

左ハナのおほいまうちぎみ

勸物に見ゆ。

賀茂川のほとり

かも川は末まであるほどに。六條にてもかも川のほとりと云り。

うつろひさかりなる

紅などの移ろふ。又さかりなるもありと云

り。

ちくさ

うすくこさへ。

かたいおきな

かたくなゝる翁へ。業平の自稱也。

いたじきの下に

天福本にはだいしきの下とあり。武田所持の定家の自筆の本に。こゝをすりていたじきとなをせり。然ば舊はだいしきとありし歟。舞臺などのやうなる物をいふ歟。こゝにいたじきの下といふは。親王上達部の下にありと云心へ。末座に有儀へ。

しほがまに

こゝを端的のしほがまにしなして。我はいつ此しほがまの浦にはきぬらん。つりする舟もこゝによらんとよめり。しほがまに似たるなどよまざる所尤面白し。山谷が惠崇

が畫夾^ニ題する詩に。惠崇烟雨蘆鴈坐。我瀟湘洞庭欲喚。扁舟歸去故人道。是丹青と作れるに同きにや。古今に。みちのくはいづくはあれど鹽がまの浦こゝ舟のつなでかなしも。

^{八十二}
これたかのみこ

勘物に見ゆ。小野にましますによて。後に小野宮と申す。みなせといふ所に宮有。別業をかまへたり。

右の馬のかみ

業平へ。

其人の名わすれにけり

其右馬頭の名をさへわすれたりといふ。業平の賤官をかくすにや。

大和うた

世の中に

春になれば花はいつかはさかんと待心有。

はやさきぬれば。そゝろにあてがれて。いづ
くの花にもと思へり。やゝうつろへば。風雨
に心をいたましむ。是皆櫻のあるゆへ。櫻
のたへてなくば。春の心は長閑ならんと云
り。

又人の哥

有常が哥也。

ちればこそ

めでたければ愛したけれと云心へ。ちるを
こそ櫻の上にはとに賞翫すべけれ。浮世は
皆盛者必衰のことはり。其理を見するは
花に有と云心へ。

みこに右馬のかみおほみきまいる

業平の酌をとる。

かりくらし

このぬしは七夕つめにてあれば。日もく
るゝ程に。七夕つめに宿をからむと云り。

返しえし給はず

當座に倉卒に返哥をえし給はぬにや。又沈
醉し給へる故にや。

一とせに

七夕はひこぼしにこそ宿をかせ。たゞの人
にはかさず。そのひこぼし待つる所なれば。
人に宿かす事は有まじきと云り。

あかなくに

これはみこの今ちとおはしませかしと云心
をよめり。山のはにげては誹諧のやうなれ
共。此時に臨てはおもしろし。今などよみて
は宜かるべからず。

をしなべて

山のはにげてをあひしらひてよめり。こゝ
には惟喬親王一首もあそばさゞれ共。哥は
古今にも見えたり。さくら花ちらばちらな
んちらずとて故郷人のきても見なくに。白

雲のたえずたなびく峯にだにすめばすみぬ
る世にこそありけれ。是みな彼御詠^{八十三}え。

宮に歸り給ふ

京の宮に歸り給ふ。

枕とて

今夜は草枕を引むすぶ事をもすべからず。
秋の夜こそ長けれ。今は彌生晦日^{八十三}え。春宵一
尅賈千金なれば。ねずして明さんと云り。今
宵の夜は秋の夜とたのまれずと云り。未到
曉鐘猶是春と唐人も春をおしみ侍^{八十三}え。

御ぐしおろし給ふ

勤物に見ゆ。

小野にまうでたるに

小野はをはらえ。こゝに閑居してまします
所へ參る^{八十三}え。

みむろ

をこなひし給ふ室^{八十三}え。弘法の南都にある時。

をこなひ給ふ所を御室と云。寛平法皇の仁
和寺にまします所をも御室と申て。今に號
し奉る。

古の事など思ひ出

もと水無瀬へ常に參りしが。今は山居して
雪中にまします事よと。數々おもひつけ
たるなるべし。堯孝法印は此段をよみては
必落涙せしと^{八十三}え。片岡近江守が堯孝をなか
せんとは。わざと此だんをよむと云り。

わすれては

忘れては夢かと思て。更にうつゝとはおぼ
へず。加様に閑居幽間の御すまゐを。雪ふみ
分て見奉らんとはおもはざりしと^{八十四}え。

母^{八十四}なん宮なりける

伊豆内親王の御事^{八十三}え。

子は京に宮づかへ

業平は朝家に奉公^{八十三}え。

ひとつ子

業平は兄弟五人。行平。守平。仲平。大江音人。阿保親王の御子はおほけれども。伊豆内親王の御爲には。業平は一子。

とみの事

とみは急事なり。

老ぬれば

さらぬ別は無常のならひ。一たび寂滅はなくて。叶はざれ共。老ぬればとにたのまれぬ程に。いよく見まほしと云り。

世の中に

我身一ツの上はかけずして。世間へかけて云。世に生死のなくもあれかし。一切衆生の子たる者の爲によからんと云り。此内に

八十五
我も即こもれり。
わらはより

惟喬のわかくまします時より。業平の仕へ

申さるゝ。惟喬に業平はさばかりまされり。

ぞくなるぜんじなる

ぞくは俗人。ぜんじは法師。惟喬の御ぐしおろし給ふ時。御供して法師になる者にや。

ことだつ

正月なれば引つくるふ。

おもへども

思へどもとはつよく思ふ心。思へども思へどもと云心あり。源氏に思へども猶あかさし夕顔を露わすれ給はずと云り。こゝに此まゝも有たきと思へども。京に宮づかへする程に。身を分るならひなければ。暇を申さんとおもふに。雪のふりて。京へかへさじと留るは。眞實こゝに有たきと思ふ心とする事と云り。

八十六
今までに

そなたには忘れぞするらん。我は聊も忘れずと也。

八十七
あしのやの

つげのをぐしもさゝずは。いやしき者はつげのをぐし取あげて。髪などいふことなきをいふ。

とよみけるそこの里をよみける

今の古哥によめるは。あしやの里をよめると。よみけるぞと句をさらずして。よみけると切て。そこの里とよむべしと也。

ながさ二十丈ひろさ五丈

孫綽が天台山の賦に。か様なる見所を筆のとどほりなくかけり。今こゝの書やうも。ありくとして妙なる物。

わらうだ

圓座。

わが世をば

あながち命のけふかあすかと云にはあらず。業平のゐ中わたらひして。人数にもなくおちぶれたる躰は。今日か明日かと待やうなりと云り。待かひは待間。涙と瀧とはいづれがたかきぞと云り。涙のたきとつゞけてよむを。心の内に句を切て。涙のと切て。たきとよむべき也。

あるじ

業平。

ぬきみだる

此瀧の水精などを緒につらぬけるを。其緒をといてみだすやうに落る。左様にぬき乱る人こそあるらんと。下句はちと卑下せり。間斷もなくちるは。我袖のせばきには過分也と也。

この哥にめでゝやみにけり

是に上てす哥は有べからず。ふしぎの瓦礫
はいかゞとてやみけり。

もちよし

なにたる者やらん。系圖に見えざる程に知
られず。景など見すまして。家作て居たるも
のにぞ有らん。

やどりのかたを見やれば

あしやのなだのかたを見やれば也。

はるゝ夜の

晴天の星か。又川邊の螢か。我住かたの海士
のたぐ火かと云。

わたつ海の

わたつうみは只海の異名に云事もあり。又
海神の事に云事も有之。いはふは愛するや
うなる心之。海神のかざしにして秘藏する
藻なれ共。今日都のまれ人にはおしまざる
と之。折しもこそあれ。今此藻を吹よせける

は。君に參らせんためなりといふ心之。
あまれりやたらすや

物には有餘不足あるが。此哥はいかんと之。
^{ハ十八}これかれ友だち

中年にかゝり。中年に過たる友だち之。

大かたは

大かたと云は。十の物七つ八つと云心也。人
は物に著し貪する故に。月日の行をもしら
ず。空く殘生を送る也。然れば月にもめてじ
とは云り。

^{ハ十九}人しれず

及なき思ゆへに戀死なば。なにたる神のた
ゝりにて死たるぞと。神になき名をやおせ
んと也。

^九つれなき人

なびきがたき人也。

櫻花

花は今こそかく匂へども。あすをば知らず。
明日逢んと云るも。たのみ難しと也。

心ばへも有べし

心にはちとたのめども。たのみがたきと思
ふ心もあるべし。

^{九十一}月日のゆく

月日のゆくをば歎くべき事成を。人生はそ
うくとしてすごせり。此男は物をもい有
て。いつか其人にあふと思によつて。月日の
ゆくをさへなげく也。

^{九十二}あしべゆく

たなゝし小舟は小さき舟也。小船をあしべの
中にこぎ入たるは。よそよりはみへず。我が
思ふ人のもとへ行てはかへりくすれど
も。人のしらざるは。たなゝし小舟を芦の中
へこぎ入て。人の知らぬが如しと也。

^{九十三}二なさ人

一なる人也。

すこしたのみぬべき

一向されはなれざるやう也。

あふなく

天福本あぶなくと聲をさせり。たとひ定
家自筆の本たりといふとも。聲をば後人の
さすことも有べければ。必聲を信じがたし。
まづ此はあふなくとよみ來れる。念比
なる心なり。なぞへなくはなぞらへなくと
云義。懇に思はすべし。戀路はたかきいや
しきになぞらへなくくるしきと。

^{九十四}すまらずなりけり

業平の女を離別する也。天福本には女の字
なし。

後に男ありけれど

他人に嫁すれども。子ある中なれば。時々云
ひかよはす也。

ろうして

禪閣抄に嘲弄の弄とみたまへり。あざけりてよみてやると也。又はうちあらはしてよむ。漏の字の心なり。

秋の夜は

秋をば今の男にたとへ。春をばもとの男にたとふ。秋の夜は春の日をば忘るゝ。當季に心のうつる故。霞は春の物。霧は秋のもの。霞には霧やまさらんと云は。我よりも今の男やまされると云心。

千々の秋

秋を千合たり共。一の春には及ぶべからず。我は業平をこそ思へ。今の男をばおもはずと云て。され共男の心はいづれもたのみがたき事。花や紅葉の共にちるがごとしと也。

九十五
おもひつめたる事

日來のつもれるおもひ也。

ひこぼしに

七夕は年にまれなる契りなれ共。其夜をたがへず必あへり。我はものごしへだてゝ。直にあふ事なければ。ひこぼしよりは戀はまさりてかなしき也。

九十六
岩木にしあらねば

人非木石。必有情。

身にかさも一つ二つ

六月の溫氣の折ふし艶にもなし。秋に成あはんと云。

其人のもとへいなんず

業平のもとへゆかんとするなど云口舌。

かえてのはつもみぢ

紅葉せん時分に非ず。されど早く色付も有物なればさも有にや。

秋かけて

秋風吹立なん時にあはんといへるが。さも

なきを云。木の葉ふりしくえとは。あさくなる江也。縁によせてよめり。

かしこより人をこせば

上にをこせたりとあれども。其時やるには非ず。やらんとて書付て置て。使あらばやれと云てをく。それを今をこせたり。

けふまでしらず

よきさまやらん。あしきさまやらん。又何たる所に有やらん。行末もしらず。

あまのさかてを打てなんのろひをる

後成恩寺抄に。地神第四代彦火火出見尊の兄の火闌降命の釣針を失給ひて。海中へ行て取て歸り給ふ時。海神のをしへにさまざまのろくしき事を云つゝけて。此釣針をうしろ手になげ返し給へとありしを。其をしへのごとく出見尊のし給ふ。是よりして人をのろうとて。手をうしろへやりてたゝ

く事有。其事をあまのさかてをうつと云と註し給へり。さも有ぬべし。師説に海士のかづきしに海底へ入時。さかさまになりて入とて。手にて波を打てゆく。いきをもえせず苦敷事なり。業平のおもひの切なる事。あまのさかてうちて千尋の底に入やうに苦を云也。のろひをるとは。其人を切に怨を云ふ。

むくつけき

業平の我のろひ事を我とむくつけき事といへる。女はよはき所ある物なれば。おちてかへりあふ事やあらんとおもひて云る。

此物語は狂言又いやしき事などをいへども。詞花言葉を翫といへれば。うちのべてよみて。そこに心をつくべからず。但人の好む

所にしたがふべき歟。

堀河^{ナナ}のおほいまうちぎみ

勘物に見ゆ。

四十賀

堀河の大臣の家九條に有。四十賀は貞觀十七年。

中將

此時業平未中將に任ぜず。後に極官を書けるなるべし。

さくら花

いづくもかきくもりて見えぬやうにあれ。

今老の來るべき道のまよふやうにとよめり。かにといふかの字。今日の御賀の賀を自然にもたせてよめり。俊成卿定家卿も自然により來れるが面白と評せられし。

^{九十六}あほさおほいまうちぎみ

忠仁公。

つかうまつる男

業平。忠仁公に家禮。

我たのむ

作枝をよめり。今なが月は梅のあるべきにあらざれば。時しもわかぬと云り。ときしもと雉をかくし題によめり。古今にはよみ人不知の哥にて。前太政大臣忠仁公とす。忠仁公の詠草などに有を見て勘入てをく歟。

^{九十九}右近の馬場のひをりの日

ひをりの事。和哥の一つの難義とて。秘する様にいへども。又秘すべき事にもあらざる歟。毎年五月にあらてつがひとて。左右近衛が二たび馬にのりて弓いる事。三日は左近のあらてつがひ。四日は右近のあらてつがひ。五日は左右近のま手つがひ。^(符號)六日は右近のま手つがひ也。是をひをりの日と云は。ま手つがひの時。とねりども褐をひきおきてきるほどに。ひをりと云。あらてつがひ同躰なれども。それはそとの儀式ばかりな

れば。まてつがひをひをりと云。賀茂のあし
そろへはそとして。競馬はしきじやうを用
がむし。後成恩寺。左右近の馬場におとゞや
とて。近衛中少將の着座する所有。業平おと
ゞやにつきて。女のかほの車の下すぢれよ
りはづれたるを見けるにや。但それは程遠
くてよくも見ゆべからず。又哥をよみかは
さん事もいかゞとおぼゆるうへ。大和物語
には。その日中將見物に出たるよし見えた
りとあそばせり。

見ずもあらず

はづかに見たるばかりなれども。其人を忘
れがたくば。あやなくけふやながめくらさ
んと也。

しるしらぬ

知ともしらぬともいふ事なし。戀路はたゞ
思のみこそしるべなれと云。大和物語には

此返哥別の哥也。されども此哥が本なれば。
古今には是を入れる也。

後にはたれとしりにけり

後にあひたるなり。

後涼殿

清涼殿のうしろにあたれば。後涼殿と號す。

清涼殿とよむが後涼殿とよみ付たり。はざ

まは御殿のあわひ也。

忘れ草を忍ぶ草とやいふ

わすれ草忍ぶ草一ツなり。そなたには忘れ

たれども。忍ぶとやこたへんと云心なり。

わすれ草

そなたには忘れ草おふるとやみるらん。こ

なたにはいつも忍び申せば。後も猶たのま

んと也。

行平

業平の兄なり。

まさちか

勸物に見ゆ。良近。藤氏系圖に見えず。實錄などにのるか。卿位にのぼらぬ程に見えず。弁官補任などに有べき歟。

花のしなひ

藤の咲たれたるやうなるを云。催馬樂に青柳のしなひを見ればとあり。柳糸をもしなひと云り。

あるじのはらからなる

業平なり。

あるじしたまふ

行平の饗應とさくえ。此等の詞業平の自記と聞えたり。

さく花の

忠仁公の榮花の一家一門に及をよめり。

^{百三}世中を思ひしりたり

是をもて知ぬ。哥をよまんひとは有爲無常

をしり。世のとはりをも勸弁して。教誨の端ともなり。天下の治をもいたすべき事。古今の序に。いきとしいける物。いづれか哥をよまざりけるとかけり。人倫としては禮法道理を知ざるべけんや。

しぞく

親族。次に齋宮と其人をあらはせり。もとあひたてまつれる中なれば親族といへり。一夜の契に依て子をうみ給へり。師尙とて高階氏になれる是。今に高階氏の參宮せざると云此儀也。

そむくとて

尼になりて世をそむくとて。雲風に乗て世を外にする事はなけれども。さすが俗中にある様にはなし。世のうき事はよそに成行と云り。

^{百三}まめにじちようにて

まめに實要とは。同じ事をかさねて云る。
深草の御門

仁明天皇を申奉る。

心あやまりや

前に實要といふ程に。心あやまりやと云り。

ねぬる夜の

ねぬる夜の夢とは。一たびほのかにあひて
し事をいふ。ほのかにあひみし夢をはかな
みて。今まことの夢にやみんとまどろめば。
いやはかなきとのまさと云。

きたなげさよ

謙退の辭之。

^{百四}となるとなくて

子細はなく尼になる。

世をうみの

尼を海士によせてよめり。めをば海士が
かるものなればめくはせよと云り。世をうし

とて尼になれる人とさく程に。めくはせし
て。心をあはせよとたのむと。

見さしてかへり給

^{百五}はづかしく思て。見さして歸り給ふ也。

しら露は

しら露はさえばきえん共まゝ。露は玉の
やうに見ゆるが。其玉をつらぬく物も有ま
じきぞと。

なめしとおもひけれど

及なき人を業平のおもひかけて。なをこれ
をすてえぬはびんなけれども。心ざしはい
やましになると云り。如此見よといへども。
只是は白露はけなげなゝんといへるは。
存外には思へども。心ざしはいやましにな
ると見べきなり。

^{百六}ちはやふる

當位即妙の哥。たつた川に紅葉のちりし

けるを浪の所々くゐるは。神代にもかゝるとはさかずと云。神代には神變ふしぎはあれども。それもかゝる事はさかずと云り。首尾相應。言語同斷。

^{百七}あてなる男

業平云。

その男のもとなりける人

業平の妹云。はつ草の返哥せし人云。業平のねよげに見ゆると云哥よみて。妹をけさうしたると云儀は。さなきと云は此段にて見えたる事云。

とし行

勸物に見ゆ。哥よみ云。後撰卷頭の作者也。

一切經かきし人云。

ふみもおさくしからず

ふみなどかく事に長ぜざる也。

哥はよまざりければ

前になどめづらしきとの葉どの哥よめり。一向よまざるに非ず。

案をかきて

敏行は哥よみなれば。おかしさまなる哥よませて。見をとさせじとて。案をかけるなるべし。

つれづれの

しづかに紛るゝかたもなく。此女をおもふ折節の涙川は。袖のみひぢてあふよしもなしと云り。

あさみこそ

浅みなればこそ袖はぬるゝらん。それを頼まん事に非ずと云。これら返哥の本と云り。源氏物語に贈答の本と云。袖ぬるゝ戀路とかつは知ながらありたつたごのみづからどうき。浅みにや人はありたつ我方は身もそぼつまでふかき戀ぢを。

男ふみをこせたり

ちと心得ざるか。是は此女を我がものに
して後の事。こゝは又一段に見べきと堯孝
も申と。

かずくゝに

誠におもひもせよ。思はずもあればや。問が
たきといふ。そなたの心は見えたれば。我身
をしる雨はふりまさと。とひがたみ。問
がたくなると云心。雨ふらずばきぬべし。
ふらばこじと云を云る。

しとゞにぬれて

ひた／＼となる程にぬるゝ。

風原ふけば

とはとはとこととはにと云心。とはのはの
字。にぐりてよむ。風ふけばとはに波こそ
岩のごとく。風のふかぬまもなく。浪のたゝ
ぬちりもなく。常住風波にぬるゝ我袖と

云り。

きゝおひける

業平の我身の上にきゝをひける。

よゐどに

よゐどにとはよゐのまの事に非ず。夜ご
とにといふ心。夜な／＼に蛙が雨をねが
ふてなく田には。雨はふらねども。水はま
さるやうにおぼゆる。蛙のきざしよりして
水のまざるやうに。業平の思のきざしより
して。そなたの衣手のかはく時なきぞと。
又の義には。此女の心おほくして。あまたの
男をかよはす程に。それによりてそなたの
衣手のかはく時なき。水こそまされとは。
そなたのおもひのまざると云心。雨はふ
らねどは。こなたゆへの思ひに非ずと云儀
。

友百九だち

業平の友だち。女にをくれたる歟。

花よりも

花はあだなる物なるが。花よりも人は猶あだになりたり。「宵云。その人のありし時は。」「花を前に戀んとも。人をさきにこひんとも見ざりしが。思の外なる事よと云り。

^{百十}おもひあまり

夢はこなたのたましゐのかよふによりて見ゆるなり。そなたを戀しくおもふによつて。我魂ぞゆきつらん。夜ふかく見えば。其魂をむすびとめよと。人の魂などを見ては。たまむすびとてまじなふ事の有をいふ。

^{百十一}やんごとなき女

人のなくなりたるを。とぶらふよしにて。哥をやる。

いにしへは

むかしはありしとやらんなき事やらん知

ず。また見ぬ人をこふるといふ事はためしなし。我ぞはじめにてあらんと。

したひもの

人に戀らるゝ時は。下ひもがひとりとするといへるが。我したひもは今までとけたる事なし。そなたのかごとは戀もせず。そらごにてあらんと。

こひしとは

女の返しに。こひしからねばぞ下ひもはとけぬと云るほどに。さらばこなたよりこひしとも申べからず。我思ひは深切なる程に。かならずそなたの下帯はとくべし。其時こふるといふ事をしれと。

^{百十二}ことさまに

すまのあまの

哥に取ては上品。古來稱美したる哥。よ所へなびく事をけぶりにたとへてよめり。

百十三
やもめにて

女にすてらるゝ時歟。

ながゝらぬ

長からぬといひて。下に短といふに對せり。

今よまば見にくかるべき歟。此哥はさまなく優にみゆるこ。

百十四
仁和御門

定家之奥書に。仁和聖日之間と書し事へ。芹河の行幸は。業平卒して七ヶ年後の事へ。業平一期の事をかくには。此事をのせん事にあらずと云儀有。是等が作り物語へ。伊勢が七條后へ業平の身上の事語り奉るをしるせし物語也。然者此事も在原氏の事にて。業平兄弟の儀なれば。其よせあるによつて書加たるこ。芹川の行幸は嵯峨天皇行幸か始へ。後撰に。嵯峨の山みゆきたえにし芹川の千代のふるみちあとは有けり。今此行幸は光

孝天皇へ。

さる事にげなく

行平六十九歳の時なれば。鷹飼似合ぬ事へ。

もとづきにける

鷹飼の方堪能にしてしつけたるを云。今日

行幸には功者を賞せらるゝにや。

すりかりぎぬ

後撰のとがきに。鶴のかたを縫て書付けると有。

あきなさび

あきなさびは只翁なれ共。是は老のされば

うたると云心あるべし。行平の今日の出立

をわかくするを云り。今日は一代一度の邂逅

の行幸なれば。加様に出立を人なとがめ

そ。今日計こそたかゝひをもすべけれとこ。

御けしきあしかりけり

御門御氣にかけらるゝこ。行平が我六十に

餘り。七十に及事をよめれども。此時の御門五十七歳にておはしませば。けふばかりとぞたづもなくといへるを。不吉におぼしめす。我身の上の述懐をよむとも。向の氣にあたる事などをば斟酌すべき事。一切の事に此心つかひ有べき事也。

百十二
おきのゐて

古今には物の名の部に。すみけしの哥に。小野小町が哥也。業平に別申は。火を身にすへてやくよりもかなしきと云。

百十六
波より

序哥。久しく成ぬ君にあひ見てといはんとして。上句をば云り。されども浪路へだつるほどに其縁もあり。はまひさは。愚見抄には濱にある家をいふべし。とまひさし。板ひさしなどいふがどし。定家卿庭上冬菊と云題にて。霜をかぬ南の海のはまひさし久し

く残る秋の白菊。此哥は濱の家の心ならねば。題の庭の文字落題になると云々。師説には。高き砂の下の打かけたるが。ひさしのごとくなるを。はまひさしといふと也。なにごともみな

業平の身に何事もなくよくなる。心安くおもへと言傳。馬上相逢無紙筆。憑君傳語報平安の心。すみよしに行幸

文徳天皇天安元年行幸といへども。國史にも實錄にも見えす。新古今に此詞書の如く。住吉に行幸ありし時とのせたれども。いづれの御門の行幸とは見えす。又國史にもしるしおとすとにや。

我見ても

姫松はちいさき松といへども。只松と云心。姫に心なし。

おほん神

住吉はうしほにつれてあらはれ給へる神にて他に異なり。異國退治の時擁護の神。住吉に勸請ははるかに後の事。和哥の道をも子細あつて守り給へる也。

けぎやう

現形。八

久しくをともせて

業平の女の方へ久しく音信もせずと。

玉かづら

たまかづらは女にたとふ。後撰には老懸を

玉かづらと云と見えたり。これは草のかづ

ら。玉は物をほむるにそへる字。草のか

づらは木ひとつにはまとはらずして。あち

こちへ取つて。あまたにゆいて一ツにと

ゝまる事なし。去程に我にたえずして。参り

こんと云も。うれしからずと也。

百十九
かた見こそ

あだは仇。もとは此物語にては仇とよみ。古今にてはあだとにこりてよむといへるが。あながちさは有まじきか。定家卿の。かた見こそあだの大野の萩の露うつろふ色はいふかひもなしとよめり。此哥を仇とよみたれば。女の簾中よりあらおそろしやと云といへり。是も詞がきが女のあだなるとあれば。濁てよむべきにや。

百廿
世へず

男のはだをふれぬとおもふものが。人にあふと云事を聞て。業平のいへる。

近江なる

あまねく人の知事なれば。述に及ばずとな

ん。

百廿一
梅つぽより

鶯の

催馬樂に。青柳をかた糸によりて鶯のぬふてふ笠は梅の花笠。と云を取てよめり。梅つぼより出るを見て。鶯の花をぬふてふ笠もがなとよめる。尤似合たり。

うぐひすの

鶯の花をぬふてふ笠はほしからず。そなたの心ざしのふかきをつけて給はれ。さあらば其心指を我も報ぜんと。後撰に。雨ふれどふらねどぬるゝ我袖のかゝる思ひにかはかぬやなど。是もおもひにて袖をほす心。ちぎれる事をあやまれる

契りをく事のちがへる。

山しろの

一儀には井手左大臣の境地面白きによつて。井手に新造有て。山ぶきを植などして。此水を愛せり。我一期の後にも。我をおもひ出さば。此水へ來て見よ。影をうつして見せ

んなど云り。後に行て見れども。其影の見ゆる事もなし。さやうの事を思出てよむと云り。又井手の下帶の事。大和物語に。大神の使に下るものが。おさなくうつくしい者を見て。帶をとひてとらせて。其者の帶をばこちへ取て歸れり。其後その行末もとをらぬと。只一口かいて。末を書さして。井のもとに女のあるがかたるとかいたり。惣じて井手の物語ありと云ども末みざると。年^{百廿三}をへて

年比へてすみこし所をばはなれていなば。いとと深草の野とやならんと。すてゝ後の女の事をもさすが思へるにぞ。

野とならば

野とならば鶉となりてなくべし。かりそめにも立よらぬ事はよもあらじと。狩の字にみるはわるし。只かりそめの心也。應有春

魂化爲燕。年々飛入未央樓と云るどし。
百廿四いかなる事

なに事をおもひけるにや。古註に色々の儀を云。或眞言の大事など云は。悉ちがふべし。すでに詞がきにいかなる事をとかけり。其をば何として知べきにや。一切の事知音にあらざればあらはさぬもの。業平の存生するに。問と云とも云べからず。然るを後におしはかりて。何事をおもふなどいへるは。さやうこつといふべきか。伯牙絶琴。此事を引たまへり。慈鎮和尚の。おもふ事など問人のなかるらんあふげば空に月ぞさやけきとよめるも。此哥よりしてよめり。

百廿五つゐにゆく

昨日までは今日とはおもはざりしと云儀は大にきたなし。たゞきのふけふとはおもはざりしと見るべし。是則一切衆生の辭世。

かくとはしれども。其きはならてはおどろかさる。大和物語には。中將此哥をよみてなんさて果にけるとかけり。此物語も業平の始終をあぐるほどに。元服の始より獲麟の夕までにしてかきとめたり。京極黄門の常に見ならふべきものは。古今伊勢物語とかゝれたり。業平は元慶四年庚子五月廿八日。五十六歳にして卒す。自然に當月正忌にあたり。

右加一見。老懶僻案之臆説。不漏一事。載而抄之。恰如破竹如瀉水。却雖有恥。來者儻同志者須潤色之。名曰惟清抄。不可出窓外而已。

大永壬午曆重陽前一日

槐陰曆苾芻堯空誌

八十
六歲

〔右伊勢物語惟清抄以內閣記錄課藏本校合〕

續群書類從卷第五百十六

物語部十六

源氏物語千鳥抄

昔四辻儀同三司光源氏物語講讀の席をひらかれて。後小松至德三年の秋より嘉慶二年の冬にいたるまで。五十四帖の秘義を述させ給しに。亞相之末座につらなりて。一日といへどもをこたる事なかりき。後に又おぼつかなきふし／＼をたづね奉りて。しるしをける草子二帖あり。名付て千鳥といふ。卅餘年身をはなたずして。九十一歳の齡にをよべり。まぼろしの世のはかなきを見つくして。夢浮橋かゝるうき身のをこせり。一度ひらきみては懷古の涙を數行

の字にそゝぎ。二度思めぐらしては妄報にをそる。今是を匠作尊閣の席下に奉りをきて。世をかさねたる覆蔭の高恩に酬たてまつる。縦老の波此世中にたちわたるとも。濱千鳥の跡後にとゞまらば。又なにはのうらみをか此道にのこさんや。

源氏物語聞書

至德三年七月廿八日

桐壺

一いづれの御時にか
と云は延喜御時を云
え。

一更衣の事 承和皇より始たる事。

一更衣四位。命婦五位。女藏人六位。

一あつしく よはくなやみたる躰。靈運。

當遷と云。又庭の字一をあつしくとよ

む。煩。同。ほとをる共。

一あひなう 無愛。

一めづらし と云る起は。神功皇后新羅征

伐の時。今度の軍に可勝ば。魚此釣に付て

あがれとて。御裳のすそを解て釣の糸に

して松浦河に入らる。やがて鮎くひ付

てあがるとき。めづらしと仰らる。によ

つて。元は此河をめづらし河と書ける也。

めづらしと云詞。此時により始云々。珍^{メツラシ}愛

共。

一まうのぼり給 參のぼる。參昇と書。

一すほう 修法。延喜廿四年傳教弘法入

唐の間。於紫宸殿圓澄法師五佛灌頂の法

を修畢。御修行之初。

一ゆきかふ 交加と書。行歸。往通共。

一よろしき 諸事中品の事を云也。宜の字。

一をたぎ 愛宕と書。宕^{音タ}。人の死たる昔

は皆陵始。珍^{チタキ}皇寺^{寺號也}。

一おもたしき 面立しき。只面目らし

き。

一よこさなる様にては 横死の様にてと

云。

一さうくしく 寂莫と書。閑をもよむ。

一やがくともまいらせ給はず 清字。

さはやかとよむ間。さはくとやがても

まいらせ給はぬといふ義。

一とのゐか^(ニ敷) 夜行戌より子の時までは左近

司の役。丑より卯時までには右近司の役

。宿直と書。

一よるのおとゝ 清凉殿。

一 かいとぼし 搔灯と書。終夜火をけたず

とぼす。神璽守護のため。

一 ひたぶる 聊死^{カシノ}と書。一切とも書。又永の

字をもよむ。又頓^{イサ、カ}の字をもよむ。只一へん

と云心。一向共。偏共。二ツなき心。

一 めてたし 可感と書。妙共。

一 くはざ 冠者。小宮仕衆。

一 みさほ 操と書。心操。心ばせとよむ。み

さほたる^{つ脱}とは情識を立たる。

一 すげなう 無人望と云。

一 靱負命婦 左衛門佐など。

一 嬬嬬^{クワンクワ} 六十已上にして無妻を嬬^(漢脱)といふ。

五十已下にして無夫を嬬^(漢脱)といふ。

一 こどく 孤獨。六十已上にして無子を獨

と云。十六已下にして無父を孤と云。

一 いはけなき 稚と書。をさなき。

一 すりしき 修理職。

一 あさがれい 朝飯と書。あしたの供御。

餉共。

一 大床子のおもの ひるの御膳。

一 そこら 幾等と書。多き義。

一 さゝめく 私語と書。万葉には耳。

一 御をば 祖母。

一 めどう 女童。

一 なまめく 最媚^{イトナマメ}と書。

一 鴻臚館 鴻の聲は遠く聞え。臚は傳る心

。異國の申言を此館にて聞て可奏之間

如此名付。

一 ざえかしこき 才覺。又俊の字をも讀。

是は本書の義。

一 凡俗 ぼんぞく。日本紀にたうど、讀。

但人とも。

一 藤壺を飛香 梨壺を昭陽舍 已上貴女の候

する所。

一桐壺を淑景舍 梅壺を凝花舍 已上下龍女
房の候する所へ。

一雷鳴壺 襲芳舍 已上貴女の候する所へ。

一うけばりて 承諾へ。

一あかぬ事なし 不足の事なしとへ。

一こよなう 無此世へ。閑雅とも書。うるせ

き義共云。只事外へ。無越共。

一なめし 輕字也。又無禮共。なめげ同事。

一らうたく いとをしき事へ。良書。

一にげなう 似氣無と書。

一きびは 稚の字。をさなきへ。

一うつくしき 万には愛常と書。

一なづさふ 馴押と書。昵共。

一そひぶし 遊仙唄には横陳と書。ムツマシ 元服の

夜はそひぶし女まいる事へ。

一かもする 釀の字へ。かうじや米をかひ

させて酒に作へ。應神天皇より始るへ。

一あせたる 色のかはり損するへ。又庭家
池などの時は荒たる儀へ。

一人の家には必三徑有べし 門。井。東司。

此三の道へ。スリメルカナ 荒哉三徑の菊。陶淵明が言

へ。

一籠物 こもの。菓子等へ。

一とんじき 屯食と書。つゝみ飯と云物。下

薦にたぶ飯へ。包飯をいふ。

一致仕大臣 官を辭て後。尙其職に仕るを

致仕といふへ。

一二なう 無二へ。一池の心と云々。二なう

しなしてと有。

一うしろめたく 影護書へ。かげのむくま

ぼるとよむへ。

簾木

一すきど 數寄事へ。

一まめだち給

シンシヨ 穀色と書。遊仙唄にあり。

一なよび 麗字^へ。やはらかなる躰^へ。なよ

びか。なよらか。なよびやか。何も同事^へ。

一かたのゝ少將 一説。業平。一には英明人

の名。物語にも有作者の名^へ。

一なが雨 三日降を霖雨と云^へ。十日降を

ついでといふ。兩共になが雨^へ。

一おさ／＼ 日本紀幹了と書。粗共。凡共云

心^へ。長々とも。

一かたはなる 頑字^へ。かたほとも。

一をのがじゝ 各競書。各自身共。

一そこ 足下と書。ちと人をさげしむる心

へ。足下。僞盜。秦始皇本紀に有^へ。

一もんざうのしやう 文章。式部下官也。

一おひささ 小大する^へ。女のをさなき

事を云。生先。老前共。

一かたかど 片才と書。日本紀などにも才

覺^へ。

一おほどか 穩字^へ。おほどき共。

一くちとく 口利書。

一けわひ 形勢と書^へ。

一位みじかく 位のいやしき^へ。

一なほ人 諸大夫^へ。

一たづき 便^へ。又縁字^へ。

一かゝづらひ かけしろふ^へ。懸緯と書。

一おはさうず 御座書。おはします^へ。

一けしうはあらぬといふは げすしくはあ

らぬと^へ。又恠の心も有べし。

一ひさんぎ 非參議と書。前官事^へ。何の官

にても。

一かはらかなり さはやかと^へ。清字^へ。

一はぶらかさす 不放埒^へ。放埒共。

一にぎはう ^(繪歌)繪字也。にぎやかにと讀。

一ふいに 不意^へ。

一せうと 男の兄弟何をいふ^へ。

一まつはす なつくる心。綫字。

一なよゝかなる なへくとしたる事。

一御ほかげ 側影と書。日本紀火影共書。ほのか。

一あふささるさ あちするもこちするもた

らはぬといふ。

一適 あるじと讀。毛詩に書。適。

一ことが中に 異中と云也。

一ひさうなき 無美相。

一涙さしぐみ なみだぐむ。

一ちほやけはらたしき 公事に腹立也。

一まいて まして。

一あはつかに 淡。あはくしき。少人交

甘如醴。君子交淡如水。醴こさ酒。

一こめきて ふるめきて。古字。莊子に

いへり。

一ねぢけがましき 佞人の事。

一ゆへよし 故由。

一うみづら 海濱。海面共。

一ふるごたち 古後達と書。古女。女は夫

の後にある間後達と云。

一ひそむ 嘖ヒソム戚。眉を顰。

一ひたすら 太シソと書。

一うなつく 領狀。漢書。又顏許。淮南子諾

え。うなつく。

一心やまし 心勞。

一ひぐらさゐたり 鵲字。

一ひちちゐたり 輕粧居たり。かろくし

くゐたる。ひぐらさゐたりといふ同事

。

一さればみたる 宿。宿老。日本紀ゆがみかた

ぶきたる躰。曲斜。同。

一すぐよか 健字。

一心しらひ 只心仕。心知共。

一まほ 眞帆。まとしき心。

一 いひそし 云致と書。いひころす。

一 せうそこ 消息之。いん。消息と書てあり

さまとよむ。白氏文集。

一 よきふし 吉折節之。

一 ひたやごもり 眞隱書。只こもりにこも

る事をいふ。

一 つなひきて 妬領に云。嫉妬の女男の足

に綱を付て外へ遣。或時此綱を引時羊に

付て來。女仰天して占とき。博士云。あま

りに嫉妬ふかきによりて。夫は失て羊來

れりと云時愁歎す。其時博士向後嫉妬の

心をやめば可來之由申時。様々誓言する

時。夫來て。此謂云々。

一 くすしからん わづらはしき事之。

一 とばかり しばし之。少程之。

一 ねたます ねたましがらす之。

一 えんにあへかなる 艶字之。よはくし

き鉢之。あへかはあだなる心之。弱字之。

一 いまさりともしとせあまりが程に と云

は。櫛梓七年といふ事學にあり。強て七年

を限事なし。兩木は異木よりもはやくさ

かたつ物なる間其喩に云之。此故に七年

あまりには思しらんと云之。

一 しれもの 只わろきもの之。化者と書。惡

者とも。

一 さすらふ 流離。日本紀。伶侶。經に書之。

一 くさわひ 種字之。

一 ほうげづきて 佛法氣付て之。

一 くつしからん くすくしきと云事之。

世俗にくせくしき云同事之。

一 二の道 貧福之。

一 むくつけき 蠢字之。きたなくおそろし

き心也。

一 なかぐみ 中神。長神。兩様之。天一神の

方塞の方之。さす神ともいふ。

一中河 京極川。二條より上を云之。御堂殿

と法成寺との間なる故に。中河とつけら
るゝ也。所詮二條以北を云之。

一なめげにや 無禮之。

一きちざう天女 びしやもんの妹之。

一おまし 御座。又は席。蘇席。花布べり。以

上如此書之。

一中河にゐる中家だつ柴塙さかなもとむ 肴

求之。^有催馬樂。

一むつかる 勘當。令に書之。

一ほゝゆがみ 方曲と書。

一まうと 眞人書。性共。

一ふい 不意と書。心ならず之。

一なみくの人 次々と書。

一とうて給 取出給之。

一そゝきあげ そゝめきあげたる之。

一あて人 妙人書。富貴人。

一みくしげ殿 御匣殿。装束する所之。

一めいぼく 面目之。

一ふようなるさま 不用之。

一さばれとおぼせど さらばさてあれと云

心之。さはあれと之。

一すゝろ 無端書。座共。

一つゝしりうたふ 呪書。呪謠之。

一もののけ給 物承之。

一しもや 雑舎之。前にある事之。

空蟬

一かゝづらひ 懸綺書。

一めざまし草 目さめたる躰之。目覺種と

書。

一うれたふ うれへたき之。愁字之。

一たばかり 將許と書。

一ついせうせず 只禮をもせずと之。追從

と書。

一こきあやの一重がさね　こきとは紅の事
え。濃字え。

一ふたあひ　二藍え。むらさきのこき色え。
紅と藍との色え。

一ばうそく　傍側。あらはなる事え。

一そぐろかなる　するとなるえ。尖と書。た
け高き事え。

一さがりば　かみのさがり所え。下場と書。

一さうとけば　早速と書。

一ねびれて　ねほけたる躰え。

一かひま見　日本紀。視其私屏。万ニ垣間見
と書。

一あかるけはひ　別え。氣色え。

一こたひは　今度と書。

一うちみじろく　身動。

一あへか　よはき躰え。弱字え。ひはつなる

事。

一なをくしく　よき程の事え。

一おもと　侍者と書。近習人躰え。

一うつせみ　ひだり右の寄合え。

一ざれたる心にも　なれたる心え。

夕顔

一めのと　乳母。天竺より始え。鶉羽ふさあ
はせずのみことを他人の乳をもつて養
給。是日本のめのとの始え。

一ゆもかみ　物をして養事え。湯女と書。

一はじとみ　半薨え。

一ささの聲　ささをふ事え。前軀。

一やうめいの介　國の介え。揚名介と書。

一さりかけだつ物　たてしとみえ。しとみ

やと云え。夕良ははせたるおりけ垣など
の事え。
(か殿敷)

一白扇のこがしたる　薫の香にしめたる

え。

一かたほ 頑え。

一つきじろふ めくばせするえ。突尺と書。

一くだぐしき 細研(研)と書。

一おほしき(と敷)て 穩字え。

一おろち 小蛇と書。

一世づかず 世になれぬえ。

一えんだち 艶立と書。

一ごぼくとなるかみ 雷なる音え。渾々と書。

と書。

一されたる竹 屈竹え。ゆがみたる竹え。

一こちたし 眇字え。はれがましき心え。

一ゆくりなく 思やりもなくえ。不意の間。

卒爾とも書。

一けいめいし 驚たる義え。又朝をさした

るをもいふ。

一しもけいし 下家司。

一まかなひ 饗え。

一おき中川 河のみほの事え。

一のら 藪と書。原も(と敷)野等とも。

一べちなうの方 別家え。小寢殿え。

一しとゞになりて しほくとぬれたる心

え。汐(しと)。

一なたいめん 侍臣亥時え。名對面。

一みつわくみて 罔象と書。褻組同上。支離

とも。老かゞまりたる躰え。一説。いざな

ぎのみこと水神をうめるに。老嫗の形え。

これを罔象といふえ。

一かごやかに かごくとかこひたるえ。

圍字え。

一さゝやかにて 狭々やか也。

一かりの御ぞ かりぎぬえ。短裳。かりぎぬとよむ。

一ふくいとくろうして ふくらかに色黒え。

右近の事云へり。

一ぬさ 稜麻。道祖神に手向をするなり。餞
道の席をば祖神と云へ。道祖神の起。黃帝
の子遊子と云人諸國を遊行して。死後道
祖神になるへ。仍旅行の人を守へ。

若紫

一わらはやみ 疳と書。ぎやへいの事へ。瘡。
一きた山 万ニ向南山と書。
一なにがし寺 鞍馬寺へ。
一しゝこらかし 爲發と書。仕損共。しそび
らかしたる事へ。

一あいかゞまり 老死と書。樂府ニあり。
一さるべきふん^符作りてすかせたてまつる
すかせ奉るとはのませ奉るへ。吞字へ。

一つぐらをり 盤折。九折共。

一なにがしの僧都 覺惠僧都を北山の僧都
と號。榮花物語にあり。

一なにがしのたけ 大峯の釋迦のたけへ。

一よざりおはします 過來給へ。

一ゆをびかに 寛字へ。ひろき心へ。ゆるや
かなる心へ。

六帖
みよしの、大河水のゆをびかにあらぬ
物から浪はたつらん

一いといたし かたはらいたきへ。

一おくまなる 奥の事へ。

一さいつころ をとゝひよりさきの事へ。

一くらまに 旅寢可付之。

一いぬき 人の名へ。きは公字へ。犬公と

書。なに公と云へ。昔上東門院の上童の中
にも此名あり。

一をくらす 露をくらかすへ。後字へ。

一草の御筵 只草座也。樹下集。當初のいも

ぬが庭にあまれりし草のむしろもけふや
しくらん。

天台大師御忌日。慈惠大師讀給ふ哥へ。

一さいなむ 罪へ。

一さかしら 万ニ進心と云。

一數珠の脇息 (に膝) こかゝる音云々。

一すこししぞきて 退てへ。

一さしぐみに さしよりにへ。

一かしこければ 無便ばへ。忝共。

一ひとぞう 一孫と書。一族の心へ。

一さだすぎたる 央過たるへ。さかり過た

る事也。

一ゆくての御とは ゆくては過さるへ。

一ふりはへては 打はへてへ。態書也。

一いまだ難波津をだにつゞけ侍らずと云々

いろはの字をだにつゞけえぬと云也。

一ひがたう 涙のひがたくとへ。

一つきくしう 方便と書。遊仙唄にあり。

一はなちがき 文字一ツゝを書へ。ひろひ

がきと云同事へ。

一わうみやうぶ 王は姓へ。四位は内侍。命

婦は五位へ。女藏人六位へ。

一そゝろさむ 雞皮と書。鳥はだの事へ。

一によろしく につかはしく宜へ。

一かゝるきほい かゝるまざれ也。次へ。

一あづますがゝきて 和琴をすがゝきてと

へ。

一もどきおひてん 人にもどかれてんと云

心へ。眞チイラン。

一そは心なり それは心なりとへ。

一おとゞ 殿へ。

一にび色 鈍色と書。うすはなだの色へ。祖

母の服にきたるへ。二緋色共。

末摘花

一わかんとをり 王家無等倫と書。王孫の

事へ。一説和漢通と書。不用之。異説へ。

一貴戚臣 王の餘流の臣へ。

一かいひそめ 潜字之。龍未出を潜龍と書。
蟄居之躰之。

一三の友 琴。詩。酒の三の友之。

一すいがひ すいがきの事之。

一かさやどり 雨やどり之。笠之。

一らうくし 上臈しき之。

一よひぬ 宵居と書。

一されくつがへる されたるもくつがへる

もよからぬ躰也。

一えひのか 衣被香と書。薰の異名之。襖被

香とも書。

一いくそたび君がしぐまにまけぬらん し

ぐま。日本紀進退と書。進退せられたる心

之。一説無言之。秘説と云々。

一あさへて 淺々しき之。

一ゆるびすぎにける 油斷。赦免共。

一御かゆこはいひ

粥カユ。鬲コハヒ。文集二三
在此字。

一はえをくれたる 光と書。色のをくれた
る也。榮後オノルと書。光薄共書。

一さくはちのふえ 一尺八寸の笛之。但舌

四寸八分之。遊仙嶮にあり。

一ひそくやうの物 もろこしの物の色のよ

き茶碗之。秘色と書。

一まかでゝ人に 退字之。くう膳をおろす

をまかでゝといふ之。

一ないけうばう 今は大とのゐにあり。管

絃者の居所之。内教房と書。

一ほのぐらし 衝黒と書。

一さをき 小青と書。白色の事之。

一梅の花の色のごと 如之。もとめこの哥

之。神樂曲。

一かいねり 搔練。紅の色之。ふくさにて表

裏紅之。

一ゑびぞめ 蒲萄と書。紫の色の取あさき

え。

一 おとこたうか

男踏哥え。天平元年正月十四日。 聖武

天皇。

一 をんなたうか

同十四年正月十六日。同

御宇ニ。

一 ねび人

年より女（ねび）え。ゆひゆく。調行と

書。年老行とも書。

一 かゝげの筥

搔上筥とも書。鬢かく具足

入物え。

一 むもんの櫻の

無文は平絹の事え。櫻の

ほそながはあさなき上藤女房のさる物

え。櫻色の事。表裏蘇芳色の。おもてはう

すく。うらはこきえ。

一 こだい

古代也。

一 ゆるし色

紅紫二の色は賞する物にて。

ゆるされてさる故に。ゆるし色と云え。

一 ふるさのかはぎぬ

貂裘え。貂音はて。せう

共。てん。

一 ぎしきくわんのねり出たる 儀式官え。

弁者え。外記史などの事え。神事に先へね

る者え。

一 みちのくがみ

檀帟え。檀。奥州より漉始

たる紙え。

一 いまやういろ

紅のうすきえ。

一 袖まきほさん

人もなると云々。

白雪六帖は今日はなふりそ白妙の袖まきほさ

ん人もあらなくに

一つまかけ かたはしの躰え。

一 かやうのかいなで かいなではそとうは

べばかりの心え。平仲文そらなきの時妻

が哥。

我にこそつらさを君がみすれども人に

すみつくかほのけしきよ

紅葉賀

一 おもゝち かほのもちやうなり。

一 青海波詠 (詠) 小野篁作之。

桂殿向初歲。 (迎) 桐樓媚早年。

花花櫻樹下。 蝶鷺畫梁邊。

舞者承和御時大納言良峯朝臣安世奉作 (對殿歌)

之。

一家の子 良家の
子也。 良家とは攝家以下上臈の家

也。

一 いうそく 右族と書。花族の心也。

一 いりあやの程 (マ) しよさやうでんとよむべ

し。そさやうでんとも。

一 かの若草 紫の上の事也。

一 そゝきゐ給へるは そばめきゐたる也。

一 なやらう 追儼。鬼あふ事也。儼は鬼と讀

也。儼。論語ニハ此一字を鬼やらひと讀

也。

一 内宴 内裏にて春の季定て詩の宴有。 但近
年絶

畢。

一 さんざし行 參座也。元三の參賀也。

一 うけはい 呪咀と書。

一 ゆし給 絃をゆるす事也。

一 ほそろくせり 晉利夜須 長保樂の破の事也。急を

ばかりやすといふ也。保曾呂俱世利と書。

一 おふなくしき 女々しさ也。

一 さだすぎる 半過也。五十を半といへば。貞す

ぐる。是もさかりすぎたる也。

一 一女 若きをばやんとはねてよむ也。
老たるをばなふなとひきてよむ也。

一 さもふりがたう 難舊也。年寄がたき也。

一 かはほりのえならず 蝙蝠也。扇の異名

也。

一 まかは まかぶらの事也。匡。 まかぶら。
文選に。 高

匡。 かうきやうとま
かぶらたかし。

一 夕立しき なごりすゝしきと云々。

一 がくしう 鄂州と書。大國の州の名也。女

哥うたふ一ツの事を云え。

一あづまや 門柱四あるを四屋と云是え。

一まや 門柱二あるをまやと云是え。

花宴

一南殿 紫宸殿。

一中殿 清凉殿。

一たんいん給て 探韻え。

一をくしがちに 鼻白めたる。臆したる躰

え。

一地下の文人。モンミン

一源氏の君の御をば 御詩をばえ。

一ほそどの 庇の事え。ホソドン丙丁と書。

一くるゝ戸 樞戸。

一さこえたがへたるもしかなとて 然え。

一さりなどの事え。物毎納得の心え。

一かのわたりの有様 葵上の父攝政太政大

臣の事。

一かの有明の人 朧月夜の内侍の事え。

一櫻の三重がさね 檜扇の兩方上三枚を櫻

の薄様にてつゝみて。上を糸にてとぢて

あはちむすびをしたるえ。(ひ懸)

一明王の御世四代 陽成。光孝。宇多。醍醐。

是え。

一さやうしやく 還迹と書。只をしはかり

て考を定え。考とはかんがふるなり。かう

さく共。さやうさく共云々。

一ゆみのけつ 結え。結番え。

一さくらのからのき 唐綾の事え。タカラ

一えびぞめのしたがさね 赤色襦。したが

一わうぎみすがた 王姿え。宮姿え。され

一ふさはしからず 不祥と書。

一扇をとられてからさめをみる さまかへ

たると云々。催馬樂の哥に石川と云哥に。

石川のこまうとに帶をとられてからさく

ひする。いかなる帶ぞ。はなだの帶の中綿
入れたる。如此の間さまかへたると云へ。
扇と帶とさまかへたるへ。

葵

一 ためしかはら 共に卑賤者へ。ためしは

渡守。かはらは細川へ。日本紀仁德天皇卷
ニ書之。河原共書り。是も渡守へ。

一 かざみ 汗衫と書。衣の上にさる薄き物
也

一人だまゐの奥にと云々 出車の奥にや。出

車とは女車の後車へ。人給と書。
ヒトタマヒ

一 殿上のぞう 藏人將監へ。

一 つぼさうぞく 市女笠にきぬをきて中給
(結露)

たるを云。今の中結の舂へ。

一 ねびゆく 調行書。老行へ。

一 おぼしうんじけん 慍字へ。うれへへ。
ホクチャウトコロ

一本のみや ト定所 齋宮に成給はんずる。
ウラナヒストコロ也

うらなふ所の名へ。

一 さかき 坂樹と書。日本紀にみゆ。龍眼木。是本字へ。櫛

とも。

一 うきもんのうへ ふせんれう。浮紋綾へ。

一 右近のばい 一條大宮。

一 左近のばい 一條西洞院。

一 物のけいさすだま 窮魂ト書。遊仙唄に

魂に通ずるを云と云々。たとへば生靈舂の

者へ。

此物語の中挿逸と云々
袖ぬるゝ戀路とかつは知ながらをりた

つ田子のみづからどうき

一 たけく 猛へ。

一 いかさ 辛へ。怒。いか

一 ひたぶる ひたやぶり也。一向共。偏共。

永共。

一 うつし心 現心へ。うつしの心へ。

一 芥子の香 邪氣祈時は芥子を護摩にたく

ゆへ也。

一ゆする 湯あぶる事。沐浴。

一秋のつかさめし 京官の除目。

一春の司召 縣召除目。

一にばめる (正敷) にび色の事。薄はなだ。あをあひの紙。うすはなだの色。

一正日とは 四十五日の事。

一さのもの さやうの物。

一あてき 上東門院の上童に此名あり。妙

公と書。

一くはんさうのはかま 萱草色の袴。紅の紫色。紅の黄色とも云り。

一思くつして 思苦。

一ゑいまさ 卷纓。非常式。諒闇の時の事。

一子のこのもちの事 別に記。

一かうごの筥 たきもの入筥。香壺筥。

一けそくの臺 花足臺也。

一おさくしくだにもなし おさくは長

字。

一みぞかけ 挾架^{イカ}。衣懸る竿。禮記云。御

衣男女不同挾架。不敢縣於夫挾架。竿挾といふ。

賢木

一齋宮下向は 九月十六日。御祭以前にさ

だまりて下事。

一かうくしう 神々しさ。

一黒木作事 仁德天皇より始れり。くろ木とはくろもんじやうと云木。但何の木

も皮つきたるを云。

一ひたきや 炬舎書^{順和名}。雨のふる時庭に火を焼べき料。蹴鋪。

一しめ 注連^{日本紀}。御總繩^{舊事。日本紀}。七五三共

書。

一 けこ 縁事へ。

一 ゆゝしき 忌字。いまくしきへ。

一 拾遺 榊葉の香をなつかしみとめくれば八十

氏人もまどゐをりけり

をく露に色もかはらぬさかき葉の香を

やは人のもとめきつらん

一 ぬけ出たる 挺出と書。我とし出たる躰

へ。

一 ちやうふそうし 長夫送使

へ。道より不歸。伊勢まで送るへ。

一 女別當 齋宮官女へ。

一 たかみくら 高御座と書。

一 別のくし 齋宮の群行の時。主上御櫛を

都の方へ趣給ふなとて投させ給を。額に

さして瀬多迄ひるのやみまで御下向。

一 八省の事 孝徳天皇大化四年二月始之。

一 とそぎて さして執せぬ心へ。さだまり

たるとを殘心へ。除く心へ。事除と書。

一 ふぢ衣 諒闇の時主上は十三日めすとへ。

十三ヶ月を十三日にかへらるゝと云々。

一 とのゐ物の袋

一 弘徽殿 登花殿 兩殿は后町の西の殿へ。

女御更衣等の曹司へ。

一 觚稜 コロウ 文選のかたちよに。

一 いたつき聞え給 いたつきはいたはりも

てあつかう躰へ。

一 むかいばら 當腹の事へ。

一 そんわう 王の孫へ。孫王。眞子内親王。

文徳天皇の孫。惟彦親王の女也。

仁和五年に齋院に立。孫王の

齋院に立事は許へ。

一 はらぎたなきは 腹ぐろきへ。

一 ひれふす 漢高祖の后へ。うるはしき后。

呂后。高祖死後、戚夫人を手足を切。耳をふすべ。目をくじりて捨。物をいはぬ藥をの

ませて廁の中に捨畢。

一拵藥^{カコウ} 井垣と見えたり。

一夜居の僧 御持僧之。二間に候する僧之。

一しばふる 薪のために木の葉などかさあ

つむる賤者の木葉がつきたるを打ふるう
を云之。又阿佛の説。しはふるび人云々。皺
のよりて古き之。皺古人之。

一くろき御車 板車とて服者の乗車之。板

にてくろくぬりたる之。

一柳のけしきばかりぞ時をはすれぬ 漢武

帝苑中に蒔人柳。一日に二臥三起。帝を拜

し奉る躰之。非情にて心あり。仍人柳と名

つく。

一左右にこまとり(取座)に こま鳥はゑびすかけ

の事之。あなたこなたへ一人づゝかへる

之。

一したとに 舌のはやき之。舌利と書。

一あはつけき あはくしき之。泡沫共ニ。

一かるめろうせらるゝ 輕睨之。嘲睨せら

るゝ也。

花散里

一さゝやかなる家 ちいさき家之。狹々書

也。

一花散里は 中川のあたり之。

須磨

一ひたゝけ 叨。放埒躰之。こんらんしたる

心之。

一入道の宮 藤壺の事之。圓融院后。三條關

白賴忠女。天祿四年三月十四日落飾。世に

號入道宮。不限男女。出家を入道といふ

之。

一三台星の事也 上台。中台。下台。此三台之。左右

内大臣を三台にたとふる之。是を云三公
之。

一七星を司七弁 七弁は「左右の大弁^歌」左

右の中弁。左右の小弁。中弁小弁の間に權

一つ。已上是を七弁といふ。

一こしをのべて 官位の辭して不仕事。

一こしを屈する 當官にて仕を云。

一いちはやき 最強と書。急速の心。

みやかなる心也。

一身のをこたり 過怠事。非懈怠の義。

一ひたやごもり 直隱と書。

一とばかり 片時の心。只時の間の躰。

一むもんのなをし 平絹の直衣。

一さすらふる 伶侶と書。漂泊の心。流人

。流の字。

一かずまへ給て 數にして也。知共。

一なげ櫛 いむ事。いざなぎのみこと黃泉

へ行て。ゆつのつまぐしをとり。は一をひ

きかけて火をとぼして。いざなみのみこ

とを見給時。膿沸虫流間。きたなしとて此櫛をなげられたる其故。木一に火をと

もすをいむは此故。

一しばく 屢は數々と論語在。あまたの義。

一けんだつものなど 文書めきたる物。

一みなは 水の泡。又水のめぐる所。

一つかさとけて 解官。官ニ有三解。薨

解。病解。現解。

一まかりまうし いとま申。辭見と書。

一おさめみかは おさめ。みかは。何もあし

なべて下女。

一をさふる 商人。水原の説。

一厠長女 行幸の跡にまいる下女。又洗

女。

一日本の船の初は 神武天皇御代也。其後

崇神天皇御時。伊豆の國に仰て舟をつく

らす。長十丈。枯野と名付。伊豆出付と云り。

一わたのべの大江の岸とは　ろうの岸の事
え。

一から國に名をのこしける人よりも　是は
屈原が事のたとへ也。

一かとの御なをし　只絹の裝束え。只絹
のなをしえ。生の衣え。

一しらがさね　更衣の時たゞ絹のしらがさ
ねえ。白重

一屏風表裏　宇多はすはうの方を
おもてとす。西宮は繪書に
る方を

一千枝　常則　繪かき兩人の名え。
一つくりゑとは　下繪え。朽木書え。

一白澤王ヘクタクワウ　朝ニ三千。夕ニ三百の鬼を合する
王え。

一しろさあや　直衣え。

一とこよ　常世。蓬萊山え。

一驛の長にくしとらする　驛長に。天神つ

くしへ御下向の時。明石驛にて口詩を給

え。かき付ぬを口詩と云え。口宣といふが

如し。口宣といふ心は。帝王の直に勅定あ

るを書付たるえ。仍口宣と書。是も書付さ

せ給はで。御口にて詩をつくられたるえ。

又別のくしをたふと云説もあり。但異説

え。

一おほやけのかうじ　考辭と書。勘當の事

え。

一鹿を二世皇帝へ馬とて進するは　趙高と

いふえ。當時人をはかるを馬鹿と云る此

故え。

一帝の御め　後の事え。

一ゆるし色のきはやかなる　紅に黄なる色

のまじりたるえ。きばみたるといふは少

黄なる事へ。

一だんき だき共。彈碁と書。局は石をもて

方二尺中高にして。將碁の馬のやうにして。各六枚にてはじく物へ。白黒二色へ。

一かいつもの かづさしたるものへ。或は海津物へ。

一たつかなき 無便へ。

一ぜんじやうばかり 軟障と書。きぬのひき物へ。必松を繪に書へ。まんまくの類也。

一ひぢ笠雨 袖笠雨へ。

一をとたちばな姫 日本武尊の御世へ。

一ことなし草 忍草一名へ。

一ほこりか 誇ほこる。ほこらかしとも。

明石

一空のみだれは 雲の亂へ。

一ひふり 氷降ヒサメ。火雨ヒフリ。雷電日本紀。

一しほのやをあひ 鹽のおほさあひへ。

一とうで給 取出給へ。

一かうれう 廣陵散琴の曲の名へ。

一はいわたる 蔓延と書。

一せんわう 先王へ。或は貞保親王の御事へ。南宮の譜といふ是へ。

一山ぶし非僧 只山にふしたり。野臥。同。

一酒しいそさして しい殺へ。

一あき人の中にてだに 琵琶引の心へ。

一かとのり直衣 緞書カトリ。

一しいそつして そつしては敘の字也。醉敘と書。

一くるみ色のかみ 裏は白く表はうすやうの色へ。くるみ色のかみの事。後拾遺の哥にあり。

一宣旨書 仰書へ。

一御藥の事 天子の御惱を云也。

一中の絃 當調子の緒へ。發の緒と云へ。

一あはめられて 淡惡。

一みぞびつ 御衣櫃へ。

一しほどけし とけたるへ。

一かすより外の大納言 員外と書。權大納

言あまたをかるへ。

一まくなぎ 蟻へ。虫の名へ。蚊のごとくな

る空に多物へ。日本紀。目の前にか
ろくしく振廻也。

一あさてばかりになりて 明後日歸京とへ。

明日去。

濡標

一あひなく 無愛。うれしき事に眞實にう

れしくなり。あひそうのなきとも。

一令外の宮 内大臣。權中納言已下。

一御はかし 三條院皇女禰子生れ給ふ。陽

明門院の時。内裏より御太刀を被引。女子

に引此例へ。

一こもちの君 明石上へ。

一いか 五十日なり。

一つかみじかさ筆 旅の硯筆へ。職事等は

硯筆隨身故へ。

一みふ給せ給 御封へ。封戸なり。太政天王

二千戸。三后千五百戸。大皇太后。皇太后

宮。皇后宮。已上三后へ。

一たゝはしき 嚴重の心へ。

一樂人とをつら 十列へ。

一紫すそごのもとゆひ かたはしのこき色

へ。

一ゐんしども 其院々の主へ。院司と書。

一わらは隨身 童躰隨身へ。花族の義へ。

一あそびども 遊女へ。

一ひまある中 中のわろさを云へ。

關屋

一せさいる日 關に入へ。常陸よりのぼり

の時。

一あを 襖字也。かりぎぬのみじかさ物也。

旅の装束へ。

一せきむかひ 關までの御迎へ。

一さかしら 進心と書。

蓬生

一そこそは 其こそはへ。

一宗廟之器者不鬻市。禮記在。

一あなじき法師 木法師へ。

一あげまき 總角。十五六の齡の者を云也。

一ふようのもの 不用物へ。

一はこやのとじ からもり かぐやひめ

已上物語の名へ。藐姑射刀自。唐守。赫奕

姫書へ。

一かんやがみ 帚屋川にてすくへ。繪旨を

かく薄黒色へ。平野北野の間に在川へ。

一なをくしき ちと下品人也。直人へ。

一いたうついえたり 至費と書。

一こちたき ひろき鉢へ。又まばゆきへ。

一うけひ のろふ心へ。呪咀書へ。

一ついえたり 損たる心へ。

一くのえかう 薰の惣名へ。黒方共書。

一むとく 無徳へ。

一たうこぼちたる (傳戴) 顔叔子墮の人の妻來時。

家を風に吹破れて。我家を壊焼あかくし

て。人にうたがはれじの爲へ。堂兩音へ。

濁時は佛閣を云。清時は人家へ。

一いたがき はた板也。

一ちかきしめの柱 領したる也。

繪合

一前齋宮は 秋好中宮。六條御息所の女。

一前齋宮入内例事 元正天皇御時。井上内

親王聖武天皇女。養老五年齋宮たり。後に光仁天

皇后に成給事の始へ。

一中宮 うす雲。藤壺。

一大殿 源氏。

一院 朱雀院之。

一うちみだりの筥 巾箱と書。女房の具
足入筥也。

一百ぶのほか 百歩外之。遠く句之。

一こゝろば 心葉。銀を以て梅をうち物に

したる之。菊をもうつ之。箱の緒付るざ
之。大嘗會小忌をする時冠をさす物之。

一しゆりのさいしやう 修理大夫參議を兼

する之。此例橘の常主。在原友子。

一いたつかまし いつきかしづかまし之。

寵。又勞をも書。辱。かし
づく。

一こゝろばへ 意見とかく。

一ひめて 秘して之。

一うつぼのとしかけ 物語の名之。源順作。

一ひねずみ 神異經曰。唐に南方に有火山。

長さ卅里。晝夜火あり。風雨にも不滅。火

中に鼠あり。重さ百斤。毛の長さ廿三尺。

此毛を布に作べし。若不淨なれば焼之則

淨之。號火洗布。號火鼠布。

一あべのおほし 人の名之。

一名をばえくたすまじ 腐字之。朽共。
下共。

一女房のさぶらひ 臺盤所之。

一せんかう 淺香之。

一あをに 青丹之。

一ふんのつかさ 圖書寮之。文司。

松風

一東の院とは 二條院の東なるによつて云

之。六條院御座所之。

一寢殿は 妻の居所之。禮記。聘せるを妻と

云。奔れるをば妾と云之。聘は問之。妻の

言は齊之。齊の心は夫と居所を齊する之。

妾の言は接之。帝王にもまみゆる事を不

憚。不齊躰。

一この若君のをうち 中務宮領し給ける大

井川のわたりにありと云々。前中書王の小

倉の山庄をなずらへて云へ。

一 兎裘地 魯隱公辭官隱居所へ。仍日本紀

にも閑居をば兎裘地といふなり。ときう
ちとよむ。

一 けさはがしう さはがしきへ。騷字へ。

一 かたかけ 人につかはるゝ事へ。肩を息
と云。

一 つなしにくき ツレナク 強顔。にくき 悩。つれなし かほ也。

一 はちふきいへば 撥撫へ。譬ばちほらふ などいふ心也。

一 けん 券字へ。文書へ。

一 たきどの 泉殿へ。

一 張駕といふ者 浮木に乗て天河の水上を

見極よと云。漢武帝使へ。

一 晋の王質山へ薪をさりに行に。童子碁をう

つ所に行。棗の實のやうなる物を與るを
食て碁をみるほどに。其間斧柯爛へ。

一 山口はしるかりけれ 山口とは事の始を

云へ。伊勢造營柚山の山口祭を云。是初
へ。

一 いさら井 小井と云。日本紀。

一 にはかなるあるじ 饗の事へ。俄事へ。

一 小鳥を草の枝につくるは三所に三づゝ付
へ。已上九付へ。十の内一ツをとりかいた
る心へ。

一 木の末 エタ 草の末 エタ 日本紀。可秘へ。

一 五日六日の御物いみ 天一神の方違也。

一 こんゑつかさの名たかきとねり 御隨身
也。

薄雲

一 あまそぎ かみのふかそぎへ。

一 あまがつ 天兒書。人形へ。三歳迄身にそ

へて持物へ。惡神を彼にうつすと云り。
一 ゆふたすき ダスキ 襪。おさなき者の上にかく

る物へ。かけ帶ようの物へ。

一さねこん 實來と書。

一ひきくんじ 薰修之。切の入たる之。

一かうじなどを 柑子之。

一がうけにことよせて 豪家と書。万人に

越たるを俊と云。千人に越たるを豪と云
之。百人に越たるを英と云。千人ある里を

豪と云也。

一大納言後位につく例 光仁天皇。號白壁

大納言。

一桓武 從五位下大學の頭の後。

一光孝 二品式部卿の後。

一字多 源氏の姓を給て侍從ニなる。

一門ひろげ 蒙求于公高門の事。

權

一もゝどの 一條大宮より西北のつら。

一ふつゝか 太の字之。

一こちぐしきは 無骨之。

一せんじ 官女之。

一かみさぶる 神宿。日本紀。神閑共。閑さびた

りと讀之。鐵のさびには衣を云之。上久。

かみさぶ
ると讀。

一しなとの風 科戸の風と書。乾の方のか

ぜ之。

一おもなく おもてつれなく之。

乙女

一へいしとる しやくとる之。

一をしかいもとあるじ 儒者の饗之。垣下

の饗の事之。只庭の饗也。凡垣下饗と書。

一壁下の饗 (通款) 縁のすのこ之。公卿の座之。

一作文事 公卿は絶句。儒者は四韻。

一入學 初て大學寮に入之。

一いとひこもりゐて 集。あつまる。 日本紀。

一れうしうけさする 寮試。(寫誤) 史記内に晴に

よまる卷あるをいふ之。

一もんにんざしやう 一經に通ずるを儒者と云。古今に通ずるを通人と云。書を連るを鴻儒といふ。

一くはんじやの君 くわざの君共。六位をば冠者と云。

一しりうごと 後言と書。うしろごとと。

一かへりよみ 書をふくする事と。

一さくじりをよすげたる 鱗^{サクシリ}。唐人のをと

なしきは耳くじりを帶のさきに付也。此雲井の雁のをさなくて。夕霧の大將を夫にしたるが。をよすげたるを云と。をとこそ鶴^{ミンクシ}を付べき事にそへていふと。

一さばれ さはあれと云心と。

一わらはべ 五節の童女と。

一ましが 汝がと。

一さんじが 是も汝がと。^{きんじらは汝等也。}

一麴塵の袍 山鳩色也。

一つるばみの衣 橡字と。赤。白。黒。三色。

一かえどの 柏梁殿と。後の御座所と。

一御たうばり 御給と。

一御としみ 御年満と書。十二満たるなり。

何にても御賀の事と。

一風の心けだしすくなし 詩あり。

玉葛

一潜龍の徳ありて 隠たる事と云々。人の才

學ありて隠たるをいふと。

一をとしあぶさず 落溢^{コホス}と書。^{をとしこぼすの心也。}

一蛭蛻^{ケイゲイ} あらゝしと讀。白氏文集。

一桓山の鳥四子を生ず 羽翼既成て分離す。

悲鳴して以て相送る。是を四鳥の別といふと。桓。垣ニ同。

一我身のけう 孝養と。

一ねんさう 年三と。正五九月の事と。

一だみたる 迄。舌はやく訥たる舛と。

一けさう 假借と書。貞觀政要にはなつか

しとよむ。人のかほのけしやうにも書之。氣發共云

一はう ダカムシロ 簞草かつらなど。

一はうく 蚊虫のはうえ。

一すやつばら しやつばらえ。奴等と書。

一はらから 親と書。万葉八卷。兄弟の事

え。

一はやふね 舸とかく。

一このちのせいし 胡の地の妻子え。さぜ 同音。

一すてくつ 弃損え。

一いちめ 市女。

一ごし 五師え。八幡宮供僧の官え。八幡宮

崎に遷座。延喜廿一年三月廿一日え。

一かいねりに 紅のうす色の裳きぬきて

え。

一のしひとへ ねりたるひとへぎぬえ。

一藤原のるり君 玉葛のおさなき名え。

一こまがへる 若返とかく。万十一。

一御あしまいり 御足洗人え。

一りうじの人 臨時人え。

一おうなに成て 老に成て。わんな は若え。

一いきまさし いかりたる躰え。

一いまやう色 紅なり。

一あさはなだのかいふの文 はなだに大波

をおりたるえ。

一くちなしの御ぞゆるし色なるそへてと云々

禁色ゆるさるゝ事也。禁色ゆるさるゝと

は綾をゆるさるゝえ。くちなしに綾を重

たる衣え。

一あふよりて 奥へよりてえ。昔様の躰え。

一まどゐはなれぬみもじぞかし 身ぞかし

え。但三百文字ぞかしといふ説有え。

初子

一年立かへる 只年の改え。

一 打けぶり 煙にはあらず。只くもりたる
躰也。曇の心也。

一 はがための祝 口の齒にはあらず。年の
齒の事也。

一 えならぬとは 艶なる也。よき事也。

一 ふところぞ 懷へ引入手也。

一 とぶき 言吹。日本紀。祝言也。壽。文選いはひ

の事也。

一 さんざ 參座也。參賀也。

一 うゐことならふ 初て琴習也。

一 からのとうきやうき 唐の東京錦也。す

ぐれたるにしき也。

一 じどうをくゆらして 薫の方也。

一 えびかう 浥衣香。薫の方の名。一説麝香

の異名也。

一 さはらかなる かみのすきたる也。

一 けやけし 尤字也。好物共書。面白物のす

こしけうとき物を云也。惣じてちと事過
たる物をいふ也。

一 りうじかく 臨時客也。攝政關白公卿な
どを集て。大饗をもてなすを云也。朱器饗
といふ也。

一 ゆうそく 優息也。右族共。くわしふ

一 このとの 催馬樂。此殿也。

一 わかゞみ 若髪也。

一 けをされて 氣色をされて也。

一 水驛にて 水驛には道程さだまらざる

間。饗を用意したれども不食也。仍饗應に
あふをば飯驛と云。饗應せざるをば水驛
にあふといふ也。

一 しらがさね 凡は夏の物也。是は袍の青ニ

白を重たるを云也。男踏哥の時の事也。正

月十四日也。

一 かざしの錦 (錦殿) 錦をもて花を作て冠の額に

さす。高巾子の冠と云。

一かよれるすがた 舞の袖返す舄云。

一うるはしき袋どもしてひめをかせ給 琴

琵琶の袋錦云。秘し置云。

一かうこんじ 高巾子云。よはなれたると

は悪き心云。又すぐれてよき事にも云用。

胡蝶

一あやめもしらぬ 白黒をもしらぬと云心

云。

一かへりこゑ 律云。

一七世の孫に逢と云事の起に。漢名帝時。永平五年劉晨阮肇二人天台山へ藥を尋に入時。道に迷て飢にのぞむ時。桃をみつけて行て食す。則ちからを得て山谷を一里ばかり行時。仙女に逢て夫婦と成て。半年ばかり過て舊里に歸たる間。仙女道を教て返し畢。半年ばかり過ると思所に。七世の

孫に逢と云々。是は源氏にあらず。引事云。

一ひの御よそひ 緋の装束云。

一ひらばり 平張と書。樂屋のむねもなき

の上に。縷をはりたるをいふ也。

一あぐらをめして 帷と書。(マ)布にてしたる縷の事也。

一こしさし 腰差と書。一疋の絹云。卷絹の事也。

一戀の山 只戀の事云。

一くしのたふれ 孔子人につめられたるた

とへ云。

一めしうと 召人と書。思ひ人の事云。

一花にをれつゝ 花にをれつゝ云。

螢

一わらゝか云 やはらか云。和字云。

一うすきかたに 木丁の帷は三重なる物

云。うらの方云。表はあつき綾。中はたゞの絹云。裏は顯紋紗云。

一あのごと (如懸)扣案云。

一めをやだちて 母めきての心へ。

一くすだま 藥玉へ。續命縷と云へ。又靈糸

といふ。又綵糸と云。只命をのぶる祝ごと

にするへ。内裏には糸所より藥玉を献ず。

去年九月五日。菊花菜苗(榮茂河)を撒して。藥玉に

とりかへて。九月是を置。夜るのおとこの

御丁の東の柱に付へ。

一かちのしり 褐裾とかく。

一菖蒲重 表は青。裏は白。さうぶがさ
れとあり。

一大ぎみけしき 王の躰へ。大なる儀へ。

一にほどりにかけをならぶるわかこま わ

かこまとはこもへ。こまにそへたるへ。

一この物語 こは古へ。ふるき物語也。

一みそか心 ひそか心へ。

一うつゝの人 今現在の人へ。現人と書。

一てんつかれ給 人にわろき者といはれ給

へ。點付け給へ。

一はらきたなき 腹黒へ。

瞿麥とこなつ

一つりどの 釣殿。六條院へ。今の万壽
寺なり。

一西川 桂川の事。

一ちかき川 賀茂河の事。イシアシ
の鮎。

一ひみづ 氷の御ものを水に入たるへ。

一すいはん 水漬の飯へ。

一むらいのつみ 無禮のとがへ。

一ふれはい 只ふれたる事へ。

一けそん 家損へ。家のさずなるべきとい

ふ心へ。

一ふくつけや 欲のふかきへ。貪生とかく。

遊仙嶮に有。

一次第みだらぬをば 雁烈と書。鴈は兄よ

り先にはゆかぬ故に。みだらぬと云へ。

一ろうし給 嘲哂するなり。

一すがゞき 和琴をかきならすへ。

一とつび 琴粒。ひきたる躰^レ。只其すがた

也。ことさい。ことつき。是も皆其すがた

え。已上和琴の事^レ。くちにくひげにする

え。とさはばちん。

一ぬき川 催馬樂の躰^レ。

一厭乞^{イデ} いで。日本紀に出。物をこふ心^レ。

をしてこふ物を乞に。いてやなど云事^レ。

一かうさく 還迹也。

一うたいね 殘字^{ンヨ}。^ニ。

一ぬるくか さのみ急にもなさ^レ。人の心

のぬるさ^レ。

一てうたぬとは 無心元心^(拍職)。向掌。日本紀

ニかく。

一おほみおほつぼ 大小便のまろなどやう

の物^レ。

一おこめき給 おこつく^{マナシ}。

一てんがちに 直字^{マナシ}がち^レ。

一へに面子のかほつき 荏冉。遊仙嶠ニ書

之。荏。^{油しほる}。^{ゑの事。}

篝火

一うちまつ 松炬と書。只たいまつのと^レ。

一冠巾子 綏。纓。

野分

一いろくさ 色種^レ。

一くろ木^{黒木} あかさ^{赤木}。

一名だゝる 名に立^レ。

一さとゐし給 里居^レ。

一かばさくら 朱櫻と書。樺櫻共。

一くたに 苦膽。りんだう^{一名又}。^{岩藤也。}

一風こそげに巖も吹あげつべき 史記高^{羽本紀}。大

風西北より起て。木をゝり屋を放て沙石

を上ぐ。

一おとゝのかはら 殿の上の瓦^レ。大臣な

らでも殿をおとゝと云。

一むらさめ 白雨と書。揚氏が漢語求給ニ

書之。琵琶引には急雨と書。

一ほのく 會明と書。

一をいしき 雄壯と書。日本紀。をとこくしき

え。

一いといたし いたしはよくしたるえ。至

え。

一ほうづき 酸醬と書草え。又洛神珠珎。和

名。赤酸醬と書。日本紀。

一しべ 花のしべえ。替と書。

一からのけもんれう 花の文の唐綾え。

一かみひとまき 紙一重え。無復風蘿。日本紀。

御幸

一このをとなしの瀧こそ

拾

とにかくに人めつゝみをせきかねて下
にながるゝ音なしの瀧

いかにしていかによからん小野山の上

より落る音なしの瀧 元輔

此哥を引よせていへり。

一かたちたけたち たけたちはたけのほど

などえ。

一あしよは車 只輪のよはきえ。

一やつがれ 臣や某といふ心え。

一いできえ 出消え。廣座に出てをとるを

いふえ。

一出ばへ 出榮と書え。

一おほみき御へ 御へとはにゑえ。

一鳥つくる柴の事 柴のたけ七尺五寸。柏

より葉せばく。柴まろくして裏面に毛生た

り。是をとりしはと云。又はたもん柴とも

云。年の内は立枝をへだてゝ。雄を上鳥に鳥

の左を木にあてゝ付。年明ては雌を上鳥に

付。柴の上四尺と三尺五寸に付。此外梅柳

などにも付え。

一小鳥をば 紅葉。荻。薄などにも付之。

一雀をば竹に付。

一たはやすく たやすき之。

一こらうのすけ 古老のすけ之。

一こゝしからず 大儀ならずと之。

一まうちきんたち 大夫と書。公卿の事之。

一こだいなる 昔様なる之。古代。

一からのたき物 唐合香之。唐にて調合之。

一をちぐりの色 赤さはかまのこき之。ち

と黒色之。

一あはせのはかま 中へ物いれぬはかま

之。

一蠹 紙くらふ虫之。又衣魚共書。

一紫のしらさりみゆる 紫のちと白色に見

ゆる之。

一しじかみは ちどみたる躰也。

一うはも 女ははかまの上に裳をきる式

之。仍うはもとといふ。

一あふなげに 奥なげに之。

一まじり 眦と書。皆同。目尾之。

一いそしく いそしく之。鬧。

一つまごゑ 物申聲のかたはし之。

一いはほも淡雪になし給べき 有秘説云々。

蘭

一内侍のかみ 玉葛之。

一うけひ給之 のろふ事之。呪咀之。

水のうへに數かくごとくわがいにあ

はむと我はうけひつるかも

呪咀と書て。うけはしとよむ。日本紀。

一そらせうそこ 御使なるが仰られぬ事を

云之。書付ずして口にて云をも云り。

一うつたへ うちつけ也。同事。やがて也。

一女は三にしたがふ 三従と書。幼ては父

兄にしたがふ。嫁しては夫にしたがふ。老

ては子にしたがふ是也。

一まが／＼しき いま／＼しき也。化字之。

一いもせ 妹兄と書。いよなきいよなみの

みこと。兄弟夫婦に成たるが故に。如此妹

兄と書之。

一御おほいぎみ 御嫡女之。

一かじけたる篠に 文を付て兵部卿の宮よ

り玉かづらの方へやられける文之。悴。じか

けた憔悴。

マキハシラ 被柱ニ書之日本紀

一かのせはよぎ道なかななる 過路。一説

よけ道。除。

一やさしかるべき はづかしかるべきと

之。

一しうねし 強の字之。日本紀

一おほけたり 飽。ほけたる之。

一むかひ火 向焼と書。日本武尊駿河國に

て賊主を殺さんとて。野に火を付て免る
ゝ事を得たり。

一なごやか 婀娜。日本紀和共。

一おほきなるこの下なる火取をとりて

六帖 たきものゝこの下煙ふすぶとも我ひと

りをばしなすべしやは

一さながらまうづ 更啓と書。日本紀

一見あふる程もなう 見合る間もなくと

之。

一檜皮色の紙 紫のこく少黒之。

一文選別賦に 高木を古里にかへりみると

云々。

一ふかうなる 不幸なる之。

一らにの花 らんの花之。蘭花書。

一このさうのめいぼく 今生の面目之。

一しかひききり ひきはりつよき心之。

一あをにびのさしぬき 地はもえぎにて文

は黄なる物也。青朽葉のさしぬき也。大將
檢非違使の別當さる物也。

一平中は 平貞文也。

一うたかた人を忍ばざらめや 泡。未必。遊

仙屈によむ。うたかたとはうたて人をと
云心也。

思河たえずながるゝ水のあはのうたか
た人にあはて消めや泡也。

新干

おもひさやうたかた浪の消かへりむす
ぶ契は末だにもなし

一かりのこ 鴨の子也。かると云る鴨あり。
かり。かる。通ずる也。

梅枝

一御もぎの事 着裳。明石中宮十二歳。

一あやひこんさ 綾緋金錦と書。高麗人の
奉し金襴様の物也。

一そんわうのふたつのはう そん王はあや

まり也。承和の方也。二の方は侍従烏方^ウ
也。御秘藏の間男に傳ふべからずと。承和
仁明。仰事ある也。相王也。^{仁明。文徳。}

一東の中のはなちいて はなちいてとは出

居也。放亭也。

一薰の合事 四季。春は梅花。夏は荷葉。秋

は菊花。冬は烏方又侍従也。此外薰衣香。

承和の百歩の方躰身香。是は口にふくむ

物也。

一しどろもどろ 不合不調と書。遊仙囀ニみ

ゆ。

一ねぐらの鳥もほころびなまし ほころぶ

るは發の心也。たとへば高く聲のきこゆ

る也。

一おぼしきざす きざすは萌の字也。^{思初たる也。}

一とよりては 外へよりて也。末に成て也。

又取寄也。

一女手とは 假名字の事へ。

一草紙

一よろひ 一双也。

一あして 葦手。繪の中文字をゑに作なし
て書事へ。

一けちえんなるひら ひらは枚の字へ。紙

一枚二枚の數の事へ。万二。枚ヒラの湖。けちえ
んは掲焉と書。

一御との油みじかう 短は灯屋のひきゝ事
へ。

一なをくしき 直人の事へ。げすしきの
諸大夫の事。

一まみのわたり 眉間と書。所の字をわた

りと讀。

一かなうす 鏡字。

藤裏葉

一もろゑ(こめ) 左近衛と書。相思戀へ。伊勢物語

眞字本。

一ごくらく寺 深草ニ在之。昭宣公御建立。

一あま風 雨氣の風へ。

一文籍は書籍へ。かれいは家令と書。其家の管
領ごときのものへ。

一たをやか 婦人と書。日本紀第一には手

弱女人と書。又幼婦共。万二。

一くきたのせき菊多 關也。弘仁式ニ書之。能因

哥枕に云。菊多と書てくきたと讀。俗には
きくたといふへ。

一あさがほ 朝の顔へ。權にはあらず。

ねくたれのあさがほの花秋霧にをもが

くれつゝ見えぬ君かな

一くわんぶつ 卯月八日佛にうぶゆあびせ

まいらする事へ。灌佛と書。

一みあれ 御生と書。又形と書。賀茂大明神

の御誕生日へ。申の日へ。

一はかせならては 哥に桂を折てとあるに

そへたる。は風。

一こきむらさき 中納言着する袍。

一ましみづ 眞清水。又まざる清水と云。

増水共。

我宿のいさゝ小河のまし水のましてぞ
思ふ君ひとりをば

一いさゝ小河 ちいさき河。いさゝ井。小

井と書。同心。

一かしはで 膳部と書。供御の料理する人
也。

一ちもの 御の字をおもの^とよむ。飯字
をもよむ。依所。

一つるばみ 椽と書。とぐりと云木。衣の
色。

一うたのほうし 宇多の法師。うたと云
和琴あり。又哥の拍子と云。兩説。

若菜上

一御そうぶん 御處分。

一御心ばへほころぶべからむ 御心顯る。

。

一あだげ あだなる氣。

一窈窕淑女。君子好仇。毛詩。叔は善。仇は匹。た

ぐひの心。

一しかくいふ 云々と書。日本紀。

一はいしやくなくして 夫をするをば野合

とて。女のさすにする。

一御心たゝせ給 思たゝせ給。

一いきまさ いかりたる。

一かえどの 柏梁殿とて。後の御座あるべ

き所。朱雀院の内にある。

一女にも髪をあぐるをば理髪といふ。あぐ

るとはそぐ事。

一そんじやの大臣 御裳の腰ゆふ人。

一せんかうのかけばん 洗香にてつくるか

けばん也。淺香共。

一ほうゆがみ 四方なるものゆがみたる

え。方曲也。源氏四十の賀を玉かづらのさ
たあるえ。

十二種の若菜

若菜。藟草 あざみ。薔 さしや。白薔 芹。セリ

わらび。蕨 薺。アヲヒ 蓬。カラヨモギ

小蓼。タデ 水雲。川藻 菰。小大根 芝。タカナ

已上十二種え。

七種

なつな。邪葛 はこべ。せり。苦菁 あをな。

御形。須々代 すいしろ。佛座。

一かべしろ 防壁と書。壁一間に渡て懸た

る絹え。

一ぢしき 地敷と書。うちしきえ。

一かゝげ筥 搔上筥と書。びんくしなど入

物え。びんをかくといへり。

一かざしの臺 かざしの作花の臺え。銀山。

銀水。金銀の花樹二本あり。

一さうやくし給 雑々の役え。

一こものよそへ 籠物四十枚え。

一蟬聲のおきな 蟬丸の事え。(あ肥熊)

一琴ののぼりね 調子のかりたるえ。

一ぎやうでん 宜陽殿。昔累代御物置納殿

え。

一かへりごゑ 律え。

一おひらかにおほしたて給 養立え。おひ

らかはをびれたる由え。老らかにとはあ

らず。おどろきたるやうえ。

一むづがり給 腹立給え。又むづかしがる

と云え。

一らでんのいし 螺鈿倚子と書。青貝すり

たる倚子え。

一いりあや 入舞の事え。

七大寺の事

東大寺。興福寺。元興寺。大安寺。

藥師寺。西大寺。法隆寺。

一しうとく 宿徳。異成したる躰。仁和

寺の宿徳といへり。

一六ゑふ 左右近衛。左右衛門。左右兵衛。

一からの手本 唐の手本也。

一よしめきそして 由めき存て。

一ひかへゆ 對湯と書。御うぶ湯をめす時。

湯をかくる花そくの義。是は祖母御前

明石さたある。

一かへりまうし 賽の字。朝祈暮賽。樂府

ニあり。祈事のかなひたるに悅申心。

一らうし奉るとは 領し奉る。

一かやすき たやすき。

一ふくちのその 福地藺。

やすたらがふくちのそのに種まきてあ

はむ必有爲の都に

一鞠の日本にての初 天智天皇鎌足入鹿な

ど元興寺にて槻の木をかゝりにてあそば

し畢。魚名。鯨イルカ。河獺同。本草ニアリ。

一ぬさぶくろ 物へまかりける人のもとに。

ぬさむすび袋に入てつかはすとて。

浅カからぬ契むすべる心葉は手向の神と

しるべかりける

道祖神に手向する具足等入袋。あひか

たらひける人のあからさまに越こへまか

りけるに。ぬさぶくろなどつかはすとて。

齊禮。タムケ トヨム。手蔡。同。享禮。同。

麻袋。メサブ クロ。米袋。同。幣袋。同。

一すぎく につれ（ミヅ）く 次々。

一いとおひらかに ねをびれたる躰。

一つばさもち 椿の葉を合て。中にて飯の

粉に甘葛を入て。色くの薄様をきりて

ゆひたる物。つばきもちといへる物。

一さるべきからもの から物とはほしもの

。干物。

一はことり 一説かほとり云々。定家卿は只

うつくしき鳥と。万には杲鳥。早鳥共

書。毛詩。流離をふく
ろふとよむ。

流離はいとけなうしてかほよし老て

はさらにみぐるしき哉

如此間一名ふくろふ。

一みかさが原 あながち名所にあらず。大

内の事。應徳二年三月十六日。中殿御會

ニ京極殿。

千世までと咲ぞはじむる櫻花御垣が原

にほりうへしより

如此間たゞ内裏仙洞已下の御垣の事。

若菜下

一すけたち 中少將達。

一かちゆみ 歩射。特心的の名。李太刀

歩射の法と云々。

一としふかき 年たけたる。

一かぶりをかへる 七十已後。

一まどろむ 睡の字。遊仙囁
ニアリ。

一人の御涙をさへのごふ袖云々 下官の將

衣袖與娘子拭涙。遊仙囁。

一ふるゝ 誑と書。たぶらかさるゝ。

一はぶき 省と書。かへりみるとよむ。

一さをき 小青。至て白物は青。

一もぬけ 蛻の字。蟬蛻。だつ。

一つまはじき 彈指と書。日本紀。

いかばかり戀の山路のしげゝればいり

と入ぬる人まどふらむ

一空にめつきたる 目付。天に四智有。天。

作物地。人。我也。何事も隠なさ。

一つくも所 木の道の物。

一摩訶毘盧遮那 種々の説ありといへ共。

朱雀院のおはします西山の寺の本尊大日
にてあるによて也。御誦經ありと云心に。
如此とまりたる。

柏木

一なけのあはれ ないがしろの哀。

一つしやかならぬ をもくしからぬ。

一えんのわかをつの 役若小角と書。役の

行者の名。

一つべたましむ つべくしき也。たとへ

ば人にくさうの躰。惡。つべたましむ。

一御しうの身にとまりたる 執心のとまり

たる。

一れいはむごにむかへすへて 無期。

一はんそう 伴の僧。

一ふすま 被の字。

一ざうげん 讒言。

一わうけつさて 王氣付て。王の相なる

。

一おはしまさへば おはしません。脇息を

をさへてまさへとあり。是を(もさ)さへてお

はしません。

一ゑみがちなる わらひがちなる。

一まなこゐ 眼子と書。眼の定たる躰。

一しづかに思てなげくにたへたる云々

樂天之詩

五十八翁方有後。靜思堪喜亦堪嗟。

持盃祝願無他語。慎勿頑愚似汝爺。

樂天は五十八歳にて始て子を生す。仍此

子を生遲となづく。

一すみすぎて よき事の過たる也。

古詩とにかくに物は思はじひたゝくにうつ

すみなわのたゞ一筋に

一おやのけうよりもげにやつれ給へり 孝

え。孝經ニ親の喪にはかたちつくるはずと云々。此心え。

一いうしやうくんがつかにはじめて草あをしと云々 時平のおとこの子。八條右大將保

忠薨^テ後。紀あり昌時に。天與善人吾不

信。右將軍墓初秋青。此詩の心え。本説は

秋と云字なるを。當季四月なる間。青の字

に取かへられたるえ。

横笛

一そのわたりにほるところなど 拾遺十六

ニ云。賀朝法師。春の野を行時。つぼさう

ぞくの女野べにありけるを。なにわざす

と問ければ。ところほると云をきいて。

春の野にところもとむといふなるはふ

たりぬばかり見てたりやきみ

春の野にほるくみれどなかりけり世

にところせき人のためには

一らいし ^{ライシ}さかづきのすがたにて。上は

ぬり桶の蓋^{モトイ}あをのけにをきたるやうなる

ものえ。菓子をつむ物え。内藏寮にをかる

ゝ物え。

一すだきあはて給 集字え。あつまりあは

て給え。

一中のを 和琴第二の緒え。

一つたみ 呪吐と書。おさなきものゝこゝ

ちかへす事え。乳あます事え。

一うちまきちらして 散米事え。散供に米

をまく事え。

一ふたあるのをしばかり ふたあるとは

あかばなあをばなに只直衣ばかりきたる

え。

一よるかたらずと云々 夢をば夜かたらぬ

事え。孫真人。夜夢不須説云々。

鈴虫

一めそめ 目染へ。紫のめゆいの事へ。

一蜜をかくしほゝろげて云々 みつをかく

しとは甘葛を不入といふへ。ほゝろげて

とはほろ／＼としたるへ。乾字へ。

一佛の御ちやうだいのうへに 佛の御いた

ゝきの事へ。但帳臺の内に經札を置たり

と云説有。是よさへ。

一ぎやうがうの人に 行香へ。御八講の時。

公卿達僧ニ抹香をすくひて引て廻事へ。

一七僧の法服 御八講の人数七人へ。

一あやの御よそひ 御装束へ。

一ささら 舌字へ。弁舌の事へ。

一そぐとおぼし そぎたる也。除すつるへ。

一へだて心ある 松虫は人におづるゆへへ。

夕霧

一まめ人 文選。展季と書。まとしき人へ。

一かり衣 かりぎぬの事へ。

一やらう 逐の字。

一御つかさのぜう 右近將監へ。

一かうぶりえたるとは 叙爵したるへ。右

近の大夫將監の事へ。

一ごしん 護身。加持の事へ。

一こゝろばせびと 心操をたつる人の事へ。

一ぞうるい 孫類へ。一族の事へ。

一女郎花に一夜の宿

一とりのせうやうの物のやうに 鷹は大鷹

がまさりたるへ。仍妾のかちた羽を云へ。

一おきななにながしまぼりけむ 叟。竹と

りの叟かぐや姫をまぼりたるたとへへ。

一おこへりとらん 誘字へ。日本紀

一あさりとらて 求とらでへ。

一あだえかくして あだにかくしてへ。

一けうしたまひし 孝養し給しへ。

一やうのもの 同様のものへ。

一さらがへりて 更がへりて。

一くろさいまだ 服の人は經管もくろふす

る間如此云。

一いとおにしろ 鬼のやうに。

一かしこけれど 便なけれど。

一すぎくし 次くし。

一なごむ 和字。

一うつし人 現人。空人共。

御法

一ほいあるさまとは 出家の事。本意あ

るさま。

一あさへたる 淺事。

一れうわう舞て急になると云々 樂の序破

急のさうになるにはあらず。此さうは早

くなると云。

一やゝましきとは 心やましき。

一乞巧奠 天の村々に白くみゆるが。五色

に成て水にうつるを。詞得たるしるしに
する。七夕の事。

一河鞍 牽牛の名。

一御正日 常には四十九日を云。こゝにて

は一周忌の事也。

一あをずり 青摺也。山藍にてすりたる。

一やればおし やぶればおしきと。破。惜

と書り。

やればおしやらねば人に見えぬべしな
くくもたゞかへすべら也

元良親王

幻

一ひきさけとは ひきはなつ也。さけとは

離の字。放共書り。

一明ぼのにしもさうしにおるゝ しもはて

にをは也。助字也。

一うなひ松 文選。馬鬣松。青蔭とあをやか也。

うなひ松の事也。雖多説只墓の上に殖たる松也。五粒松とて五本殖と也。生苗松と書。

一花をしみ給　惜給にあらず。只花を見給也。てにをは也。しはたすけ字也。

一おぼしたつほどにぶさやう侍らんや　に

ぶさは鈍の字也。おそさ也。

一よるべの水　諸社にありといへども。鴨に限べき事也。

一仙名（備忘）　寶龜五年始。又天長七年十二月始。

一かたみ　信字也。

一わかみやのなやはん　雛の事。節折命

婦。内裏女官也。

雲隱

一此卷は本よりなし。只名を以て其心をあらはす也。此名題にて六條院光かくれ給ふ事をしらす也。此雲隱の詞代々の集にあま

たあれども。万葉集に人の逝去を皆雲隱と云り。關東人哥也。

大君は神にしませばあま雲の五百重のし
たにかくれ給ひぬ

百傳いはれの池になく鴨をけふのみみて
や雲がくれなむ

左大臣長屋王賜死時哥

大君のあはれかしこみおほあらぎのとき
にはあらねど雲がくれます

天平七年大津郎女新羅尼現願死去を悲歎歌
とてめえぬ命にしあれば敷妙の家よりい
て雲がくれにき

迦旃延經非有非空門。毘勒論ニ亦有亦空門。
天台大師此經論をば見ねどもさとらるゝ
也。此文のごとくに卷をば見ねども。義をも
つてしる也。

一源氏實に死給事不知。其故宇治宿木の卷に。

故院うせ給て後。二三年ばかりの末に。世をそむき給ひし嵯峨院にも。六條院にも。さしのぞく人の心おさめんかたなく侍けりと云り。如此なる間遁世して嵯峨にもおはしましける。説々多。猶可尋之。

匂兵部卿

一とにかくに 左右とかく。

一いとなく いとまなく。

一くいたいし 羅睺羅の母耶輸多羅の事。

一ひとつおとゞ 弟にあらず。大臣。

一うつしをしめ 香の匂をうつししめたる。

一。一説うつしは薰の惣名云々。

一のり弓のかへりあるじ 賭射。大將のの

り弓の御かへるさに。響を用意したる。

此あるじは響。

一賭射は 清和天皇貞觀二年正月十八日よ

り始。内裏の弓場殿にて射之。四府舍人

射府^{左右近衛。左右兵衛。}也。左右大將取手奏。

紅梅

一其比とは 今上御位の比。橋姫の卷の

初に。其比世にとある。おなじ時代の事

。

一のぢのおほきおとゞ 野路の太政大臣。

又後の大臣と云説有。但行成卿の自筆本

に野路と被書間。野路の説よき。

一つまびき 琵琶の撥ならで爪にて引事。

一かはぶえ うその事。うそ笛とてくちに

てうそをふく事。

一はしがはし 端が端。

心ありて風のにははすその、梅にまつ

うぐひすのとはずや有べき

一ふところがみ たたふがみ。

一もとつかの 本の香。つは助字。

一御ふさひ 祥。御心にあふ事。心に相

當したるん。

一 いづれもおなじごと　　ごとは如ん。

竹川

一 源氏の御ぞうに　　ぞうは孫ん。

一 のぢの大臣　　野路ん。後と云は異説也。ひ

げくろの大臣の事ん。

一 わろごたち　　惡後達ん。女房の名ん。

一 さだすぎて　　貞年とは盛なるん。仍盛過

ん。

一 もぎ木　　(可歌) 柜と書ん。木の枝なきん。順野宮

の哥合判の詞に云。したにほゝゑむ。千種

に匂ふ花のあたりにほ。もぎ木のやうに

てまじりがたく侍と云り。

一 おもなけれ　　面つきなきん。

一 せんかうのあしき　　淺香ん。わろき香ん。

一 沉にて折敷をしたるん。

一 とぶき　　言吹と書。祝言ん。壽。日本紀にみ

ゆ。

一 なれき　　女の名ん。馴公と書。

一 まへまうし　　前にて物執申ん。

一 けんそうなる　　顯證と書。あらはなる躰

ん。

一 心ときめきに　　心けしやうか。譬ばさも

つきたる躰ん。

一 右のかとう　　歌頭ん。

一 わた花　　挿頭の花を綿にて作ん。男踏哥

の時さすん。

一 ばんすらく　　萬春樂ん。

一 またかたなりなる　　未調ん。

一 つかうまつり人　　奉公人ん。

一 かうがへさせ給　　勘當させ給ん。又かん

がへさせ給ん。

一 あはの御とはりや　　あはくしきん。

一 大さやうのゑかの君達　　大饗の垣下の君

達之。

一かへり立のあるじ 歸立の饗之。

橋姫宇治十帖

一ぞくひじり うばそく之。淨名居士云。身

在家。心出家。是優婆塞之。

一かうさく 還迹之。吉事也。

一こだい 古代之。

世をいとふ心は山にかよへどもやへた

つ雲を君やへだつる

一詞だみて 迂の字之。

一きすくにて 健字之。こはき心之。

一しげきの中 野之。

一なにがし 何然。

一かんなぎ カンナキ 男。音 硯 カンナキ 女。音

一さうじあるして 請下之。

一いらゝぎたるかほ 鳥はだの躰之。雞皮

と書。

一こめかしき 古めかしき之。

一こちくしき とくしき之。

一ろなふ 論なう之。無論書。

一さいやかにをしき合たり 細々許と書。

遊仙唄ニあり。ほそく少き事之。

一松のおひささ 生末と書。是は卷にあら

ざる事之。靱負命婦とは左衛門佐が五位

に成たるを云之。四位を朝臣といふ。六位

を藏人と云之。

一ぎ 儀も阿闍梨ニ問結。〔給殿〕法門の難儀之。

一らうたけなる 上薦しき事之。良氣と書

之。

椎本

一かんすいらく 酣醉樂之。又河水樂と云々。

兩説。右の舞之。

一あじろ屏風 〔障紙〕 筵屏風と書。障子の骨のや

うにして。黒塗にして。あじろをくみ糸に

てとぢ付たる人。

一なまそんわうめき 只王孫の末人。王と

いふ姓の人四位人。

一へいしとる人 酌とる人。

一すをしよせて 簾押寄人。

一うへばらは 殿上人の子息人。上童と書。

一さほいかへり給 我ささにといそぐ躰人。

前。

一世をさり給なんうしろの 後人。

一おほをしき おどろくしき人。

一みだりあし あなたこなたへありく躰人。

一かづらひげ おもつらひげ人。凡俗の隨意

人。

總角

一名香の糸 行香の机の四角に結たれたる

糸也。行香とは八講の結願に公卿八人し

て抹香を僧の手に入るを云人。

一たゝり 糸をかくる臺人。

一さはりおほく 碍さばり人。

一伊勢の御 伊勢の御とは女房のかしつく

心人。

一するくんと すみやかにと云心人。速人。

一世でもりたる とは。若ければ行末に世

のこもりたる人。

一かたほ 頑の字人。かたおもひの心人。

一すきて とはのみ入る事人。吸の字人。吞

共。喰共。松の葉すきてと有。

一とのこいたる とは言残たる事人。

一ひろばかり 八尺をひろと云人。左傳ニみ

ゆ。

一ちかおとり 近付て後思捨たるを云人。

近劣チカトリ。又近増チカマサリといふ所もあり。

一けせうに 顯證と書。あらはなる心人。

一ざうやく 雜役。細々に召仕る人。

一かべしろ 壁に夏はすゝし。冬はねり絹
を一重間ごとにかくるゑ。

一なにがしの念佛 引聲の阿彌陀經の事ゑ。

一常不輕をなんつかせ給 ぬかつく心ゑ。

あがむゑ。法花經の説。

一なよびかなる 麗の字也。美麗の心ゑ。

早蕨

一はかしなど奉給へり 女房も太刀を持る

ゝ事也。

一しなてるやにほの水うみ 湖光。シナナル 白氏文集。只

水うみの惣名ゑ。にほてる。同事ゑ。

宿木

一つしやか 重々しきゑ。

一あそびなど 管弦のとゑ。惣じて只御の

歌をうたひて管弦するを御遊と云ゑ。

一めいしく 目たゝしくゑ。たとへば目に

立といふ心ゑ。

一ゐてありく 將行と書。つきてありくゑ。

一あしこ あそこゑ。

一さしぐみ やがての心ゑ。初の心ゑ。

一世をそむき給し 嵯峨院と云々。

一のちみじかさぞうなれば 命短孫なれ

ばとゑ。

一そしり 誹書。

一御心しらへ 心しりゑ。

一綾のれう 綾をるべき糸ゑ。

一いとかしこけれども びんなけれどもゑ。

忝といふ心もあり。

一こだに 木蛸。だにと云字。莓の類ゑ。だ

にの物にくひ付たるやうにはひたるかづ

らゑ。かゝみつたといへり。

一やどり木 とは木にはあらず。但宿木ニそ

へたり。寄生。ヤドリキ。ほやの事ゑ。

一つくもどころ 作物所と書。大内の中殿

の中にある。

一なをしもの 直物と書。除目の時執筆の

違たる事。直物とて申給。

一たうのはい 答拜と書。人の拜賀に來時。

主人あり立て拜するを云。

一ごてのぜに 圍碁手錢。皇子御誕生に

て碁をうつ。其かけ物の儀。

一ふづく 粉熟。桑の様なるもの。一切の

祝の時出る物。食物。

一御いし 御倚子。いす。主上の御腰かけ

らるゝ物。

一やうき 楊器と書。塗たる朱器と云。白木

をば楊器と云。引入。

一御盃さゝげてをしとの給へるこはづかひ

唯稱ユイセイの事。たとへば上より仰ある事を。

さ承といふ心に。あふと申事。

一ごぜんども 前駟之事。

一若苗色のこうちぎ

萌黄色。衣の色の事。

吾妻屋

一かんのこども 常陸守が子。守をかん

と云る。

一すぎく 次々。

一はやりかなるこく 曲コク。馬秋樂。

一あこ 吾子書。

一こたび 今度コタビ。

一御くちづからごち ひとり言云心也。

一ゆくりかに 不意と書。おもはずとよむ。

思かけもなくふとしたる事。

一御ゆるる 髪あらふ事。沐字。

一屏風ひとひら 一枚。

一かじけたるめのわらは 懽かしがたる女童と書。

一がまのさう 降魔の相。おそろしき事。

一うつし馬 前駟の馬。うつしとは鞍の

名。朱さしたる。鞍をさ馬。やまと

鞍とは金にて幅輪かけたる。

一あて人 上臈の事。高貴人。妙人と書。仇人とも。

一あじろ屏風 (源氏) 筵屏風と書。ぬり骨に車の

あじろをはりてくみてつがひたる。

一いがたうめ 伊賀多部女と書。媒の人。

中媒人の事。或説ニ伊賀刀女と書り。た

うめは狐の事。又云。まつりする者也。

いなりの返坂といふ事あり。

一やかのかつみ 家のたつみ。作者家持

とあれば。左作者。

一よもぎのまろね 奚仲蓬轉するをみて車

を作初。然ば車の榻まろねの心。

浮船

一またぶり 木の枝。

一やまし 心やましき。心病。

一ついたちごろの夕月夜 涅槃經ニ云。初月

二日月三日あれば。朔も月は有へき。

一しびら 褶字也。

一さばみん さらばみむと。

蜻蛉

一やさしくとは はづかしきと云事。

一めしく 目たしく。

一いかなるそのうつぼ 空瀬と書。

一いたきものにおぼして いたくほめたる

心。致書。至也。

一五卷の日 中日の事。

一ばうそく 傍側と書。あらはなる事也。

一ありへはんべらむ 有侍らの心也。有

經侍らん也。

一おきなこと 老人の言也。翁言也。

手習

一なにがし 精川 惠心僧都の事也。

一うぢの院 平等院也。

一こだま 魍魎と書。大日經。木神共。樹神

共。空谷の響也。あま山びこ同也。

一いかさ 猛字。

一てうじて 調伏也。

一よそめい(二聲) よそをひ也。

一無慚愧也。 むざんぎとは人目もはぢぬ心

え。

一はすのみやう 蓮子。蓋の名え。はすのみ

とて。酒ののみやう也。

一ひはだ色のはかま 尼君のきるものえ。

茶染色の黒ばみたる色え。

一世をこめたる 末の遠き心え。年の齡の

遠心え。

一尼公まつちの山となむ見給ふかと

誰をかまつちの山の女郎花秋と契し

人ぞあるらん

一いづらくそたち 下女の名え。屎達と書。

一あだわざ 徒事の心え。

一かへり申 賽と書。悦申え。

一碁勢大徳キセイ 昔圍碁の上手え。

一ひとつはし 狼梁と書。一橋共。

一不意 おもはずとよむ。日本紀。

一あたらし 可惜事。日本紀。

一のちは葉の薄がごとし 薄葉命の事え。

一はんさうなど 萱草色の袴の事え。紅

の黄ばみたるえ。出家若は服者の着する

なり。

一いつへのあふぎ 櫻の三重がさねの心え。

一檜扇の端を五重かさねて。扇の糸にて是

をまとふえ。

一をとうとゝは いもうとをいふえ。

一いちのところ 左大臣の事え。一の人と

申に依え。一の所書。

夢浮橋

一夢のわたり 徑ワタリをのゝわたりと云え。又

云。遊仙嶮ニ所の字を讀。

一谷の軒端 谷の端え。軒端同事え。只家え。

家共の谷のはづれより見えたるえ。一説。

只谷のはづれを云と云々。

一谷の戸 同前。谷の口を云え。

一たまどのにをきたりける人のたとへ 殯

殿と書。魂殿共。万葉ニ大殯と書。死たる

人をく所え。

一ひきぼし 曳干と書。精進物え。海草え。

しんはさうといふ物と云々。

一三月ばかりはなき人のやうにて 只三月

とはみつさえ。彌生にはあらず。三月みつ

さばかりとよむべし。可尋。手習の君うせ

給しは三月ヤヨヒえ。兵部卿は此月の晦日比に

むかへんとし給え。やよひ晦日え。薰大將

は卯月の十日となむさだめ給ける。此兩方に思わづらひて身をしづめ給しにえ。

一見たてまつる人もつみさり所なかるべし

見る人も惣をおもふとえ。

此物語桐壺より手習にいたるまで。或は詞をもつて名付。或は歌をもつて名付らる。此卷夢浮橋といへる事。詞にも歌にもなし。古來より不審え。可尋。凡夢浮橋といへる事は。夢の徑のうき橋とある歌に付いていへるにや。手習の君薰の文をもみずして返されしに依て。ふみゝぬといへるに付て。夢のうきはしと名付るにや。この卷に夢といふ事。五十ヶ所あまるべし。又大將歌も山にふみまよふとあり。惣じて物語といふは。色にふけり身をあてがらすにはあらず。盛者必衰のとはりをしらしめむがためなり。世中になにか夢にあらずといふ事なし。しるす

にいとまあきあらず。此卷ひとつの名あり。
法の師ともいへり。歌によれり。

法の師とたづぬる道をしるべにて思はぬ
山にふみまよふかな

依て法の師とも可名付歟。夢のうきはしと
いへるも。此歌のふみまよふかなといふに
付て名付にや。有無ともに夢へ。猶可尋之。

本云

此一札二條家之秘書。宗祇庵主自筆之本。
宗長傳之。努々不應有他見者也。

于時應永廿六年春下澣書寫之訖。

源氏の物語のおこりは。村上天皇の御むすめ
おほむ齋院選子内親王上東門院に御消息あり
て。春の日のつれづれに侍るに。さるべき物語
たまはらんと申させ給へるに。女院の女房越

後守爲時が女式部の局をめして。いかなる物
語をかたてまつるべきと仰あはするに。式部
申さく。あちくぼ。いはやなどはめづらしげな
くや侍らん。あたらしくつくり出て御覽ぜさ
せ給たらんは。申させ給たるかひも偽(侍等)なむと
申に。さらば思はからひてむやと仰られけれ
ば。心みにもしやとて。石山にまうて、この事
をいのり申に。おりしも八月十五夜の月水海
に浮て。とさらあきらかなるをみて。そゝろに
心のすみけるまゝに。六十帖のうち第三の卷
をとにたぐひなくつくれり。これによりて紫
式部といはれたり。是をつくりたる心ざしは。
かの業平の中將とて。阿保親王の御子伊豆内
親王の宮にむまれて。そのしなたくひなし。又
かたちきよげに。やまととわざになへなりし
をまなびて。光源氏の君となつけいたせり。そ
のふるまひかの二條五條のふたりの后にまい

りしになぞらへて。薄雲女院二條内侍がみに
かよはせ。六條の御息所のむすめの齋宮にと
もなひくたり給し別をおしむ。これのみなら
ず。さまざまなさをかけちぎりし。ある説に
は。西宮左大臣高明のおとゞは醍醐の御門の
御子第一番の源氏にて。みめかたち世にすぐ
れ給へりしを。又光源氏にたとへ。我心にしめ
たてまつるによりて。紫式部の名によせて紫
上をあらはし。大宰權帥にうつされ給しを。須
磨の浦にしづみ給ふわかれになぞらへたり。

まとおもふよしなくて。いたづらにかさい
だせるにあらず。たゞさりげなくておほやけ
わたくしにつけつゝ。人の心をつけ。やまとも
ろこしかねて。ものゝなさをしらしむ。六十
四帖のうちに男女のよきあしきふるまひをあ
らはし。三四代のあひだに君も臣も身をあは
せ事をのせたり。おほよそ管弦のみち詩歌の
おもむき。時につけてさとらしめ。ことの葉に
よせてをしへずといふ事なし。

續群書類從卷第五百十七

物語部十七

類字源語鈔

以

いと

最。文集。

いたう

甚。傷。萬。痛。万。

いたし

痛歟。野分ニ明石ノ上ヲ云ニ。ウチギ引ヲトシテ。ケヂメミセタルイトイタシ。若紫卷ニ。明石新發家イトイタシトイヘリ。漂流卷ニ。乳母ヲ下ス所ニ。哥ノ返哥ナレテキコ

總檢校保己一集

男源忠寶校

フル。イタシト覺スト云。御幸卷。又三條宮玉鬘方ヘノ文ヲ源氏見給テ。古躰ナレドイタシヤ。

いさめ

諫諍。禁。イサメ。制ス。

いかめし

認。文選。イサメ々。

いたつく

勞也。煩也。イタハリカシヅクニモ用。心ヲイタツカシウスルニモ用。

いむ事

戒也。私云。物ヲ禁ズルハイム也。

習字ニ入商義合別
いひそし

云。敏也。シヌバカリ云ヲイヒソシト云。又云。訴。是ハ云ヒウタウル也。心別也。云ソスモツヨク云也。私云。凡ソスト云コトヨロヅニワタル也。シイソスト云ハ。酒ヲツヨクシキタル也。笑殺。愁殺ナド詩ニ作ル同心也。

いはけなみ

幼稚形。イトケナキスカダ
日本紀無意分。

いとなく

無暇也。私。隙ナキ心。私。空蟬ヲ云ニ。春ナラヌ木ノ目モイトナク。

商義合別
いはけ

意分。驚騷。イワケタル。日本紀イトマナキ。紅葉賀卷ニ。心ナゲニイワケテキコエ。イヒワケテ也。螢卷ニ。マタイワケタル。私云。詞ハ同ケレドモ。心ハカワルコトアリ。ヲサナ

キヲモイワケト云。幼稚心。

いざよふ月

山ノハヲ出ントスルヲ云。私云。ヤスラウ也。十六夜月ヲモ云。私云。夕ニ月ノ影ノ指出タルヲモ云歟。

いつみ

冊。イッカメヅク心。嚴。是ハ嚴重莊嚴心也。私云。兩ナガラ詞同ケレドモ心カハル。所ニヨルベシ。花宴卷。アザレタルオホ君姿ニテイツカレ入給ト云ヘリ。又イツキノ宮ハ齋宮ノ事ナリ。別事也。

いかに

辛。忿怒。フンヌノイカモノ。葵卷ニ。六條御息所人ニ付時。夢ノ中ニタケクイカキヒタブル心出來テトイヘリ。私云。猛烈ノ心也。ヒタブル心ハ純一ノ心。太字。

いさすだま

遊仙窟云。窮鬼故調人。注云。魄與鬼通云々。

葵卷。御息所靈也。私云。生靈也。イキス
ダマ。

雨義ハ別
いでたち

出立

世ニ出立交ル也。若紫ニ明石入道ヲ云ニ。大臣ノ御後ニテ。イデタチヲモスベカリケルヲト云。私云。是ハ出身ノ心也。又ハ旅ナドニ出立心別ナリ。

いぢやう色

有花鳥餘情。

いりあや

入綾。舞ニ綾取手トテアリ。紅葉賀ニ見ユ。

いぶかし

不審也。ヲボツカナキ也。

いちはやさ

スミヤカナル也。

いつゝのにごり

五濁。

いふよしなう

無云由。

いぢしめ

ツゲシラスルナリ。誠告。警命。明石ニ。イマシメノ日ヲスグサズ。此由ヲツゲ申侍ラン。入道ノ夢ノ告ヲ云也。私云。所ニ依テ心別ナリ。

いちめあき人

市女商人。私云。市女笠キテ物ウル鬻女也。

いそしく

イソガシク也。私云。カルラカナル心ナリ。

近江君ヲ云。

いまずかりけり

オハシマスナリ。私。イマシマス也。

いさまさ給

意氣卷。息榮。イカル貞ナリ。若菜ノ上ニ。大后ノ坊ノ始ノ女御ニテ。イキマキシ給シカ

ド、イヘリ。

いろ

求子。神樂二名。

いうそく

^{兩義}優息。又族。乙女卷。若菜上。亦有職。所ニヨ

ル。若菜下ニ。只今有ソクノ。

いもい

齋也。精進。文集云。十三年來坐ソ對山。唯將

無事他人間。齋時往々聞鐘笑。一食如何不可

閑。若菜ノ下。山御門御賀ニ。サマ／＼ノ御

法服イモイノ。又イモイノ御鉢トアリ。

いちこちてうにはちのをたてい

撥絃ハ調子ヲツカサドル宮ノ絃ヲ撥ノ絃ト

云歟。八絃一越調。箏ハ八緒ニテ。發合モ手

ズサミニモアレバナルベシ。壹越調土用ニ

トル。

いがたうめ

伊賀刀部女。中媒也。齋宮寮部女狐也。或云。

ヲマツリシケル者也。イナリノ返坂ハカレ

ガツクレルトナン。

いらゝぎ

橋姫ニ。サムゲニイラ、ギタル。私云。身ノ

毛ナドノ豎テ。膚ノ如粟ヲ云々。

いむつくる

印也。眞言印。常夏。

いとさ^{或左様々}ことくし^ささは

嚴重ナル涯。私云。若菜ノ下。イト、句ヲ切

テ。サトヨミ切テ。コト／＼シキキハト可

讀。

いそ寺

若菜下。イツ寺ノ御誦經。或寺ノ名也ト。不

用。私云。五十寺也。源氏四十賀時。四十寺ト

云同事也。

いか

五十日也。百日ヲモ、カト云。

いますからうや

ヲハシマスマト云也。タケ川。

私たちの侍らん

東屋。ヒタチノ詞。マカケサシタル心也。

いつへの扇

手習ニ。カミハ五重ノ扇ヲヒロゲタルヤウ

ニ。私云。手習君尼ニ成タル髪ノ躰ヲ云。五

重扇事。三重ノ扇ノ所ニ註ス。

いさたえし

イキタウシト思シヅミタマヘル。不生。玉葛

卷。

いびき

鼾睡。

いで

厭乞。常夏ニアリ。俗ニ人ニ物ヲ乞トテイデ

ト云。又イデ我ヲ人ナトガメソ大船ノ。古今ニア

リ。イデハ發言ノ詞別也。

いつかしき

玉葛ニアリ。天下ヲ御心ニカケタル大臣ニ

テ。イカバカリノイツカシキ御中ニト云。私

云。嚴字。

いとどしく

私。イツシカ也。イトハヤキ心之。

いてはなち給

私云。弓ニテ矢ヲ射放心歟。

いでゐんが

出居。櫛卷御息所ノコトバ。

いしぶし

鯉。

若菜下 いみをだに心の鬼に

忌字歟。人ノ思ハン事ヲ忌ハバカルコトカ。

若又諱名歟。

サワラヒ いひくたさまほしき

言腐也。イヒケツ心。

ヤトリキ
いらへし給へ

私云。サシイラヘノ心歟。トキト云心。

呂

六十卷と云文

天台宗本書也。玄義。文句。止觀。各十卷。天台大

師御作。尺籤。疏記。弘決。各十卷。妙樂大師尺。

ろうせらる

嘲哢。

ろなう

無論。

波

はしたなめ

鬼鬼。日本紀。私云。ハシタナゲニ云ハヂシムル

心之。イマシムル心モアリ。

はしたなき

半無。非常儀。私云。ハシタナキハ。カラクハ

チガマシキ心歟。

はかなき

無道。日本紀。墓無。私云。アダナル心ナリ。

はださむさ

膚寒。タン字漏。極寒入骨。將寒。タン字澄。秋風大入。

ばうそく

傍側。私。飽足。ノキバノ荻ヲ云。

はねをならべ

比翼鳥

はらから

兄弟。日本紀。

はふれ

放埒。私云。ヲチブレタル也。

はなちがき

放書也。文字ヒロヒトモ云。私云。手本ヲ放

レテ心ノマヽニ書ヲ云歟。

はうし

拍子。

はなしろめる

臆シタル貞ナリ。

はなまはゆけれど一紅葉音
はなましろま

追從シタル心。私云。追從シテ虚言ヲ云人ニ

ハ。鼻ノウゴキホヤメクナリ。目ノウゴクヲ

目ノマジロシクト云ガ如シ。

はらぎたなき

腹ゲロキ也。

はつしやう

八省也。

はうとう經

方等經。

はちふく

發腹。ハラタツ也。紫明ニ蜂ヲ拂心也云々。蜂

吹。

爾義各別
はふき給

省。濁。羽菅別心也。澄。省。々略心也。又ハ羽

菅心。私云。若菜ニ。御息所ノ物ノ氣ニ出テ

云。コト人ノ云ヲトシメンダニ。ハブキカク

シ給ヘトコソトアリ。是ハブキハ只見カク

シ給ヘト也。別心也。

春の鶯囀

ト云舞。春鶯囀。壹越調。

ばんすんらく

万春樂。踏哥曲也。

はこ鳥

杲鳥。万。貞鳥。容鳥。春鳥。或ハカホトリ。

はる秋ノ行幸

朝覲也。禮記云。春見云朝。秋見云覲。

ばう

春宮坊。桐壺。

はなのなかのやどり

ハチスノ世界。

はかりごちて

私云。アザムク心歟。

はやうは

ハヤウスミシ所ナド云ハ。ムカシ住シトコ

ロナリ。モトノ事ヲハヤウト云也。

灰合はいあひかたき紫の

檳柱哥ニ云。カクバカリハヒアイガタキ紫

ノト云々。紫ヲ染ニハ。椿ヲ焼テアクニスル

也。古歌云。柏木ノイハタ染テウムラサキノ

アハンアハジハ灰ノ心ニ。

はちのを

一越調ニハチノヲ、タテ、私云。其調子ノ

位ノ絃也。

はむそう

伴僧。

ばうがね

匂宮。坊ガ子也。

ばい給はず

奪也。夕霧ニ。アリシヤウニモバイ取給ハ

ズ。

はすのみ

蓮子。手習ニ。スイバンハスノミヤウノモノ

ト云。私云。蓮子ノ如ナル青磁盃也。

はくこう

日ヲツラヌク。燕太子丹故事。

雨義葉風
はかせ

太力 藤裏葉ニ藤内侍ノ返哥ニ。ハカゼナラデハ

トキコエタリ。折桂葉風ニ博士ヲソヘタリ。

又太刀ヲ云。

仁

にげなく

無似氣。無人間。私云。少シホムル詞ニモイ

ヘリ。ニゲナカラズトモ云。ニツカハシク宜

ト云詞歟。

になく

無二。第一ト云心。ナラビナキ也。

にぎはゝしき

富饒。箒木雨夜物語ニアリ。

西川路
にし河より

桂河也。

梅かえニニヤカナルカンナツカシキヘトイヘリ
にこやか

濃艶也。莞爾。ニツコトワラウ也。

にほはし給はざりける

カネテイハヌトイヘル心ナリ。

にばめる

服ノ衣ノ鈍色メカシキヲ云。

にのまぢ

二町。ツギノ町ト云ナリ。御厨子ノ重々ナル

内。第二ノ品也。

にげつゐたる

似氣付。ソノ人ニ似アヒタルヲ知ラント云

心ナリ。

保

ほうじ

法事。

ほのめき

髻髭トホノカナリ。

ほそなが

未通女ノキルカリギヌノ。クビカミノ様ニ

タテ、ミワタソノ物也。水原云。未通女着用

也。然トモ可然人。モシハ后立女御參時。ヲ

トナシキモ着用スルナリ。組ニテ紐ヲツク

ルナリ。

保暦四年世利
ほそろくせり

長保樂ノ破也。急ハ賀利夜須。右樂。名ハニ

クケレドホソロクセリ。紫上ニ箒ヲシヘ奉

給フ所。

ほんさい

本才。文集。夕霧ノ一條宮柏木ノ本上。カヨヒタマウ所ニ。僧都云詞。又本妻。

ほさたる

模規タル。メヅラシキ也。

ほがらかに

朗。アキラカナルナリ。

ほうさう寺

法成寺。法性寺。宇治邊也。用之。

ほぐ

反古。私云。ホングトヨムベシ。

ほろゝけ

ホロメキタル也。私云。明香ニ蜜ヲマジヘズシテ。ホロ、ケタル事ハ。蜜ハ生類ノ成故也。乾キタルコ、ロ。

ほうげづく

法氣付。箒木ニ。吉祥天女ヲ思カケントスレバ。ハウゲヅキクスシカラント云々。心ハ天

女ナレバ佛法メカシク。醫師毒ナド、テ物嫌ナドスルヤウナラント云也。

ぼんじとかいふ

柏木ノ手ヲ云。梵字ナリ。

ほそどの

弘徽殿ノホソドノ。廊。秘説。

ほうゆがめて

方曲也。

へ

へいしなど取らせ

甍子。シヤクトル也。

べいじう

倍從舞。

へん

(旁注)

篇突也。玉篇ノ中ナニヘンノ字トサダメ

テ。シリタル字ノ多少ニテ勝負スル也。

篇。橋姫ニ。コトラシヘ。碁打。ヘンツキ。オ

ホヒ君中君事。

へんもはなれぬ

宿木ニ。弁尼薰ニ。東屋ニ故北方ノ御メイ。

ヘンモハナレヌナカラヒニト云。

止

とじき

トンジキトヨムベシ。屯食。ツ、ミイ、。桐

壺。源氏元服所ニアリ。

とうて給

取手給。

どうもなく

動無。ウゴキナク也。

ところせき

所狹也。

といて

兩義各別

外出。取出。常夏ニ。姫君ヲスコシ外出給ト

テ。物ヲトリイダス也。

とけて

ツカサトケテ。解官ナリ。私云。解官三在リ。

理。喪。病。

とをつら

十烈。童隨身十ツラ。

とを十は廿たみ冊そ四十よそ

簪バノ萩ノ碁打所。指ヲ龜テ地ヲ算ル也。

とりゆ

取由。箏ノ左手ニアリ。七ノ絃ト爲ノ絃トハ

由スル也。コトヲホムルニ。由ノ音フカクト

イヘリ。

とりてう

鳥蝶舞。

とをひねりて

筒。双六ノ賽ヲ盛竹也。常夏。近江君双六打

所。トウヲヒネリテ。セウサイノトコウ。

とりのせう

夕霧ニ。物ヲヂシタル鳥ノセウヤウノモノ
、ヤウナル。鷹ニハ雄ヲ小ト云。雌ヲ大ト
云。俗ニセウニナル。セウカウヒネルト云常
詞也。鳥ノセウカウヒネルト云ハ。鶏ノ負テ
背ヲク、メテニグルヲ云。

とのもりのくそ

手習ニ。トノモリノクソアヅマトリテト云。
クソハ女名也。古今作者ニモアリ。トノモリ
トハ。其所ヲマボル人ヲ云。

とぢめむ

閉ナリ。ヤミトバマルナリ。

どこ

獨鈷。三。五。佛具。若紫。源氏中將ワラ
ハ病マジナイニ。北山ニヲワス僧都。ドコタ
テマツルトアリ。

問 給 不
とうたまはぬ

トイタマハヌ也。

とのゐ物の袋

秘事ナリ。別ニ在口傳。

とし

初音ニ。千年ノカゲシルキ。トシノ中ノイハ
イゴトバモヲシテト云。ヲノガトシ也。トウ
例ノ事ナリ。

とさよくて

御時ヨゲナリツルハト云リ。御幸ニ。三條宮
ニ六條院内大臣ト對面ヲ云。

とみ

イツギト云心ナリ。

知

ちやうぶそうし

齋宮司人也。長奉送使。

ちしのへう

致仕ノ表。

ちえだつねのり

千枝。常則。二人繪師。在高明錄。

ぢしき

ヒロムシロ。地敷。御茵。脇息。

ちうさすこと

柱。琵琶左手。私云。ビワノ柱ハ四也。四絃ヲ

一柱ゴトニノセテ。各四々十六也。一乙行上

一柱。口下七八二柱。凡十比ト三柱トツ乞之

也。四柱突歟。

ちす

帙簀。チスノカザリト云ヘリ。竹ヲ簾ノゴト

クニ編テ。錦綾ヲ裏付テ經一帙ヲ置也。チツ

ス也。

ちかきまもり

近衛大將。

ぢぶつ

持佛。

ち間義

地也。持也。夕顔卷ニ空蟬碁打所。ソコハヂ

ニコソアラメ。次持正トスベキ歟。卅四十ト

カゾヘテ劫ヲタツル也。或云。ソコハ地ニコ

ソ。以地爲正。

ちりぼひ

玉鬘ニ。筑紫ニテハ口惜カラヌ人京ヨリチ

リボヒ來ルト云。私云。塵バミ來也。サシモ

ナキモノハチリニ交ル心ナリ。

利

りうじ

臨時。初子ニリウジカクト云。

りうじかく

臨時客。子曰ニ。ケフハリウジカク。

りんので

輪說。樂ニメヅラシキ手ヲ引ヲ云。箏琶。

りんじのまつりのてうかく

調樂。箏木。臨時祭。十一日中午。賀茂ニテア

ルベキ樂ヲ。内裏ニテト、ノヘラル、也。臨時祭ハ寛平九年ヨリ始。北祭ト云也。南祭トハ八幡ノ臨時ノ祭也。

奴

ぬかつく

額突。稽首。

ぬき河

催馬樂律。

ぬさ

幣。麻。旅行ニ出時。道祖神ヲ祭テ錦錢散米ヲマクヲ云也。勸酒テ祭神。人ニモ勸之。錢送ト云。

ぬさぶくろ

拾遺ニ。人ノモトヘ。ヌサヲ結テ袋ニ入テツカハストテ。

ぬすまはれ

末摘卷ニ。ヌスマハレ給トアリ。ヌスマレ給

ヘト云ナリ。ヌスマレイデ給ト云ハ。吾身ヲ人ニ知レズシテヌスミ出ル也。

留

るい

親類也。玉鬘ニ大夫監ヲ云ニ。ルイヒロクテトアリ。

遠於合入。私云。をハ音緒。平聲。於ハ音尾。去聲。以此平去之響自余之詞モ可知也。

をよすげ

助及。日本紀。

をもやう

若紫ニ紫ノ上ヲ云ニ。ツラキオモヤウ。イトラウタゲニテト云ヘリ。(ツ脱敷)

をまたし

ヲモテヲコシト云心也。面立。面目アル躰也。

おば

北方。祖母。和名オバヲト、。或大北方ト云。

祖母ヲオホハ、ト云。祖父ヲオホチ、ト云。
をかしさ

ヨキ事。メヅラシキ事。ホムル詞也。夕顔ニ。
ナキ給サマイトヲカシ。小野篁記ニ。ヲカシ
キ事ヲヤサシカラマシト云々。私云。此詞類
多シ。ヨキ事ヲウラヲカヘシテ云也。惡事ヲ
ユ、シト云フガ如シ。

あり、つ物
折物。

おほそ

大惣。箒木。

あさく

漸々。和名。幹了者。日本軌制。同。治天下。匡房
優。長。私云。此詞所々ニ多在之。依所心カハ
ルべき歟。

あのがじし

各競。日本紀。各自恣。各寺師。人死スラシイモニ

コヒ日ゴトニヤセヌ人ニシラレズ。万葉。人丸。秋
風ノ四方ノ山ヨリヲノガジ、吹ニ散ヌル紅
葉カナシモ。新六。私云。各自身歟。我モく
ト云心歟。又我ドシト云心。
小大をいささこもれる

窓ノ中。小大。苗。同。箒木雨夜物語ニアリ。
をぞまし

形遠。文選。をずまし同。私云。ウトクヲソロ
シキ心也。

をそさ人

ヲソロシキ人也。宿木ニ在。

雨義各別音證也
をとなひ

喧響。日本紀。箒木ニ。衣ノヲトナイハラくト
シテ。私云。をとなひ。ヒヲ濁テヨメバ生長
也。別心ナリ。

おほどか

令序ニ。義穩ニシテ情理難通云々。
ヲホトカ

おほども

同。カトキト五音通。

おはそうず

ヲハシマス也。

おまし所

寢殿。茲。ヲマシムシロ。私云。尙書云。衛康

叔敷ミマシテ茲。只おまし共。御座也。

おぼしただける

又ハたせる。思下ナリ。思碎也。

両義
おもと

侍者。ヲモト。ヲモト人。某ノオモト、女ヲ

云稱號常ニ在リ。或御許也。

をれくしき

ホレくしキ也。ヲレ物ト云同心ナリ。をれ

てとしふる同。

をれもの

ヲロカ者也。繪合ニ。筆トルワザト碁打事ト

コソ。フカキラワナクミユルヲレモノモサルベキニテ。書ウツトアリ。

おほい君

大君。王姓也。諸王孫王ヲモ云。おほ君。同。

玉鬘ニ。和琴ヲシヘケルフルヲホ君ト云ヘ

リ。

兩義各別 思立漏

おほしたち

生立音

生立歟。ヲホシタテ也。チトテト音通。

おほしく

男々シク。大ヤウニケタカキ也。私云。雄略。

ナホシク。日本紀。雄。同。拔。同。

をどろくしく

驚心也。

おほとなあぶら

オホトナアブラ。オホトノアブラ。所々ニ云

替ル也。同。

おほ君すがた

直衣姿也。

をさめみかは

八雲抄云。ヲサメハ下女也。ミカハ、ヒスマシ也。私云。ヲサメ。古注ニ箴^{布織具}ウル女ヲ云也ト云々。不用。家中ニ物ヲ納ル下女也。ミカハヒスマシト云々。不淨ヲ河ニ持テ洗ヒスツル下女也。丸ト云桶ニ不淨ノアルヲ。生好絹二幅ヲ縫連テ。兩ノ端ヲムスビ合テ。此丸ヲスヘテ臂ニ懸持出ナリ。此女ヲヒマスシト云。スマスハ濯也。

をひれ

小ヲサナヒレ也。ヤハラカニヲヒレタルモノカラト在。

おほみあそび

オホミキアソビ歟。私云。大ナル御アソビ也。古今雜部ニ在。

をこたり

浮舟ニ。ツキセズ戀シキニモ。身ノヲコタリトナゲキソヘタリ。懈怠ノ義ニハアラズ。身ノオロカナルナゲキ也。

^{兩義}おくたかさ

奥高。臆高。乙女ニ。オクタカキ物ト云ハ。物モヲボヘズト云々。物ニ臆スル也。奥高トハ奥義ヲキワメタル高才者ト云々。臆高トハ臆病ノ高也。私云。モノモ不覺トアレバ臆高歟。

^{おほんい}おむとしみ

御賀也。徳大寺公繼公ハ試樂也云々。或注云。御年滿ト書之云々。

おほみをつぼ

御ミ大壺。御ノ重就^{（重就）}。近江君詞。私云。小便筒也。

おむ

詩哥タキ物ナドニ。ミナ誰ヲカント在^{（符懸）}。若菜

下ニ。大將ノ御。内侍ノスケバラノ次郎君。

紫式部記云。上東門院御産所ニ。内侍ノカミ

ノ御。中務ノメノト。ヒメギミノ御。少納言

ノメノトヲシ入キテト云々。是モ御ヲ上ニ付

テヨムベシ。人ヲ御某ト不可云哉。

落色
をらぐり色

コキ紅ノ袴ト云々。但紫歟。隆行源氏上句落

栗袴應紫云々。下句三野加賀紫ノネリ袴歟。

行幸ニ云。ヲチグリトカヤ。昔人ノメデタク

シケルアハセノハカマ。

おにしき人

鬼メカシキ人也。玉カヅラノケサウ人筑紫

大夫監ヲ云。青表紙本ニハヲソロシキ人ト

アリ。

おほどけたるこゑ
両義心別也

抄ニ馬カヒヒサイメナドノ大デヲヨバハル

聲ト云々。私云。又オホドカナル聲トハ。上臈

シクケ高キ聲也。ソレハ別也。所ニヨルベ

シ。

あきなごゑ

翁言也。

おほぎみけしき

大様ニノサナル歟。

おひらか

眞實コト云心ナリ。誠云心歟。老人ハコトウ

ルハシケレバ云歟。此コトバ所々ニアリ。同

心也。

おやなしに

ふせる。不恭也。科照ヤ片岡山ニ飯ニウヘテ

フセル旅人アハレヲヤナシ。

をしかいもと

凡垣下。乙女ニ。ヲシカイモトアルジハナハ
凡 垣 下 主 甚

ダヒザウニハベタウ云。垣下公卿歟。
非常 侍

おほんべ

賛也。御幸。御べ同。私云。古今集事書ニ。オ
ホンベトイヘル。大嘗會ノ事也。

をし

宿木ニ。盃ヲサ、ゲテヲシトノ給。進食。日本紀。

神功皇后夏四月壬寅。到火前國松浦縣。而進
食於玉島里小河之側。

おして

押手。紅梅ニ。琵琶ノ押手。柱サス事也。

をのら

己等。若菜上。

おいやさし人

宿木ニ。薰大將宇治ニ來ル車ヲ問給ヘバ。常
陸前司姫君ト申ス。ライヤキ、シ人ナンナ
リト云々。領納ノ詞也。

あい

同詞。玉鬘大夫監詞ニ。オイサリ、トウチ
ウナヅキテ。領納詞。

おほひちりき

大簾築。末摘ニ大ヒチリキ。サクハチノフ
エ。天台大師作。今無。一尺八寸。舌一寸八
分。

をとしかけ

東屋。オトシカケノ高キ所ニミツケテ。紫
明。自高至低也。道ノ凸凹也。

をくらさせ給

殿字也。論語鞭殿。北山へ君達御迎ニ參給。
若紫詞ニ。アサマシウヲクラサセ給ト恨テ。

おほけたる

ホケタル也。篋書之。被柱云々。

をいかれたれど

老枯也。總角ニ。阿闍梨老カレタレド。イト
タウトククウツキテ。

和

われかのけしき

我歟。我ニモアラヌ也。

わざ

事。行幸。

わらはやみ

瘡病也。

わろもの

虚俗。遊仙窟。

わうみやうぶ

王命婦。王氏也。命婦女司也。

わらけて

童氣。

わかんとをり

皇孫也。王家無等倫。法花經云。世雄無等倫。

是佛御事也。説々雖多。以王孫爲正。

近江のやなでくしをさし給ふ
わかれのくし

齋宮下向ニアリ。

わららかに

和字歟。玉葛事。

わたり川

ミツセ川。三途川。

わかな

若菜ニ。正月廿三日子日ナルニ。右大將北方

若菜マイリ給。源氏四十賀同云。廿三日御ト

シミノ日ニテト云々。

わうけづく

王氣付。柏木ニ。女御ノ宮タチハ。御門御方

サマニワウケヅキテ。

わかぐみ

若髮。花散里ニアリ。

わうばむ

宿木。中宮御産ニ。カホル大將。産養ニ屯食

五十具。ゴテノ錢。ワウバム。

わかなへ色

宿木ニアリ。薄萌黄色也。

わらうだ

圓座也。

わけなう

無飢氣。

わらわけて

方分。朝顔卷。

加

かよはく

猶使蚊負山。莊子。

かしこき

賢。威。左傳。

かたえ

片方。片枝。傍輩ヲモ云。

かごと

誑。カコツ。誓言。加言。カネゴト。

所ニヨリテ心カハル也。コトバチクワ。私云。此詞

チガマシキ也。スコシキ也。

かくろへど

隱事ナリ。

かくれば

隱庭。

かゝづらふ

カ、リヘツラウ也。私云。カケシロウ也。

かえふ

荷葉ハ夏ノ薰物也。春梅花。夏、。秋菊花。

侍從。冬、。方。

かさほ

垣尾。垣蕙。垣外。

かいまみ

視其私屏。日本紀。第三。ウカヤフキ不合ノ尊

ノ産屋ヲ火々出見尊見給シ也。又垣間見。

かわらか也

ナマメクニ對シテ云詞也。

かうれう

廣陵散。琴ノ秘曲也。夢ニ老人來テ嵇康ニ授シ曲也。

かたほ

規也。凡也。カタホシ
片毫。延喜式。私云。イトケナクカタ

ナリナルヲモ云。カタヲナシ

(り殿)
かるの御ぞ

狩衣

ヒンクツスルハコ也
かいげのはこ

搔上函。男具。

からくしげ

唐匣。私云。賭弓日着用スルナリ。

かんやがみ

紙屋紙。

援
紙
かいねり

兩面フクサハリニテ。ナカエナシ。タヰ絹ノフクサハリ也。白モ赤モ。或本云。カイネリハ紅ノフクサニテ表裏同色ナリ。

かいしろ

垣代。輪臺舞ニ在。或廿人。或四十人。舞臺廻

ニ立。

かれうびんが

迦陵頻迦。卵中有聲勝衆鳥。

かはほり

扇名也。私云。蝙蝠ヲミテ扇ヲ造初ル也。

かたむ

奸。カタマシキナリ。

かるめろろ

輕弄。

かいつ物

海物。日本紀。髻廣物。髻狹物。磯物等。須廣。

かへさひ

覆。ウケヒカヌ詞也。乙女ニ。寮試ウケンニハ。博士ノカヘサウフシト云々。私云。是ハクツガヘス也。又冊子ナドノ丁ヲヒログ

カヘス心モアリ。又カヘサヒ申ト云ハ。ウケ
ヒカヌ心モアリ。所々ニヨルベシ。

かうさく

還迹。須磨ニ。イトカウサクニネビマサル。

藤裏葉ニ。夕露大將眞人ヲイトカウサクニネビマサ

ルト云。或キヤウサク。同コトバナリ。

國説用蓋
かうこのはこ

香粉筥。香ノ粉ドモ入也。源氏最秘抄ニ。香

壺函。圖ヲ出ス。用之。

かくさう

學生。

國義各別
かうし

考辭。勘當也。又講師。鈴虫ニ。堂カザリハテ

ゝ。カウシマウノボル。

かごかなる

私云。圍ヤカナル也。

かみながらの人

上ザマノ人也。

からのとうきやうのき

唐東京錦上品也。初音卷ニモ在。或説。東京

ノ錦ハコ、錦也。仍テ唐ノ字ヲ加ト云説ア

レ共。只唐ノ東京上品也。

かざしの綿

男踏哥。十四日。以綿花ヲツクリテ。冠ノヒ

タイニ指也。ワタノ花カザスト云。私云。高

巾子。懈冠トモ云。

かへどの

柏梁殿。東宮御所也。

かけりこまほしげに
竊來

來タゲナル。

兩義各別
かて

難キ也。私云。カヘリガテニ。イネガテニト

云心ナリ。又カツノ心モ在。淡雪ノツモ

レバカテニクダケツト云ハ。カツノク

ダケ消也。

からのけもんれう

俊成卿本云。唐花文綾。以眞名書也。私云。ケ

モンレウトヨムベシ。

かじけたる

カケチイサキ也。蘭ニ。カジケタル下ヲレノ

霜モヲトサヌ小ザ、也。私云。憔悴歟。

かざしのたい

かけはなれたべる

カケハナレ給ヘル也。

かしはぎ

俊成卿自筆本ニハカシハギ。定家卿本ニハ

カシワギ。源氏方ニテハ。ハワノ文字沙汰ア

ルベカラズ。

爾説別心同
かよへるすがた

タヲレル也。初音ニ踏哥所ニアリ。匂宮卷ヤ

ドリニマヒテカヨヒケル袖。紫明ニ。求子舞
テカヨレル袖トアリ。舞ノ袖カヘス事也。初
音ニ。竹河ウタヒテナヨレル姿。ナツカシキ
聲々ト在。私云。ナヨレルカヨレル同詞也。
かすいらく

アフテ。河水樂。一越調。或ハ酣醉樂。右樂。
何モ時ノ興ニ合ヘドモ。酣醉樂ハ右ノ樂ニ
テヒリメキタル。イカバト覺ユトイヘリ。
かいせんらく

海山樂。近代海青樂。黃鐘調。

かんわざ

神事也。

かや／＼

カヒ／＼シキ也。カヤ／＼ト云ハ。カシガマ
シキ義歟。宿木ニ。カヤ／＼ト云ヲセイシ給
フ。

がまのさう

降魔相。

かほどり

良鳥。容鳥。春鳥也。若菜上。深山木ニネグラサダムルカホ鳥モ。又ハハコ鳥。杲鳥。ハコ鳥ヲ万ニハ用也。宿木ニ。カヲ鳥ノ聲モキ、シニ通ヤト茂木ヲ分テ今日ゾ尋ル。或云。常州ニカホ鳥ト云鳥アリ。此鳥鳴テ後郭公來也。下說ニハカツホウ鳥ト云。又カキツバタヲカホヨ花ト云。此花サク時此鳥來云々。仍カホ鳥ト云々。カホ鳥有口傳。

からゆみ

大弓也。若菜下ニ。コユミトノ給シガ。カチ弓ノスグレタル上手ドモ在ケレバ。メシ出テイサセ給ト云々。私云。カチ弓ハ歩弓也。又ハ勝弓ト云說アリ。弓ニ眞草行アリ。ムユミハ眞射也。カサカケハ行ノ射也。犬ハ草射也。

かづらひげ

抄ニ雜色ナドハ鬚ニ鬘ヲカクルナリト云々。又ハ葛ノ如ニ生ヒロゴレルヲ云歟。

かずより外の權大納言

還任。員外納言。明石。源氏任給。

かうさしの

カウサシノイトモ世ハナレタルハ。初音ニ在。開也。此詞定家青表紙ニナシ。可勘。

からもりはこやのとじかくや姫

皆物語名。繪合。私云。眞名ニハ唐守ナレドモ。ヤワラゲテカウモリト云。或カラ守。

かくごむ

トテタチ。藤袴。格勤給文。

かべしろ

壁代。

かうせつ

講説也。

冠
かうぶりをかけて

若菜下。年深キ身ノ冠ヲカケテト云リ。

カウシキ
かんくしき

神々也。夕霧ニ。此鬼コソオソロシクモ非ズ

成ニタレ。カムくシキケヲソヘバヤト在。

カウく同事。

かとう

歌頭。竹河ニ。右ノカトウ。男踏哥ノ哥頭也。

源侍従。

かしけたるめのわらは

東屋。未サカリナラザル童。私云。悴字歟。然

ラバスミテ讀ベシ。本ニケヲ濁テ讀。ヒガ事

歟。

かざみ

片衫。童女ノ上ニ着物也。汗歟。葵卷。

かとの御なをし

縑ハ上下ヒトシク悲歎ノ時ナド着用スト云

々。基長卿說。私云。縑ハ夏ノ下襲ニ用也。悲歎ノ時ノミニアラズ。

かはぐち

催馬樂。

かやしく

浮舟。カヤスク也。

かたかど

片麿也。

かたかけて

松風。人ニ仕ル事。肩掛也。人ニ奉公スルヲ

肩入トモ。肩懸トモアリ。

かこ

御法。犂牛名也。私云。河鼓事歟。

かはぶえ

紅梅ニ。カハ笛フツ、カニナレタルコエシ

テ云々。説々多トイヘドモ皆不用。秘事也。別

口傳。

與

よせ

縁。日本
紀。桐壺。

ようぜずば

不能也。アシウセバ同事也。桐壺。

よすが

便。私云。ヨスガサダマルト云ハ。人ノ女ナ

ドマウクル事ヲ云也。

よざり

過。ヨギル。スグル也。よきて。除心之。私云。

ヨギリ行トハ。來ルヲモ云也。

よるひかる玉

夜光玉也。齊威王與梁惠王會。惠王云。吾國

雖小國。有徑寸珠照車十二乘十枚。奈何万乘

國而無寶乎。

よさみち

其所ヲ去テ過也。吹風ニアツラヘツクル物

ナラバコノ一モトハヨキヨトイハマシ。同

心ナリ。過ト云注。除心歟。

よし／＼しう

由シアル心。

よそぢ

四十也。若菜ニ折櫛ヨソヂトイヘリ。源氏四

十賀所。

よづかはしく

世ヅカハシク。ヨシメキナドモアラヌ。若

菜。ヨヅキタリガマシクモアラヌハ。世ヨヅ

カヌナリ。

第九卷
よもぎのまろね

東屋。蓬卑屋ニカリニヌル也。

ようし給

簾木ニ。源氏中將内ニノミ侍ヨウシ給ト云

リ。

世経
よこもりて

明石。オヤタチモヨコモリテスグシツル。ヨ
コモリテスグシツル年月コソト在。

太

たゆげなる

隨竄。史記。ヲチブレヲコルケシキ。ヒマナ
キ義也。竄ヲバ石マト史記ニヨム。土器ヲ作
ニ石マナキ詞也。タユゲハ音也。俗ニ訓ト思
ヘルハ謬也。桐壺。

たいくしき

退々。

たうまじう

不可堪也。

たづき

便也。鶴寸。箒木ニ。世ニタヅキナク云。

たけ河

催馬樂。

たくみ

内匠寮。桐壺ニ。里ノトノハモクスリタクミ
云々。

だいしやうじのおもの

大床子飯。朝夕ノ供御。

たき口のとのぬ申

名對面也。

たむけ

褐。餞別送物也。ヌサノ注ニミユ。

たとしへなし

無喻也。シハ辭字也。

たいめ

對面。私云。タイメントヨムベシ。口傳。

たゆたひ

浮動。盪々也。ユタノタユタニ物思比ゾ。浪

ニ船ノユラレタル心也。

たうか

正月十六日行也。持統天皇七年正月。漢人奉

踏哥事在。男踏哥ハ圓融院天元六年正月十四日男踏哥在。其後絶而無之。

たんゐん

探韻。各分一字詩也。小野宮記云。重陽宴。各分一字於御前。取韻字。探得何字云々。以之可知之。

たびしかはら

山ガツ。タビシカハラマデモ云々。民氏河原。タミ也。ミトヒト同音。セミセヒト云ガ如シ。河原ハエタ也。河原ニアル人ハヂノエタマデモト云也。或本タミシカハラト云々。清少納言枕草子云。タミシカハラ。貫之白河大相國亭子日會序云。草枕タビシカハラマデ松ノ千年ヲ君ニトノミ祈リ云々。或云。民代也。シハ辭字也云々。紫明ニハカハラハ渡守綱引也ト註セリ。

たさのばむ

彈碁也。後漢書藝經云。彈碁ハ兩人對局。白黑各六。先別碁相當。更先彈也。其局以石爲之。

^{明義}たさどの

瀧殿ト云所別ニ有之云々。又ハ瀧ト殿ト歟云々。又瀧ト野トヲ云ト云説在。私云。大覺寺ノ南ニ全ク瀧無シ。只泉殿ヲ云ト口傳セリ。

たゝり

總角ニ。ムスビアゲタルタヽリツマ。丁ノホコロビヨリスキテト云々。糸操器也。

たいゑさ

池名。桐壺ニ。太掖芙蓉。長恨哥ノ句ヲヒケリ。

だみたり

玉鬘ニ。大夫監ヲ云ニ。詞ダミタリ。私云。言ノナマルヲ云歟。孝經序ニ語^{コトハタミ}近タリ。

たまもかづけ給

玉ハホムル義。浦邊ナレバヨソヘテ云也。玉藻。

たうばり

御給年官爵也。私云。太上天皇ノ御給ニ。除

目之時。官位ヲ御分ニナサルハコト也。冠給

バルトハ。始テ爵スルヲ云。爵トハ勅授ノ

始。(從款)位五位下叙スルヲ云也。

たすきひきむすび

襷。タスキ少人ノ姿ヲ云。薄雲ニ。明石姫君ノ着

袴所。

だいひざ

大悲者。觀音也。玉鬘ニ。三條ト云下女ノ詞

也。長谷觀音ヲオガム也。

たれとき

アレハタレトキ。タソガレ時也。

だいどう

大乘也。

たゆうのけん

玉鬘卷。玉カヅラノ姫君ノケサウ人。太宰府

ニ帥大貳小貳大監小監々代ナド云司アリ。

五位ニ叙スルヲ大夫ノ監ト云。

だきう樂

打毬樂。

たまどの

殯殿。私云。葬禮先出ス所也。夢浮橋ニ。タマ

ドノニヲイタリケン人云々。見源秘抄。

たうぶ

乙女卷。アルジハハナハダビサウニ侍リ。タ

ウバカリノシルシトイヘリ。又同所ニ。大

ヤケニツカウマツリタウブ。鳴呼ヲコナリ。給

也。

禮

兩義各別れうし

寮試。寮司。一試也。又れうし。大學寮ノ司

也。乙女ニ。今ハレウシセサセントテ。同所
ニ。レウシウケント云。是寮試。同卷ニ。レウ
シニカンタチメ、車ト云々。或レウモン。寮
門也。大學寮門也。

れんし給

練也。宿木ニ。トリタテレンシタル心ナラネ
バ。私云。註ニ戀字ヲ付タリ。練ナルベキ歟。

曾

そひふし

副臥。見李部王記。桐壺ニ。引入大臣女葵上十六。

ソノ夜ヤガテソヒブシニナリ給ウ。

そのこま

神樂名。

或漏用
そはくしき

觚稜。文選。コレウトソハくシキ。

そこにこそ

足下也。史記ニ此詞多シ。文選廿一ニ李陵答

蘇武書。陵頓首。子卿足下云々。等列ヲ恭詞
也。私云。下字ヲコト讀事。毛詩ニ宗室窓下
ト云ヘリ。

そや

初夜。

そろゝか

尖。スルトナル心。又御幸ニ。タケタチソロ
ゝカニ。

そち

帥。太宰帥。々宮。

そゝさゝ給へり

楚々。ソ、メキ也。又蛤虫ニソ、キアヘルト
アリ。互ニ營アヘル心ナリ。紫上ノヒイナヲ
ソ、キキ給ト云ハ心別也。

ぞう

將監ノコトヲ云ヘリ。殿上ノゾウ。左近藏人
ノゾウ云々。私云。ゾウハ將監ニカギルベカ

ラズ。何ニモ官ゴトニ。カミ。スケ。ゼウ。サ
ウクワンハ有ベシ。近衛府ニテハ將監ゼウ
タルベシ。大將ハカミ。中少將ハスケ。中將
ハ大スケ。少將ハスナイスケ。

そよ

領納ノ詞也。宿木ニ薰ノ詞ニ。ソヨ繪師モイ
カデ心ニハ叶ベキト云々。

そぼち

ヌレテカハカヌ也。心カラ花ノ滴ニソボチ
ツ。

そしらはしげに

宿木。女二宮大將へ參給事ヲ云ニ。イソギ參
タマウ事ヲ。ソシラハンゲニ云人モアリト
云々。ソシル也。

そしうなる

花宴ニ。ヲホイ殿ノ詞ニ。タ々大ヤケゴトニ
ソシウナル物ノ師アリト云々。如在心也。紫

明ニハカタン物ノ師ト云ヘリ。

そぼれゐたる

タハブレザレタル也。又そぼたれサレタル
也。ホ字濁テヨム。

そうぶ

處分。そうぶんとも。讓與事也。

そして

敘。言ソシテ。存。擧。酒シキソシテ。明石。訴。
ウタウ^ル也。此心卷ヲ引ベシ。私云。心各別也。箒
木。イヒソシテ。酒ヲシイソシテハ殺字也。

詩ニ愁殺。笑殺ナド云心也。ツヲクイヒ。ツ
ヲクシイタル也。ヨシメキソシテ。明石尼公
ヲ云ニ。若菜上ニアリ。是等ハ存也。心ナケ
サウソシテ。擧也。ソシル也。宿木ニ。六君ノ
所ニコノミソシテ。

そこひ

底モシラヌ也。ソコヒナキ淵ヤハサハグ山

川ノアサセニコソハアダ浪モタテ。私云。ソ
コヒ。ソコ爲兩説。

そほひやかに

ヒソヤカニ。

そゑのたかゝひ

諸衛鷹飼。

そがならはし

タカナラハシト云也。

そひくしき心ちすれど

人ノ姿ノチキサカナルヲ云ヘリ。是モ物ハ
ヅカシクテ。身ノスヘラルハト云心歟。河海

關屋卷。

そきやうでん

承香殿也。蘭卷ニ内侍督君ノ御局ニナル。

ぞくのかたの

若菜ニ。コナクゾクノカタノト云。俗也。外
典ヲ云。

兩義
びう

孫。族也。玉鬘。大夫監ヲ云ニ。ゾウ廣クカシ
コニ付テオボエアル。是ハ族也。竹河ニ。コ
レハ源氏ノ御ゾウニモ。是モ族也。宿木ニ中
君懷妊事ヲ云ニ。イミジク命短キゾウナレ
バ。是ハ孫也。孫所々ニ多シ。

そくらう

ソクラ。賄賂心也。東屋ニ。大臣ニナランソ
クラウヲトラム。常陸介詞。

そんじやの大臣

尊者。若菜下。致仕大臣ツカウマツルト云々。
そこら

多也。御幸ニ西對姫君物見給ニ。ソコライト
ミツクシ給ヘルト云。此詞所々ニ在。ヲホシ
也。

そく

メ之字ニモ入。しげきそく。重職事。シゲキ

職也。

津

つと

集。日本紀。都。ツト。桐壺。私。ツフト、讀ベシ。

つれなく

強顏。ツレナク。

つなしにくき

ツレナクニクキ也。中略詞。俗ニツラニクシト云也。松風桂ノ宿守。ヒゲガチニツナシニクキ顏ヲ。鼻ウチアカメテト云。漂落。ツナシニテコソミエ給フ。ツナシニクム。

つぼさうぞく

市女笠ニキヌヲキテ中ユヒタル也。玉鬘ノ長谷詣姿。玉葛卷。

つくも所

造物所。内裏仙洞ニ在。若菜下ニ。ツクモ所ノ人メシテト云。

つぐらをり

九折。盤折。文集ニ。山下望山上。初疑不可攀。誰知中有路。盤折通巖嶺。遊仙窟。盤龍トワダカマル。若紫北山事。

つねのり

經範。繪師。在高名錄。千枝。ツネノリ。須磨卷。

つましるし

文ノ不審ナル所ニ。爪ニテシルシヲスル也。つばいち

大和國長谷ノ道ニアリ。海石〔備忘〕柏市ノヤソノ

チマタニタチツラン結シヒモヲトカマクヲシモ。万葉。玉鬘ニ瑠璃君長谷詣ニ。右近ニ行逢トコロナリ。

ついきり

フツキリ也。若菜下。柏木小侍從ニカタラヒ給詞。

つしなき

マコトナキ也。ゲニ／＼シキモノヲバ。ツシマナルト云々。ツシマナキ也。マヲ略ル詞。

つまごゑ

ノヤウニテ。近江君詞。

つまかけなどを

末摘花ヲ云ニ。折々ツマカケナドヲシニ。折折ノツマ歟。カケハツキタル詞也。面影ナド云同儀也。近江君ノ詞ニ。ツマゴエト云モ同躰也。河海抄。

つばいもちゐ

椿餅也。鞠座ニ献椿餅事見舊記。ホシキヲ粉ニシテ。丁子ノ粉ヲ加テ。アマツラニテカタメテ。椿葉二枚ヲ合テツゝミテ。上ヲ重タル薄ヤウヲ細切。二分斗ノヲビニユヒタル也。公世二位申ハ。近衛關白ヨリ尋ラレタリシニ。造テマイラセキ。ハウニコソ様ハアレ。

人不知云々。箸ヲソウベアニヤ。私云。ホシイ

ハ少炒ルベシ。昔ハ沙糖ナシ。今時分ナラバ沙糖ヲ入テ可珍重。カラミヲモ加テ可然。葉上ニ覆ヲ龜甲ニ切テ。少々マジヘタルモアルニヤ。又枝ニ片葉ヲ付ナガラ。片葉ヲオホヘルモアリ。二三葉。

ついたち比の夕づくよ

浮舟ニ。朔日比ノ夕月夜。サムキスサキニト云。藤裏葉ニ。四月ツイタチ比。御前ノ藤花イト面白クサキミダレタルニ。七日ノ夕月夜。カゲホノカナル云々。阿佛日記ニモ。七日月ヲツイタチ比ノ夕月ヨト云ヘリ。朔日ノ月ト云ニアラズ。朔日ハ始也。月ノ始ノ月ナルベシ。

つねからず

若菜下ニ。ナウナル人ハ久クツネカラズ。私云。不常也。初音ニ。サエカラズト云ガ如シ。

つたみなどし給へば

横笛。小兒ノ乳アゲナドスルヲ云。津字ナル

ベシ。

つきしろ

花宴。各詞ニ不出ノ。タガヒニ心ヲシラスル

也。此詞所々ニ多シ。

つべたましく

マブシツベタマシク。柏木。

ね

ねぢけ

倭人也。表裏アル也。メヂケガマシク。ネヂ

ケテ。ネヂケ人。此詞多シ。奈良坂ヤコノテ

ガシハノ一ヲモテトニモカクニモネヂケ人

カナ。万葉。

ねたます

ハゲマス心也。妬聞。ネタマシキコエ。

ねびれて

^{頭緒}ねびたれ。同心。ネビタレヨシバミテ。

ねびたる

又ねびまざる。生長。

ネビ人

老人。紅葉賀。御門御幸。ネビタル年預。

ねうばうのさぶらひ

大盤所。

ねぎごと

禰宜言。アマリキ、ケン社コソ。古今。

ねさう

ネンサウト可讀行。玉鬘。年三也。正五九月。

一年中ニハ此三月。一月中ニハ六齋日。取ワ

キ行ベキ月日也。年三長年經ニ見ユ。

ねのこの餅

葵卷。紫上新枕所ニ見ユ。是ニツイテ有秘

説。有口傳。私云。亥子ノ翌日ノ夜ナルニ依

テ。子ノコノ餅ト。惟光時ニトテ云也。三日

祝ヲ子ノコト云ニアラザル歟。

ねこめうつろふ

早蕨。匂宮哥。袖フレシ梅ハカワラヌ匂ニテ
ねこめうつろふ事やコトナル。根籠也。後撰
ニ垣越ニチリクル花ヲ見ヨリモ根コメニ風
ノ吹モコサナン。根ナガラ風吹越セト云也。

奈

なよく

ナへく也。柔々。桐壺。

なべてならず

不並也。ヲシナベテ。駒ナベテ。

なよびかに

シナヤカナル也。

なだらか

朽。論語。糞土墻不可朽。ナタラカニシウ
腐蝕心別

なを人

直人。諸大夫。河海。箒木ニ。ナヲ人ノ上達部

マデナリアガリ。ワレハガホニテト云々。伊

勢物語ニ。父ハナヲ人。母ナン藤原成ケル云

々。私云。ナヲくシキ人ト云ヘルハ。正直

ニ實アル人ヲ云。心別也。

なまくの上達部は

ナマメキタル也。私云。此註心不叶。ナマジ

イノ上達部ト云也。未熟心也。ナミく也。

マトミト通音。是ハ心叶也。

ななく

無難也。ナンナクトヨムベシ。

なめげなる

滑。無禮。私云。ナムメゲナルト可讀。

なか神中登長編

中神。日フタガリ。又一夜廻天一神也。一説

長神。箒木。ナカバミ内ヨリコナタニフタガ

リ侍トアリ。私云。手習ニ。イトセバクムツ

カシクモアレバ。キテタテマツルベキニ。中

神フタガリ忌ベカリケレバ。宇治ノ院ト云

シ所思出テ。二三日ヤドラント云ヤリ給ヘ

リト云々。二三日アルハ一夜メグリニハアラ

ザル歟。

なかくは

京極川也。李部王記。古人稱中川云々。行成

記。法成寺始稱中川御堂。賀茂河東。桂河

西。仍京極川ヲ稱中川。

なけの

フデツカイ。ナヒガシロ也。ナヲザリ也。用。

私云。ナケト云詞万ニアルベシ。

なりはひ

農。順和名。民業。日本紀。家業。遊仙窟。

ないけうばう

内教坊。内裏女樂舞妓居所也。別當在。今ノ

大トノキニアリ。

なやらう

追儼。ナヤラウ。ナニヤラウ。文選。論語。

なごやか

透迤。遊仙窟。私云。ヤハラカニ穩ナル心也。古万

哥。アツブスマナゴヤカニシテネタレドモ

君トシネ、バハダエ寒シモ。

なごう

梅ガ枝ニ。コマカニナゴウ。ナツカシウ。ウ

ツクシウ。ナメラカニ。ニコ〜ト云。私云。

コレモナゴヤカナル。ヲナジコトバ歟。

ないえん

内宴。弘仁四年始有。唐太宗之舊風也。正

月一二三日間ニ有子日者行之。私云。内一ハ

内々儀也。藏人或清涼殿記等云。廿一二三日

間有子日。便用之。

なそり

納蘇利。右樂名。私云。ナツソリト可讀。君臣

献詩哥奉祝君也。此事廢而久シカリシヲ。白

十二字イ内宴之注

(以下四)

河院御時。信西法師申行キ。再興アリシ也。

其後廢畢。

兩義同聞
なれてさこゆ

物馴テキコユル也。又ナラシキコユル也。此
詞所々ニアリ。

なれさ

馴公。女房名也。冷泉院女御。鬢黒大臣ノ女
房。

兩説
なかさだ

中定。中比也。長定。能書也。末摘ニ。御手ハ
サスガニ文字ツヨク。ナカサダノスデニテ
ト云々。私云。手ノ模様ヲ云ニ。中昔スギテト
云説。長定ト云人ノ模様ト云兩義也。先ハ中
比スギテヲ用也。サダスギテト云モ。(中説)比過テ
ト云。盛過タル心歟。中定ハ中古ノ心ニヨリ

タルニヤ。

兩説
なれすかた

成姿

ナレル姿。ナレ／＼シキ姿。コレヲミヨ人モ
トガメヌ戀ストテ音ヲ鳴虫ノナレル姿ヲ。
是ナレル姿ナリ。

なを／＼し

直々也。末摘ノ源氏ニヤル直衣ナヲ／＼シ
ク。質朴ナル躰也。私云。スナヲニカザラザ
ル姿歟。

なかばなるげ

半偈。諸行無常。是生滅法。生滅々已。寂滅爲
樂。雪山童子半偈ニ投身死事。總角ニ。ナカ

バナルヲ、シヘケン物ニモカケ云々。

撫物
なでもの

宿木ニ。祈ニコナタヨリ身フレノ物。鏡帶ナ
ドヲ陰陽師方ヘ遣スヲ云也。

なたいめん

有花鳥餘情。

なずらひ

ナラヌ。明石。岡邊ノ御文メデタシト。ナズ
ラヘナラヌ身ノ程ト云々。卑下ノ心也。私云。
ナズラヘナラズ。ナズラヘ哥。擬也。準也。ナ
ラブベウモアラヌ也。

又加字ニ入向心
なよれる

初音。竹河。ウタイナヨレル姿。踏哥。此詞加
字ニモ入。カヨレル姿。初音。カヨレルハ袖
カヘス也ト註タル。同註タルベシ。又タヲレ
ル姿トモ。

なみくの人

箒木中河方違ニ。ナミノノ人ナラバコソ
云々。私云。次々ノ人也。次字ヲナミト讀。日
一月一歳一等也。又並々同心。

なへばみ

宿木ニ。勾宮人々ノケハヒハヅカシキ程ニ。
ナヘバミタメリシヲ思遣給テ。私云。衣ノナ
ヘバミタル也。損テフクダミタル心。又人ノ

貞ニモ通ズベシ。宿木ニイヘルハ衣裳事也。
健ナラヌヲナヘバムト云。

な

宿木ニ。コレナトヲ起コセ。ヲキネバミ云々
不起。私云。ナウト云心也。人ヲ呼起詞也。

良

らうたし

勞。イタハル。良。桐壺。私云。ホケヤカニヤハラ
ギ。(ナ燃)サケノアルヲ。ラウタゲナルト云之。

らうくしき

亮々。良。ナツカシキ也。蘭ニ玉鬚ヲ云ニ。ケ
ハイノラウくシウト云々。私云。ヲホドカ
ニヤハラギナツカシキ姿。上蘭シキ方ニヨ
レリ。

らうし給

領スル也。

らでん

螺鈿。貝スリタル也。

らぶら

亂聲。私云。ランザウトヨムベシ。

らにの花

蘭花也。蕙蘭ノ蘭ハ別也。藤袴ニ。ラニノ花

ヲミスノツマヨリ指入テト云。私云。ラン

也。假名ニハイツモムヲニニ用。駒臆^{グダニ}紫蘭^{シホニ}。

牽牛子^{ケニコシ}。樺櫻^{カニハ}。サクラ。

らうろう

若菜下。督君詞。カ、ル折くラウロウナラ

デハ。牢籠。

(左四行據イ本補)
らしいし

罌子。衝重ノ上ニカハヲ立テ。四方或六角ニ

色紙ヲ立テ菓子等ヲ盛也。横笛ニ。御前チカ

キライシニ。

無

むぐらのやど

葎宿。戀スル人ノ住所ヲ云トイヘドモ。只アレタル宿ヲ云。葎ノ門トモ云。八重葎トモ。

むへ

宜。諾。承諾也。ムベシコソ。サコソ也。私云。

ゲニモト云也。ムベモトミケリ。ゲニモトミ

ケリ也。ムベ山風モ同心。

むくつけ

貪。遊仙窟ヲソロシト云詞也。

むくくしさ

同上。夕顔。蠢々。

むねこがるゝ

三教指飯云。寧莫衍婆伽之燒胸中。見紫明

抄。

むとく

無得。

むご

無期。柏木ニモ。レイハムゴニムカヘテ。ス

ベテスバロゴトヲサヘノタマウヲ。今ハ言
スクナニテ云々。柏木ノ對小侍從事。

むかひびつくりて

向火也。楨柱又竹河ニ。ムカイビツクリテ
云々。日本武故事。野火來時。我方ノ草ヲヤキ
テフセグ事ヲ云ナリ。私云。一説ニハ。カタ
ハライタキニハ。向火ナガライタク物イハ
ヌヲ云也云々。人ニ物ヲ云ハセジトテ。イタ
クニコヤカニ物ヲイハヌハ。來ル火ヲフセ
グ心ト同ケレバ云歟。

むもれいたからむ

明石ノ岡邊ヘノ御文ヲ云ニ。ワカキ人ノメ
デザランモ。イトムモレイタカラント云々。
私云。ウヅモレタラント云心也。埋痛。

宇

うけばり

諾。桐壺。

うちぎ

掛。大小アリ。宮。一ノ人。或家アルジノキルナリ。

私云。掛ハウハギヨキ上。(下同)褶ヨキ下ニ着スル

也。桐壺。加冠祿。引入大臣祿ニ白キ大掛ヲ
スルハ流例也。

うちつけに

ヤガテヨリト云也。

うつくしみ

愛也。

うけはし

ウケハシゲニノ給。若菜上。うけふる。呪咀
也。又ウケハシメ。是ハ諾也。別心也。

うけへば

皆同詞。ノロフ心也。伊勢物語。ツミモナキ

人ヲウケヘバ忘草ヲノガウヘニゾヲフト云

ナル。

うつしさま

現心。ウツシ心ハマコトノ心也。ウツシ心ナ
ラヌハ狂亂心也。

うつし人

同心。ウツシ人ナリ。カイスラモイモセハミ
エテアル物ヲウツシ人ニテワレヒトリヌ
ル。

うつぼのとしかげ

物語ノ名也。順作卅卷。繪合ニ。ウツボノト
シカゲ。アベノオホシ。ヒネズミクラモチノ
ミコト云々。

牛ぐるまゆるされて

牛車宣。私云。中重ノ中へ牛ヲカケナガラ出
入スル也。

うすいきいできて

口ヲツボメ肩ヲスヘタルケシキ也。身ノサ
ムキ躰ナリ。

うへの御五節

或本。ウヘノ五節ト在。恒年ハ公卿二人。殿
上受領二人。代始ニハ受領五所也。殿上人マ
イラスレバ。上ノ五節ト云歟。

うちさらし

打霧。御幸ニ。ウチキラシ朝曇セシミユキニ
ハサヤカニ空ノヒカリヤハ見シ。拾遺。家
持。打キラシ雪ハフリツ、シカスガニ我家
ノ園ニ鶯ノナク。

うつたへ

ウチタヘ也。藤袴ニ。ラニノ花ヲミスノツマ
ヨリサシ入テ。トミニモユルサデモタマフ
レバ。ウツタヘニ思ヒヨラデトリタマウ。マ
メ人玉カヅラニ奉リ給事。

うたのほうしの

カハラヌネニ。宇多法師。和琴也。餘情ニ在
之。宇多御門ノ御名ニ差合バ。ホウシノシノ
字ヲ濁テヨム。是口傳秘説也。

うたゝある

ウタテアル也。古今ニ。ウタゝアルサマノ名
ニコソ有ケレ。

うちたれがみ

哥。ウナヒコガウチタレガミノ五月雨ノ比。

うつせ

蜻蛉。イカナルサマノ。イヅレノ底ノウツセ
ニ交ケン云々。私云。ウツセ貝ハスハノ海ニ
コソアルベケレドモ。水ノ底ナレバカヨハ
シテ云也。

不字ニ可入
うみの面ふすまをはりたるやうにて

須磨。

うちみだれのはこ

巾箱。袴箱サジリシノハコ。ウチミダレノ箱。カ
ウゴノ箱。香袋コハロバ。綬字。

うちどの

玉鬚。コハカシコノウチドノヨリ。禱殿也。

綾打所。

うたつかさ

雅樂寮。橋姫ニ。ウタツカサノ物ノ師云々。

う

鶺鴒。藤裏葉ニ。ウヲロサセタマイテ。

うちまき

横笛ニ。若君ツタミナドシタマヘバ。ウチマ
キシチラシテト云々。オサナ子ノ事有時。ヲ
シ桶ト云物ニ白米ヲ入タルヲ取出テマキチ
ラス也。

うるせかりし

箒木。ウルハシカリシト云也。蛤虫。

うらしまの子

夕霧。浦島ガ子ノ心チナン云々。有別。

うない松

幻卷。馬鬣松。馬ノタチガミノ如クナル松
也。墓所ノ松ト云々。見叢秘抄。

うるせく

若菜ニ。女樂ノ後。紫上ニ源氏問給ニ。宮ノ御琴ノネハイトウルセクナリニケルカナト云ヘリ。

うみ松

漂冷ニ。明石君イカ送哥。五十日ウミ松ヤトキゾト

モナキ陰ニキテ。

うつしのむま

東屋。ウツシノ鞍ヲキタル馬也。

うもれいたき

蓬生ニ。常陸宮ヲ云ニ。心バヘナドハタウモレイタキマデヨウヲハシマス。埋痛歟。

うづち

卯槌。或本ウツエ。江次第ニ云。春宮被猷卯杖。大進着腋陣。付藏人進之。次大舍人進卯杖六十束。次系所進卯槌。御帳組并縫履打敷料系十兩二分。參河結組料一兩二分。丹波已上

申請納殿。藏人取之。結付晝御座帳角柱。副立細木爲柱。槌末出五尺計。寸咫マタブリ。杈極。音砂鷗。

うむじて

漂冷ニ。カノ宮ス所モ。思ウンジテ別給ニシトオボス云々。螢卷ニ。内ノヲトバ夕顔ノ上ノ事ヲ云出スニ。ハカナキ物ウンジヲノ。

うまやのをさにくしとらす

須戸。驛長口詩トラスル事者。昔天神筑紫へ赴給シ時。驛長ニ口詩ヲ賜ハス。其詩云。驛長無驚時變改。一榮一落是春秋。只今五節君哥ヲ奉ルニ。源氏返哥ヲ口ヅカラモキカセザル事ヲ恨テ云々。

爲

ゐなみくつして

居並屈スル也。苦イ。クツスルヲクシテト云。又ハクント書歟。

院司トモ源治ニアリ
ゐんしども

判官。廳召次所。別納所。御服所。進物所。々
衆。武者所。御隨身所。

ゐんをつくりて

手習ニ。物シリゾクベキキンヲ作テ。印也。

眞言。

ゐたち

居起。桐壺。

ゐんふたぎ

掩韻。古詩ノ字ヲフタギテ。下句ノ末字ヲ何
文字ト推シテ勝負ニスル也。

ゐやしく

恭シツ日本
紀。ウヤノシク也。

の

のら

草。方。野原イ。

のしひとへ

玉鬘ニ。ウヘニノシヒトヘメクモノキコメ
給ヘルカミノスキカゲト云々。定家青表紙本
ニハ。ウツキノヒトヘメクモノトアリ。ノシ
ヒトヘハ布カタビラ歟。サレバコソ田舎ビ
タル姿トハアレ。清少納言枕草子ニ。ヤセ色
クロキ人ノスバシノヒトヘキタルハ。イト
ピンナシ。ヲナジコトスキタレド。ノモヒト
エハカタハトモ見ヘズカシ。ホウノヲトリ
タレバニヤアラン云々。

のばりて

繪合。延也。

のりもの

賭。勝負ノ懸物也。賭弓。宿木ニ。御門薰中將
ト碁打給所ニ。ヨキノリモノハ。アリヌベケ
レド云々。女二宮ノ御事ヲノ給之。以菊爲賭。
後森野路編
のちのちほいどの

竹河卷云。ノチノオホイドノ。或説野路大臣

夏野。ト云ヘリ。不然。鬚黒ノ大臣ノ事也。後大臣ヒゲ黒ウセ給トミヘタリ。男子三人女子二人。玉鬚腹。紅梅卷云。イマモノシ給ハ。ノチノオホキヲトバノ御女。楨柱。ハナレガタクシ給シ君。後鬚黒太政大臣。非野路歟。のばゝりて

或本のばりて。延也。繪合ニ。源氏御身ノ事ヲノ給ニ。中比ナキニナシテシヅミタリシウレヘニノバ、リテ。今マデモナガラフル也ト云々。

のり弓のかへりあるじ

勾宮卷ニ。夕霧六條院ニテシ給トミュ。賭射還饗。私云。ノリ弓ノカヘリニ饗ヲノ。射手達并上達部雲客ヲ招請スルナリ。飯ヲアルジト云。

久

くらづかさ

内藏寮。桐壺云。くらづかさ。穀倉院。

くわざ

冠者。桐壺。クワザノ御座トモ。クワザノ君。乙女。夕霧云。

くら人所のたか

桐壺ニ。左ノツカサノ御馬。藏人所ノ鷹。スベテト在。御鷹ハ藏人所ノ役也。

くさわひ

種。玉鬚云。右近玉鬚ノ事ヲ語ニ。源氏スキ物ドモノ心ツクスクサハヒニセントノ給。

くま

隈。曲。阿。熊ハ獸ノ名ナレ共黒キカゲ也。

くつろぎがましう

筈木。アバラナル也。紫明注。私云。極信ニ實ナルハ。ツ、マヤカニツマル也。其對ノアバラニシドケナキハ。クツログ也。仍云也。くれなひのこし

女ノ袴ノ腰ナリ。

くだくしう

細碎。文集。石竹金錢何細碎。グタノシキ

くだら

百濟國也。

くるゝ戸

ナムド。

くし給

苦。屈。薰。具。種々心在。私云。若紫ニ紫上ヲ云。夕暮ニナレバイミジウクシ給。是ハ苦也。或屈。退屈ノ心。薄雲ニ明石ノ上ノ琵琶ヲ云。イカデカククシケン云々。是ニ兩義アリ。一ニハ薰。クンジケン。薰習心。クント讀ベシ。二ニハ具。濁テ讀ベシ。箏ト琵琶トヲ具シケン也。二ツトモニヨクスル心ナリ。薰説ヲヨソクシケントカクトモ。濁テグムトヨムベシ。

くろき車

服者車也。

くろほう

黒方。玄方トモカク。冬薰也。梅ガ枝卷ニ。サハイヘドモ。前ノ齋院ノミ御クロホウトイヘリ。

くむゑかう

くのゑかう。同薰衣香。百歩ノ外スキ匂フ薰衣香。タキ物ノ方。梅ガエニ。クンエ香ノ方ノスグレタルハ。前朱雀院ノウツサセ給テ。公忠ノ朝臣ノコトニエラビツカウマツリシ百歩ノ方ヲト云々。朱雀院公忠此道長也。

くつをれ

退屈心。

くしいたう

苦痛也。屈痛也。若菜上ニ。柏木女三宮ヲ見

奉テ。此夕ヨリクシイタウ物ヲモハシクテ
云々。

くわむ佛

藤裏葉。灌佛。四月八日。

くさのむしろ

草席。若紫。古ノイモキノ庭ニアツマリシ草

ノ席モ今ヤ敷ラン。慈惠大師。

くうつきて

功也。

くねくしき

クネくしキ本上。御幸。スグヨクモナクヨ

ハキ心也。私云。クネリガマシキ心ナリ。

くわろ

火爐。御幸。野行幸ノ所。

くみはかり給はぬ

鈴虫ニ。クミハカリ給ハヌ。斟斗也。推察心

也。

尿遠
くそたち

屎。女尿。手習ニ。トノモリノクソメ。同卷

ニ。イヅラクソタチ。コト、リテマイレ。但

定家青表紙本ニイヅラゴタチトアリ。一所

ヲ減也。古今作者ニモ在。クソ濁テ可讀。口

傳。貫之童名。内教坊。阿古屎。今世ノ人クス

ト云。ストソト同音。

くいたいし
羅興太子

匂宮卷ニ在。羅睺羅尊者。佛出家ノ後六年ヲ

ヘテ誕生。大臣疑之。抱兒投火入之。全テ不

燒。悲花經。

くるすのゝさう

大將殿御領。久留守野莊。夕霧。

くぢう

椎下ニ。クヂウナドニテ。九重都也。

くわんず

卷數。蜻蛉卷ニ。カノクワンズニ書付給ヘリ

シ。浮舟君ノ母ノ方へ返事。

くわ

紅葉賀ニ。末摘ノ返事ヲ大輔命婦ニトラスルニ。クワトアリ。篝火ニ。對姫公。人ノアヤシト思ラントワビ給ヘバ。クワヤトテイデ

給。

^{御神垂}くしをしたれて

笄髪アゲタル也。末摘花。源氏カイマミ給

所。

^{御テホン}くすりのこと

御門御惱也。明石。

くしとらする

スマ。驛長ニ口詩トラスル上注。スム字。

くさじるし

椎下。僧都芹蔵奉ル。所ニツケテ。カ、ルクサジルシモミスルト在。只證本此詞ナシ。

也

やむごとなき

無止事。キリツボ。

やまがつ

箒木。山ガツノカキホアルトモ云々。山兒。

やうめいのすけ

夕顔ニ。ヤウメイノスケナリケル家ニトアリ。源氏第一秘事也。

やそうち人

八十氏人。

やまのざそ

山座主。

^{又右字三可入}やはたのごし

八幡五師。寺官也。貞觀八年別當安宗以蓮如

法師補五師。玉鬘八幡詣ニ。昔ノゴシヲ尋テ

ト云々。

やゝましき

ヤウガマシキ也。胡蝶ニ。オホミヤス所ヤア

也

ラムトヤ、マシキヲ。浮舟ニ。ヲソロシウ。
ヤ、マシケレバト云々。

やさし

槇柱ニ。人ギ、ヤサシカルベシ。私云。ハヅ
カシ也。古今哥。年ノヲモハン事ゾヤサシ
キ。松浦仙人哥ニ。玉島ノ此川上ニ家ハアレ
ド君ヲヤサシミ見セヌナリケリ。是皆ハヅ
カシナリ。

やらう

追ハラウ。日本紀。追儼。文選。夕霧ニ。立トマルベ

ウモアラズ。ヤラハセ給。同云。カウワリナ
ウヤラハセ給。大和物語ニ。シネトテヤトリ
モアヘズバヤラハル、イトイキガタキ心チ
コソスレ。

やうのもの

夕霧ニ。サシモヤウノモノトアチラヒ給ハ
ン。ウタテアルベシ。此詞所々ニアリ。私云。

物ニ付詞也。ハスノミヤウノモノ。

やましげなり

病也。初音ニ。ハチスノセカイニマダヒラケ
ザランモ。カクヤトヤマシゲ也。私云。心ヤ
マシキナド云詞。

やゝましき

心ヤマシキ心也。御法。又疑心。

やうき

樣器。土器也。今樣ノモノ。宿木産養。銀樣

器。

やつがれ

某ト云詞也。御幸。私云。神代詞。

やゝみて

宿木。常陸泊瀬ヨリ歸時。宇治ニ來。大將ノ
ゾキ給。車ヨリヲル、ニ。此人々ニヤ、ミテ
久クオリイサリヌ。良歟。

末

まうのぼる

參上。昇進。參進。桐壺。

まばゆく

目モアテラレヌ心也。

まめだち

殿。マメダチ。遊仙窟。

皺目。同。眞立。文選。マコトシキ

心。

まめくしき

眞々敷心。同上。

まめ人

展季。マメ人。文選。

眞人。夕霧大將ヲ云。

まほに

眞直。万。眞帆。舟ニ片帆眞帆トテ隨風テ曳

ナリ。正シキヲ眞帆ト云心可知。

まうと

眞人。朝臣ナンド云類也。餘情ニ委クアリ。

まどころ

政所。家司。

まかはら

高カウキヤウトマカフラダカニ暈。

暈字目波也。（皮敷）マカブラ。マナブタ

ノヲチ入タルヲ云。源内侍ヲ云。

まがくしき

麴香々々敷。總角。私云。イマくシキ心也。

まぶし

柏木ニ。マブシツベタマシク。

まかり申

辭申。日本紀。イトマ申也。私云。賽カヘリ申ス。字也。

まくなぎ

或説。春木。如卷數也。不用。瞬。マジロケ。メクハス。蟻。此

云魔愚那岐。日本紀。

物ヲ人ニ忍テ隠スニハ。目

クハシラス。忍タル心歟。又奥州ニハマクナ

ギト云虫多クテ。狩スルニモ薪ヲトルニモ。

アラ、ギト云草ヲ笠ナドニ取付タレバヨラ

ズト云。私云。此虫ノ事ヲ云モ。如蛹ニシテ

少ナル虫飛テ目ノマハリヲアリクヲ厭テ。
目ヲ茂クタハク也。仍目クハシスレバ。此虫
ヲマクナギト云也。イヅレモ瞬ノ字ノ心ナ
ルベシ。

まざぐり物

モテアソビ物。手マサグリト云。弊字也。

まし

イマシ。爾。ナンイマシトヨムヲ。イヲ略シ
デ也

テマシト云。惟光我ガ子ヲ云詞。冠者君使ニ
妹ノモトニ文持テ來時。

まへしりへとさうぞさて

繪合ニ在。弓イル時。左右ヲマヘウシロト
云。サレバウヘノ女房ニテ。左右ニサウゾキ
ワケテ。若菜ニ。六條院ノ小弓ノ所ニ。マヘ
シリヘノ心ニ。コマトリニカタワカチテト
云。

まうちぎみ

大夫ヲマウチギミト云。惣テ殿上人ヲ云也。
御幸ニ。キンタチムツマシウ。サルベキマウ
チギミタチ。

まづの人

先ノ人也。若菜ニ。ヤンゴトナキマヅノ人云
々。

までこえて

みイ

詣籠也。カシコニマデツキテ。京ニマデコ
シ。此皆詣也。柏木ニ。一條ノ宮ニマデタリ
シ云々。

まかびるさなの

若菜下終ノ語也。摩訶毘盧遮那。言語道斷ノ
心ト書留ル所ナケレバ。摩訶毘盧遮那ノ如
ト云ハテタル也。此詞深キ心ナルベシ。胎藏
界闕伽觀ノ文ニモ。無始無終。極重罪苦。忽
然蕩除ノ心ナリ。

まなこゐ

眼睛居也。横笛。

またぶり

叔極。音砂。浮舟。ウツチマタブリ山タチバナ。

私曰。禁中ニアル卯槌マタブリ等ヲマネビテ。宇治ノ浮舟ノ方ヨリ中君ヘ送ラル、也。

またゝとて

玉鬘ニ。泊瀬詣。右近姫君ニ行逢物語ノ詞

ニ。ヨミチノホダシニモワヅラヒ聞エテナ

シマタハキ侍ルト云。私云。長生ノイマダ目

ノハタラクト云心ナリ。又夕顔ノ卷ニ。ナニ

ガシノ院所。火ハマタハキテ。兩説。一ニハ

灯ノ風ニフカレテ動ガ。目ヲタハクニ似タ

ルヲ云。一説ニハ火ハイマダ焼テ也ト云。目

タハクヲ用口傳。

的射
まとい

凡ハ團欒云坐スル也。又的射。若菜下。此院ニカハルマトイアルベシトキハツタヘテツ

ドイ給。是ハ弓イル也。古今哥ニ。マトキセ
ル夜ハ唐ニシキトアリ。是圓居也。

またや

玉鬘卷。大夫監詞ニ。マテヤイカニオホセラ

ル、事ゾト云々。マテハマテシバシト云詞。

筑紫郷談也。

計

けぢめ

結目。桐壺。チヂメミセヌト。伊勢物語ニモ

云。ソノキハライチジルクミセヌ也。

兩義各別
けしうはあらず

不下習。濁。不恠。澄。人ノミメ形ヲ云所ニテ

ハ不下習。濁。病ナドヲ云所ニテハ不恠。澄也。

御幸ニ。三條ノ宮ヲトブラヒ給ニ。物ヨクキ

コユルハ。ケシウハヲハシマサズト云々。是

ハ恠也。所ニヨルベシ。

けいめい

嫫嫫。ケイバイ遊仙。經營。夕顔。敬命。ウヤマイシタガフ

心也。

けんぎ

嫌疑。横笛ニ。ヨノツネノケンギアリガホ

ニ。柏木ノ笛ノ事ヲ云也。

けそく

花足。葵卷。ネノコノ餅入物。

けせう

見證。顯證。玉鬘ニ。ケセウニ人シゲクモア

ルベシ。私云。ハレガマシキ心也。イチジル

クアラハナル心也。

けそむ

家損。イヘノキスト云心也。常夏ニ。カヤウ

ノコトコソヲノヅカラケソンニ侍ケレ。

けやけし

尤字。ケヤケウハシタナシ。イチジルキ心

也。藤裏葉。アシ垣ウタウヲ。乙戸ケヤケウ

モツカウマツレルカナト在。

げざう

見參也。濁。又ケサウビタルト云。心別ナリ。

けそう

化生。夢浮橋。ケソウノ人ナンイカナル鬼ニ

カ。又顯證人。

けちえん

掲焉。乙女卷。ハレガマシキ也。イチジルキ

也。

げさく

外戚。

けうのこと

希有。

けうやく

カリソメニ物ヲ作ヲ云。又物ヲカヘタルヲ

モ云。扱易。

けうの菩薩

脇菩薩。鈴虫卷。

けかけたる金

鈴虫卷。偈掛。

けはい

箒木。ジネンニ其ケハヒ。氣。日本紀。形勢。新猿樂記。

景氣。

けんそ

武川。碁打見所。

けちさす

結也。空蟬ニ碁打所。

けうせんの心

オヤニ孝センノ心。常夏。孝行ノ心也。

けさはがしう

氣噪シク也。松風ニ桂ノ預云詞。内ノ大殿ノ

御堂チカクテ。カノワタリハケサハガシウ。

げんざ

驗者。

不

ぶたう

舞踏。桐壺。所々多シ。餘情ニアリ。

ふいに

不意。日本紀。

ふよう

ナルヨシキコエ。不用。

ふむつくりて

符。若紫瘡病所。

ふるさのかはぎぬ

黒黏。フルキ。順和名。豹。フルキヘウ。毛詩。取彼狐

狸。爲公子裘。注云。以居孟冬。則天子始裘

也。玉造小町衣裘ヲ云ニ。菟裘。豹裘。偈。ウタ

紅藍色濃也。高光。少將入道如覺也。集云。中宮ヨリ御装

束ヒタレ。フルキノカラノ御ゾトテタマ

ハセケル。夏ナレド山ハサムシト云ナレバ

コノカハギヌハ風ヲフセガン。古ノ御門ハ

着給へリケル云々。

ふりがたく

難舊。源内侍スケヲ云。年老タレドモ。フル
ビガタキ也。

ふぢのたもと

素服也。藤ノヤツレ同。乙女。

ふむのつかさ

圖書寮。收納樂器所也。繪合。藤裏葉。ケウセ
ツナル程ニ。上ノ御アソビ始テ。フムツカサ
ノ御事共ト云々。

ふつゝか

ゲスシキ也。

ぶむじんぎさう

文人ハ文章生也。擬生。擬文生。擬進士ト云。

乙女ニ。ブンジンギサウトイフヨリウチハ

ジメ。

ふくつけき
太師此書之招月

ヨクガマシキ也。權卷。童オコシテ雪マロバ
サント。フクツケカレド。エキウゴカサデワ
ブルヲミ給云ナリ。

ふればい

フレバミ也。又フルバイ給ヘシフルマイ也。

野分。

ぶんず

文集。

ふればいせ

觸字也。若菜上。カノ御アタリニコソフレバ
、セマホシケレ。宿木ニ薰詞ニ。昔ノ御ケハ
ヒニカケテモフレバ、ン人ハ。シラヌ國マ
デモ尋シラマホシキトアリ。

ふずく

粉糞。金谷苑記云。献赤粉餅。寄生ニ。中宮五
夜産養。薰ノサタノ所ニ。センカウノヲシキ
タカツキドモニテ。フズクマイラセ給。同卷

藤壺ノ藤宴ニ。宮御方ヨリフズクマイラセ
タマウ。

ふところがみ

紅梅ニ。フトコロ紙ニトリ交テトアリ。

ふたつの道

箒木ニ。ワガフタツノミチヲウタウヲキケ。

ふる物あつかひ

玉鬘ニ。内ノオトゞ御女トモシラデ。源氏ヲ

ヨクムヅカシキフルモノアツカヒカナト云

ケチ給。私云。舊縁ヲ尋悦テモテナスト云

也。

こ

こうらうでん

後涼殿。桐壺。

濁口傳
こさでん

弘徽殿。同。

こうろくわん

鴻臚館。在七條坊西朱雀。貞觀十四年五月十

七日。鴻臚館芳問渤海客。伊勢物語。渤海ト

ハ高麗也。七歳ニテ逢高麗作文例。ウツボノ

トシカゲニアリ。桐壺。

こくさうゐん

穀藏院。

こよなう

無越。閑雅コヨナウ。幽玄ノ義也。

こもの

木物。籠物。或献物。桐壺。コモノヲリビツ

物。籠物ハ八目籠ヲ方ニクミテ打合テ。中ニ

色々ノ薄様ヲ敷覆テ。菓子ヲ入タル物也。木

物トハ栗椽ハシ。椎ナドヲ入故ニ木物ト云

也。或献物ト書ク。コンモツトヨム。高倉安元

御賀記。隆房卿作也。又圓融院子日御幸。寛

和元年二十三小野宮右府記云。籠物云々。口傳用籠

物。

ことえり

言バエリ。言撰。

兩義

こといみ

言忌。事忌。可依所。

こゝら

巨々等。多キ也。

ごいし

御倚子。天子ノ出御ノ時。御座ノトコナリ。

こゝしき

巨々。古々。若菜下。柳ノ葉ヲモ、度アテツベキトネリドモノウケバリテ。イトムシムナリヤ。スコシコ、シキテツキドモヲコソマセメトテ。大將タチヨリ初テヲリ給ト云々。古々ノ心也。

こゝしく

同詞也。乙女ニ。ニホヤカニコ、シクウツクシ。是ハ濃ナル心也。キトクト同音。イヅレ

モ同。

こめき

古メキ。コメカシクハシキ也。私云。コマヤカナル心。コ、シキ同心也。

こめかしう

同心也。乙女ニ。イトコメカシウ。シメヤカニウツクシ。古フルメカシキ心モアルベシ。

こゝろしらひ

心ヅカヒ也。

このもかのも

此面彼面。タガラ。

こゝのしなのかみ

九品。上品上生。夕顔大貳乳母所。源氏詞。

こゑたてぬ念佛

夕顔。万歳身後抄云。葬送以前無音念佛立歸之。則限佛事勤之。

兩義
こたい

古代。古鉢。用之。末摘ヲ

衣箱

ヲモリヤカニコ

タイナル。

こまやかなる

濃。コマヤ
カナル。

こまのくるみ色のかみ

高麗胡桃色紙。コマノウスヤウノカミ。ウチ

ハ白シ。外ヨリハ香色ナリ。

ことなしび

無爲。コトナ
シビ。古今。村鳥ノ立ニシ我名今更ニ

コトナシブトモシルシアラメヤ。

こゝろば

繪合ニ。サシグシノ筥ノコ、ロバ。又云。エ

ンニスキタルチンノハコニ。同ジコ、ロバ

ノサマナド。梅枝ニ。チンノ筥ニ。ルリノツ

キニスヘテ。大ニマロガシツ、入給ヘリ。コ

ハロバ紺瑠璃ニハ五葉ノ枝。シロキニハ梅

ヲエリテ。同引結タル糸ノサマト云々。拾遺

哥。淺カラス契結ベルコ、ロバ、手向ノ神

ソ知ベカリケル。私云。コ、ロバノ事。多聞

ハ筥ニ付タル緒ノクミト心得タリ。然ヲ或

人五葉ノ枝梅ナドヲ金銀ニテエリタリトア

ルハ。箱ノクリカタトミエタリ云々。又コ、

ロバニ哥ヲカクトアルハ。クリカタニハ云

ベカラズ。緒ノクミカト覺ツカナシ。其モ組

ニハカキニクシ。書テ付タル歟。所詮金銀ニ

テエルトアレバ。クリカタ、ルベキ歟。又答

云。或云。金銀ニテエルクリ方勿論也。其ク

リカタニ結付タルクミ也。詞ニモムスピ付

タル糸ノサマトアリ。組ノ糸ノサマヲ云ヘ

リ。既纒ノ字ヲコ、ロバムトヨマセタリ。猶

クミタルベキ歟。私云。此兩其謂アレドモ。

ムスピ付タル糸ノサマトアリ。組ヲ以テ爲

正。

こち／＼しく

權ニ。フツ、カニコチ／＼シク。女五宮ヲ云。玉鬘ニ。キナカビテコチ／＼シウヲハセマシカバ。初子ニ。コチ／＼シクサスガニワラヒ給テ。皆同心。

こまかけ

コマカニ也。乙女ニ。女房ノザウ^音シマチドモ。アテ／＼コマカゲゾヲホカタノコトヨリモメデタカリケル。或本アテ／＼コマケウトアリ。私云。コマトル儀也。女房曹司マチドモ。アテ／＼コマゲゾトアルハコマトリ歟。若菜。左右ニコマトリテト云モ。アテ／＼ヲ左右ニ分タル也。是モ局／＼ヲワケタル儀歟。コマカナリト注スル。或本ニ。コマケウトアルニ付テ注スルカ。コマケウ。コマカナル心ナリ。

ち字ニスヘシ
ことばだゝたり

迂。孝經序ニ。詞ノナマル也。拾遺哥。アヅマ

ニテヤシナハレタル人ノコハシタバミテコソ物ハイヒケレ。玉鬘大夫監申事。ことぶき

言吹。壽。^{日本紀。文選。}祝言也。虛壽。文集。天平元年

正月四日。始有踏哥。言吹者。初音ニ源氏詞。

ワレコトブキセントウチ笑給。餅鏡トリヨセテ。トモノ中ノ奉リ給時。三種神器ヲ授奉リシ時壽シ給フ。私云。天照太神天御孫天降シ。

このさうのめいぼく

今生ノ面目。

こうらう

古老。或耆老。

ごくらく寺

極樂寺。在深草。昭宣公建之。私云。昭宣公芹

河行幸^{仁明天皇}時。箏ノ造瓜落シマシ／＼テ

求ニ遣ス時立願。仍求出テ奉リ給。果シテ後

ニ其所ニ建立シ給シ寺也。

ことつび

琴粒。秘抄云。事粒也。狛氏十秘抄云。コトツキ。コトツビ。コトサイ。三説在。コトツキハ人ノカホツキナド云心也。事粒ハ其姿カキツボミタル物カラ。モノくシクケダカクコマヤカニアル心也。コトサイハ人ノアシク讀付タル也。不可用之。

ことども

絃物名也。藤裏葉ニ。圖書寮。フムノツカサノ御コトゞモメス云々。

ともなく

ヨキヲモ云。柏木ヲ云ニ。サイナドモコトモナク。ツイニハ世ノカタメナルベキ人。若

菜。

兩説五ヶ調
こかのしらべ

若菜ニ。琴ハゴカノシラベ。アマタノナカニ

琴ニ有五ヶ調。搔手。片垂。水瓶。蒼海波。鴈鳴ノ調。或胡歌調。胡笳調。

ごろくのほら

若菜ニ。ゴロクノハラヲ。イトヲモシロクスマシテヒキ給。万秋樂五六帖。ハジメヨソカハレ。皆破ニ返付也。仍五六ノ破等ト云也。或云。五六ノ撥。々ハ調子ニツカサドル絃也。不用。

兩義別也
こたち

女房ノ惣稱。後達。御達。子達。女ハ夫ノ後ニ居スル也。後漢書鄭玄注ニ云。禮記云。在夫後云々。故ニ后ト云モ後義也。仍女ヲ後達ト云。御達ハカシヅク儀也。母御姉御ト云ガ如シ。濁テヨム。子達ハ女ノ實名ヲバ何子ト云。仍子達ト云。澄テヨム。又木立。庭ノコタチ。家ノコタチ。別心也。コヲ澄テ。タヲ濁テヨム。

こうさう

業障也。又興盛。夕霧ニ。コウサウニマドハ

シテ。

こまうど

高麗人。

こつれなくて

こせん

御前。々駈。隨身。

こたみ

今度也。或コタビ。

ごち

ヒトリゴチ。キコエゴチナド云詞也。

このとの

此殿。催馬樂。

こて

東屋ニ。御門ノクチヅカラコチ給ヘル。御門

ノ御ヂヤウ御定。アルト云。ゴチ同心也。言歟。

ごのかうのさみ

權守君。私云。ゴンノカウノ君トヨムベシ。

こゝろはしりて

ムナサワギスル也。

こまとる

狛取也。若菜下。左右ニ分ツ也。コマカケ同

心也。

ごてのぜに

寄生ニ。中君ノ産五日夜養。薫ノサタノ所

ニ。屯食五十具。ゴデノゼニ。ワウバンナド

在ト云ヘリ。此事有口傳。別注雛打事云々。又

親王誕生圍碁ヲ打出錢。

こだに

宿木ニ。コダニナドスコシヒキトラセテ。草

類歟。注云。木蛸。木ニツクトモ云。可勘。

こうじて

須戸。源氏ノ御門ノ夢ニミエ給所ニアリ。蜻蛉ニ。物キ、コウジテ。屈シタル心也。

こに女こそ

若紫ニ。コニ女コソ。コ、ニ也。

ごしむ

若紫ニ。北山僧都ゴシンマイル。護身。加持スルナリ。

こんがうじのずい

金剛子念珠。若紫。僧都ノタテマツル。

こもさ

女名。手習。小野尼君ノツカウドニシリケルイヌキ。アテキ。ナレキ。同公字也。

こむじ

巾子冠。初音ニ。サルハカウコンジノヨハナレタルサマ。言吹ノミダレガハシキトアリ。高巾子。蟹冠トモ。男踏哥ノ冠ノコトナ

リ。

え

江上聲ニ可讀。へ平聲。み去聲。但下ノ字ニ引カレテ聲不定事モアリ。

エニクミ給ハズ。キリツボ。吉字。住ノ吉。日吉。

えもいはず

同心。

天

てぐるまのせんじ

輦車宣旨也。輦ヲ手グルマト云。如輿ニテ手カキニスル也。尊者蒙宣旨。乗ナガラ宮中ヲ出入スル也。牛車宣ハ猶上ノ事也。牛ヲ懸ナガラ内裏出入スル也。桐壺ニ。更衣マカデサマニ宣旨アリ。又横柱ニ。尚侍出給ニ。御テグルマヨセテト在。

てかく

手搔也。人ニシラレジトテ。言ニハ出ズノ。

手ニテマネグ也。夕顔ニ。アナカマトテカク。

ては紀のつらゆき

紀貫之。能書。繪合ニ道風ニ番。ツガウ。

てん上ののりゆみ

殿上賭射的。正月十一日式日也。

てんげむ

天眼。冥鑒也。テンゲンヲソロシク。冷泉院

御詞。

てんぐ

天狗。夢浮橋。テングゴダマ。

てうがく

調樂。箒木。賀茂臨時祭ノテウガクニトアリ。

私云。賀茂臨時祭自宇多御門始ル。十一月午

日。北陣ニ幄有儀式。有饗膳勸盃。

安

あつし

甍。アヤウキ心也。ヨハキ心。靈運。當遷。日本紀。桐壺卷。更衣ヲ云劣。

あひなう
コレモウラチ云詞

無愛。無間。桐壺。私云。無間ハ心カハルベキ

歟。タエマモナキ歟。

あぢさなう

無爲。日本紀。漢書。無事。万。

あさがれい

朝餉。朝ノ供御有清涼殿。夕供御大床子。オ

モノハ皇居ニ隨テウツサル。

あだ人

且。万。アタヒト別人。西域傳。佗妻。異心。異國。日本紀。佗邦。禮

記。信邦名ナ云。丹合アタナレ管家。私云。アダ万シク

タノミナキ人也。命ヤハ何ソハ露ヲ。

あさまつりど

早朝。長恨哥。君王不早朝。アサマツリコトシタマハス也キリツボ。

あはつかに

アハ／＼シキ也。淡々敷。頓。日本紀。迅。古語拾遺。永。

あはつけ人

常夏。近江君ノ舌トウコエアハツケサト云。

淡付。アハ／＼シキ同心。

あかるゝ

散也。箒木。マカリアカル、ニ云。預別也。ワトカト同音。

あかれ

花宴。朧月夜ノマカデ給ヲ云。弘徽殿ノ御アカレニ侍メリト云。御ワカレト云也。ナカレト云心ナリ。

あへかなる

ヨハキ。夕顔ニユウ顔ノ上ヲ云。ラウタゲニアエカナル心チシテト云。八雲ニ。ウツクシクヒハツナル也。若菜ニ。マダイトアヘカナル御ホド。女ニ宮事。

あへか

アキラカ也。

あはめにくむ

淡悪。カルメニクム也。箒木雨夜物語。

あざへたる

近江ノ君ヲ云。サレバアザワラウ。あざれかくれば。ザレカ、ル也。アハサ、ゲ物。誹諧心。皆ザレタル也。あさりありく。夕顔ニ惟光ヲ云ニ。タノマズ。アサリアリケドモ。ザレアリク也。

あひだれ

愛垂。

あてはか

嬬妍。日本紀。アタエニハカナキ心。タヘニウツクシキ也。

ありか

當。古語拾遺。スミカ同心也。在所。夕顔ニ惟光ヲ尋ルニ。アリカサダメヌ物ニテトアリ。アリ

カミム。

あやめ

綾目。綾文也。夕顔ニ。物ノアヤメミワクベ
キ云々。八雲抄ニハ。善惡ヲモミツカヌ也云
々。

あてき

妙君。葵上童也。又公字用。紫式部記ニ。タク
ミノ藏人ナゲシノシモニキテ。アテキガ縫
ヒモノ、カサネヒネリヲシヘナドストモ
云。如此記者。アテキハ司人惣名ト見ヘタ
リ。私云。何キト云類多シ。其時ノ司人ヲア
テキト云ケル歟。

あをむま

正月七日。青馬節會。私云。青馬七疋。青陽
色。春。七ハ陽數。馬ハ陽獸。見之除年災。

あをに

青丹。私云。アラニヨシ奈良トツバケタリ。

委見袖中抄。

あを

關屋ニ。タビスガタドモノ色ヲアラノツキ
シキヌヒキノ。クハリゾメノサマ云々。
あそびめ

漂洽。住吉詣ニアソビドモマイレリ。青表紙
本ニハアソビトアリ。

あまそぎ

フカンギ也。薄雲ニ。此春ヨリヲホス御グ
シ。アマソギノホドニテ云々。或本ニハアマ
ノホドニテトアリ。

あるじ

饗。賭射還餐。人ノマウケノ饗。諸社祭ニ飯
スヘヨト催ス。上卿詞曰。ミアルジツカウマ
ツレ云々。

あまがつ

松風ニ。御ハカシ。太刀。アマガツ。天兒。明石

君行所ニ。天兒。小兒三歳マデハ用之。

あをじ

青磁。

あざれたる

鰯。アザレタル。論語。魚ノ鰯タル。私。損タル也。此

詞心アマタアリ。直衣ノフクミアザレタル

ト云ヘルハ。フクダミ損タレバ。此鰯字ニ叶

歟。花宴ニ。人ハ上ノキヌナルニ。アザレタ

ルオホギミ姿ト。源氏ヲ云ニハ此字不叶。又

鮮。アザヤカ也。宿木ニ。右大臣六君ニ勾宮初テ渡

所ニ。モノノシクアザヤギテトアルト。花

宴ノ心トハ同。アザレ。アザヤグ同詞歟。又

アザレタルトハ。裝束ノシバラノ井タルガ

コトノシキヲ云。口傳セリ。所ニヨルベ

シ。又紅葉賀ニ。アザレタルウテギ姿。是モ

花宴同心。

あざやいたる

同前。注見前。

有端
あざれ

俳諧ヲ俊賴ザレ哥ト云心。箒木ニ。アザレカ

ハル。ザレカハル也。ザレタル也。アハサハ

ゲ物也。河海。

あざる

幻ニ。サヤウニアザエタルコトハ。同詞也。

あふさず

玉鬘ニ。オトシアブサズ。河海ニハ放埒。フ

レカサス也。孝經ニ滿而不溢。ミテレドモ
アフサズ。

あふより

アナタヨリ。玉鬘ニ。御手ノスデハアフヨリ

ニタリ云々。昔ニヨリ古様ナル歟。

あくら

幄等。舞時樂所。

兩義心別
あまへたる

甘得。末摘ノ所ニ。源氏ト頭中將ト歸所ニ。

アマヘテ共ニカヘルトアリ。一巻。アマヘタルタキモノ、カ。アマクサキ也。

あさゝむ

朝寒。

あくらう

惡靈也。

あげまき

催馬樂名

兩義。童髮ノ總角ナルヲ云。末摘。蓬生ノ宿

ニハナチカウアゲマキト云。童ノ牛馬飼也。

頭ノ總角ナルニヨテ云。東ニ在。棟トヲシト

云。私云。催馬樂名。又車ニモ在。童ノ總名。

あのごと

如案也。私云。アムノゴトト讀ナリ。

あたへかくして

ホコリタル義。又アミタ歟。

あらましさ

荒也。寄生ニ。アラマシキアヅマヲトコノコ

シニモノヲハル云。浮舟ニ。風ノヲトモイトアラマシク云。

あちらひ

あけたてば

朝立。

あじろびやうぶ

蓬篠。宇治。竹ニテクミタル屏風也。

あべし

アルベシ。若紫。私云。アムベシトヨム。

兩義
あへまし

箒木。七タノタチヌフコトヲノドメテ。ソノ

タエヲ契ソアヘマシ。私云。アヘ物ト云ハア

ヤカリ物也。アヘマシハアヤカラマシ也。

あへなん

初音ニ。末摘ノ裘ヲ山臥ノミノシロ衣ニ讓

テアヘナン。敢南心別。

あふささるさ

左右ト書。コナタカナタ也。古今。シカリト

テトスレバカヽリカクスレバアナ云シラズ

アフサキルサニ。

あいたちなき

無愛達。

あはせのはかま

古ハ練袴ニ綿ヲ入ル。サレバ取分テアハセ

ノ袴ト云ハネリタル歟。今ノ女房ノ馬上ニ

キルサシ貫ト云ハ是也。

あべのおほし

繪名。繪合ニ。ウツボノトシカゲ。安倍多。チホシヒ

ネズミクラモチノ御子。

あしゆひのくみ

花足ノ心ハ行香臺ノ事。足ユイニ花足ノ足

ヲユウニアラズ。スヽシノ糸ヲスソゴニ染

テ。アハビ結ニシテ。行香ノ臺ノ四方ヲカラ

ミ。花足ノアシヨリ長クウチハヘタリ、

あかの花

幻。アカノ花ノタバヘシ。闕伽土器ニ佛ニ

供スル花ノタバヘナリ。

(左ニ行標イ本補)
あて人

妙人。アテヤカニウツクシキ人。

あつかはしき

オボエモテナシ也。是ハ心ツヨクモテハナ

レ。アツカハシキ也。螢卷。又熱。蟬ノ聲ノア

ツカハシハ熱也。

あしがき

催馬樂。藤裏葉ニ。弁少將アシガキウタフ。

ヲトバケヤケウモツカウマツルカナトノ

給。

あくるまさきて

明間開也。宿木。アサガホノ事。

あいしう

愛執。夢浮橋ニ。アイシウツミトアリ。

あかしららむはあへなからん

末摘。アリナント云詞也。

あふなげに

無奥。澄。又危心。濁。御幸ニ。アウナゲニノ給

へバ。無奥也。スミテ讀。又危心。ニゴリテヨ

ム。

あゆまい

先様也。御幸ニ。内ノヲトッヲ云。ヲモ、チ

面持。アユマイ。

あだげ

アダナル氣色歟。若菜上。(アッ勝)イキハノフリセヌ

アダゲコソイトヲシケレ云々。

あかれぬ

玉鬘ニ姫君哥右近行合。泊瀬河ハヤクノ事ハシラ

ネドモケウノアフセニ身サヘアカレヌ。又

アカレヌ詞不審。思ワカレヌ歟。分別心也。

ヌハ不字也。

あゝ

若菜上。明石尼公ヲ云ニ。耳モオボくシケ

レバ。ア、トカタブキキタリト云々。

あしこもと

宿木。アソコモト也。シトソト音通之。

あかとさ

曉也。宿木。弁常陸室泊瀬歸ニアヒテ。アカ

トキヲハシツキナント。待キコエシト云々。

左

さがなみ

恐。惡。桐壺。

さけず

不遠。

さぶらひ

殿上ヲ内ノサブライト云。

さうじみ

正身。正員也。所ニ付テソコノ主人ヲ云。
さすらう

伶僇也。又玲瓏。タ、ヨウ也。箒木。

さしやか

少々。狹々。細々許。サ、ヤカニシテ。遊仙窟。ホソクチイサ
キ心。

さしすぐいたる

サシスギタル也。

さんしごさやう

史記。漢書。後漢。三史。周易。禮記。毛詩。左
傳。尙書。五經。箒木。

さがりば

下場。カミノサガリバ。

さうとく

早速。イソガハシキ也。常夏ニ。水飯ナドト
リ、サウトキツ、クウト云。

ざえ

才。

さくら人

風俗。

ざれたる

物ナレタル心。ザレ人ナド云如シ。俊賴口傳
ニ。誹諧ヲザレ哥。タワブル、ガ如シ。私云。
紅葉賀ニ紫上ヲ云ニ。クチヲホヘルサマ。イ
ミジウザレテウツクシ。是ハザレタルニヤ。
又ハイツシカカクレナクサレタル氣色ノウ
ツクシキト云心モアルニヤ。夕顔ニ。サスガ
ニサレタルヤリ戸ト云々。兩義在。疎ニ實メ
カシクモ造ヌヲ。ザレタルヤリ戸ト云歟。濁。
又垣モナクアラハナル。サレタルヤリ戸ト
云歟。澄。兩説也。又物ナレタルニモ此兩義
アリ。人ニユルサレカクレナキ人ヲサレタ
ルト云漢歟。(漢歟)又シトヤカニモナキザレモノ
ト云心歟。濁。トコロニヨルベシ。

さうとく太子

聖德太子。若紫。北山僧都金剛子念珠事。

さらばいて

髻。サラボウ。莊子。老サラボヒテ。

さうのこと

箏。

タ、サウトモ
さう

繪合ニ。昔ヨリサウハ女ナンヒキトル物ナ

リケル云々。

さうくし

サウサシキ也。閑書之。サビシキ也。寂寞。

さが

様也。サマ。マトカト同音。世ノサガハ世ノ

習。世ノクセ也。

キノ字ニ可入
さくらのからのさの御なをし

えびぞめ下がさね。綺。ヲリモノ。カムハタ

トヨム。カラヲリモノヲ云也。直衣ニ下襲常

ノ事也。綺ハヲリ物ノ唐織物ナルベシ。後嵯

峨院高野御幸ノヲリ。此御直衣事メサント

テ。諸人ニ御尋アリシ也。義ハシアルヤラ

ン。

ざうぎやうさんまい

常行三昧。

さくじり

鑄。解結器也。如錐。冠者ノ君ヲ云。小人ノヲ

トナ心在ヲ云。私云。毛詩云。童子佩鑄。々ハ

成人ノ佩也。小人ノ大人ノ佩ヲ帶ト云心叶

歟。

さうかの殿上人

サウカノ殿上人アマタ侍フ。唱歌殿上人ト

云々。唱歌ハ上首所爲也。アマタ不審。床下殿

上人歟。或人云。藤裏葉云。サウカノ殿上人。

御階ニサフラウ中ニ。弁少將ノ聲スグレタ

リト云々。若菜云。サウカノ人々御階ニメシ

テ。スグレタル聲ノカギリイダシ。返リゴエニナル。ヨノ深ユクマ、ニト云々。猶唱哥タルベシ。上首所爲トアレドモ。所々ニ殿上人御階ニテトアリ。

さとびたる

或里ビタルト云説アリ。不用。キナカビタルナリ。イナカ聲ノナマリタルハ。サトゲニキコユ。浮船ニ。里ビタル犬トアルヲ。里ナレタルト思ツケタル僻事也。サトゲニトガムル犬也。悟。覺利。

さうふれむ

想夫戀。樂名。常夏ニ。サウフレンバカリコソ心ノ中ニテマギラハス人モアリケメ云々。又夕霧一宮所ニモ在。昔ハ男ヲ思テ戀ト云樂ナレバ。女ニハイミテ傳ヘズ有ケル歟。孝道雅談抄云。妙音院相國名ヲイミテ御臺盤所ニヲシヘ給ハザリシ。尾張ヘウツサレ給

シ後譜ヲ書テ。今ハ此譜ニテイカニモタウレバ引給ハト申サレケル。遠所ヨリ譜ニテ教ヘタル例也云々。

さゝのと

少様事。

さゝめく

箒木ニ。ウチサ、メキテ。耳言。サハ。万メク。

さゝめごと

私云。文集云。琵琶引。小絃ハ切々トシテ如

私語。

さらぬわかれ

不去別。不遁避別也。スマ。

ざけ

邪氣。

ざえがらず

初音ニ。明石上ノ見給所ニ。サウガチニモザエガラズカキスマシタリト云々。不才。才ガ

マシカラズ也。

さみだれがみ

螢ニ。サミダレガミノミダル、モシラデ云々。

拾。郭公ヲチカヘリナケウナヒコガウチタレ

髪 五月雨ノ比。躬恒。

兩義
さかし

サゾカシ。領納詞。又賢。カシコキ也。

兩義
さまよふ

様好。容儀ヨキ也。又吟。サマヨウ立サマヨフ。依所。

兩義
さうやく

雜役。雜々ノ役送。若菜。濁上聲。箒木ニ。コ

ク熱ノサウヤク。草藥蒜ノ事也。澄平聲ニヨ

ム。

さばのほか

娑婆界ノ外。若菜上。

さくぢやう

幻ニ。サクヂヤウノコエ。錫杖。

さ

若菜下。イトサコト、シキ、ハト云。イ字

所ニモ入。

ざうげん

讒言。柏木ニ。督君夕霧ニカタル詞。イカナ

ルザウゲンノ有ケルト云々。

兩義
さだすぎ

私云。此詞アマタアリ。年ノサカリ過タル

心。又トクサシスギタル心モ在。若菜下ニ。

六條院我トサダスギ人ヲモヲナジクト在。

又若紫ニ。北山尼ノ所ヘノ御文ヲシツ、ミ

給ヘルサヘ。サダ過タル御目ニハ。メモアヤ

ニミユト在。是モ年ノ過タル心ナリ。

さしぐみ

サシヨリニト云心也。若紫橋姫ニ。サシグミ

ニフル物ガタリ。薫ト
弁ト。

されくつがへる

シトヤカテラヌサマ也。俊頼口傳心。クツガ
ヘルハ顛倒也。シヤレクツガヘル。

さらども

皿也。葵卷ニ。ネノコノ餅惟光タテマツル
所。御サラドモイツノマニカシイデケント
アリ。

さらぬかがみ

スマ。鄭人曹父行遠國時。破鏡テ一片ヲ妻ニ
與シ也。

さへかひ申さてなん

若菜上。優也。

さうじをろして

請下。橋姫。アザリモサウジヲロシテ。

さがの院

宿木ニ。サガノ院ニモ六條院ニモ聖カクレ
テ。サガニヲハシマシケル。

さば見ん

浮舟。サラバミム也。

兩説庄益

さうし

曹司

常陸所領庄々也。東屋ニ。サウシ／＼ニアル
物ドモメシイデ、云々。紫明ニハ曹子ト註
ス。私云。庄々ナラバ字アマル歟。

さくはちのふえ

末摘ニ。大ヒチリキ。サクハチノフエ。

さうに

玉鬘。大夫監詞。サウニナヲボシハバカリソ
ト云。サヤウニ歟。國ノ院淡歟。

さかしら

玉鬘末摘ヲ云ニ。カタハライタキ心ノツキ
給ヘル。サカシラニモテワヅラヒ給ト云。

さび／＼しく

初音ニ。光モナク。クロキカイネリノサビ
／＼シクハリナシタル。

さはがいたさま

御幸ニ。三條ノ詞。中將君ノ思ヒアツカヒ。
心ヲサハガヒタサマト在。サハギタル心也。

さねこん

薄雲卷。催馬樂詞。宿來^{サチコ}トカク。

さるべきかうの物

若菜上。注云。干物魚也云々。可勘也。若ハ味

憎付歟。

さすがね

懸金。ヨコ笛。

さはりおほみなる

碍多也。總角。勾宮。今夜々々トサハリオホ

ミナル程ハ。

さぐりもよゝと

總角ニ。大君ノナヤミ給所ニ。中納言サグリ

モヨハトナキ給。

幾

さよら

淨罽羅。キリツボ。

さざをもとめ

吹毛求疵。漢書。桐壺。後撰。ナヲキ木ニマガ

レル枝モアル物ヲ毛ヲフキキズヲ云ガアヤ

ナキ。高津内親王。

さびは

稚。^{日本}紀。桐壺。キビハナルホドハアゲヲトリ

モヤ。源氏元服事。

さよろしさ

清宜。箒木。

さやうさく

かうさく同。形跡。還迹。又敬策。若紫。ワカ

ゲレドキヤウサクニヲイサキタノモシ。眞

人ヲ云也。私云。還迹。ウルハシクサリヌベ

キ心也。

さりかけだつ物

人不知トテ秘ス。私云。ダツ物トハ何メカシ

キ物ト云詞也。家ダツ。メイダツナドイヘ
リ。別有口傳。

さんもち

公望。繪師名。高名錄。當代。

さんぢ

汝也。ナムヂ。キムヂ同訓。乙女ニ。惟光ガ子
ノ童殿上スルヲ父ノ云詞。

さうしらく

喜春樂。

さのはて

玉鬘ニ。三月ヲキノハテトタイム。四季ノハ
テ也。大夫監ガ云詞。

ざしきくわん

末摘ヲ云ニ。ギシキクワンノヒヂモチノヤ
ウニト云。儀式官出仕ノ時。召具スル火長ナ
ドノコワバリ着タル臂持也。

さうだい

及第。乙女卷。

ざさう

文人擬生。乙女卷。

さなるいづみ

黃泉。

さびう

常夏。スコシ引給フコトツビ。キビウイマメ
ガシウヲカシト在。定家本ニハ此詞ナシ。コ
トツビイトニナクト在。コトツビ等事。古ノ
字ノ所ニ注之。

ぎやうがう

行香。蛉虫。私云。行香事。法事時。殿上侍臣
ナドノ所役ニテ。明香ヲ臺ニ入テ焼テメグ
ル也。

さすく

健也。淳朴ノ體也。

さんのふ

琴譜。宿木卷。

きせい大とく

手習。イトキセイ大徳ニナリテ。肥前掾良利。法名寛蓮子。碁上手也。

ぎ

橋姫ニ。薫中將宇治宮ニ詣テ。法文ノ給所ニ。阿闍梨モサウシヲロシテ。ギナンドイハセ給ニ。儀也。難儀。

由

ゆるし色

聽色。延喜式。論語。紅紫不褻服。

ゆけいの命婦

靱負。餘情在之。長恨哥云。内外命婦。コンヨウトカケン焜耀景從。カウシタカウ

ゆくりなく

不意。日本紀。

ゆくりか

若紫。スギサマニアカラサマナル心也。

ゆほびかなる

寛。若紫。

ゆくてゆくての御こと無過さまの事也イ

若紫ニ。ユクテノ御身ハナヲザリ云。ミカサ山キテモ止ラヌ道人ニツラキ行テノカゲゾ

ツレナキ。

ゆたけゆをひかにイ

寛也。ユタカニヒロキ也。

ゆするつき

土器。鬚水入器。泔器。

ゆのね

由音。箏左手ニ在。私云。七ト五トノ絃也。

ゆみのけち

結。

ゆめ

努々。若菜下ニ。ユメ宮ヅカヘ。

ゆする

沐也。風ニカミケヅリ雨ニユスルアミスト云。湯アミ髪アラウナリ。沐ハ髪アラフ也。浴ハユアムル也。匂宮中君ノ事ヲ云。

ゆすりみちて

動搖心。各々在。

女

めさまし

目醒。私云。此註心不叶。目サマシ草ナド云ハ愛之興ズル心也。澄テ讀。桐壺更衣ヲ云心ハ嫉妬シ惡心也。^{ニクム}濁テ讀ベシ。

めをそばめつゝ

側目。長恨哥云。京師長吏爲之側目。桐壺更衣事。

めづやかに

メヅヤカニナキハレテ云々。

めもあやに

定家説ニ綾文也云々。目モアテラレズ。アヤ

ノ文ノウツクシキ様ニ喩タリ。私云。必シモ綾ニカギルベカラズ。物ノ紋ノアテニ嚴キ心歟。後拾遺ニ。紅葉バ、錦ニミユト聞シカド目モアヤニコソケサハナリヌレ。

めぞめ

鈴虫。メゾメモナツカシウ。目染。紫ムラゴニ染タル也。

めいぼく

面目也。此生ノメイボク。

めゝしく

蜻蛉ニ。タマメ、シク心ヨハキ云々。私云。コメカシク心ヨハキ様ノ心也。

めしうど

召人也。可然人御思人ヲ云也。胡蝶ニ。兵部卿宮ヲ云ニ。カヨイ給所アマタキコエ。メシウドガニクゲニナノリスル人數多聞ルト云

々。又蘭ニ。メシウドダチテツカウマツルモ
クノ君トアリ。是ハ召出シテツカウ人ヲ云
カ。

めぐらい侍る

橋姫ニ弁ガ詞。カホル中將ニカタル詞。廻
也。

めをに

目鬼也。紫明云。文殊樓無目兒事也。手習ニ。
昔アリケン目モ鼻モナカリケンメ鬼ニヤ。

美

みすべしたらむ

箒木ニ。ミスベカシタル也。空蟬ニ。ヌギス
ベシタル衣ト在。ヌギスベラカシタル也。河
海。

みつのつかさ

三位也。

みさをつくりて

操。私云。此心叶歟。心バセヲ心操ト注スル
ハ叶ヘリ。ミサヲツクルハ。心ニクゲナル姿
ヲツクル也。別心也。古哥云。タサレバミサ
ヲニモユル螢カナ聲タテツベキコノ世ト思
フニ。コレハナヲザリノ心也。松柏ノ操ハス
ミテヨム。

みちのくにがみ

檀紙。ミチノクマユミノカミ。

みうちきの人

御装束師。紅葉賀ニ候ケルヲハテケレバ。上
ハミウチキノ人メシテ出サセ給ト云々。紫明
云。御ケヅリクシノ人。童頭紙ナル無紋紫ノ
直衣ヲ結(給着)ヲキタル。是ヲミウチキノ人ト云
ト云々。

みぞかけ

御衣架。櫛架。延喜式。

みふ

御封。封戸事。依位多(差)ミアリ。

みこさ

御國忌。天子ノ崩御日ヲ云。私云。ミコツキ

ト可讀。

説々アリ心同
みさ

酒也。神酒。御酒。三寸。邪風三寸去故也。三

季。冬作。春焚。夏飲故也。神代詞也。澄チバク
ロキト云。

濁チバシ

兩義
ロキト云。
みちがひ

見違。道街。チマ
タ。スマ。私云。此註心各別也。見

違ハチガヘタル。道街ハチマタ也。只道路心

也。可依所也。

みやびか

閑。麗。都。若菜。督ノ君モノ、ミヤビフカ

ク。カドメキ給ト云々。

兩義
三徑
三途
みつのみち

三徑。閑居。三輔決錄云。蔣詡之ハ御舍中丞

歟。竹下開三逕植柳云々。三逕ハ門へ行道。井

へ行道。廁行道也。陶淵明歸去來辭云。三逕

就荒。松菊獨存云々。松風ニ。天ニ生ル人ノア

ヤシキミツノミチニカヘル。是ハ三途也。

みづむや

水驛。スイエキ俗ニスイエキシタルト云詞也。初音

ニ。ミツムマヤ

夜モヤウ。明ユケバ。ミヅムマヤニ

テ。コトソガセ給ベキヲ云々。楨柱ニ。コナタ

ハミヅムマヤ也。ケント心ケサウシテ。私云。

水驛事ハ宇佐ノ使ヨリ起事也。見水原。

みのしろ衣
初音ニ。カハギヌハ蓑。山臥ノミノシロ衣ニ

ユヅリ給へ。蓑代也。

みてこそ

玉鬘ノ上童。青麦紙或本ミルニ。胡蝶ニ岩モル中將

ノ文トリ次人。

みやうのめしつぎ所

聽召次所也。或本チャウノメシツギ所ト在。
みあれ

賀茂祭前三日。賀茂山ノヲク垂跡石上ニ出
給テ有神事。號御跡。私云。又御靈。々々紫上
マウデ給。

みやうかう

總角ニ。ミヤウガウノ糸ヒキ亂リテ。行香ノ
臺角ニ結タレタル糸事也。ミヤウ香ニハ不
入蜜也。ミツヲノゾキテ。ハラ、カシテトア
リ。私云。案之。蜜ハ生類ノ故歟。但甘蜜ヲ用
ニ何有妨ヤ。不審也。

みとも

東屋ニ。御車ミトモノ人ト云々。御共人也。

みおもひ

御思也。夢浮橋。

みえがさねの扇

清少納言枕双紙ニ。ナマメカシキ物ハ。三重

ガサネノ扇。五重ニ成ヌレバアマリニアツ
クテ云々。檜扇ノ兩方上三枚ヅ、ヲ薄様ニテ
ツ、ミテ。色々ノ糸ニテトヂテ。糸ヲアウミ
ムスビニシタル也。五重モ同風情也。花宴ニ
源氏朧月夜ニトリカヘ給扇ハ。櫻ノ三重ガ
サネ。コキ方ニカスメル月ヲカキテトアリ。
みや柱めぐりあひけん
明石。伊勢宮造廿一年也。
みあるじ

御饗也。飯ヲアルジト云也。諸社祭ニ飯スヘ
ヨト云ニ。上卿詞云。ミアルジツカウマツレ
云々。玉鬘ニ。泊瀬詣ニ日クレヌトイソギ立
テ。ミアルジ事ドモイソグト云々。或本ニア
ヤシトモ在。ミアルジハタベノ飯也。

みあかし

御燈事也。玉鬘泊瀬詣所ニアリ。

みあふる

檳柱。火取ノ灰ノ文ニ。ヤ、見アフル程モナ
ウト云々。見合也。

みえしらかう

總角ニカホルノコトヲ云所ニ。ミエシラカ
ウ人モ在云々。

みつわくみて

嬢組。支離。年フレバ我黒カミモ白川ノミツ
ハクムマデ成ニケルカナ。年老ヌレバ腰カ
ママリテ。二ノ膝ノ中ニ頭マジハリテ。三輪
ヲクミタルガ如シ。又云。伊弉冊尊産水神マ
ス。罔象ト云。其貞老嫗ノ如シ。夕顔。

之^{ミツク}

したひ

桐壺。從。戀慕。

じやうずめかし

上ラウメカシ也。上手メカシ。

しげいさ

淑景舍。桐壺也。シツケイシヤトヨムベシ。
しやうさむゐ

正三位。繪名。繪合ニ。君ノ心タカクト云々。
上三井ノ。私云。シヤウサンミト讀ベシ。
しれもの

箒木ニ雨夜ノ物語。頭中將シレ物ノモノガ
タリセントアリ。夕顔事。

しぞきて

退也。私云。シムゾキテトヨムベシ。

しびらだつ物

褶^{シヒラ}。ウハモ。延喜式。褶覆袴衣。私云。ダツ物
トハメカシキト云詞。キリカケダツ物。家ダ
ツ。此類所々ニアリ。

しろき扇をいたくこがして

夕顔ニ。花スヘヨト云扇也。タキモノヲコガ
ル、ホドタキタル也。白扇事有秘説口傳。
しゝこらかし

アヅマ詞。若菜。

じゝ

オノガジゝ。各自恣。各競。ヲノ字ノ註ニ見ユ。

しぼち

心發。明石入道事。若紫。

しづ心なさ

無閑心。

しゝま哥也

末摘哥ニ。イクタビカ君ガシママニマケツラン物ナ云ソトイハヌ憑ニ。俗ニ無言シバマカネツクト云。止島也。

しは頭義ふる人

紫明。木艸ニウヅモレタルシヅノヲ也云々。或皴古人歟云々。シハタゝミタル老人。柴。シバ。皴。シハ。

しばく

數々。シバ。頻也。鳥モシバく鳴ト云々。

したしたはやに早言する也と

舌迅。

しふ

執也。執着心也。柏木ニ。サルシウノ身ニソヒタルト云々。

しげさそく

重職也。

しづけさ

靜也。橋姫ニ。玉ノウテナニシヅケキト云々。清水寺

しみづの寺

玉鬘ニ。三條ガ云。シミヅノ寺ノ觀音。在筑前。

しうとく

宿徳。

したいならぬ

不進退也。

しばやすむべき。

暫可休息也。竹河。

しみといふ虫

橋姫。トキヨ蠹魚。

じやうふ輕

常不輕。法花經品名。橋姫。

しうども。

集也。浮舟。艸子也。

しそく

紙燭。夕顔ニ。惟光ニシソクメシテト云。扇

哥み給所。

しりゐ

梅枝ニ。イトシリキニハカユカズト云也。或

ハシリヒ。

しかみゑりふかう、

御幸ニ。シカミエリフカクカキ給ヘリ。シカミハフルヒチ、ミタル姿也。エリフカウハ

エリ入タル様ニ書スガタ。文字ツヨナル也。しちそう

蜻蛉ニ。七僧ノマヘノ事。七僧法事。

しらつるばみ

白橡。舞裝束。若菜ニ。アラキアカキ白ツルバミト云々。諒闇ノ時ノハクロキ也。説々多シ。源中叢秘抄ニ委註之。

しらぎ

新羅。蜻蛉ニ。モロコシシラギカザリヲモシツベキト云々。

しらざりみゆる

御幸。玉鬘ノ方ヘ常陸宮ノ送給ニ。紫ノシラギリミユル。アラレデノ御コウチギト在。

しもつかた

松風ニ。明石ノ姫君ヲ紫ノ上ニヤシナイ給ヘト云所ニ。シモツカタモマギラハサント思ヲ。メサマシトオボサズバ。ヒキユイ給ヘ

カシトアリ。シモツ方ハ腰ツキ也。着袴事。

しいづ

作出也。所々多在。葵ニ子ノコノ餅ノ所ニ。
イツノマニシイデケン云々。宿木ニ。匂宮ノ
若宮ノ玉ケ日ヲ薰ノシ給ニ。道々ノサイク
サマ／＼ノ事ドモシイヅメリ云々。

惠江通用

ゑい

詠。紅葉賀ニ青海波源氏舞給所ニ在。詠小野
篁作。本ハ平調。今ハ盤涉調。

ゑい

纓。冠一也。着服人卷冠纓。

又えんす雨義
えんす

怨也。簪木。物エンジヲスルトアルハ嫉妬
也。同所ニエンタチ物ハヂスルト云ハ艶也。
又縁。皆心別。可依所也。

ゑかのさんたち

垣下公達。處々在之。竹川云。大饗ノエカノ
キンタチ云々。公事等ニ在之。大饗大臣來公
卿達事ナリ。

ゑから

廻向。督君尼ニ成處ニ。源氏詞ニ在之。總角。
イトタウトクツクエカウノスエトナリ。

ゑびかづら

ヒタヒノカヅラ。私云。只鬘也。初音ニ花散
里ヲ云。エビカヅラシテツクロヒ給ト云へ
リ。私云。伊弉冊尊御カヅラヲ投給シガ葡萄
トナリ。

え

吉字也。住吉。住吉中皇子。仁徳天皇第二皇。
日エ。桐壺ニ。エニクミ給ハズ。源氏君事。エ
サラヌ。同卷。エモイハヌ同心。言モ不及也。
えさらぬ

吉不去。桐壺。

えならぬ

吉不並タグヒ也。ホムル詞也。エモイハズ也。

えんず

エンズ同。見前。

えこゝろ

艶心也。

えびのか

衣被香。袈被薰衣香。有口傳。タキ物也。

えびかう

同。

えがちにをはす

若菜ニ若公ヲ云ニ。ヨスゲテエガチニヲハ

ス。笑也。

比

ひたすら

ヒトヘ。太。毛詩。正如云集大。左傳。

ひたぶる
又ひたふるに

甚振。永。頓。日本紀。一切。偏。

ひぢて

泥。漬。

ひとのみかど

佗國帝。唐朝。

ひとのくに

日本ニ對スルヲリハ異國ヲ云。京ニ對スルヲリハキ中ヲ云。松風ニ明石入道詞ニ。世中ステハジメシ。カ、ル人ノ國トイヘリ。

ひとささえ

一重。一涯。

ひだりのつかさの御馬

左馬寮。桐壺。

ひきいれの大匠

加冠事也。桐壺。

びさうなき

無美相。帚木雨夜物語。或無貧相。澄也。

ひたやごもり

直隱。ウキニヨリヒタヤゴモリト思ヘドモ
近江ノ海ハウチイデ、ミヨ。

ひぐらゐたり

輕々也。ヒエ鳥ノ嘯カマフル時ノ姿云々。或
本云。ヒラ、キタリ。羽タ、キテ鳥ノ囀キタ
ル姿也。

ひるこ堅手のよはひ

日神ノ御弟。西宮夷。カゾイロハイカニアハ
レトヲモフラン三トセニ成ヌ足タ、ズシ
テ。明石。

ひとやりならぬ

人ノヤル道ニアラスト云也。古今。人ヤリノ
道ナラナクニト。

ひとが

人香。人ノウツリガ也。

兩義
ひそみ

竊。眉ヲヒソム也。顰。ヒソム。口ノ出也事。(事也義)

私云。泣時ハ眉間ノアツマルヲヒソムト云
也。竊。私云。物ヲトリヒソムナンド云ハ。ヒ
ソカナル義也。泣心ニハアラズ。依所也。

ひえのほうけだう

比叡法花堂。

ひとそ

一絲也。

ひそく

末摘ニ。御タイヒソクヤウノモロコシノ物
ト云々。秘色。磁器。世言。錢氏自越州燒進。不
得臣庶用之。故云秘色。

ひなび

夷ナピタル也。或雛。不用。イナカメカシキ
也。

ひたゝけ

叩。ヒタ、ク。混。若菜也。

ひぢかさ雨

聚雨。俄雨。袖ヲカブル故ニ臂笠雨ト云。須
广巳日祓ノ所ニアリ。催馬樂妹門哥ニ見ユ。

ひめをく

秘藏也。

ひめて

同秘スル也。

緯也又其ウレ心
ひの御よそひ

ニカへ給。其日ノ裝束ニ着カユル也。故注。

私云。緋ノ御裝束歟。其ノ日ノ定レル裝束
歟。不審。但可依所也。緋色ノ裝束事。所々
在。緋色。火色ハ表裏トモニ打物ナリ。中倍
在。搔練ハ中倍ナシ。

びなき事

便無也。私云。ビンナキト讀ベシ。

ひぢゝか

土チカナナル也。神代ノ詞ニ土ヲヒヂト云。乾
土ヲバスヒヂ。泥土ヲパウヒヂ也。私云。土
チカナラバ。ヒノ字ヲ濁テヨムベキ歟。然ド
モ普通ニハヒヲ澄テヨム。人ノ意業ニヨム
ベシ。土ナラバチ字モ濁ベシ。

輕等同事歟
ひらばり

平張。左右樂人ヒラバリウチキト云々。樂屋
也。

ひら

枚也。梅ガ枝ニ。白キ赤キケチエンナルヒラ
ハト云。冊子ノ事也。

ひこむさ

緋金錦。梅ガ枝ニ。コマウドノタテマツリケ
ルアヤ。ヒコンキ。

ひじりと葉

聖言。

ひはりご

檜破子。

ひいろ

在花鳥。

ひだのたくみ

万葉云。トニカクニ物ハ思ハジヒタ、クミ
ワツスミナワノ只一スチニ。

ひざう

乙女ニ博士ノ詞ニ。ハナハダヒザウナリ。非
常也。

ひつじのあゆみ

屠所羊事也。無常心。

ひさしり

引切也。夕霧ニ。ヒキ、リニハナヤイ給へ
ル。

びらうげ廿

檳榔毛車廿兩也。女二宮ノ薫大將へ渡給時
事。私云。毛車也。公卿車。

ひすいだちて

椎下ニ。薫中納言ノ君ノ髪ヲ云。末スコシホ
ソク。ヒスヒダチテイトヲカシト云々。翡翠
也。

びはのほうし

琵琶法師。明石ニ。明石ノ入道ヲビハノ法師
ニ成テト云々。平兼盛集。四ノ絃ニ思フコ、
ロヲシラベツ、引アルケドモシル人モナ
シ。

ひだ

手習ニ。ヒダヒキナラスト在。鹿ノオドロカ
シ。

ひさほし

夢浮橋。ヒルアナタニヒキホシ云々。引干。今
常ニアル物也。

ひ

氷也。蜻蛉ニ。御手ニヒヲモチナガラト云々。

女一宮事。年中行事。四月一日ヨリ氷ヲ献也。

ひとしなみ

玉カヅラニ。大夫監詞ニ。スヤツバラト。ヒトシナミニハシ侍ランヤト云々。

毛

もく

木工寮。桐壺。サトノ殿ハモクスリタクミツ内匠寮カサト在。

もゝしさ

百官座ヲ敷故云々。又百城。桐壺。

ものけたまはる西説

簾木。物承也。河海。物ノケシキウケ給也。宿木ニ。モノケ給ハル。食物給ハル。物クウナリ。

ものへだてぬあや

祖父ヲヘダテタルヲヤト云歟。物不隔親。

もろごひ

チハヤフル神モマサシキ神ナラバ我片戀ヲモロ戀ニセヨ。

もんざうはかせ

文章博士。

もとつ人

本ノ人ナリ。

もとつか

本香。紅梅ニ。モトツカノニヲヘル君ガ袖フレテ花モエナラヌ名ヲヤ散サン。

もとめこ

求子。神樂。

もじやう

梅枝。文字様也。

もくのきみ

女房名。楨柱卷ニ。鬚黒ノ大將ノ室事歟。不審。螢。兵部卿宮ノ上式部卿宮御女イデ給所ニ。モ

クノ君ハ殿ノ御方ノ人ニテトアリ。

世

せうそく ことも

消息。所々ニ多シ。玉鬘ニ姫公ノ事ヲ云ニ。

イナカ人セウソクヤル。

せうよう

逍遙。アソビ也。常夏ニ。近キ河ノ石ブシナ

ドヤウノセウヨウ。

せんじがき

宣旨書也。人ニカハスルヲ云也。所々ニ多

シ。

せむ

先。手習ニ碁打所ニ。センサセタテマツル云

々。又―卷ニ。センセラレテトアリ。

せんかのあさな

蟬哥翁也。蟬丸事也。若菜上。

ぜんけうたいし

勾宮卷ニ。センゲウ太子ノ我身ニトヒケン
云々。見源中最秘抄。

せちぶ

宿木ニセチブトカ云事ト在。節分也。セチブ

ムト讀ベシ。

せし侍なむ

施也。若菜上ニ。明石入道クマヲ、カミニモ

セシ侍ナム云々。我身ヲ彼等ニ施シナント云

也。

ぜじやう

又ぜんじやうトモ。軟障也。障子代ニ用之。

唐綾ニテ張ル。纈纈ニテメグリヲス。又注

云。殿上ノ引モノ也。白絹ニ松ヲ繪ニカク。

高松ト號也。須广ニ巳日ノ祓ノ所ニ在。又藤

裏葉六條院所。玉鬘泊瀬詣ノ所等ニ多シ。

せうわの御いましめのふたつのほう

梅枝ニ。承和ノ御イマシメノ二ノ方トアリ。

承和ハ仁明天皇御事也。薰物ニ長ジ御ス。二

ノ方トハ。侍従ト黒方トモイヘリ。又ハ侍従

ノ内ニ四種合六種合ノニシナヲ。御イマシ

メノ二ノ方トモイヘリ。兩説也。イカデキハ

ツタヘタマイケントハ。此方ヲ男ニ傳ジノ

御イマシメアレバ。源氏イカデ聞ツタヘ給

ケントモ。八條式部卿ハ仁明第七皇子本康

親王^{母種子。名虎女。}御事也。サレバオヤコノ方ノア

ラソヒヲ。ヲヤケナキ御アラソヒ心ト云也。

せう

鷹ノ雄ヲ小ト云。雌ヲバ大ト云。注止字處ニ

見ユ。

寸

すぐし給

過也。桐壺ニ。女君ハ過シ給ト云々。葵上十

六。源氏君ハ十二歳。是ハ年ノ増也。又日月

ノ過行ヲモ云。

すがく

速々。清々。スガくシ。^{日本紀。}

すげなう

無人望也。

すがやか

速也。

ずいぶに

隨分也。箒木。ズイブント讀ベシ。

すり

修理職。桐壺ニ。サトノ殿ハモクスリト云々。

すさくし

數寄々々。

すべなく

爲僣無。無便。無爲。

すさび

愛スル義也。駒モスサメズカル人モナシ。山
タカミ人モスサメヌト云ガ如シ。花宴ニ。頭

中將ノスサメヌ四君ト云々。

兩殺
すさむ

又荒淫。

心別也。倦心也。俗ニ似可爲事。是ハ

愛スル義ニハアラズ。取蛇尾。^{スサヒ}手ズサミト

云ガ如シ。

すがて

難過也。

すぎやうざ

修行者。

すやつばら

シヤツバラ也。奴原也。筑紫大夫監詞。玉葛

卷。シヤハサハゲモノ。

すがゝさて

菅攪。和琴ニ在。私云。和琴ニ限レリ。余ノ絃

ニアルベカラズ。

すだく

多集。^{スダク}後拾遺ニ。河原院ニテ惠慶。スダキケ

ン昔ノ人モナキ宿ニト在。

すくくし

鈴虫ニ。カバカリスクくシウホレテ年フ

ル人。

ずして

誦也。箒木ニ。哥ズシガチニト在。私云。ズン

ジト可讀。

すくよかなる

又すくよかならぬ。同詞也。健。クノ字澄。

すきたはめらん

數寄撓。色メキ物メデシテ。心ツヨカラヌ

也。

ずさやう

誦經。

すくよう

宿曜。陰陽師也。桐壺。

すみの山

須彌山。若菜上。

すけたち

若菜下。私云。大將ノスケト云ハ中少將事也。近衛府。カミハ大將。スケニハ中少將。ゼウハ將監。サウクワンハ將曹ニアタル。官毎ニカミ。スケ。ゼウ。サウ官ハアルベシ。すまひのあるじ

相撲饗也。竹河。私云。賭弓還饗ナド云同心也。

すにをしよせて

簾押寄。椎下ニ。二間ノスニオシヨセテ。

すらて

總角ニ。松ノ葉ヲスキテツトムルト云々。食スルナリ。若紫ニモ在。

すいばん

水飯。ユヅケ。手習ニ。スイバン。通子蓋ハスノミヤウノモノト云々。

すなとる人

橋姫ニ。アヤシキスナトリ人ナド。年中ピタル山ガツドモ云々。但或本ニアヤシキ下ストアリ。

すみすぎて

若菜下。能事過ル事ナリ。

すゝい給はん

御幸ニ。源氏三條宮ニテ中將事ヲ申給ニ。イカバハサモトリ返シ。スゝイ給ハザラントハ覺ナガラト在。洗フ心歟。スゝグ。

此一冊則依有可相傳之子細。改舊本錯亂而難見。忘老昧之懃勞而呵凍筆。以新所寫出也。秘決口傳等悉以注之。云斯道之奧區。云製作之根源。尤以可尊重者哉。縱雖親戚畏友。輒不可許一見者也。身後相殘經眼路者。敢莫忘懇眞而已。傳授子細。別紙注之。

永享三年季冬日

釋竺源在印

惠 梵在印

行 年 在 判
七十一

以

いはほも山ものこるまじう

長阿含經說。

いぬ(きん鹿)

公也。上東門院ニイヌキト云者有ケリト見

ヘタリ。昔ウヘワラハラバ何キト云ヘリ。此

物語ニモ其類多シ。俊成卿說。キト付ルニ

ハ。犬公ノマヘナド、ハ云ハズ。世俗ニアネ

キ。ヲデキト云ハ同心也。

いづみ川

木津也。モトハイヅミ川ト云ヘリ。

いつく

寵也。

いたがき

板ヲ並テ。フチヲシテ打付タル墻也。

いさり

廻鳴。イサリ。日本紀。求食。同上。万。

いさら井の水

小サライ。日本紀。可爲小水歟。

いゑとうじ

主人女。遊仙窟。

いどみ

挑也。

波

ははうちすきて

齒透也。

八條式部卿宮

本康親王事也。

はゝさ木

ソノ原ニハ、キヅノ杜アリ。木滋クテ杜ノ

下ニテハアリトモ見ヘヌ也。又説ニハハキ
ニ似タル木アリ。近テミレバ失ル也。私
云。親行注也。可用初説也。

はれたるまみ

腫眉也。空蟬ニ。メスコシハレテトアルハ晴
也。末摘花ニ。ヒタイツキコヨナウハレタル
トイヘルハ腫也。愚案ニ。ヲトメノホカイヅ
レモ晴也。スエツムノ下ノ詞ニ。ナヲシモナ
カナルヲモヤウハトイヘリ。腫ニアラザル
歟。

はづしてむは

サテハヅテンハトアリ。トリハヅシテンハ
ト云也。

はなやかなる

聲花。

はなふらせたるたくみ

飛彈ノ巧花ヲフラセタル事アリト云ヘリ。

はらぎたなき

繼母ノ——。ハラグロキ也。

はむさいのおび

班犀帶也。

白虹日をつらぬけり

漢書文也。史記ニモアリ。太子ヲ源氏ニタト
ヘタル也。紫明云。虹蜺ハ内姪ニツカサドル
ト云ヘリ。愚案。凡ソ此文ハ燕太子丹荆軻ヲ
カタライテ。始皇帝ヲ殺サントシケルニ。其
象天ニアラハレテ。如此アリケレバ。事ノナ
ラズシテ害ニアハンコトヲ恐タル也。史記
ニハ白虹貫日不通侍シヤラン。然ラバ源氏
サル企ハナケレド。春宮ニ心ヨセテ。ミカド
ノタメ腹グロキ事アリヌベキ人ト思テイヘ
ル也。又内姪義モカナハルニヤ。虹ヲ姪亂ニ
タトヘタル事。毛詩ニモ見エタリ。此義ナラ
バ源氏内侍ノカミニ通フ事。人モヤウノ

知リタレバ。カヤウニイヘル歟。又奥ノ詞ニ
モ頭弁ノシツル事ヲ思フニ。煩ラハシクテ。
カンノ君ニモ久シクキコエ給ハズトアリ。
是モタハナベテノ世ニツキタル斟酌歟。又
カ、ルスヂニカギルベキ歟。レウケンニシ
タガウベキ也。

はまのたち
濱館也。

はえある

榮。ハエ。光同。無見。ハエナシ。
日本紀。

所ニシタガフ

ベシ。

仁

にうがく

入學也。

保

ほとく

殆。

あつま
ほとりばみたる

ほそびつめく物

絹櫛也。

ほうむの僧都

法務也。

法界三昧普賢大士

大唐西院和尚禮拜日。南無法界三昧普賢菩

薩トアリ。菩薩ト大士トハ同事歟。此外經文

ナドアルニヤ尋ヌベシ。

ほうし

ヲナジ。木法師也。キ文字ヲ下ニツケテ

讀ベシ。木男木女ナド云同事也。タトヘバコ

ハ、シクテ。ヤハラグ所ナキ也。或說。キ

文字ヲ上ニ付テ。同キ法師ト讀ベシト云々。

此義可然也。

へ

へ

御へ。奠也。愚案。定本ニハ此句ナシ。古今ナドニ御ヘトイヘルハ嘗義也。イヅレモ祭ル心ナレバ相違スマジキ也。

へむぐゑ

昔アリケン物——。三輪明神物語并江記

ニアリ。クヅレモヨル^(イ舞)／＼カヨイケル男ノ。

誰トモシラザリケレバ。衣ニ糸ヲツケテ行末ヲシリケルナリ。

べちなう

別納也。同所ナガラ各別ナル心ナリ。

止

とばかりながめて

時也。シバシバカリ也。

とにかくに

左右。トニカクニ。^{日本紀。}

とゞろかす

轟。トバロク。動同。

どち

共也。ワカキドテ。女ドテ。ワレドチナド云ヘル皆同。

とゞめし

人ノ心マゲタル事。——ハ停也。或説。不可留惡事於後代也。シカラバトバメジトヨムベシ。極樂寺入道所持本定家卿自筆ニ。トバメタルトアリ。此上ハスミテヨムベシ。愚案。ニゴリテヨムモ誠一義也。シカレドモ定本ニハ人ノ心マゲタル事ハアラジトアリ。定家説ニヲキテハ無異論歟。

とを君

芹川ノ大將ノ遠君也。紫明ニハヲホ君トアリ。ヲボツカナシ。

どよむ

響。

とうきやうき

カラノ——。唐ニモ東京西京アリ。東京ノ

錦勝タル歟。又云。是ハ日本ノ錦也。カラノ

トイヘル。ラボツカナシ。舒明御宇ニ模用トイヘリ。

とこよ

常世。日本紀。

としまかりいりて

ンヨリテト云也。

としみ

御——。試樂事也。

知

ちうげになりぬべき

中間也。

ちりがましげなる御丁

塵ノツモリタルト云心也。

ちやうこぼちける女

カツラノ中納言ト云物語ニ。キ丁ノ幃ヲキ

ヌニ縫テキタル女也。ソノ事ヲイヘル也。一

本ニタウト書タルアリ。ソレハ顔叔子ト云

者ノ事也。塔ト書タル本アレドモ。堂ニテア

ルベキ也。愚案。定本ニ塔トカキタル。誠塔

ハ人ノ居所ニアラズ。堂字ヲモチュベシ。定

本奥書ニ載タル分ナヲ不審也。毛詩説已下

イサ、カ替リタルカ。

丁子（みぎ）そそ

カウノクロキ色也。丁子ソ、キナドイヘル

モ同色ナルベキニヤ。

留

るり君

瑠璃君。玉カヅラノ童名也。

遠

をいこれはまして

えいと云也。五音カヨヘリ。

をほよそ

大都也。又凡也。

をいすがひぬれ

オヒイヅル心也。愚案。ヲイツバキタル心

歟。定本ニハヲイスギヌレトアリ。過タル心

ナラバアマリコトニヤ。

をとめ
をろす

トガメイデツ、――。クダスト云心也。ト

ガメ出ツ、トハ。ナニ事ヲモハハカル所ナ

クトガメタル也。又ヲホナ、トリタマヘ

ルヲ。カシコマリタルケシキトモイフベキ

歟。

をぼゝれゐたり

溺也。ヲホドレタルトアル所モ同事也。愚本

此注尙不審。

をほうち山

仁和寺邊ニアリ。俊成卿哥ニ。カメ山ヤヲホ

ウチ山トイヘリ。

をほぢ

大路。万。御路。

日本紀。

をほやしま

日本國也。

をほきみ四位

正四位也。愚案。正四位ヲバヲホキ四位トコ

ソイヘ。ヲホキミトノ王也。此詞ノカミニ

モ。ナマソン王メクトアリ。紫明水原イヅレ

モ正四位也トテ。王ノ義ナシ。ヲボツカナク

コソ。又ヲホキミ女トイヘルモ王母也。

をたぎ

愛宕。山城國ニアリ。

をうなになるまで

嫗也。

をくまり

奥也。ヲウフカキト

云心也。イ

をこめいたる

嗚呼也。

をやそひてくだり給れるはことになかりけれど

圓融院御時。村上皇女親子内親王。齋宮ニテ下給ケル時。母ノ齋宮女御トモナイクダリテ。又モコエケリ鈴鹿山トヨメル。例ナシトイヘル。ヲボツカナシ。毎ニト云説モ有歟。をこり

カハル事ノヲコリ。驕也。又起ト云説アリ。シカラバヲコリト可讀。愚案。下説宜歟。

をさめ殿

納殿。

をしとの給へる

進食。

日本紀。

をさなか河

奥中川。又息長川。〔古蹟〕右抄物ニモ國慥ナラズ。名所ト見ヘタリ。是ニツキテ料揀スルニ。イ

カナル日デリニモ。枝川ハヒル事ナレバ。身川トテ本躰ノ川ノツキ中ハタエル事ナシ。此哥心モ是ニ叶ヘリ。定家隆哥ナドモ此詞心也。然バ長ノ訓不可用歟。

をぎの枝つとにして

萩也。を文字ヲ上ニ付テ。本ノ枝トヨム物アリ。不可用之。播広房西園ガ物語別ニアリ。をしつゝみ給へる

文ヲタテフミタル心也。愚案。水原ニ是モ宸筆ニテムスビタル文ヲ裏ムトカ、セ給ヘリ。

浮舟をすかるべき

ヲソキ心也。又云。追付ク心也。紫明ニハライスガルベキトカキテ。追ツク心ナリト註セリ。愚案。此註心エガタシ。定本ニハタスカルベキトアリ。

をほえどの

大江殿也。ワタノベノ橋ノ東ノキシニ。ムカ
シ驛樓アリケリ。今モ樓ノキシトイフ。ヲホ
イドノ。ヲホキドノナド書タル本不可用之。
ねさめみかはやうなどまで

ヲサウル女。ミカハタトテ。大ナル桶ニ物ヲ
入テ。イタバキテアリクヒサイメ也。又長
部。メ。ナサ長女。同。曹御河。ミカハ。ヒ故人ノ説ナ
リ。又云。イヅレモ大臣家ノ執權ノ人也云々。
愚案。シリヲヨビ給マジキトイヘリ。執權ニ
ハアルベカラズ。又御カハ。定本ニハミカハ
ヤウトマデトアリ。御廁人トイヘルニヤ。記
録ナドニモ長女御廁人トゾカキテ侍ルメ
ル。

和

わりなく

無別。アリナク。日本紀。無破。同。

わた花

綿ニテ花ヲ作テ。踏哥人冠ノヒタイニサス
事アリ。

わうけづき

王氣付也。

加

かどくしう

才也。日本紀。才學。同。又云。廉也。

かたむ

奸。カタマシキ也。

かほに見えつゝ

古哥ナドノ心ニハアラズ。タゞ今見ル山ブ
キノ花ノカホニ見エツゝトイヘル歟。愚案。

猶心ユカズヤ。万葉八卷。高圓ノ野ベノカホ

花ヲモカゲニ見エツゝイモハ忘カネツモ。

此哥ハ家持ガ坂上大嬢ニツカハス哥也。是

ハ叶テコソ侍ラメ。本哥ノ心ナドニテモナ

クテ。タゞ山吹ノカホニ見エツゝトイハム

事イカバ。此哥ハ秋ノ花ヲイヘル哥。春日ヲ
山吹ニ引カヘテイヘル心。一キハヲモシロ
クコソ聞エ侍レ。カホ花トハ容花トカケリ。
カホ鳥ノ註ニクハシクミエタリ。

かよれる

タヲレル也。或説。此人々ノ聲ノカヨヒタル
トモ云ベキ歟。愚案。イヅレモ不叶。猶可尋。
かたのゝ少將

英明少將カタノニ一宿ノ事アリ。

かたさいはほをもあは雪になし給へき

物ノタトヘ也。或説ニ經文也云々。可尋之。愚

案。日本紀第一云。踏堅庭踏肥。踏堅(奉紀)若沫雪蹙散。

是ハ素戔嗚尊ノ天ニノボリシ時。天照大神

怖畏ヲナシ給テ。威ヲフルイタマヘル御姿

トイヘル也。女神ノ御事ナレバコノタト

ヘニヒケル也。經文歟ナドイヘル。ヲボツカ

ナシ。

かれず

不離也。愚案。不斷心也。

からうす

碓也。

からさきのはらへ

近來此儀内野ニテ陰陽師勤之。

かむやがみ

紙屋也。

から人の袖ふること

ウラ人ト云説一義ナレド。下詞ニモ人ノミ

カドマデトイヘリ。猶カラ人ニテ侍ベキ歟。

愚案。即天ノ事歟ナドイヘドモ。タバ此舞ヲ

マヒケル唐人ト心得ウベキ歟。猶クハシク

ハ人ノ御門ノ註ニアリ。

かむすいらく

河水樂ト書タル本アレド。此所ニテ酒宴ナ

ドアレバ。カタ／＼タヨリアルニヤ。勸盃ハ

後ノ事也。水ニノヅミタル廊ナドカヘルモ
ヨセアリテキコユ。愚案。定本ニモ酣醉樂ト
カキタレド。紫明義可然ウヘ。一越調ノ心ト
櫻人アソビ給フトアリ。旁河水樂ニテ侍ベ
キ歟。

かむたちめ

上達部。公卿也。

かうこむじ

高巾子也。

かいなで

カヤウノ——。ヲモナヘタルヲ云也。又平

均ノ儀也。此註尙不叶。カキナデトモ同事

歟。

神などの空にめて給べき

延喜御子。時平公女。雅明親王。大井河行幸
ノ時。七歳ニテ舞ヲ面白ク舞タリケレバ。神
ノメデハウセタル事アリ。

かみの色にこそとのへ侍けれ
紙ト同色ナル花ニツクベキカト見ヘタリ。
其證據所々ニアリ。

賀茂のいつきにそむ王の給れば

文徳孫女。惟彥親王女。眞子内親王。仁和五
年卜定。其外例可尋之。

風のをとも秋に成ぬと聞えつるふえのね

秋キヌト目ニハサヤカニトイヘル哥ノ心ナ
リ。愚案。是ハ秋風樂ヲ吹ケルトキコエタ
リ。次ノ詞ニモ。盤渉調ニイトヲモシロクフ
キタテタリトイヘリ。カタ／＼子細ナシ。タ
バイツモ出ルフルコトナリトバカリコハロ
エンハ。無念ニヤ侍ベキ。

與

よろしき

ホメタル詞ニモ。又ホメヌ詞ニモ通ツカヘ
リ。様ニヨルベシ。

よるべ

縁。ヨルベ。
日本紀。

よるべの水

社邊水。俊成女説。

よゝ

シヅクモ——。能々也。愚案。此註太不審。

よもぎのまろね

アサクラヤ木ノ丸殿ニワガヲレバト云哥ノ
心歟。シカレドモ此哥カケアハズヤ侍ラム。

愚案。此哥マコトニキノマロドノトコソア

レバ。不叶ノ様ナレド。イヤシキ家ヲ蓬屋ナ

ド云メレバ。カク云ナセル歟。又此詞ノカミ

ニモ。イカニトモキ、シラヌナノリヲシツ

ハ。ウチムレテユクナドゾキコユルトアリ。

是ニマサル證哥ナンドイデキザラム程ハ。

此哥ニテコソアラメ。

よひゐの程

宵居也。

太

たゝはしきかむたから

器重也。糺。タ、シキ。愚案。定本ニハイツク

シキトアリ。

たどられし

尋也。

たゝして

目サヘコヒ——。爛也。

たうのはい

答拜也。

たさのよどみ

シラガノ事ヲイヘル歟。古今ノ哥ニ見ヘタ

リ。

禮

れう門

大學寮門也。

曾

そは心なり

ソレハコ、ロ也ト云也。

そらよりいできたるやうなる事

天運事歟。

そじろ

無端。和名スバロト云モ同詞也。ソバロハ

シ。ソバロサムクナド云モ同心歟。愚案。所

ニヨリテカハリタル所アル歟。一向同心ト

難定。

そのかたのふみ

愚案。夢ノ事ヲ云タレバ。ソノ方トハ夢フミ

ナドヤウノ物歟。定本ニハソ文字ニアリ。シ

カラバーヲバ上ニツケテ。ソノ方トヨムベ

キ歟。又ソクトアルベキヲカキアヤマレル

歟。下ノ詞ニモ内教ノ方トカキタレバ。俗典

トイヘルトモ心エヌベキニヤ。

津

ついせう

追從也。

つらつえ

支願。ツラツエ。文集。

つくりえ

ナニ、テモカ、ムト思フ物ヲ。シルシバカ

リ書テ。エノグニテ書様アリ。是ヲツクリエ

トモ。ウハエトモイフナリ。

つき物

ヲホム——。御器也。

つしやき

實法心也。

奈

なにがしがためし

昔ノ——。紫明云。昔男ノ命ニカハリテ。

母ヲ扶ケタル物ノ事歟。愚案。此事難信。尙

可尋之。

ないしのすけ

典侍ト書テ。内侍ノスケトヨム。尙侍ハナイ
シノカミ也。

なをしなどさまかはれる色ゆるされて

六位ニテ禁色雜袍ヲユリタル歟。

なかのほそを

愚案。水原ニモ。(カ脱歟)ナノヲ、巾ニ用ニヨリテ。

中ノホソ緒(下歟)ヲ云トアリ。紫明ニモ。平調ニハ

柱ヲサゲタル也云々。シカレド猶ソノイハレ

慥ナラヌニヤ。只今ノ調子ハ狛一越調也。是

ヲ柱ヲバウルハシキ一越調ノヤウニタテ。

ハチノヲ、ハ平調ノ位ニ立テ。コマ一越調

ノ樂ヲヒク事アリ。カクテヒク時ノ巾ノヲ。

平調ニヲシクダシテヒク時ノ十ノヲニアタ

ル也。十ノヲ又中ノヲナレバカクイヘル也。

是ハ一ヨリ七マデハフトヲ。八九十中ヲト

ス。巾ハホソヲト云説ニヨレリ。今ノ世ノ妙

音院ノ流ニハ。一ヨリ四スヂヅ、フトヲ中

ヲホソヲト分テ。巾ノヲ、ハ猶ホソクスル

也。カヤウニテハ又義モカハリヌベケレド。

大方中ニホソキヲト云説モアルベシ。タト

ヘバイヅレノヤウニツキテモ。巾ノヲノ事

ト心フベシ。

なかの(セ脱歟)

シヤウノコトノ事ハカミニ見ヘタリ。和琴

ノヲトハ二絃也。

なづさひ

昵近也。

なよ竹を見給かし

ナヨ竹ノ夜フカキ上ニハツ霜トイヘル哥

也。愚案。此哥カナヘリトモ見ヘズ。

なまめく

媚。ナマメク。ヤサシキ也。紅葉賀ニ。コ、シ

ウナマメイタルトアルハ。生ノ義アラント云心也。愚案。是モ艶ニヤサシキサマトコン覺侍歟。

なでしこのわか葉の色したる

ヨモギノウスキ也。

なごみつゝ

和也。慰也。

なめし

無禮。ナメシ。菅家萬葉。輕。同。日本紀。

良

らうあり

勞也。若菜下ニ。フカキ御ラウノ程トイヘル

モ此心也。

らうがはしく

亂也。狼藉也。

らうけにはかにをこりて

母ノ尼——。老氣之。紫明同之。

無

むかひばら

當服也。

むらい

無禮也。

むらさきの色。吉凶に通ずる歟。

此事所々ニ見ヘタリ。愚案。尙不審。可勘。

無言太子

釋尊因位也。其外説々注文在別。

むざんの法師

無懺。

宇

うへつぼね

對屋ナラデ殿舎ヲ一ツトタルヲ云也。勘之。萬院御勘之。

中宮マウノボラセ給ヲリハ。清涼殿ノ二間

ヲウヘノ御局ニシツラウ也。ヒノ御座ノカ

タノ二間也。

うたかた人

未必人。

ウタカタ。日本紀。

定ナキ人ナリ。又ハスコシ

ト云心也。万葉ニモ此心アルニヤ。

うたゑ

哥繪也。

うなづく

顔許。又領許トモ。

うりう院

紫明云。定本ニハ雲林院トカケリ。此院淳和

ノ離宮也。後ニ常康親王ニツタハリテ佛閣

ニナレリ。愚案。定本古今ニハうり院トモカ

ケリ。如此かなともかくも有べきにや。

右近君

將監ニアタル下藤名也。

うめき給

詠也。

うす物

羅也。

うしろめたし

影誰。

譯イ

久

くろ木の鳥井

クロモムザト云木ニテ作ル也。

くだしける

ヲボシ——。思下也。

(九脱弊)

くしのたふ

孔子ノタウレナル。盜跖詞也。

くせ

癖也。

くむじけん

イカデカクヒキ——。薰也。物ノ功ノ入タ

ル心也。法師ナド薰修ヨツムナド云同事也。

愚案。定本ニハヒキグシケントアリ。イヅレ

ヲモイカデカクヒキト、ノヘケント云也。

具トカクベキ歟。此外群歟訓歟ナド註タレ
ドモ不可用之。

也

やかのたつみ

家異

ヤカダ
ツミ。

やうめいたる舟

龍頭鵠首船也。定本ニハカラメイタルトア
リ。

やまとさう

和國相也。

やまびこ

山彦。コダマナド云同事也。

やまぶし

山臥。又常ノ山伏ニハアラデ。大方世ヲノガ
レテ。野山ヲ家トスルモノヲモ云也。

末

まかなひ

賄賂。愚案。此註所ニヨルベシ。

まきばしら

枝柱。日本
紀。又眞木柱。

まつのした葉の紅葉

或説。下葉ニアラズ。下思紅葉云々。愚案。定
本ニ松ノ下葉トアリ。義ニ及バズ。大方松ノ
下紅葉ニツキテ義ドモアレドモ。下紅葉ス
ルヲバシラデ松ノハノ上ノミドリヲ憑ケル
哉。ト云哥ニテキコヘタリ。松ノフルキガ色
カハルヲイヘルナルベシ。

まくらごと

枕言也。如枕草子事也。ツネニ見ル心也。一
説ニアケクレノコトクサ也。

計

けいし給へ

啓也。

けむせう

現證也。ケソウトカキタル所モアリ。同事也。

家禮といふこと

文籍ニモ——。漢高祖朝太公。以家禮敬

之。愚案。此事尙不叶。可尋之。

けゝしう

賢々也。

けさやか

寒。ム。サヤ清。同。明。伶亮。同。

けしのか

芥子香也。護广ニケシヲタク事也。

けもんれう

唐ノ——。花文綾也。又云。唐顯文紗也。

不

不動のものちかひありその日數をだにのべ

給へ

正報盡者。能延六月佳ト云經文也。

藤はこなたのつまに

或説云。藤ヲバ東ニウフベシト云也。

ふかう

我身ノ——。不幸也。

ふてうなる女

不調也。

ふさはしからず

不祥。日本紀。

ぶくいとくろうて

俊成卿ト光行ト談合シテ。句ヲ切。聲ヲサシ

ケルニ。スミテサシタリケリ。ソノイハレ

ハ。初參ノ人着服シカルベカラヌガ。フクラ

カニコエタル人也。フクトバカリ云テ。ラ文

字ナキ事。和語ノ習也。シカルニ俊成女説ニ

ハ服也云々。相違ヲボツカナシ。阿佛房モ服

ト云ケリト云々。愚案。フクラノ義尤不審也。

此女官ノタメニ初參スルニアラズ。彼夕顔

ノ形見トテ召ヨセケルト見ヘタリ。黒服ナ
ニノ憚カアラム。其人ノ心ヲ思ニ。イク程ノ
日數ヲスグサズ。服ヲ脱ステ、宮仕ニ出タ
ツベキモノナラヌニヤ。其上カタワナラヌ
ワカウド也トイヘリ。色ノイト黒カラムコ
トイカバ覺侍也。イト、イヘルニテモ料揀
アルベクヤ。

ふでのしりとするはかせどなるべき

侍從ツクシヘ下ナバ。タレカハ哥ヲモ訶ヲ
モ教フベキゾト也。愚案。侍從ガ筑紫ヘクダ
ル事ハ蓬生ニ見ヘタリ。只今源氏ハイカデ
カ思ヤルベキ。イカニイヘルニカ。又筆ノシ
リトルトハ。ヲサナキ物ニ物ヲカ、スルト
テ。手ヲトラヘテ書スル事ヲイヘルナルベ
シ。

ふびやう

風病也。愚案。服病トモイフベキ歟。

巨

ころの御てなさやうなれば

イマダ盛ニハアラヌ也。或説ミヅカラ也云
々。愚案。或本ニ孤露ト付タリ。ゲニト覺ヘ
侍リ。

こだま

木神。コダマ。空谷響。

ごうに

ヲモキ——。切々ツム心也。

こむぢのふくろ

琴琵琶ノ袋コムデヲ可用。

ごうつきにけり

業盡也。

このみの心

好心也。愚案。定本ニハコノミ心モミマホシ
ウトアリ。此御心トモ可讀歟。サレド此所ニ
テハ好色心ナヲ叶ヘル歟。

こまのくるみ色のかみ

高麗ノスハウノ色ナル紙也。面ハ白ナリ。

こまけは

アテ／＼ノ——ハ細分也。

こゝろばへ

意見。日本紀。

こゝろばせ

心操也。

五十寺御ず經

或説。五十寺ト云寺アリ。其寺ニテヲコナイタル也。此儀不可用之。五十ヶ所ノ寺也。

こせのあふみ

巨勢ハ姓也。

江

えたらまじく

エダウマシク
巨耐。遊仙窟。

るびぞめ

紫ノクロキ色也。エビカヅラノ色也。

天

てうはい

朝拜也。

てうじいて給

調出也。

てうたぬ心ちし侍

心モトナキ心也。人ヲ呼トテ手ヲ打バ。心元ナカルマジキ心也。愚案。此註難信之歟。料揀モ及ガタキヤウナレド。手ウツハホコリヨロコブスガタ也。抃悦ト消息ナドニカキ侍ルモ。此心ナルベシ。抃舞トツカウモヨロコビマウ心也。抃ヲテウツトヨム也。又眞言師行法ニ拍掌トテ手ヲ打モ。歡喜ノ心トゾ申侍メル。

御てのささばかりひさたすけさこえん
始テアヒタル男。三途川ヲヒキコスト云事

アリ。本文尋ヌベシ。

安

あいぎやうづき

愛敬付。愛形トモ。

あはたゞしき

周章也。

あをばの山

青葉山。陸奥ニアリ。又云。尾張ニアリ。又

云。只青葉ナル山ヲモ云ヘリ。夢ノウキハシ

ニモミヘタリ。

あをすりのかみ

青文アル唐紙。五節ノ比便アル歟。

あなかま

穴喧。

あづまをすがゞきて

和琴。大夫狀云。アヅマト申名ハ和琴ヲバタ

ゞモ申候ムヘドモ。東調トテ道ノ秘事ニテ

候。常陸ニハ田ヲコソ作ント。御風俗ノ秘事

第一ニテ候。アヅマノシラベニテ。スガ、キ

ゾ。是ヲウタウ事イマハシリタル人モスク

ナク候ラン。ソレヲ知ラム人ハ心得ヨトテ。

カキヲキ候ヤラムト思候ヘバ涙難止候。

〔前注〕或本云。上總國ヨリタテマツル也。弓ヲ六

張ナラベテ。引ハジメケル也。

あこ

吾子。

あこへ侍べし

過分ノ義也。

あづまあそび

和琴也。愚案。此註難用歟。可爲東遊也。

あざなつくる事

藤寮。源榮ナド云名也。

あふみ

コセノ——。巨勢相覽也。金岡同人也。但

高名録ニハ金岳以前ト見ヘタリ。紫明ニハ相見トアリ。

あざむかれ

欺。又詐。愚案。此詞二義アルベキ由。八雲抄ニハノセラレタリ。一ニバヘウスル心也。タレカハ秋ノクル方ニアザムキ出テトイヘルハ此義也。一ニハアイスル心也。ナニカハ露ヲ玉トアザムクトイヘルハ此心ナリト云々。大方此詞本書ナドニモヲホクハ人ヲイツワリイダシヌクヤウナル心ニイヘリ。タトヘバ有コトヲナシト云。無事ヲ有トモ云テ。人ヲハカル心也。アイスル心ハキタクミ侍ラネドモ。八雲ニノセラレタレバ。所ニシタガヒテ料揀スベキ歟。

あせすば

ヒズバト云心也。

左

さいつごろ

近曾也。一日比ナド云ヨリハ遠キ心歟。

さがなく

不良也。

さをさまでしろく

色ハ雪ハツカシク——。小青也。

さのごときひしやう

シカノゴトキ也。

さくひやうし

笏拍子也。

さくらのみへがさね

清少納言枕双紙云。ナマメカシキミヘガサネノ扇。イツヘニナリヌレバ。餘ニアツクテ。モトナドノニクゲナルトイヘリ。私云。ヒ扇ノ兩方三枚ヅ。春ハ櫻ノウスヤウナドニテツミテ。色々ノ糸ニテトヂテ。末ヲナガクアハビムスビニシタル物也。可然女

房用之。愚案。定本ニハサクラガサネトアリ。

さしぐしのはこ

搔頭。

さじさ

棧敷。

幾

さ

イヌキ。

さ

コモンノキ。小文縹也。カラノキ。

さ

競也。

さたの院

二條院。カホルノ居所ヨリ北ニアタル。

さたのまん所の別當

紫上ノ結構ニヨリテイヘリ。

さた山

鞍馬寺ヲ云也。

さつねならん

イヅレカ——。欽明天皇御時。美濃國ニア

リケル者ノ事也。水鏡ニ見エタリ。愚案。キ

ツネ人ヲハカリテ妻ニシタル事。扶桑記ニ

見ヘタリ。

さなるすじのひとへ

ヲミナヘシノヒトヘ也。

由

ゆへつけん

故付也。ユヘシナドモ同事也。

ゆるべるを

緩絃也。

ゆくりなく

不意也。日本紀。ユクエナキカ。又云。フト、リ

アヘヌ心也。大和物語ニモ見エタリ。又云。

ユクリカニト云モ同心也。愚案。ユクリカニト云ト。ユクリナクト云ハ。心相違スベシ。ユクエノナキ云尺不叶。下説不可用之。思ひやりなくん。いざよふ詞につゞきたり。イ

ゆくかたもかへらむ里もわすれぬべう

劉晟。阮肇。天台山ニ入テ路ヲウシナヘル事也。愚案。此事サモコソトキコユ。仙女樂ヲト、ノヘ。天氣ツネニ二三月ノゴトシトアレバ。ナズラヘテモ云ツベシ。人ノ名劉晨カ、トゾ覺侍ル。晟字誤歟。

ゆげた

伊豫國溫泉アリ。其湯ニ桁ヲワタシタル也。タトヘバシゲクヲホカルベキ事也。或説。五百三十九云々。十月ゴトニ神事アリ。神人ウタフ事アリ。哥云。イヨノユゲタハイクツエゾシラヌ。左コ、ノツ。右ハヤツ。中ハ十六。ヤレカトウトク。ハリカエシ謠テ。酒宴以下

サマ／＼ノ事アリ云々。

ゆゝしき

忌也。イマ／＼シキト云同事也。

女

めい王の御代四代

宇多ヨリ四代。貞信公ニナズラヘタル歟。忠

仁公ナラバ淳和ヨリナルベシ。

めづらか

梅豆羅。日本紀。長今東西水。珍同。

めくはす

瞬。

美

みを

水尾。万。水漾。日本紀。

みるこ

見子。童名也。愚案。定本ニハ此事不見。可見

合他本。

三日にあたる夜のもちゐなむまいる

中君ト大將ト會合ニヨリテ此事アリ。愚案。此事不心得。宮ノ事也。物語ノ面ニモ分明ニ見ヘタリ。大方大將事アイテコソアレナド云人アル歟。シカレドモ此卷ニモ。ツレナキ人ノ御心。イマヒトタビ見ハテムノ心ニ思ノドメツ。ノチセヲ契リテ出給トアリ。サワラビニハ。マホナラネトモイヒ。宿リ木ニ。腰ノシルシノ心グルシサニトモ。又イタヅラニ分キツル道トモ云タレバ。ウタガウベキ所ナクヤ。

みかさの山のをとめ

求子哥。春日社ニテハカクウタフ。賀茂八幡ニテハ又詞カハル也。

みたけさうじ

金峯山精進也。愚案。御嶽トカケルトモ。タケトハヨマズ。御タケトヨムベシ。

みそぎの日

賀茂祭ノ日ヲ云。又云。御禊ノ日ヲ云。

みあかしぶみ

願書也。

三にしたがふ

三從ト云事也。女イトキナキ時ハ親。サカリニテハ夫。老テハ子ニシタガフ也。禮記文也。愚案。定本ニハ三從ニシタガウトアリ。重説ナルヤウニ覺ツルニ。三ニシタガウトアルコソ心ニアヒ侍レ。桐壺ニモ三ツノタライトアルハ。是ニ二ノ位トアリ。是モ此クガイナルベシ。

みくしあげのてうど

可然女房。クシノ箱ヲ始テ。サマノ具足ヲヒロフタニイル。是ヲ云也。又ハカンザシノテウド、モ云也。

御やす所

始ハ更衣。後ニハ御息所ト見ヘタリ。昇進儀歟。勘云。是ハ昇進ノ儀ニアラズ。惣ジテ女御更衣ヲ御息所ト云。女御トダニイハセヌトアレバ。シナノアガリタルニハアラジ。

御子はかくてさふらはせ給れゐなき事

親範説。人王七歳マデ無服殤也。退出何故哉。但大神事時。不似例人。故退出歟。愚案。神事ニヨリテイデタル由ハ見ヘザル歟。追可勘之。

志

しはぶきやみ

嗽病。

しかな

コトハリ也。キコヘタガヘタルモ——。モ

ト讀切テヨムベシ。シカナハサナト云也。

しふねき物のけ

強也。
カウ

しみふかく

采深。日本紀。

ひ

ひはつに

甍也。アツシキ也。

ひとたまひ

人給。ヒトタマヒ。出車也。行成説。枕草子ニモア

リ。

ひかる源氏

敦慶親王。亭子院第四子。二品式部卿。玉光宮ト號ス。好色無双人也。是ニナズラヘタル

也。

ひあけ
はつね

タキ物ノ火トリ也。愚案。タバ普通ノ火桶トテ。火ヲコス物ニテヤ侍ラム。火トリヲバイヅクニテモ火トリトコソ申タメレ。椎ガ本ニモ。墨ゾメナラス御火ヲケトリイデ、。チ

リウチハライナドスルニモトアリ。猶レウ
ケンスベシ。

未央柳

此句俊成ガ見セケチニセリ。ムカシ親行ガ
父光行ノ使トシテ尋侍シハ。楊妃ヲバ芙蓉
ト柳トニタトヘ。更衣ヲバ女郎花ト撫子ニ
タトフ。皆二句ヅ、ニテヨク侍ヲケタレタ
ルハ。イカナルシサイノアルニカ。俊成答
云。イカデカ我ハ自由ノ事シ侍ルベキ。行成
自筆ノ本ニ見セケチニシ侍キ。紫式部同時
人ナレバ。申合スルヤウ侍ツラン。我モワカ
ナノ卷ニテ意得タル事アリキト云々。縦バ女
三宮ヲ柳ニタトヘタリ。此タトヘアマタニ
ナルニヨリテケチテ侍歟。後ニ心得侍ヌ。シ
カルニ定家本ニ此句ヲケタズ。俊成卿女ニ
尋侍レバ。書寫ノ誤也。餘ニ對句メカシク
テ。ニクゲシタル方モアリト云々。是ニヨリ

テ愚本不用之。愚案。定家マサシキ自筆ニ
テ。太掖芙蓉未央柳モゲニカヨヒタリシカ
タチヲ。カラメイタリケムヨソヒハ。ウルハ
シウコソアリケメ。ナツカシウラウタゲナ
リシヲオボシ出ルニ。花鳥ノ色ニモ音ニモ。
ヨソフベキ方ゾナキトアリ。書寫ノ誤ト云
ベキニ非ズ。其上イクタビニテモ譬ン事。何
ノ妨カアラム。又是ニツキテ一ノ不審アリ。
此タトヘハ楊貴妃事。長恨哥ノ文也。此物語
ニアマタアリトイフベカラズ。然ニ 定
本ニゲニカヨヒタリシ形ヲト。更衣ノ事ノ
ヤウニイヘリ。ヲクノ詞ニモヨソフベキ方
ゾナキトコソ見ヘタレ。イカニ意得分ベキ。
又ナデシコ女郎花ノ句定本ニ見エズ。此句
アラン本ニトリテハ。イヨ／＼更衣ノタト
ヘニアラザルベシ。然ラバケツマデハアマ
リノ事ニヤ。

ひやくぶのほか

百歩ノ外也。百歩ハ六十丈也。百ぶのゑかう
とイヘルハ百歩衣香也。愚案。此註不審。

ひあやうし

誰何火行。史記。

毛

こうはい
もとく

本苦。愚案。定本ニモトツカトアリ。本香也。
水原ニ無此句。紫明若書誤歟。可見他本。浮
舟ニモトフ人トイヘルモ本人也。モトヨリ
ノ人也。右哥モトツ葉トヨメルハ本ノ葉ナ
リ。

物忌

神名也。此名ヲ書テ身ニ付ヌレバ。鬼神侵サ
ズト云ヘリ。又六日ノ御物忌トイヘルハ。ナ
カ神ノ御物イミノ御方違也。

もむ人

文人也。

世

成王のなにとの給はむとすらむ

文王子。武王弟。成王叔父。我於天下不賤。魯
世家文也。周公ノミヅカライヘル詞也。愚
案。誠ニ子細ナシ。然ヲ成王ノナニトカノ給
ハントイヘルハ。冷泉院ハヲトウト、モコ
トモ云ガタケレバ。何トカノタマハントス
ラムト。不審シタルヤウニイヘルカ。シカラ
バヲボツカナカラント云ベキニ。心モトナ
キトイヘル。心得ガタシト云不審アリキ。誠
ニヲボツカナキヤウナレド。是ハ其事ニテ
ハ侍ラズヤ。周公旦ハ成王位ニツキテ三王
ノ子ノ弟叔父トナノリタリ。冷泉院イマダ
位ニツキ給ハネバ。ナニトカノ給ハント。心
モトナク思ハムト疑アルマジクヤ。

せり河の大將

古物語也。

せな

夫也。背男。万。兄。日本紀。

せん王

カノ——。先王也。延喜御事ヲ申也。愚案。

定本ニハセン大王トアリ。心得ガタカリツルニ。此説可然侍ケリ。タイ王トハ帝王ト書タルヲ。大王ゾト心得テ書誤タル歟。又此註ニビハヲ延喜ヨリ傳テ三代トアリ。是ハシヤウノコト也。イカニイヘルニカ。又定本ニハ四代ニ成侍トアリ。

せんかうのかげばむ

淺香也。

せうと

男ヲバ兄ヲモセウト、云。女ヲバアネヲモ

イモウト、云。

せまりたる大がくのしう

大學衆也。セマリタルトハ才學ノウスキ歟。

愚案。此儀心得ガタシ。タゞ儒者ノ道セバキヤウニ。ツネノ人ノ心ニヲボユベカメル事ヲ云也。

寸

ずいしんかうこそ

是ハ常ノ隨身ニ非ズ。隨逐儀也。

すほう

修法也。

すかせたてまつり

ノマスル也。

ずむながる

巡流也。サカツキノジュンノクダル心ナリ。

ずさ

タイフガ——。從者也。

すぎ／＼をとなび給

ツギ／＼ト云也。

すざく院

朱雀院也。三條朱雀四町々也。號後院。延喜

六年十月。或說十一月。此院ニ行幸有テ御賀行ル。

又同十六年三月行幸御賀アリ。重明親王。延喜

御子。左大臣子。舞之。此度ノ事はニナズラヘタル歟。愚案。南北四町ナドコソ舊記ニモ見ヘ

侍レ。四丁町ナドイヘルヲボツカナシ。

すゞりにはからつげざなり

菅御記。硯面不書物云々。

すさび

荒也。

右目安抄出類字仁所無之詞書求之。爲首尾一卷處也。

文明十一年霜月廿九日書之。

法眼紹永

以傳々寫本書之間。不審等繁多。追加校合可直也。

明應庚申仲商上澣終書功。

〔右源語類字抄以賜蘆拾葉校合〕

續群書類從卷第五百十八

物語部十八

源氏和秘抄

一きりつぽ

いづれの御時にか 色々の説あれども。梧き壺つぼの御ときをば延喜の御門になぞらへ。朱雀院をばやがてしゆざく院になぞらへ。冷泉院をばむらかみの御門になぞらへたる也。ひかる源氏をば西の宮の左大臣たかありき。延喜の御帝の御子にて。とにみめよかりき。紫式部たぐむなきためしに申侍る人也。

女御

きさきよりはつぎの人なり。

更衣

御やす所と同じ事也。又女御よりは

つぎの人なり。かういとは衣をかふるとかけり。そのゆへは御門のきさきの御かたへわたらせ給ふ時。まづこのかうゐの御つぽねへなりて。わろき御服をぬぎ捨て。より御ふくをめすなり。又あしたかへらせ給ふ時にも。この御局にてよさをぬぎすてい。わろきをめして御かへりある也。此御局にてやすませ給ふ程に。御やす所とはいふなり。やんどなき しなたかき人をいふえ。

ときめき給ふ 時にあふ也。めくはとば也。
めざましき めのすさまじきなり。めもあ
はせられぬ心之。

いとあつしう やまひのとなり。
かんたちめ くぎやうの事なり。

うへ人 殿上人なり。

もろこしにもかゝるとのおこり 唐の玄宗

楊貴妃の事之。

あぢきなう せんかたなきころ也。

はしたなき事 こはくしき事なり。

きよらなる きよくうつくしき事之。

上ずめかしけれど したりがほなるをいふ

なり。

まふのぼらせ給ふ まいりのぼる之。

ばうにもようせずば ばうとはすなはちと

う宮の事をいふ之。

ようせずばとは あしうせばといふ心之。

さずをもとめ給ふ けをふきさずをもとむ
るといふ事なり。人のとがを見あらはす事
之。

おほんざうし ざうしとはつぼねをいふ
之。

きりつぽ きりつぽとはしげいしやといひ

て。大りにあり。きりをうへらるゝゆへにき

りつぽとはいふ。源氏母御やす所のすみた

まへる所なり。

うちはしわた殿こゝかしこの道にあやしきわ

ざをしつゝ 天りやく帝の御時。せんよう

でんの女御とあんし安子の中宮と御物ねたみに

て。御かたぐの女房ども。たがひにまसान

き事共をせしをいふなり。

とにいてゝも とのはにいださぬ之。

てぐるまのせんじ こしにわをかけて。手

にてひく車をいふ。大裏の門のうちなどを

のる。昔女御のありける。やまひをして。
うちをまかて侍る時。てぐるまをゆるされ
たるなり。

おさめたてまつる さうそふの事。

をたぎと云所 たう國をたぎと云こほり。
とりべのなど。

ひたぶるに なかくといふ心。

おほさみつのくらゐ 正三位をくくり給ひ
しなり。

なみだにひぢて 袖をひたしたる。

ゆけいのみやうぶ ゆけいとはさへもんう

衛門のとを云。みやうぶとは。大裏に中らう

ふぜゐの女房を云。さ衛門のすけ殿。右衛門

の佐殿などいふやうなる事なり。昔ゆけい

のみやうぶと云女もありけり。新古今のと

ばに見えたり。

げにえたうまじく

げにたへがたくといふ

こゝろなり。

もししき 大りをいふ。

かたへはかくばかり かたへはかたばかり

なり。

をもたゞしき めんぼくらしきなり。

まげたるとをとめしと まがれる事はと

めたる。

もよほしがほなる あはれをもよほす。

かごと かどゝいふにあまたの心あり。一

にはかこつ。二にはちかごと。三にはい

さゝかのとをいふ。こゝにてはかこつを

云。

御さうぞく一くだり 女房のさぬ一かさね

なり。

御くしあげのてうどめく物 かみあげのぐ

そく。

さうくしく

さびくしき。

すが／＼ はや／＼となり。

をまへのつぼせんざひ 御にはのつぼに草
花うへられたる所へ。

ちやうこんかのゑ たうのげんそうと申御
門の。やうきひといふ人にをくれ給ひて後。
まぼろしをつかひに蓬萊へつかはして。し
るしのかんざしをえてかへりて。玄宗に奉
りし事を。白樂天の詩に作るをいふへ。

ていじの院かゝせ給て ていじの院とは宇
多の帝の御事へ。

まくらごと あけくれのとぐさなり。枕草
子などいふがごとし。

しるしのかんざし 女房のかみあげの具
也。楊貴妃のかみのかんざし也。

たづねゆくまぼろし 楊貴妃をほうらいさ
んへ尋行しとを。まぼろしとはいふなり。

太掖の芙蓉 びやうのやなぎ ちやうこん

哥の詞をとりてかけり。譬ば太えきとは池
の名へ。ふようは蓮の花を云。びやうとは宮
の名也。ふようの花。やなぎの糸のやうに。

楊貴妃のかたちはありしとへ。
からめいたりけん からやうをいふなり。
けふら うつしきなり。

らうたげなりし ほけ／＼としたるへ。
なよび たをやかなるへ。

右近のつかさのとのゐ申のこゑ とのゐ申
は。やぎやうとて。内裏をまはりてなのりす
る事へ。ゐねの時は左近のつかさまはるへ。
丑刁は右近のつかさのまはるへ。さてうし
になりぬるとはいへり。

あさまつりごと くにのまつりごとなり。
あさがれる 内裏に御ぜんまいらする所へ。
大しやうじのおもの これも大しやうじと
云物をたてゝ。その上にて御ぜんたてまつ

る事へ。

いとたいくしき たえくしきといふ心
なり。

さいめき さくやくなり。

いとゆしう いまくしきへ。

ばうさだまり給ふ 朱雀院のとう宮にたち
給ふ事へ。

世人もきこえ 世の人と。のもじをくはへ

てよむべし。又人と斗もよむへ。

かのをばきたのかた おばはうばの事なり。

こまうど かうらい人へ。

うたの御門の御いましめ うたの御門の御

ゆいかるに。いこくの人をば内裏へめさる

まじさよしをあそばしをけるへ。

こうろくわん 七條しゆじやかに。もろこ

しよりきたる使をやどす所也。

ふみなどつくりかはして ふみとは詩の事

也。

やまとさう 我國にならひつたへて。人を
さうする事也。

みこ しん王を申へ。

げさくのよせなき げさくははるかたの人
なり。

すくようのかしこきみち すくようだうと

てありしへ。ほくとだうのほうしなり。

源氏になしたてまつる 御かどの御子のた

ゝ人になりて。みなもとゝいふしやうを給

はるをいふ。嵯峨の天王の御時よりはじま

る。

三代の宮づかへ くはうかう。うた。だいご

の三代なり。

うけばりて うけひくなり。

こよなう とのほかにと云心也。又みやび

かなる心をもこよなきといふ。

さけさせ給はぬ　とをざけぬ。

なづさひ　なるゝ也。

なめし　ぶれいなるをいふ。

にげなからず　にたる所あるなり。

かゞやく日の宮　上とう門院の十二にて入

内し給いしを。時の人かゞやく藤つぼと申

侍るなり。

ゐたち　たちゐ。

おぼしいたつき　ほねをゐると。

くらづかさ　こくさうゐん　かやうのぎし

きにつかふまつるつかさ共。

御いしたてゝ　御いしとは主上の御こしを

かけ給ふ物なり。

くわざの御ざ　くわんざとはげんぶくする

人をいふ。

ひさいれの大じん　かくわんの人なり。

大くら卿のくら人　色々の説あれども。く

ら人の頭の大藏卿など云心。

きびわなる　いとけなきなり。

あげをとり　わらはにてよき人の。けんぶ

くしてわるきをいふ。

そひぶし　御かいしやくの事。

さぶらひ　内裏のてんじやうをいふ。

おほうちぎ　きぬのうへにきるものなり。

色しあせずば　色のかはるをいふなり。

ながはしより　御殿より南殿へゆくあはひ

のはしなり。

ぶたうし給ふ　内裏にてはひする事。

ゆうと云事あり。

左のつかさの御むま　さまれうの御むまな

り。

くら人どころのたかすへて　むかしは人の

ひいて物にたかをもしたる。

くら人所の鷹はいはれある事なり。

をりひつ物 おりひつにいれたるくひもの

え。

こもの 籠にいれたるくわし也。

とんじき つゝみいとて。ぎしきの時下

らうにくはするくひ物也。

ところせき ところもなきまでといふ心也。

おんなぎみはすこしすぐし給へる程 源氏

の君十二。あふひのうへ十六になり給へる

をいふ也。

にげなう につかはしからぬをいふ。

こゝら おほくといふ心なり。

もとのしげいさ きりつぼのとえ。

もくすりたくみ これはみなざうさくのか

たをつかさどるなり。

になく たぐゐなき也。

もとのこだち うへ木のこだちえ。

二はいきど

なのみとくしういひけたれ給ふ 名のみ

とくしうはよきとえ。いひけたれたるは

わろきとえ。とくしうとよみきりて。いひけ

たれ給ふとがおほかるなるとよむべし。

すぎごと すきくし事也。

かるびたる かるくしことなり。

かくろへ事 かくしどえ。

まめだち給ける まとだつ也。

おかしき 是は物のおかしきにあらず。お

もしろくよきことをいふ。ほめたる心と。又

わらいたる所もあるべし。

かた野の少將 色々の説あれども。なりひ

らの中將かた野にとまりたるとあり。これ

をかた野の少將といふべし。

さぶらひようし給て だいりにはべるがよ

きと云意也。

御ほんしやう もとのこゝろと。

くせ 人のくせなり。

ながあめ 三日にすぐるあめをながあめと

いふ。

御物いみ つゝしむ日をいふ。

御よそひ 御しやうぞくの事なり。

なにくれ なにやかやといふ詞。

すみか 人のめをいふ。

あだ人 あだなる人なり。

あさく やうやくといふ心。又すこぶ

るといふに。^{心也イ}あさくしきといふ詞あり。そ

れは心かはれる。

まつはれ なれむつぶることなり。

かたはなる 見ぐるしきをいふ。

をのかじゝ をのれがこゝろざしなり。

えんずれば うらむる意なり。

おほぞう うちはなちたる心なり。

二のまぢ つぎといふこゝろなり。

心あてに をしあてなり。

はしりがき さうにものをかくと。

れひさきこもれるまどのうち 草などのお

ひいてたるやうに。人のいとけなき時をい

ふ。まどのうちとは。おやの家にある程をい

ふ。

かたかど 一のかどなり。

おほどかに おほやうにのどかなるを云な

り。

思ひくださん 思ひさぐるなり。又こゝろ

にくだすなり。

うめきたる うそぶきたる。

なを人 いたく上らふにてもなきしなの人

なり。

たづき たよりなり。

けしうはあらず げすくはあらぬ意。

なまくのかんたちめ なまさんだちなど

いふ心え。

もとのねざし

この人のもとのほんしやう

え。

かはらかなりや

さはやかなる也。

にぎはしき

たのしきをいふえ。

御ほかげ

火のかげなり。

あふささるさ

あふさまくるさま也。又と

するもかうするもといふこゝろなり。

よるべ よる所なり。

とえりをし 文をかくに。とばをゑらびて

かくなり。

すべなく

びんぎなきなり。

ことがなかに

となるなかといふ心なり。

ひさうなき

ひんさうなきなり。ふくく

しきえ。

いゑとうじ

家の妻をいふ。

あはつかに

あはくしき心なり。

こめき こまやかによきえ。又おさなくか

たほなるこゝろ也。そろはぬ心也。

そばくしき

たしからぬえ。思ふやう

ならぬ心なり。

ねぢけがましき

よからぬこゝろなり。

えんに

うつくしくやさしきなり。

みさほつくる

しらずがほえ。

うみづら

うみのへんなり。

ふるごたち

女房のとしよりたるをいふ。

うちひそみぬ

かいつくるとて。くちの出

たるえ。又まゆをひそむるとて。しはむるを

いふ。

ひぐらひたり

ひらめきたるていなり。

ざればみたり

たしからぬえ。ゆがみた

るていなり。

まほにも

うるはしきなり。

をぞましき

をそろしきなり。

しへたぐる 人をしへたげたるこ。

いひそし侍る つよくいふなり。

てうかく 十一月にかものりんじの祭にあ

る事こ。

あかるゝ わかるゝなり。

つめくはるれど 人にはぢくしきなり。

さうじみ ほん人といふこゝろなり。

つなびきて つけすまいしたるこゝろな

り。

ひたやごもり やがてこもりたるこ。

とばかり 時ばかりなり。

かげもよし さいばらのあすかいのことは

こ。

ねたます そばにていひそのかしてねた

まするこ。

あざれかゝれば たはぶれかゝるなり。

おはさうず おはしますといふとばこ。

しれもの しれたるものと云とばなり。

さすらふらん 世にある空もなくて。まよ

ふこゝろなり。

人やりならず 我こゝろからといふこゝろ

なり。

むねこがるゝ おもひをいふこ。

くさわひ くさのたねをいふこ。

ほうげづき ほとけにちかきなり。

くすしからむ わづらはしきなり。くすみ

たる心也。

わがふたつのみち 哥詩のことなり。

むべくしく よろしきこ。

ふびやう 風のやまひなり。

こくねつのさうやく ひると云ものこ。六

月のこくねつの時ふくするもの也。

むくつけき おそろしきをいふこ。

あはめにくむ あはくしきをにくむな

り。

えならぬ たよりならぬ。又物の云れず

うつくしきをもいふなり。

まめ人 まとしき人なり。

あなかま あなかしがまし。

なかがみ 天一のはうふたがりの方をい

ふ。

中がは いまのきやうごく河。

きよろしき きよくよろしきなり。

おまし 御ざをいふ。

とさらびたる ことさらにつくりて物をい

ふなり。

むつがりて はらたつと。

あてはかにて あてやかにうつくしきな

り。

まうとの 御へんなどいふこゝろなり。

ふいに こゝろならずなり。

物けたまはる ものうけたまはるなり。

いもうと こゝにてはあねをいふなり。

さゝやかにて ちいさやかなるなり。

なみ／＼の人 なべての人といふ心也。

どうもなくて うごくともなきなり。

おぼれ そらおぼれなり。

あて人 あてやかによきなり。

ふつゝか げすしきなり。

御くしげどの 御ふくなどをたちぬふ人な

り。

ふようなる もちゐざるこゝろなり。

うつせみ

いとらうたじ いとをしきなり。

うれたくも うれへたきなり。

ごたち 女ばうなり。

こきあやの一えがさね 紅のこきあや。

一えがさねはひねり重。

二あひのこうちぎだつ物　二あひはむらさ
き也。こうちぎはきぬの事也。だつとはとばな
り。

ばうそくなる　あらはなるこゝろなり。

そゝろかなる　するとなり。長程なり。

さがりば　かみのすそなり。

けちさすほど　このけちきえ。

さうどけば　物さはがしきなり。

ぢにこそあらめ　ごのぢになるをいふ。又

地ともいふ。

いよのゆげた　伊與の國のいてゆのけた

え。譬ば數ちほき事え。

めすこしはれたる　はれくとしたる事な

り。

かいまみ　かきのぞきなり。

すべしたる　ぬぎすべらかしたるえ。きぬ

の事也。

おもと　女房をいふ。

あなはらく　あなはらいいた。はらいたと

いふ心え。

人かうつれる　うつりがの事なり。

ゆふがほ

このもかのも　このをもてかのをもてえ。

又あなたこなたの心もあり。

こがしたる　あふぎをたきものにしめるな

り。

たゆたふ　ゆられたるこゝろえ。

されたるやりどぐち　家のとのゆがみたる

なり。

つぎじろふ　さしつぎとばにいださぬな

り。

めくはす　目合するといふとなり。

さらぬわかれ　えさらぬわかれなり。

やうめいのすけ　げんじのひじなり。

はらから をとゝいの事へ。

しびらだつ物 女房のさるうはも也。

なげのふでづかひ なげはないがしろのこ

ゝろなり。

しをん色 おもてすわう。うらもよぎをし

をん色といふへ。

さしぬき 女房もおとこのさるやうなるさ

しぬきをさるなり。

なかや 中ゐの事へ。

てかく てにてあはくなり。

ことねりわらは つねのわらはへ。

かりの御ぞ かりぎぬなり。

なりはゐ 田つくるとなり。

ぬかつく おがみするとをいふへ。

みたけさうじ 吉野のさんふせんへまいら

んとて。しやうじんする事也。

うばそく おとこひじりなり。

ちやうせい殿のふるきためし やうきひの
事なり。

こちたし おほきなり。

ゆくりなく 心ならずへ。又ゆくゑなくへ。

なにがしの院 六てう河原の院なり。

けいめいして いとなむなり。

おきなか川 つきぬ事へ。又ひぬことへ。

べちなう べちの屋なり。

けうとく おそろしきへ。

あひだれたり あまへたるなり。

山びこ こだまなり。

われかのけしき 我か人かのやうなる心な

り。

ひあやうし 夜まはりする事へ。

またゝきて ともし火のひらめくへ。

みつはくみて としよりてこしのかゞまれ

る事を云なり。

いとかごかに かごくとしたるなり。

ふくいとくろく ふくよかに色くろきなり。

り。

たむけ たびのはなむけ。

ぬさ はらへなり。

三わかむらさき

わらはやみ をこり心ちなり。

なにがしでら くらまでらの事なり。

しくこらかし しそびらかすといふこゝろ

なり。

つゝらあり くらまのなまがりの事なり。

り。

ゆほびか ひろきこゝろの事なり。

いといたしかし かたはらいたき事なり。

さいつごろ ちかごろなり。

かうぶりえたる 六位の人の五位になるを

いふ。

山ぶきなどの きぬの色に花山吹。うら山

吹など云事有。

いぬき わらはの名。

くさの御むしろ ほうしのしく物なり。

さしぐみに さしよりになり。やがてとい

ふこゝろもあり。

ごしん かぢのとなり。

うどんげ 三千年に一たび咲花。佛の出

世に譬る。

くだら 百さいこくなり。

ひとぞう 一ぞくの事なり。

さだすぎたる よはひのなかば過たるをい

ふ。

ふりはへ うちへたる。

はなちがき もじを一づゝ書たる。あさ

なき物のものかさたるをいふ也。

しもづかへ しもにつかふ女なり。

くつして くるしみたる心へ。

あづま 和琴 わごんの名へ。

さてはづしてん とりはづすなり。

にび色のこまやかなる ぶくしやのきる色

へ。むらさきのうへぶくにき給ふ也。一には

ひ色のこまやかなるとよむべし。ひいろは

紅の事也。

すゑつむ花

いどましき いどむへ。あらそふ也。

わかんどをりのひやうぶの大ゆふ たとへ

ば王そんにてある人のひやうぶの大ゆふに

なるをいふ。

おほうち山 内裏をいふ也。

おもきこうに ごのこうにたとふるへ。人

のいたむべきころ也。こうにうつといふ

となり。

御かさやどり

あまやどりなり。

よひまどひ ゆふまどひへ。

ざれくつがへる しどけなきころなり。

えびの香 たきものゝ名なり。

しゝま ものいはぬとへ。

かねつきてとぢめむ ろんぎの時。かねを

つけばいひやむへ。

はひをくれたる むらさきのあくのたらぬ

へ。

なかさだのすぢ 中ごろのてかきをいふ。

ひそく ちやわんなどやうのうつはものを

云なり。

くしをしたれて はいぜんの女房のかみあ

げたるが。くしをさしたる也。

ないけうばう 女のまひならふ所へ。いま

大とのゑと云は其跡へ。

そゝや すはやなり。

いさとき 人のさときへ。

ふけんぼさつののり物　さうのはなのが
きなり。

さをきまでしろく　さをきはあをきなり。

あまりしろきはあをく見ゆるなり。

さらぼひて　やせてからくとしたる。

ゆるし色　こうばひの事なり。

ふるきのかはぎぬ　けだものゝかはにてつ

くりたる衣。

ざしきくはむ　ことくしき人をいふ也。

はしたなるおほきさ　中なりなるせいぶん

なり。

みちのくにかみ　だんしをいふ。

こだい　ふるくしきなり。

いまやう色　くれなゐとこうばいとの中の

色あひ。當世やうの色といふなり。

かいなで　をしなべてといふころなり。

かいねり　くれなゐの色なり。

ゑびぞめ　むらさきにあかみのある。

ねび人　としよりなり。

おとこたうか　正月十四日にある事。今

の世にはたえてなし。

かゝげのはこ　びんかくいれものゝはこな

り。

うはぎ　うへにきるきぬなり。

さくらのほそなが　おもてしろく。うらは

こきすはうをさくら色といふ。ほそながは

をさなき人のきる衣。

へいちうがやうに　たいらのさだふんとい

ひし人。おんなに心ざしあるけしきをみせ

んとて。すゞりのかめに水を入れて。それにて

めをぬらして。なくまねをしけり。女心えて

すみをすりていれけるを。へいちうかれを

ばしらで。れいのやうにめをぬらしければ。

おもてすみになりにけり。其時女のよめる

へ。

我にこそつらさを君がみすれども人にすみ
つくかほのけしきよ

はしがくし はしのまなり。

四もみぢの賀

しゆざく院 三條しゆじやかにあり。

しがく まいのならし也。

ゑひ せい かひはといふまひに。ゑいとい

ふ事あり。

かれうびんがの聲 かれうびんがとは鳥の

名へ。かいこの中より鳴聲のいづれの鳥に
もまさりたるへ。是を佛の説法の聲に譬る

也。

こゝしう ふるめかしきなり。又かどある

心へ。

御ささきと葉 ふぢつぼの宮ささきがねに

ておはしませば。ささきとばといふ。

もろこしこま 左右のまいなり。

まひのくさ 舞のしなへなり。

かひしろ せい かひはにかひしろとて。か

きのやうに立めぐる事なり。

いうそく よき人なり。

りんだい せい かひはのじよなり。

いりあや 舞に入あやとて。さらにとつて

かへしておもしろふ舞を云なり。

てうはい こてうはいなり。正月一日の事

なり。

なやらふ 十二月卅日におにふ事へ。

ないえん 正月廿一日におこなはるゝ事な

り。

さんざしに さんがなり。

うけはしげに のろくしくいふなり。

たぐちりばかり すこしばかりの事へ。

うちぎすがた なをしをぬぎて。きぬばか

りきたるゑ。

ゆし給て とのてなり。

ほそろくせり がくの名なり。

うねべくら人 みな女房の名なり。

御けづりぐし 御ぐしすます事なり。

うちぎの人 御けづりぐしの人^は。わらは

くひのむもんのなをしをきるなり。

かはほりの 夏^のあふぎ^ゑ。かはほりのは

ねをひろげたるやう也。

まかは まかぶらなり。としのよりたる女

のめのおち入たるを云。

うんめいでん むかしはこゝにないし所ま

します也。

うつし心 まとのこゝろなり。

おもなのさまや かほのあつき心なり。

五はなのゑん

たんいん 花^のえん^{には}。もん^文にん^人をめし

て詩つくられしなり。たんいん^探とはゐんの
字をさぐりてつくるゑ。

はなじろめる おくしたる事をいふ。

もん^音にん じゆしや^者のと^{なり}。

こきてんのほそどの ほそど^{らうをいふ}の

かた^トをいふなり。

くるゝと くるゝさしたるとなり。

すさめぬ あひせぬ也。もてなさぬなり。

あふぎはさくらのみへがさね ひあふぎの

りやうはう三まいづつを。うすやうにてつ

ゝみて。いろ／＼のいとにてとちて。すゑに

あはびむすびにむすびたるゑ。又五へのあ

ふぎといふは。五まいをつゝめるゑ。

やはらかにぬる夜はなくて さいばらのぬ

きがはのうたのとばなり。

きやうさく あらはなるこゝろゑ。さとく

しるきなり。

あり明のきみ おぼろ月夜のなしいしのかみ
なり。

さくらのからのきの御なをし さくら色の
からあやのなをし。

えびぞめのしたがさねしりいとながくひきて
なをしにしたがさねしりひくとは。ひきつ
くろふときの事。

あざれたるおほぎみすがた あざれはあざ
やかなり。又しくとくのすがた也。おほぎみ
姿はたけたかきこゝろなり。

ふさわしからぬ よからぬ也。

わびにて わびたるなり。

あふぎをとられて さいばらのいしかはの
哥に。おびをとられてとあるを。源氏の君の
あふぎをとられてとはいひかへ給ふ。

六あふひ

世中かはりて きりつぼの御帝御くらゐを

すべりたまふ事を云也。

せんばうのひめ君 さきのとうぐうをせん
ばうといふ。

御けいの日 賀茂のさい院の御けいとて。

毎年四月のなかのむすの日。河原にいて給
ひて。はらへし給ふとある也。一條のおほぢ
をとをりたまへるなり。

山がつたびしかはら 色々の説あれども。

たびしはわたしもりの事。かはらはあみ
ひくもの也。すべてはいやしきものなり。

御せん ぜんくうの事。

かざみ わらはのうへにきる物なり。

ひとだまひ しゆつしやの事。

さゝのくま かげをだに見ぬといふこゝろ
なり。

大將のかりのずいじん てん上のどうなど
すると。是も人しらぬと。

つばさうぞく　おんなのあしつゝみななどを
云。昔はいちめ笠にきぬをきて中ゆひたる
え。

おぼしうむじ　おもひうれへたるなり。

うさもんのうへのはかま　わらはのうへのはかま也。『くわんにあられ。』

みるふさ　かみのうつくしきをたとへたる也。

むまばの屋　一條大みやにあり。

いさすだま　いきたる人のりやうなり。

いかきひたふる　をそろしきこゝろなり。

のゝ宮　伊勢のさいぐらの野の宮はさがの

ありす川にあり。賀茂のさい院の野の宮は紫野にあり。こゝにて野の宮といふは。いせのさい宮の事也。

けしのか　ごまにやくものゑ。

御ゆる　ゆあむるなり。

秋のつかさめし　秋のちもくなり。
あしをそらにて　空をあゆむなどいふこゝろなり。

左衛門のつかさ　大だいのうちにあり。

こさあをにび　はなだにあをげのまじりたる色なり。

むらさきのにばめるかみ　紫のくろくて。にび色にかよひたるゑ。

おばおととのうへ　源内侍のとしよりたるをいふ也。

にび色のなをしさしぬき　ぶくしやのきる物なり。

そら色したるからのかみ　にび色のかみ也。
ぶくしやのふみなり。

くはんさういろのはかま　きなる色なり。

かうじ色ゑ。

むもんのうへの御ぞ　うへのきぬのもんな

きなり。

えいまさ給へり かうぶりのゑいをまくは
ぶくしやのわざなり。

ころもがへの御しつらひ 四月一日に夏の
しやうぞくになすをころもがへといふな
り。又十月一日冬のしやうぞくになすをも
かく云へ。

ねのこはいくつかまいらすべからん ねの
このもちゐの事也。又源氏のひしへ。

御ぞかけ ころもかくる物なり。

七さかさ

くろ木のとりゐ のゝ宮にあり。かはつき
たる木にて作れるを云。

ひたさや 火をたく小屋へ。

ちやうぶせうし いせのさいぐうの御くだ
りの日。内りより御うちをくりの御つかひ
に。しかるべきくぎやうをつかはさるゝ事

なり。

わかれのくし さいぐう御いとまごひにう
ちへまいり給へるとき。しゆ上御みづから
くしをさいぐうのひたひにさし給ふ事あ
り。これをさしぐしとも。わかれの櫛ともい
ふへ。

八しやう 大だいりにあり。

ふぢの御ぞ 重服の事へ。昔はふぢのかは
にてをれる布をしける也。

とのゐものゝふくろ これ又源氏のひじな
り。

いちはやく をそろしきとなり。

そんわう しゆ上の御まごなり。

はらぎたなさ はらあしきへ。

まがへば ゆきちがふへ。

せきふじんがみけんめのやうに うはなり
のをそろしきためしへ。

よゐのそう 内裏の御ぢそうのふたまとい

ふ所にて。よひの御かぢにまいる事なり。

うんりんゐんの 紫野にあり。

しはぶるい人 いやしき下らうなり。

くろき御くるま ぶくしやの車へ。

ぢす きやうをつゝむものへ。

たきゝこるほど 御八かうの五卷の日へ。

あをむま 正月七日に御むま御覧ずる事な

り。

くちなしのそでぐち くちなしぞめ。あま

のきる物へ。

ちしのへう むかしはとし寄てのち。今よ

りはつかへまじきよしを。へうといふとば

にかきてたてまつりしなり。それをちしの

おとどなどいふなり。

ゐんふたぎ 故き詩のもじをおほひかくし

て。そらになにもじといひあてさする事な

り。

したとに はやごとするを云へ。

うすふたあひなるおびの なをしのおびな

り。

あこへはべるべし あこやかすといふとな

り。

かるめろうせらるゝ てうろする事な

り。

八はなちるさと

よのさが 世のならひへ。

よべのかきね かつらの木のありしかきね

なり。

九すま

ひたいけたらむ 物さはがしきをいふへ。

こしのべて こもりゐたる人のほかへいづ

るをいふへ。

あさはかなる あさきつみなり。

うつしざま よのつねさまなり。

はなちつかはす ながす事なり。

いへばえに いはんとすればえいはぬ事な

り。

むもんのなをし くらゐなき人のきるなを

し。

となしびに なに事もなきなり。

けんだつふみ けんとはしよりやうのてつ

ぎもんど。

おさめみかは おさめはしも女。みかは

ゝひすまし。みないやしき人なり。

御いたはり はぐゝみなり。

おほえどの わたのべといふ所なり。

かとの御なをし かとりはへいけん。

すなはちむもんのなほし。

つみふかき身のみこそ さいぐうにてはき

やうほとけ近付ぬ事。

千えだつねのり ゑかきの名。

つくりゑ 色とりゑ也。

しをん色 おもてうすむらさき。うらあを

きをいふ。

とこよ 世はなれたる所也。かりがねのふ

る郷をいふなり。

をんしの御衣今こゝにあり 北野の天神の

つくしへながされさせたまひし時の御詩の

とばなり。

むせ屋のおさにくしとらする人 是も北野

の天神の御事。むまやとは旅のむまや也。

おさとはそのむまやをつかさどる人なり。

くしはせつゝあれども。たゞ口ずさみに

作る詩の事。

かうじなる 御かんだうをいふ。

しゝをむまといひけん かをさしてむまと

いふ事。

しものゝちの夢

王 明 君
わうせうくんが事なり。

だきのばん

いしはじきのばん。

あさりして

くひものもとむる事。

かいつもの

海士のかつぎたるもの。いそ

物。

ぜんじやう

まくのやうなる物なり。忍を

かくなり。

ひぢかさあめ

にはかにふるあめなり。ひ

ぢをかさにする也。

十あかし

そぼちまいれり

ぬれ／＼まいれるなり。

みちかひ

みちのゆさちがひ。

みてぐら

御へいの事なり。

こうじ給

くたびれたるなり。

くにのときい

ときいはしる人なり。

はひわたるほど

ちかきをいふ。

いねのくらまち

いねおさめたるくらな

り。

かうれう

がくの名。

びはのほうし

びわひきあり、ほうしな

り。

あき人のなかにて

びはいんといふものに

あり。

さけしゐそし

つよくさをしいたる也。

こまのくるみ色のかみ

かうらいのかみ

え。うすかうの色をくるみ色といふ。

たまも、女のもなり。

せんじがき

おほせがきなり。

よこもりて

うちこもりたるなり。

てしども

あかしの入道のつかふ人をでし

といふ。

しをどけし

しほれたるなり。

御ぐしすこしへがれたる

かみのうすらぐ

なり。

もとのくらゐ もと參議にて大將かけ給へり。

ひるのこのあしたゝざりし 三とせになるをいふ。

まくなぎつくりて たれともしらせてといふ事。

十一みをつくし

御はかし たち。昔はひめ宮の生れ給しにも。御はかしを奉りし也。

つれにくゝ つれなくにくきなり。

いかにはあたらん このむまれて五十日のいわゐなり。

うみ松 みるの事。

いけるかひ いける世のかひ也。

やみのよにて やみの夜のにしきといふ心あり。

たゝわしきかんだから げんてうのしんほ

うといふ心なり。

かく人十つら 十つらとははしりむま十疋なり。

あかぎぬすがた ていゐのすけのはうなり。

わらはずいじん わらはをずいじんにする。めづらしきためし。

あそびども ゆう女の事。

よもぎふ

ほしのひかりをたらいの水にうつしたる

七夕祭の時の事。

はなち給ふてんやと うりはなち給ふべし

やといふなり。

きほうし きすくなるほうし。きおとこ

などいふがごとし。

あげまき うしかふわらはなり。

かぐやひめはこやのとじからもり

是皆昔

物語の名也。

かんやがみ しゆくしやうのかみえ。

くのゑかう くんえかうといふたきものな

り。

ちりがましげなる ちりのつもりたるな

り。

ちやうこぼちたる女 一にはまとしきたと

へ。一にはやもめずみの事也。

せき屋

かきおろし かけはづす。

なにぞやうのありのもの見 賀茂の御あれ

などのやうなる物見をいふ。

あを かりあをを。かりぎぬとおなじ。

くゝりぞめ 色くゝにくゝりてそめたるも

の也。

十二ゑあはせ

御くしのはこ くしいるゝはこなり。

うちみだり びんのぐそくなり。

かうご かう入たるつぼなり。

こゝろ葉 くしのはこに花の枝をかねにて

打そへたる。

ひめて かくす事。

おれものも をろかなるもの。

ふんのつかさ 和琴の名なり。

十三まつ風

中務の宮 かねあきらの親王と申人なり。

はちふさ はらひのくるこゝろ也。

たきどの つりどのなり。

かつらのぬん うづまさにより。

おのゝへさへあらため給はん をのゝえく

つるはひさしき事也。

いさら井 ちいさきし水也。

おぎのえだなどつとにて 小鳥をば萩など

のえだに作る也。

ものゝふし かぐらをするこん衛のめし人
をいふ。

十四うす雲

あまそぎ ふかそぎなり。

たすき 昔はをさなきものはこ袖をばき
ず。たすきと云物をきたる也。

せな おとこをいふ也。

さねこん はやくこん也。又まとにこん也。

うつしざま つねのさまなり。

がうけ けん門の事也。

ひとつ色にくろみわたりて 天下りやうあ
んの事也。

てんけん てんにんのまなこなり。

かどひろげさせ給て しそんの高きくらゐ
にのぼるべきを云也。

十五あさがほ

かみさびにける ひさしくふりたるをい

ふ。

らう ほうこうのらうなり。

しなとの風 いぬゐより吹風なり。

まかり申 いとま申す也。

おやのおや うばをいふなり。

わらはけて をさなげなり。

ふくつけかれど ふくやか也。

十六おとめ

さらがへり いまさらたちかへるなり。

あさぎにて 六位の人のうへのきぬ也。

おいつかすまじく とりをくやうにせうし
んするをいふ。

大がくのみち じゆしやのみちをならふな
り。

つぎ／＼ 世々といふ心なり。

やまとたましひ 我がくにのたましひ也。

せまりたる さはまりたるなり。

あざなつく、大がくしうになりて。べちに
名をつくる事有。

をしかいもとあるじ、これもげんじの難儀
也。

ひざうにはべたうぶ、ひざうはつねならず
といふ心なり。

なりたかし、をとなせそといふこゝろ也。
たちたうびはべなん、たち給ひ侍らんとい

ふ心也。

さるがうがまし、さるがくなどやうなり。
けさうし、人にうやまひついせうせらるゝ

心なり。

おとどのおほんは、おほん詩といふ心な
り。

にうがく、大がくれうへ入事なり。

れうし、大がくれうにてがくしやうをこゝ
ろむる事也。

かへさふべき、かへしとふとなり。
いたらぬても、ふみのてんなり。よみやう
なり。

つましるし、哥なんどにてんをあはせんと
て。つめにてしるしを作る也。

しれゆく、をとりゆくなり。

れうもん、大がくれうのもんなり。
もんになぎさう、じゆしやのなるくはむな

り。

わかんどほりばら、宮ばらといふこゝろな
り。

なにのみこくれのげんじ、なにくれといふ
とばなり。

かんざし、かしらつき也。

ゆのてつき、とのての名なり。

さくはうし、しやくにてひやうしをうつな
り。

おれたる事 すぐにもなき事なり。

しりうごと うしろごとなり。

おかしく すぐれたることなり。

きはたけく たけくしきなり。

むなしき事 そらごとなり。

いとさくじりおよすげ さかくしきこゝ

ろなり。

とよをかひめ あまてるおほん神なり。

あをすりのかみ あをさかみにらうをもつ

て文をすりたるなり。五せつの舞ひめはあ

をすりのからぎぬをさるゆへに。よせある

かみをもちいるなり。

ましが まろといふこゝろなり。なんぢと

いふ也。

さんぢ なんぢなり。

はまゆふばかりのへだて はまゆふとはみ

くま野の浦にある草也。さちやうのかたび

らをへだてたる心也。

あを色にさくらがさね あを色のうへのき

ぬに。櫻の下がさね也。

あか色の御ぞ あか色のうへのきぬをしゆ

上にたてまつる也。

おくたかきもの おくびやうなるものな

り。

いけにはなれゆく はなれじまの心みとい

ふとば也。

かへどの しゆざく院にあり。

御たうばりのつかさかうぶり 御たまはり

のつかさくらぬ也。

きうだい よくしをつくりたるをいふ也。

御としみ 御賀の事なり。

むまばのおとゞ ばゞの屋なり。

らちゆひて けいばのらち也。

じやうめ すぐれたる馬なり。

こちたき　こつなきなり。

こまけう　こまかに也。

十七たまかづら

かいひそめたる　ひそめたるとは人のさし

いでぬをいふ。

おとしあぶさず　はふれさせず也。

ふなこ　舟こぐもの也。

ねさう　ねんさうといひて。年に三たびせ

うじをする也。又當年しやうをまつるとを

もいふといへり。

いとだみたりける　だみたるとはいなかの

人の詞づかひを云。

ひとしなみ　人なみなり。

この地のせいしをばむなくすて　詩の詞

也。

みあかしのと　佛にとらみやうたてまつる

事也。はつ瀬には十万とうをたてまつると

みえたり。

のしひとへ　うすぎぬなり。

みあかしぶみ　とうみやうたてまつるぐわ

んもんなり。

るりきみ　玉かづらのきみのわらは名也。

こまかへる　年よりの二たびわかくなるな

り。

けそふに　あらはなるころなり。

かいはなて　かけがねをはずすなり。

うちどの　きやうき所也。

かいふのもん　大なみのかたおれるなり。

そこひある　かぎりあるころ也。

げににげついたる　にたるけあるなり。

わかのみずいなう　哥よむべき事をかきたる

ふみ也。

はつね

春のおとゞ　おとゞは御所をいふ也。春の

おとゝはむらさきのうへのすみ給ふなり。

とぶき いはるごとなり。

えびかづら よのつねのかづらをいふ。

けやけし すぐれたる也。

りんじかく 正月二日に大臣の家にておこ

なふ事なり。

あれはたれとき たそがれときなり。

たきのよどみ かみのおちほそりたるをい

ふ。又しらがのまじりたるを云。

みのしろごろも みのゝしろにきる衣也。

みづむまや おとこたうかにつきたる事な

り。是も人しらざる事也。

しらがさね あを色のうへのきぬに。しろ

きしたがさねをかさぬる也。おとこたうか

の時のしやうぞくなり。

かざしのわた わたにてかざしの花を作り

て。かぶりにさす也。

かよれるすがた 袖をひるがへす心なり。

かうこんじ 是もおとこたうかの時にきる

かぶりの名也。

まんすらく さいばらのうたなり。

ごえん おとこたうかのごえんとて。二三

月にあるとなり。

こてう

そらみだれ そらゑいなり。

さうどき はやりこゝろなり。

ひの御よそひ 人しらざる事也。

ひらばり あくの屋などのたぐひ也。

あぐら こしやうとて。こしかくる物なり。

こしさし まきぎぬをろくに給ふをこしさ

しといふ。

くしのたふれまねびつべき これは色く

の説ある事也。譬へばいかなるじつほうな

る人も。戀の道にはかなはぬと云心也。

この比の花の色なる御うちぎ　夏の時さく
花也。うのはな。なでしこなどの色也。

みるこ　女房たちの名なり。

めしうと　おもひ人をいふなり。

あな心とく　こゝろときなり。

そこひしらぬ心ざし　ふかき心ざし也。そ

こいは水のそこ也。

ほたる

わらゝかに　やはらぎたるこゝろなり。

ほたるをうすきかたに　さちやうのかたび

らのうすきとを云也。

けちえん　あらはなるこゝろなり。

あのごと　あんのごとくといふとば也。

いけみころしみ　いけつころしつといふと

ば也。

つやも色も　つやとはいとなどのうつくし

きをいふ。

てつがひ　五月五日こん衛のくわん人の馬
に乗てまといると也。

さうぶがさね　あやめがさね也。おもてあ

をく。うらこきこうばひ也。

あふちのすそぞ　おもてうす色。うらあを

きをあふちといふ。

なでしこのわか葉の色　おもてすはう。う

らあをし。一にはおもてこうばいをなでし

こといふ。わかば色とはうすもえぎ也。

とねり　ずいじむの事也。いゑ人なり。

身をなげたる　これはけいばのとなり。

だきうらくなそり　けいばの時。かちまけ

のらんじやうとて。これらのぶがくをする

なり。

わかこま　わかこもなり。草の名也。

みそかこゝろ　ひそかにわろき振舞をする

をいふ也。

大ばんどころ 女房のゐる所なり。

とこなつ

にしかは かつら川なり。

ちかき河 賀茂川なり。

いしぶし いほの名也。

ひみづ ひの物なり。

すいはん 夏のくひものなり。

むとく かひもなきこゝろなり。

けそん 家のきず也。

おち葉 らくいんはらのむすめなり。

ひまありける 人の中わろきをいふ。

とつび とのしなをいふ。

みみかたからぬ みみつよくもなき人をい

ふ。

てうたぬ心ちして 心やましき也。双六の

よきてをうたぬやう也。

大つぽ 小べんするつゝの事也。

あまへたるたき物 あまつらの過たるな
り。

かゞり火

うちまつ たい松なり。

くはやとて さらばとてといふとばなり。

野わき

あぢこうじて 物にあぢてくたびれたる

也。

しをん うすむらさきの色。

をみなへし おもてき。うらあをき色なり。

けいせさせ給て 中宮とう宮へ物申をばけ

いするといふ也。

ねびごたち としねびたる女房也。

ほそびつ ^{イ元}きぬびつなり。

からのけんもんれう からあやのもんある

をいふ。

みゆき

あしよは車　わのよはきをいふ也。

あてなる人　たとき人也。

御へ　御にへなり。くひものをいふ也。

からのたき物　たきものゝほうはからくに

よりつたはれるゆへ也。

おちぐり　こきくれなゐをいふ也。

あはせのはかま　中へをいれぬをいふな

り。

むらさきのしらきりみゆる　紫の色のしら

みたる也。

あられぢの御こうちぎ　くわんにあられの

もんなり。

しゝかみ　ふるひちゝみたる也。

ゑりふかく　えりいれてかきたる也。もじ

つよげなる心也。

あふなげに　おくふかゝらぬこゝろ也。

いそしく　いそがしくなり。

むねにてををきたる　むねをゝさへたるや

うに思ふ事のある也。

ふぢばかま

かはらへいでさせたまふべき　ぶくをぬぎ

たるには。かはらにてはらへをする也。

うつたへに　うちつけなどいふとばなり。

いとれんし給へる　てうれんしたるなり。

三にしたがふ　女は三にしたがふといふ事

あり。わかき時はぢやにしたがふ。さかりな

る時はおとこにしたがふ。老ては子にした

がふと云事也。

まきばしら

けゝしき　うやまふこゝろ也。

やさしかるべし　はぢがましきなり。

むかひ火つくる　人のはらたつをみて。こ

なたよりはら立かへすをいふ也。

ちうげんになりぬべき　二ぶつの中げんと

いふ心なり。

ひわだ色　紫のいさゝかきばみくろき色なり。

このさうのめいぼく　こんじやうのめんぼくなり。

あをにびのさしぬき　大しやうべつたうなどきる色也。

みあるじ　きやうのと也。

うたかた人　せつ／＼ある事也。

かへりしかいの　かいはとりのかいこなり。

かりのこ　かのこなり。

十八むめがえ

ひこんき　かねにてをりたるにしき也。今の世のきんらん也。

そんわうの御いましめ　八條しきぶきやうもとやすのみこと申人なり。たきものゝほ

うをつくりたまへる人也。

はなちいで　しんでんにはなれたるていなり。

くま／＼しく　おぼつかなくおもふなり。あえもの　あやかりものにする也。

みかはみづのほとり　内裏のうちをながるゝやり水なり。たき物は水のちかきつちにうづむがよくにほふ也。

さしいらへしたまひて　こはたすけなり。ほころびなまし　鶯の朝とくなくをほころぶといふ也。

とよりてこそ　すゑの世になりてこそといふ也。

ひとよろひ　さうし二でうをいふなり。あして　あしてのもじとてあるなり。

こきこもんのきのへうし　きはきぬなり。十九ふぢのうら葉

ぶんせきにもかれるといふ事　ぶんせきとはよむふみのと也。かれいとはいゑのれいせつ也。

ちやうじぞめ　ちやうじにてそめたるなり。

くはんぶつ　四月八日佛にうぶゆをあびせたてまつるを云也。

水ももらんやは　物のすきまもなくきびしき事なり。

御あれ　賀茂のまつりのまへの日。ほんしやにてある神事也。賀茂の御たび所を云也。ひつじくだるほど　ひつじの時也。

あをきあかさしらつるばみ　あをきしらつるばみ。あかさしらつるばみといふこゝろ也。あかさ色あを色のはうをいふ也。うたのほうし　わごんの名なり。

甘わかな

にし山なる御てら　にんわじなり。

こゝろうつくしきさま　御うしろみのなき事をいふ也。

みなほがらかに　よろづにあきらかなるなり。

いきまき　いかるこゝろなり。

かべしろ　しろききぬをかたびらのやうにしてかくる物也。

ぢしき　さしむしろのとなり。

ぎやうてんの御ものにて　代々のてうほうをばぎやうてんにをかるゝ也。

きははなるゝ事　ぬきいてたる事也。

しのだのもりを　いづみのかみをいふ也。われよりかみの人　としのまされるをいふ也。

もえぎのかげ　あを木だちなり。

わらうだ　ゑんざなり。

からもの からくだ物なり。

わかな下

まとゐ ゆみゐる事なり。

かちゆみ むまにのらてゆみいる也。

山あひにすれる竹のふし あづまあそびの

まい人のあをすりのはうのもんなり。

いもゐの御まうけ しやうじ物也。

やうこつなかるべき やんどとなき也。

あをじ あをさちやはんの色したるをいふ

なり。

あをに こきあをにきをさしたる色也。

はちのを 一のをなり。又八のをとも。

五かのしらべ きんに五のしらべあるな

り。

ついきりなる ふつきりなる也。

みだりかくびやう みだり心などいふ心

也。かくびやうはおこりの事也。

廿一かしは木

まぶしつべたましく まかぶらたかきこゝ

ろなり。

わうけづき ていわうのそん見えたるこ

ゝろなり。

まなこい まなこなり。

廿二よこぶえ

らいし たかつきのうへにふちをたかくし

たるものなり。

やなぎをけづりて 色のしろきをいふ也。

つだみ おさなきこのちをあますをいふ

也。

すゞむし

めぞめ めゆひなり。

みつをかくしほろゝけて たきものにあま

づらのすくなきは。ほろゝと有也。

ゆたけき御さゝ ゆたけきは事のひろき心

なり。御さゝはよのつねに御さゝもなきな
どいふ詞也。

廿三ゆふぎり

をのといふところ　くるすのをのやらん。
又ひえの山のすそののをのやらん。いづれと
さだめがたし。

ぞうるい　一ぞくなり。

とりのせうやう　せうと云はたかのめとり
也。鷹はめ鳥がをとりをしたかふる也。

むねはしりて　むなさはぎなり。

うつしをかせて　うつしはくらの名也。

かうくしき　かみくしき也。

廿四みのり

なたいめむ　ぎやうけいの時。くぶの人々
の名乗てまいるをいふ也。

しぼりあけて　めをしぼりてひらくことな
り。

やゝまし　やむといふ詞也。

廿五まぼろし

うなひまつにおぼえたる　これも源氏のな
んぎ也。

よるべの水　これ又説くある事也。

めしく　めにたつなり。

廿六くもがくれ

名はありてまきはなし。

廿七にほふひやうぶ卿

なにかはやうのもの　なにかやうがましく

といふころ也。

いつゝのなにがし　女の五のさはりといふ

ころなり。

うつし　たきものなり。

こうばい

のちのおほきおとゞ　ひげくろの大臣の事

也。

かはふく うそをふくとなり。

たけがは

あさくしう これはすぐれたる事をいふ

也。

もきい 葉もなき木なり。

つめかくすべき はぢたる心也。

すみたるさまして すぐくとしたる心な

り。

こまのらんじやう けいばに右の勝たると

きは。駒のらんじやうをする也。

のどまりて しづくとしたる心也。

ゑかのさんたち ゑんかとて。かきのもと

にざをしてつく事のある也。

一字治はしひめ

すなとり人 いほとる物なり。

いり日をかへすばち げんじやうらく。れ

う王といふ舞のてなり。

これも月にはなるゝ物かは びはのばちを

ば。はん月と云あなにさす也。

ひをむし しろきてうのやうなる虫の。朝

にしやうじて夕にする物也。

ぎなどいはせて ろんぎをせさすると也。

はかりごちて たばかりなり。

かびくさき 物のかびてくさくなるなり。

しみといふむし ものゝほんなどさす虫

也。

二しゐがもと

あじろのびやうぶ 車のあじろをもて。び

やうぶをはりたる也。

くぢうにて こゝのへをいふ也。

よこもれる わかき人の事也。

さゝのくま さゝのおひたる所なり。

みだりあし みだりにあなたこなたへある

くこと也。

かづらひげ ほうげのながきをいふ也。

いろなり かみを千いろ八しやくといふこゝろなり。

ひすいだちて ひすいといふ鳥はうつくしき鳥也。

三あげまき

みやうがうのいと もろ／＼のかうをかみにつゝみて。五色の糸にてむすびつけて。ほとけにまいらする也。

たゝり いとくる物也。

いせの御 いせといひしうたよみの女房の事なり。

あげまき これはいとをむすびたる物也。

まつのはをすきて すくとはのむ事なり。

ひろばかりのへだて ひろは八しやくをいふ也。

山なしの花 世をのがれむかたなきといふ

こゝろなり。

はうちすきて としよりのものいふ事也。

かべの中のきり／＼す あげまきのきみをたとふる也。

おいつきがきたまて ふみの上ひとしくかくをいふ也。

とを山どり ひとりぬる事をいふ也。

ざい五が物がたり 伊勢物語也。

さぐりもよゝと さくりなきなり。

おいかれにたれど としおひてこゑのかれたる也。

常不輕をなんつかせ侍 ふきやうぼさつと

は人をおがむと也。つくとはぬかつくなり。

ゆるし色のこほりとけぬかとみゆる くれなるのきぬのうちたるが。こほりのやうに

みゆる也。

四さわらび

いはせのもりのよぶこどり

人づてならて

物いひし事也。

まろうどぬ きやくてんなり。

ねこめ ねながら也。

五やどり木

あかずもあるかな ふそくなるとなり。

のりもの かけものなり。

よをそむき給ひしさがのぬん これ又こゝ

ろへぬ事也。

さぶらひのべたう てん上のべたう也。

おもかくし しらぬかほしたる也。

こしのしるし しるしのおびなり。

花ふらせたるたくみ ひだのたくみのとを

いへり。

かばねをつゝみてくびにかけて くわんを

んせいじのいんえんといへり。

かたしろ 人かた也。

こだに 木につきたるむしの名也。

なにがしのみこのこの花めでたる たかあ

きらのみこの事也。

なをしもの ちもくのゝちある事也。

ふずく くひものなり。

しろがねのやうき 御まへの物にあるかは

らけにこをぬりたる物也。

おしとのたまへる 天はいを給とき的事

也。

さし返し 御さかづきのさけをうつすかは

らけ也。

わかなへ色 うすあをのすこしすぎたる

也。

六あづまや

ほとりばみたらむ そはふるまひなどいふ

こゝろ也。

こち　ひとりごとなり。

こたみ　このたび也。

こてたまへり　きこえごつといふ心なり。

がまのさう　いかれるかたちなり。

ゆする　ゆあぶるとなり。

けつりたらん　けをされたるこゝろ也。

はゝぎみだつや　はゝぎみのゐたるいゑ

也。

いがたうめ　たうめは女の名也。いがたう

めはいがの局など云心也。

やかなたつみのすみ　家のたつみなり。

おほどれたるこゑ　ひさいどもの行かふこ

ゑ也。

よもぎのまろね　よもぎのやどにねたる

也。一にはくるまをよもぎふといふ。くるま

のうちにまろねしたる也。

おとしがけ　くるまやるみちの事なり。

七うきふね

つゝみぶみ　ふみをうすやうにて。くすり

のやうにつゝむをいふ也。

うづち　正月の上のうの日の事也。

またぶり　木のえだ也。

ことねり　ずいじんのやうなる物也。

さのごとき　さやうのどきといふ詞なり。

さとびたる　さとげなる也。

八かげるふ

よづかず　世にためしなきなり。

なかごもり　ゑにふれてさしいてぬ也。

うつせ　うつせがいなり。

はんさいのをび　さいかくのおび也。くぎ

やうはぶくの時さす也。

ひをものゝふたに　ひの物なり。

とみの事　きとのと也。

せり川の大しやう　むかし物がたりの事な

り。

九てならひ

めおに もんじゆるうのめなしちごの事
也。

ようめい よそをひ也。

ぬるみ ぬるげなり。

つくもがみ としよりのかみなり。

はすのみ さかづきの名也。一にはたゞは
す也。

たりたんなちりく ふえのこゑのかくき

こゆる也。

させい大とこ ごうちの上ずなり。

まろなるかしらつき ほうし也。

世中の一のところ せつしやうくわんはく

けをいふなり。

さなるいづみ おごくの事也。あのよ也。

十夢のうきはし

らうけ としよりたる人の病をいふなり。

たまどの なき人をまづしばしやどしをく

屋なり。

ひきぼし くひもの也。

いきてたづねよ ゆきてたづねよ也。

をいと いらへたるこゑなり。

かたみにおもへかし かたみはたがひに

也。

源氏の物語はひとへに色このみの道とのみ
思ふべからず。ないさうげてんのふかきむ
ねをはじめとして。おほやけのとのたゝず
まぬ。やまとうたの道。いとたけのしらべ。
しやうぞくの色あひにいたるまで。世にあ
りとしあると。一としてしるしあらはさず
といふ事なし。この物語よくよめらんは。わ
が國のことおもひなかなばにすぎ侍べし。又
五條の三ぼんはうたよみのげんじみざるは

ほいなきとに申され侍りき。そもく河海。
すいげん。しめいなどいふ抄は。事ひろきに
よりて。しよしんの人はみるとたやすかる
べからず。これによて一ふしあると葉の心
えがたく侍を。あらくこの一でうにしろ
しあらはして。道にいるものゝなかたてと
し侍り。たゞしこれにきはまれりと思ふべ
からず。すべて五十四でうのつくりぞま。よ

みやう。くてん。こじつなどは。せん達にな
らはずして。たやすくさともしらんとは。い
とおぼつかなくおぼえ侍り。ほう徳元年し
も月中の五日にしるし侍り。

一條大閤兼良公製作也。

可謂初學入門。珍重云々。

〔右源氏物語和秘抄以宮内省圖書寮本校合〕

續群書類從卷第五百十九

物語部十九

帚木別注

又稱雨夜談抄

光源氏名のみことくしういひけたれ給とがおほかなるにいとどかゝるすき事どもを末の世にも聞傳へてかるびたる名をやながさんと忍び給へるかくろへ事をさへ語つたへけん人の物いひさがなさよ

此卷を帚木と名付るとは。源氏の君中川のやどりへ。方たがへになずらへておはしましたりしに。うつせみのつれなくして。あひたてまつらずなりしかば。はゝ木々の心をしらでその原の道にあやなくまどひつるか

總檢校保己一集

男源忠寶校

なとよみ給ひしに。女。ふせやにおふる名のうさにあるにもあらずなど。返しにたてまつりし哥にて付たる名也。坂上是則が。その原や伏屋に生ふるはゝ木々の有とは見えてあはぬ君哉。といへる哥をとれるうた也。空蟬が有ながらあひ奉らぬを。ありとは見れどなき心に見る也。此卷の名なれ共。此物語五十四帖にをよぼす名也。其ゆへは。此物語はつくり事にて。なき事にはあれども。又昔有こし事どもをおもかげにしてかける也。先此物語の桐壺の御門。朱雀院。冷

泉院三代は。延喜。承平。天曆のみかどをかねたり。光源氏は西宮左大臣高明公の太宰にうつされ給しをなずらへたり。此外源氏の君の左遷には。もろこしの周公旦の東征し給し事。白樂天が事。我朝には菅丞相。野相公。在納言のためしをよそへたり。是のみならず。所々にものをなずらふる事限なし。されば五十四帖。とくく有物かとみればなく。な物かとすればある物なれば。此帚木一部の名になるもの也。天台に四門を立る中にも。亦有亦空門。この物語にあたれり。夢の浮橋の巻も。其一卷の名といへども。五十四帖の名に成物也。いかんとなれば。此物語に上中下の人々。もろくの行跡。皆夢の内のたはふれ也。たとへば莊子が夢に胡蝶となり。しらず又胡蝶が莊子となるかといふがごとし。此物語はいにしへの

夢ぞともいひがたく。此世にある我人の今の身の現とも定めがたく。ともに夢のわたりの浮橋。は、木々のありなし也。されば紫式部の筆の跡。その色ふかく其心はかりなき物也。扱此巻の始に光源氏といふより。片野の少將にはわらはれ給ひけんかしと云まては。物語の作者の詞也。是のみならず。紫式部の詞所々おほかるべし。名のみことごと敷とは。光源氏と云名は。いかめしうとほめたる心也。云けたれ給ふとがおほかるとは。世に其名高く道のほまれ有人をも。世上に云けつ習ひ也。かゝるすき事共を末の世にも聞傳へて。かるびたる名をや流さんと。しのび給ひけるかくろへ事をさへかたり傳へけん人の物いひさがなさよとは。源氏の君は好色の人ながら。おもては實をもとゝして。下には色このむ心まし／＼けるなり。

さるによりて世にしつゝ給ふ事を。誰かかたり傳へけんと。紫式部が云也。さるは世をはかり。まめだち給ふける程。なよびかにをかしき事はなくて。片野少將にはわられ給けんかしとは。下の心は好色にして。上に實をたつるゆへに。なよびたる所のなきを。好色の本意にはあらずと。かた野の少將はわらはんと。藤式部が思ひてかける也。片野の少將の事。色々の儀侍れど。作物語に片野の少將と云有。その人かぎりなき色ごのみ也。光源氏と片野少將と同じ時代にはあらねども。紫式部かくとり合。かくいへる也。作物語の人にて作物語の人に對する事。面白く書る物也。こゝ迄は此一巻の序分也。また中將などに物し給しときは

源氏の君。此卷にて十六歳。官は中將也。紅葉賀卷に。宰相にて中將もとのごとし。花宴

迄は中將なり。しかれば此卷までは勿論中將なるを。また中將などに物し給し時とかけること。不審あるべき事也。しかはあれど。かくかけるに心あり。其ゆへは。紫式部此物語をかく事。我作りたる物のやうになさずして。昔有し事どもを。さまゝに傳聞し事を書寫しなどして。取あつめ一部にしたるやうにかけり。さる程に卷々の末おほくそれをあらはせり。昔の事にいへるものなれば。中將などに物し給ひしの。過去のしうたがひなき物也。たとへば伊勢物語に。業平の極官を貞觀年中にかけるは。彼物語なり平没後に伊勢かけるゆへに。極官をかきし其たぐひ也。此儀を分別すれば。不審なき物にや。

うちにのみさぶらひようし給ひておほい殿にはたえゝまかてたまふ

源氏の君。左のおとゝの姫君あふひのうへをよすがとし給し事は。源氏十二歳の時の事。其時葵の上十六也。すこし源氏の心とまり給はぬ故に。大内にのみあり。よくおぼして。おほい殿へはたえくまかて給ふとみえたり。

しのぶのみだれにやとうたがひさこゆることも有しかど

とは。葵の上かたの人。わが方ざまへうとおはしませば。内にて是かれに御心もうつるにやと。うたがふ心也。

さしもあだめきめなれたるうちつけのすきずきしさなどはこのましからぬ御本性にて

とは。かやうに人のうたがひ思ひしかど。源氏の君の御心には。なびきやすき人に心とめ給ふ事なき御本性なるにより。さもなかりけるといふ儀也。おほん本上にてと書す

てい。亂れ給へる心はなしと云心をもたせて書り。かやうに詞をいひすてゝをくと。此物語におほかるべし。さるによりて幽にもさこゆる也。

まれにはあながちに引たがへ心盡しなる事を御心におぼしとむるくせなんあやにくにてさるまじき御ふるまひもうちまじりける

まれにとは。なびきやすきをさらふ御心なれば。すき心なきやうなれど。又ときくわれになびきがたき人を。心におもしろく覺すにより。そのかたにてあるまじきふるまひもありて。名の立事も有成べし。

なが雨はれ間なき比

五月ばかりの事也。

うちの御物いみさしつゞきていとゝながゐさぶらひ給おほい殿にはうらめしく覺したれどよろづの御よそひ何くれと

内の御物いみとは。禁裏の御ものいみ也。物忌といふは。怪がましき事などある時。物いみと云字をかきて。簾などにつけて。ありきなどもせてつゝしむ事あり。ながゐさぶらひ給とは。内に久しくおはします心也。よろづの御よそひなにくれとは。さうぞくの何やかやと。左のおほい殿御心にいれ給ふ事也。

御むすこのきんたちたゝ此御とのゐ所の宮づかへをし給ふ宮腹の中將は中にしたしくなれ聞え給て

御むすこの君たちとは。左のおとゝの御子ども也。宮ばらの中將とは頭中將也。極官は太政大臣。若菜に致仕して。ちゝのおとゝと云り。桐壺の御門の御いもうとを。左のおとゝ取給て。御子ふたりもたまへり。ひとりは葵のうへ。ひとりは此中將也。よりて宮腹の

中將とは云也。源氏君とはいとこにておはします。さるにより中にしたしくして。學問をもあそびたはぶれをも。人よりは心やすくし給とみえたり。

右のおとゝのいたはりかしづき給すみかは此君もいとものうくしてすぎがましきあだ人也。頭中將は右のおとゝの御むこなるよし。桐壺に見えたり。いたはりかしづき給すみかは。此君も物うくしてとは。右のおとゝの四君の方に。頭中將かよひ給へども。心につかぬ事也。此君とは。源氏の葵上に御心とまらぬ事をいはんとて。此君もすぎがましきあだ人なりといへる也。

君のいで入し給にうちつれきこえ給つゝ夜ひる學問をも遊をももるともおさゝ／＼たちをくれず

これは源氏君と頭中將の中よくおはして。

よろづ心のうちをもかくしあへ給はぬ事也。是が頼て雨夜の物語の序なるべし。

おほとなぶらちかうて文どもなど見給つゐてに近き御づしなる色／＼の紙なる文どもを引出て中將わりなくゆかしがれば

文どもなどみ給とは。學問がたの文也。色々の紙なる文とは。艷書の事なるべし。

さりぬべきすこしは見せんかたはなるべきもこそとゆるし給ねばそのうちとけてかたはらいたしとおぼさんこそ床しけれをしなべたる大かたのは數ならねど程／＼につけてかさかはしつゝも見侍りなんをのがじゝうらめしきをりあり侍がほならん夕暮などのこそ見所はあらめとえんずれば

さりぬべきと云より。源氏頭中將のたがひの詞にて。あらはに聞え侍り。たゞしえんずればと云すてたる次に。源氏の詞有べきを。

頭中將の詞也。心得がたきは文字也。さりながらやすらかに云すてゝをく詞。此源氏物語のならひなれば。そのたぐひとみてをくべきにこそ。

やんごとなくせちにかくし給べきなどはかやうに大そうなる御づしなどにうちをさちらし給べくもあらずふかく取置給べかめれば是は二のまちの心やすき成べし

頭中將源氏の方に有艷書を見給とていへる也。人見てもくるしからじとおぼすをぞ。これにはをき給ふらんと云心也。二のまちは次のまちと云心也。又やんごとなくと云より。二のまちの心やすきと云までは。草子の地とも云べきにや。しかればまへのえんずればと云捨たるにもよろしきにや。

女のこれはしもとなんつくまじきはかたくも有かなとやう／＼なん見給ひしるたゞうはべ

ばかりのなさけにてはしりがきありふしのい
らへ心得てうちしなどばかりはずいぶんによ
ろしさもおほかりとみ給れどもまことのそ
の方をとりいてんえらびにもるまじきはいと
かたくや

女のこれはしもと云より。頭中將の詞也。こ
れはしもとは是はと也。なんつくまじきと
は。難なきはあるまじき心也。やう／＼見給
ひしるとは。頭中將わかくをはしながら。世
上の女のさまを次第にしるの心也。はしり
がきとは。女の文かきの事。おりふしのいら
へとは。哥よむ事也。分にしたがひてする物
はあれど。手かく人と云べくもなく。哥よむ
といふべきもなきと云儀也。これよりしな
さだめ也。此品さだめの事は。世間の女の心
をおほく見あつめたる人が。源氏の君にあ
ひ奉りて。世にはかかる心ある女も有と云

ことをかたりたてまつる事也。頭中將は世
をくはしくしり給程はなけれど。源氏君よ
りはすこしこのかみにて。女のさまもよく
知給へる故にかたり給へる也。大かた此卷
は心得がたきにや侍らん。たとへば當時も
年老たる人は。五十年六十年の間の事を云
とては。其人の心はかくこそ有しか。さやう
にこそ侍りしかと云がごときの事也。それ
に當時の人の心。こし方の人の心に似たる
があるが。もし此ことはりにもとづけは。わ
づらひなく心えらるゝ物なり。

わが心得たる事ばかりをゝのかじゝ心をやり
て人をばおとしめなどかたはらいたき事おほ
かり

是もまへのつゝきなれど。かやうなる人有
よしの義也。

かたちおかしうちおほどきわかやかにて中

ざるゝことなき程はかなきすさびをも人まねに心をいるゝ事もあるにをのづからゆへづけてしいづる事も有見る人をくれたるかたをば云かくしてさて有ぬべき方をばつくるひてまねびいだすにそれしかあらじと空にいかゞはおしはかり思ひくださんまとかとみもて行に見をとりせぬやうはなくなん有べきとうめきたる氣色も

是は品さだめの第一也。心は人のむすめのかたちをかしく。わかやかなるやうの人の。何にてもしいづるわざの有をいふ也。ゆへづけてとは。しぜんきよう有て也。さやうなる人を。その方なる人のとく敷いへるが。見おとりする事有よしを云る也。此段は末摘にあたる也。末摘はよろづをくれたる所おはしけれど。琴を引給ひしを。大輔の命婦が源氏の君にかたり申たりし事よく似たる

也。又此段の始に。かたちをかしくわかやかなる程といへり。末摘はかたちあしき人也。ちがふやうなれど。ことく似る事はなけれど。一所なれど詮とする所似たるをば。それにあたるといへる也。

なりのぼれどももとよりさるべきすぢならぬは世の人の思へる事もさはいへどなをと也

此段は源氏の君頭中將に問給へるは。やんごとなきが世くだりたると。下つかたの人のなりのぼるとは。いかゞわくべきとの給へるを。おりふし左の馬のかみまいりあへるが。物よくいふ人の。世の中の人の有さまされる人なれば。中將左の馬頭にゆづりいはせらるゝ也。心は。なりのぼる人をば。世間よりは昨日けふまで下藤にて有し人ぞなと思ひいへど。すてにはや官位もあがりたるうへは。云おとすべきにあらずと云とを。

猶となりとはいふ也。惟光女藤典侍これにあたり。

又もとはやんどなきすぢなれど世にふるたづきすくなく時世うつろひて覺えおとろへぬれば心は心としてとたらずわろびたる事もいてくるわざなればとりくことにはりて中の品にぞをくべき

是は末摘にあたる也。さきにも末摘にあたるあれど。それはしわざについて也。是は種姓のくだるたとへ也。うつせみも納言の子ながら。受領の北方になればあたるべきにや。此まへの段よりする迄。大略馬の頭がことば也。

又ずりやうと云て人の國のとにかくづらひいとなみて品さだまりたる中にもきざみくありて中の品のけしうはあらぬとり出つべき比ほひ也

此品は軒端の萩にあたる也。ころほひ也とは。當時ずりやうの人のむすめに。可然がおほき由也。

なま／＼のかんたちめよりも非參議の四位どもの世のおぼえくちおしからぬがやすらかに身をもてなしふるまひたるとかはらかなりや家のうちにたらぬ事はたなかめるまゝにはぶかずまばゆき迄もてなしかしづけるむすめのおとしめがたくおひ出るもあまた有べし非參議とは宰相にならぬ人なるべし。かはらかなりやとは。さはやかなる心也。はぶくとは省の字也。はぶかずとは。身より過たる事をもかへりみず。しんしやうやかにもてなしたる儀也。これは明石のうへにあたる也。

宮づかへにいてたちて思ひかけぬさいはひとりいづるためしどもおほかるならしなど

是はきりつぼの更衣にあたれり。

もとのしな時代の覚えうちあひやんどなきあ
たりのうちくのもてなしけはひをくれたら
んはさらにもいはず何をしてかくおひ出けん
といふかひなく覺ゆべし

是には女三宮あたれり。朱雀院のみこにて。
六條院の本臺におはしけれど。手などもあ
しく。心もをくれたまへりし也。

うちあひてすぐれたらんもとはり是こそはさ
るべきと覺えてめづらかなる事とも心もお
どろくまじ

やんどなき人の。時の覚えもいかめしきが。
心もしはざもうちあひたらんは。もとより
の事なるべきの儀也。薄雲女院これにあた
れり。

さて世にありと人にしられずさびしくあばれ
たらん葎の門におもひの外にらうたげならん

人のとぢられたらんこそかぎりなくめづらし
くは覚えめ

夕顔のうへこれにあたれり。

ちくのとしおい物むづかしげにふとりすぎせ
うとのかほにくげにおもひやりことなる事な
きねやのうちにいといたく思ひあがりはかな
くしいでたることわざもゆへなからずみえた
らんかたかどにてもいかと思ひの外におかし
からざらん

是はしゆ姓させる人ならぬ人の中にも。し
かるべきが有べき心也。かたかどにてもと
は。かけたる中にもとるかたの有べき儀也。
これには藤式部が妹あたれり。物語のおも
てにも見えたり。

いでやかみのしなと思ふにだにかたげなる世
をと君は覺すべし

君とは源氏の御事也。葵の上。ちくは左のお

とゞ。母宮はみかどの御いもうとなれば。上の品にはならびなければ。源氏の君の御心にあはぬ所ありし儀也。

ひもなどもうちすてゝ

紐をさゝぬ事。源氏の君うち亂て。物語給時の様なり。

女にて見たてまつらまほし

源氏の君を女に我なりてみたてまつらば。

なをたぐひなく思ふべきの心也。此下詞あらは也。

とすればかゝりあふささるさにて

そへにととすればかゝりかくすればあな
いひしらずあふささるさに。此心そへにと
は。我心に物をりやうげしたる心也。さやう
にしてよからんとおもへばちがふ。さらば
又かやうにやせんとすれば。又たがふ事ある
儀也。あふささるさとは。行さま來るさま

のやうの事也。只こなたかなた物のちがふ
世のならひなり。それを女のうへのこゝは
よしと思へば。かしてたがひ。かしてよしと
思へば。こゝたがふ事に引哥なり。

かならずしも我思ふにかなはねど見初けるち
ぎりばかりを捨てたく思ひとまゐる人は物まめ
やかなりと見えさてたもたるゝ女のためも心
にくゝをしはからるゝ也

此詞男女のうへのみならず。君臣朋友の中
にも大切のとゞ也。

君たちのうへなき御えらびにはいかばかりの
人かはたぐひ給はんとこそせく思ひ給へぬに
だに

馬頭おほくの人のうへを語りて。世にしか
るべき女のなき事を申さんとてかくいへる
也。所せく思ふ給へぬにだにとは。馬頭がわ
が身の事也。所せきとは。上臈はよろず身

をやすらかにし給はぬものなれば。其身は
せばき儀也。いやしき身は所せばき事なき
よし也。惣じての心は。いやしき身にだに。
思ふことかなふ女はなきの心也。思ふ給へ
ぬにだにと云て。心をもたせて句をさりと。

下へはつゝかぬ詞也。

かたちきたなげなくわかやかなる程のをのが
じしはちりもつかじと身をもてなし文をかけ
どおほどかにことえりをしすみつきほのかに
心もとなく思はせつゝ又さやかにもみてしが
なとすべなくまたせわづかなる聲さくばかり
云よれどいきの下に引いれとすくなゝるがい
とよくもてかくすなりけりなよびかに女しと
みればあまりなさけに引こめられてとりなせ
ばあだめく是を始のなんとすべし

此一段のうち。塵もつかじと身をもてなし。
文をかけどとえりをしてと云所は。伊勢の

みやす所などは是に似たるべし。ことえりと
は。詞をえる儀也。御やす所は文かき上手に
ておはしける也。これより下。とりなせばあ
だめくといへるは。木枯の女にあたる也。は
じめのなんとすとは。第一の難と云儀也。此
段のつゝき惣は一段なれど。その事くゝの
かはりめに。そこはそれに。かれはこゝに似
たる様の事あるべし。

事が中になのめなるまじき人のうしろみのか
たは物のあはれ知すぐしはかなきついでにな
さけ有をかしきにすゝめる方なくてもよかる
べしとみえたるに又まめく敷すぢをたてゝ
みゝはさみがちにびさうなき家とうじのひと
へにうちとけたるうしろみばかりをして朝夕
の出入につけても大やけ私の人のたゝずまゐ
よきあしき事の目にも耳にもとまるありさま
をうとき人にわざとうちまねばむやはちかく

てみん人のさゝわき思ひ知べからんにかたり
あはせばやとうちもゑまれ泪もさしぐみもし
はあやなき大やけはらたゝしく思あまる事な
どおほかるをなにゝかはさかせんと思へばう
ちそむかれて人しれぬおもひいてわらひもせ
られあはれともうちひとりとごたるゝに何事ぞ
などあはつかにさしあふぎゐたらんはいかゝ
はくちおしからぬ

とが中にとは。とりわけなど云心也。物のあ
はれをしり。なさけにすゝむが。あしき事
にはなけれど。實なきはかひなければ。實な
る所をつよくぞたてんといへる詞也。さ
れども又まめく敷すぢをたてゝとは。う
しろみに心をいれて。わが身をもやさしく
もたず。みゝはさみがちに。びさうなきをば
さらふ心也。みゝはさみとは。びんの髪など
を耳にはさむやうの事也。みぐるしきさま

なり。家とうじとはさだめたる妻の事也。此
びさうなきと云には。馬頭がゆびくひ切た
る女あたる也。されど彼女はみめかたちは
あしかりしかど。身をかきつくろひなどし
て。心も下しうなかりしなり。朝夕の出入に
も。大やけわたくし目にもみゝにもとまる
事をば。我つまにこそかたらまほしき心也。
大やけはらたゝしきとは。主人などもちた
る身の。その主にうらみ切なる時も。又傍輩
朋友などにくちをしと思ふとある習ひ也。
さやうならん時は。心ある妻などにはかた
りもすべきを。心なき女などにはいひても
かひなきあまりに。思出わらひなどする有
べし。思いでわらひとは。くちおしく思ひし
あいてなどを。なんてうそれがなど思ひて。
そらわらひすることある儀也。あはれとも
ひとりごつとは。あはれ我身わがみならば

など。述懐の事あるならひ也。さやうに男のあらん時は。女の心にも大かたの事にはあらじなど。ふかく思ひいれて。男をもなくさめなどすべき事なれど。その心もなくて。とく敷是はなぞなどゝあはく敷いひたらば。口惜かるべき事也。されば只つゐのよすがと思ふべき人は。心たらはてあしかりなん事を。馬頭君たちにかたるなるべし。此段はさし過たるをなだめ。をくれたるをすゝめんとかける也。

たゞひたぶるにこめきてやはらかならん人とかくひきつくるひてはなとかみざらん心もとなくともなをし所有こゝ地すべし

是は天性心だての思ふまゝなるはあるべくもなければ。かやうに又一段をかける也。こめきとは。ちいさきにあらず。巨の字也。おほきやかなる性をいふ也。紫の上のおさな

おひたちなどは是に當る也。

げにさしむかひて見んほどはさてもらうたき方につみゆるしつべし

心はいとをしき女なりとも。立はなれて男のためにいたりなくば。あしかるべきの心也。此心は前に侍りき。

つねはすこしそばく敷心づきなき人のおりふしにつけていではえするやうもありかしな

ど
そばく敷心づきなきとは。心の事にあらず。みめかたちのよろしからぬ事をかくいへる也。まほなるかたちと云はよきをいへば。それに對して。そばく敷はあしき也。心づきなきとは。かたちあしければ。人の心につかぬ物也。かゝる人もおりふしのいてはへするとは。うちふるまひの心だてにて。人にまさることのある儀也。是には花ちる

里よくあたれるなり。

いまはたゞ品にもよらじかたちをばさらにも
いはじいと口惜くねぢけがましき覺えだにな
くば只ひとへに物まめやかにしづかなる心の
おもむきならんよるべをぞつゐのたのみ所
には思ひ置べかりける餘りのゆへよし心ばへ
うちそへたらんをばよるこびに思ひをくれたる
方あらんをもあながちにもとめくはへじ

あまりのゆへよしとは。心だに實ならば。あ
まりのゆへく敷事あらば。よるこびにす
べきの儀也。

うしろやすくのどけき所だにつよくばうはべ
のなさけはをのづからもてつけつべきわざを
や

是はあふひのうへにあたれり。

えんに物はぢしてうらみいふべき事をも見し
らぬさまに忍てうへはつれなくみさをつくり

心ひとつに思あまる時はいはん方なくすごき
言のはあはれなる哥をよみをさしのばるべき
かたみをとめてふるき山里世はなれたる海
づらなどにはひかくれぬかし

これは伊勢物語に。なり平の方にありし女。
出ていなば心かろしといひやせんと云て。
うかれ出しやうなる事也。此物語に夕がほ
のうへ是に當れり。哥などをよみ置たりし
事はなけれど。大かたの心だてよく似たる
べし。

わらはに侍し時女房などの物がたりよみしを
聞いていとあはれにかなしく心ふかき事かなと
泪をさへおとしはべりしいま思ふにはいと
かゝるしくことさらびたる事也

是は馬頭がわらはにて有し時といへり。た
とへば此段にいへるやうの事を女房などの
よみしを。哀に聞しがあしき事也けりと。馬

頭が思ひ返したる儀也。此ことはりを君たちにしらせ奉らんとて云る也。

心ふかしやなどほめたてられてあはれすゝみぬればやがてあまになりぬかし思ひ立ほどはいと心すめるやうにて世にかへりみすべくもおもへらず

心さだまらぬ女のさま也。是は古今におとこをうらみて。みつの寺にてあまに成て。うきめをみつのなどよみしごときの心也。此下の詞はかゝる女の心だてをかける也。

にごりにしめる程よりもなまうかびにてはかへりてあしき道にもたゞよひぬべくぞ覺ゆる此ことばの引哥に。はちす葉のにごりにしまぬ心もて何かは露を玉とあざむく。此哥あひたりとも見えぬを。あはせやう侍る也。たとへば蓮は先濁りにそみてしかもしまぬ物也。あまになる物は。にごりにそまぬやう

なれど。心はにごりにそみたる物也。しかればかゝる人は蓮の濁にしめるよりも。なまうかびなるべきの心也。さればあしき道にもたゞよひぬべしと云也。

あまにもなさてたづねよりたらんもやがてその思出うらめしきふしあらざらむや

是もおなじ女のことをいへり。あるはあまになると。又尼になさて取かへしても。みなよろしからぬとはおなじ事也。さるにより下の詞に。とあらんおりも。かゝらんきざみをも。見すぐしたらん中こそ。契ふかくあはれならめとはいへる也。

われも人も心をかれじやは

とは。さきのごとく。たとひ又そひてありとも。さやうならん女は。うしろめたくて。心をかれぬとはあるまじきの心也。是もいせ物語に。業平を捨て出し女の。又云かはした

りしかど。うたがはしく覺えて。なり平のわ
するらんと思心の疑にとよみしやうのたぐ
ひ也。其心にて紫式部かきつらんと見え
たり。

又なめのにうつろふ方あらん人を恨てけしき
ばみそむかんはたをこがましかりなん心はう
つろふ方ありとも見初し心ざしいとをししく思
はゞさるかたのよすがに思ひて有ぬべきにさ
やうならんたぢろぎにたえぬべきわざ也

前の段は。男の心ざしあるを見しらずして。
そむきうらむる事をいへり。是は又男あだ
人にてうつろはんを。同じやうに恨みそむ
かば。男はをこがましく思ふべし。されば男
の心はたのもしげなくとも。見初し契をち
からなしと思ひて。堪忍すべきの心也。

すべて万の事なだらかにえんずべき事をば見
しれるさまにほのめかし恨むべからんふしを

もにくからずかすめなさばそれにつけてあは
れもまさりぬべし

すべてと云は。まへのあまたの事を以て。か
んようよかるべきやうをかける也。此段は
紫の上に當れり。さるにより世にたぐひな
き人とは云る成べし。

あまりむげにうちゆるべみはなちたるも心や
すくらうたきやうなれどをのづからかるき方
にぞ覺侍りし

是又女の物えんじもせず。男の心にまかせ
たらんは。只男を思はぬにて侍るよし。心か
ろき方にぞ覺え侍と云る也。下の詞につな
がぬ舟のうきたるためしとは。舟は浪の千
里をも行むこそ本意ならめども。つなぐ事
なければ。舟のためあやうきにたとへ云也。
さしあたりてもをかしともあはれとも心にい
らん人の頼もしげなき疑あらんこそ大事なる

べけれ

是は頭中將のと葉也。おぼろ月夜是にあたり。まことにたのもしげなき所有し人也。我心あやまちなくて見すぐさはさしなをしてもなどかみざらんと覺えたれどそれさしもあらじ

此心たとへばわがをかしとも思ふ人もたらん人の。うらむべき事もなきを。あやまち有やうにうらみなして。それをかごと。他人に心かはしなどするとあるを。誠に大事成べきと云也。さればわがあやまちなくて見すぐさば。たとひ一たん恨みありとも。などか思ひなをして見ざらんの心也。それさしもあらじとは。心不調にしてあだなる女はさしもあらじと云也。下の詞にとにかくもたがふべきふしあらんを。のどやかに見忍ばんよりますことあらじとの給ひて。わが

妹のあふひのうへをほめて覺す成べし。

よろづの事によそへおぼせ木の道のたくみの万の物を心に任せてつくりいだすもりんじのもてあそびものゝその物とあとも定まらぬはそばつきざればみたるもげにかうもしつべかりけりと時につけつゝさまをかへていまめかしきに目移りておかしきもあり

馬のかみが詞也。女の色々のさまをいひて。猶たとへをもちて。源氏の君に云きかせたてまつる也。木のみちのしわざの實ならぬ物をば。宮づかへ人などにたとへ云也。

大事としてまことにうるはしき人のてうどのかざりとするさだまれるやうなる物をなんなくし出る事まとの上手はさまとに見えわかれ侍り

うるはしき人のてうどのかざりをば。人の家あるじといはるべき女のかたにたとへ云

也。

又繪どころに上手おほかれど墨がきにえらばれて

すみがきとは。とりわき墨書は大事なれば云る也。

よのつねの山のたゝずまる水の流れめに近き人の家居ありさまげにと見えなつかしくやはらびたるかたなどをしづかにかきまぜてすぐよかならぬ山のけしき木ぶかく世ばなれてたゝみなしけぢかき籬の内をば心しらひをきてなどをなん

まへにいへるゑのさまは。その物ともなき女にたとへ。是はさるべき人の心をきての

有べきやうをたとへ云也。
手をかきたるにもふかき事はなくてこゝかしこのてんながにはしりがきそこはかとなくけしきばめるはうちみるにかどく敷氣色立た

れど猶まことのすぢをこまやかに書えたるはうはべの筆さえてみゆれど今一たびとりなべて見れば猶じちになんよりけるはかなき事だにかくこそ侍れまして人の心の時にあたりてけしきばめらんみるめのなさけをばえたのむまじく思給へて侍る

此三のたとへを云事。馬頭源氏の君に。世間の女の有様を。とあるも有かゝるも有とかたり奉れど。まだとしわかうをはしませば。直に其ことはりをしらせまいらせがたく思ひて。たとへを引て云る也。これひとへに女のことを云のみにあらず。源氏の君。頭中將は世をまつりごち給ふべき君たちなれば。女の上にて世間の人の心をしへたてまつる物也。文集大行路註に。借夫婦以諷君臣不終也と云り。

はやうまだ下臈に侍りし時あはれと思ふ人侍

き聞へさせつるやうにかたちなどいとまほにも侍らざりしかばわかき程のすき心には此人をとまりにも思ひとめ侍らずよるべとは思ひながらさうくしくてとかくまざれありき侍りしを

是は馬頭むかしあひなれし女の心有様を云る也。

此女のあるやうもとより思ひいたらざりける事にもいかで此人のためにはとなきてをいだしをくれたるすぢの心をも猶口惜くは見えじと思ひはげみつゝ

此人のためには馬頭が事也。女の心に。我男にしたがふさまを。此人のためにはと。心にいれ思ひはげむ心也。此末の詞に。うとき人にみえば。おもてふせにやと云も。他人にわがさまを見えば。馬頭がおもてふせにやと。かたちをもひきつくろひしと語る也。

すこしをとなびんにそへて又ならぶ人なく有べき様など

をとなびんとは。官位もあがり。人々しくもならば。いよくあひ思ふべきと。女の心をとる儀也。

すこしうちわらひて万に見たてなく物けなき程を見すぐして人かざる世もやと待かたはいとのどかに思ひなされて

是は女の云詞也。見たてなく物けなきとは。官位のあさき事也。官位はをそくとも。必のぼるべければ。そのかたをまつ事は。心やましからずと也。つらき心を忍びてとは。馬頭があだなる心を見ん事は。忍びがたければ。たがひに別べきさきざみ也と云はなつ也。

はらたゝ敷なりてにくげなる事共を云はげまし侍るに女もえおさめぬすぢにてをよびひとつをひきよせてくひて侍りしをおどろく敷

かこちて

下の詞にあらはなり。

手をおりてあひみしことをかぞふればこれ
ひとつやは君がうきふし

えうらみじなどいひ侍れば

うきふしを心ひとつにかぞへつゝこや君が
手をわかるべきあり

はらたしくにくげなる事をいひはげまし
とは。女にあひて馬頭が云ける也。女もさ
めぬすぢにてとは。のどけくなき心一筋に
てと云儀也。さてたがひに此哥をよみて立
別るゝ也。されど馬頭が心ぞ實にかはらん
とはおもはぬ也。

りんじの祭の調樂に夜更ていみじうみぞれふ
る夜これかれまかりあるく所にて思ひめぐら
せば猶家路と思はんかたはまたなかりけりう
ちわたりの旅ねもすさまじかるべく氣色ばめ

るあたりはそぞろ寒くやと思ふ給へられしか
ばいかゞおもへると氣色も見がてらゆきを打
はらひつゝまかでゝ

臨時の祭は北まつりの事。十一月中酉也。調
樂は午の日也。大内にて有事也。うちわたり
の旅ねとは。内裏にたびねせん事也。氣色ば
めるあたりとは。木枯の女のもとの事也。そ
ぞろ寒きは。心につかず。身の毛だつやうの
事也。いかゞ思へるとは。ゆびくひたりし女
の心をゆかしく思ふ故に。彼家に行ける成
べし。

火ほのかにそむけて

女の家のみまなり。おもしろかるべきさま
也。

なへたるきぬどものあつごえたるおほひなる
こにうちかけて

あつごえたるは。綿などの入たるにや。それ

をふせごの大なるにかけたるべし。

さうじみはなし

本人の事也。馬頭がつま也。

ひたやごもりに

なにゆへともなくこもる也。哥などをもよ
みをかぬ心也。此衣は馬頭がためにしをさ
ける成べし。

たづねまとはさんともかくれしのびず

とは。此女馬頭にふかくとをさかりて。たづ
ねまどはさせんともせぬ也。

かゝやかしからず

とは。はぢかゝやくなど云は。只はづる事
也。ふかく馬頭にはぢずの心也。

いたくつな引て見せしあひだにいといたく思
ひなげきてはかなく成侍しかばたはぶれにく
ゝなん覺え侍りし

いたくつなひきてとは。女は馬頭きたらば。

さこそとうちなびきぬるを。猶女をこらさ
んと思ひて。わざとのけひきてよりつかぬ
儀也。たゞにはよらで春駒の哥にてかける
也。たはぶれにくゝとは。ありぬやと心みが
てらあひみねばたはぶれにくきの哥の心
也。あはんとは思へど。とかく女の心をこら
さんとしたるは。たはぶれたる心也。

たつた姫といはんもつきなからず。たなばたの
手にもおとるまじく其方もぐしてうるさくな
ん侍りしとていとあはれと思ひいでたり

うせたりし女の。物をよくそむる方の事を
龍田姫といひ。をりぬふとをいはんとて。七
夕の手にもおとるまじくといへる也。うる
さくとはうるはしきといふ心也。眞の字也。
此詞伊勢物語にあまた侍べし。

中將その七夕のたちぬふ方をのどめて長き契
にぞあへまし

たちぬふかたは似ずとも。長き契にあやからせたさのよし也。たちぬふわざはあへずぞ有けると云哥をとりていへるなり。

そのたつた姫の錦には又しく物あらじはかなき花紅葉といふも折節の色あひつきなくはかくしからぬは露のはえなく消ぬるわざなり又しく物あらじとは。馬頭が妻の物などよく染させけるをほめたる儀也。はかなき花

もみちと云もとは。春の花畑の紅葉は。雨露のしはざにてあるうちにも。花も色なくさき。もみちも色あひあしければ。露のはえなきならひなるを。さやうにうつくしく染させけるは。ありがたき事にこそと。頭中將ひはんしてほめいへる也。

さておなじ比まかりかよひし所は人も立まさり心ばぜゆへ有とみえぬべくうちよみはしり書かいひくつを音みなたどしからず見さ

ゝわたり侍き見るめもことなく侍しかばこのさかな物をうちとけたる方にて時くかくろへ見侍しほどはこよなく心とまり侍き

是は木がらしの女也。ゆびくひたりし女よりはおほくまさりけめど。心のをきてのあだくしければ。かひなきとみゆ。是又人の心のをしへにいへる也。

神無月のころほひ月おもしろかりし夜内よりまかて侍るにあるうへ人さあひて此車にあひのり侍れば大納言の家にまかりとまらんとするに

うへ人たれともなし。木枯の女にかよへる人也。大納言たれともなし。

此女の家はたよきぬ道なりければあれたるくづれより池の水かけ見えて月だにやどるすみかをすぎん人もさすがにて

木がらしの女の家のさまなり。

菊いとおもしろくうつろひわたりて風にきほへるもみぢのみだれなどあはれとげに見えたりふところなるふえとり出て吹ならし影もよしなどつゞしりうたふ

かげもよしは飛鳥井の哥也。やどりはすべしの心にてうたへるにや。つゞしりうたふ。噫。此字をつゞしりとよむといへる心は。文章を口にてなす事とあり。但こゝにていふつゞしりうたふは。式の郢曲の様にはなく。うちみだれうたふ心にや。飛鳥井は二條万里小路にありと云々。

よくなる和琴をしらべとゝのへたりけるうるはしくかき合せたりける程けしうはあらずかしりちのしらべは女之物やはらかにかきならして

律は秋をつかさどる。女も秋をつかさどる也。此比は神無月なれば。冬は又秋に屬する

物也。

庭の紅葉こそふみ分たる跡もなければねたまず菊を折て

ことの音も菊もえならぬ宿ながらつれなき人を引やとめける

庭のもみぢこそふみ分たる跡もなければ。

ねたまずと云詞。大かた心得がたきにや。庭のもみぢのふみ分たる跡あらんこそ。誰をかよはし給ひつらんと。ねたま理も侍べきを。跡もなきをねたま心は此哥にて見え侍り。惣じて此女の所へ別にかよふ人ありと。此うへ人聞いていへる儀也。心は琴の音も菊もたぐひなき御宿ながら。御ためにつれなき人をば。えやはひきとめ給へる。かゝるおりふしも。われこそ庭の紅葉をもふみ分て見はやし奉れと云心なれば。ねたまずの儀聞え侍るにや。

木枯に吹あはすめる笛の音をひきとむべきとのほぞなき

まへの哥は別にかよふ男を上人しりて。つれなき人をひきやとめけるとよめるを。女はそのかよふ人のことをば何ともいはで。つれなき人と云を。今のうへ人にしなしてよめる也。此うへ人をひきとむべきことのはなしと。琴を立入ていへる也。

にくくなるをもしらで又さうのとをばんしきてうにしらべていまめかしくかいひきたるつま音かどなきにはあらねどまばゆき心地なし侍りし

にくくなるとは。此女うへ人になまめきかよはすを。馬頭聞て思へる事也。此女は馬頭がつまなりし故也。ばんしきてうは冬の調子なれば。おりにあへる儀也。かどなきにはあらずとは。一かどある儀也。

御心のまゝにあらばおちぬべき萩の露ひろはゞきえなんとみゆる玉ざゝのうへのあられなどのえんにあへかなるすきくしさのみこそおかしくおぼさるらめいまさりととも七年餘りが程におぼししり侍なん

萩の露。玉笹の霰に。河海に引哥を書り。更にあたらざる事也。只心はうつくしく。やうそうよはくとするさまの人をぞ。御心にはおぼしめさんの儀也。七とせあまりの程とは。馬頭七年ばかり源氏の君にましたてまつる儀にて。我等が年ばかりにならせおはしまさばの心也。又七と云は。數多き事にいへば。七とせ八とせもおはしまさば。しろしめすべきの心也。
中將はしれものゝ物語をせんとてしれものとは。つねにたがひたると云心をや。

いと忍びて見初たりし人のさても見つべかりしけはひ成しかば絶々わすれぬ物に思ひ給へしをさばかりになればうちたのめるけしき見えき

さてもみつべかりしけはひ成しかばとは。なにとなくはじめてあへる人の心につくさま也。ながらふべき物とも思ひたまへざりしかば。行末遠くとまではおもはねど。なれゆくまゝに哀と覺えて。わすれぬ物にし侍れば。女もうちたのむけしき見えしなど語り給へる也。是より下の詞あらは也。

おやもなく心ぼそげにてさらば此人をこそはととにふれて思へるさまもうちたげなりき
此女は夕がほの上なり。おやとは三位中將なる人のよし。夕顔の卷にみゆ。さらば此人をこそとは。おやなくたよりなきまゝに。頭中將をうち頼むよし也。

このみたまふるわたりより情なくうたて有事をなんさるたよりありてかすめいはせたりける

見給ふるわたりとは。頭中將北方。右のおとゝの四君也。うたて有人にて。夕がほの上をおどしたる事也。さるに此夕貌の上は物おぢをする人にて。ゆくゑなく成し也。

おさなきものなどありしに思ひわづらひてなでしこの花をおりてをこせたりしとてなみだぐみたり

おさなきものとは玉かづら也。

さてそのふみの詞はと問給へばいさやとなる事なかりきや

山賤の垣ほあるともありくにあはれはかけよ撫子の花

さてその文の詞はと。源氏の君の間給へる也。文のことばにて。その人の程のしらるべ

ければ。何となく問ひ給へる也。いさやとな
る事もなかりきやは。頭中將のこたへ云る
詞也。おもしろき心づかひ也。さて哥の心
は。山がつかきほあるともはあるゝとも
也。ひげの心也。わがありさまのはかなきや
うの事也。下句は玉かづらの事にかけて。哀
はかけよと中將をかこつ心也。哥さまあは
れなるものにや。

思ひ出しまゝにまかりたりしかばれいのうら
もなき物から物思ひがほにてあれたる家の露
しげきを詠て虫のねにきほへるけしき昔物語
めきて侍りし

れいのうらもなきとは。夕顔の上の本性の
くせ也。恨むべき事をも。さぞと云んははづ
かしき心にて。いひ出ぬ儀也。

ささまじる花はいづれとわかねども猶とこ
夏にしく物をなき

咲まじる花とは。秌の庭のさま也。しくもの
ぞなきとは。ほむる心ながら。床のえんにて
云る也。

やまとなでしをばさしをきて先塵をだにな
どおやの心をとる

なでしをばさし置てとは。玉かづらはわ
が御子なればさし置て。いもとわがぬるの
哥にて。夕顔の君の心をとる儀也。夕がほの
哥は。我身をばさしをきて。なでしこの露に
哀をかけよといへるを。かやうにあひしら
へる。尤おもしろくや。

打はらふ袖も露けきとこ夏に嵐吹そふ秋は
きにけり

是又女の哥也。大かたの床も露けきに。嵐吹
そふ秋もきにけりと云る。あはれふかし。此
嵐吹そふは。頭中將の北方の忍びておとし
いはせたりし事のはげしさを。とに出ては

いはずして。嵐ふきそふと思ひわびいへる
さまかなしくや。

吉祥天女を思ひかけんとすればほうけづきく
すしからんこそ又わびしかりぬべけれとてみ
なわらひぬ

是は世中の女のいづれも心になふやうな
ければ。吉祥天女こそかぎりなく侍らめと
おもへば。また佛法めきてくすみたる方な
れば。それも心になふまじきよしをいへ
る也。

また文章の生に侍し時かしこき女いためしを
なんみ給へし

是は藤式部が物語也。是より下の詞あらは
なり。

おや聞付て盃もて出てわが二の道うたふをさ
けとなん聞えごち侍しかどおさく打とけて
もまからず

二道とは。文集に。富家女易嫁。々早輕其夫。
貧家女難嫁。々晩孝於姑。此心は我女は貧家
なれど。御ためにはせちに孝あらんと云儀
也。

をのこしもしさいなき物は侍り

をのこ程よきものは侍らずの心也。

月ごろふびやうをもきにより

腹病など云事にや。

こくねつのさうやくをふくして

草藥はひると云物也。夏の暑氣などに用る
物にや。

さゝかにのふるまひしるき夕昏にひるま過
せと云があやなき

心は。此香のうせん時。立より給へと云へる
をとがめて。くべきよひとまたずして。此
香うせて後と云るは。もしあらぬかこつけ
にやと云也。

逢ことの夜をし隔ぬ中ならばひるまも何か
まばゆからまし

心あらはなり。

五月のせちにいそぎまいるあした何のあやめ
も思ひしづめられぬにえならぬねを引懸て九
日のそんにまづかたき詩の心をおもひめぐら
しいとまなきおりに菊の露をかこちよせなど
やうのつきなきいとなみにあはせ

五月節には。天皇あやめのかづらをかけ。武
徳殿に行幸在。内弁外弁節會のごとし。宮内
省献菖蒲。内侍女藏人續命縷を群臣に給ふ。
三献おはりて。六府騎射の事あり。何のあや
めも思ひわかれぬにとは。かゝる折ふし。大
やけごとにてこゝろ思ひしづめぬ儀也。えな
らぬねをひさかけとは。えんならぬねと云
心也。五日にはえんなる事なれど。かゝるい
そがはしきおりに。えんならぬ心成べし。

九日のえんにまづかたき詩の心を思ひめぐ
らすとは。重陽宴には。天皇南殿に出御あり
て。内弁外弁等あり。文人博士等をめして題
を奉らしめて。をの／＼韻の字をさぐりて。
詩を作て講ずる事有。如此の折節に。菊の露
などをかけて。人に哥よみかゝる事也。

さならでもをのづからげに後に思へばおかし
くもあはれにもあるべき事の

哥などよみかけなどする事は。後の哀にも
なることなるを。おりふしのつきなき時。よ
みかくるあしきと云也。皆これ男女のをし
へにいいる也。

よろづの事になどかはさてもと覺ゆる折から
時／＼おもひわかれぬばかりの心にてはよし
みなさけたゝざらんなんめやすかるべき

まへはすさまじく似あはぬおりなどをさら
ひいへり。こゝは又一切そのおりかのあり。

ひとへに心もなく思ひわかぬいやしき心ばかりにてはなどかはあらん。よしばみなさけたゝん事が。めやすかるべきといへる也。これ又人のをしへ成べし。

からうじてけふは日のけしきもなをれりこれは雨夜の物がたりの翌日也。からうじてとは。長雨のはるゝに。俗にやう／＼して晴たるなど云同事也。

こよひは中神内よりはふたがりて侍りけりとさこゆ

左のおとゞの御所の事也。二條院も同じすぢにてといへる。大内よりはたつみの方に此御所有けるか。花鳥に二條院をば二條東洞院たるべきよし見えたり。中神は天一神を云といへり。

あるじもさかなもとむところぎのいそぎありく

風俗の玉だれの哥に。あるじもさかなもとめにこゆるぎの磯にわかめかりあげになどあり。これは中川のやどの事也。あるじは紀伊守也。

おぼす事のみ心にかゝり給へれば先むねつぶれてかやうのつゐてにも人のいひもらさんをつけたらん時と覺え給ふ

同じやどにて。源氏の君のたちぎゝし給ふ時。わが御上をいふを聞給ふ時の事也。おぼす事とは藤壺の宮に密通の事也。

式部卿の宮の姫君にあさがほ奉り給ひし哥などをすこしほうゆがめてかたる

式部卿宮は源氏の君の御伯父也。姫君は權の齋院の事也。ほうゆがめては方曲也。すぐにもかたらぬ也。

戸張帳もいかにぞはさる方の心もなくてはめざましきあるじならんとの給へば何よけんと

もえうけ給はらずとかしこまりてさぶらふ

これは我家と云さいばらの哥に。わが家は戸張帳をもかけたるを。大君さませ。むにせん。そのみさかなに何よけん。あはびさだをかなど云詞也。今源氏の君の給ふ心は。

こよひたれにても御そひぶしにまいらせよと云心にて。大君さませむにせんと云哥のはしをの給へる也。紀伊守が何よけんともえうけたまはらずと云は。さるべき女など有べきとも覺えぬの心也。

けはひあてはかにて十二三ばかりなるもありいづれがいづれなど問給ふに是は故右衛門督の末の子にていとかなしくし侍りけるをさなき程におくれ侍りてあねなる人のよすがにかくて侍るなり

十二三ばかりなどいふ事は。うつせみのおとゝ小君也。父は中納言にて。右衛門督かけ

たる人也。

此あね君やまうとの後のおやさなんと申このあね君とは。こ君があねと云儀也。まうとは。しやうくわんしての給へる事也。後のおやは繼母なり。

中將の君はいづくにか

つかはれ人の名也。空蟬が尋ねて云詞也。

中將めしつればなん入しれぬ思ひのしるしある心地してとの給ふを

源氏の君たち聞給へば。空蟬が中將はいづくにぞと。女房をよぶをさゝ給ひて。わが御身の官中將にておはしませば。われをよびつるやうにとりなしての給へる也。

かやうなるきはきはとこそ侍るなれとて心はぬしある物にはかゝるたはぶれせぬならひのよしを申也。源氏の君聞給ひて。そのことわりをもしらぬよしにおぼめき給ふ

也。

いとかうかりなるうさねの程を思侍るにたぐひなくおもひまどはるゝ也

かりなるうさねの程とは。空蟬は公卿の子にて。伊與の介がめとなる事は。はかなき契なれば。それをかくうさねとは心の内に思ふ也。ねはぬる心也。

鳥もしば／＼なけば心あはたゞしくて

つれなさを恨もはてぬしのゝめにとりあへぬまて驚すらん

取あへぬ迄は。鳥をそへていへる也。つれなさを恨もはてぬとは。こよひの契を實なきよしに。中將にさかせんとて。かくよめる也。うつせみの返しとりかさねても。鳥をよそへたり。

ひきたてゝ別給程心ばそく隔つる關のと見えたり

あふ坂の名をば頼みてこしかどもへだつる關のつらくも有かな。實なきよしのかこつけに。よく叶へる引哥也。

月は有明にて光おさまる物から影さやかにみえて中／＼おかしき明ぼの也

月の光おさまるとは。やう／＼明方ちかうなれば。月の光のほのかに成行ど。猶かげさやかに見えたるおりふし成べし。中／＼おかしきとは。夜半の月などより。影うすき曉月のおもしろき心也。源氏の君のたちわれ給ふおりふし也。此下の詞へ付て。よく心をつけて見侍べきもの也。

あこはしらじなその伊與のおきなよりはさきに見し人ぞされどたのもしげなくくびほそしとてふつゝかなるうしろみまうけてかくあなずり給なめり

あことは我子と云心也。小君をかく源氏の

君のの給へる也。伊與のおきなよりさきに見し人どとは。空蟬伊與の介が妻にならぬさきに。わがあひ給ひし人どと。さもなきこととを小君にの給也。くびほそしとはひわつなる事也。ふつゝかとは。下すしくふとりなどしたるさま也。われをばひわつに物けなしとて。ふつゝかなるうしろみの伊與の介になれて。われをあなづりぬると。小君になしくおもはせんとて。の給へるなるべし。

元文二丁巳年仲夏 七十三叟百里書

〔宮内省本奥書云〕

文明十七のとし文月のはじめつかた。兒女子のために注し侍り。さだめてひが事おほく侍らむかし。

宗 祇在判

〔右雨夜談抄以宮内省圖書寮本校合〕

續群書類從卷第五百二十

物語部二十

布勢屋乃塵

後水尾院御作

一桐壺のみかど。いかなるゆへにかゝる御名をさだむるといふと。世々の先達も覺悟おぼろげにして。その心わきがたかりしを。通村このことにあきらけくさときちのこなれば。よくこそおしへけるなり。桐壺はもとよりしげいさにして。五舎の一舎なるを。その名をかりて。實は桐葉のおしへよりもとづけり。周公旦成王のたすけとして。世をまつりごちけることなどを故實にして。源氏一

生のしよい。多くは周公旦になずらふこと多し。さればその名は幽玄より出て侍れば。かくいふなるべし。みかどをかく名づくることも。其縁をかりてなるべし。更に桐つばの帝を周公旦に比するにはあらざるべし。一藏人所の鷹すゆると。むかしは主鷹司侍りて。わきてつかさとれるを。仁明天皇の御宇よりぞ。藏人のあづかりとなりて。鷹飼の長六位の藏人つとめける。されどもなべての親王二世三世の源氏元服には。鷹屋の院よりすぐに給りて侍るを。いかにぞや源氏の

君にたまはるといへるとぞ。二條爲忠爲兼などもいぶかりおもひ侍りけるにや。三條實隆が抄には。おぼろげならず。これを引用ひたり。されども物語のならひはさにはあらず。四辻の宮の源氏提要抄持イを家にもちひ傳へしには。ことさら比例に越たるを物語のならひとすることなれば。東宮の元服にかはらず用ひられしを。此草紙の本意に書たる事必定せりといへり。

一は、木々の卷に侍るかたの、少將の事。在中將にひすると。さあるまじきといへる事。物語の本意しらざるもの、所意なり。紫明抄にすでにかたの、中將と同じことといひ。又はかたの、少將の草紙にも。中將のまうのぼりてさすらふといへるも。少將にてつかふまつれるを。もとのつかさとして侍るといへり。又右近が父をいへども。是は同

名異人成事分明え。

一ひたやごもりの事。説あまた侍り。また催馬樂などにも心得たがへること多し。寛文三年卯月の比。故郷の卯花といへるうたさぐりてよみ侍るに。ふるさとのひたやごもりにむかひみんなどの外面の雪の卯の花。かくよみけるに。飛鳥井雅章。烏丸資慶まいりて。をの／＼申けるは。ひたやごもりのこと。いづれの字義にてかと心得ず申せしに。物語の上心得ず侍ること。あざみ波イたはぶれてありけるが。直隱。秘居など水紋紫明抄などにも文字をあらはし侍れども。此字義分明ならず。直休籠にてこそ侍れ。上日のもの、休番してわたくしに侍るを申侍る。さてこそ物語の心にもかなひぬるといへば。兩卿かしこまり申て。よろこびてまかてぬ。一揚名介のこと。いかなるかに傳授とする事。

先輩さだかに申侍らずありけるを。通村にかたらひあひてなんよくさとしきはめたり。もとより揚名は孝經の言葉にして。介にかぎらず。なべて四分三分の官に揚名の官あり。攝政。關白。大臣。納言もまた揚名あり。其所職をしらず。そのとにあづからぬを揚名といふこと。さして秘するにあらず。この物がたりの揚名の介なるものゝ留守なりといふを。秘して申さぬことにや。又はしらずしていはざるにや。揚名介ならば權の介なるべし。其國に下らずして。權は在京する公達殿上のおのこなどの其國の守介を兼帶し。あるは三宮并院の一分召にあづかることなれば。國に下るわけにあらざるべし。それを傳授とするなり。しかれば此權の介。いづれの國とはしり侍らねども。正の介さはることありて。かはりて權の介が下りた

るを秘事となすばかり成ことなるべし。揚名の名を傳授とするにはあるべからず。かへすゝも此事あさきよりふかきに入事のならひ。なべてかくのごとくなるべし。

一きりかけだつ物の事。寔のきりかけにはあらず。まめだつなどのたぐひにてしるべし。きりかけといふものに似たるさまなればいへるなり。ごぼくとなる神といひ。ふくろふはこれにやどかき柴といふものなどいへる。文法同じさまなり。たゞふとの身ならぬは。下品のわけさだかにしるべきたよりもあらざるべし。きりかけは稻垣とかきて。大嘗會の時か。あるは兩宮の齋王あらるゝ時のいもゐの屋などしつらひかこふものにして。そのとしのわらをあみて。中にいくつらも竹をかこひはさみてをく。まことにきりかけたるわらのやうにみゆればいへる也。

それに似かよふ故に。きりかけだつとはいへる也。今もあやしき民の屋に。かべといふものをかこふたよりなきは。わらにてかこふたぐひなるべし。

一とのゐものゝふくろは。よるのきものゝとをいふといへるはとをこのめる也。ことばのつゞき。ものがたりにたよりていへる成べし。寔にはさには侍らず。とのゐとは宿直とかけり。漢語抄にも晝勤ヲ曰直。夜恪ヲ曰宿。合せて謂止乃伊云々。しかれば晝夜の朝服を入れるものをいへるなり。夜の服にはかざるべからずとかたりける。照門まゝいりて。これをうれしくかし事にてならひぬ。

一みつがひとつの事。子のこのもちゐ同じ事也。三盃一具のことは大に附會の説也。三光院かたよりの傳來にも。かくは侍らずとなん。通村存る所もしかなり。畢竟紫のうゐ事

のある夜のつとめてのことぶきながら。又あからさまにもいひちらすべきならねば。これみつがひとつ心のはからひにて。とかくによくしつらひてまいらせよとのことなるべし。子のこは亥のこのつとめてのこと。たゞうちまかせてねのこといへるなり。これみつをみつとかけるも。みそかごとなれば。うちつけならすいはれし言葉なり。大夫の監をたゞ監とばかりいへるたぐひなり。かやうの言葉づかひあまた侍るなり。此とかたく物語のうちの大事とおぼえ侍るなり。

延享元甲子年臘十二夜寫之畢。

水竹居主介依、

〔右源氏物語伏屋塵得一本校合〕

源氏物語竟宴記

〔右源氏物語竟宴記正編卷第三百十九所收也故從省略〕

續群書類從卷第五百廿一

物語部廿一

さごろも下紐

此下紐といふさごろもの抄は。ながらの橋のあたりより。万の物がたりをあつめ給へる中にも。筆のあやまりをうつしけるまゝ。ことはりたしかならざる所々をしるすべしと有しかば。古本をみるに。心もことばもわきまへがたくて過行に。かもの神がさちかきふげんだうの僧衆にちからを合て造營の次に。ねはん經の箱の底に。下紐と外題にある双紙を見るに。明神のあたへ給へると懷中してかへりけり。抑光源氏の物語の心見とけなば。此抄に及べぬ。沙彌半醒。

狹衣系圖

醍醐天皇 六十

朱雀院 六十一

村上 六十二

冷泉院 六十三

圓融院 六十四

花山院 六十五

一條院 六十六

三條院 六十七

後一條院 六十八

後朱雀院 六十九

後冷泉院 七十

小一條院 無御即位

一條院長德之比。源氏物語作之。寛弘。長德。長保。

寛弘。

顯光。兼任右大將。時右大臣。

堀河殿。此物語にみれば。圓融院の二の御子成べし。

師輔。右大臣。九條殿。坊城殿。

伊尹。謙德公。一條攝政。

兼通。太政大臣。忠義公。堀河殿。

今上。狹衣大將也。

父堤中納言。越前守。爲時。

紫式部。源氏物語作者。左衛門權佐宣孝に嫁。大貳

三位生。狹衣作者。

一 此物語は源氏物語の面かけ也。夕霧の大將冷泉院殿などにたり。又花山法皇。或はうたのみかどいまだ王侍従と申奉りし時。かりし給ひけるに。かもの明神げんじ給ひて。臨時の祭をし給ふべきよし申させ給に。我はさやうのことしり侍らずと申させ給へば。やう有て申成とてあがらせ給ひけるが。いく程なくして。覺しもよらず御位につき給ひければ。寛平元年十一月より臨時祭あり。

一 時代はたしかならず。一條院寛弘の比源氏物語作れり。四十年ばかり後歟。げんじ物語心得たらん人は注釋に不及也。

一少年の春 此發言踏花同惜少年春にてか

けり。少年とは若年の心也。是は花を踏といふ心成べし。

一中將の藤は 夏にこそ咲かゝりけれ藤花松にのみとも思ひけるかな。ことば斗也。

一ゐてのわたり

春の池やゐての川せに通ふらん岸の山吹底もにほへり。げんじこてふの卷の面かげ也。

一侍童 同前。

一源氏宮狭衣のいとこ。堀河大臣の上は先帝の内院い

もうと也。齋宮にておはしましけり。おりの後。大臣のえ給へり。さごろもの御母也。中納言中將は源氏宮の宮女也。

一そひふさせ 二人の宮女へ也。

一春宮 後一條院也。

一藤のしなひ 級字也。かたくだりとよめり。級照や片岡の心也。

一花こそはなの 万葉のうた有べし。此詞

にて定家卿。

匂ふより春は暮ゆく山吹の花こそ花の中に
つらけれ

一くちなしにしも

山吹の花色ごろもぬしや誰とへどこたへず
くちなしにして

一さるは 中納言こたふ也。

一いかにせんの哥 大將の御心を山吹にた
とへ給ひて獨吟也。

一たつをだ巻

谷ふかみたつをだまきは我なれやおもふ心
のくちてやみぬる。此哥第三卷にあり。知人
のなきと云心也。

一もやの柱により心くるしきやまで。双子の
地成べし。

一ひろのやしま 引哥未勘。心はかくれな

し。

いかてかはおもひありともしらすべきむ
ろのやしまのけぶりならては。詞花。實方
の哥也。後に加筆。

一さるはそのけぶり 思ひをあらはさんも

及なきにあらで。二ばより姉妹兄弟のごと
くにしてと云心也。當時は夫婦を妹背と云
へり。

一大殿母宮なども 可然覺しめさじと也。

一今はじめ 是より双子の地也。けれども
成べし。

一故院の御ゆいごん 此へんはやうは中す
みの侍従などいふ異本在之。

一故先帝のいもうと さごろもの御母也。

一洞院 太政大臣。後一條院御祖父。

一坊門 先帝御子。式部卿宮の御むすめ也。

一今上 さがの院。一宮春宮也。坊門の上の

御孫也。

一かゝる御中にも 堀河殿の齋宮のありぬ
の比。おやめきてえ給へる御腹に。さ衣の生
給へる事を書出せり。男君さへからさ衣の
事也。

一二位中將 さ衣の當官也。天道を覺し召
て。納言にもなし給はぬと也。

一第十六 三千塵點劫の昔。大通智勝佛と
申佛まし／＼ける。此佛未王位の時御子十
六人あり。成道の後佛所へ詣て御弟子と成
給ぬ。入滅の後十六人并たち。衆生をりやく
して。十方にして佛に成給けり。第十六番め
の御子。則この娑婆せかいにして成道をと
なへ給へり。則今日の釋迦如來也。

一おほふばかりの
大空におほふばかりの袖も哉春ちる花を風
に任せじ

一此世をばかり初に覺し召て。御道心あるゆへ。世に有とある人をば覺し召かけぬと也。さる程に世上人もの冷じく思ふと双子にかけり。

一かごと そとばかり也。

一秋の夜の千世を一夜になせりとも詞のこりて鳥や鳴なん。ことば斗也。

一しほみてば入ぬる磯の草なれやみらくすくなくこふらくのおほき

一いなぶち

年をふる涙かいかにあふ事は猶いなぶちの瀧まされとや

大和の名所也。さ衣のあやにくに心を盡し給ふと也。

一野をなつかしみ

春の野に堇つみにとこし我ぞ野をなつかしみ一よねにける

一梵網經

花嚴經の結經也。一見於女人。能失眠功德。
花嚴經文也。又尋上卷に在之。

一さだには

如經文はいかでと也。

一琴は 時ならぬ霜雪降也。相傳あらては罰が當る也。

一あめわかみこ 降臨。日本紀下卷第一に在之。天稚彦。

一源氏宮 先帝圓融院。内親王。御母中納言佐也。さ衣の御母宮。元齋の御めい也。

一中將とおなじごとくにはぐみ給へる也。

一いたゞの

万葉。をばたゞのいたゞのはしのこぼれなばけだよりゆかんこふなわざもこ。源氏の

宮の事にはあらず。萬にたるも有かと。かいまみめさるゝ也。

一音なし

州記
戀わびてひとりふせやによもすがら落る涙

や音無の瀧

清原元輔著
をとなしの川とぞついに流出るいはて物思

ふ人のなみだは。此哥叶へり。又いかにして

いかによからんをの山のうへよりあつるを

となしの瀧。是城州。

一 忍ぶもぢずり たゞみだれたる心にても

なし。忍ぶ心成べし。

一 大おとゝ 太政大臣の御むすめ。今姫君

やしなひ給て。後一條院へまいらせんとし

給へり。東洞院上堀川の
おとゝの北方。

一 春宮は後一條院。内と申は一條院なり。

一 中將内より出給ふみちに 菖蒲手にさげ

ぬ賤のおはなき也。

一 十市の里 引哥未勘。八雲の抄に在之。只

遠くと云心也。十市に別に心なし。

一 かほなども あやめおほくもちて。我か

ほもみえぬと也。隨身にとゞめられてかし

こまりたるも。いたくをひはらひそと御制

禁也。

一 ならひにてさふらへば 隨身こたへ申詞

也。

一 こひの道をば くるしきならひと。大將

御身をつみて仰らるゝ詞也。

一 あふぎを笛 あふぎにてふく事。俗にす

る也。

かはぶえ。源氏にあり。口にてうそをふくを

云也。

一 はじとみ 半蔀。源氏夕がほの卷に似た

り。

一 あれが 女房ども隨身がみにてだにと。

大將御車の過るをあかずしたふ心也。

一 軒のあやめを引落て をくれたる隨身に

追付て奉る也。

一しらぬまの 白沼歟。しらざる間とかけたるか。白沼未勘。しらなみなどの心か。哥はかくれなし。

一心とき 利根なる隨身すぐりもとめ出たる也。

一たゝんがみ 源氏にも此詞有。かたかな。

源氏になし。草のもじ也。俗にやまとがなと云々。

一みもわかての哥 軒のあやめもみえぬばかり葺しゆへと也。

一うちつけそうなどはわざと御心にいらすたゞ有まじき あやにくに源氏宮入道の宮などに御心とゞめ給へり。

一色はだへ かみのはだへよきと也。めづらしき詞也。

一御哥ども さうしの作者の卑下也。

一左大將の女御 後一條院當春宮也。さ衣

にしのびてあひ給へり。げふはあやめと哥にあそばしけり。

一こひわたる哥 五日にはねさへと根をかねて也。

一一條院の姫宮 三卷にさ衣へ參給へり。四卷にうせ給へり。

一ほのか成しかば よくもみさだめ給はぬと也。少將のかたへの文の中に。 源氏若

紫への御文。少納言への御文の中にとある面影也。

一思ひつゝ哥 ことなる事なし。

一おなじ 筆者もらしつと也。

一丁子にくろむまでぞそぎたる 事そぎたる心成べし。

一をとほの山にはなど 引哥あるべし。

一うきにのみしづむ哥 しづむ身は中く音もなかれぬと也。うきは淤泥の心成べし。

一その夕さり 五日に御參内と覺召にめされたと也。宣耀殿への御心ざしに也。

一父公へ けふはまだみえまいらせざりし也。

一中宮の御かたに さ衣の御妹。御母式部

卿御むすめ。坊門の上也。御わづらひこゝろもとなく覺召に。御ひきかぜとて參り給はず。又おとゞも御煩と也。みやうく日御養生有て參らんとなり。暑比御退出あれと覺召せども。御暇出がたからんと也。

一何しに 暑比めさるゝがくるしきと。二所してつぶやき給へ。

一さうかん しらず。

一ふせんれう 浮線綾。

一うちには 節會などあらぬ雨中の御さびしさ成べし。

一大おとゞ 當官權中納言。四卷に一の大

納言一品宮を心にかけて。中納言君にかたらひて。ぬれ衣いひ出給し人。春宮の大夫也。

一左兵衛督中納言御弟。宰相中將左大將御子。宣耀殿御連枝也。

一源中將 さ衣也。

一こよひのえんには 合奏なくして。獨々との勅定也。

一中務宮 少將。姫宮。

弘徽殿にて大將たちきゝの夜。人々姫君の御前にて。天若御子のありさま。えにかき給へる人也。

一中にも さ衣はたはふれにも横笛はまねび給ぬまい。獨々は如何と也。

一こよひ こよひはじめて吹給へと勅定也。

一いとかばかりの 如此勅定をそむかれん

とは覺召れぬ也。おとゞにもおとらず思召たるに。此ことさへ御同心なくば。曲事と仰らるゝ間。かしこまりて横笛とり給へる也。

一 こと人々も さ衣の四五番め程もなき才にて。ことなど中くく仰られて。みなのはりに。さ衣へことをも申されければ。笛をさへ心とはきにとの勅定也。

一 かうとしらましかば 中將の心。笛など御所望ならば參るまじきとて。わざとうゐくくしく吹給ふ也。

一 うへは おもしろきとおどろかせ給ふ。聞人々も殘多覺めせども。おとゞのをしへもたゞたはぶれとて。さのみ吹給はぬ也。

一 いとうたて 虚言をありくくしく申さるゝ也。おとゞの笛にまさりたるを。吹ぐるしく思はれば。仰られじとの勅定也。

一 皇太后宮 さがの院。皇太后宮は先帝の御いもうと也。

一 おとゞの いまくくしく覺さんは中將の心。御袖は天子成べし。

一 雲のはたて 幡手のごとくなびける雲也。

一 いなづまの 雷電せんと思へば音樂空にきこゆる也。

一 あざみ 俗にあざむといへり。源氏にもある詞也。

一 いなづまの哥 袂衣の歌也。雲の梯わたりて。合奏あらんとの心成べし。

一 いとゆふ 日かげにいとなどみだしたる躰也。

一 我も さ衣もさぞはれんと。心ぼそく思召也。

一 かなしく さ衣の此世をいとはしくは覺

しめせども。御門父母の御心を覺して。まい
るまじきよしの詞を仰給ふ也。

一雲のこし 雲輿。可尋。

一あやうく 御門の御心也。此世にさ衣の
心とゞめざらんとを覺召也。

一一宮は 齋院。

一此宮をば 女一宮也。御門母后も取分か
なしび給也。天わか御子の下し夜の身の代
にと。天子のさ衣へと覺召を。源じの宮に心
そめ給ひて。うけひき給はて。弘徽殿のかい
まみの夜々奉て。さ衣忍びよりわか宮をう
み給。御母我身になさせ給ひて奏し給ふ。此
御歎に御誕生の七日めに母后かくれ給を。
うき事に覺して。御病にことつけて御ぐし
あろし給也。

一后もこのみや 女二宮也。此宮をさ衣に
まいらせられて。天上のほだしにと覺しめ

す也。

一大殿には 堀川殿にはさ衣の退出を待か
ね給へるに。いよの守來て。天わかみこの下
給へる事を申をさかせ給へる也。

一ゐ給へらん 天上と申まゝ。跡をだにみ
んと覺召御心の中を。母宮おどろき給へる
也。

一世はいかに

一ちくま川 引哥未勘。ほり川殿禁中への
道すがらの御涙の事歟。

一へいのつらく 此あたり 壁の頬なるべ
し。
異本在之。

一中將 ちととの御迎に。殿上の口まで出
給へる也。

一ためらひて 涙に咽給へるを。すこし思
慮有て。御前へ參給ひて。何事もいひからち
ととの詞也。本才の外。琴笛などはをしへ給

はぬと也。

一たはぶれにても 爰もとてにはむづか

し。たはぶれにもまねばじと思ひしと也。

一いかに又 たゞ御一男と也。

一つらくなんちもふ給へらるゝ 異本あり

いかゞ。

一中將 ことぐしき御遊にくたびれ給へ

る成べし。

一みのしろも 天のは衣の代に女二宮を參

らせんとの御哥也。

一さにやと 女二宮の御事と推量ながら。

むさしのゆかり。源氏宮ならばと也。思ひ

くまなき心ちながらかしこまりて。

一紫の哥は さ衣の心は。源氏宮ならばと

の心を。何とも天子にはえ心得させ給はぬ

心也。

武藏野のひかひの岡の草なればねをたづね

てもあはんとぞ思ふ。小町。何も御ゆかり也。

一よういかたち 双紙の地也。

一二宮は みかどの御心也。

一なく一こゑ

夏のよの臥かとすれば時鳥鳴一こゑに明る

篠目

一母宮いかにかうじ 困。せめつめらるゝこゝろ也。くたび

れたる心也。窮。同。源氏明石巻にあり。

一御てづから 御膳などとりまかなひ給へ

ど。ふよう。不用也。用ひ給はぬ也。わが方へ

とあれと母宮とゞめ給へり。

一木幡の僧都 三井寺末寺。名は不知也。御

堂關白殿御孫。

一家つかさ 家司。職事成べし。

一御いのりのさいいとちたげに ことごと

しく覺召を聞て。さるまじきは。源氏宮ゆ

へ身をいかゞと。さ衣の歎給ふ也。

一うへのいみじき 女二宮は心につかず。

源氏宮あさなき時よりなれ給へる面かげ忘れがたくて。御身の代はかたじけなくもなくて。たゞ源氏の宮ならばと也。

一色々に哥 是よりさ衣と號す。紫に御

身の代はかさね給はじと也。

一ねぬに

夏のをねぬに明ぬといひ置し人は物をや思はざりけん

一山ぎは みねの雲也。うす雲の卷にあり。

當時は山もとの心に用也。

一花たち花

今朝さなきいまだ旅なる時鳥花橘に宿はからなん

一夜もすがら さ衣。時鳥のごとくに。鳴ね

を聞知人のなきと也。

一 身色如金山端嚴甚微妙 法花經序品。釋尊法

花を説給はんとの瑞に。白毫相の光にて。東方八千世界を照し給へる時に。東方の國土佛の身相のいみじき事をいへる文也。

一 あまりなる有様かな 又都卒天のむかへにこそなどかうしもと。いましく思召也。

一 さ月の空

一 水こひ鳥 極暑の比鳴鳥也。三笠山にあり。

一 齋院 さがの院第一。源氏の宮の御いと

こ也。

一 在五中將 此日記見えす。伊勢物語なる

べし。

一 女一宮と匂宮との事。源氏宇治ににたる所あり。

一 我ばかり 室の八島の烟は昔よりたえず

立也。さ衣もとしへて源氏宮に忍びこがるゝと也。

一 岩さり

吉野川岩さりとをし行水の音にはたてじ戀はしぬとも

一 かよはぬさと 引哥未勘。

一 君も さ衣の御顔色かはらんと也。

一 さるべき人々 眞實の御おやならぬ事を覺召也。

一 たれも めのとなども。さ衣の御心をしらぬよと也。

一 ありてうき世 引哥未勘。

一 うへも 御門のさ衣を同車にて退出の後參らずと被仰也。

一 げんじの宮を 春宮へ參らせぬと御門恨給ふと也。

一 右大臣 當春宮へと也。系圖相違歟。

一 何かは人の 右大臣殿のむすめにきしろはんもいとをしと。さ衣へ父おとこの御談合也。

一 ついのことぞかし 終に春宮へと覺召ながら。さ衣の胸ふたがる也。

一 權中納言 太政大臣。一條院女院。東

院上。左大臣。今は權中納言。春宮大夫兼官歟。御兄弟也。

一 右のおとこのひすらんむすめ 此御方源

じの宮におとらんと也。

一 みづからくゆる なま孫王とあれば。王孫を今姫君自悔歟。

一 はなたか 鼻高。さ衣かいまみに。前推量にたがはぬと覺召也。

一 ぼへえまれ さ衣の顔色をおとこの御らんじて。わかかりし時の事仰出さるゝ也。是より女の相論也。

一 故院の 別事は御憐愍ながら。好色のかたはかたく御制禁なれど。かしこく身をぬすみ出てみし人有しを。三人のうへにをしけたれてやみしと。むかしがたり也。おとこの今のうへ三人也。

一 ひとりあるは 自然好色のかたへも。かろくしき事出来と也。

一 かの御けしき ふゑの祿。女二宮の事也。

一 うちくにも 女二の宮の御事。こなたより仰られよらんと也。

一 あなむづかし さ衣の心也。中くなめげならんの心に。おとど御覽じて成べし。

一 心にから おとどの心たちまちにこそ詞也。

一 わづらはしくて ひがくしかるべきとのけしきをみて立給也。

一 外ざまにの哥 げんじのみやををきて。

よそへは心うつすまじと也。

一 年をふる涙かいかにあふ事はなをいなぶちの瀧まされとや

一 母宮 さ衣の參給へば。暑氣にややせ給へると。母宮の御詞也。

一 殿のさばかり 母上のわかくすぐれ給へる也。

一 夏やせは さ衣の御詞。かたへすしき風にしたがひて。行衛なくならんもあしき事かはと也。

一 わたし守 未勘。

一 めづらしからん 母宮の女房衆なるべし。

一 中務

東路の道のはてなるひたち帯かどばかりはあはんとぞ思ふ。そとばかりは恨をかけんと也。いかにぞや残りゆかしさと。さごろも

の御詞にてみわたし給へる也。

一とのゝ 堀河殿の女二の宮へほのめかし

さ衣の御先帝の御妹

給へとあれども。大宮はしたなく覺しめすと也。

一たゞさばかり 女二を身のしろにと有し

を。めんぼくにてあらん。天子にもあはれとや覺しめさんと也。

一數ならぬ すきくしき事このまで。か

げの小草のかずならぬをたづねいてばやと也。

一さらずば又いくよも有まじきとあるを。母

上の御顔色もかはりて。たはぶれにもゆゝしき事なの給ふそと也。

一ものうく 女二を物うく覺しめさば。し

いてまいらせ給はんや。まして母宮すゝまずばあるまじき事と也。

一一日三位 母宮御心にたがはゞ危也。去

ながら一日坊門の上の御兄弟の申されけるは。笛のめでたきに。女二宮のさかりにおかしくましますを。行ふのたのもし人にゆづらんと。天子の宣へるとかたられし也。忝聞過されんもいかゞと也。

一かくだに 如此あらばいかゞとて。さ衣の立給へる也。

一幕ぬれば 内へまいり給へるついでに。

あやめの哥よめる所を尋給へば。みをさし隨身申也。長門守家にて。其むすめは中務宮の少將の御めのと也。大納言殿の五節まひしと二卷にある也。此物語は後の事をまづ書出筆法見分べき也。

一中宮 堀河殿の御むすめ。春宮の御母。坊

門上がちに殿もおはします也。宮の。春宮の御事成べし。

一おほきおとゞ 洞院上中の第一と云也。

本柏は根本の心也。礮上ふるからをのゝもと柏もとの心は忘れなくに。同心なり。ほこりかにて。又わらゝかなるは和字也。源氏玉かづらを云也。

一 かくさまゝ 春宮などをもてあつかはるゝをうらやみ給へり。

一中將 さ衣は源氏宮のふしめに成給へる時の面かけ。てさぐりににたるもやと。忍びありきし給へど。にたるもなさになぐさめかね給へる也。わが心なぐさめかねつ更科やをば捨山にてる月を見ての心なるべし。

一 春宮に さ衣まいり給へば。入ぬる礮。しほみてば入ぬる礮の草なれやみらくすくなくこふらくのおほさ。

一 みだり心ち さ衣暑氣により参り給はぬ也。

一 なにごゝち 春宮の御詞。物思ひならば

へだてなく申されよと也。

一 物思ひに侍らず。只やつれたると。かいなをみせ給へり。

一 げんじの宮 春宮の御心成べし。

一 なかすみ 古物語なるべし。未勘。大かた此物語にて可知。

一 人のとふまで

忍ぶれど色に出にけり我戀は物や思ふと人のとふまで

一 さらぬ 中すみの物がたりに有べし。有がたき戀の山にはまよひ侍らじと也。

一 いか斗戀の山ちのふかければ入と入ぬる人まどふらん

一 とすくなゝるけしきやしるかりけん。いてあるやうあらんとの給すも。御心ならひとて。

一 わが心 かくれなし。

一誠ならぬ御連枝と也。源氏宮は御兄弟のやうにはあれどもと也。

一せんようてん さ衣の忍ふ事かひ有まじとて御退出也。

一二條大宮 仁和寺威儀師。うづまさに飛鳥井君の御參籠を。めのとかたらひて。ぬすみて行にあひ給へり。おくにてよくきこゆる也。丸がしら。法師也。圓頭と云也。さ衣の御車をみる也。

一わらはべ 供の童僧具を持たるべし。

一がやく 源氏物語にあづま人などの物云聲也。

一しばしをしとてめて とてめずして。車禮慮外ととがむる也。

一母上は 飛鳥井君を云。童のある故。尼公かみんと也。

一法師かほをかくして 威儀師にぐる也。

牛飼をとらへて尋に。佛のばちにてみ付らるゝと有のまゝ申也。たゞとく車やれと。威儀師君をぬすみえて。牛飼にいそげといふゆへ。み付られたると也。

一師にしたがへ 師匠にはしたがふと云法文を聞たる故。車を急ぎたると申也。いまよりはしたがはじと。をそれたる間ゆるせる也。

一君に ありさまを申に。常に制するに。あらけなき事と仰らるゝ也。

一そのわらはに 童にとはんも。にげて行かたもしらず。こゝもとに法師かくれてゐて。つれにこんと云て。御繼松もまいらぬ間。くらけれど車まいれと也。

一ぬすまれたらんは さ衣の御詞也。主の心にもあらぬ事ならばわびしからん。くらき道にまどはんを。法師本意のごとくにつ

れてゆかん。さなくばこよひかくてあらん
はいかと覺召也。殿へ先こよひはつれて
やかへらんと也。威儀師がけさかづきてに
げたるすがたにて。道中手もやふれつら
んと也。

一あすか井に^{うたひ}_{物也}やどりはすべしかげもよ
しみもひもさむしみまくさもよし。やど
せよともいかゝ覺し召ながら。車へ乗うつ
り給へる也。

一いとなよく 飛鳥井の君の躰也。あな
いとをし。さ衣の御詞也。

一もろこしの吉野の山にこもるともをくれん
と思ふ我ならなくに。うちすてゝ心うくに
げたると有心也。

一ありつるかしらつき丸犬とこそみ分つれ
と也。

一なをほい 法師と心あはせられし事なら

ば。さ衣のかへり給はんと給ふ御聲。さは
かりはさ衣と覺えながら。又誰にかとは
づかしければ申さぬに。又すてゝおはせば。
法師きてつれてゆかんと思ひて。ほのく
覺えたる所を申さんと思ひながら。わな
かるゝけしき。さ衣の覺召たるより。たゞな
らぬ人のさまなればくるしく成給也。

一さらばかへらん 御心ならぬと聞ま
に。いとをしさになんと也。

一何かなき給ふ 心みに法師此邊に有べし
との給ふ也。

一おはしぬべき さ衣のすてゝをきて歸り
給はんが侘しきと也。

一ほり川といづくとかや 飛鳥井の詞。さ
ていかにといふよりさ衣の御心也。こゝも
と異本あり。さていかにと云けはひ。いとら
うたげにおかしうみまさりしぬべき人にや

と。こよなく心とまりて。をくらんと思召つれど。心やすきさとの名なれば。車よりあり給はて。堀川へさ衣も入給へり。

一さていかゞとさ衣のとひ給へど。飛鳥井の君なくより外の事なれば。をしあてにさ衣の仰らるゝ也。

一いまゝて 宿の人の詞也。さて戸をあけたれば。蚊遣火の烟たるを。さ衣の御覧じての御歌也。

一わが心かねてや 思ひの空にみちたると也。行方しらぬは。姫君に御心とまると也。

一物おぼえ 飛鳥井の法師にみえじとて。こゝをゝしへつると。さ衣をはづかしく思はるゝ成べし。

一大輔の君 むかへの車にそへたる人成べし。

一覺えなき さ衣の詞也。

一うちもこそすれ うちたゝくと云心也。

一あやしう さ衣の御心中也。さるべき宿世かと也。

一いてや 法師に手なれつらんと覺しめす也。

一有つる 法師に思ひおとし給へるかと也。

一とまれとも 道のしるべうれしと思はれば。とまれとはの給ひなましとある詞の哥の心也。飛鳥井のうたひのみまくさもよしと申さん所にてもなしと。卑下なるべし。かりそめのやどりと也。

私ニのちに書加ル。ちぎりありて立とまらんと前句に。それとみてうち過ぬべき飛鳥井に。定家句也。

一その水かげ かげもよしの心ふくめり。飛鳥井にの哥 かげみたくてやどらば。

御秣がくれは法師かくれゐてとがめやせん

と也。

一車まつほど 人にみせてをき給へとの詞也。さて車よりちり給へる也。

一御車 二條よりをそくまいるほど也。

一家の人く あやしがるほどに。御車ま
いりたる成べし。

一物ぎたなく 法師に心清くなれずは。さ
衣の宿執と思召也。

一かねていみじう げんじ宮など成べし。

一このをんなは 例の系圖を今かけり。帥
中納言の娘。今姫君の
いとこ也。

一主斗頭 かぞへの頭がめにて有しが。徳
有事を思ひて。仁和寺法師にあづけけるに。

法師おほけなき心付て也。

一車なども 威儀師かりけるたよりと也。

今根元をあらはす也。

一有つる牛かひの めのとのもとにきて。

二條までの事かたりければ。さ衣を誰なら
ん。姫君いかになどいひけるほどに。さ衣は
かよひ給し也。

一そのうち 威儀師は無音也。めのと人や
りけれど返事もせぬ也。思ひなげくとも。め
のとの心成べし。

一この人 いざしが事也。今はまかなひす
る人もなし。源氏宮内参るに人尋給に。ま
いり給へ。めのとはいづちへもまからんと申
也。さ衣は誰にておはしますぞ。姫君はしり
給はんと也。

一しらず 不慮の御身上と泣給へば。め
のともさすがうちなきて。ある人一日御門を
そくあけたれば。檢非違使別當息少將とさ
衣の名をかり給ひたる也。内大將外別當と
て近代諸司代也。別當殿子をあなづるか。門
役侍にをしてあけさせんと云也。さるほどに

まれくまいる女などもおちて不參也。

一年老て　めのとの申也。我は年老ぬ。あづ

まへさそふ人にやつれてゆかん。此君を誰にかみゆづらんと也。

うちなきて　姫君はいづくへ成共めのと
の行かたへと也。

まことにしる人も　奥州の將軍のめに成
てくだるべし。君は別當殿の御子の少將殿
かたらひ給へと也。

さるは　是よりさ衣の御心成べし。姫君
におとる人もみなれ給はず。此事のめでた
しとは覺しめさねども。心にかゝらぬひま
なく。物ぐるおしきまで覺しめすも宿執か
と也。

またるゝ　飛鳥井君にまたるゝよなく
なく紛て通給也。

一御ともの人　吉祥天女ならん　源氏品定

に吉祥天女を第一にせり。さりながら法氣
付くすみて如何と云々。ものげなきやどり成
といへり。

かくいふほどに　東へくだるべきに。君
を残してもいかゞ。又ぐし奉らんもいかゞ
と也。少將殿通ひ給へども。おぼつかなきと
云躰也。何として世をすぐし給はんと泣な
るべし。

一しばしの程だに　姫君の詞也。我身をう
しなひて下給へと也。

一さらばいてたち給ふべきにこそ　又少將
殿の心深きをみすて給べきもいかゞ。又あ
さましき人にぐして御下も有まじき事也。
いづれもことはりと也。

一いまいくか　姫君の心也。

一たれとだに　さ衣の御名かくしゆへ。淺
き契りとて。みちのくへ下事もほのめかさ

れぬまゝ。さ衣も名かくしなどをおぼつかなく思へると。深くこの世のみならぬ契をいひなぐさめ給也。しら波のよする渚に世をつくすあまの子なれば宿もさだめず。夕がほの卷におなじ。

一源氏宮ふるき跡　在五中將のふるきゑ御覧じほのめかし給へる好色也。侘ぬれば今はたおなじ難波なる身を盡してもあはんとぞおもふ。

一人めこそ　源氏宮在五中將の時のやうなるうき事をみゝにもきかじと覺しめす也。
一岩間の水　引哥未勘。つぶくくと聞え給べき人間なき也。

一大宮　さ衣の母宮と碁うたせ給へる時分也。

一けんそう　顯證。あらはなると源氏抄弄花にあり。俗にもくさんのこゝろ也。

一千夜　宮の御かたちは。

秋のよの千世を一よになせりとともに残りて鳥や鳴なん。久しくといはんためなるべし。飛鳥井と覺し召くらべらるゝ也。

一さてまぎらはしに　さていづかたの御せんど。かちは又いかゞなどとひ給へど。碁のこたへはなくて。母うへのさ衣を見付給ひては。一切別の事は覺召ぬ也。源氏宮は御返答なし。母上もとかく聞え給はて。内よりさ衣をよべ度々尋給へるとの詞也。

一なをかの　侍従の内侍。二宮の人也。二宮へ御文など參らせ給はぬはひがくしきと。むづりながら。母宮はさ衣のまゝと覺召也。

一その御いらへ　二宮の事は何とも仰られずして。殿の。堀川殿のれいならぬは。二宮への事に御勘當かと也。

一東院

太政大臣御むすめ。東院の御しつらひを何事

ぞと問給へば。いま姫君の事仰られて。それをむかへ給へる用と也。宮の少將といふにたるとの給へり。

一先帝

式部卿宮

源氏宮

後式部卿宮

坊門上堀川殿の北方に成て中宮うみ給へり

宰相中將

姫君藤つばの后さ衣の御位の時一宮うみ給へり

男子

式部卿の宮の御子めさるゝ也今姫君の一腹宮の中將に似たり母は宰相中將の子と名乗故系圖如此此母は常磐の尼公の妹也

系圖は式部卿宮の中將とあれども。堀川院の御子にてあらひと。さ衣の御詞也。

一忍ぶべき 御子などの有まじきとあるを。大宮いましく覺召也。世の中をあだ

に覺召事はつねの事ながら也。

一かばかり 忍ぶべき人などゝあるさへ。

大宮かく覺したるに。世をのがれんの心などを覺しめして。涙ぐみ給へる也。

一こゑたてゝ哥 さ衣。心はあらは也。

一蟬鳴黃葉漢宮秋なり

一さばかりからは 双子にみる心也。あら

きゑびすもさうしの地也。

一日の暮行

百種の花の紐とく秋の野に思ひたはれん人なとがめそ

一我だにもと ねにたてられぬにと。もど

かしく覺召也。こゑたてゝの哥の首尾なる

べし。

一かの程なき 飛鳥井の小家を覺しめしい

づるは。大かたならぬ覺えなるべし。

一おはして やがてあすか井のやどへ也。

一こざらましかば 引哥未勘。

一ひるの 源氏の宮と思ひくらべ給へり。

思事かなはずは源氏宮の事也。飛鳥井君世のほだしとやならんと覺しめす也。

一涙のもろさをいかゞ心得らんと。物なげかしげなるが。いよく哀に思召也。奥州へ下べき比なるゆへ成べし。

一久しう 物あはれなるを御覽じて。世をのがれんと覺召まゝ。例の人の心中ならぬをみ初てからみすてんと。さらに覺されぬと也。

一さらば 草亭あかてこそ思はん中ははなれなめそをだに後の忘れ形見に

一逢には

思ふには忍ることぞまけにける逢にしかへばさもあらばあれ

一これはさ衣にてあらんと也。わが身に似あはずと也。

一かりのはかぜ 引哥未勘。

一花がつみ かくみるだに不似合に。みちのくにへ下たらば。あさかの沼の水のたえなんと也。

一年ふとも みちのくへ下事はしり給はず。淺と斗心得たり。

一かくいと さ衣の御詞也。なをざり事はしらざりけり。句。心より外の不慮のさはり有とも。さ衣の御心はかはらじと也。いとかなしくは飛鳥井君の心中。かくなんとは。くだる事をほめかさばやと思へども。人々しき事にもあらずと。思ひとるかたはつき心ながら。淺ましき心と思ひ給はんと。せきやるかたなし。

一君は たゞ名乗もし給はぬを。たのみが

たきと思ふかと覺召て。はし鷹のとかへる山の椎柴の羽かへはすとも君は忘れじ。とかへる。十字鳥と云々。未決。

一まことや 東院のうへ今姫君をむかへ給へり。はたちなれども。おほどき過給へる成べし。はな／＼ともてなし給へるに。いかゞと双子のおぢ也。又なき物にもてなしかしづかれ給へる。母にもめのとにもをくれ給へるに。まめやかに後見する人なきに。はればれしくてほれ／＼しきと也。

一うせにし 今姫君の母のなまじゐのゆかり。物みしりがほなる有けり。伯母の尼公。常盤の尼の妹。今姫君の母上也。

一ゆへ／＼しげにて母代にしたり 東院の上時々母代を御覽するに。御心につかねども。あまり人の心のこまかなるは見しり給はぬ也。心をやりてうへはかしづき給へる

成べし。母代よくせずば何ごとぞしいださんとも也。

一心にまかせ 作名親共を云て若女房達多也。殿上人など、參會有なるべし。

一君は 今姫君はあがこのごとくと也。しつらひ有さまなどを。母めのと世にあらばみせんと。心のうちに覺召也。よしなき母代などにまかせられてと打なげき給也。さりながら人のみるにはおほどきておはします也。

一九月なをしもの 縣召除目に未落居等之事かきなをす心也。末代斷絶也。源氏寄生にあり。

一よろこび申に 中納言參賀也。内又春宮へ也。先大殿へ見え給へるに。こといみもならず。ゆゑしく覺召也。

一おほき大臣殿への次に。今姫君の西の對へ

行給ふ也。

一かの后 中宮也。今姫君御連枝也。中宮の女房達もこなたへと人々申つると也。

一ひもどもの 木張の紐どものよらはれ。

よられたるをとひきかくひき。とみかうみなどの詞也。

一いまやそゝきやむ そよめくをとのやむかと也。

一やうくのどまる しづまる也。

一からうじて さ衣をみて。あな物ぐるはしや。此間の殿上人はさ衣に見合に土などの色と也。楊貴妃のたとへにある詞也。源氏に有宇治卷。

一此みすの さ衣の詞なり。

一そこらいしく いしくしと世話に云。ひしと又俗に云。ひしくと居たる心也。

一そゝや 先は不用也。君の給へくとて。

にぐるも有べし。

一物にくるふ君かな 丸はふようとて。そ

ろくばしりにて逃に。きぬのすそをとらへたるに。たふれふしたる也。

一ぎふく 俗にわらひ入ぬれば。喉かぎめくと云詞成べし。

一このみすの あへず。不似合也。

一なをたゞ消入 絶入と云心成べし。

一こはいかに

おぼつかならうるまの島の人なれやわがことのはをしらずがほなる。琉球をうるまの島と云と也。

一たゞうらみ哥

一はいと 母代と云心也。わう君。源氏物語に王命婦と云

同。

一たうしは君なし たはふれは君なし。はと云詞筆誤歟。

一いづくならん　これよりさ衣の心也。

一いてやさぶらふ人。句。人がらこそよき人は
おかしきも。さ衣をさしての詞也。

一かばかりにては。句。わかき人たち。これにさ
し出ぬがよからんと也。

一さすがに　母代がみなくをにくみわた
してさしよりて也。

一めづらしき　母代の詞也。覺したがへた
るかとまで。めづらしきまゝ思ひたがへた
るかと成べし。

一よしの川の哥　いもせとは兄弟の事に用
る也。さ衣と今姫宮御兄弟ながら。うとく
しき人たのめなる名とよめり。

一げにはいと　母に成てよめる舌利と也。
のどかはくは。老人口中うるほひなくて喉
乾也。さこしめしたる母代と也。

一うらむるに哥　人だのめなると恨給へる

に淺なると也。

一又ある本

しらせばやいもせの山の中におつるよし野
の川のふかき心を。源氏物語にも本に侍る
などあり。其文躰がおぼつかなかりしに。う
れしき御けはひと思ひ給へるに。ものをあ
しざまに母代の哥によめるとの給へば。母
代うちわらひて。今より御見參をつとめ給
へ。わかき人々おもひむせぶと也。

一犬もとき

一けふは　中納言參賀の次也。おまへにか
くと聞えさせ給へと也。みすのまへにいか
になれど。かくごん宮づかへのらうもなさ
ゆへと也。

一あれをば　さ衣をみ給へといひつゝ。我
もくきぬをかづきて。一所にまろびあへ
るに。さ衣のどかにみ入給へる也。

一かうぞめ　今姫君のめしものゝ色也。

一ひるねしたりけるが　人々のさはぐにめをさまし給へる也。

一あふなく　奥もなき心也。とみにえそむき給はで。さ衣とみあはせ給へり。近所の女房衆よりはよきと也。

一かのせうと　今姫君一腹。式部卿宮の御子と名乗出し少將也。それによくにたり。おとどにはにずと也。同やうに心も中將に似たるべし。

一又の日殿の御前にて　今姫君の事申出し給へり。

一うちくの　おとどの御心也。さ衣は御子ながらもはづかしく覺召成べし。

一几丁の　あかしかりしを念じ給へるさ衣の御氣色を。おとど御覽してうちわらひて。おとど覺えもなきまゝ。姫君などのなきに

もとり出ぬ物を。ありつかぬ有さまとうめき給へり。

一あさましと　ねおきのかほを御らんじ。たしかにおとどの御むすめと名乗て。又さすらへんはいかと也。

一いざや　おとどの詞成べし。

一まこと　飛鳥井の事也。此邊異本おほし。君をもまことにとむべくもなきに。人しれずから君の心也。みるめにはめのとのみるめ也。京にも獨ずみこそうしろめたからめ。おやめのと千人より。おとこのあるはたよりと申也。男のおはせぬ程こそなれば。いまはやくなし。用にたゝずと云也。

一いかに思ひ　めのと御門の鑰うしなひたるなどいひて。さ衣をいとひがほ也。御ともがらはさ衣の御供衆。もんをふみこぼらて入なまほしき折々有けりと。さ衣へ申上に。

めのと又威儀師にとらせんとするかと覺召て。女のさやうの事に思ひむすぼるゝかと心得給へり。

一いと心つきなくゆゝしけれど 女君のありさまのいてやさらばとて。異本。覺召すてらるべくもあらねば。

一人しれず 源氏の宮の事也。

一いまをのづから さ衣と知てはいとはじ。又かくしてをかるゝ所も有べしと覺すなるべし。

一女君にも さ衣の御詞也。めのとがにくむ成べしと也。

一音なし

戀侘ぬねをだになかん聲たてゝいづく成らん音無の瀧。いざ給へ。わづらはしさのあれば忍ぶ故。おぼつかなく思はるゝも理と也。一我は何事にて さ衣の御詞也。あながち

にもしられじと覺めさず。名をもかくし給はぬと也。いやしきにも契はかはらぬ心なるを。猶こなたをたのするゝ心のなきと恨給へば。此別當の少將と思はせ給へる也。さ衣とをしはかる也。

一さそふ水

侘ぬれば身を萍の根をたえてさそふ水あらばいなんとぞ思。又さそふ水あらましかばと。物あはれに思ひて。

一せいすべき人などあるは 少將殿にてはなしと也。

一かりそめに 東へくだるをやむべきにもあらず。又めてたき御ありさま成に。行かたとてもめやすからんもしらずと也。

一もりのうつせみ 引哥未勘。

一かくいふあひだに 懷妊成べし。東へ下の思ひとみるに。つけ帯あらはるゝまゝ。少

將殿へほのめかし給へとめのと申也。

一たのむべき　さ衣を眞實たのまばこそと
君の詞也。

一みえぬ山ちとは思ひながら　懷妊をほの
めかさんとは思ひながら。かけてもまして
云出給ふべきやうもなくて。下の日をかぞ
へて歎給へり。

一此殿の　さ衣のめのと。大貳式部大輔道
成。三卷に道季。さ衣の御身ちかく常陸守北方。
顯也。召つかひ給へる也。

一めもなくて　獨住也。

一みづからは　君はさゝ入給はぬに。めの
とはみに付たる也。

一たゞいまは　心はうづまさにての事也。

かく事共。威儀師も相違也。公達とてもたよ
りならずと思へり。さて東へ下などおどし
て此頃申成べし。

一いひをこせ　めのとのあたりへ成べし。

いとおもふさまも。今さかりヒイなどなるべし。
一寺　うづまさにて有まじき事とめのと云
し也。

一ほそさんたち　やせ公達のかけめ。手か
け物と俗にいへり。

一おとゝ　殿の字をよめり。
一いてたち　料などよげにをくる也。

一つくしへの出たちはして　姫君には東へ
の出立はとゞまりぬ。御懷妊にてあるとい
ひなせり。

一うちはへ心ち　命も惜からざりしに。御
懷妊の身ゆへ。少我ながらいたはしく成給
へる也。

一野分だち　さ衣の忍び入給へり。かやう
のからさ衣の御詞也。隙なくうちかさねて
も。へだつるよやあらんと也。

一あひみては　さ衣の御哥。かくれなし。わ

りなき心いられはならはざりしと也。

一へだつれば 飛鳥井君。心かくれなし。

一よしみ給へ さ衣の詞。世中の命はしらずとの給を。さしもあらじと。ことごとくしく

もいはずして。心のうちに目のまへに同さまながら。たしかなる御名乗なし。又わが身の行ゑもたどらず。たゞわかびたる躰成べし。

一行衛なく哥 飛鳥井より夜ふかく歸り給

ひて。又ねの夢中に女の腹をみせての哥也。

哥の異本多也。行衛なく身こそ成なめ此世

をば跡なき水を尋ても見よ。又。此世をばい

つかみるべきうきしづみ跡なき水をたづね

とふとも。水に入らんのずいむ也。

一殿の物忌の事仰らるゝに御夢覺たる也。物忌

にはよそより物もとらず。又いだしもせ

ぬ也。物忌。鬼の名也。源氏に在之。

一いまだ 御懷妊を覺召合らるゝ也。

一あすか河哥 心かくれなし。さ衣の哥也。

一御ふみこまかなれば 返哥ばかり也。

一わたらなん 水まさらばあすのわたりも

かはらんと也。

一かしこには 道成がつくしへのむかひの

車也。たがふと云詞はいむと也。これを随分

と思へり。

一女君 むかしは井堀所を思か。空ごとを

めのといふか。威儀師にくるまかるべき物

をなどいへり。

一かくのみ 世中にたよりなき時は山林の

栖求と也。かゝれば宮づかへ人なども男を

もつと也。

一まことく 隣家に駿河守が女君情ある

と。みな虚言なり。

一さてこの 別當の少將殿とさ衣の名乗給

へる間。此めのとゝ古知音と云也。なんてう
事かあらん。可然所と也。少將殿通ひ給ふと
て。此比は無音と也。

一ありきも うづまさにこもりて。如此成く
だると覺召也。土用をいまずともと覺召也。

一あなまがくし あなおそろしやと云心
成べし。懷妊ならぬ人さへ。土用はいむにと
申なせり。

一かの少將殿と さ衣を誠に少將殿とめの
とは思ふ也。さ衣の仰らるゝ共。めのとが心
に合ぬ也。去程にとかく仰られぬ也。

一かくまでも 御誕生もあらば。さりと
思ひすて給はじと也。

一の給ひちぎる 異本有。このたのもし人
めのと也。源氏宮へ宮仕にと有しかど。さ衣
などへ見えん事はづかしさに。心こはくし
て出たゝざりし間。今は彌と覺召也。山なし

と云本有。

一いひく

世中をかくいひくゝてはてくゝは如何にや
いかに成らんとすらん

一京のうち 京中は一夜斗にてはあらじ。

井つゝなどいるゝ日かずへんと也。

一君このゝ給ひ 少將殿のめのとの所なら
ば。いくまじきと仰らるゝ也。

一ときは殿 帥中納言。尼公の兄也。

一久しう 土用いみ給まじきならば。御心

まかせ也。めのとの申事ははかくしから
じと也。

一とかうおはし 御誕生まではいきて侍ら

ば。あやしき女の身ながらも。よくみ奉らん
と思ふ也。さらぬだに土用は忌に。かたも悪

也。少將殿御産の事などあづかひ給ふべく
もなきと也。

一 おもへば異本あり

女の苦具イとははかくしかな

らぬと也。

一 かやうの君たちは おやなどのうしろみ

おろそかなれば捨らるゝと也。

一 戀こそ 未勘。

一 かくほかへ いきにくゝするも。少將殿

ゆへとめのとは思ふ也。少將殿への名残お

しさにはあらず。うづまさごもりにこり給

へると也。うづまさごもりゆへにこそかゝ

る幸もと又申也。

一 かしこは ときは、御忍所にもよし。又

とむむる下女にも。何がしそれがしへをし

へよと申をくと也。

一 さまで 女君の詞。げに行ゑから心也。昔

物がたりなど思るゝならひ也。さして何

の物がたりともなし。

一 かはらじと哥 心かくれなし。とかへる

山のとちぎり給し物を。いかにめのとのし
なすぞと覺しめす躰也。

一 心もしらぬ 式部大輔にそへて。西國へ

とさすがに思也。

一 あかつきに 車來て門敲をとするが。駿

河殿の女君はま心あるといひなす也。

一 飛鳥川の哥 さ衣より夢中の朝をくり給

へる哥の事也。さてけふの暮に御出あらば

いかゞとの心中也。物うきにさ衣へ名残あ

ると心ながら覺しめすにも。めのとの物い

ふもはづかしき心ながらうごきかね給へ

り。

一 久しう 送物などかへらんと申也。

一 御くるま 異本。

一 あまのとを哥 さ衣のとひ給ふ時に。鳥

のこたへよと也。

一 なをたゞ さ衣へ申たき事も有べし。

一めのと又一人 女の同車。

一門ひきいるゝ 道成が所成べし。やなく

ゐは武官具也。

一行かたしらず 蚊遣火の御哥。二條にて

初めの時也。

一そゞろかなる すぐやかなる男也。道成

也。

一大貳殿 攝津國鳥かひ也。

一中納言殿 さ衣の當官也。

一きそく さ衣の御さしよく惡は。物忌故

飛鳥井へ御出なき心成べし。

一かうめうの 高名の御馬拜領と申て。大

貳殿御急あるほど。江口の逍遙なるまじき

とをくり衆と申也。

一何ものならん けびいしの行幸などに供

奉する也。武官成べし。

一めのとは ゑみわらひなどする也。あき

あがり河へはしりいらんと覺召ながら。さもなさじと也。

一何がし 少將殿かげめにて。道行人ごと

に行あひなど有し人に心をつくし給ひやは

せん。あやしき身ながらも。又なくかしづき

奉らんを句。とり所に思召せと也。殿のとは

さ衣也。此威光に道成をばえあなづらはし

などゝ申也。

一少將とは 年來地下に成たれ共。又昇殿

して藏人に成て。かの少將殿と見くらべさ

せん也。

一いまはいふかひなしおひらかにもてなして

句。しなくしからぬやうにてもいまは

かひなし。御心にあかぬことなきを取所に

思て。やすらかにすぐさせ給へと也。

一またこそ 公達ならねども。女にくま

れぬと也。

一 おとどこそ めのとをさして申詞也。

一女君 あきたく覺召を。めのとあらみさき。荒神といふ。中の障をなす神と云々。此神の女君をみはなたぬと也。

一 おとどだに めのとをさして云也。かくまで心うき御心ならんとは思はざりしがとも也。かくまで心うき事は。ほいなくめのとも思はれぬかと。いとあやしく思射也。

一 かはご 皮子より餞の扇薰物などとり出てみする也。

一女のさうぞく さ衣の誰やらんゐて行とおほせられて拜領也。女君の涙にぬれたるに。めしかへさせ給へと云也。

一 此御扇 あたらしきよりはと申取たる。句。目はづかしき人もやとおしませ給ひたると也。馴たるはふりたる心也。

一 これ御らんぜよ 萬人さ衣の御筆をば一

字もみたがると也。

一 まことに 我みし物にやと床しけれど。かほの見えんかと臥給へり。

一 我君をこそ さ衣をこそ道成戀しく思也。

一 あをびれ 青侍などいふにおなじ。

一 あだへて ひそまぬ心也。源氏にあり。

一 むづかりて 腹立て歸たる間にみれば。

たゞ一夜さ衣の持給へるあふぎ也。

一 まなかな 眞草字にて。

ゆらのとを渡る舟人かちを絶行ゑもしらぬ戀の道哉

其折はたゞ何となく書給へるに。今能似たると也。

一 かちをたえ哥 身をしづまんと覺召心也。

一 そへてける 扇の風に波の立歸に身をた

ぐへんと也。

一 など思ひつゞけらるゝ 心も有かと。我ながら思はるゝと也。

一 けさ御ふみあらん 御文の使をば何といひてか返しつらん。飛鳥川の哥の時は。かゝらんとは思はざりしと也。

一 海までは思ひやは入し

一 心得ぬ夢と有しいかなりし事ぞや たゞ

ならぬは懷妊の事成べし。又うち返し。殘命あらば聞及ばせ給ひても心うからんと也。

一 などて さしはなれたるあたりならて。彼家禮の道成にと思はるゝ心成べし。

一 とをきつくしへ行つかぬささに。身をうしなはんと也。

一 おともも しばしびんなしと覺しめさんも理也。あまりとけがたさに。あやにく心も付也。いのちもあやしくみゆると也。

一 思ひわびて 身の程を思ふに。似合ぬと

は思はねど。れいならぬ心のいとゞまされば。御心とゆるし給へ。人のちかきさへくるしきと也。

一 げに消入給ふべきさまなれば 懷妊の間不食などはいかゞと思也。

一 京には さ衣の夢のあやしさに。御文つかはしたる也。

一 つくしの 小貳といふ人の買得と申也。小貳豊後と云異本。

一 それや 小貳殿の行衛はしられんかと也。

一 となりの 隣家にもしらざるよしをさ衣へ申上也。

一 いかにもめのとが めのとがはからひ也。みづからの心にゆきかくるべくもみえざりし心也。いみじくともわが心とさやう

にはあらず。異本多。今までさ衣のゆだんと也。

一あすの淵せ あすか川の哥成べし。

一下草 源氏のみやの下草也。

一しきたへの哥 かくれなし。さ衣也。

一かの夢 懷妊の事也。誕生ありて。いかやうなる所にて。おひ出たらんと覺し召也。なれがほはわが御子をわがものにして成べし。

一かぢみのかげも さ衣ににるべき也。

一なにしに さ衣の御子ぶんにはなされじと。しゐて覺なせども。御誕生ならばとむねふたがるべし。東などきこしめし。さらばふせやにおひ出たらんと覺召也。

一そのはらと 母のふせやに生出んとのさ衣の御哥。はゝ木々にはゝをもたせ。そのはらは腹の字を含めり。ふせやは御誕生なら

ばと也。

一つねより 双子に人のみたる心成べし。

一心のつまと 思ひのつまと心同。

一タぐれ 雲のありか定たるを御覽じける也。

一西の山は 秋のかた也。

一せく袖に さ衣の涙にて梢をもそめたる

と也。

一夕暮の 心のつまの詞より成べし。

一此世の 双子にみるめ也。

一又是涼風暮雨天 かのときはの杜に。秋ま

たんと。女君の哥有し也。しづみはてんも哥の詞也。

一かの舟 からどまり也。今は彼名所に人もよらず。船もつかぬと也。

一此大夫 道成也。ころもの關は衣のへだて成べし。

一 大貳のふねに よき女のあるに大夫心を
かくる也。

一 よひ過るまで 大夫みえぬを。めのとは
君の心こはさに。大貳の女房に心にかくる
と腹立也。

一 とざまかうざまに 女君身を御心づから
せため給ふと也。かゝるごと懷妊中は物思
ひしづみ給はいむ習成べし。御存命ならば。
思ふ人に又あひ給はんと申也。

一 いであな めのと大方にしてをかずし
て。かくうきめをみすると覺召也。うちまか
せてをかざると也。

一 うちむづかりて めのと腹立して在ける
間也。

一 むしあけのせとへ からどまりにて成べ
し。備前名所歟。

一 ながれてもあふせやあると。身をなげんと

也。

一 かみかひこし 肩よりこす躰成べし。

一 ありしあふぎ さ衣の大夫に御はなむけ
に下されし扇也。

一 すゞりを舟のせがい 背涯也。

一 はやきせの さ衣へ風の傳にもしらせま
いらせたきと也。源氏手習の君の入水の面
かげなり。

下紐第二

一 物思ひの 躬恒家集に。

草／＼も吹はらひぬる木がらしにさきこそ
まされ物思ひの花

一 尾花がもとの

和泉式部

野邊みればお花がもとの思ひ草かれ行冬に
成ぞしにける

一 たづぬべき 飛鳥井の君の行衛也。

一 かのくだりし

大貳乳母
中納言内侍佐

式部大輔道成 肥前守が弟と二巻初に在之肥前守は系圖には無之

道季

常陸守北方

一つくしへゐて行ともいはず。道成に飛鳥井へ通ひ給ふともいはざる事を。今爰にてかきあらはせり。

一大貳道より文にそれがし 此段は大貳便

宜に道成文言也。道成事大殿もきこしめしたるべし。

一道成 道季が申上也。うづまさにてみし人をゐて行と申せしと也。

一 げにさもや 道成知ながらもゐて行しと覺召て。御氣色悪ま。不慥事を申たると後

悔也。

一 此事 道季が前にてとかくの給はざりし也。

一 さ月の夜の あめわかみこのくだりし事也。源氏宮の事かきいだしふとある也。

一 母宮のたよりはなし 御腹からにはある

と也。堀川殿の上と源氏宮の御母と御はらから也。坊門の上の御腹の大殿の御むすめの中宮参り給ひて時めき給へば。源氏の宮のあたりへむつび給はんもいかゞと也。このあたり心得がたし。

一 御かりするかたのゝみのゝなら柴のなれはまさらで戀ぞまされる

なれぬと云心の引哥なるべし。

一 笛の 女二宮とさ衣へあづけ給はんと也。

一 かしこまり 此あたり異本あり。卯月ば

かりにとの勅言をかしこまり申ながら。かの御心の。さ衣のかひくしく思はずと。大殿の心也。

一まづいかにも 大殿の年來の御本意也。

かく覺しとは天子の御勅言など忝なしと也。

一心にいらぬ 仰られずしてかなはずと覺しながら。御門の御こと成共。さ衣のいかにご思召ん事は。なま心やさしく打嘆かれ給ふと也。

一それよりまさりて よのつねの御心ざしならぬ間。又えいなび給はじと。さ衣の御心也。何事にから詞也。

一さて大宮

先帝 式部卿宮 後式部卿宮

堀川大臣殿上式部卿宮御妹坊門上當春宮へ參給中宮の御母又さ衣の御母也源氏宮御をは也

「嵯峨院皇太后宮女二宮御母

一そはたかきも 異本不用。たゞ御門の御

心にある也。さらては后腹におはすれども。

さしてあるまじき事にもなしと也。

一いまはじめて 大殿の平人に成たる斗に

こそあれ。今初たることならず。女二宮の行

末よからんと也。

一さしならべたらん さ衣にならべてみぐ

るしからぬまゝ。女二宮をと御かどの覺召

よれると也。

一うつくしと 大殿のけしきの哀なれば。

女二宮へみえ奉らまほしけれどゝ也。我も

はさ衣。人は源氏宮也。かの御心を見さだむ

るほどは。うきたるさまにてながらへんを。

源氏宮へえ忍ばずしては如何と也。

一さばかりの 女二宮さまを見奉り初て

は。身を捨るほだしならんと也。

一はいみや 女二の御はゝ后也。こうき殿にすみ給へり。

一宮の 后のうへゝまいり給へる成べし。

一中務宮

少將

五月五日の御遊に笙笛吹し人前にも注之

姫君 こうきでんにて大將立聞にあめわか
御子のさまゑにかき給へると云人也

一大將のかたちは 筆及ばぬとて破給へる

と也。かたち大將の具と也。

一此三宮と見給へり さ衣の御めに。三宮にや。少おさあがりての詞也。

一宰相 中務宮の姫君のめのと。一卷にあやめの哥をさ衣へ奉し人。こよひ又あやめの哥もかたる也。

一大宮のおはし うへにまいり給へる御留守にさへしこう申さずしてあるゝ也。宮殿イ。女二宮の御めのと也。いざとく。俗夜さと

く云々。

一ものいひ 女房衆御丁へ入せ給へと申せども。うたゝねにふゝ給へり。丁へ入給はぬ也。女二宮はことを引給へり。ことを枕にてふし給へるやうだいななど勝給へるを見奉りすてゝ。かへり給はんはくちふしきと也。

一みすのと 外也。

一かの御みゝ 女二宮の御みゝなるべし。

一しにかへり 中くたのめずば命もかゝらんと也。身の代にと勅言にて死にかへりつるが。又いのちもあやしきと也。

一さゝや さ衣としろしめして。いとゞはづかしき。女二宮の御心也。

一そこらはぶき 省也。異本。

一かのよはの 身代衣も覺しかへさんやはと。たのもしき成べし。

一心のみだれ 苔。異本。苔のみだれて物を

こそ思へ。源氏物語にある哥。

一大宮の御心のつゝましさに。文にても申かねければ。人傳ならてと也。

一心のどかに おほけなき心はづかはしと。さ衣の詞也。

一げにうとまし さ衣の躰也。

一げにこれこそ 女二宮ほどにてうつくしきと也。

一むろの八島 源氏宮のかいなをとらへ給へると一卷にあり。それに思ひなずらへ給へる也。

一いかにしつるぞもし 若也。けしき也。只今のけしきをみて。天子へめされたらんはと也。

一いのち ながゝらぬいのちまつまのほど斗うき事茂く思はずもがな

一又かうは 女二宮の御心を思ひとりながら也。後行末の分別もいかゞ成にけんと也。一おもひくまなき おもてむきならて。うへの御心にたがふべきとは覺しめしながら也。

一左近は 明がたのとのゐ申也。名謂。

一かつらぎの神 葛城一言主大神申行者云。自形醜。夜の間につくらんと云々。上下略。岩橋を人めはづかしければ。よるゝゝわたさんと也。絶間やはと心得べし。

一こちたき ことゝしくば人のとがめんと也。

一くやしきも よべ戸口のあきたるゆへ。あやまりし事くやしきと也。やすらひにてすぐさん物をと也。

一そのすなはち 面白詞也。むかしは如此の名目あるか。可勘。

一ふところ紙 色紙などいへど。をしなべてのにはあらぬ成べし。

一大將 さ衣へさへかろくしきと思へるに。こはいかなる人ぞと歎給へる也。しるべせし人あらんと也。

一ものにすこし 面白詞也。きはたけくすぐよかにおはします也。

一中宮 御連枝也。あまへは中宮の御前也。中宮御文かゝせ給へる折ふし也。おろしの筆。つかひならさせて。下々に遣筆と云心也。

一うへの 皇后宮。さ衣の御母。いまよりさばかり異本多也。うしろめたかるべき御心と。の給はするやうあめるをとて。うちわらはせ給句を。かばかりなるはかたきと中宮をみ給へり。

一ほゝゑみて大かたいまより さ衣の詞也。

一ゆたの

いて我を人なとがめそ大舟のゆたのためたに物思ふ比ぞ

一おぼろげならぬ さ衣のうつくしさをみるめなるべし。心ぐるしは女二宮の御躰也。

一かきほに

山がつかきほにはへる青つゝら人はくれどもことづてもなし

あな戀し今もみてしか山がつの垣生にさける山となてして

一うたゝねを中く かくれなし。

一こきてん 女二宮也。

一とをき人 中納言は大貳のめのとのいもうと也。西國へ大貳の乳母はくだりし也。

一かすまん空の 引哥未勘。

一木のまろ殿 未勘。行はたが子ぞのにて叶歟。

一若無比丘　安樂行品。末世安樂行を佛のをしへ給へる文也。入里乞食。將一比丘。若無比丘。一心念佛。

一宮の　女二をさ衣の御覽じてはと也。

一外道の　佛の成道の時。女に現じて妨をなせる也。若は女人又盛なる老女と成たる也。

一ありつる　女二へ後朝の御文なるべし。

一鴉と云鳥の跡　水鳥の跡はみえぬ心なるか。猶可尋。

一それは中く　女二へまいらせたりともかひあらじと也。

一あが君　女二御覽じたらばやぶり給へと也。

一まことに　さ衣の詞。女二をけちかくみせたまへとつねに申也。

一からうじて　一段めやすき御心とうれし

けれど。はやく目ならしてはいかと也。

一あこがまし　御覽じたる物をと也。

一あふ坂を　行かへり忍びあひ給へ共。面

むきはさなき事をよみ給へり。さ衣の哥也。

一男のたう紙　さ衣のよべのたうんがみなるべし。

一御文とり出たらば　中納言中だちと人々

も覺しめされんと也。

一よべまで　女二の何のけしきもなかりし

かば。宮うへに參り給へるに。俄にいかなる

御心ちぞと覺召て。御心ちいかにと歎き給

ひて。いつもく何事にてかは中納言事也。

一中納言すけ　女二の御枕もとへ參る也。

一あまもつりする

戀侘てねをのみなけば夜もすがら枕の下に

あまも釣する

一たゞさなり　さてはさ衣に過し夜誰ぞあ

はせたるかと也。

一かごと

東路の道のはてなるひたち帯かごとばかり
もあはんとぞ思ふ

一しのだのもり 未勘。

一御かへりより けだいまでは詞也。道心

おこさんと。さ衣の仰らるゝ御心もうしろ
めたきと也。

一戀の道哥 あふ坂までたづね入給へるは。

道心はいかゞと也。

一御こゑのいと 双子の地也。面白にて句

を切べし。いかなることの有けるは。女二の
御かたに。文の行衛もおぼつかなく覺しめ
す心成べし。なを中納言かたへもおほせら
れざると也。

一雲の

夕暮は雲のはたてに物ぞ思ふうはの空なる

人をこふとて

一一かたには 道心の御事成就しがたく成

と也。源氏宮歟。

一此御ことは 源氏宮也ゆくりかに春宮に

ゐ給へらん事歟。いとゝものごりは草子に

いへり。

一おもひよそへんは 上品。源氏宮など。又

少中品を御覽じ盡し給ふまゝに思召出すと

也。

一道芝の露 まへの哥也。

一あふ坂山

名にしおはゞ逢坂山のさねかづら人にしら
れてくるよしもがな

一いかさまにして 女二の宮をのがれんと

は。今は覺しめさぬ心也。

一たゞ有しやうにて 女二にあひ給ひし夢

のごとくなる夢をたゞちに御らんずると

也。今眞實の夢也。

一人しれず

枕より跡より戀のせめくればせん方なみぞ
床中にをる

一うへのおまへ

天子の御事也。

一とびかふ

鳥類虫などは飛ちがふほどに

て子を生也。

一こはいかにすべき

こは子を含めり。古

哥の心成べし。

一ゑんだう

禁中行幸の時。道に敷蕙也。

一わたらせ給ひて

女二へ大宮のわたらせ

給ふ也。

一いとかういみじき

女二は我御身の御懷

妊をしり給はぬ也。

一いてやいとけしからぬ

異本有。

大貳のめのと

の妹。内侍のすけ申詞也。御心づかひぞと思
ひ侍れば。いと心うく侍也。たゞ御文などを

やちらしてまし。さ衣の御文など落しちら

さんと思ひ給ふるをと内侍申せば。我さへ

さ衣の御詞也。たが上もしらぬやう。我なら

ぬ人もあらんを。よの人はさあらじ。さ衣ひ

とりをにくまるゝとの御詞也。

一あやしかりし

しるしはふところがみな

るべし。

一そが

それになるべし。

一なをざりの

かいまみはあながちにも覺

しめさで。ちかきほどにておとしたるかみ

也。

一岩にも

種しあれば岩にも松は生にけり

戀をし戀はあはざらめやは。此心なるべし。

一心得ぬ御心かな

内侍心也。さ衣の御心

を也。

一大宮の

御懷妊と出雲のめのとなど思案

したる也。

一なべての 月のさはり也。老ての子は大
事也。

一ひつじのあゆみ 引に不及。

一吹はらふ かくれなし。

一りんだうの をりうかされ。浮紋也。

一たつたひめ そめ色なり。

一おどろきながら 此ながらはつゝといふ
心也。

一さきにとは 女二より先だち給はんと也。

一をのゝ

浅茅生のをのゝ篠原忍ぶれどあまりてなど
か人の戀しき

一みだれたるあふぎ 如何。

一人しれず かくれなし。

一みゝくせ 俗言にみゝくせといふ。

一心から ぬるゝも御心から也。いつも時
雨のもる山なれどもと也。

一雲井までおひのぼるらん 人も尋ぬは。
さ衣しらざるよしと也。

一つれなき さ衣のつれなくしておはしま
す也。天子の女二をまいらせんも。うけひき
給はぬ也。

一この御事 女二の御たんじやうきゝ給は
んと也。

一行末にみやたち さ衣なれば宮たちにて
も似合たると也。殿上人などならば成べし。
伊勢物語。源氏に此類からの古事引給へり。

一たがふ所なきにさて 不知躰にてさ衣の
おはしますと也。

一御ゆかり かほつき。此御年比如此さ衣
のおはしまさんと也。

一いてや 中納言がしわざと思ひて。めの
とわざとさ衣には不似と云也。わうげめき
たるといひなす也。

一ながれての 引哥に不及。

一げにみはて 御誕生をみると覺召たる念にて。いまいて御存命と也。

一姫宮さへ 御門の御心中。今一度御門へ見え奉らんと覺召なぐさめとて。人々などまいらせらるゝ也。

一などいまして さ衣の御詞也。御懷妊と聞召事はやくば。かくのごとくせまじき物をと也。

一げに身のほどしらぬ おほけなくちかづきまいらせたるが。つみに成と也。

一ことの外にも さ衣をいとひ給はぬと聞たらばと也。

一まいて内など おもてひきゆるしなさに。ちかづきたるをなめげに覺しめさんと忍びたる也。そのほども時々さこゆるに。中納言したがひたらば。みしる事あらん物をと也。

一をのれつらゝ 引哥未勘。

一おなじさま 大宮とうちぐしてならばと也。

一はぢにしせぬ 俗言にいへり。君辱臣死。

一あまのかるてふ 我から大宮なく成給ひしに。心つきなさは世にしらずも。姫宮の御心成べし。心より外ならんけふりは。さ衣へなびきがたく覺し召也。

一まぼろしならては 眞實あはぬ事也。又夢にもと也。ことばつゞきかね侍るか。

一こよひのほどに 尼に成給はんことを奏して案内申せと也。

一かうながらは さりともあり。

一さろゝ 御ぐしの尼かみのきらりとしたる心也。みにくゝなし奉りても。御いのちを時の間もかけとめ奉らんと也。

一あながちなる 源氏の宮故也。おもふ事

かなひなばも。源氏の宮の事なるべし。

一しはすの月 清少納言枕草子。源氏にもひけり。

一つらゆきがいもがり行ば^{イニ有}。

一思ひかねいもがりゆけば冬のよの川かぜさ
むみ千鳥鳴也

一我ばかり 我ほどつがはぬ鴛も物思ひは
せじと。さ衣也。

一玉もかるあま あま入道宮也。

一わたく 俗にわたくとふるまふとい
へり。

一かたしちの哥 さ衣。かくれなし。

一ふせこの少將 古物がたり成べし。

一あげまきやひろばかりやさがりてねたれど
もころびあひにけりかよりあひにけり

^{源氏}
宇治

在

一しらざりし 源氏わか紫の巻に。紫上の

あしわかの浦の面影也。あし原のたづを雲
井にきかんと也。天子の御子ぶんなれば也。

一雪山源氏。朝がほの巻をふくめり。

一われもかう むかし此色有べし。永孝へ
可尋。

一いつまでか消ずもあらん きえんと也。

烟はふじの山成とも也。

一雪山に むすぶの神いか。

一もえわたる さ衣の哥。かくれなし。

一なむ平等大會 法華經の異名也。

一けふりも今はたゝず 不斷也。口傳有。さ

衣には思ひもあらじとの心也。

一こほりがさねのからのうすやう

一雪いたう げんじには霜^雪もちとさずとあ

り。

一もてなやませ さ衣の御母。春宮よりの

御文をもてなやませ給へる也。

一 けふはまいて見所侍らんかしと床しげに覺したれば　さ衣の御心也。

一 いと有まじき　とまでは詞成べし。源氏の宮の御自筆は有まじき事と覺召に。さ衣けふはましてと被仰ゆへ。有まじきことゝ覺召べし。東宮又源氏宮歟。

一 わらはせ　母宮也。さ衣をしへ給へと也。一 ゆかしげに覺召に。さ衣にしへ給へと有にて。御文の哥如此。

一 たのめつゝいく世　消もせずたのめて久しきとの春宮の御哥成べし。

一 げにいとあしくうちをさ給へば　是母宮の御詞也。まいてからさ衣也。の給はすれど。さりとてをしへ申さてはとて。

一 末の世も　消もはてなてあるごとくなる心はたのみがたき也。

一 そよさらに　小篠はさ衣の御身にあてゝ。

春宮の御事を含ませ給へり。

一 みじかき

難波がたみじかき蘆のふしのまもあはてこの世を過してよとや

一 何事も　及べきならねども。ことに春宮へ源氏宮ゆへ今一きはと。むづかしき詞也。

一 ことはりといひながら　如此のおとりたる物哉とて。いかゞ御覽ずるとてまいらせ給へり。あたりの衆。さ衣覺召まゝなるとわらへば。我もはさ衣也。

一 えさぶらふ　こゝほどにちかづく事有まじき事と也。

一 うちそばみ　源氏宮也。

一 引やり　さ衣のあはてこの世などあるゆへ也。

一 いでや　源氏宮御覽も入ぬと也。

一 つくば山端山しげ山茂けれど思ひ入にはさ

はらざりけり

されども大殿の御心など憚給ふと也。

一 ためこそ

戀しなん後は何せんいける身の爲こそ人は
みまくほしけれ

一 れいの心うくよそ人の 大貳のめのとの

妹成に。心にも入ぬと也。

一 正月に 上洛して飛鳥井の事聞たく覺召

に。面白事など申次に。三川になるも心うき
とあると申上次に。八はしより。くもてにこ
なたかなたにものおもふと也。

一 飛鳥井君御母にて誕生あらば。若宮のさま
ならんをと覺召也。

一 つたへよと 哥にかきそへられし成べし。

おこせよ。句を切べし。

一 れいのつれなく そばへもよらずとかた
りしには如何と也。

一 いけてみん 飛鳥井の詞也。我をいけて
みんと思はゞ。そばへよる事をゆるし給へ
と也。

一 さそふ水 あふぎにかける事。前にあり。

一 からどまりの哥 かくれなし。

一 あさりする 同源氏みざらん人は心得行
がたし。

一 かぎりなき御歎のもり 源氏宮ゆへ何事

も思ひけち給へりしと也。

一 いとすなはちのやう うせにし後覺召は

忘給はざりしも。則刻のやうにはなかりし
が。此扇御らんにて其時のごとくなると也。

一 かほに からどまりにて女の顔に扇をあ

てし跡と見給也。

一 涙川 かくれなし。

一 かの若宮 女二の御子。五十日御祝言也。

一 いかの夜 女三宮若宮をぐして御參内也。

一 なきが

世中にあらましかばと思人なきがおほくも
成にける哉

一 こりずまに

又女三をさ衣へと覺召成べ
し。

一 大將のこゑ

さ衣のこゑせしをめし出さ
れて也。

一 むさし野の

引哥可勘。ゆかりの心成べ
し。

一 袖の中にや

引哥可勘。

一 いとくるしくて

御出家より中く御返
事なきと。さ衣へ申理也。

一 一かたこそ

女二こそ也。そのものくづ

は。飛鳥井君の誕生ならばと也。

一 しのぶ草

御子はねじけたる母かた也と
もと也。

一 思ひうるかた

分別はなくともと也。

一 中宮いと 覺しなげきたるも。いと心ぐ
るしくは。中宮の御心を院の御心ぐるしく
み給へると也。

一 大やけわたくし 天子の行末たのもしか
りしも。けふともしらぬ有さまにて。思ひは
なれ聞まじきとてもいかゞ。句。さてこそい
まはのきはにも。思ひはなれめと覺しきり
て御出家と也。

一 齋院 女一宮也。

一 さおぼし さ衣へ女二を也。

一 わか宮を なまくの孫王よりも。さ衣
にあづけ給はんと也。

一 おもふ心ことなる 天子の御詞也。獨住
もゆへあらんと思めせども。内々はしらず。
御遺言ならばをろかにはあらじと也。
一 うちかはり 一卷にもある詞也。たゞか
へて仰らるゝ心也。

一 齋院のおはし

一 さしはなれ

女二御入道に又女三と也。

一 袖にそよめく

一 春宮のゐさせ

めでたきにも。さがの院

を覺召やりて。春宮の御心中はあはれなる

と也。

一 女御代

一 しき島ややまと

立ゐ

一 我もはさ衣也。そゝのかしは。源氏宮さんひ

かせ給ひしに。猶と笛吹給へども。おなじす

ぢながらおとりたるとて引給はて。さ衣へ

大納言の君してひかれよと也。

一 しのぶるを

こよひ音にあらはせ給へ。

こゑのかざりにねにあらはせとやと也。

一 くやしきや又やと心まほしけれど。此ふ

もとよりだにこそ山へあがらてと云心なる

べし。

一 衣がへやせんさきんたち

わがきぬは野はら篠はら萩が花ずりやさ公

達催馬樂。

一 わたりおとして

落字成べし。又調子を

くだしての心也。

一 かくれみのゝ

古物語歟。

一 宮漏正長空階雨滴

朗詠。

一 齋宮

誰ともなし。一品は一條院かくれ

させ給へるにより。大膳より又ありさせ給

へる也。一條院源と女殿姫宮也。

一 宮の御夢

大宮也。神代より。堀川殿夢中

に御覽ぜし哥なり。心はかくれなし。

一 心ち中く

さ衣の御心なり。

一 あらばあふ世

引哥未勘。

一 から國の中將

納言歟。古事未勘。

一 大貳

歸京して三河へ下し歟。

一 はゝ宮は

齋院に成給はゞ。おぼつかな

き月日へだゝらんと覺しなげくを。院はいかてかはさは。へだゝらんと覺召心をうらめしく覺召を。理とくるしくみ給ひて。尼にならざらん限りは。如何でかおぼつかなくはあらんと。詞をかへ給へり。齋院へは尼法師出入不叶故也。命の限りに得あひ給はじ。今より忍びがたきと也。

一 神山の哥　しのべばぞ。したふゆへにゆふをかくると也。忍べばぞにて忍び／＼の心こもれり。

一 大津皇子　可勘。大和物語も水鏡も。

一 我戀の

わが戀は向後もしらずはてもなし逢を限と思ふばかりぞ

一 齋院御まいるの日　女房衆の躰也。

一 一乗の門をさへ　法花一佛の門の事成べし。二乗は聲聞緣覺を云。三乗は菩薩を加事

也。

一 みたらし川

戀せじとみたらし河にせしみそぎ神はうけずも成にけるかな

心もとなくとは本哥の心也。神はうけずもの心ならんかと也。

一 けふやささ　ひかしわかれたらば。けふのうき別あらじと也。

一 よし御らんぜよ　此世にながらへじと也。又とんせいの心成べし。此おなじさまにてやのてにはゝやは也。

一 大將のとのゐ所に　常に。にもじ入本可然也。

一 野にも

いづくにか世をばいとはん心こそ野にも山にもまどふべらなれ

一 殿にても　源氏の宮のおはしませし所也。

一ゐんに 齋院へさ衣のまいり給ても也。

一ほうらい 楊貴妃をふくめり。源氏宮を

貴妃。齋院を蓬萊也。

一いまはいとい 大宮は齋院又一條とかけ

ておはします間。さ衣の御獨住心もとなき

と也。

一三宮の御事は さ衣の御心に叶はず。前

齋院はいかゞ。女一宮なればと大宮思召也。

女二宮御入道。三宮不叶。又御姉宮は一やう

のごとく也。

一弘法大師入定所。三會曉を待給ふ高野山也。

一我もさやうに れいならずおもふ給へら

るゝと。さ衣の詞をうけて。殿もさやうにみ

え給へると也。

一よしの川あさせ 源氏宮にあひ給はぬ中

と也。

一わさかへり 同心也。かの底から飛鳥井

君を覺召なるべし。

冬川フユカハのうへは氷れる我なれや下にながれて

戀わたるらん

一うき舟のたより からどまりをゝしへよ

と也。

一是人命終 普賢品に。法華書寫の功德に

よりて。天に生るゝ事を。是人命終當生忉利

天ととけると也。

一たゞ石山とぞ 此寺江州石山に似たると

也。

一堂僧修行者

一藥王汝當知 如是諸人等 法師品偈云。

是經難得聞。信受者亦難。如人渴須水。

穿鑿於高原。猶見乾燥土。知去水尙遠。

漸見濕土泥。決定知近水。藥王汝當知。

如是諸人等。不聞法華經。去佛智甚遠。

一我爾時爲現 清淨光明身

若說法之人。獨在空閑處。寂莫無人聲。
讀誦此經典。我爾時爲現。清淨光明身。

若忘失章句。爲說令通利。

下紐第三

一 谷ふかみたつをだまきは 枝もなき木な

るべし。口傳在之。源氏の宮の事をふくめり。

一 うしろめたく 大殿母宮なるべし。

一 をし明

天の戸ををし明がたの月みればうき人しも
ぞ戀しかりける

一 戀しさもつらさもおなじ 源氏の宮など

也。

一 かみさうじ 昏障子也。

一 たないし

堀江こぐたないしをぶね行かへりおなじ人
にや戀渡るべき

一 ゆきかへり いもせに思ひはなるゝ道も
がなと也。

一 やすの河原 引哥未勘。

一 わがおもひ 御遁世なるべし。

一 雪やけを 湯にて御養性也。俗に日やけ

と云心なるべし。

一 阿私仙人 かための法師を被仰也。釋尊

因位の時。大王として法の爲に位を捨て。阿

私仙人に逢て法花經をえ給へり。さて千歳

の間菜摘水汲て仙人につかへ給へり。仙人

は今の提婆也。

一 いなぶち

和州名所也年をふる涙かいかに逢事は猶いなぶちの瀧

まされとや

一 ありなしの 飛鳥井の行衛也。池の玉藻。

猿澤に身を投げん采女の事歟。

一 忍草 御子の事也。

一 齋宮 女三の宮也。

一 前齋院 女一の宮也。

一 やうく住吉の里

一 一かたより外に 源氏宮より外に心を分

ざりしと也。

一 もしほ草かくと云詞より 海士の濱やと

也。宮やと同心成べし。

一 おがみわたすにも 齋院を也。

一 さがのゐんこそ 入道の御門は。御ぐし

きろくとして見にくし。女二はうつくし

きと被仰也。かみはみじかきとは。さげ尼の

かみ也。

一 うきふしは 哥かくれなし。さても女二

はいかやうに覺召ぞと也。

一 めさし

一 ちりつもり 女二宮の古枕と也。此心を

ゑにかき給へり。

一 かうのみつもる 是より入道の宮の御心

中也。

一 こよなかりける御心ふかさ 母宮の御心

を覺召也。

一 うき事は 母宮はなくならせ給へるに。

一 入道宮ながらへ給へるがうきと也。

一 あらぬには 双子の地也。一夜の契のあ

らぬになしがたき也。

一 つねよりは 中納言のさ衣への御返事を

御らんじて。え覺ししづめぬと也。

一 おぼさるべしは 双子の地也。

一 まことの御子 殿は眞實の御子とは覺し

めさねども。養母の御ためには。さもありて

よからんと。殿の御子ならねども。とても御

養子は同事成べし。

一 母はうちにも 眞實の母をば御覽ぜしと

也。堀川殿物いひ給へる事有し故。御子と名

乗し也。天子も殿の御子にてはなき御心ならんと也。

一 ささいの宮と

太政大臣 後一條院御祖父

一條院女院

東院上 堀川院北方
今姫君養母

一 おとこのゆかり 太政大臣。

一 かのおとこ 是は堀川殿也。

一 かやうの御けしき 天子の御心に叶はざるを。女院の御覽じしりて。故院崩御已後は

花くしき事は思召入ず。乍去堀川殿の被

仰たればよからんと也。

一 ことさら

堀川殿方にもあらず。只女院

の御心にこそと。しゐて仰らるゝ也。

一 いまおとこのけしきみてこそは。句。思ふか

たおとこの別に覺召かたあらんを。女院の

すゝみ出てはいかゝと也。

一 さくらのかた

一 つれくから さ衣へ被仰詞也。女院し

て天子仰らるゝとそら事を也。いづれの御

事をもからさ衣の詞也。

一 いまやうの人は おさなきよりびわなど

引ならし給に。今姫君は廿過まで内わたり

などの事もうとくしき也。琴などをしゆ

る人もがたと尋を聞て。此びわの後見今參

あると也。

一 すぎく 次々也。

一 まきの馬 牧馬。くるふ躰也。

一 かみは 色がみとて上品也。

一 いふべきとも いま姫君の心也。

一 はじめ さ衣御出の時。いらへ遅くした

るとて。母代腹立たる也。

一 かのはいと さ衣によみかけたる哥を。

東院のうへほめ給しかど。今姫君まれく
思ひ出給ふ也。こゝもと詞くだぐし。

一吉野川何かは渡るいもせ山人だのめなる名
のみながれて 前の母代が哥をそのまゝ
じゆし出し給へり。給へるをまでさ衣の心
也。げに人の忘れぬふしやよみ出たりけん。
是までさ衣の御心歟。又草子の地たるべき
歟。

一吉野川かへすく または又也。源氏末
摘から衣又から衣の等類歟。さ衣はいもせ
の返事を我ながら忘れ給へり。

一瀬に入たつも とがめあるまじければ。

一わたりも心おとりし給へり。

一先猿をつなげ かなてをくんと。肱して
つくめれば。さるかなで。いたち笛ふく。い
なごまろはひやうしうつ。きりくすはな
ど。ほそ目は細め。たれかへりく。

一おとしあげ 甲乙歟。

一げに一偏によからんのみとは覺しめさずと
も。普御心ながらも也。

一いと名だゝしう 名のはづかしきと也。

一女院から 東院のうへの御心也。時々打
わたり。今姫君にいつもそひ給はぬ間。うは
べばかりよきと覺召也。

一あめつちを袋に 未勘。

一系に苗代 柳櫻を寄合よりうせざめれば
亂たると也。不失歟。ゑりふかう。ゑり入た
るごとくと也。源氏末つむにある詞也。

一わが御心の 母代の心となり。

一よのつねなりと さ衣覺召也。人の文と

は飛鳥井へ通給ふ文なるべし。

一よに侍らじとの給へば 文などよにちら

さぬ物をと也。

一なき人の 源氏夕顔の卷の哥に少もかは

らず。心は明也。

一 かすまん 引哥未勘。

一 ま木ばしら

わぎも子がきてはよりそふ榎柱そもむつま
しみ形見と思へば

一 かのあふぎ 飛鳥井の今はの時までの扇
也。

一 つくば山

筑波山はやましげ山しげれと思ひ入には
さはらざりけり

一 あびたゞしかりし 懷妊ながら水に入心
は。ことぐしきとなり。

一 もゝか 百日也。

一 人のまどふ

人の親の心はやみにあらねども子を思ふ道
にまどひぬる哉

一 とを山鳥 へだてゝある心也。

一 あかつきかけて 源氏すまの巻にある詞
也。

春はたゞ霞ばかりの山のはに曉かけて月出
るころ定家卿

一 秋の色は さ衣のあくかたの心なるべし。

一 云何女身 速得成佛 提婆品也。舍利弗
龍女に對て。五障の女の身にて。速に佛にな
る事あるまじとの給へる詞也。

一 いづみの よこ嶽と云山。行者のをこな
ひ所也。

一 太政大臣 御馳走なり。

一 よるひる 堀川殿御如在と東院のうへく
ねり給へり。

一 しかる 叱字歟。天下はいだしやらじと。

異本あり。

一 浦かよふ みるめはかはらじを。名のる
にはをよばじとの心也。聲を聞わけて。浦通

ふとあるにて。西國の守領と思也。

一月日過れど 故院一條院。女院後一條院

御母。太政大臣御女。姫君後一條院御妹姫

宮。一品成給也。

女院。さ衣の御かくしの御息女。飛鳥井君の

腹を養給へり。藤壺。いつも御ぐし有てわた

り給へると也。

一加茂の川なみ 齋院也。一品宮へ少將命

婦して御文通し給へり。

一條宮 一品宮。飛鳥井姫君を養給也。一

條に女院おはします也。

一こうきてん 中務宮の姫君也。

一やみは 春のよのやみはあやなし梅花色

こそみえね香やはかくるゝの哥なるべし。

一權大納言 東院のうへの御弟。一品へ心

かけ給ふ也。

一中納言君 母は内侍のめのと也。

一大納言ほこりかなる人に 大將見付られ

たると覺召也。其後大納言へつれなきが。大

將へ心ひくと仰らるゝ也。

一にぶく 異本。きはくしき事をみざ

らん人のやうにと有。

一此たびばかりあへなん ありなんの詞歎。

似合と云心なるべし。

一おもひやる 身はよそながらぬれ衣をき

ると也。魂が行てぬれぎぬをきたるかゝ也。

一さればこそ こゝもと堀川殿の御心中な

るべし。

一かゝりけりさは

一いせの海に釣するあまのうけなれや心ひと

つを定かねぬる

一こんよのあまとなり 入道の宮の御心也。

一芹つみし 哥あり。可勘。

柏手と云。和州多武峯麓に老女貧人あり。子

をほしがるに。或時に如月星降たる下に小女あり。是を養に。貧女に孝ありて。芹を摘て是をそなゆる。聖徳太子行啓にみむきもせず。尋給へるに。養母孝行故と也。

一げに又かゝる 入道の宮とは。何とやらん。自他の御心ゆかざるやうなりしに。一品の宮などは尤と也。さて后に成たると也。下上略。

一もりわづらふ 雨の漏ぬを御覽じて。もらさじと契らざるらんと也。

一戀わびて 撫子にて若宮の事を入道宮へ仰らるゝ也。

一あまのかるもに住むしの我からと音をこそななめ世をばうらみじ

一さらにしるきことも侍らず いかゞ覺召とも。御けしきのみえ侍らざりしと也。

一はらふべき むかし物語有べし。

一げにさこそ 大將のおさめぬ好色と覺しめされんがはゝからるれどもと也。又をしはからるゝ心也。

一いとかくいける ありける事も。心に句を切べし。さなくては心行がたし。

一みづからのつみになすと覺召たれば。いてやことの外に。たどくしげに聞侍しに。關の戸をしるべなくても通と也。

一いたくまめだちて 昔にいひなし給と也。さ衣の大かたに思ひたるといひなす。昔も今も同心と也。

一いひむかへなし給ふ さかふ心也。

一げに袖にはたまらぬ 落瀧つ袖にたまらぬ白玉は人をみぬめの涙成けり

一此比から 哥の心は明也。一品の宮の事ふくめり。末こそすはきかせ給ふと云こゝろ也。

一夢かによ　ふるき哥詞也。とはるゝはみ
しに似たるがつらき也。かくのごとくうき
ためしは有まじきと也。

一下萩の露さえわびしとは。御命のあるとて
も。とはるべきとは覺召ぬにて。末こそ風の
事をも。とはせられぬと也。

一うき身には秋としらるゝ　夕風の音なら
ねども。こなたにはしられたると也。おれか
へりの哥をうけて成べし。

一旅所にて　一品宮へ参り給ひてはとの御
心也。

一なにの物がたり　異本。古物語あるべし。
一うきはためし　入道宮さがにての御筆す

さびの哥也。

一世はいと　思事一にて。源氏宮ゆへ入道
宮にと也。

一たゞこよひ　因果と覺召也。

一たが玉札

秋かぜに初かりがねぞきこゆなる誰玉章を
かけてきつらん

一せいたいし　青苔紙。朗詠。碧玉装箏斜立
柱。青苔色昏數行書。

一さかせばや　入道の宮へ也。とこよはさ
衣の住給へる一條院成べし。

一鴈の來るみねの朝霧はれずのみ思ひつさせ
ぬ世中のうさ

一なにのぜう　左衛門歟。右衛門歟。

一思ひさや　葎は一條院。一品草枕也。心ふ
かき御心には。おち散てもくるしからざる
書ざまと也。

一故郷　一條宮は淺茅が原にならんと也。

今こそは。一品への事。院もうれしく覺しめ
すと也。

一まことに　入道なき時と也。

一まだしらぬ曉あき　さ衣の哥にかくれなし。

一院には　一條院。女院一品宮の御母也。

一しがらみかくる

秋萩をしがらみふせて鳴鹿のめにはみえず
て音のさやけさ

色々のさうぞく。めにはみえねどもと也。

一ものもかゝれざり

伊勢がけさう文に。

詞かゝずして哥ばかりと也。

一宮はいみもこそ

又御返事有べきに。打

すて給へるはいみけると也。御心に入ざる
成べし。

一忍草をちかくてみんな

若宮の御事也。

一あと所にて世を

獨住にて御心安がな

ぐさみと也。

一そのなぐさめも

又入道の宮もえみ給は

ぬと也。

一さばかりはあかぬ　入道の宮の事也。

一室八島は前卷の哥也。入道宮に一品はあと
り給へると也。室八島歌可勘。

一垣ほにおふる

若宮の御事。前に御哥有

し也。

一いとさばかりの

宮に成給へる也。撫子

故さがのゝ花は入道宮也。

一なに事かは

大かたにて勝たる一かども

なかりしと思ふと也。さはいへどもけぢか
くは大かたならずと思出給ふ也。

一くやしと

殿もくやしと覺さんと也。

一びわことにて夜を明し給ふを。かたはらい

たがる人もあらんと也。

一御吉野の山のあなたに宿もがな世のうき時

のかくれ家にせん

一よすればなびく芦の根

未勘。

一殿のひとつ

母宮と殿と同やうに。一品

宮へ御うとくしといさめまいらせられぬと也。

一ふげんの御出現のよの誦經を覺召いだす也。

一をのがつま 引哥あるべき歟。

一われもかうのをり物 かれのがさね。此比不知と也。藤宰相殿へ尋申。

一むさし野の かくれなし。

一女院 あすか井の御腹。さ衣の御子也。

一あさなき人はかならずほど ほどくの差別なしと也。

一なれぬるはうき世なればやすまのあまの鹽焼衣まとなるらん

一八重たつ山の 引哥未勘。

一忍ぶ草 かくれなし。

一あせうちあへて 汗歟。

一思はずに 入道宮なるべし。又一品宮歟。

一かけのこ草 心なし。

一かくばかり見えまうく 一品の宮の御心也。

一空ながら さ衣の心。うはの空ながら也
げにうとくしくも同。

一思より又 心かくれなし。一品の宮の御哥也。同。

一是がゆかり これよりさ衣の心なるべし。

一玉かづらはふ木あまたに成ぬればたえぬ心のうれしげもなし^古

此心にてても可然。省字にてても中くはたつ歟。

一院にもかうに 女院也。さ衣の御子としろしめしながら。もぎのとを仰らるゝ也。

つゐでならずともはさ衣の詞也。

一何かは 女院の御詞。大殿にもゆかしが

り給ふと也。

一げについてよく侍なんとこそ院も　さが

の院也。の給はすれど。からうじてことつゝ
けて。ことばちほくいひつゞけ給也。

一聞給へる　さ衣の御子と云事を。女院さ
ゝ給へると也。

一あまへて　あまゆる。俗語也。

一ついでならずとも　さ衣の心詞也。

一又いかに　女院の御心也。

一院の御方　さ衣の心。さもなどか句。わざ

とだにこそ。女院にては女子の御ためよか

らんと也。

一かしこにては　女院にては。誰ぞとこと

なしびにと。さ衣のいひなし給也。さ衣の御

心。女院にての御用意。げに覺したちたるか

ひなかるべければ。ことなしびに云とも。女

院にてと云心也。

一うちつけのたよりならずとも。かたかるべ
きならずとは。やすからんと也。

一いまは我しも　女院御獨にあらずとも。

さ衣の御子なればと也。

一院にうち／＼の　さ衣の御子とは仰られ

ざる也。

一みづからの　天子の御代にと。大殿へ仰

らるゝ也。

一たちあかし　炭がしらのごとくなる松明

也。源氏になき
ことば也。

一そのうち若宮をば母　さ衣の御母なり。

一いますこし　さ衣と似合たると。後見た

ち思也。

一さこそはあながち　入道宮御連枝はなれ

がたき御宿執也。心ゆかずながらけふ。異本
可用

也。のがれがたかりけるぬれぎぬ。前に哥あ

り。ふところがみは。入道宮にあひはじめ給

ひし時也。

一 入道宮と 前齋院。御連枝あひ住なりし

時の事也。入道の宮とあひし事は。そらごと

ゝ云べかりしかと也。

一 おなじくばにくからずや にくからぬと

て。尼衣をきたく覺召と也。

一 院はすこし 前齋院也。

一 小宰相

常磐尼公

小宰相 一條院の女院の官女さ衣時々物の
給ひし人長門守女子はあらず

筑前北方

一 姫君 さ衣の御子。飛鳥井腹也。過にし。

此御女の事なるべし。

一 いづかたさまにつけても さ衣の一品へ

の御志は。いづかたさまにても覺召いれざ
ると覺召也。さる程に宮は心づきなしと思

召ながら。物にくみを色にもみせ給はぬと
也。

一 殿がち 堀川殿がち也。

一 齋院 かもへ大將おはします也。

一 しのぶ 源氏宮へみだれはじめ給へると

也。

一 ふせんれう 浮線綾。

一 くねくしく 一品宮に猫を思ひくらべ

給へり。

一 岩間をくぐる水 引哥未勘。

一 ゆかりむつび 一品とさ衣いとこ也。

一 おなじさま 源氏宮へ遁世もせんと常々

仰られし也。

一 かつみれどの哥 一品宮をみれども心に

不叶を。源氏宮は人の人と覺しめされんと

也。

一 七僧 七人僧供養也。源氏に在之。嘸散花な
ど七役也

威儀
師。

一 くらきより 夢中の哥。かくれなし。

一 吉野川 前の哥なるべし。

一 をくれじと 死出の山を契に。自水なれば三途川ならんと也。

一 皆如金色從阿鼻獄 東方万八千世界の光

如金色。法花經序品也。法花經を説給はんと

ての瑞相の中也。佛の白毫相の光。上至有

頂。下至阿鼻獄と云々。

一 佛だに 普賢の粉川にて。御出現の事な

るべし。

一 たのめこしはいづくと也。かはりたると云

心也。下句は古哥也。

一 ことのはを

箸鷹のとかへる山の椎柴のはかへはすとも

君はかはらじ

かへるとは十かへりの松と云々。千鳥とか

へるははやき心。飛歸歟。

一 なをたのむ哥 かくれなし。

一 よりゐけん さ衣の御哥。涙浮木と也。

一 あへなん 此詞此物語多し。さあらんと

云心也。さて一品宮にてこり給へかし。とか

くおほせらるゝゆへ。心にそまぬかと也。

一 うす大口

一 さくらさうかんのうはぎ

一 藤のふせんれう

夏にこそ咲かゝりけれ藤花松にのみとも思

ひけるかな

此哥の心を縫たる也。波よせて。波にひたし

たる心など也。

一 なをやゝましく 心やましき也。

一 さいしさゝせ

一 やを萬。 八百万神。さ衣の哥也。

一 をのれのみ 我のみながれはせじ。河水

のごとく齋院にておはしまさんと也。源氏宮の御哥也。

一さか木ばにかゝる さ衣也。源氏物語の面影也。及ばぬ枝もわかなの卷にある哥なるべし。

一わが身 御製也。人とは源氏宮也。

一をさくち 銀細工に可尋。

一おもふ事なるとは 時鳥尋きにけりとは。さ衣に時鳥をなずらへて也。

一かたらはゝ 神も聞いれ給はんまゝ。残らずあらはし給へと也。

一よろづの人に おとなしきさへ萬人にむかひたる心ちすると申せば。若人さへはづかしく思ふと也。

一そは車にても さ衣の御詞也。車にてもみゆるはと也。されどうちつけに。六かしき詞也。わびうらむる人々は。心あさきまゝ。心

やすく覺しめせ也。おとなしきとある詞より。さ衣の御年たけたるは。恨給ふともすさむる人もなしと見をこせ給へる也。れいまでさ衣の御すがたをほめたる双子の地也。一みるたびには さ衣也。源氏の宮の事なるべし。

一よそにやは 昨日の御返哥を齋院へとそゝのかし給へど。御くたびれとてかゝせ給はねば。うへのかゝせ給へる也。よそにやは思ひなるべき。あふひ桂のごとくに影はなれじと也。

一御覽ずるは 天子の御心なるべし。

一みづから 若宮の御身のため。さ衣もたゞ人にてあたらしからんと也。おなじさまよりは。せんようでんにてと思召也。さかの院の御心も。齋院の一條の宮におはしますたよりと覺召たると也。齋院かもへの御跡

におはしますと思ひなさんと。大殿も覺召也。

一 とりつきよろこびがほ さ衣の御心也。

心ゆきたるとは。皆人／＼の尤と思也。

一 みづからは前齋院。前齋院と大殿と。大將の御とりもちを也。

一 大將の思ひはなち 御出家もと也。おや

に成給ふも。心もとなく天子思召也。

一 かのやすらひ 前の哥也。夢ぢにまどひしも同心なるべし。

一 あかざりし跡や通ふは 入道の宮に似給へるかと也。磯上。ふるきといはん枕詞也。

一 なをいかなりし 入道宮への密通しり給はぬ心也。

一 磯上ふる野の みしにもあらぬは。通とあれども。前齋院は御心ゆかざる也。

一 しのぶもち 前の哥にあり。

一 あくがるゝ玉しゐもかへれと也。思ふあたりに結とゞめられなばと也。

一 宮の中將 後式部卿御子。

一 宮中將のいもうとの姫君は。さ衣の御位の時。一宮うみ給へり。

一 草のかう

一 さ衣のながめ臥給へるをみ給ひて。人しれず思ひあつかはるゝは。中將のいもうと也。

一 玉しゐの 妹方に結びとめまほしきと也。宮の中將哥也。

一 おぼすて なぐさまるゝ事は有まじけれども。覺召へだてずばなぐさめんと也。

一 いふとも人に 引哥未勘。身にそふかけ。前の哥也。

一 いみじう 戀路ならで御遁世ゆへ。物あはれとさ衣の仰らるゝ也。

一 すこし心うる 妹と也。

一 ころの秋かぜ

一 わがかたに

さ衣也。中將の妹を覺召て也。

一心には忍び給しを。しがらみふする人あるかと也。鹿にしがらむ人を比して也。

一 さをしかの入野の薄初尾花いつしかいもが手枕にせん

一 さまゝの御才覺の中にも。御手跡多など勝たると也。

一 まねぐともなびくなよ夢 ゆめくも也。

秋かぜ吹とは。方々へ秋かぜをさ衣のふかせ給へると也。

一 おしなべて さ衣のをしなべて御心あだなる間。露もかけじと也。

一 色どるかぜ

秋萩をいろどる風の吹ぬれば人の心もいかいとぞおもふ

一 竹の中 竹とりの翁がさ衣へは是非を定かねんと也。

一 一かたに思ひみだるゝしのすゝき かぜ

のたよりは。中將のつたへられたるか也。中なるには 竹の中なるを妹に比して也。

扇をもちらしてはみせたれどもと也。

一 一かた 妹も一かたにつゝましく思ふとの返事を。げにいはいけなきほどゝ覺召也。

一 法花のまんだら 源氏御法の卷にあり。佛檀法花經にての莊嚴也。

一 夢のしるべ 一 大井川 いせきのごとく。年へても忘給ぬと也。

一 及見佛功德 譬喩品也。諸天佛を供養し

奉て廻向の文也。我所有福業。今世若過世。及見佛功德。盡廻向佛道。

一 宮はほとけの 若宮の御詞也。いさふた

りねんも若宮也。

一 うつくしは 若宮の躰也。さゝめき給ふにて句。

一 それはなを かうしもあろさである方は。不動尊にみえんと也。入道宮不動へむかひておはします西方をと。さ衣の仰らるゝ也。

一 ふせこの 古物語なるべし。

一 かけられ 掛鐵成べし。

一 みしにも ほんぐにかき給へる哥也。

一 藻かり船 さ衣。尼といはんため也。

一 いかにしにせぬ 此物語におほき詞也。

一 袖ぬらすと云 古物語あるべし。

一 残りなくうきめかる 入道宮の御心中哥也。

一 心にふかく 源氏の宮なり。

一 立^{ハチイ}かへりくゐまの

岩間はくゐまと有。杭間の水。八千かへりくゐまは後悔歎。さる時はくゐまは詞のいはまほしのま歎。杭を悔にして也。又立かへりいひてもなれば岩間もよき歎。よしみよは死なゝひと也。

一 後の世のあふ瀬を 後世の逢瀬をたのまんと也。わかるゝ事はいまかぎりなればなり。

一 まてしばし山のは 月だにもさ衣を世にとどめざらなん。御遁世の有ましにて過る月日と也。

一 心より外に 御遁世の事成べし。

一 たゞ思ふかた一の 好色のみにもあらず。

若宮などのことに情なくあらはさぬゆへ入道有しと也。わが身も誰ゆへぞ。入道の宮の覺召す所により。捨てたき身をもすてんとだに。我心ひとつに思ひなくさめと也。こゝ

もとことばつゞきがたし。

一かの御心に 入道の宮ゆへ。色々しからぬと覺めさるまじけれどゝ也。かの一きは。入道の宮の母宮也。

一あさむづの橋 うたがひもの也。

一みえぬ山ぢも猶いつしかとかたらひ 中

納言佐に也。

一のちさへの哥 かくれなし。

一もとの露すゑのしづくや世中のをくれささだつためし成らん

一齋院の

一又うちすがひ 松の生すがひてと云は。

生ならびたる心に用來也。同心なるべし。但如何。

一にがみ 顔をしがむると云心歟。源氏に

ある詞也。

一おぼえげに かくれなし。

一あかほし さ衣のうたひ給へるなり。

一よすがのかぎり 御子にてはなし。

一思ふさまには 御遁世の事也。

一御熊野に駒の爪づく青つゝら君こそまろがほだし成けれ

一風のまへの

一世皆不牢固 隨喜功德品に。法花一念信

解功德の格量に。小乘無常の法門を説て。阿羅漢をえせしむる事いへる文也。世は皆不牢固。如水沫泡焰。

一大井の物語 未勘。

一世やつきぬらん 引哥。

暮ぬれば齋院のおはしますたいへなり。

一音なしの瀧 前に在之。

一院も思はず 前齋院也。源氏宮也。

一いとゞまとい とは御遁世あらば也。

一いはずとももの哥 源氏宮也。ほだしばか

りに思はましかば。さ衣のほだしとも覺しめさじと也。

一行かへり哥　こゝほど異本あり。身は中空に成ねとや。さば。さらば也。世をひたとすてん事さすが也。源氏の宮の御心もとけぬと也。

一忍ぶもぢずり　前の哥也。

一むかし有けん　琴奇特有也。鬼神出たる事。源氏に有。

一法樂莊嚴　法を以て神佛をたのしめ申心也。連哥猿樂の能なども。法味に比して也。論議千部經などは眞實の法樂也。

一こゝにも　殿の詞也。

一大白牛車　法花一佛乘にたとへり。長者は釋迦如來。諸子は三乗の機の舍利弗等の衆生也。火宅此三界也。

一涙のみの哥　かくれなし。

下紐第四

一ひかりうする

賀茂の神詠夢想也。御道

世の心成べし。さるはめづらしきは。御即位有べき事也。

一淨藏淨眼の

妙莊嚴王は惡王にてましましけり。此二人の御子と御母の淨德夫人と。

雲雷音宿王華智の御もとにてさとりをひらき。父の惡王を道びき奉るべき由申て。神通往反遊行してみせられければ。父王大に歡喜して。邪見をひるがへし。佛所に詣して。共に聖者と成給ぬ。其時の妙莊嚴王は今の花德井也。淨德夫人は今の佛前光照莊嚴井也。淨藏淨眼は今の藥王藥上井也。

一舍利弗劫濁亂時。衆生垢重。慳貪嫉妬成就。諸不善根故。諸佛以方便力。於一佛乘分別說三。十方世界には本躰は二乗三乗の法はなき也。

一院の御まへ 齋院也。

一いそげども 入道尼公へ也。さ衣の御哥。

一いひしにたがふ 不及引哥。御遁世の事

三卷に申給へり。

一いかばかり 心ふかく思ひはなち給へる

尼ならては。誰もはなれがたからんと也。

一はかなかりし 引さき給へる手習の紙を

御覽ぜし也。

一宮も 一品宮のきかせ給ひて。思ふすぢ

ことなるは。御出家の心ざしあるを。おと

などの云によりてと覺召て。はづかしく思

ひ給へり。

一あしせん かための法師を阿私仙人に比

せり。

一この比は 御出家あらん物をとさ衣の覺

召也。

一みづからの 神人の祝はたのもしげなれ

ど。さ衣の御哥には。此世の榮花は覺しめさぬと也。

一宮におはし 一品宮也。

一さがの院 恨かけさせ給ふを。さ衣の聞

給て。さればよと也。

一かゝれば さ衣のねびまさり給へるを御

覽じて也。

一さまゝのほだし 若宮など也。

一又うらめしきかたにはすゝみてなん

一山かへる 山より歸ると云名あらんと也。

鷹詞歟。

一おばたゝの板田の橋のこぼれなげだより

行むこふなわざも子人丸攝州

一行末はをのづから 若宮の御事により。

えさりがたく聞えさせ給へるごとくに覺し

めさんと也。いとゞから入道の宮の御心を

申也。

一 いでやかひなきは 好色はかひなけれど
も。あはれと覺召ばと也。

一 いとゞきゝにくゝ 御出家は無用と皆申
定らるゝとて出家なき事。入道の宮の御心
にはづかしきと也。

一 手にふれし さ衣。かくれなし。

一 まことや 院の女御。後一條院御位の時。
三卷に。さ衣の御とりもちにて内にまゐり給
へり。

一 齋院 源氏の宮なり。

一 かざりあれば 齋院におはしますまゝ。
若宮源氏の宮にはなれ給はぬと也。

一 此女御 院の女御と齋院と。うとくし
からぬ中となり給へり。

一 一重づゝ 齋院御獨吟也。時しらぬは女
御殿へ也。哥は明なり。

一 このかはらぬ 神也。

一 さか木ばに もとは齋院にておはしまし
し心也。齋院におはしましたると覺しめさ
んと也。

一 なをしはしは 齋院を春宮へと覺召たる
にと也。

一 三千大千世界 一須彌千を小千界と號す。

一 小千界千を中千界と號す。中千界千が三千
大千世界也。

一 三十二相。佛の身相に殊勝なる相貌が三十
二ある也。

一 一中務 さ衣の大將かひまみの夜。姫宮に
やと云し人也。式部卿宮上。

一 一神のいさむる道は 佛法也。入そといさ
め給ふと也。夢ならでは人こそ行末をしら
ざれ。源氏宮への心を神は知給はぬ。思ふ事
なきやうならんとは。位につき給ふ瑞相也。
一 さても 心の中に思ふ事あると。神の御

心よせあらば。夢のかなはんと也。

一 はかなしや 瑞夢の事也。

一 うき木にあはんやうならん 盲龜浮木の

ごとくと也。

一 とりかへす物にもがもな世中を有しながら

の我身と思はゞ

神前なればみいれきゝいるゝ人もあらじと
也。

一 心うの事や ものから心をおこす也。物

おそろしからで。神前にておそろゝあひだ。

皆々へ物仰らるゝ事のなき間。神慮に物お

そろしからずして。少なからもくやくこ

そいまは思ひ給へると也。

一 みかきもる 神垣にてひまもなくまもら

るゝと也。

一 花ざくら

心かくれなし。さまで神の御いさめはあら

じと也。戀しくば神のいかきもこえぬべし
大宮人のみまくほしさにの心成べし。

一 思ふには忍ぶる事ぞまけにける逢にしかへ
ばさもあらばあれ

一 あせあへて あへて。此物語あまたあり。

一 太政大臣御子 此卷大納言。三卷權中納

言とみえたり。新中納言。當官。此卷兼官宰相

中將と云し也。後式部卿宮の御子も今宰相

の中將也。

一 色々のすがたどもぬぎこぼして 飛鳥井

殿へ尋申に。ぬぎこぼすとある詞。近年斷絶

か。しろしめさぬと也。

一 くつしたる名ざし くつしたるなり。

源氏に。夕霧をまめ人といひしをふくめり。

一 かうりたまかへり かふり歟。愚推。

一 かのさくらを 源氏物語わかなの卷なる

べし。

一かのあきらか 入道宮をさがにて月に御覽ぜし事ありし也。

一はしがくし 車よせ。源氏にあり。

一有漏無漏ほう 三界の世法は有漏なり。

佛法さとりは無漏也。

一けうそくに 卅には式部卿の宮のうへなり。

一ありみばや朽木の櫻 行ふるゝ心也。

一こよひは 双子の注也。

一夜すがら 朽木の花の面影也。

一れいの姫君 入道の宮の心にて。母うへにつかはし給へり。

一ちりまがふ哥 朽木の櫻の心こもる成べし。

一中將 此御妹の姫君。さ衣の御位の時。一宮うみ給へり。

一かゝるかたち 無分別。但かゝるかたち

の人を。すがたをやつして。母にはなれてあらん事をおちて。都の外の栖の事さゝて後は。母にたちもはなれぬ心歎。一品宮無黨而可見

一宮の御ためをろか 春宮への事。をろかなるためしにはあぢきなし。道芝の露の哥。前にあり。

一ちる花に 姫君の代に御母なるべし。一ゆきに。一行歟。よべ母上をさ衣ほかけにかいまみ有し也。

一右のおとゞ 宣耀殿と系圖にあり。

一のどかにもたのま 影みゆべくもなき五月雨と也。

一いつまでとしらぬ さ衣の哥也。理しらぬを。句を切べし。理をしらずして。なぐさめがたくてこそと云心成べし。

一くちおしや をだえの橋は奥州也。雲井には及ぬ中ながら心は通と也。

一うちさくじり 源氏乙女卷にあり。くじ

りとて細工者持也。鹿角又鏤にて。大きなる
きりににたり。こざかしくとりては御覽な
きと云なるべし。

一水あさみ哥 權大納言よめり。左大臣に
此卷に成給へり。

一物いひ わが言いでぬ事は前にも有しと
也。

一誰がみする みする人はあらじと也。

一とりあつめ又も うしや。うらやめ如何。

岡名所なるべし。

一皇太后宮 御母式部卿御娘。春宮の御母。

大殿の御むすめ也。

一くらべみよ淺間の かくれなし。さ衣の

哥也。

一けふばかり 春宮への御返しとゝりたが

へてと也。

一さしはなちは 春宮へなり。

一あさましや 無御同心哥也。春宮よりさ

衣の御思ひは淺きとの心なるべし。

一宰相の心には。さ衣へはいたづらに成たる

御返哥也。かうまことしくさ衣の覺召折か

らゆるし給へと也。

一さやうの御まじらひはならぬまでも 中

宮になどゝ思ふゆへに。内のくるしさをも

なぐさむと也。思ひがけずば。たゞ人しかる

べからんと也。

一上達部はしばしすきまなきやうにて。つゐ

にくちあしからん。此大將はさ衣也。よから

んとあるおちつき也。一品宮御産あれば也。

一品宮は一條院の御姫宮也。さ衣の北方也。

一一かたに思ひ哥 東宮へと御心が一かた

なると也。

一我のみぞ さ衣御出家御あらましのみ也。

一うき物と

限あれば心の句。そむかんと思

ひ／＼て打過ぬるを。今そむける世中と也。

一まがね吹きびの中山おびにせる細谷川の音のさやけさ

一八重葎茂れる宿のさびしきに人こそみえね

秋はきにけり

一年のわたり

玉かづらたえぬ物から新玉の年のわたりは

たゞ一夜のみ

一へにける年のつもりには 今がはじめに

て。物いひかはすと也。

一十市のさと 前にあり。

一我も又 さ衣哥。十市近所也。ねぬ名はた

てじ戀はしぬともとある古哥は。いけるか

ひなしの心也。是は一筋にはあらぬ。姫君勿

論。御母もほのかに見給へる也。ねぬなはの

くるしかるらん人よりも我ぞますだのいけ

るかひなし。こゝもとこの哥にて也。

一たえぬべき心ち たえぬべきは御命の事

と。又姫君をあづけ給ふとも。中たえんかはと也。

一當得水

一玉のをの姫君

一形代 人形。源氏宇治卷に在之。

一なげきわびの哥 實なき心也。

一あすのふち 飛鳥川の心なるべし。

一とけてねぬは 實なきと也。外にはかゝ

る丸ねをならはぬと。すこしほゝゑみての獨吟を。めのとの獨はいかゞと。御母上へ申たれば。

一草枕と

御返哥也。

一くわや 源氏の詞にさあと云心也。名殘

おしみて。長居をにくむと仰らるゝ心也。

一面かけ かくれなし。

一もの思ひの花の枝さし 木枯にさきこそ

まされ物思ひのと。前に注之。

一こえもせぬ哥 實なき心なるべし。

一よるの衣

いとせめて戀しき時はうば玉のよるの衣を

かへしてぞぬる

一かたしきに かさねもせずして。こふる

心はいかんと也。

一あながちには 姫君也。はかくしから

ぬは宰相中將也。

一うかりける哥 かくれなし。

一十躰 十齋。異本。

一かんろ法藥の 前に注之。

一光明不絶

一夢さむる やゝ過にけり。なく成給ひし

時よりやゝ過ると也。心むづかし。

一中將は大納言殿へ通ひ給ふに。御懷妊にな

やみ給へり。

一ことはりの哥 年つもれどもきえずも有

と也。

一たゞそれかと 源氏の宮かと也。

一おとゞ 殿の字。めのと也。

一宰相のゆるさぐらんにはいかてか内外し

一かつらぎの

うば玉のよるの契もたえぬべし明るわびし

きかつらぎの神

一ときわびし さしぬきのひもをさし給間。

中絶もやせんと也。

一雪ふれば木ごとに花ぞ咲にけるいづれを梅

とわきておらまし

一ほどく ほとんど也。姫君の母上へ心

うつりし也。さりながら姫君にもとより思

ひしめると也。

一行ずりの かくれなし。もとみし心する

と也。

一よそながら　さ衣。よそながらにてなく
成給へる御母のごとくにならでとの哥の心
也。

一すゑなどして　俗におすゑと云心なるべ
し。

一いりと入

いかばかり戀の山ちのふかければ入といり
ぬる人まどふらん

一かたもん　片紋。

一かへりしぼみ　色のかへりしぼめる心成
べし。

一いけるかひあるは　そばよりみたる躰也。
さ衣へさしむかへるめのと也。

一まづかはり　先代を用意してと也。

一殿の御けしき　けさほど御心よくみえ給
へばと也。

一心やすくあよぶ　宰相殿踏歩もせずし
て。荒たる所にみ捨てをさがたさにと也。か
はなんにて句を切て也。

一みまくほしさに　一品宮へ行てはいたづ
らに歸る。さて姫君は見まくほしさに也。本
哥引やう奇妙也。

いたづらに行てはきぬる物ゆへにみまくほ
しさにいざなはれつゝ

一十五日かゆ　粥の杖にて打。古事可勘。禁
に今粥杖にて女房をうてば。男子を生とて打也。
越前などとはことくしきなり。本文は不知也。

一たづねみる　かくれなし。

一おなじくば　大殿御娘さ衣の御妹哥也。

春宮は木高也。さ衣はしづ枝にはとなるべ
し。

一庭たづみ　春宮よりの哥有し也。

一さらずとも　さ衣ならでは。又別人への
御契もあらんと也。

一 おばすて山　　なぐさむと也。

一 ながむらん哥　　かくれなし。

一 一品宮の　　飛鳥井の母の姫君也。

一 あかぬ事　　宮の姫君めてたきをみながら。

飛鳥井君の事を忍びがたく覺召事もりな

ば。一條院の一品宮を御母と覺召事あさく

ならんと也。眞實の親としり給ゆへと也。

一 宮も　　若宮を待遠にれいよりは覺召かと

也。さ衣の詞也。あやかるとは。はらへすつ

れども。かた代か又あやかると也。

一 大かたは　　みるにてもなぐさまで袖ぬる

ゝ也。なぐさは紀州也。

一 さることのあらばしも　　しもはてにはな

り。

一 さがの院の御時　　若宮たゞ人になり給へ

り。

一 いとあまりから　　みるをあふにてとの引

哥のあたり。

我ぬれてあまのかりほすわたつ海のみるを

あふにてやまんとやする

耳とまらせ給へるまで双子の地也。わが御

心はさ衣也。

一 等覺　　薩埵の極位也。十住。十行。十廻向。

十地。等覺。妙覺。是を別教の四十二位と申

也。妙覺は佛也。

一 水の白波なる御有さま　　跡もなき心成べ

し。源氏字治
卷に有。

一 めぐりあはん哥　　又返哥かくれなし。

一 せりつみし　　前にあり。

一 戀草をちから車に七車つみてこふらく我こ

ふらくは

七車。此哥にて成べし。

一 宿かへて待にもとはず成ぬればつらき所の

おほくも有かな

一をくりをかれ 内へ姫君を送りすてさせ
給へるを。今上あはれに覺しめす也。

一心もゆかざりし 姫君見付給へる所也。

一かのよなく 源氏の宮の御哥也。

一戀てなく 齋院の事なるべし。

一哀そふ秋の 齋院の袖ならてはと也。

一えんしろふ 燕子樓。

一すみぞめだに ならひはなれ給べきにと

也。

一たゞそれかと 源氏宮也。

一かくこひん哥 かくれなし。

一名をおしみ 人たえしなれば。あふと云

名もおしきとなり。手かくる程の契はたえ

たるとの御心なり。

一ゐん 堀川院也。

一あふぎてふ 名を惜とてかはらばとは。

あはゞつらからんと也。

一引つれて哥 かくれなし。

一かなしさも哀 こは是は也。又子もかね

て也。

一ことはりもしらぬ哥 かくれなし。涙も

ながるべきにては如何。

一げにあるべきとは げにつらき心と思人

あるべきと也。

一物としらずや 引哥如何。

一一蓮托生 夫婦往生同蓮にむまるゝと也。

一かよちやう 駕輿丁。河がむづかしきと

聲々申也。此心有。

一思ふ事哥 かくれなし。

一なめげなるは 齋院に成給へる後も心を

かくるを。神の御ためにはなめげなるを。と

がめ給はで。位にさへ付給へると也。人形に

しも見がたきと也。

一八島もる哥 かくれなし。

一神垣の杉 同前。

一此世にはとかや 前卷に身をなぐる時の

夢中の哥也。

一みたてまつる 一條院一品の宮にまかせ

て也。

一一宮 今上の御子。おもてはさかの院御

子兵部卿と申奉る也。御元服の夜よりあら

はれたる成べし。

一年つゝる御哥 かくれなし。

一一いにしへになをたちかへる心かな戀しきこ

とに物忘せて

一立かへり 中宮の御哥。今上の入道宮へ

御心中きはぐと也。

いにしへの野中のし水ぬるけれどもとの心

をしる人ぞくむ

一今さらに えぞしらざらんとも在之。戀

如何。無分別。

一あるべかりし人の あらん事かはのてに
はなるべし。

一佛もしゝふしゆせつ 止々不須説。方便

品ニ一佛乗の法門を舍利弗の請じ申されけ
るに。佛のとかじと惜給ふ御詞也。

一きりつば 今上の一宮なるべし。

一二宮 飛鳥井の君の御むすめ也。

一故宮 後一條院の御子也。御命みじかく

て。かやうに思出奉ると。今上いま覺し召出
也。

一いとしも 寂。尤しも。如此の思ひにては

なかりしと也。

一行衛もなくはてもなく覺しまどはせし

三河守なれども。母のめのと不便に覺しめ

す也。

一かへりこし哥 又大貳に成て下りし時の

こと也。

一人しれぬ 中宮のうぶぎぬのしるしに。
母よめる也。

一さゝのわき葉 蘆のわか葉歟。脇葉歟。

一忘ずば 心あきらか也。

一行末 同。

一をくれじ 同。

一かすめよな かすめて也。中將の聞もは
づかしく覺召。さ衣の御哥也。御遁世の心も
むかしは有しに。如此の哥にて御心はみえ
たり。をくれてくゆるよと也。

一おちたぎつ 涙は波也。過にし方へは歸
らぬ世上と也。

一ゑにかける 形さへあるに。ゑなど色々
かけると也。

一うちはへたるは よろしき時も。散飯ば

かりとらせ給つゝ。御精進ゆへ御わづらひ
もよろしからぬ也。

源氏に朱雀院の行幸に。いもいの御はち。三
衣のけさを。ささへ持せらるゝと也。

一消はてゝかばね 心あきらか也。

一たちかへり 同。

此物語のはても源氏夢のうき橋の面かけ
なり。少年と書とめて。残おほくかきとゞ
めたり。四冊を全部も心あるべし。はかり
がたし。後生の人しるさるべし。

流布印本ニ

天正十九年三月九日

臨江齋

法橋紹巴

〔右狹衣物語下紐以流布印本校合〕

續群書類從卷第五百廿二

總檢校保己一集

男源忠寶校

日記部一

はるのみやまぢ弘安三年

都のすまゐもあもはずにことしよとせになりぬるにや。すぎにし三とせのほどは。うちつゞき心のやみにのみくらされながら。涙のひまゝくにはいてつかふ事もありしかども。よろづものうくて。しるすともなかりき。

今日は正月の朔日なり。顯官榮職の身ならねば。元三出仕思たゝれずしてこもりゐたり。雲井にちかき宿のしるしには。出仕の人々をぞみいだしつゝなくさみぬる。故宰相の時より和哥所とて。その世にはとにはなやかかなり

し哥のさたなりしを。故かしはぎのよにも。はじめつかたは哥よみおほくて。さかりなりしぞかし。末つかたみ給へりし比は。次第にむかしのすき物どもゝことの葉ばかりのこしおきて。なかばいづみのもとに歸りにしより。ことのほかに人なくなりゆかましか。又我世となりては。和哥のうらなみたちよるあまもなくなりて。心ひとつになげきかなしめどもかひなし。大かたの世にも。今はすける物もなし。さりながら少々かたらひよせて。今日よりぞ着到の番の哥もすこしむかしにかへる心ちす

る。はじめて入ぬる人。頭兵衛督爲世朝臣。をとゝの少將爲實朝臣。故土御門の宰相中將の子息侍從具顯朝臣。むかしの手かき哥よみの行成大納言のすゑに。經朝三位の二男前石見守定成。頭督ひとつはらからの律師定爲。又玄覺律師などくはゝりて。柿本もひかりそひぬ。

三日。殿上の淵醉みんとていてたつところに。おもひのほかなる客人どもあまたまうできつゝ。さけのみなどして。とみにもかへらねば。心つきなけれども。うちすてゝたいむこともわりなくて。よもふけぬれば。ちからなくてみずなりぬ。

四日。今日ぞはじめて出仕せんとて。鳥の時ばかりに。まづとみのこうち殿にまいる。かりのよそほいなれば。春宮の御方へはまいらず。くれぬればときは井殿へまいる。こよひは見參

はじめとて。人。おほくまいりあつまる。子のはじめ程に。見參にをの。なのりてまかりいてぬ。

六日。衣冠にて春宮へまいる。となるとなし。よふけてまかりいづ。

七日。ゆき時。うちちりて。のどやかかすめ

(と脱殿)

り。殿上人上北面少々きたりて。まりけて後。上にのぼりつゝ。さぐりだい五十首よみてあそぶ。かけ物いだしたれば。わかちとりて。心ゆきつゝ歸ぬ。

九日。こよひは法勝寺の修正御幸なり。くるればなをし。ねり物のさしぬき。新せいとて。かたびらぞすさまじながらきて。まづ春宮へまいる。時よくなるとつぐれば。ときは井殿へまいりぬ。公卿内府以下十八人少々束帶。その外はみなとのゐすがたなり。左大將直衣のたち笏をもつ。殿上人貫首以下卅よ人。北面のと

もがら廿よ人なり。みだうのとゞもことながければとゞめぬ。あかつきがたにぞ還御なりし。

十日。春宮の御かたの鞠のかゝりうへかへらるべきにて。仰をうけ給りて。木どもみに。神祇のかみの家によき柳ありとて。ゆきてみる

に。まとおほきにもあり。枝さしあしからねば。これもさだめてえだとも少々きりてかへらむとするに。家あるじの三位をとゞも。やがて袖をひきて。上にのぼりてあそぶ。連哥連句あり。管絃しつゝ心ゆくさまなり。あまりにあるじのおとゝ康仲といふわか物。もとより舞人なり。汴州。三臺。地久。長保樂など舞。折かなればおもしろし。ものゝねどもしみてふけぬれば。をのゝあかれぬ。

十三日。かゝりどもうへすかして。くるしければいてぬ。宰相すけのつぼねよりふみあり。内

裏のなをしの事御めんのよしなり。日がらよければ。やがてこよひきてまいらんとおもひて。頭兵衛督に此よし申て。御教書をととりて。くゝりさげてまいる。ひさしに殿上人三四人あり。三位殿のつぼねへよろこび申てまかりいてぬ。

十四日。くるゝほどにかもへまいりぬ。たゞすよりみやめぐりして。かみの師のもとにまづたちよりてやすみぬ。御とのひらきにあはんとて。つぼねしつらはせなどするに。忍びて御幸なりぬ。さるほどにならのやしろの御前にねんじゆするほど。そばに女房廿人ばかりむれぬれば。かたゝへゐよりつゝみるほどに。むかしの中務卿宮のみやす所のひとゝなり。民部卿のつぼねとて。めいなるひとどもみあひて。ものがたりしつゝ。みなつれたちてつぼねへ入ぬ。とらになりて。みとをひらかんと

するに。あかずして。神供はあらはにぞゝなへける。あやしき事なり。文永にもかゝるとありて。其とし法皇かくれさせ給。京かまくらいくさありしと。宮人など申あへり。これもいかならんとちぼつかなし。

十九日。春宮の御まりはじめなり。まづ参内。其後坊にまいる。女房今日御まりはじめなり。御師匠の身ながら。たゞさらんとほいなるべし。かつは院の御方よりもしきりに仰あり。いかさまにもたつべし。したうづのそまうは新院の御はからひにてあれば。かなはずばときは井殿の御所にてこそしさいは申されめ。この御所は別の御事なればなど申さるゝを。あなかに申さんも。そのはゞかりありて。たつべきよし申ぬ。さりながら日ごろれいなさよし申て。けふもとのやうにてあらんもけうあるまじければ。かつは其例もあるによりて。

したうづははかず。たゞくつばかりゆひてたれば。人くめをおどろかしてみあへり。公卿はおほからず。たゞ徳大寺中納言。綾のこらぢの三位。たゞ三人なり。殿上人爲世朝臣以下例のひとくなり。あげまりすべきよし。かねておほせあれども。けふはそまうもかなはず。心よからねば。爲世にゆづりてのきぬ。此人したしきうへ。もとより弟子にてあれば。そのやうとふをしへてさせせぬ。よろづとそぎてけふはあれば。二三足けてやがていりぬ。みな人はじめにて。身もたをやかならぬにや。いたくけふなくて。かずさへあがらねば。ことをはりぬ。院の御かたみすのうちにて御らんあり。

廿日。内へまいりたれば。ひさしく出御ありて。きのふの御まりのしだい申べきよし勅定あれば。はじめよりことのやう申ぬ。入御の

後。坊にまいりたれども御まりなし。人々宿所のかゝりにてけるべきよし申て。いざなひていてぬ。日とく暮てなさけなし。後の日をちぎりてをのくあかれぬ。これこそ式の文にかなひ侍ぬれ。

廿二日。とみのこうぢ殿にて。二條大納言入道にまいりあひぬ。一日の御まりの事ども申いだして。したうづはかぬ事。むかしはかゝりけるとかやなどいひつゝ。かんずるよしなりき。大かた此人は當世の有職にて。よろづのとにめ心をとむる人にて。かやうの事も申さるゝにこそ。

廿四日。空はかすみながら雪ふりて。木ごとの初はなさかりとみゆ。くるれば坊にまいりぬ。こよひは御會はじめなり。まづ隆博朝臣まいりたれば。この道のことも申いて。今の世のすたれたるよしなど。たがひにかたらひつゝ。

ふくれば腕の御方も此御かたへなりてのぞかせをはします。東宮御なをしなり。出御あれば。奉行宮司爲方きり燈臺に火ともして御前にたて。御すゝりのふたを文臺にをかる。しだいにすゑより。哥奉行とりあつめつゝをく。傳哥ばかりまいらせられて參なし。讀師花山院大納言。講師隆博朝臣なり。めしによりてちかくまいりぬるこそ。道のものめきてはづかしけれ。哥どもやがて院の御方へまいりぬれば。いふかひなくおぼえずして。かゝずなりぬるこそいとくちをしけれ。さてもすゝりのふたはうつふけてをくよしきゝをさて侍に。こよひはさもなかりつるこそいかにあるべきとにか。

廿九日。東宮の御いのりとて。としごととに伯三位松尾社にて石のたう一日に八万四千基をたて供養すとて。けふといひていざなへば。定成

と一車にて。松のおがはらへまいりぬ。かすみ
わたれる河はたのいとひろきしばふの。神さ
びまさる松のみどりも。いま一しほの色そふ
けしきみえていとおもしろし。たれもく石
とりたてゝ。かずあらそふもけふあり。

萬代をやたびあまりにとる數も君がためと
ぞ神はまもらん

と心の中ばかりにおもひつゞけ侍し。わかき
人どもいづくよりかとりいでけむ。まりをひ
とつもちいでゝ。これもかずあるいはひの物
ぞとて。松のもとにたちよる。こしをこそすら
ねども。千年のかずはあしにもみちぬべくな
んけあへり。石のたうかずとゝのひて社頭へ
まいる。なにがしの律師とかやくやうして。と
のありさま申あぐるも。神の御心もさぞみそ
なへ給らんとめてたし。さてもあらんやはと
て。さけのみ。詩哥連句連歌など。をのがじゝ

くちすさみつゝ。暮ゆけば歸ほどに。猶しばふ
の松のもとにて。しひんとするけしきなれば。
車はおそくて。ともなるものゝむまをとりて。
のりてにぐるに。いまだ心しらぬ馬なるに。人
松のかげよりにはかにはしりかゝるに。此馬
おどろきてそばざまになぐるに。なじかはた
まるべき。をちぬ。ひとくあさましがりてさ
つゝあれば。いとけうさめて。車にのりてかへ
りぬ。もとよりこしのそらうあるものが。むま
よりをちぬれば。いよくおこりあひてやみ
ふしぬ。いかなる事ありてか。神の御前にしも
かくありつらんとおぼつかなし。

二月

九日。このあすか井のあばらやのわかぎの櫻
ほりて。東宮へもたせてまいる。あさがれいの
御つぼにうふべきよしさだめられば。四方み
なふたがりたる御つぼなれば。たいのやのう

へよりこしてうへぬ。是は日ごろ申をこなふによりてなり。うるはしきかゝりは人ずなき時はかなはず。これは御ひとゝころも又ひと二人もまいりて。常に御ならしのためなり。やがて神祇かみねこかきまいらせたればしかれぬ。誠や木にむすびつけたう侍しかども。わがもちてまいりはべれば。さもえしはべらで。心のうちにおもひつゞけ侍し。

うつしうふる春のみ山のやまざくら雲井にうつる色をこそまて

やがていてさせおはしまして。いさゝか御まりあり。ことに御時よし。宰相のすけのもとより。内々御鞠あるべしとて。きとまいれといふふみあり。このよしを奏して。藏人佐爲方とあひぐして内へまいりぬ。やゝ久しくして出御有。人数多く内々のぎなり。御まりの御すがた。ありがたくめでたし。御なをしにびの御は

かまくゝりをいれてあげらる。建久には五せちの帳だいのよは。御さしぬきめさるゝ事なればくるしからじと。松殿申されしによりて。御さしぬきをめされき。かつは季顯朝臣にかたりしかば。そのよし申さんどぞ。

十日。院の御まりはじめなり。そまう猶とゆかねば。しきりにいなび申せど。たび／＼仰あればまいりぬ。かりぎぬは此道にはとにさるべき物なれば。とのゐすがたはあらためぬ。院御なをし御えぼしにていてさせ給ひぬ。人／＼多くまいりあつまれり。露はらひはてゝたゝせ給。おほせによりて御まりあげぬ。此かたのとは例の日記にしろければおほくのこしぬ。十二日。雪ふりておもしろければ。内へまいりぬ。御まりのさたあり。暮るほどに坊へまいりぬ。

十四日。東宮の御方。けふより七日。御くすり

の御ゆきこしめさる。入夜てまいりたれど見
參なし。内へまいりぬ。出御あり。

十五日。すぎぬる十三日より。本院さがのかめ
山殿へ御幸。十七日まで御るすなるべし。番に
をられて坊にまいる。こよひは番なればしこ
うしたり。この曉この御かたの屏のうへに火
をつけたり。一らうのはん官説長みてうちけ
ちぬ。いよく番きびしうすべしとて。ひとび
とおほくまいりあつまる。

十六日。内へまいりたれば。よべまた火をつけ
たり。俊光みてけちぬ。かやうに御所く火と
にて。人くおほくしこうしたり。

十八日。雨ふりて御つれくなりとて。南殿に
て御鞠あり。かずまりけるべしとて。せめられ
まいらすれば。としよりてこしのいたはりわ
づらはしくて。かやうのこまかなるとはかな
ひがたきよし申せどもかなはねば。南殿東西

七間をこまにけて。ゆきかへりてとりぬ。御か
んあり。ゑつくの勝負の御まりあり。

廿日。内裏の御まり有。夜に入てはじめて御が
くもん所へめしいれらる。詩歌續三十首御會
あり。

廿五日。内裏の御鞠なり。あさて祈年こくのほ
うへい使たてらるべきに。一人にはかにこと
かけたりとて。御前にしてせめらるれば。のが
れがたくてりやう狀申ぬ。

廿七日。雨ふる。みの時にまづ内裏へまいり
ぬ。上卿左府すてに參あるとて。奉行いそぎは
べれば。神祇官へまいりぬ。いまだ人もなし。
はるかにときうつりてぞまいりあつまる。や
はたのつかひ宰相親賴卿。加茂別當親朝卿。松
尾資緒卿。平野にさゝれたる。春日公寛卿な
り。雨やみて酉のときばかりに。平野にまいり
つきたれど。神主まいらず。いと神さびまざる

心地して。櫻木こそすこしけしきつきぬる。松のみえぬぞあやしき。むかしはありけんかし。

廿九日。坊のあさがれぬの御つぼにして。御かへりあしどもならはせ給。ひさしくしたえたるあしなれども。としごろしつけたるにて。けてみせまいらす。ゆゑしき御あしどもあり。内裏よりめしあり。まいりたれば。日ごろさたありし勝負の御まりとて。人々おほくまいれり。左右をわかたる。上の御あひては重代なりとて。やがてさうなくさたありて。まいるべきになりぬ。めんぼく也。左方。内御方。宰相中將公貫卿。頭督爲世朝臣。季顯朝臣。能兼。實敦。爲方。範冬。右方。修理大夫隆康卿。俊輔朝臣。隆氏朝臣。俊光。俊定。業顯。藏人清顯。しきりに右よりはじむべきよしさたあり。されどかたく申によりて。左よりはじめらる。三度のよし定めらる。左かずなし。右の方やがて百二十

あげてをとしぬ。よりて右かちになりぬ。とにけふあり。

三月

一日。左大弁宰相がもとより御教書あり。無文のふすがはのしたうづはくべきよしなり。とによりこび申ぬ。日ごろのそまうたちどころにかなふ。との葉もなし。故武衛つゐにそのげちなくてかなはざりしに。そのほいとげぬれば。此道にをきてはのこるとなし。車ならねど。此したうづもかけてすゑの世のいさめにもしつべくぞ。今日は東宮坊へ新院御幸なりて。御まりあるべしとてもよをさる。宰相中將公貫卿をもちて内々申入。としごろこの道の前達すてに御めんうへは。身にとりて又後の春をこし待べきならねば。けふ上よりつかうまつるべくば。おそれながら御所へまいらせ上ばやと申侍しかば。ささこしめされぬと

て。御さそくあしからずと申されき。かたびらは夏の物なれど。先例も三月の中にきたる事もはべり。その上新せいとて。いつもかたびらさるべきよし仰くだされて。元三にもきあひたれば。ましてまりの時かた／＼よし。かたびらをさる程ならば。あせとり難あらじかしとて。むかしの例を思て。爲世朝臣とふたり。たうしきに直衣にあかゝたびらなり。人／＼目を／＼どろかす。午のなからばかりに新院大宮女院御幸なりぬ。まづ本院の御方にて御たいめん。やがて春宮の御方へなりぬ。まづ露はらいはじめらる。三條宰相中將。公貫卿。あやのこうち三位。經資卿。頭兵衛督爲世の朝臣。兼行朝臣。爲雄朝臣。なをし。爲實朝臣。爲忠。かりぎぬなり。爲雅朝臣。衣冠。御所の前のをちいたじきに御坐三帖しく。本院。御あほし。新院。同。東宮。御かぶり。露はらひまかりいでぬ。新院御くつ爲世朝臣まいらす。東

宮御方おほせによりて御くつまいらず。これはかならずさるべきとならず。このちか比よりかやうになりたり。新院東宮に御さそくありて御立あり。つぎに東宮御たちなり。其後仰にしたがひて。公守卿。公貫卿。爲世朝臣。爲雄朝臣。爲雅朝臣。たちさだまりてあぐべきよし御目ありて。すゝみいて。まりをとりてきそく常のごとし。あゆみいてさせ給ふ。給時一足にてまいらせたればあそびしつ。今はおもふとなし。院ははじめより御あふぎをもたせおはしますは。長者の御ふるまひなり。けふはいかにもとおもへば。さき／＼よりははたらかれて。ひと／＼もかんずるまでこそなければ。どれいよりはよげにぞ思あへるなるべし。かず二百七十にてをちぬ。おもしろきあしども上下おほし。人數に立かはる人／＼其かず多し。洞院中納言あす内裏にて御まりあるべし。

かならずまいるべきよし申さる。よりてりやう状しぬ。

二日。しやうぞく昨日のごとし。ひつじばかりに人々ゝまいる。見證に左府昨日けふたいせ給はず。くゝりさげらる。人数。東宮大夫洞院中納言以下なり。内御なをし紅の御はかまに。御くゝりをいれられてあげらる。奉行洞院申さるゝにしたがひて上まりし侍にき。けふはとにおもしろし。かずぞあがらぬや。

四日。すぎにしころ。めまさりのまけわざの花。あまりせめられまいらせて。やへ櫻一えだ。紅梅一枝。柳のえだに梅櫻の花をとりあはせてつけて。白きうすやうをさりて。さかせつるかなとかきて。つけて内裏へもちてまいりぬ。やがて御所へめしいれらる人々は。思ひおもひに花のえだに詩一あるひは哥一をつく。いとけうあり。けふは内東宮に御鞠あり。

身をわけたくはおもへども。かなはねばかひなし。御師匠なれば東宮へまいりぬ。御まりよりさきに。内より頭督と同車して。びさもん堂の花みにわたる。みなまてはさきそろはねども。梢どもをくれさきだつ色みえて。いとおもしろし。

五日。東宮のあさがれいの御つぼにて。二人づゝの花つくの勝負の御まりあり。右かちまいらせて。やがてやへ櫻のえだにむめのすゝをかけられて下給はりぬ。ひきこめがたくて。内へもちてまいらせたれば。とさら色も匂ひもそへたる御心ちすとして。御てづからとらせ給ていらせおはしましぬ。

六日。内の御まりあり。人数なくてあひなし。夜べになりて月おぼろにて。とにゑんあるよなりとて。女房たち一りやう。おとこ一りやう。予。俊定。業顯。びさもんだう持明院殿までかけあ

りく。女房あとこ連哥も侍しやらん。わすれ侍りてかゝず。くちあし。花の枝てごとになてこそなければ。をりて歸まいる。

七日。花山院の右府入道のあはだぐちの山さうへ新院御幸なるとて。御まりあるべし。まいるべしとて。入道のもとよりも。又奉行重清がもとよりも使あり。あしをそんじてまいらず。けふはとに風あらし。あすともたのまれぬ風の前の花なり。夜べのなごりもたへがたし。かざりの梢ゆかしなど。女房の中より申しださるれば。夜べなかりし殿上人ども。けふみざらんには。此春はさてこそはとて。このおきな一人をなにのゆへとなくせめゐたり。けふは御人すくななり。なまかりそとて。御連句の坐に能發のせうをめしをけとて。とらへられてしこうしたり。のこりの物ども。季顯朝臣業顯等いかゞしてやう／＼に申。雅藤職事なれど。す

き心とにあるものにて。御連句にさふらふも心そらなり。俊光も執筆するそらもなし。やう／＼にしてにげいで。女房に此翁のくるまをまいらす。隆氏朝臣車にのみのりてせんぼんへゆく。くる／＼ほどの花のいろいとおもしろし。さるほどに雨おびたゞしくふる。いづくよりかたづねいてたりけん。かさを一もとめいでたり。ぬるとも花のかげにこそとて。猶さらず。しばしこそあれ。あまりなれば。ぬれじとかさの下にかくれんといひてはしりいりね。其後人／＼みなかゞまりたり。あめやみげもなくふれば。長らうのもとへ女房車やりいれておろしつ。はれま待ほど。いざ念佛申させてさかんとて。僧どもそゝのかして。尺迦念佛一時禮讃一時申さす。其ほどにぞはれぬる。この雨は花のためはうけれど。ほだいのたねとはなるらんなど。女房もけうに入て申さる。

思いてなるべし。歸さまにをはりのかみ仲綱入道もとよりこもりゐて侍しがもとへかけてにげはべりし。

くれぬとてけふこざりせば山櫻雨よりささの色をみましや

みな人くは道よりあかれぬ。今たゞ雅藤顯業ばかりにてかへりまいりぬ。猶雨ふる。さらばとて此ひとくをひきつれて歸て。よもすがら物語してぞあそびぬる。

八日。くるゝほどに。一日のまりの御わきまへこよひあるべし。まづひとくまいりたれば。ねたみあるべしとて。やうくにかゝる。範冬をいだされて。此おきながこしにとりつきてけさせす。かやうにせられまいらせぬれば。いかにおもへどかなはずして。右まけになりぬ。夜にいらて。すみの小御所をしつらはる。かちはひさしにさふらふべしとて。みなしこうし

たる。かちのむかへとて。三條宰相中將。頭督以下みなしそくさして前行す。二間のよこしきに御坐をまうく。かちはおくの座にたゝみしかれてこうす。まけ方にはたゝみなし。洞院中納言ばかりぞ同坐にしかうしたる。御所の御分により一白松のえだにつけてたてらる。

頭督爲世朝臣櫻のえだにまりこゆみやたてつけて。すりのかみの宰相のまへにをく。御分松の枝にしろさまり。したうづ二足。一はみなふすべがは。一は紫し。季顯朝臣もちてまへにをく。かしこまりてたまはりぬ。宰相中將公貫。鞠したうづ枝につけて。たかうぢがまへにをく。俊定前に爲方柳のえだにてまりすへ。いしたりのこぎつてをく。すゑくみなまり一なり。歸るさまにはみなまいて入。其後せんずまざいのまねたうへんさるがう一なり。洞院中納言しだいとりてこれをはやす。いとけうあり。

九日。内より殿上人三四人。六位一人。一車にてひむがし山の花みる。

十三日。季御どきやうはじめらる。けふはかもの一切經會なりとて。隆氏朝臣。つねお。なりあき。ひとくるまにて内より物みにまいる。まいはつる程に。御所のやのひろひさしにてさけのみてかへるに。猶あかず。いざやいづくにまれゆきてあそばんとて。四條の少將しれるけいせいのもとへゆくに。さしあふとありてむなしく歸るに。さらばとて人々をしれば。ちからなくてまたゑいすゝむ。つねおあひしれる女房二人。いづくよりかたづね出しけん。ゐてきたり。あくるまであそび物のねならし。ひとくぐらうゑいし。いひしらずおもしろし。此けいせいもみうとはなくて一せいなどいふ。けふありしとなり。

十八日。けふはすふくこんがう院の八かうな

り。さがへまかりてとりさたすべきに。御鞠のまけわざなれば。代官をやりてをこなはす。夜にいりてひとくぐまりあつまる。さきのやうにすみ殿をしつらふ。すこうもとより候はせ給。まけてごとにしそくさして行幸なる。勝坐につきをはりて。まけふねをつくりて。御ひき出物以下をつむ。思のつをはやしてまいる。ふねにるくをまづ御したうづのはこをもちてましてをいづいりて御前にをく。藏人右衛門佐俊定御まりのひつ。藏人の次官雅藤御くつのはこをもつ。みなまさゑなり。すりのかみ分まりしたうづくつなり。隆氏分すじりひととなり。その外みな鞠なり。つねおふねをつくりて。やがてあひてのまへにをく。さるがう五番してみなにげいりぬ。猶おほせあるほど。せうまういてきてうちさましぬ。まけどもよろこびあひぬ。

廿二日。東宮の御會はじめなり。いたはるとあ

りてまいらず。三首うちに庭落花に。

いつよりか庭さよめせん櫻ちる春の宮まの
とものみやつこ

とよみはべりしを。後にさゝしかば。なんずる
人もありけるとかや。東宮會をみざるにや。さ
だめてかゝる事あらんかしとおもひて。花山
院の前内府申あはせ侍しぞかし。をかしきと
なり。

廿七日。東宮御鞠なり。大柳の懸にてあるべき
よしかねてもよをさる。はじめて近衛の内府
まいるによりてひきつくろはる。上まりのと
によりて。わゝしき事ありしかど。つゐにつと
めぬ。いまの世の中いとうるささとなり。人に
心をゆるし。たとひしたしき人なりとも。弟子
なりとも。うちとくまじさにとこそ。こまかに
はむづかしければかゝず。人くみなしりた
ることなりかし。すぎにし二よの月と花とに

ともなひし内の中納言のすけのもとへ。ちり
のこりたる櫻につけて申をくり侍し。

いかにせん梢あまたにみし花の此一えだに
のこる名残を

人はいざ忘がたみの思いては月にみしよの
花の面影

かへし。

わすれめや人の心はうつるとも月と花との
夜はの面影

ちる花の名残といふも頼まれず梢あまたの
あかぬ詠は

四月

一日。あめしめやかにふりて。ゆふべにやみ
ぬ。内裏へまいりたれば。ひら坐とて。公卿し
きじなどまいりあひたり。くれゆくほど東宮
へまいりぬ。

十日。ひるつけて東宮にまいりたれば。とに人

すくなゝり。ひさしにてうちこはつくれば。や
がていでさせおはしまして。としはいまだ郭
公こそきかね。たれかきゝたると御たづねあ
れば。御もとに女房たちもいまだきかねよし
申さる。いづくにいくとだにいまだうけ給り
及ばず。その所をさだめ人數をわかちて。はつ
ねの勝負をし侍らばやと申いだしたれば。ま
とにけふあるべきとなり。院のかたに申あは
せて定めんとて。やがてあの御方へなりぬ。と
ばかりありて。宰相のつぼねにて。まことにさる
べきとなりとて。左右の人數をわかちて。左方
の奉行はあやのこうち三位。右はもよをすべ
きよしうけたまはる。人々。左方。院の御方。經
資卿。邦仲朝臣。爲雄朝臣。兼行朝臣。信有。顯
範。右。東宮の御方。雅有。康能朝臣。資行朝臣。
長相朝臣。賴成。爲方。女房には左。新大納言さ
い相。高内侍。右。衛門督。はいき。せうにんの

ために。女房一人おとこ壹人。兩方にとりかへ
てめしゐたるべし。あさて北山殿へ御幸ある
べし。左の方の所はうこんのむまば。右はひん
がし山なるべしとさだめられぬ。すなはち右
のひとく。に此よしをあひふる
十二日。あめふる。ひるほどにはれぬ。けふ御
幸なり。やがて勝負あるべしとて。人數みなあ
つまる。さるのなかばばかりに。右方のひとび
と此家にきたりあつまる。女房車一りやう。せ
うにんのために左の高内侍のりぐす。この車
には康能朝臣。せうにんの左信有あり。一りや
うには長相。賴成。資行朝臣はこなたのせうに
んにて御幸の御供す。先かねて右方あひだん
ぎするやう。もし一聲もきかてかへりたらん
とねんなかるべし。べとひ後にあらはるとも。
一たんろんじたらんは。はるかにけうありな
んとて。つくりほとゝぎすをよういす。みな人

くゝのともものどもにふかせて是をえらぶに。ともにあるどうしきおとこすぐれて。かねて山にまうけさす。さてわしのおへとてやりつゞくるに。ぎあんはやしにてやがてなきぬ。人くゝよろこびのゝしるに。左方のひとくゝすべてとばなし。やがてはやさゝたるよしの哥よめ。おいつかせて御幸に申させんと。やすよししきりに申せど。よからぬ事は中くゝなるべしと申せば。げにもとてことのよしばかりを使にて申。是よりかへるべきことにあらねばとて。猶わしのおへゆくに。こゝにてもをちかへりなく。これをばしらで。かねてよりまうけたるおとこやつくりごとせんずらん。さらばまともけがれぬべしとて。物どもを山へはしらするさまいとおかし。女房車よりありて堂くみらる。はてはみねのどうまでよぢのぼりたれば。日はすてに暮て。都の方はげに

たゞひとむらのかすみばかりなり。信有侍従山路に日くれぬといふらうゑいを一りやう反す。まことにありにあひておもしろし。雲間の月はなやかにさし出たる光に歸りまいりて。東宮の御方にてことのよしを申ていづれば。人くゝせうくゝおいきたる。よもすがらあそびあかしぬ。

十三日。巳の時ばかりに。北山殿よりとて。兼行の朝臣の文あり。みれば詞なくて。

尋こし山のかひとて郭公人より先の初音をぞさく

返し。

此里にふりにしねをや時鳥山のかひとてけさはきくらん

けさはすこしをくれてや侍らん。還御のゝち。左御勝のよししきりに御沙汰ありとてめさる。やがて院の御方へまいりたれば。もとより

東宮おはしまして。御さうろんどもありけんかし。しゆくゝの仰どもあれば。左方の人々右方のせう人とめしあはせて。きこしめすべきよし申せば。十六日と御さだめあり。十四日。けふはかものまつりなり。なをしにくゝりあげて内裏へまいる。つかひは少將みなもとの忠顯なり。れいのさほうなればしるすにをよばず。

十六日。けふはほとゝぎすのもんちうあるべし。いとぎまいるべきよしのもよをしあれば。まづ東宮の御方にまいりぬ。持方はそ狀をかきてけざんにいる。左方に付べきよしうけ給りて。これをつくるに。左方の人申やう。御前にしてぢきのもんちうのうへは。ちんじやうにおよばず。東宮院の御方へなりてめしあはせらるゝに。右方のせう人すけゆきの朝臣。院より仰をうけ給はるかにて。是非物を申さず。

其けしきとおかし。このうへは猶きゝなをすべきよし御さたあり。右方みなそせうあひのこれども。ちからなくてまかりたちぬ。

十八日。けふなをひんがし山へまかるべきよし御さたあれども。あめつよくふる程に。たゞ御所にして勝負すべきよし御さたあり。左右の人々まいりあつまりて。くるゝ程に院東宮中の御所へなる。ひろひさしにをくはしをわかちて左右の坐とす。かう一寸をかざりとすべしとおほせ下さる。すなはち左方かうのもゆるほどほとゝぎすをまつほどに。兩方の人々連歌どもあり。すてにかうもえはてゝのち。又右さきのごとし。猶なかざるあひだ。このうへはくじなるべしとてくじをとる。右かちをはりぬ。左方の人まとはちからなしと申てたちぬ。

廿一日。左方のまけわざとてもよをさる。くる

ゝ程にひとくまいりあつまる。しん殿のひがしおもてをしつらはれて。みすをかけられて。りやう御所女院御らんぜらる。右方人数すのこにさふらふ。まづふりうほんしよのもんしやくなり。そのゝちさるがほ基めまさらにてねたみあるべしとて。御前にしてこれをうつ。右又かちぬ。やがてさるがほ一。いまはいまけたるべきよしおほせくださるゝあひだ。右方りやう狀申てまかりたちぬ。

廿六日。このほとも同ことにならしたれども。ゆふさりなればとて。つとめてより人くまうできて。日ぐらしならず。夜にいりておのこのまいる。しむ殿のひがしむき。御しやうぞく一日のごとし。まづふりうむき^{馬長}をさ。つぎに本でん^{田樂}がく。其後さるがほ基。各みないそぎまかりいづ。なをすべきよししきりにおほせあれども。あめおびたしくふり。よふけぬるほど

にまかりあかれぬ。

廿八日。内裏へまいりて。やがて東宮にまいりたれば。常の御所の御えんへめさる。もとより續拾遺集を御らんぜらるゝ程なり。このたび入たる戀のうた。もての外に御さたあり。女房たちいづくのけいせいのもとへよみてやりたりける哥ぞ。たしかに申せとせめらる。めんぼくきはまりなし。内裏さまには。中將におそくなりしうれへの哥を。御口につけらるゝよし。宰相の典侍これをかたれば方くめんぼくなり。

五月

四日。かもへまいりてつやす。あけばまかりいづべけれども。くらべむまみんため。師のもとにたち入。新院御幸おそきによりて。日くれぬれば。のこりをもみはてずいそぎかへる。かねてより六七日は内のかたき御物いみなり。ま

いるべきよし仰あるほどにまいりこもりぬ。
さろく所をつぼねに給はる。又あすよりは富
のこうぢ殿の供花なり。とりのとき番なるよ
しもよをさるれども。御物いみにまいりこも
りぬれば。教顯朝臣に申あつらへぬ。

六日。ひぐらし御連句。日をかゝせおはしまさ
ずして。六十日ばかりになりぬ。内々は百日の
御心ざしながら。其よしを仰いだされざるよ
し人々おもへり。ゆふつけてこもりたる人
々つれづれなりとて。わかき女官とのもづ
かさあひともなひて。此つぼねへみだれいる。
よもすがら連哥し酒のみあそびあかしぬ。

七日。けふぞ空は心ちよげにはれたる。よさり
まてはこもるべけれども。供花のためにまか
りいでゝ。とりのときの番つとめぬ。

十二日。よさは行幸のあひだ。ひつじの時に
まいりて。番をつとめかへてまかりいでぬ。や

がて内裏へまいる。出御あり。奉行雅藤。こよ
ひの行幸ことに無人なり。ささのたびも供奉
して。今よひも又まいる。しんべうのよし仰あ
るよし是を申す。ことにかしこまり入てまか
りいでぬ。いぬの時ばかりに人々皆參。公
卿。大井御かどの大納言信嗣。中御門大納言經
任。左大將洞院中納言公守卿。予。仁わじの三
位顯名の卿。頭中將基顯。頭兵衛督爲世朝臣。
佐左五人右二人。右すくなきによりて。左の下
らう右にわたる。子の時に行幸。北白川殿へ御
かたゝがひなり。還御とらの時。河原より夜あ
けぬ。日出る程まで猶さぶらひて。着到してま
かり出ぬ。

十四日。あした東宮の女房より文あり。今日藤
大納言爲氏卿奉行として御まりあるべし。其
むねをぞんぢすべきよしなり。これは上まり
わらしの後なれば。もし思やうなどあらばの

御よういなれば。とにかくしてまゐるよし申す。又二條の左大臣殿より御ふみあり。けふの御まゐりにまいらむと思に。あゐしらぢをよういしたるが。なまじいにしきがはをゆりたる身にて。此かはをはかんといかゞあるべきとなり。

上は下をかぬるとにて候へば。くるしかるまじきよしを申ぬ。藤大納言のもとよりもよをす。さうぢいまだ心よからず侍れども。たまたまの御奉行にて候へば。たすけまいるべきよしを申ぬ。大方人數まいらず。けふの奉行をば爲雄朝臣にゆづりて。後に奉行しなをすべきよし申てまいらず。人數たゞ御所。左府。經資卿。予。範藤。爲雄。兼行。長相。爲實の朝臣。爲忠ばかりなり。御まゐりとなる事なし。まかりいてゝ又かへりまいりて御とのゐす。御方たがへのために。院の御かたへなりたゞ康仲二人ばかりしこうす。あか月のかねのゝち還御。東

宮なを御とのごもらずして御物がたり有。あそこ女あはぬ日ゝいまだしろしめされざるよし仰あるに。むねとの日ゝを申せば。御ときよし。

十五日。あすあさてれいの内裏御物いみなれば。まいりこもらんとて。まづ東宮にまいりて。夜にいりて内りへはまいりぬ。

十六日。あしたとく御かくもんどへ出御ありて。ひわりごをいださる。みきひとながれのゝち。連哥連句の御せうぶあり。連句のかた。上。民部卿。伊頼卿。親顯。通俊也。連哥の方。予。教經朝臣。俊定。俊光なり。連哥のかたまけたてまつりぬ。その後此ひとゞ花山院三位中將あひとまなひて。此局へうち入ぬ。もしさるともやと。かねてよりまうけたるとなれば。さけとりいてたれば。人ゝけうに入て歸りまいりぬ。

十七日。ひさしにして四條中將たかうぢとごをうつほどに。女房のなかより。あさがれいの御えんにまいりてうつべし。御らんぜんとあれば。かほあかむこちすれど。いなび申べきにあらねば。もちてまいりてうつにかちぬ。ある人のもとより。御物いみは乙日なればと申をこせたれば。内々女房へいとまを申に。猶かなふまじきよし仰下さるれば。へんじに申つかはし侍。

五月雨の雲のかよひぢ猶とぢていづるそらなき有明の月

十八日。夜にいりて東宮にまいりたれば御遊あり。御所。洞院中納言。びわ。花山院大納言。しそく宰相中將。ふえ。顯範朝臣。資顯。長もと。しやう。藏人のりなを。ひちりき。ゑもんのかみつぼね。こと。洞院中納言有經の朝臣。のぶあり。らうゑい。てうしはんしきてうことにお

もしろし。まとや過にし四月に續拾遺にもいりたる少將のつぼね一首をかけたりしを。その日しも御前に日ぐらしさふらひて。夜にいたりたりしに。とみの事いてきてかへしえせなりて。つぎの日たづねしかばまかりいてぬ。その里をもしらずして月日ををくりはべりしに。今宵しもまいりたり。ありし返事藏人兼有してせむれば。たうがみのかたつかたに。いにしへの跡もかひなき和哥のうらしらてや浪のこゝろよせけん

かの歌はいにしへのあとをたづねしもしほ草しきりによする浪もかひなし。この哥よりさきつかたもふたゝびまでをくられしゆへなり。

廿三日。れいのあしのけおこりて。心ちわびしければ。出仕にをよばずひれふしたるに。俊定が奉行にて。一よのまけわざこよひなり。まいるべしと申たれば。かなひがたき心地ををこ

してまいりぬ。俊光おそくまいるほどに。夜ばかりに百番の連哥連句をはじめらる。予連哥のほく。其後心ちいよくわびしくて一句もえつけず。いかなる事ぞと御さたあれどもちからなし。猶まけまいらせぬ。かけ物百也。

廿七日。昨日けふは内裏の御物いみなれば。をとゝひよりまいりこもりたるに。本院御如法經のために昨日かめ山殿へ御かう。御るすのあひだ。東宮の御方にしこうのひとゝ番をまいる。あすよりしこうすべきよしもよをさるゝあひだ。いとまを申てけさよりまいりぬ。三番にをらる。一番管絃の人数なり。二番は風月しゆなり。三番は哥のしゆなり。番は五日いづづなり。さぐり題は日ごとに百しゆあるべしとて。けふよりはじめらる。人数。御所。長相の朝臣。具顯の朝臣。定成。顯世なり。予十五首これをよむ。とのゐにさぶらふ。

廿八日。さぐり題の人じゆ昨日におなじ。たゞ有嗣。在兼まいりくはゝりて詩をつくる。予けふは十二首。

廿九日。けふは廿二首。三條宰相中將。そのほか人ゝまうてくべきよし申によりて。いとまを申てまかりいてぬ。こよひはとのゐせず。卅日。けふはさぐりだいの人数六人なり。予がぶむ廿三首。其後御連哥一折。自朝惟宿心。

六月

（二日脱略）

さぐり題けふけちぐはんなり。すでに五百首なり。いまのこる五百首は。このたびの番の時をはらるべきよしさたあり。けふは十七首よみはべりぬ。とのついでにそともといふ事。日わきの説を申いるれば御けうあり。よりてあすよりしのびて古今の御だんぎあるべしとて。人数さだめらる。予。ともあさの朝臣。定成なり。

二日。ひつじばかりにまいりたれば。定成まづ
つり殿へんにまちまうけてあり。今日よりは
弟子になるべきよし思ひ給ふ。古今のまん
じよさづくべきよししきりに申によりて。一
反よみきかせをはりぬ。そのうち具顯の朝臣
まいりたれば。御だんぎをはじめらる。古今は
仰によりてひ本をまいらせ入。講師ともあき
の朝臣かきて。定成こまかにしさいを申せば。
ことに御けうあり。このりやう人のさく事は
さかりありといへど。公平を思てわたくしを
かへりみず。ふじの山のけぶりの所にてひと
くあつまれば。みなとりかくされぬ。其後内
へまいる。

三日。過にしころ。ぎあんの會の御ぶんのひま
をさ御ことかけたり。いかあるべきなど御
さたありしを。たはぶれに明年のじよゐに御
きうをだにもくだされば。雅行かまくらに候

といふとも。これにてのせはなんと申たりし
に。げに／＼といふ御きそくにて。御事かくる
所にのせしんずべきよし申と返々しんべうな
り。まづせうでんをおほせらると有。さうなく
りやう狀申がたきあひだ。これよりうけぶみ
をまいらすべきよしを申ぬ。女房のもとより
むまをさの事公平たり。御きうの事もとより
おぼしめさるゝ所に。かく申うへはさういあ
るべからずのよしのふみなり。よりてやがて
まいりて。女房によるこび申ぬ。

五日。古今の御だんぎ。序の中ばより一卷のな
かばにいたるとき。外人まいるあひだ。又さま
たげられぬ。

六日。古今の御だんぎ。春の上下おはりぬ。そ
のうち内へまいる。

七日。はじめて日吉の社へまいる。

八日。まづ内人まいる。そのうち東宮へまいり

て。古今の御だんぎ有。夏秋の上のなかばまでなり。

十日。古今の御だんぎ。秋の上よりたびのぶん
にいたる。御哥合あり。

十一日。古今の御だんぎ。上てうおはりぬ。い
さゝかおもふところあるによりて。しのびて
僻案抄。顯昭が古今序のしやくをけざんにい
る。今日より又御百首はじめらる。予が分廿一
首。

十二日。けふの御さぐりだいに予十首。御心ち
わびしきによりて。やがてまかりいてぬ。

十三日。けふは廿一首。夜にいりて御とのゐの
ために歸りまゐる。御だんぎ第十一のなかば
ばかりなり。藤大納言の弟子しこうのあひだ。
さかせられじとてとゞめらる。

十四日。廿一首。こよひは御とのゐせず。内へ
まゐる。

十五日。まづだいらへまゐる。御えのみゆるあ
ひだ。申いだして東宮へもちてまゐる。れいの
御百首けふけちぐはん。千首にみちをはりぬ。
今日は人数おほきあひだ十一首なり。御製こ
とのほかにあがらせおはします。めてたきと
なり。人の哥のかずはしらず。予が歌のかずと
りあつめて百七十一首なり。

十六日。この日ごろのくたびれ。あつさとい
ひ。たへがたければやすまんとて。けふよりの
内裏の五日番にも。いたはりのよしを申てや
すむ。

十八日。ゆふかたになりて。内へまゐりて。し
ゆくに候て御とのゐす。月あかく風すゞしき
程に。よもすがら御あそびあり。南殿にしてあ
るひはいねをし。あるひはかちくらべむまを
のり。やう／＼のくるひどもあり。

十九日。またとく東宮より御使あり。うちつゝ

き三四と御つかひはしりかはる。如法いそぐとあり。すなはち參るべしとあれば。とる物もとありあへずまいりたるに。やがて出御。女房たちはさうどうす。何ぞやらんとあされたる所に。この御所はこのあか月より七日のしよくゑなり。無人のあひだ。内裏の番とはしろしめしながらめしいれたるなり。此とをきゝたらばよもまいらじとて。いだしぬきたるなりとて。わらわせおはします。ちからなければ。とのよしを申て歸りまいらんとて。内へまいりて殿上口にたちて。しもながら申いれてまかりいでぬ。

廿日。けふは御如法經の中種供養なり。見聞のためにさがどのへもまいりたけれども。このしよくゑにちからなくて。坊にしこうしたり。廿一日。かまくらより使あり。下べきよしなり。おもひまうけたるとなれど。さしあたりて

はむねひしぐる心ちす。

廿二日。ひぐらし千首のしだひをかさねらる。清書せらるべきゆへなり。その人數。經資卿。予。長相朝臣。具顯朝臣。すけあき。定成。爲方。いゑ顯。女房。大藏卿のつぼねなり。はしつくりのやう。藤大納言にたづねべきよし仰あるあひだ。狀をつかはす所に。續百首和哥五月かくべきよし申て。すなはちまいらる。庭にしとみのもとをしきて候。予おなじくさふらふ。八月十五夜に御哥合あるべきよし申をこなひて。人數をさだめらる。

廿三日。千首百首づゝとりわかちてみなきよかゝる。五月つごもりの百首たまはりて。これをおかく。よにいりて坊にまいる。古今の御ふしなども。人／＼に御たづねあるべきよし。内々申をこなふによりて。あむをかきてしんずべきよしうけ給りてまかりいづ。

廿一日。寺のこん堂供養のゆへに。山おこりて寺にむかふ。北の院をやきはらふ。ふしといくさにをよぶよし聞ゆ。

廿六日。まづうちにまいる。つぎに坊にまいる。ことのついでうかういて。としどに百日の哥いまだかず。ことしいまだはじめず。らい月の一日よりおもひたつよしを申いてたれば。さらば御所にてよむべし。ないく御所にもあそばさるべきよし仰らる。めんぼくきはまりなし。

廿九日。新院にまいる。いづみ殿になりたるあひだ。げざんをとらずしてまかりいで。日ぐらし坊にしこう。あすより百日の御哥あわせたるべしとて。宗匠題をいだす。ありふし世さはがしきあひだ。しのびやかに人數を定めらる。御所。經資卿。大藏卿のつぼね。範藤朝臣。かねゆきの朝臣。長相朝臣。具顯朝臣。爲方。定

成。以上十人なり。外人にをよばず。夜にいりてとし定がもとより。こよひ如此無人なり。御とのゐにまいるべきよし是をもよをす。やがてまいりて。御たづねの後。代官五人をまいらせをきてまかりいでぬ。

七月

一日。内裏へまいる。くろ戸にいでさせおはします。御前に人三四人さふらひて。御物がたりあるほどに。めし有て東宮にまいりたれば。けふより百日の御哥の題かづく。春夏ばかり藤大納言これをまいらす。御哥のとも評定あり。百日までは御心もとなし。いまだ御百首なし。此だいにて九月十三夜にえいしんすべし。哥合につかはるべきよしさたあり。さきの千首うたがはしきこともあれば。みなせい狀すべきよしさたありて。右少弁爲方筆をとりてせい狀のと葉とくはへて。ひとくはんをく

はふ。人數十二人也。又代々の集どものなんぎ
家々におほし。これをかさあつめて。よからん
には内し。^{四景}ひがごとあらばかんがへなをして
したゝめをかれば。後の世のかゞみたるべき
よし申いてかれば。ことに御きそくよし。此た
びのぼりたらん時。御さたあるべきよし仰ら
る。古今ばかりはかまへていそぎ人／＼に御
たづねありて。冬まかりくだり侍らぬさに。
御さたあるべきよしを申せば。しかるべきよ
し仰ごとあり。かやうの事につけても。まいら
ぬ日は御つれ／＼なり。下まではよるひるし
こうすべきよしおほせ事あり。

四日。まづ内へまいる。つぎに新院へまいり。
そのうち坊にまいりたれば。一日の御哥合の
ねたみあり。廿五番につがはる。左。御所。のり
ふち。長相。具顯の朝臣。右。經すけの卿。此ち
きな。爲方。定成なり。さぐり題の五十首。心地

わびしき程に。四首よみてやがてまかりいで
ぬ。

五日。坊にまいりたれば。昨日の御哥合。大納
言はんしてまいらせたり。右方二首まぐ。よみ
たりし四首はみな持なり。御百首の事。坊の御
百首。そのれいゝまだうけ給はらず。もしはじ
めならば。人數もともえらび御さたあるべし。
たゞはじめの御さたのとをりにて。百首のよ
しにて。すじごとにたんじやくをまいらせい
れば。なんあるべからざるかのよしを申せば。
人／＼も其いはれありとて。そのぎになりぬ。
六日。うちにまいりたれば。あすあさては御物
いみ也。こよひよりこもるべきよしおほせら
るれど。こしやう申ぬ。又坊にまいりたれば。
千首の御哥。はじめ一日の分。爲氏卿てんあひ
てまいらす。御製に三首。予一首。定成一首な
り。句抄と申ものをしかけたるよし申いてた

れば。まいらせよ。御らんぜられんと仰あり。
爲兼の朝臣まいりたるよし申。そともと申と
しりたるよし。人にあひて申侍けり。御たづね
有て御らんぜられ候べし。きたとさだめて申
侍らんか。それはいかなるゆへぞ。又いづれの
文にみえたるぞと。かさねて御たづねあるべ
きよしを申をこなふ。我ながらはらぎたなき
心ちぞする。かの朝臣まかりいてゝのち。そ
ともはあんのごとくにきたと申。かさねてそ
のゆへを御たづねあればしらざるよしを申。
又万えうのとき時代を御たづねあれば。もん
むのよしを故入道は申候しかども。いさゝか
ふしんなるよしを申。いかさまにてもけいこ
はするとおぼえ候よしを申ていでぬ。

七日。東宮に日ぐらししころ。句抄しかるべき
物なり。御さたあるべしとあれば。さらば万葉
より續拾遺にいたるまで。をの／＼五ふをか

ゝせらるべきよし申せば。かきての奉行は具
顯朝臣なるべし。したゝめんとは奉行すべき
よし仰有。續百首あるべきよし御さたあれば。
まかりいてゝやがて歸りまいりぬ。乞巧奠の
とちのさたあるよしにて。院の御方より。たて
ぬべき人さふらはゞ。たてさせらるべきよし
申さるゝによりて。しもなるゑもんのかみの
つぼねに御たづねあり。もし御とかけ候はゞ。
たつべきよしを申せば。よろづの事をあそろ
しくしりたりける物かなと仰有ほどに。ゑ
もんのかねに人／＼おどろきてまかり出ぬ。つ
ねすけの卿。雅有は猶候べきよしおほせあり
て。院の御方の女房めして。つり殿にて御あそ
び有。御心にかゝりたる人なめりかし。二人は
はしのもとに候。あけはてぬれば。入御あれば
まかりいでぬ。

十二日。めしありて坊にまいる。ない／＼日本紀かうぜらるゝゆへなり。身にあてゝしかるべからざるとなり。いまだ師説をうけず。たゞこのむばかりなり。はくの三位すけおの卿。これをよみあぐ。三四まひの程に。圓まん院の宮まいり給とてとりをかる。花山院の前内府ふみあり。花園殿のしきしかたの哥申あはせらるゝふみなり。

まださより風は秋にぞ通ひける夕日にうつる松の下かけ

十七日。三井寺のとによりて。せけんすこしさはぐ。暮る程に。古今の御ふしん一くはん。一日おほせをかぶりてかきてまいらす所なり。これをたまはりて。花山の前内府の御もとにまいりたれば。他行にて空しく歸りまいる。かりのよそをひなる程に。うへゝはのぼらず。もとより爲氏の卿おなじすがたにて。御つばにしとみのもとをしきて。持明

院の二位としこう。おなじく其もとにつく。とばかりありて。兩人まかりいづ。れいの御哥さたあれば。戀とうらみとは詞はかはりて侍れど。其心地はいかにとりわけ侍るべきと申せば。まことに日比はなにとなくおぼしめしわかずとて。女房たちまでやう／＼わかちさたあり。戀は他事なく人を思。うらみは我は人をおもへども。人はおなじ心ならねば。我身にかへりてなげくなり。又おもふと戀ともおなじとなれども。つよきは戀。よきは思にてこそあるべけれと御さた有。かうたけ月すさまじければまかりいでぬ。

廿日。申べき事ありて。やすよしの朝臣のもとにいきぬ。物語のついでに。かの朝臣。東宮のおほせには。予がうたのさたほと／＼人にこえたり。あれ程さたしつらん事よと。御物がたりありしなり。御るすの千首の愚詠あしから

ぬよし申せば。かたはらいなくてかへりぬ。
廿八日。坊にまいりたれば。あぜち殿いてあひ
て。よろづの道くはしくさたりける。ふし
ぎなり。ことをさへひじまでさたりける。
過にしきかうてんのとちのやう申ける。かの
ことちはことなるひきよくなるをしりたりけ
る。あそろしと御さたありけるとかたらる。や
がて出御あり。御とのゐに候べきよしおほせ
ありてえいです。

廿九日。二條大納言入道。すけすゑの卿のもと
にむかひて。日本紀源氏の物がたりなんぎど
も。また出仕かたのとども。日ぐらしたづねさ
いて。そよに入て内東宮へはまいりぬる。

卅日。新院の御所のたう番なり。見參のこくげ
んをまつ程。ほどちかきはくの三位が陣家に
むかひて。物がたりのついでに。一日院の御方
にまいりたりしに。予おなじ心に坊中のほう

こうをいたすこと。返くしんべう。たはふれ
とまでも。なをゆへあるを思てぞ。せんなき
とを申さず。よろづの事につけて申をこなふ。
忠なりとて。しゆくかんじ仰下されしなど
かたれば。まとにかくれたるとくはやうく
あらはれゆくにやと。たのもしくおぼゆ。

八月

二日。いまだ御よるの程にまいりたれば。やが
て御ひるになる。御えんにめされて。つくり物
のたな一これを給はる。すけおの卿めされて
まいりたれば。すゝりどもさたありて。女房の
なかより七めん。資雄一めん。予は四めん。あ
き家一めむ。めしだいされて。一二をたてら
る。わたくしのすゝり一番にたてられて。御す
ゝりにめしかへらるべきよし仰ありて。あを
海といふ唐すゝりを下給はる。此すゝりをめ
さるゝだにめんぼくなるに。御すゝりをさへ

つめし。かくれたる光あらはるゝにやとおぼえて。うれしきとかぎりなし。

廿六日。坊にまいりたれども人もなし。出御あれば。れいの御哥さたのついでに供花のあひだ。おとこ女房らうぜきどもはなはだし。かまくらさまのきこえもびんならず侍り。ことしより御せいいろくめでたく候ぬべきよし申せば。やがて女房して院の御方へ申さる。しかるべきよしの御へんじあり。よろこびてまかりいでぬ。女房のふみあり。古今の御ふしんえらびさだめられん時は。一人御手たすけのためにないるべきよし仰下さる。ことにめんぼくなり。

九月

一日。七月一日よりの百首よみはてぬれば。又今日より百首をはじめむ。

四日。坊にまいりたれば。圓まん院の宮御參あ

り。御いでの時。殿上人四五人相ともなひて御おくりす。其後ひさしにかへりまいりたれば。あぜち殿たいめんあり。人くおほくほうこうすれども。御師とくありつぐの朝臣と二人ほど。ことにふびんにおぼしめさるゝよし。たびく仰あり。ことにこぞよりしこう人にすぐれたり。ありがたきとなり。まいらぬ日は御つれくのよし仰どあり。まして都の外へ下なん後。いかにおぼしめしいてむずらん。いまだ御きびわなる程にて。なにも御心にいらず。されども御哥さたは御心にいりて。古今の御さたまてになりたれば。ひとへにかうみやうなるよし。院の御方さまにも御さたあるよし。しかたらるれば。と御ことよりも。御哥かたの御心におぼしめしとめらるゝにてこそ。人の申をこなふとにはよるべきにも侍らず。大方世つぎなどぞ坊の御程にてはよく御覽ぜら

れて。世のなりゆくさまも。御まつりどのよしあしもおぼしめしわくべき御事にてぞ侍る。

かのふみは御くらゐにては御覽ぜられぬよし。ふるく申ならひて侍れば。いぜんに御らんぜられたらば。よくこそ侍らめなど申程に。御たづねもすきあればまかりいてぬ。

十三日。供花のけちぐはんなり。御だう師けんしち法印。公卿。經任。ときつぐの卿。みななをし、殿上人。もとみつの朝臣。頼成奉行。經雄御ふせをとる。このたびの供花ささぐにもにずらふぜきなし。ことにめてたし。

十五日。坊にまいりたれば。古今の御ふしんどもかさぬく。人くまいりたれば。さまたげられて又とりをさぬ。夜にいりて歸まいりたるに。東宮は院の御方へなりぬとてあれば。にしの御所にまいりてしばらく候て。東宮の御方に人なければ御とのゐす。大藏卿のつぼねよ

りとて。すぐりのふたにしゐをいれてをこせたるをみれば。葉に哥あり。

おりくは哀ともみよつれくのしゐて忘る程はなくとも

返し。あらぬ枝の葉に。

おりくはあはれともみん椎の葉のはがへぬ途の長さ形見に

あづまのつとにうれしくもとかきて。女官にとらせぬ。

十九日。夜にいりて。うへふしの心づかひしてまいりたれば。をかしかたさまにさるゆへありて。賞を申たばるゝと侍しを。おぼしめしいだされて。こよひをこなはるべし。候へと仰あれば。もとよりおもふとなれば。なにとてかはいてんや。この程は院は西の御所にて。院のあさゆふわたらせおはしますつねの御所にほどちかくとて。東宮おはします。院わたらせ給

て。此御さなめりかし。いとわらはせおはし
まして。御ぬりごめひらかれて。むかしよりの
かなの日記どもとうでさせ給ひて。日ごろゆ
かしがるなれば。みるべきよし仰くださる。ひ
さしに候ひしを。めしありてつねの御所とひ
さしとの中のまへまいる。めもくれ心もまど
ひながら。かたじけなきをひかりにてみたて
まつれば。院東宮をはじめたてまつりて。女房
あまか候給。御さうしは御手ばこのふたにい
れられてをしいだされたるを。たまはりてま
かてなんとするを。しばしあづまのなごりを
しまんとて。女房杯さしいだされたり。御扇に
くりかんしやうのはこはりこさかづきさしそ
へられたり。いとかしこきにはとのかきはも
おぼゝえず。たゞうちかしこまりてさふらふ
に。此御てうしみなつくすべきよしたびく
くだれば。七どもちてのみて。かはらけふとこ

ろに入てまかり出ぬ。かゝるためしたかき人
はありもやしはべらん。とを山がつの宮こな
れぬ心ちには。めづらしくありがたきことに
のみおもひかしこまる事は。とばを盡しがた
う。こと葉は心をつくしがたければ。おもふ程
はいかてかするし侍るべき。後にみんなわき
まへ侍れかし。すゝまれぬたびの道は。とこう
するに神な月廿六日にもなりぬ。坊にまいり
たれば。宮内卿のつばねにて。院の御方よりお
ぼしめさるゝやうあり。さしあたりてとがめ
などあるまじき程ならば。春まではのびてし
こうせよとおほせくださる。御前なればさう
なくいなみ申さんとかたじけなくて。あづま
よりのぼりて候物に申あはせて。御返事は申
あぐべきよし申侍にき。後にやすよしの朝臣
にて。とのやう申いるれば。さらば春はとくし
て上べきよし仰くださる。

十一月

三日。よる坊にまいる。つぎ哥あり。百首人數。
上。經資の三位。雅有。範藤朝臣。兼行朝臣。長
相朝臣ばかりなり。

寄雪花

御製

嵐吹このもと斗うづもれてよそにつもらぬ
花の白雪

暮春

とどまらぬつらさを誰にかこたまし人やり
ならぬ春の別路

浦月

こと浦になびきにけりな煙さへ月のためな
るよはの鹽風

忍戀

いつまでか思みだれんひとしれぬ心の中の
忍ぶもぢずり

不逢戀

はかなしな猶さりとともと同じ世にいける命
の頼ばかりは

寄夢述懷

經資卿

夢にさへ身のことはりの程みえてうつゝの
うさぞ替らざりける

春雨

雅有卿

さえくれし昨日の雲の雪げよりけさ降つゝ
く春雨の空

寄鏡戀

みせばやな鏡の影の面がはりしらぬ翁の戀
の姿を

關鷄

かねてよりゆふつけ鳥の音をぞ鳴こえん日
ちかき關の此方に

雪中鶯

範藤朝臣

春さても猶空さゆる雪の中に花やをそさと
鶯ぞ鳴

梅風

兼行朝臣

雪消ぬおなじ梢の梅花さく方しるく匂ふは
る風

田家秋寒

山田もるかり庵寒み露霜のをくての稻ば秋
風ぞ吹

寄衣戀

逢とみし夢ぢもたえてさよ衣返すは何の頼
なるらん

夏艸

長相朝臣

しげりあふ庭の夏艸深くとも君につかふる
道はまよはじ

みなわすれにたれども。心にのこるばかりを
しるしはべれば。よきもおほく残るらんかし。
又あしくかきたがへたるもはべらん。兼行講
師にてよみあぐ。文臺のさたにもあよばず。
みとりのうへにひあふぎをひろげてぞかうぜ

られ侍し。中／＼おもしろかりしとなり。

十一日。下もいくほどなければ。いとどなごり
もおほくて。くるゝほどに東宮にまいりぬ。ひ
さしに出御あり。いかにおもふらんなどうち
しめりおはしまし。しやうとうもまいらず。月
御覽ぜられておはします。大方にだにこぼれ
やすき涙の。いかでかかゝるみけしきにつれ
なからんや。いひしらぬ袖のうへなり。月をだ
にやどしてみんには。げにぬるゝひかりにて
もあらまし。仲頼といふ新院の上北面。なごり
とてまうできたりと申せば。たゞいまいでん
もいと口おし。又いでざらんも人のため情な
かるべしとはかりて。ちと此よしを申てやが
て返まいらんとて。頼成を申てあひぐしてい
てぬ。さか月めぐるほどなく又まいりぬ。又い
でさせ給ひて。こよひはなごりなれば。御との
ごもることあらじとて。月をのみながめおは

します。御前にあきのり。のぶあり。頼成ばかりなり。女房。あぜちのつぼね。右衛門の督のきみなり。かうたけよふけて。月入がたになりぬ。御物がたりどもいうにて。人くおもはぬ涙も。おりからにやしぼるばかり也。御びわめしいだされて。かきあはせばかりしのびやかなり。信有かんにたえず。をりにあふらうゑいいまやうしつゝなさけおほし。頼成ふえとり

いでふく。あきのりしやうもたずしてくちおしがれどかひなし。時々しやうかしかはぶえふく。ふつゝかなるねとかや申たれどいとけうあり。まうしやうくんがえうもんになさけるもおもひしらる。わごんさたなければ。すゝみ申にをよばず。樂一二のちに。右衛門のきみに御びわ給はす。なごりに手一と仰あれば。もとははんしきてうなるを。反風香調にしらめあげて。きうせんか二手。又思ひいでにと申

せん手一あり。身にしみておぼゆ。こよひのしぎ。中くになにとしるしをさがたし。よろしきことこそふてにいひなす事もはべれ。これはとの葉も心もをよびがたければ。むかしの紫式部ならては。たゞの人の心地をよびがたからんかし。たゞうちこめて心にいひあはせて。ゆくすゑもおもひいてんかし。あけてぞいでぬる。

十三日。あか月はたち侍らんとて。かつはよべの御前のしぎも。いま一どまいりて。かしこまり申さんとて。ゆふかけてまいりたれば。かまくらより人のぼりて。すみなれしふるさと。むなしき空のけぶりとなりぬるよしつぐ。大方のこる家すくなくやけ侍よし申せば。下りてもいづくにいかにとおもひやるかたなければ。あか月はのびぬ。まづ人をくだしてしばしばかりのたち入所たづね侍とて。あさてとて

のびぬ。伯三位が御所ちかき所に侍とてよび侍れば。ゆきて物語などしてなごりをしむ。むまなどひき出たり。さがのおひ人いで給へりとしてつぐれば歸て。こよひはわたくしのなごりどもおしむ。けふは日よければかどいづべきよし。あさひで申せば。そのぎになりぬ。康能朝臣うけ給はりとしてめせば。くるゝ程にまいるぬ。院の御方より仰下さるゝ事どもおほし。まづかたじけなく。身もあらぬかとのみたどらるゝほどのこともまじはれり。やがて東宮御前にて關のあなたにて申べき事がきなど給ぬ。御さたのやう哀にもかたじけなし。女房めしあれば。つねの御所の御ばんにまいりたれば。高内侍てまり十しろがねの五えふのうち枝につけられたるをしいだされて。うすやう二かさねに。御あふぎ甘つゝまれたるもそへてくだされぬ。何と申に及ばず。すゝろに

涙のみぞながれいづるや。月はくもりもはてぬひかりさしながら雪うちちりて。わざとあらまほしき夜のさまなり。やがていでさせおわしまして御らんぜらる。しばしも猶候て。つきぬ御名残どもゝ申たく侍ながら。中くゆくみちのさまたげおほく。かずまさりぬべきとなれば。しひてぞまかり出ぬる。かどての所にて。たび衣つまに別るゝなごり。いひしらずかなし。やがて明がたになれば。心あはたゝしくて。まづきたの内大臣僧都のもとへまかりて。なごりをしみて歸ぬ。ともの物は法勝寺の邊にさきたてゝ。明るまぎれに車にていづ。春の宮のこずゑ。明くれの雲のたえまにほのみゆれば。

馴れくし宮木の梢けさだにもよそに隔つる明くれの空

たゝ涙のみぞまづゆく道のささに立ぬる。法

勝寺の南の門にて馬にのりぬ。車はゐてゆくをみるにぞ。かへる浪ならねどうらやましかりける。あはだぐちにて宮このかたをかへりみて。

歸りみる宮古の方はかすみにて。そこもしらぬ明くれの空

しの宮河原をすぎて。あふさか山にかゝるほどに。かたやぶより重清朝臣うちいてたり。此ほどいたはるとありて入こもりたりしかば。あはてくだりぬるなげさをしつるに。いふべきと葉もおぼえず。うれしくもあはれなり。よ深き露にぬれて。さきたちてまちけるこゝろさし。いひやるかたなし。これもなをあふさかの名ぞたのまるゝや。むかし神功皇后のみよに。をしくまの王のむほんによりて。武内大臣をいきて。こゝにてゆきあひてうちたりしより。あふさかとは申よし。やまとぶみにはみえ

たりし水のもとにて。

氷のみ冬はむすびてあふさかの關の清水はくむ人もなし

此朝臣なをとゞまらず。こまなめてうちいての濱もうちすぎて。あはづのはまづらなる家にたち入。もとよりおもひまうけたりけるにや。こゆるぎのなだをわけいそぎありく。たがひに名残をしみて。えいなきにや涙をとしつ。これよりぞとゞまりぬる。せたのはしかちにてぞわたる。更科の日記には。むかしみかどの御むすめをぬすみて。あづまへにげくだる物のをはれしとて。此はしをひきたりけりとなん。今は何のためならねど。くちぬるなかはたえまがちなり。野ぢといふ所にてぞ。しるしば折しきて。かれいひなどひとゝとりまかなふ。日くるゝ程に。かゞみの宿にとゞまりぬ。道すがらはゆきかふたび人。このもかのもの

山河木草などにめうつるだに。猶こしかたは
わすれぬならひを。まして取しづめぬる艸の
枕のさびしさに。つくぐと思は。雲のうへ。
春の宮の中。これにそはれるわたくしのよも
ぎがもとまで。思ひ残さずこひしく哀也。あそ
びどもきてうたひのゝしれど。心にもいらね
ば。人をいだしてぞあそぶする。月はいと雲も
なく。かゞみの山に影みゆれど。心はかきくら
してぞある。

たちよれば月にぞ見ゆるかゞみ山しのぶみ
やこの夜半の面影

さにやとおもへど。いかならんとなをおぼつ
かなきぞわりなき。うちたへてねられねば。夢
にだにへだゝりぬるぞうらめしき。

十五日。あくればたつ。昨日をくりし物どもゝ
かへらんとすれば。袖の中にも入やしぬらん
心ちもありとしもなし。しるて都のかたをか

へりみれば。雪いとしろき山のみねのむら雲
に。月うすくのこりたるしもかなし。

明のこる光もうすし雲まよふ都のかたの山
のはの月

をいそのもりといふ所にて。

かつみてもよそにおもひしもりの名も我身
につもるしもの下艸

山のまへといふ所は。こまのひづめかくるゝ
ほどなる水を。ながれのまゝに十よ町もやゆ
くらん。ふみあげらるゝ水のさはぎに。いたく
袖はぬれぬ。ふるきうたにそふといへるは。か
やうなる心にや。

たび衣おりたつたごにあらねどもみやこ戀
路に袖はぬれつゝ

さる程に時雨ふりきぬ。此あか月のくもりつ
るけにや。

かゞみ山此あか月のくもりしやけふのしぐ

れのはじめなりけん

ひるゑち川といふ所にたちいる。つくぐと
おもひいづれば。たゞいまは御かくもんの程
にや。下侍らずば。ひさしに出御まちがほにて
ながめぬましとまでおぼゆるぞあまりけしか
らぬ心なるや。河せといふわたりの道。有つる
時雨やすぎつらん。たとしへなくあし。人も馬
もあしのふみ所もなくすべりてわろきに。こ
のたび人なんうつ 世殿 みのいよのかみよりもこ
よなふゝとりたるに。馬はいとあしよはきに
あぶなけれど。さしもやとおもひたゆみて。な
をこしかたのとおもひつゞけゆくに。かたゝ
かなる所のとにすべるに。むまなじかはたま
らん。四のあしをひとつになしてたふれぬ。此
うはかふきのふとりをきな。さるはわかさか
りすこしかやうのとなれにければ。あはたゞ
しさながらありたちけるが。我もあしふみた

めずしてたふれにけり。身のしろ衣袖もしと
ゝになりぬ。あさましくおかしけれどいかに
せん。さてと馬にのりかへてぞゆきける。いぬ
かみといふ所にて。とこの山。いざや川など尋
れど。そのわたりの民しかはらやうの物もし
らずとなんいふ。むかしあるものこれかれな
ど申侍しも。おいのむもれにわすれにけり。い
ざとこたへよと。あめのみかどのゝ給せける
も。みてこそしのばまほしけれどかひなし。を
ぐらといふさとの名ぞ。宮古のにし山おぼえ
て。すみ馴しとさへおもひいでらるゝ。又時雨
してみかさもととりあへずぬる。はれくもり神
無月ならねど空さだめなし。くるゝ程にすり
はり山をよぢのぼりて。くらめにぞばんばの
宿にはつきぬる。けふの道のあしさに。やがて
うちふしぬれば。ぬるがうちはたゞもとの宮
古にて。さむる空ぞたびのやどりとくちを

しき。山も三までへだてぬれば。ながめやるか
たなし。又うちまどろめばたゞ古郷なり。

艸枕ゆめにぞみゆる故郷のいもが寐ざめに
我やこふらん

君やくる我やゆくらん艸枕たびねの夢に逢
みつる哉

十六日。けふは道も遠し。又あしき所おほしと
て。あか月かけてぞたつ。月みねにのこりてい
と心ぼそし。

都とて月のゆくゑをながむればたゞ白雲の
峯のまつ風

さめが井のし水はゆく人もこほりもけさはむ
すばず。夏ならましかば。かくすさむるとなか
らまし。おりにあはぬ身のうへまで思ひしら
る。むかしの山とたけのみとのいぶきの神の
けに心ちそこなへり給けるに。このみづにて
心ちなをりたまへるにより。さめが井となづ

くるよし。日本紀といふ文にみえたり。されど
こし方の戀しさはさむるかたなし。こよひの
やどりより一里とぞいふなる。いぶきの山を
みれば雪いとしろし。昨日のしぐれは此雪げ
にこそ。ふはの關ちかくなきまゝに。藤川のは
しわたるとて。けきのたびのぼりし時。思しと
など思ひつゞけられて。

今しばと思ひきえにし東路に又ゆきかよふ
關の藤川

大車肥馬にのらねど。よにながらへばさすが
いかなることこそと。はかなきゆくすゑの
たのみばかりになん。不破の關屋をみれば。東
宮のいつとなく待とをにのみおぼしたる御即
位の時は。この關をもかためこそはし侍らん
かしとおもへば涙ぐまる。このたびかぞふれ
ば。みても十たびにぞなるや。さめが井よりは
此關三里なり。

をかやふく不破の關屋は我みても久しくな
れる板廂哉

都にもふはの關とをけふこゆと東路ながら
人はしるらん

のがみのかたをみやりて。關より此ところへ
は一里なり。

關こえてのがみのかたをみわたせば霜の艸
ばにあらし吹なり

春ならば鶯のこゑもきゝてましとうちながめ
てやどをかる。ばんばより此宿へは五里なり。
ゆくさはなを道遠しといへば。しばしやす
むこともなくいてぬ。あをのといふ名は。春夏
のみどりばかりにや。秋は色くの花にこそ
あるらめと思ひやらる。此ごろは又ひとつ色
ながら。たゞ霜がれにてぞあめる。あをはかの
宿はむかし其名たかきさとなれど。今は家も
すくなう。あそびもななめり。故宰相の名はお

ほかたのあをはかの里とよみ給へりしも。げ
にはかなくあともみえず。あかさかの宿。い
つのたびにか二たびとまりたりしぞかしと思
へば。何となくしらぬさとは似ずぞあるか
し。住所愛とかやいましむるなるも。げにこと
はりなりや。かさぬひ川のはしいとせばくて。
たゞ板一をわたしたり。ひかせたる馬おち入
ぬ。あさましも目もあやなり。ともなるも
の。かやうのかた人にをとらぬ物なりければ。
とび入ておよぎつゝひき上ぬ。いつぞやもか
ゝると此川にてありしこそむつくしき先例な
れ。くれてすのまたといふ所につきぬ。のがみ
よりは五里とかや。猶とをき心ちぞするや。ば
んばよりは十里なり。此所のやう川よりはは
るかに里はさがりたり。まへにつゝみをたか
くつきたれば山のごとし。くぼみにぞ家ども
はある。里の人のいふやう。水いてたる時は。

舟此つゝみの上にゆく。空にゆく舟とぞみゆるといふをきけば。あまのはとふねのとびかけりけんも。かくやとぞきゝゐたる。

十七日。けふみち近しとてをしのだめたり。夜あけはてゝ。川のつゝみにてみれば。この川はみのとをはりとの中にながれたり。まづ雑人どもをわたす。川はたにゐつゝわだし舟待ほどに。東路のすみ田かはならずとも。ことゝふ鳥もがなとうちながめらる。袖ぞれのわたらぬさきにひぢぬるや。此わたりちかく河づらに。たかくわの宮とて。雅成親王の御そうにておはしき。宮と申名もむつまじくていそぎみやれば。たゞ白砂のさしとをくして。青松のかきのあとのみあり。いとゞなぐさむかたなし。いつにうつろひ給ひにけんと。そのとゝなくあはれなり。くひせ川はやく深くしておそろしき河なれども。征夷將軍の御だい所ち

かきほどに下給ふとて。うきはしわたしたれば。おもふとなくてわたりぬ。たまの井の宿。一とせみしには。みつばよつばにつくりかさねたりしがやけて。わらやのゝき竹のあみど。いまだおろそかなり。是又よべの宿より二里なり。道くはやむまとてはせありく。げに世中のしづかならぬ程もあはれなり。顔回がちまたになきけんもおもひしらる。くろとゝいふ所にたち入。此國をゝはりと申事は。むかし戀する人の此國までたづねきて。これにてしににけるより。をはりと申とかや。をりとゝいふ宿もすぎぬれば。やうくこよひのとまりもちかくなりぬ。けふは道よくてこまもなづまず。日入程よりもとくかやつにつきぬ。はらからならぬおとゝ定有。昨日よりまちけるとて。こゝにもとよりあり。やがて所につけたるあるじして。しるそしぬ君せうくきたれど

やがてたちいる。いつぞやありしきみのいまだかたなりくしがおいゝてたるよし。このたんだの前司かたれば。ゆかしくてそのやどへぬすみてゆきてあそびぬ。むかし馴侍し物のなごりにもとおもへども。かたみにもなずらふべきならねば。むなしくよもぎのまろねにてあかしぬ。けふよりは松の色もみやこにはにずぞなりになる。

十八日。よべふくるまであそびて。上下ねすぎぬれば。日いづる程にぞたちぬる。あつたの宮は昔日本武尊東をたいらげ給ひしとき。えびす野に火をかけて。みとをやきころさんとしけるとき。おほきなるかつらの木やけてたふれたりけるに。田中の水あつくなりたりしより。あつたといふなり。其時あまのはやきりの劔にて。艸をなぎてのがれ給ひしかば。其けんを艸なぎのつるぎと申き。そのつるぎを此み

やしるにいはひて侍れば。いちはやき神にぞおはしますなる。この夏の比。宮のうちおどろくしくなりひびきつゝ。ついまつ火おほく四五千ばかりにて。むかへのいらこがさきまでつゞけり。いにし文永のはじめつかたも。かくありけるとかや。もうこ國のゆゑとぞ後にはおもひあはせけるとかや。いよくあらたにおぼゆれど。精進をせねばまいらず。心のうちばかりに法施まいらせて過ぬ。此丹後のさきの前司なるおとこ。あまの家にをし入て。さしほひまつまはうらがくれ侍らんとて。さけとりよせつゝ。なごりをしみつゝあそぶ。三百杯ならねど。てをさかづきにわがちて。をのくあざれゐたり。しほひぬと申せばうちいづ。これより此男かへりぬ。なるみがたは今ひはじむれば。馬のひづめつくばかりになみながれて。中くけふあり。

なるみがたおもはぬ方にひく波のはやく都
にいかでかへらん

みしよのまつもあゝ。しほみつときは。入ぬる
磯の草葉ならねど。葉ずゑばかりぞのこるら
んかし。五十町といへど。道よくてこまもはや
ければ。ほどなくなるみの宿につきぬ。このぢ
ぞうだうには安嘉門院の左衛門佐哥かきつけ
たれば。みまほしけれど。あまり風吹さむくて。
人わふれば。みですぎぬ。このたびはかならず
其てとみて。物がたりにもさると侍しかなど
ぞ都のつとにはかたるべき。二むら山のあら
しとに寒し。みかはの國になりぬれば。ひとへ
に野をゆく。霜がれの道しばをのみふみなら
しつゝ。すぐるもいと淋し。やつはしは先達ど
もやうく。に釋たり。くもてとはむかしいか
にかありけん。今はたゞ二のはしなり。能因法
師は谷のはしと申侍けるも。猶いかゞと聞ゆ。

かきつばたも今はなし。なにをか句のかしら
にをきて哥もよむべき。かやつより此やつは
しの宿まで九里とかや。

かさくらししぐるゝまではなけれども雪げ
の雲や二むらの山

日たくればいそぎいでぬ。うら路はれいの浪
のせきもりゆるすひまなければ。山路にかゝ
る。ささくゝの道ならで。あらぬみちにぞ入ぬ
る。せばさ道のかたゝはがけにて。海みおろ
さるれば。あやうきときそぢのはしよりも。猶
心ぞうらびれゆく。こえはてゝゆひといふ所
すぎて。又あまのしほや五六ばかりなる所に
こかげ有。とへばせきさはとぞいふなる。あま
のすむ里をばこかねとぞ申。うみづらを四里
ばかりゆきて。神原といふ宿にとゞまりぬ。は
るかにきかざりし浪の音。たゞ枕のしたにき
こゆ。

廿四日。ふじ河も袖つくばかりあさくて。こゝろをくだく波もなし。あまたせながれわかれたる中に家せうくあり。せきの島とぞいふなる。又少宿あり。田子のすくとぞ申める。宿のはしに川あり。うるひ川。これは淺間大明神ほうでんの下より出たるみたらしのすゑとかや。かつらぎの神ならねど。はしわたらさし(しはて鬼)されば。舟にてぞわたる。ともものどもわたるをまつほど。よしわらとて。少家のあるにたち入て。あまり寒ければ。しばをりくべて。つくくとふじの山みやりてぞゐたる。時しらず雪のふるとは。國つくりの神のやどかりけるに。このかみかさゞりければ。かのかみの御ちかひにて。かくなんいつも寒く雪ふるとかや。けぶりのたつと。竹とりのおきな物語にぞ。ふしのくすりを此山にてたきたりしに。それよりたつとはみえて侍れど猶おぼつかなし。

山のまへのたつみの方なる山は。天人のあまくだりてつきたるよし。富士山の記に見えたり。いとふしぎなるとなり。あしがみねともいふ。又すそ山ともいふとぞ土人は申侍る。ひとまちつけていづ。うき島が原はたゞまさごぢにしばのみぞおひたる。北はふじ。すそはひろきぬまなり。うき島がはらのうちなれどこいし多し。あをの。小松原。かしはばらなどともいふ所あり。さのみはしるしがたし。しほやく煙のにしになびきたるをみて。

こし方になびきにけりなもしほやくけぶりにたぐふ我思ひかな

田子のうらなみ。まとにひまなくたちさはぐさまいとおもしろし。沼のいとひろきにひれいる鳥のはをと。をぶねにさをさして通ふ賤の有さま。ゑにかゝまほし。はらなかの宿といふ所にたちいりぬ。くれぬべしといそげば。ま

た心あはたゞしくていづ。くるまがへしの所
 までは二里とかや。きせ川は足からへかゝる
 道なれば。よそにみてすぐる。するがのこふち
 かくなりてこ川あり。雨ふり川となんいふと
 申せば。そのゆへをとへば。雨ふらんとては水
 なくなると申。けふあるとなり。水なしの池こ
 そさやうには清少納言枕さうしにかきたれ。
 こふにつきぬれば。まどにみたらし河のいさ
 きよき。神の御心もをしはかられてたふとし。
 これは三島の明神にておはします。いよの三
 島よりはこの三島を本神と申。これよりは伊
 興を本社と申なるこそいとめてたけれ。仁徳
 天皇と東宮と位をたがひにゆづりおはしまし
 たりし事もおもひ出られて。今の世の人のわ
 れ／＼とあらそひいふこそはづかしけれ。十
 首述懷哥を詠じて奉恩せんとおもひてぞよみ
 ゐたる。この家あるじみこの第四のさとかや。

ゆゝしくまさしきわらははかなきあるよし申
 せば。心みんとおもひて。よばせて神をろさせ
 て人してとはす。身のこたへあり。やがてかな
 ふべし。官達のそまうあり。すこし遅くあらん
 かし。しゞうはよろこびあるべし。又かたじけ
 なき人の御事をかまくらにて申さんとおも
 ふ。いかゞあるべき。めてたかるべし。かまへ
 てよろこびどもして。明年の秋よりさきに京
 へ歸しのぼせ給へと申せば。やすき事とおほ
 せらるゝと申せば。まづうれしくて。思ふごと
 くかなひて。秋よりさきにかへりのぼらんと
 きは。よろこび申べし。よく／＼いのれとぞ申
 やる。大方かやうのかななぎていのとは。みゝ
 のほかにおぼえ侍れど。所にしたがり。又あま
 りにのぼりたさといひ。かた／＼あらましも
 心ちよければ。とひてなくさむどはかなきや。
 あか月たつとて御へいまいらせて。此十首の

哥よみあげさせつ。宿のあるじをぞ師とたのむる。

廿五日。よふかき月にはこね山にかゝりぬ。日いつるほどに。高みねにてみまふせば。と山にはいまだ日の光も見えず。空もいまだ匂はぬ程に。ふじのこしより上ばかりにふりたるは。はや雲井に高き程とぞしらるゝ。日と山のたかねをいつる時ぞ。すそのそばたつ程。しば山のふもとなどにかげはみゆる。又雲のと山のいたゝきよりたちわたりたるも。ふじのこしより下まにぞそびきたるや。いかにたかき山といふとも。これらにておもへば。ふじのすそのひら／＼とみゆる。しばのほどにぞひとしかるらんとみえたり。ひえのやま甘ばかりかさねたらんやうなりと。なりひらのかきたるは。あまりにやあるらん。又さもやあるらん。しりがたし。昨日けふよく／＼み侍るに。

ひえの山三四ばかりはあるらんかし。はこねは雪いまだふらず。霜ぞ降こほりて。道はことにすべりて。あやうきとかぎりなし。からうじてあしかはといふ山のなかみづ海のはたにたち入ぬ。高き山のいたゝきにひろさ三十町なり。にしのかたなるみづうみにて。雨ふれども水まさらず。日てれども水ひず。ふしぎ也。又此山にはぢごくとかやもありて。死人つねに人にゆきあひて。故郷へとづけなどするよしあまたしるせり。いかなる事にか。いとふしぎなり。あしのうみのゆとて温泉もあり。いかさまにもふしぎおほし。はこねの権現とて。むかしえんのうばそくのをこなひいて給へるとて。いづはこね二所とて。くま野のやうにあらたなる御神になんおはします。その上中宮の御ともにまいりたりしなど思ひつゞけられて。この海をば御舟にてこそさをさしてわた

りしかなどおもひ出れば哀なり。日くれにたり。ゆくすゑはみちなをはるけしといひて。あはたしくいてぬ。さかわの宿にくるゝ程につきたれば。れいのきみあまども。又わかきあそびどもぐしてしゐのゝしる。くたびれぬればふしぬ。

廿六日。とくたゝんとすれば。このものどもきてなをしゐゝたり。日たけて出ぬ。くるゝ程に永福寺の僧房につきぬ。としごろすみ馴しゝふるさとはやけて。かゝる所にきぬれば。あらぬ世のこゝちして。いとゞ都のみ戀しきといはんかぎりなし。しはすのつごもりの日は精進にて。すぎぬるとしの日かずにあてゝ。滅罪のために光明眞言みて。こんとしの日かずに又心經よみていのりつゝ。くるしければやすまんとする程に。中納言の律師まうできたれば。としのなごりをしまんとて。つもれば老とな

るさか月さしいてゝ。年のくれともいはず。心のどかに物がたりするに。京より文どもあり。みれば東宮の御方よりとてあるを。まづあはてみれば。右衛門督局のふみこまかにて。下し後の御日記。御さぐり題のたんじやく下給はる。めもくれてよみもとかれねば。りしによませてなきゐたり。かゝらぬにだにゑゐなきはするくせに。ましてかやうに仰下さるれば。とゞめがたき涙ならんかし。さぐり題にたびといふ事をとて。

空にのみ心はゆきて通ふともしらでやこゆる關の旅人

十一月十五日。御てならひに。

旅人はうつりにけらし鏡山みなれし跡に影もとまらず

こよひは二番なれば女房とて。二番はたうばんなり。かきつけし其名ばかりを水莖の跡にぞ忍ぶ

人の面影

十二月一日。あづまへびんありとて。ふみかく
所にて。

今もなをゆふつけ鳥のねをやなくいひしに
替心ならずば

此哥は下侍し時御會に。かねてよりゆふ

つけ鳥のねをぞなくこえん日ちかき關の
此方に。とよみ侍しとをちぼしめしいて
たるなめり。とりあへぬ涙のまぎれに。
逢坂のゆふ附どりよいつまでと關路へだて
ゝ音をつくすらん

續群書類從卷第五百廿三

日記部二

高野日記

釋頓阿

たかの山へまかり侍りけるに。つえのほどしてまたがりたる木に。ころもをつぐらかづらやうのものにてからめつけて。坂をおりくる僧あり。ゆさちがふて。おもかげのみたるこゝちすめれば。立かへりみる。かれもおなじくたちかへり給ふを。よく／＼みれば綱元なり。いかにといへば。いとふいのたいめんかな。行こゝろはけふならでもありなん。あないせんとてさきにたち給ふ。しりにつきて。むかしいま

の事どもきこえあはせ。さてもありしかたち。は。ゆめものこらて。法にみやつしたまへるさま。げにとおもひながら。なみだはふかくにて。しぼるばかりなれば。霧のしめりにまぎらはす。こゝかしこ見侍りて。おくの院にては晴わたり。風みにしみ。とりのこゑなどすめり。のぼりてはこゝろのきりもはれぬべしたかのゝやまのみねのまつかぜ
なもしらぬみやまのとりこのゑはしてあふ人もなし楨のしたみち
かはらにはまつさへ生てふる寺の苔のむし

ろも法にしくらん

あきの日にしになりやすく。尾上にかゝれば。これよりくだりて。綱元のいほに。こよひはあかし侍れかしとあれば。いづくの邊ぞととふ。日のおちゆくかたにshめて侍ける。

ゆきてみよねがひをまつのいほりにはしにこゝろをかけてむすべる

とあればかへし。

たかのやまいほりむすばゞ我もまたにしこそとおもふおなじねがひを

くれてたどるくゝいほりにいりぬ。綱元火うちをとりにいでゝ。ともしつけ給ふをみれば。やゝ七尺四面の庵に。みだと大師の像をかけて。佛具さはやかに。あかたな軒ちかうしつらひ。そのまゝ水むすびはなまいらせて。火かゝげそへ。香にもうつして。このそう周制のふでにておはしますとぞ。よのつねに見えず。西行上

人みづからかきたまへる山家集を。周制つたへられけるを。法勝寺僧坊の火の時焼侍ける。そのうち西行の筆につゆたがはずかゝれて侍りしを。見せられたまひしなり。書畫筆術ひとしといひしも。さる事に侍る。頼朝大將の取苑草。無動寺にて見侍る。西行筆に似たり。このやまにも願文などあり。みなたがはずにて侍る。周制と此三筆ひとつに見え侍る。さなり隆信朝臣の大原の圖六卷。彩色ふてのはへ見所あり。所々のと葉がき同筆なり。おほかたにては文字かけあふまじきなめり。法性寺殿御筆にまがふばかりに侍りし。かゝる筆づかひ。いまよにみえず。世のへだてはるかならぬほどに。いとくちおしくなりゆくものに侍る。寂光院の北坊にて見侍る。みさせ給ひしやいまだし。信實朝臣のみなせ殿の四季の四卷。とばがき同筆。御製などのあるなるあたりは。御ふて

もくはへられたり。尾上殿。瀧殿。田上のいなば殿。かはにのぞめるかやぶきのわた殿。釣殿。所々の岩木の色あひ。水のこゝろばへ。そのおり／＼のけしきをかきわけられし。いまでもめにつきたるやうに侍る。隱岐の國へをもむかせたまふになり侍りしとき。御かたみにとて。この朝臣めして。御影をかゝせさせたまひて。七條女院へまいらせられしといふをも。おがみたてまつり侍る。それにて御影堂はたてられしとか。亂たるよには。いかゞなすべきもはからず。ひとひもはやく。水無瀬へも大原へも行て見させたまへかし。大師このやまの圖をかゝせたまひし。法性院の坊にあり。いづれのゑどころといふとも。をよまじう見え侍る。竹は竹と見え。木は木と見え。鳥馬などいふ文字。そのものとみゆるさまにかゝせ給ひしものもあり。たへなるものなりなどきこ

ゆ。ともにおもひいづるをまゝのものがたりすめる中に。七十にもたけたまへる僧の。我名は海象といへり。くらければ扉ちかうならべてさふらへども見給はじ。こよひかくとゞめ侍る。いかであかさせたまはんとのたまはせしかば。やまずみのまうけにさふらふとて。うちおしきに。あはのいひ。しそびしをなどいふものとりそへ。十二三斗の小僧もてくめり。夜半のあらしをしのぐまでのやどりとこそ思ひ侍りし。みやこもたび／＼のさはぎに。世のほかになりゆきて。かゝる御もてなし。すて人の身のうへには。めづらしう侍るとて。四人みをそばめゐてくふ。さて海象の縁ある事どものたまふ中に。大師此やまをきりひらかせさせたまひて。堂たてさせ給ふに。このみちのたくみ。文字の事をしらねば。しるしあはすべきとはりもなしとて。いろはの四十八字をいし

へさせ給しより。すゑの世の人のたすけにも
なりぬと。きこえ侍りしかば。さらばと思ひ
て。いろはを冠にをきて。四十八首をつぐりい
だし。影前にそなふ。

いまとても佛のみちをもとめねばたま／＼
人になるかひもなし
ろもかひもわれらはとらて法のみちたゞふ
なぬしをたのみてぞゆく
はちすばにをきて消なん露の身のいのちを
池のみづからぞしる
にしへゆく月日のかげにさそはれて齢かた
ぶくとしはうれしき
ほの／＼とあけゆく空をながむれば月もこ
ひしき西のやまのは
へだてなきちかひと誰もたのむらんしるも
しらぬも南無阿彌陀佛
とても世のほまれをいとふみなりせば人の

そしるやうれしからまし
ちかひにてむまるゝならばたのむべし佛よ
りなをみだのひとこゑ
りむじゆをも我たしなみにおもふなよむか
へとらんのちかひたのみて
ぬるほどは現とおもふよのなかをさめずば
いかゞ夢としるべき
るりの池のおもひやられてゆかしきは氷に
しづむ水の月かげ
をなじくはみだのちかひをしらせばやとて
もとなふる人のこゝろに
わがねがひみつの心をたづぬればたゞひと
こゑの御名にこそあれ
かくれがにさかぬならひの花ならば春やう
きよのこひしからまし
よのなかはおもきたきとのやまかへりすて
ぬる人はくるしみもなし

たりきとて御名ををこたる心にて他力たの
まぬこゝろなりけり
れうも臥とらもうそぶく山にてもみなをと
なへばをそるべきかは
そしるとしてうらみ心のあるにこそ身をすて
はてぬほどもしらるれ
つゐに我むまれゆくべきごくらくの近き遠
きや命なるらむ
ねざめするあかつきごととなふれば老こ
そみだのたよりなりけれ
なむあみだぶたすけたまへの外はみな思ふ
もいふもまよひなりけり
らくといひくといふ事をしらぬ身は罪もを
それずみだもとなへず
むらさきの色とおもはゞあきのよの月にや
雲をいとはざらまし
うらやましうれしき事もうきともともにわ

するゝ人ぞすて人
ぬまぞしるつみふかき身はなか／＼にちか
ひをたのむたよりなりとは
のちのよをまどにねがふ身なりせばこの世
の事はおもはざらまし
おもひやるいまだにもげにさびしきはひと
りゆくらんのちのよの旅
くるしみのうみをばたれかわたすべきみだ
のちかひのふなぢならでは
やまふかき人のこゝろはなか／＼にうぎよ
といとふかくれがもなし
まよふとてたれかをしへんかげだにも我身
にそはぬ後のよのやみ
げにすつる人はあま夜の月なれややまにい
でゝもかくれすむなり
ふくたびにげにうらめしきゆふあらしさて
もまたるゝ花のしら雲

ことの葉にいつはりおほきみをしれば我心
さへはづかしきかな

えぬ人もえたるとばもひとつにてとなふる

みだのこゑぞかはらぬ

てすさびにかきをく御名の文字よりもとな

ふるこゑをちかひとぞきく

あはれよのにごりにそまて消なばやうらや

ましきは蓮葉の露

ささだちてねがふ心や生るらむそのみはし

はしこゝにありとも

きけばこそなをいとはるれ捨し世のうきを

とづれはさもあらばあれ

ゆめさむるかねのひびきのたかのやまその

あかつきをまつまでもなし

めに見しもみゝにきゝしも名のみにてなき

人数の身とはしらずや

みだの名をたのむこゝろのかはらずば身の

よしあしはとてもなくても

しるらめやあはれみもなき人だにもたのめ

ばすてぬならひありとは

ゑらびてはみだの光やてらすらんみだのち

かひをたのむばかりに

ひとこゑにたりぬる御名のかずそふはまと

にたのむしるしなりけり

もとむるにえがたきのりはねがはれておも

へばやすき御名もとなへず

せめてなどうたがひだにもなかるらん御名

もきゝうるこゝろならずば

すむ人のそらにしられてゆかしきはけふり

に見ゆるやまのかくれ家

京えぬもよく知人もとなふればみなむまれ

ゆくちかひなりけり

あけぬさきにくちとくとせしかば。うたのや

うにもなし。かねのこゑに窓をひらけば。おち

葉がうへのつゆしもにきらめくほし。見るみるかげうすく。木のまよりよこ雲ひく。きのふみのこしつる所々みんとて。わらぐつなどゝりいづ。

〔右高野日記舊本闕今以扶桑拾葉集補之〕

宗長日記

享祿第三元日試筆

釋 宗長

汲てより八十あまりの春のかけ硯にむかふ
今朝の若水

今朝拂曉に京都好便とて歳暮にいひ來たる紫野書狀。逍遙院殿年始の御音信幸にて。目をすりく若水を硯にうつして。草庵うつしかへ侍らんあらまし一折に。

うつすとも鶯や我宿の梅

八十三年來朝夕末期の希。殊このごろは狂筆にをよぶまで。

ねがはくは風、の我身にてしなばや物にくるひくも

ねがはくはなき名はたゝじ我しなば八十餘りを神もしらじよ

末期の祈無油斷侍る事なるべし。

三條殿御方簾中日頃わづらはせ給ひて。くならせたまへる夕に參りて。

露けさは柳の目にもこぼれつゝなき君こふる花の春風

いく程もなく慈廣院殿御他界。御茶毗の夕焼香申侍るとて。

九重の雲井をゝきて契あれや名高き富士の夕烟かな

御方返し。

朽ぬ名をふじの高ねにとめても煙になし

て見るぞ悲しき

四月八日。佛誕生に老懷を。

しなばやと八十あまりの思出に釋迦生れま
すけふにやはあらぬ

素純法師遠行とふらひに老懷をかへて。

八十餘りひとひもさきに我こそと思ふに又
もをくれつるかな

八十餘りはぢざらめやは思ひやれきのふも
けふもつれくとして

八十餘り聞つゝ見つゝおどろかぬ我や常な
きよの外の人

宇津の山居あまりにくらく心細きに。軒の楓
梢をさらせて又薪にも。

秋は染る時雨しとはゞつた楓いかゞこたへ
んうつ山の越

山家霖雨中徒然。爰もとみな蝸屋のみ朋友に
て。

五月雨は岩の雫をよひいづるかたつぷりを
ぞとふ人にする(は秋)

六月はじめ山居の庵に。田を堀うへさせ。水を
せき入て。墨よしの岸を田に堀うへしなど。古
語を思ひよそへて。

庭を田に堀うへてだにすむ水の心のなとて
ならはざるらん

筆にまかせて。

奥州岩城に下侍人。馬一二疋のぼするとて。き
ららの重荷をおふせて。三河尾張路次の事と
あるに。

岩城よりひえさかもとの山ごえのさらゝを
いかてつけのぼすらん

折ふし中國邊の人にや。富士見のつゐてとて
立よりて。ことづて文など有。物いひかはす程
に。打つけなる落涙いかにぞやといへば。不弁
の侍侘參らするにはあらず。何となく徒然な

る様かなしく。かつは殊勝にながめ入まで覺えず。狂忽の事とて袖をはらひ侍るに。つれなき老もためらひかねて。

思ひあらず人の袂のもよほしにつれなき老もしぼるとを見よ

客衣かれ是二三人同道。しばらく物語のつゝで。尺八など面白かりしなり。發句所望に。

降暮ぬいづらみな月さ月かな

一時ばかり逗留。何かなど馳走に葛の粉を煮て。折ふし人もなくて。我と火を焼侍るを見て感じ侍る。閑居の鉢見をよばれ侍る。本望々々。

小原兵庫助昨日山居被尋。食籠一瓶。翌日三條殿御供。河原は水深く。山を歩行にて御尋。種々持せられて。山賤やうのものおどろかし侍り。御物語に日を暮されて御歸しあしたに。

山里は風よりほかのたまさかのとふ人かへ

る日暮しの聲

七夕に成ぬ。氏輝亭一、題なしにとてありしを。貞世範政已に爲秀爲尹三十首の題はじめにそへ侍りし。

七夕衣

かり衣あまの河原の一とせにひとそひとなど逢見そめけん

七夕雲

はるかなる神代ながらの妻ごめに立や八雲のあまの川波

七夕毎年手向に七首。

けふならで逢事かたき石川のよどみて今宵ながれざらん

七夕の織縫糸のすぢく／＼のめもあやはたれ見てもわくべき

玉章も七葉の梶のとり／＼の手向にあける星やかへさむ

皆人の折はへこよひかす衣かけてもほしにしぼる老ぞよ

我に今宵天の下人とりわたしかずてふ物をかさゝぎの橋

空は猶いむらん也と老ぬとも思はて星を見つる夜半哉

山岸の竹くらき夜におきあつゝ見るともしらじ星合の空

今月廿九日。宗祇古人年忌。毎事連哥の吊一折の事も。閑居の秋の庭を題して發句。

庭ぞ秋堀うへし田のみなる世哉

庭のかたはらに田をうへて。やう／＼ほのめくにや。けふ山居のもてなしの程。中かき左右はみやうかへさしやうかけふのとしみの齋の馳走一膳の内所せかりしや。風をわづらひ侍る祈禱連歌とて。所望の發句に。

夏を手にはらひもてをく扇かな

九子草庵卅年にをよび住あらし侍る。孟蘭盆過十六日よりとりこぼち。誠に竹を柱。垣壁には松の葉をつけ。庭のかたはらに山畑をつくらせ。大豆小豆鴨瓜杯心地よげ也。田を堀うへ。やう／＼ほのめさわたる。すこし山かたちをして。芝をつけ朝顔をはゝせ。萩さかりなるに。

おもしろくかりしめかこひいづくへもいたうもなし住たうもなし
猶雨風やまず。海は高しほあがるべきなどいふもあり。鳴神ひらめき。日にさえぎりて。さも玉しぬもある空なさに。

世はさてもつぎぬるにこそ波風のあめつちひゞさはぐ海山
笹の虫夜一夜雨に打ちらされ。よるかたなげなるを。

打ちらす笹の虫の雨風に軒の下草たのむ聲

々

衰いかに汝もかなしき秋の雨ふり明す夜の
鈴虫の聲

享祿第三庚寅。春の雨より時鳥鳴やさみだれ
晴まなく。六月もかつててる日みず。文月八月
もかき暮し。十五夜の空かつ晴て。晴明希宿
の道場の起てみるて見。一折のおほせかしこ
み。

月こよひはるかに照すひかりかな
かの當初のことは。はるかにてらせ山端
を。後世までのひかりにて。道のほどにひなと
いふためしもこそはこよひなれ。この山岸の
客寮は西もひがしも北南八竹九竹の中にし
て。竹園とつけて。

木のまより心づくしはくれ竹のすゑばにか
ゐる窓の月影

又いざよひの曉のさりげなかりし空變じ。よ

こさまに降出て。晴る夜もなく日比へぬ。ある
かたはらに客僧の萬句の中に。

空は月すむらん秋の天の下

天上までのおほけなきうらみこそはかなけ
れ。爰に。

蛭の子の あしたゝぬ老が ためは猶 羊

のあゆみ 隙のこま 蝸屋ばかりの 厩に

て 柱もたはに よろぼひぬ 君をたのみ

て このほどは 中々とかく 申さぬも

いはぬはいふに まさる世の ことなり良

も はづかしな 臨川庵は 客人の うつ

りたまへば とゝろかへ ふつとの事は

にはかにて つくりもあへず いそのかみ

古材木の はしくと 手のかんなに

及ばぬは 藁を結びて 千はやふる 神

さびにたる 栖なり まれく人の 出い

りも こなたへと打も はらふべき たが

みに絶ぬ をのづから 肱を枕の たのし

びも 我をろかにて 得がたしや 哀驚房

ぬか粥は 思ひもよらず 秋の野の お

ほかる草も 野分して 露の情も かけ侘

ぬ ことしも今は 暮ぬべし 千里遠村

雪ふりて 冬ごもりする なにはえの 今

は春べと 梅ぞさかまし

寶樹院山岸の竹しげく月日ももりこねば。竹

園と號する旅宿にて。

木のまより心づくしはくれ竹の末葉にかゝ

る窓の月影

八月十四日彼岸に入る。春二月にも此庵にあ

りし。

春秋の御法の場のけふにあふやをはりみだ

れぬえに結けん

氏輝亭九月十三夜。

霜草虫

朝な／＼色かはる野のはつ霜の夜寒身にし

む虫の聲哉

寄鏡述懷

身につもる雪と波とを忘ればや鏡に見ゆる

影拂ふらん

又誰を見る人にせん十寸鏡そこなる影を我

身ならでは

九月末まで朝貞咲る色を。

しのゝめの夕霜かけて秋の日の夜さむの朝

な朝がほの花

ある知音の人この山の遊山して音なきを。

よそにての恨はなしやきても君たちだによ

らでかへりつる哉

奥州岩城民部大輔。この十餘年音信。殊この春より及三ヶ度書狀。一度下向の事。たび／＼あらましのみにて過行。發句を所望に。かならず

この秋はなどいふ心なるべし、

關こえんあらましやこの秋のかぜ

しかれば迎などやうに音信あり。

ながらへてことしも今は末の松まつらんな
みをこさせずもがな

いかでもせめて今年ながらへて。春はなど申
送るなるべし。去年は迎としてしかるべき馬二
疋送りのぼせらる。一疋は氏綱所望そこの
ごろひかせ下つ。同國會津に和田圖所助千句
とて發句所望。會津物而者音信。發句は春のと
てあり。

しのぶ山おく見まほしきかすみかな

此こゝろはこゝもとの霞を見て申心なり。か
なのてにをはかなふべしと見ゆ。

山城の木幡の里の馬はあれどかちにても、

(行麿)

おくぞゆかしき

おく馬ほしげなるにや。たゞ奥の旅行の念願

成べし。

遠つ國のをとづるゝ人も來てすまば只こゝ
もとのうときつれなさ

ある歌道代々かりての人。この年月賣買利半
抄物巨多にして。いまはの後までことたらぬ
よし聞て。

いか斗つむものならばわが宿のほしさおし
さの高き藏町

去年の暮にや。歳暮の不弁につきて。歌心の殘
まじきを。

天の下有とある物なくもがなほしさおし
やつくると思へば

去年の春熱海湯治まかり下りし時。何事も用
捨分別あるべきよし。紀伊守芳言ありしにあ
りがたくて。

みるがど哀しらるゝやまさとの霜がれ殘る
花のひともと

御返し。

山さとの只一もとのあはれよりみな霜がれ
を君見てしかば

昨日御庭鳥申。まことにわらは心地して。むかしおぼゆるはかなさ。老人とつけて所持の尺八曉をかたらふ。老後の息とぐかず。このごろの閑居の夜長さかぎりなく。隣家の鳥は程とをく。老耳おぼつかなく。こよひ待えたる鳥のうれしき餘りに。火をともして十首筆にまかする。

はるかにてほのく明る鳥の音をこよひ枕
の上に聞つる

曉をこよひは鳥も旅ねとやさはなれてなく
聲ぞかなしき

汝もぬる夜やながうらしまたれつる八こゑ
の時をいそぐ鳥の音

あたりだに旅ねする人まれなれや誰にまた

るゝ鳥の鳴らん

今宵より鶏人をわがためは曉人といはんと
ぞおもふ

このあしたわざとならねど白妙のゆふつけ
鳥のしものさむけさ

さと遠みたつたの山かつらころもをりはへ
て鳴鳥の聞ゆる

打ならす八の鼓におきなれてこよひやひと
り鳥の告らん

起馴るゝ寺の庭鳥曉の六の唱を八聲にぞき
く

八十餘あかまつこと鳥の音といまはの時の
残りけるかな

いちやうの葉をひろはせて。人につかはすと
て。

さもあらばあれと思えど目に耳に聞ても見
ても餘る口ぞよ

すべて人のため人わろからぬ事は。たとへば
出物とは思ごとく分別あらば。我ためにこそ
侍らめ。小田原にてもさる人餘り連歌につき
て傍若無人の過言ありし。

此ごろの連歌はよしや射てをかに見るべし
かほの弓の本末

是ぞ過言の第一にてもあべけれ。八十餘り存
命の故。昔今の傍若無人わがひがことばをば
置てかなしき事を。

八十あさり風、のわが身にてしなばや西に
くるひくも

小原兵庫頭文やりし返事に。閑居の御音信の
返事もむつかしく候由申て候けるとて。

神無月文も無益のことの葉のそむきがたく
てかき絶にけり。

又かへし。

かきかはす爰もかしこも神な月文こそあら

め牛房大根

何事もまねはいはず。心安き閑居の老懷。

我庵はきかじきかせじとおもひねどみゝな
し山のくちなしの花

寶樹院深山の櫛りんだう參らする御文の御返
し。

あづさ弓いちやうの本のうすくこき落葉を
かせにひろはせぞやる

老の痼病たちゐのかなしさを。

老にけりたつもゐるにも大あらさのいづこ
も森の下くさいかな

ある人に双番綴細工をあつらへ侍る。はしを
おくにとぢられて。二丁二丁つゝり侍り。其は
しをのりにてつけられて。めをつくさるゝを
見て。

おりめをばとぢめになしてとぢめをばきり
つき双番手間や入そろ

十一月七日。ふと山臥府中にて尋つれど。こゝもとのよし聞てとて尋來。いづくの人ととへば。伊豫國にてまことに眞實に見え侍る。

とはずとも八十餘り君が見んいよの湯桁のかずしらぬかな

萬葉に。伊豫の湯のゆげたはいくつ數しらずかぞへずよまず君ぞしるらん。又翌日來り發句所望に。

見ずやあらぬいく船みちの富士の雪

伊豫介のぼりぬ。船みちのしわざにや。やつれくろみ侍るなど。其よせにや。何となく面白おぼえて。哥も發句も心をやるかたなるべし。

永純法師この曉去秋阿房清すみへ參詣。みちすがらの海山の物語。あかつき明星の事など聞て。

波のあはの清すみわたるあかつきや海よりいづる星に逢ふらん

あらはらくわづらひて日ごろに成ぬ。何事も不弁のかぎりなきに。時茂雜昏二束もたせたぶ。

有がたの君が雜紙や山さとの柿の落葉を拾ふ折しも

寶樹院鷄所望申。曉毎に老の長夜をなくさめ侍るに。ふと小田原の下事ありて。府中の一宿にして。

そば立る枕に聞し鳥の音やかへりてわれにこよひまつらん

遠江熊阿可罷越兼約。ふと相違する事ありて。小田原湯治の文。すなはちまかり下るとて。

冬がれに越べき山のかひやこれよこほれいづの湯あみにぞ行

十二月一日。あたみの湯治。飼澤より山ごえ。雪降おもしろさむきに。

いか斗さゆらん日にぞ名もしるさあたみの

湯しもとくる雪哉

何人

享祿四年十月八日千句。第一獨吟。二百韻目より追面可有之。

秋冬をときは木の松さかり哉

山も八峯もさむきはつしも

朝ぼらけ有明の月に年くれて

ほしのひかりぞのこるさやけさ

漕かへる沖のいさり火船遠み

いそのむかひのあまのひとむら

いづかたに鹽干の道のつゞくらん

ゆふ日がくれに立る田鶴なく

野邊見れば雪降つゞくした萌て

また折ほどの蕨ともなし

岩そゝぐ雫も春のやまさとに

あれ田の庵も人かよふなり

秋更て野分に月もあひぬらん

又霧わたるそでのさむしさ

高瀬さす遠かた船のほのかにて

今朝のあしたの川づらのみち

山陰や夏の箕のよどみ涼しきに

よしのゝたけはしら雲のそら

春霞たてるやいづこ花咲て

かへる旅ぞといそぐかりがね

なべてはたこしも長閑に成つべし

月もくまなきころの夜な〜

世にいとふうつぶし染もうところも

常は露けき木のもとのやど

立よれば残るかたなくもみちして

ふるき砌のむかしおもほゆ

誰なれやかたるもいそのかみさびぬ

過がてにするやまほとゝぎす

いつまでと降五月雨のかき暮し

雲間の空もはるかにぞ見る

俤も宮古のかたやわかるらん

花もかたぶく月ほそくして

春はたゞ明ぼの斗殘る夜に

清見が波ぞ袖にかすめる

よとゝもにむねこそゆる富士なれや

戀の外には何おもふらむ

たづねてもうきはひとしき人もなし

岩のはざまの中のかよひぢ

角さほふはけしきもよそめ忍らん

聞ば狩するますらおのこゑ

つもりえぬあは雪しろき嶺越て

行空おしき月やまた見ん

長き夜をねざめにあかぬ秋の暮

なけきりゝす我もよはらじ

まはしなる壁のいつまで草の露

はかなき種の常夏にさく

かたはらに打はらはるゝちりはゐて

ひくばかりだによのつかじとや

下ひものとけぬ心のきぬゝに

かたしくのみはあたらさむしろ

てる月の光靜にさえゝゝて霜をく鶴が岡の
べの松

享祿四七月。

宵のまの心をしれば河島の水の行衛を又た
のむ哉

川しまのわかるゝ水を頼むかな八十のよる
(一説無)
の逢せばかりも

言の葉の關とは聞ずもる人はたゞ君なれや
とまゐる心は

ことの葉の關守といはゞ誰ならんしばし斗
のとまゐる心よ

別路の詞をつゝむ袂をもちかにたてばかか
く餘るらん

もろともなたもとゆたかに旅衣立ての後は
かはくまもなし

歸るさの道のほだしとなる物をつらぬる哥

のあらましの末

かへるさのみちのほだしのつらね哥ふりに
し人も名残なるらし

宗祇古人年忌七月廿九日毎年興行。此廿九日
あらまし。政定廿八日に歸城の事にや。名残な
るらし。御名残あるべしといふ詞なるべし。

老の波こえても君にこゆるぎの五十を十の
上もかぎらじ

老の波こえてもこゝはこゆるぎのいそのも
くづの朽んとぞ思ふ

十月三日。政定通札書加るなるべし。

三田彈正忠殿

長頭在判

この長月中の十日頃。小田原の館出張。門ちか
なる旅宿の草庵。隣家あまた所より菊の色々
こひもとめ。野菊を堀うへて自愛し侍るとて。
いつつもる菊の下露なが月のきのふかといへ
しけさの初露

見せまくもおもはざらめやこきまぜて庭も
せさける白菊の花

ながゐすと何おもふらん植しより宿は菊こ
そ老わすれ草

此頃世中さはがしき事有て。草庵へ立寄人も
絶々なれば。

霜をけど見る人もなき庭の菊 うつろ

ふのちぞまたるゝ

八月十五夜九月十三夜は都鄙いづくも月にめ
てあそび。いもまめを手向とて。賤の男賤の女
も月見るといふ。爰に八旬有餘老拙。夕まどひ
してめさめおきて。こよひを名月にやとおも
ひ出て。南の椽のはしらに。と斗せなかをやは
めつゐる侍る。折しも範甫老人まめに徳裏を
そへもたせ送らる。

こよひ月まめに見よとやことたらぬいも戀
しらの一盃としれ

旅宿たすかる一兩輩人をつかはし。小座頭あるに。淨瑠璃をうたはせ興じて一盃ををよぶ。或所より誘引とて。をのくたちあかるゝに。あまりに無下におぼえて。菊はつけてこと傳やる。

たづねこそよしやせざらめこゝろなどこよひの月の友よびてとる

其名残の寂しさおもひやるべし。やがて老をなぐさむ心かきくらしして。

くまもなき空も見るくかきくらしをば捨山のてる月にして 九月十三日

己下欠

此巻は宗長古人日記にして。享祿三四年の事をあらくしるせり。うつ山居しめ給しより。大永七年八十のくれまでの事は。手記といへる文に見え侍り。今此日記もその

末につぐべきものにや。古人うせ給し年のこと。相州建長寺には享祿元年三月六日のよし。しるしの石にもさざみ置て。天源庵主何がし此傳をつくりしるせり。又丸子柴屋寺といへるは。はやう柴ふける菴結び給ひけん所なり。こゝにも墓有て。享祿五年三月六日と侍り。此年のたがひめいぶかしけれど。天源庵柴屋ともに住給ひし所ながら。吐月峯の光に心をすまし。終の住家としめ置給ひし分は柴屋のかたにや。されば鎌倉山にのこれる古つかは。世におはしませしほどのすさみに。あたりの草刈拂はせたてをかせやし給ひけん。ことに手記にも八十までの事しるせれば。かの庵には今もそのまゝいひ傳ふるなる歟。この日記二とせの事侍るを。をとゝしの事にや侍けん。祖父安阿打聞のやうにしるし置る中より見出て。め

づらしう思ひしに。猶うせ給ひし年のほど
おぼつかかりしに。其後宗牧法師の東國
紀行を見侍れば。天文十三年都を立て東路
に出立よしをはじめにしるし。さてことし
は宗長法師十三回なれば。丸子山家とぶら
ひぬとあるは柴屋寺の事にて。尋よりて懷
舊しきり也とて。見ればみし跡とふ雪の山
路哉といへる發句侍り。これを見てかぞへ

侍れば。天文十三年十三回忌にて。くりあげ
て享祿五年うせ給ひし也。享祿は五年に天
文に改れり。現存の人かく書しるし給へれ
ば。東國紀行によりて。宗長法師享祿五年三
月六日終られけるに定まれり。しかれば此
三年四年の記も侍るべし。

寛政十二申年

昌成花押

續群書類從卷第五百廿四

紀行部一

室町殿伊勢參宮記

應永卅一の年極月の十日あまりよつと申に。

室町殿伊勢御參宮あり。年々の御願なれば。いく万代をかぎり侍らず。神の御納受さだめて掲焉ならんかしと。ありがたく覺侍るに。わたくしにも老後の敬神ばかりに思ひたち侍て。夜ふかくまかりたつ。いまだ都のうちにて鳥のこゑきこえ侍るに。

都にてまづぞ聞つる逢坂の關のこなたの鳥の初音を

ほどなくあふさかをこえ侍る。

逢坂の關をばすぎの木の下の山あひくらき曙のそら

あめなを晴やらて風いとさむし。

風さむみ翌は雪とや降雨のみのしろ衣干あへぬまで

みづうみのおもても猶くもりて。とを山までもみえわかれず。

けさはまた浪より余所に三上山さだかにもなき雨の浮雲

あはづにて。

旅人の袖にまがひし栗津野のおばなは霜の

下に朽つゝ

霜さゆる枯葉のすゝき今いく日過なば春にあはづのゝ原

勢田の橋はほどなく雲はれて。さだかにみえわたさるゝほどなり。

風わたる跡よりやがて雲はれて浪に横ぎる瀬田の長橋

草津の宿にしばしたちよりて。人のやすみ侍るほどに。

枕にもたれかむすばん冬がれて草津の里は霜深きころ

かしは木と申所にて。

落葉だに残らぬころのかしは木になにをもるとて神のますらん

こよひはみなくちに御とゞまりあるによりて。わたくしにもおなじくとまり侍るに。夜ふけて雲間の月さよく出てみえ侍る。

月影もこぼれる水のみなくちに同じ宿かる夜半のさむけさ

十五日。寅刻ばかり御たちのよし承て。いそぎたち侍る。みちのほど空もいまだくもりがちにて。いづくともみえわさがたき野山のけしき。月はれなば見ところおほかりぬべき所々過ゆくに。まへ野と申野はまことにはるゝとみえて。月もやうゝはれぬるにやとみえ侍る。おりふし三千世界眼前盡といふ詞ふと思出られ侍て。

かぎりなき千里の外も今爰に月をみる目の前野なりけり

つち山と申所をこえ侍るに。山かげに雪のところゝさえのこりてみえ侍るに。又雨のいさゝかふり侍れば。うつゝなさつゞけやうなれども。心ひとつの事なれば。ねぶりをさますばかりに。

久かたのあめは雨にてあらがねのつち山寒く雪ぞつもれる

夜あけぬれば坂の下につきぬ。そのあたりちかき所に。御ひるの御まうけありて。御とうりうのよしきこへ侍るを。しばしやすらひ侍にき。此所よりはすてにいせの國にて侍ぞかしと。いつしか神にちかづきたてまつるを。たのもしき心地し侍て。

神も見よ君が千とせの坂のしたこえて伊勢路にかゝるはじめを

すゞか川をわたり侍るに。ながらへぬる身のかひありて。御もとにまうづるうれしさ。一かたならぬ心地して。なを行すゑのたのみさへ侍るもおほけなし。

ふりはてゝ又もこえばやすゞか川もしも八十せにかゝる身ならば

鈴鹿姫と申す小社の前に。人々被などし侍る

なれば。しばし立よりて。心の中の法樂ばかりに。彼たてゑぼしの名石の根元もふしぎにおぼえ侍て。

すゞかひめおもき罪をばあらためてかたみの石も神となるめり

とよく野のすゑはるゝとかぎりなく過行に。音に聞ゆるむさし野とても。是には過侍らてやなど詠めやり侍るに。兩國の名所もとろゝに思ひなされて。例の又狂言もおもひつゞけ侍る。

武藏野に伊勢のとよくのくらぶればなをこの國ぞすゑはるかなる

やう／＼浦のけしき。あきもなぎさもはるかにみわたさるゝに。かのはま萩もこのあたりにやとゆかしくて。冬がれのけしきもおしはかられ侍り。

をとにのみそよときこへて浪風はあらくも

よせじいせのはまをぎ

夕しほも漸みち侍るにやとみへて。たび人もあしをはやめ侍るに。千鳥のおどろきてたち侍る。

かち人もひかたのほどに友ちどりしほみちくれば立わかれつゝ

暮ぬればあの一つにつきぬ。まづ御宿坊へまゐりて。しばらくありてまかりいづるに。雨なをやまず。しかれども月の比なれば。浦のわたりもゆかしく覺え侍るに。こよひは望なりけりと思出侍るに。いとゞ月の光りも残りなく。しほのみちなん曉がたもおしはかられ侍て。寅刻ばかりに津のやどをたちいづるに。空いと清くすみわたりて。月の光は濱のまさごに雪をかさねたらんもかくこそと覺侍るに。はるかなる浪のうへは。いづくをかぎりともなく見わたし侍るに。ことの葉もをよびがたく。

ましてみじかき筆の跡にもつくしがたくなん。

さすしほにこよひは月も影みちて浪吹をくるあの一はま風

斯て十六日のあけがた。月は猶くまなくすみわたれるに。雲津川にて。

かこたずよ月のしたゆく雲津川名にはさはらぬせゝの光りを

夜の明ゆくほどに。あやゐがさと申所につきぬ。日かげとにあきらかにさし出て。昨日の雨のなごりもなく晴わたりぬ。

雨はれて後はあやなしあやゐがさけさの日影のさす名ばかりか

くした川をわたり侍るに。かのなだのしほやさいとまなみといふふるごとも。櫛の名に思われ侍て。

浦ちかさいせおのあまのくし田川さゝてや

これももしほやくらん

富士のみえ侍る所にもいたりぬ。むかしはさしもさだかにみへ侍し事思出られて。いまは中／＼おもひたへ侍りぬ。

こゝにてもむかしはみえしふじのねを老のいまこそおもひたえぬれ

さむ風と申所にて。まことに此比の寒嵐相應の名所にて侍りけるとおぼへて。

吹からになをさむかぜの里人はなれてもさすが袖しぼるらし

宮河を見わたし侍れば。こゝかしこに人／＼なみゐたり。此河にてこりかくと申事は。さしも本説もなきよしを。社家のともがらも侍るよしうけたまはりぬれども。なを塵勞をすゝぎ。心神をさよめんためにてぞと覺侍れば。人なみに河水をくみて身をさよむ。

をのづからにござぬ本の心とはたれ宮川に

すゝぎそめけん

齋宮の御跡は此あたりにて侍るよし人の申に。よそながらみたてまつれば。木竹いみじくしげりあひたるばかり也。

時しあらばいつかいつきの宮ばしらもとのむかしにたちかへるべき

十七日。巳刻參宮。まづ御池の水をむすび侍るほど。

契ありてむすぶ御池のみづからもとしへて神をたのむしるしと

例のごとく瑞籬の外にて二拜。

神がきの外に宮居もたのもしな法のすがたのかずとおもへば

みもすそ川のながれをみれば。むかしにこえて。いとゞ心もすみわたれるに。

ながらへて又みもすその川なみをわくるたもとにぬれてうれしき

いすゞ川にて。

いすゞ川岸の杉むら影みれば枝にもかゝる浪のしらゆふ

例のごとく楠木のもとにて二拜。

天照すひかりの内の宮ところいく代かけてか跡をたれけん

風の宮にて。

神杉はなをき木かけの風の宮枝もならさていく千代かへん

さて神馬など拜見して。神にかへり申するほど。過にし比の參宮。とし久しくへだゝりて。いとゞ神さびたる社頭のあたりをつくゝと見たてまつるにも。此たびの御參宮をわたくしのさいわゐとして思ひたち侍るに。そのかひありて。老の坂もわづらひなくまいり侍る事。ことに神の御あはれみもありけるにやといとたのもしくおぼえ侍り。さるに此たびみ

ちすがら思つゞけ侍る歌も侍らば。しるしつけてたてまつるべきよしの仰事あり。これ又此道にいたりてのめいぼく一かたならず。かたじけなく覺侍るに。神たちをまかりいづるほど。御なごりもおしく侍りて。ねがはくはなをも老のあゆみをはこび侍らばやと。心の内のことぶきばかりに。

玉の緒のなをながらへば神地山君にひかれて又もこえなん

かくてやう田の宿坊にかへり侍ぬるを。又御つかひありて仰事ありつる。みちすがらの歌どもに詞をくはへて。いそぎもちてまいるべきよしうけたまはりぬ。みちのほどのねぶりをさまし侍らんとばかりに。ことばをも心をも沈思におよばず。ふしぎなる口號をはじめて。今日社頭にいたるまで。心にうかびぬる瓦礫どもをしるしつけて。御宿坊へもてまいり

ぬ。夜ふけてまかりいてぬるに。ことさらの法
樂に。寶號を句の上にをきたてまつりて。心ざ
しをのべ侍らんとばかりに。ともしびのもと
にて筆にまかせ侍りて。

なにをかはわがねぎごとと思ふべきたゞ神
がきにむかふばかりぞ

胸の塵のこさずはらへ神風やいせのちかひ
にもれぬ身ならば

てるといひくもるとも見しあまつ空迷ひの
雲のある世ならぬを

むすびをくはをぞたのまんいせの海やよる
べの舟のつなでくちずば

瀬をはやみ又身に越るとしなみや猶宮川に
懸てたのまん

うれしさをわが家つとに包むかな頼む神地
の出廻りして

立かへり又よといはゞ老の身の末たのむと

や神もおもはん

いは木にもかはらざりける我ぞうき老はつ
るまで世をすてぬ身は

しばしともなにかおしまんみる夢のさむる
かざりを待身ならずば

無漏として有漏ともなにかわきていはむ正
法の道にあひなば

十八日の夜あけゆくほどに。やう田をたち侍
る。しばしゆきくゝて。いづくのほどにてか。

富士こそさだかにみへ侍れと。こゑくゝに人
の申を聞侍れども。おもひたえぬ事ぞかし
と覺えながら。もしも又けふは老のよそめに
もみえ侍るやとて。しばしとゞまりて。人のを
しへをばかりに。めかれもせずみわたし侍れ
ども。浪と日影とにうつりあひて。つやくみ
へ侍らず。さのみ剋をうつすべきにあらねば。
又むなしく過なんとするに。今更老衰のほど

も思ひしられて。

人は見てけふもわが見ぬふじのねは年たかき身をかこつばかりぞ

なをもそなたのゆかしさのあまりにみやり侍れば。浪ごしに山はあまたみへたるに。雪のつもりたる山一とをりみへ侍るあり。せめてたゞこれをまことのふじと思ひなして。心をやらんとばかりに。

それと見てよしや心を慰さめんふじのこなたの雪の山のは

ほしあひの里と申所あり。こゝはもともきゝをよび侍しかども。いとめづらかなる里の名ぞかしと思ふばかりにてうちすぎぬるに。ことしも又二たびの御參宮にてありける事のありがださよと思たてまつるに。一たびさますといふ古哥の心も。ふと思ひ出られ侍て。

ほしあひの里人いかにあふぐらんとしに二

たび君を待見て

けふも又浦／＼のけしき。見所おほからずといふことなし。あの、津もちかくなりぬるに。なぎさに松原のつゞきたる所あり。

並たてゐるいそべの松もあを海のかはらぬ色にしほ風ぞ吹

磯つゞきには舟どもあまたつなぎたるも有。つながぬもあるに。まことのすて舟よとみへたる舟はなし。かの松がうら島のおま人にはかはりてやとみへ侍るに。

こゝろなきあまのすみかもあらはれて世をすて舟はまれにみへけり

しほやはかず／＼みへわたれるに。海人ども行ちがひて。しほくむもあり。やくもあり。又鹽木はこぶさまも。をのがじゝいとなむけしきいとあはれにみへ侍り。

しほ木こりしほやくあまもくむ人もからさ

世わたるわざはかはらし

あの津を過ゆくに橋あり。名をとへばとめのはしとなん申す。

名にたてるあまつをとめのはしぐらこれも代々へて袖やふれけん

こよひはくぼ田と申所につきて。あくれば十九日寅剋ばかりに宿をたつ。ほどなく又すゝか山にも入ぬれば。かの小松の前にてことさらの法樂に。

君をいはふきねが袖ふるすゝか山代々にこへてや神もまもらん

よこた山と申所をみれば。まだ夜ふかくて。在明の月ものこりながら。空くもりてさだかならず。山のけしきはたゞよこおれるすがたよとみわたし侍るばかり也。さやの中山の詞もおもひいだされて。

月をだにさやにもみせずよこた山よこをる

みねの雲にへだてゝ

又いづくのほども覺へ侍らぬ所を過ゆくに。

こゝは白川と申侍るなり。さして人の家居もみへ侍らず。

東路に又しら川の名はきけど關かとみゆるやどだにもなし

こよひはみな口にとゞまりて。あくれば廿日夜をこめてたつ。しばしありてうへ田と申所を過侍るに。里一村みへて。田の面はるかにみへたり。いさゝ水のたまりたる田のほとりに。しづのめどもこなたかなたゆきかひ侍り。

冬ふかさいまもみしふにおりたつはなにをうへ田のしづがしわざぞ

野路にもかゝりぬ。

朝霜のとけたる野路のさゝ分て冬をく霜を袖にかけつゝ

あふさかをこへ侍るに。さしもくらかりしあ

けぼのにはかはりて。けふは夕日の影さだかにむかひ侍るに。いつしか都のちかさもうれしきけしきに。たび人どもいさみあへり。

我も又けふはみやこに入日かげうれしくむかふあふさかの山

松さかにもつきぬ。年々歳々の御參宮に。ことさら此所しも千とせの坂の名をあらはして。たびごとの祝詞にあひかなひぬるも。神慮のしからしむるところなり。

君はなを千代の花さく松坂をいく十廻かこえてみるべき

右一卷春日社家若宮宮内所藏本

白河記行

宗 祇

つくば山の見まほしかりし望をもとげ。黒かみ山の木の下露にも契りを結び。それよりある人の情にかゝりて。鹽谷といへる處より立出侍らんとするに。空いたうしぐれて。行末いかにとためらひ侍りながら。立とどまるべき事も。旅行ならひなれば打いてしに。案内者として若侍二騎道者などうちつれ。はるくくと分入まゝに。こゝかしこの川音なども。袖の時雨にあらそふ心ちして物哀なり。しるべの人も兩人はかへりて。只一人相具したるものと心ぼそきに。那須野の原といふにかゝりては。高萱道をせきて。弓のはずさへ見え侍らぬに。誠に武士のしるべならずば。いかでかかゝる道には命もたえ侍らんとかなしきに。むさし野なども果なき道には侍れど。ゆかりの草にもたのむかたは侍るを。是はやるかたなき心ちする。枯たる中より。篠の葉のうちなびきて

露しげきなどぞ。右府の詠哥思ひ出られて。すこし哀なる心ちし侍る。しかはあれどかなしき事のみ多く侍るをおもひかへして。

歎かじよ此世は誰もうき旅と思ひなす野の露にまかせて

同行の人々も思々の心をのべて。くるゝほどに。大俵といふ所にいたるに。あやしの民の戸をやどりにして。柴折くふるなども。さまかはりて哀もふかきに。うちあはぬまかなひなどのはかなきをいひあはせて。泣みわらひみ語あかすに。事かなはぬ事ありて。關のねがひもすぎがたきに。あるじの翁情あるものにて。馬などを心ざし侍るを。こしにかゝりて憐をなして過行に。よもの山紅葉しわたして。所々散したるなどもえんなるに。尾花淺茅もきのふの野にかはらず。虫の音もあるかなきかなるに。柞原などは平野の枯にやと覺侍るに。古

郷のゆかりは侍らねど。秋風の涙は身ひとりと覺るに。同行みなく物がなしく過行に。柏木むらゝ色づきて。遠の山本ゆかしく。くぬぎのおほく立ならぶも。佐保の山陰大川の邊の心ちして行まゝに。大なる流のうへにさし高く。いろくのもみぢ常磐木にまじり物ふかく。大井河など思ひ出るより。名をとひ侍れば。中川といふに。都のおもかげいとうかびて。なぐさむ方もやと覺えて。此川をわたるに。白水みなぎり落て。あしよはき馬などは。あがくそゝぎも袖のうへに滿て。萬葉集によめる武庫のわたりと見えたり。それより又黒川と云河を見侍れば。中川よりは少しのどかなるに。落合たる谷水に紅葉ながれをせき。青苔道をとぢ。名もしらぬ鳥など聲ちかき程に。世のうきよりはと思ふのみぞなぐさむ心地し侍るに。はるけき林のおくに。山姫も此一本や

心といめけんと。いろふかくみゆるを。輿に乗じてほどなく横岡といふ所に來れる。こゝも里の長をたのみてやどりとし。それよりのものゝ用意して。白川の關にいたれる道のほど。谷の小河峯の松かぜなど。何となく常よりは哀ふかく侍るに。このもかものもの梢むらむら落ばして。山賤の栢もあらはに。桮の澤には霜がれのあし下折て。さをしかのつまとはん岡べの田面も。守人絶てかたぶきたる庵に引板のかけ繩朽残りたるは。音するよりはさびしさ増りて人々語らひ行に。おくふかき方より。ことにいろこくみゆるを。あれこそ關の梢にて侍れと。しるべのものをしへ侍るに。心空にて駒の足をはやめいそぐに。關にいたりては中々言のはにのべがたし。只二所明神のかみさびたるに。一方はいかにもきらびやかに。社頭神殿も神々しく侍るに。今一かたは

ふりはてゝ。苔を軒端とし紅葉をぬ垣として。正木のかづらゆふかけわたすに。木枯のみぞ手向をばし侍ると見えて。感涙といめがたきに。兼盛能因こゝにのぞみて。いかばかりの哀侍りけんと想像に。瓦礫をつゞり侍らんも中々なれど。皆思ひ餘りて。

宗 祇

都出し霞も風もけふみれば跡無空の夢に時雨て

行末の名をばたのまず心をや世々にとゞめん白川の關

平尹盛。これも都の朋友にて。こゝに伴にも一しほ哀ふかきにや。

思ふとも君し越ずば白川の關吹風やよそにきかまし

穆 翁

尋ねこし昔の人の心をも今白川の關の秋風

牧 林

木枯も都の人のつとにとや紅葉を残す白川のせき

此兩人は坂東の人なるが。みな此道に心をよする人にて。したひ來れるなるべし。かくて夕月夜のおもしろきを伴ひて。横岡の宿に歸る程。作りあはせたるやうのゆふべなるべし。

於白川關 應仁二年十月廿二日

袖にみな時雨をせきの山路かな

木の葉を床の旅の夕ぐれ

さやかなる月を嵐のやどに見て

夜寒のそらはねんかたもなし

下もゐず雲にや鴈の渡るらん

白なみあらき沖のはるけさ

しばしだにかよふも船は安からで

一むらさめに人ぞやすらふ

柴はこぶ尾上の道の松がもと

宗祇

尹盛

牧林

穆翁

旬阿

祇

盛

林

翁

かけはし遠くむかふ山里

行袖のあくる戸ぼそにまた見えて

消んはかなし夜半のおもかけ

老が身や此世の月を送るらん

おくるゝ我は秋もはづかし

枯る野にゆふべの露を名残にて

あるかなきかの花の冬草

古郷やとはれし道もたえぬらん

いまはたよりもきかぬ戀しさ

もろこしは只うき中の心にて

夢に行ともいとはれやせん

身にかくす人もやどりは聞えほし

たづぬる山は雲ふかきかけ

水氷る雪のむら鳥餌に餓て

冬の田づらのくれの哀さ

送りえぬ今年をいかゞ賤の庵

けぶりをたやす袖のあさかぜ

祇

盛

翁

祇

盛

林

祇

翁

林

祇

翁

盛

林

祇

翁

祇

林

おもひ無月に泪もはらはれて

又身をしれる雨の夜長さ

問こぬもことはりなれや我よはひ

いのちつれなくみえんさへうし

跡たえて戀路に入ん山もがな

行衛おぼえぬ雪の夕かぜ

果しなき心は花にさそはれて

夢をかざりの世中の春

身はふりぬはや永日もよしあらじ

なげきなつめそ入相のかね

物思ふ袖になみだのつきもせて

人よわすればうきも残らじ

心ある里をとほや旅のくれ

たのみてとまる山ぞさびしき

鳥鳴峯の枯木に霜ふりて

雲もさはらぬ冬の夜の月

河音の高きや空にながるらん

翁 祇 盛 林 祇 翁 盛 林 祇 翁 阿 林 祇 翁 盛 林 祇 翁

落くる水ぞ風をつれたる

萩のはに軒の簀のうづもれて

野寺にふかき庭の朝霧

道もなき霜にや秋も歸るらん

まれにも人の見えぬ山陰

かゝる身はすつるといふもおろかにて

猶わびつゝぞ交りてふる

袖寒さおしたの雪の市假や

河かぜはらふ三輪の杉むら

清く行水も御祓のしるしにて

神よ心のつらさのこすな

泪をも手向になさばうけやせん

なきが跡とふ苔の下みち

山ふかく住しは夢の庵朽て

みやこの月にたれかへるらん

しらぬ野に獨つゆけき草枕

かたしく袖はたゞ秋のかぜ

林 翁 祇 盛 翁 祇 林 翁 盛 祇 翁 祇 盛 林 祇 翁 盛 林

山本に千鳥鳴江の霧はれて

翁

夕日かすかにのこる道のべ

林

入山をさそひて鐘やひぐらん

御たけはるけきみよし野の奥

出ぬべき佛にも身はよもあはじ

たのまば心ふかくあはれめ

別ては誰先だゝひけふの友

契りはかなや道芝の露

宗祇卅 穆翁廿四

尹盛廿二 旬阿二

牧林廿二

此一卷古寫本を得て書寫終 坂昌成

さのゝわたり

宗 碩

このたび伊勢の國に下侍りしことは。いぬるとしのすゑつかたにや。駿河より宗長禪老た

翁 よりの文して申をくられしは。太神宮立願として。獨吟の千句おもひ立とあり。しかはあれど老のつもりことの外にて。沉吟もことつき侍らぬまゝ。二とせみとせとなりぬ。あはれ春のころ參宮のつゐてもあらば。兩吟にもとおもひよりぬるはいかと申をくられ侍りき。うちみるより。あるまじきことゝおもふにより。返事をさへをこたり侍るを。さしをかずもよほされしかば。又うちかへしこのみちのおもひいでにもやとおもひなる事にて。さらばまづ山田まで着岸のころまかりむかひて。年月のつもりをもなど申をくりしかば。ほどなくとしかはり。春にもなりぬ。たがひにさはることもありて過行まゝに。いぬる水無月のはじめに。駿河よりのぼられ侍りし。やがて飛脚の人して申のぼせられしかど。草庵とりたつるほどにて。てをのゝ音もほど／＼しくみだ

りがはしきころなれば。いさゝか連哥などの心ちもせず。からうじて七月廿日ごろにぞ思ひたち侍りし。その比おはりのくによりさる人の上洛ありしを。伊勢のわたりまでといざなひつゝ。まづみやこ出侍し日は。奈良のみやこに蓮花院とて。知人の侍る僧坊におちつきぬ。又の日は大乘院の御門跡に參上のことあり。御さかづきとりくにて。それよりこゝかしこ一見し侍る程に。二日ばかりありて連歌一座あり。ふりはへてくだるみちなれば。とかくいなび侍るも。かなはずしてあひぬ。さて廿四日初瀬路にいてたちて。三輪が崎行ほど。雨にはかにふりきぬ。かの万葉のふること。たゞいまのやうに思ひ出られて。あまやどりをなど人々いひしも。いづこにか家もあらんと。ぬれく行過るに。あかぬ心ちして。返すくさのゝわたりになどうち吟じつゝ。泊瀬寺につ

きぬ。その夜公坊にやどりて。をのくかれいゐとりまかなひ侍る。ふと三條がいにしへ思ひ出られ侍りき。明れば伊勢の國へたちぬ。けふみちまでは筒井よりをくりの人々ゐて行に。鞍をきたる馬どもあまた行ひかへるに。ともなるものにあないして。宮原七郎兵衛尉の迎のよいいへり。かくいふはすがの野などいふあたりなり。これよりをくりの輿馬などかへしつゝ。夜になりて多藝へ行つきぬ。かれへは管領の御文あればつけ侍りぬ。又のあした北畠の少將家に參る。御對面あり。それよりいそぎたちて相可といふ所に行ぬ。けふも又宮原七郎兵衛尉盛孝駒うちならべてをくらせられける。いさはとやらむいふ所にて。をくりのことどもとゝのへて。けふぞ山田につき侍ぬる。予參宮の館は網代太郎左衛門尉弘貞所也。されどこたびは柴屋老人宗長參會のためなれ

ば。高向二郎大夫とては。としごろのものがたりしつゝ。やがて千句の有増になりぬ。この法樂はさるゝろあり。管領の御發句申いだされ侍るに。ひとへに天下安全のいのりなるべし。第十は逍遙院殿聽雪御發句なり。さて八月四日吉日とてはじめつゝ。おなじく八日に事をはりぬ。この會は心しづかに大形事どもきはめなどすべきよし。かねてよりのこと也。さて千句のゝち。光貞興行の一座あり。十五日は橋村新次郎清正張行なり。十六日。やがて柴屋老人は近江の國へ行べきことありて。鈴鹿の山越に出られ侍り。予は尾張のくにへ船のたよりをまち侍るに。明日十七日。夜をこめて出る船あるよしつげきたれば。すこし夜になりて。大湊といふ所にゆきつきぬ。この日ごろあひなれし人々をくりして。川崎といふわたりより。釣舟をまうけて行まゝに。をくり

の人半はたちかへり。もとより友とする人ひとふたり。船のうちまでしたひ乗て行に。易憚とて禪師なる人。こよろぎのいそにもとめけるにや。伊勢の海には目なれぬさかなどもして。玉だれのかめさしいでたり。沖にいづる程。このさけをのみ侍らんとするに。いざよひの月やゝさし更て。清光浪にみちたり。これを興じつゝ。盃あまたたびめぐりて。大湊にさしよせぬ。この旅宿は馬瀬のなにがしなり俊ところなり。あすつとめて船出すべきよしかまへ侍るに。曉がたより風かはりて。村雨のやうにふり出ぬ。をくりの人々は歸りて。濱ちかきやどりに。あさゆふ耳なるゝこととは。うらなみのをと。あらましき汐風。まれ／＼こゝとひくる。たづきもしらぬ旅人よりほかなし。つれ／＼なるまゝに。わかき人々いざなひ。これより二見の浦はひわたる程なれば

行てみるに。浦のさま山のためずまひ。まことに蒔繪のかたににたる松のむら立などいへばさら也。渚のかたにうちむれて。貝石など濱つとにひろひつかへれば。やどりのかたは。あまのいさりびほのかにみえて。曇になりぬ。今夜も雨しめやかにふり出て。明ればつく／＼とながめ侍るに。營養ひさかけて。なにやらんになひたる賤のをのこ。このたびのやどりをさしてくる。なにぞとへば。弘貞のをとづれるよしいへり。そのほか所々よりみちゆきつゝ。瓶子などやうのものさま／＼にてあり。又内宮長官よりとて。手向のぬさ色／＼して文あり。みれば哥あり。その折ふし易憚老人よりも短冊あり。いづれもとあへぬ返しども書つけ侍りしも。浪のまぎれに忘れぬるなるべし。さて二日ばかりありて。宮司大中臣基長。外宮第十神主常信。易禪師。高向二郎大夫

光定。これかれひきぐして。樽などやうのものをの／＼たつさへて。あままもみえぬ道の空。ぬれ／＼立よられ侍る。更／＼故郷人のこゝちしてうちかたりつゝ侍るに。いま一たび参宮申侍りぬかし。さらばこゝかしこのこりおほき會ども興行すべきよしあれど。いまさらたちかへりまいらんも。神慮さへはづかしきこゝちして。たゞこゝながらこゝろしづかにと申とゞめて。ふることもとすゑなどいひかはしつゝくらし侍るに。雨いよ／＼雲間なければ。心ぼそさもいやまさり行に。あるじのあやにくに發句ひとつとあれば。かつはおもひたつ手向にもと。

月や船出す夜さそふみなと風

かやうにかきつけ侍しを。さらばこれにて一折などいひて。百韻の連歌あり。翌日はのをのたちかへられしかば。名残こひしくながめ

侍るあり。内宮第四神主氏秀、横地館の當職うちつれて、雨もしとどにそぼちておはしたり。又この人くゝの心ざしの程などいひくゝ。くれかゝる程にひきわかれぬ。さて夜更るまでものがたり。うちふしぬる夢に。老師宗祇存生のこゝちして。會席にのぞめる程に侍りしが。その席まことに玉をしきたるやうにみがきしつらひたるに。發句第三まで出さぬるやうに覺えて。四句めやらん六句めやらん。今度奥州より上洛の人侍りし。その人など申されしかの句に。

松はちとせのみもすそのかけ

と侍りし。面に名所はいかゞなど申と覺て夢さめぬ。ひさしく待べきにやと思ひながら。かつはたのもしき心ちし侍りし。神のたすけはまことにあらたなることにて。その明がたより雲のけしきかつゝなをりて。追手侍け

るに。坂中務丞氏安。足代紀三弘宗。このふたりの（上脱舉）かたり。食籠などいふものとりくゝにて。こまゝとかさくゝり侍る。一日十六日の夜の後。日々にもきたるべきを。えさらぬさはることにて。心はかなたになどいへり。いまだ船出もいよゝゝのび侍れかしとさへ思ふよしのたはぶれ事などいづる。叟柏とて竹田一流の禪師なる。これも朋友にて。興ある家つと藥などやうのものども隨身して。こととひかたられ侍る。これをともなひて。廿三日月待いづる程。空の光すみわたれるに。濱風の夜さむも忘れつゝ。夜とともに酒をのみしつゝえひすゝみて。をのくみだりがはしきまでぞ侍りし。夜もはやあけなむとする程に。おもふかたの風になりぬと。船子どもこゑくもよほして乗侍りぬ。こゝろのぬさとあへぬまではしりゆく。かの伊勢おはりのうみづらなどいひ

し古ごとくもいひ出て。過にしかたの人くもこひしながら。こゝろはさきにいそぎ侍るまゝに。おなじ國桑名といふみなとにつきぬ。こゝのやどりは矢部五郎兵衛尉主繁宿所なり。このたび日記は。三輪が崎の雨のけしき。忘れがたきにより。しるしつけ侍れば。さのゝわたりとや申侍らん。

美濃路記行

久堅の天々しきはじめの年。長月中の十日のころ。ともとする人といさなひて。美濃の國にまかりけるに。いそぐ事侍るゆへ。さきだちて行侍りけるに。關山の間程とをきやうにおぼえて。逢坂山のこなたなるこ關ごえといふなる。つゞら折の所を過て。谷にくだりて。程もなくうちいでての濱より海のおもてはるく

と見わたさるゝなかに。みかみの山のさたさとむかひに見へければ。

あふさかの關をこえきて行するはみかみのたけぞしるべなりける

三井寺にいたりて。本堂にまうておがみ奉りて。當來もたのもしうぞおぼえ侍る。それより圓満院にするよししてやどりもとめけるに。

あるじ待とりたまひて。なにくれといとなみ給て。めづらかなるむかし物語などしたまふに。かの坊より比叡山八王子の跡など見わたして。物うきやうにおもほへ侍りけるに。からさきの松はもとよりことはりの一本ながら。今はつれなきさまに見え侍れば。

世のなみに國津見神のうらさびて松のみたてるかげのつれなさ

かやうにおもひつゞけけるも。凡慮のなげきなれば。まことの佛神の方便にやとおもひか

へして。

から崎の松もむかしに立かへり七のやしろ
のみゆきまつらむ

吉水僧正の哥にすがりて。

たつ杣におほひし袖もくちはてゝうき世に
たみはいかですむべき

おなじき和尚この浦に山王の跡を垂給ふ事を
よめりし哥をおもひいでい。

志賀の浦に五の色によせかへるなみのこゝ
ろをしる人もがな

かくしつゝながめ侍るに。秋の日はやく暮て。
常燈ともして。養慶僧正むかしの事などかた
り侍る程に。十七日の月さしいてい。境地よそ
にはことなれば。又はしつかたにたちいてい
ながめ侍るに。湖の上もみぎはのまさごも。さ
ら／＼としてものさびしくみえければ。あら
ぬ世にかはれる都の心にうかびて。

くらべみむ月すさまじきさゝなみやしがの
みやこも今のみやこも

當寺の鐘をきゝつゝ。月をみるが中に。

契りあらばその曉の月も見むきけばゆへあ
る鐘のこゑかな

あすこんといひし人のをそくやとおもひわづ
らひ侍るに。僧正行尊同行にをくれて。熊野の
道にてよみ侍ける哥の心を。この坊の元祖な
ればおもひよそへて。

今夜われあふさか山のさねかづらくる人ま
ちてつゐにさねずも

又おき出て月をみるに。さゝなみにうかべる
影を見るに。石山寺にて彼式部が心もかくや
ありけむとおぼえて。

をろかなる心にだにもすまのうらあかしの
月のうかぶ水うみ

十八日。あとより契りし人の思ひの外に日た

かく大津にきたりて。玉村齋とかいふ人の心ざしふかゝりしかば。船のまうけ心とけにて。やばせをわたり。やすのの河を過るとて。

しばしだにやすらふ程もやす河の水のみなはのやすからぬ世ぞ

もる山にて。

露時雨ふるやの軒をもる山は下葉も今や色にそむらん

十九日。雨ふりて永原の宿を立とて。あまつゝみなどするに。

人やりの道ならねども立いづるあづまからけに雨つゝみして

途中より雨はれて。淤泥をしのぎて行に。春日山のかたをかへりみ侍りて。憐愍をたれ給へとて。

たのもしないづくを行も春日のゝおどろのみちを分ると思へば

鏡山をはるかに見やりて。よそを過侍れば。

鏡山かけてもよそにはなれ行老はつる身のかげや見ゆると

老曾の森をすぐとて。

もる人のゆきゝの中に身ひとつのとしを老そのもりの下みち

高宮より廿日のあしたたちて。いざや川にて。

ながれての世のゆくすゑはいざや川いざと思ふぞたのみなりける

鳥籠の山をみて。

立かへり我やどにしておもひいでむ身にしみわたる床の山川

野路の篠原をかちにて行とて。身の程をかくまではとおもひつらねて。

露分る野路のしの原忍ばるゝそのいにしへはかゝらざりしを

すり針たうげといふ所をこえけるに。むかし

山門の學侶螢雪にたへずして。離山しなむの心にて。此道にをもむきける時。老翁の斧を石にて摺けるをみて。其ゆへをとひければ。これなむ針になすと答へしを。又立かへりて碩學の名を得し事ありしより。この道の名をかくなんいふと言つたへ侍り。たゞ人の心地をばみがくべしとのをしへにてありける。南嶽懷讓禪師も沙門道一のみちをしらしめんがために。取一瓢石上にして磨。道一曰。作甚磨。甚微塵師曰。磨作鏡。一曰。磨瓢豈得成鏡邪。師曰。磨瓢既不成鏡。坐禪豈得作佛とあり。この心を。

思へたゞ人は心のあしきをもよきをもつねにみがくべしとぞ

さめがゐは養老の瀧のながれときゝ侍れば。さりもあへず此水をむすびて。

結ぶ手のしはまでのびむさめがゐの老をやしなふ瀧つせのすゑ

柏原の成菩提院といふ山寺にやどりて。そのかみしたしかりし大とこの年経てたがひに老となりぬれば。再會も稀なるべしと覺へて。

君と我老ての後はあひがたき法のちぎりのくちぬうれしさ

伊吹山のふもとにて。

今よりや更に伊吹の山あるしよ冬をもまたぬ秋のはげしさ

近江と美濃とのさかひに。たけくらべの山といふをみて。たはふれごとに。

あふみみのいづれひろきとしらまほしたけくらべする山にとほゞや

廿一日。夜をこめて垂井の宿を立とて。

山かげや井つゝのたるひむすぶかとあらしはげしき秋のさむけさ

青野が原をあかつき行に。在明の月の露にやどるを見て。

白露に青野が原の色かへて草葉のうへにあり明の月

不破の關はととひ侍れば。道より外ををしへ侍るに。そのかみさへ。後京極攝政殿のあれにし後と詠じ給ひけんを思ふに。今はさぞと思ひやられて。

昔だに不破の關やはあれぬめり残るなのみやいひつたふらむ

關の藤川を尋ければ。いづくといふを聞て。

こえやらて春をしぞ思ふ岩波を花にさかなむ關の藤川

濃之一州有城。名岐阜。予秣鞋見之。則現蓬萊於和國之謂也。賦唐律以舒其賀云。

難慰騷人墨客情。征鞍萬里出都城。

日東一曲景濂後。添得岐山鳳鳥聲。

又。

岐阜高望勢接天。近移周室舊山川。

忠肝曾不分支日。坐致太平八百年。

廿二日。雨のふるに。あすなむまかりのぼらんとおもひて。やどりける家ゐより城郭の見へ侍るに。こゝをなむいなば山といふといひければ。

千里までなびきにけりなそよぎたついなばの山の風のまに／＼

廿三日。雨ふりしきるに。立いでむとして。

雨によりみのより笠をうちきつゝ出るすがたの名にはかくれじ

昨日は大雨なればとゞまり侍りて。けふまかりたつとて。家々を見めぐれば。みつばよつばの殿つくり數をもわかず。おぼちのさまは。平城のはじめもかくやとおもひやられつゝ。岐阜をいでし。かさやといふ所に寺あり。これは持是院（居士）と名をえしもの。後成恩寺のおとゞを請じ奉りて。敷島の道をうかゞひ侍しに。後の

世までのしるしをと申けるに。その心ざし淺からぬをや感じ給ひけん。梅津といふ所に。是

心寺の住持にておはせし御むすめを。この國にうつし給へり。いまもその政のふるきを尋

て。かの家の御むすめ。むかしにかはらずおはします。尋ねまいらざらんも。一家のよしみあ

さきやうなれば。こと更におとづれ申侍しを。かひあるさまによりこび給ひて。こまかに御

物がたりのつゐでに。此寺は義家自作に刻彫せし肖像を本主なりとて。とばりをひらかれ

しかば。しづかに回向し侍にき。竊にこのことをおもんばかりに。源家の權柄も漸々その勢

のおとろへぬべき時もやめぐり來にけむ。天が下信公になびかぬ草木もなき有さまは。先

代にもそのためしいまだきかざりし事なり。その本系をたづねれば。小松のおとゝ第二の

後胤なれば。暑往寒來ことはりにて。今四百年

の後立かへり。平氏の再榮ゆべき世にやとおぼえて。

おさめしるその源もながれずばすみかはるべき時やきにけん

かくて都のありさまなどとはせたまふに。のぼらせ給へなどゝすゝめ申とて。

あれぬとて思ひなすてそ春秋の花と月とはみやこなりけり

かうと河とやらむにて鶺鴒舟をみて。鶺鴒舟つなでを今はひきかへてなつなき水のすさまじきかな

みゑじといふ所にとまりて。夜もすがら思ひつらねてまかりたつとて。

うきことを思ひながらもいとひえぬわがこころさへしらぬ世ぞかし

けふは廿五日。天神の縁日なれば。旅泊などの

うれたきことを。

あはれとは神もしるらんそのかみにくるし
さたぐふたびの心を

小野の宿のはにふのこやにとまりて。萬葉集
に玉しける家もなにせむとあるを思ひ出て。

いく夜われ葎のやどをかりつらんつゐにい
もとしいねぬものゆへ

廿六日。多賀大社にまうで。八乙女の袖をか
へすを見て。

八乙女のかへす袖よりいさめけれ神のめぐ
みはいまもかはらじ

道より雨ふり。からうじて永原にて。

あづまやのまやのあまりのいふせさもなが
き夜すがら雨さへぞふる

永原よりは都へは海山かけて七里と聞て。

宮古人あすはあふみのうみ山をこえむとた
のむ程になりぬる

廿七日。永原よりしなまで深泥をしのぎて。

數日旅程霖雨霏。志公野馬爲誰題。

路頭官客今何愧。湖上清蓮豈深泥。

しなより船出せしに。日さしのぼりて。浪もな
くしづかなりしかば。

船出するあさ日の影はしなてるやにほの水
うみなみぞなぎたる

濱を過るには。大津までの海づらは住よしの
浦にまがひておぼえ侍りければ。

志賀の浦に鹽もみたなむ眞砂地ををりつゝ
ゆけばすみよしの濱

廿八日のあかつき。月の出るを圓満院の椽よ
りながめて。

峯こえて明はみやこに歸りなむあかつき月
よみちしるべせよ

兎庵老人

紀行之一軸。如十步九移目。詩中有千山万

水。不出卷而知天下。豈金玉乎。

樗散老翁實澄

續群書類從卷第五百廿五

紀行部二

湯本記行

〔右舊本闕〕

小堀
遠州辛酉記行

元和七酉の九月廿二日。天快晴。午の時斗に武藏の江戸を立。したしき人々爰かしこ馬の餞別すとて。申の時斗に品川を出。急ければ酉の時ばかりに神奈川の里に着。一宿。秉燭程に亦友達の名殘惜みて馬のはなむけす。酒肴小壺に茶を入。文添ておこせたり。其返事取集たる

言葉種いひやる次に。別といふ心を。

かへりこんとちぎるもあだし人こゝろ

さだめなき世のさだめなき身は

永夜も燈に向て聴鷄鳴。しも人共の聲してうちしわぶきて。夜も早曙なんと云を聞て。旅行別後朝思と云事を。

日數経ば末は都やちかからん

別れものうきさきのふけふ哉

と書て使は返しぬ。

廿三日。天晴。神奈川を立。帷子の里。藤澤を過て。舟渡し經て大磯にかゝる。そこを行すぎて

磯邊を通る。風靜に浪の音おだやか也。人に問ば爰なんこゆるぎの磯といふを聞て。寄名所別といふ心を。

こゆるぎのいそがぬ旅も過て行

わかれ路とめよ足がらの關

猶ゆきくゝて夕陽山の端にかゝるとき。さく河の里を過。川を渡りて小田原に着。一宿。思ひの外友だちの來り。獨ふたりして語て。其夜も更ぬ。聽鷄鳴より雨降。風はげしく浪の音高し。忍別旅宿の枕と言こゝろを。

よる浪のこゑにめさますかり枕

忍ぶ別の夢ぞみじかさ

廿四日。雨降風やまず。けふは爰に留るべき杯いふ。巳の時斗に晴。風も靜る。小田原を立。湯本早雲寺を過て。足がらの山にかゝる。遠近に見へる山々谷々の梢。色々に染なす錦をさらすかとうたがふ。あまりの面白さに行もや

らず。とある岩ヶ根にたすけられて。獨見山の紅葉といふ心を。

おもふかいなき世成けり足柄の

やまの紅葉も君しなれば

漸々山をよぢて。あし川の新宿に着。しばらく休息して。夫より山中の里を過て。夕陽と共に山を下り。三島の里に着。一宿。折ふし思ひ出る事有て。轉寢の夢さめて。

かり枕かたぶくるよりうたゝねの

夢をみしまの人の面かけ

この歌の詞書。思ふ子細ありて不委。

廿五日。晴天なりといへ共。風なゝめならず。

三島を立。沼津を通りて。原の宿にかゝる。面前砂吹かけ行歩叶がたし。友にさふらふ人の。かく浮島ヶ原よと言を聞而。實かぎりなき旅をもする哉。何國を宿と定べきかたもなし。行とまるとぞやどゝさだむるの歌の心。おもへ

ば風雲流水の生涯なる哉と心細く。

住はてん宿はいづこと白浪に

身を浮しまのよるべしられず

又友なる男の馬に乗たるが風にふかれて。た

へがたさのあまりにや。かくいふ。

むさし鎧こにだにかけて大風に

乗ぬもつらし乗もうさしま

笑敷思ひて。此まざれにやうく浮島原を過。

吉原の里に着。暫休息して風些靜る程に此宿

を出て。富士のすその河の邊に着ぬ。渡守はや

船に乗と言。此山を見れば。白雲山をかくさむ

とすれ共。はるかのかのす野にたなびき。雪一む

らの高き事は目も及がたし。時の間に色々に

移りかはる景氣詞に述がたし。折節友とする

人の云。此山を都の邊におきて。我おもふ人々

に見せてなど戯てかくなん。

見ても又またおもひを駿河なる

富士の高根を都なりせば

亦山の頂よりけぶりの立を見て。寄富士思と

いふこゝろを。

我おもひいざくらべ見む富士の根の

けぶりはたゝぬひまやありなむ

此歌も夢を三島のこゝろにや侍らん。とかく

まざらはして蒲原の里に着。まだ日高けれ共。

けふは風のさわぎもくるし。行衛もおなじ旅

のやどりならんかしとて。此里にとゞまりぬ。

戌の時斗に知る人尋來りて語て。其夜も更ぬ。

あくれば。

廿六日。天快晴。風靜なり。きのふの空に似ず。

蒲原を立。由井の鹽屋はるくくの渚を過て。清

見ヶ關に至りぬ。寺に登りて見れば。後は山高

聳。岩松無心といへども嵐に吟。石ばしる瀧の

音に調を合たるは廣長舌におなじ。前には海

上まなくとして。霧こもれる松原は。帶のご

とくにて波上にうかむ。つりの小船は浪間に見へかくれ。かの明石の浦のしまぐれ行といえる事を思ひ出て。詞にのべむとするにものいわれず。書は言葉を盡さず。詞は心を盡さずといへり。寔これならんかしとて。あきれて時もうつりぬ。

東路のいづこはあれど清見がた

浪間にうかぶ三保の松ばら

いつまで爰にあるべきぞ。日もはやかたふくと言。此せきは心なき人の爲にこそ扉結けんと語て。やうく寺を下りて江尻の宿に着。此國の預り人我したしければ來て。此里にてまうけなどして。はるかに程經てこの里を出て。うは原吉田の里を越て府中に着。昔住なれたる府なれば。懷敷おぼえて。我ありし宿を立寄見るに。門前草深く。見しにもあらず。

住なれしやどは葎に閉られて

秋風かよふ庭の蓬生

それより河原に出る。木枯の松詠めやりて。

今更に猶うらめしきたび衣

きてはうき身を木枯の松

ゆきく／＼てまり子の里にかゝる。駒の口引たる男。沓と言ものをかわんといふ。重の立出て價を高く言。などたかくいふぞと咎れば。内より女房のこゑして。爰はまりこの里にて。くつのねのたかき也と言。口引の男是を心得ねばいらへせず。よしありて覺ければ。爰にてかわずとも有なむ。あすかいとくく。さきにもありく／＼と。戯て行過てとへば。しかく／＼の人の家居たる成とかたる。さもあらんかし。そこを行過てうつ山の山に至りぬ。此里を見れば。白き餅の丸雪のごとく成を器に入て。是めせと云。とへばとふ團子連此里の名物なりと云。扱はもろこしより渡りたる餅にやあむなるとい

ふ。さにはあらず。十宛杓によりてとを團子と
かたる。さらばすくはせよといへば。あるじの
女房手づからいひかひとりて。心のまゝにす
くふ。是に慰て暮にけれ共。うつ山にかゝ
る。元よりつた楓葉しげりてとある所なれば。
いとくらふ道も細きに。うつゝともわきまへ
侍らず。

さらでだに夢の浮世の旅の道

うつゝともなさうつ山越

行衛は岡部の里に着。一宿。其夜は岡部の松風に
ゆめをおどろかし。明れば。

廿七日。天晴。曉月と共に岡部を出て。藤枝。瀬
戸。十島。島田を過て大井川の邊に着ぬ。住な
れたる都の大井川思ひ出て。

名にしおはゞいざ事とわん大井川

やまの紅葉は有やなしやと

河の面をみれば。水はやう淵瀬の數々をみる

に。ゆきわづらひて。

越わぶるあらしの淵瀬大井川

浪かけ衣ほしぞかねぬる

からふじて川を渡りて。金屋の里に着て。暫休
息して衣をほすく。さよの中山にかゝる。と
したけてまたこゆべしの歌。おもひ出てあわ
れなり。過にし年月。此山を越るたびく。哀
なりけりと詠てぞ越し。今また越るもしくな
りと。こし方行先おもひ續て。

思ひきや過にし年も幾度か

小夜の中山またこへんとは

漸山をこへて日坂の里に着。それより掛川の
宿にかゝる。昔年見しあるじ立出てしばしと
止る。

しばしととむれば腰を掛川の

やどのすのこに尻はひへけり

とて土器取揚て立出ぬ。袋井の里を過。見附の

國府え着ぬ。里人に逢て。此所をなにによりてかく云と問ば。富士山を初めて見付けるによりてと語る。扱は是よりも見へ侍るか。ふしぎさよといへば。此男空目をつかひて。いまも見へ侍る事もや候わん。あの白雲のうちなりといふ。

白雲のたへまゝをそれかとて

終にふじをば見付たり鳥

宿に入。此所に一宿。知る人尋來て。酒のませ物をくわせなどして。取集たる物語に。長夜もとりくにしきる。臥程もなく明れば。

廿八日。朝天晴。あたり近き濱松の城主知人なれば使おこせたり。見付出て中和泉を過。天龍の舟渡り經て濱松にかゝる。城守また使を出す。あないせさせて城に入。はるかにありて。午の時斗に細雨降出ぬ。けふは止るべきよし懇に云。され共今夜はいま切の邊迄とおもふ

とて立出ぬ。城主名殘惜て。遙くおくりて別れぬ。細雨なれば風さへ靜成。誠に名にしあふ濱松ならびたり。汀によりくる浪の音も松の響も聞に妙也。

浪の音に濱松風の吹あわせ

折から琴のねをやしらぶる

細雨なれば濕る程もなく。荒井の渡りに着。俄に風烈なりて浪の音高し。雨も頻也。

山風のイに秋の時雨を吹來ては

浪もあらゐわたし舟哉イのわた渡かな

袖もほしあへず舟より揚り。此所に一宿。秉燭程に京より文持來。故郷の事ども聞に夜も更ぬ。雨風やまず。

廿九日。曉天晴。風はまだ。あらゐの里を出て夜深し。白須賀の里を通る。

よをこむる道の便の竹の杖
行衛をとふに白須賀の里

夜もほの／＼とあくるに。汐見坂を登り。はる／＼谷行細き川有。問ば是より三河國といふ。そこを行て里有。二タ川といふ。

國は三河里は二タ川あわすれば

いつかは登りつかんふるさと

是より輿に乗て一睡眠。夢覺て問ば。はや吉田の里にも着ぬと云。夢のうちにはる／＼の道を來ぬる事よとおもふて。

ゆめとてもよしや吉田の里ならん

さめてうつゝもうき旅の道

此所の城主殊に我したしき人なれば。立寄て對面せん事をいゝやる。城主例ならぬに寄て京へと云程に。そこを過て橋渡りて。小さか井と云所に至る。友とする人の中に。攝泉堺の津を知る人有。あふ坂の關より西の名津なり。此所も堺といふ名は同じけれども。所がらは似ず。是は實に小さかい也と戯ければ。里人さゝ

て此里の端に小坂有によりて小坂井なりと語る。そこを行過て五位の里に至る。東地に里の名多けれども。かく位の高き里はなしと云ば。またある人云。鳥にも似たる里の名哉と。色々におかしき事共。しも人の云を聞。赤坂の里に着。續の里を長澤と云。

空はれて日は赤坂の里はなれ

たびの行衛の道の長澤

ゆき／＼て二村山に至りぬ。此山の中に寺第法藏寺といふ。立寄一見。

三河なる二村山をはこにして

中へ入たる法藏寺かな

此山を見るに。青葉にまじる紅葉の嵐にさそわれて。さながら錦をたつがごとし。

二村の山の秋風はげしさに

紅葉の錦きてもこそ見れ

夫より藤川と云所に着。一宿。明れば。

三十日。天快晴。あたり近き岡崎の城主知人にて消息有。其書に。はるかに音づれを聞ず。此頃もやと侍りしに。藤河に着ぬときくより。對面せん事を悦と。懇に云おこせたり。返事に。

今朝は猶いそぎ出ぬる草枕

我岡さきに人のまつやと

やがてと書て使は返しぬ。日出程に岡崎に着ぬ。城主迎とて出る。ともなひて城に入。暫物語して巳ノ時斗に城を出ル。はし渡りて矢はぎの宿に入。城主名殘おしみて。此宿迄おくりて来る。たがひに馬を止て。

武士の矢はぎが宿に入よりも

猶たのみある人こゝろかな

城守かへし。

武士の矢はぎが宿に入弓も

おしてかへればかひやなからん

とて城主も歸りぬ。立わかれて八ッはしと云所に至りぬ。杜若の名所なれば。おほくあるらんと思ひて見れどもなし。

八ッ橋にはるくゝと來て三河なる

花には言を杜若かな

と云ければ。ともなふ人々限りなく笑がりて。是に興じて池鯉鮒の里に着。ゆきくゝて川のありけるをとへば。三河の國と尾張の國との境河と云。はや尾張の國にも入ぬるよと云。けふは九月晦日なれば。

東かた道をば行もつくさねど

爍はけふこそ終なりけれ

と口すさびて。いも川。阿野。あり町宿をも過て。鳴海の里に着。ともなふ人の中に。

年毎に登りては又くだれども

なにと鳴海のはてはしられず

夫より笠寺山ざきの里を越。あつたのみやに

着。一宿。

神無月一日。天遠晴風靜也。人々宮へ參るべしといふ。

里の名もこゝは熱田の宮なれば

けふより冬の神無月かな

とて神前江は參らず。此國の守の御もとへさして言べき事侍るによりて。今日はとゞまりぬ。國守の御許より殊に懇にいたわり給て。御舟など給わりて。暮かゝる程にあつたを出て。はるゝの海路を経て。伊勢の國桑名の里につく。船より上りて。

舟人のこがれて伊勢につく里を

桑名ときけば旅はくるしき

とて夜もあくる程に此里を出る。

二日。天晴。風すさまじく。巳の時斗に風も靜る。四ヶ市場と云所に着。此里に知る人有。立寄て午の時斗に出ぬ。濱松の里を過て。ひなが

の里にかゝる。

里人は日ながの宿とおしウイがれど

おりしも冬の日こそみじかさ

とて駒を早めて程なく杖つき野にかゝる。歩行人のくるしきにやかくいふ。

かち人のあづまの旅の草臥に

杖つき野とや人のいふらん

漸々此野を過て。石薬師と云所に着。つゞきの里を庄野といふ。此所を通るに。下モ人のかたる。歌とは何事を言ぞとゝへば。その中に歌知る人や有けん。我おもふ事を三十一字にていふとおしへければ。さらば歌よむとて。

ひだるさに行事かたき石薬師

なにと庄野の焼めしをくふ

とて。其所の名物なれば。手毎に是を求めてくふ。下人の歌にはよしやあしや。なをゆきゝて龜山と言所に至りぬ。山のかたを見れば。時

雨の降やうに見へけり。

名にしあふ都のにしの龜山の

やまにもけふや時雨ふるらし

程なく關の地藏に着。此關のならいとて。顔白
拵誠地藏がほしたる女共の。錫杖にはあらで。
杓子と云ものを手毎に打ふつて。旅人とまり
給へく。つかれたすけんく。日暮ぬ。是より
先の里はなし。通すまじとこへくにいふ。
梓弓はるく來ぬる旅人を

こゝにて關の地藏がほする

我には罪科もなし。頼まじ。教外別でんかし。
南無阿彌の鹽辛。はらもふくるゝ程喰たれば。
杓子にてすくわずともと。聲もはやりかにい
ひて。なを馬をはやめて。坂下里に着。一宿。

三日。天晴。風靜なり。此坂の下は四方に山を
戴。溪ふかく水の流目なれぬ様の所。山の紅葉
はさながらかくれなぬをかざしたる心地し

て行もやらす。

色くの紅葉をかざす坂の下を

ふりすてがたき鈴鹿山かな

漸坂をよぢて。はるくの山路をしのぎて。土
山を過。水口の里にかゝる。過し三月の初め通
りし事おもひ出て。左右の田面を見やりて。

みな口を苗代に見し近江路を

かへればしものおくて田となる

夫より和泉川渡りて。石部の里過る程に。京よ
りせきむかへとて人々來る。語て行々鏡山を
見れば。時雨の雲にかくれたり。

心ありて時雨にくもる鏡山

やつれぬる身の影を見せじと

かくいふと雲はれて曇りなし。

旅衣やぶるゝかげを見られじと

かさ着て腰も鏡山かな

ぬきあしになりて急ぐ。草津の里を過て。矢橋

の渡りに着。あたりの人々來りて舟に乗。折節
追風吹。大ひえを詠て。

追風に舟は矢ばせの渡なれど

やぶれ衣に身はひへの山

と戯てうちかたらいこがれ行。唐崎の松なが
ら山ながめやりて。

唐崎の松ときくより歸り來て

昔ながらの山をこそ見れ

程なくうち出の濱に着。此所のあづかり人殊
に我したしき人なれば。常の人より懇にいた
わる程に。はや故郷にもさぬるこゝちし侍る。
秋の夜のちよを一夜の心にて。此夜は寢もせ
てあかす。

四日。天晴陰。されども里はうち出なれば。逢
坂の關にかゝる。せき山の紅葉一きわ勝たり。
少時ながめいたり。

花ざかりうち出の里に立かへり

けふあふ坂の紅葉をぞ見る

關こゆるに人々多くならびいたり。みればみ
し人なり。夫かかれかなどいひて。かち人の渡
るにぬれぬ花のしら浪とながめてぞ越し。今
は又かゑりあふ坂の關ふみならずとうちかた
らひ行程に。追分を過て山科の里にかゝる。ま
た京なる人來る。珍らしさにそこなる庵に立
寄て。しかく物語して。夫よりひの岡のさか
のぼる。住なれたる都なれども。はるくの田
舍わたらひに。今歸りて見れば。めなれぬ心地
して侍る。東山のもみぢ殊更なり。是まで旅の
向後のつれづれなるまゝに。なにならぬおか
しきことども筆にまかせ侍る。今は、やおほ
やけ事などさしつどひて。きのふのうきも戀
しき程におぼえて都に入ぬ。

〔右遠江守政一紀行舊本闕今以黒川眞道氏藏本補之以一
本加校合畢〕

續群書類從卷第五百二十六

總檢校保己一集

男源忠實校

紀行部三

丙辰紀行

武藏野

名におふむさし野は。月の入べき月(山嶽)もなしといへば。まことにそくばくの蒼莽をすぎて又蒼莽なり。此國の稻毛。葛西。越谷。岩筑。河越。鴻巣。忍なども。皆むさし野の内にて侍る。いづれも御獵場なれば。毎年爰にならせ給ふ。

國野同名稱武藏。尋常旅客宿春糧。雨餘草色連天地。郊外雲烟沒邑莊。富士雪遙花稍小。筑波陰茂薺猶長。殘星點々夜叢火。微月纖々照射光。共往薺蕘多幾許。齊飛鳬鴈百千行。

豫遊兼習驅馳範。養放皆知鷹鶻方。雲夢青丘俱芥蒂。子虛烏有本荒唐。班鳩入網風前散。白鵲糝黏泥上霜。暴虎何曾逢太叔。非熊庶幾載師望。藪蔬任見宜應採。耕穡於時亦不妨。仁愛只今覃物處。豈論五柞與長楊。幸逢四海爲家日。處々風烟似故鄉。

春風にまたおひそふる若草の色や霞にまがふむさしの

淺草

爰に寺あり。たふとき觀音ましますとて。人の多く參詣すと申ければ。大士の日人にさそは

れ。余もまかりける。げにも人のいふやうに。男女の群集する事。京の清水よりもおほく見へける。むかし此所牛鬼の出てはしりありきし事を。心に不圖おもひ出て。馬こそ大士の化現なれ。何とて牛は出けるぞとおかしかりき。爰の觀音院しる人なりければ。しばし立よりてやがてかへりぬ。

法威能救衆生憂。小白華山彼岸舟。若把馬郎令渡水。應同海底有泥牛。

神田

此社は平親王が屍骸をうづみし所にて。其靈をまつるとかたりつたへ侍る。

昔聞鐵額是蚩尤。何事將門廻逆謀。草木山川無寸土。一堆埋骨幾春秋。

愛宕

いづれの時にか。京なる愛宕を遠江國なるこ坂に勧請し。それより駿河國うつのにうつ

し。又武藏國にうつして侍りし。是は勝軍地藏の法おこなはるとて。とに武士の崇敬する故に。始はわづかなるほこらなりしを。漸つくりひろげて。今は大厦になりぬ。

京洛移迁坐武州。築壇構閣陟山丘。誰知幣帛神封物。却作沙門活命謀。

増上寺

髣髴給孤園。飛廉倒大門。遠公名已久。善導法猶存。悲願雖扶女。哀鳴屢繫猿。始知蓮社內。更有國師尊。余入寺時。庭前有猿。

隅田河

都鳥は角田河の物なれば。好色の人とりて家に飼て侍るを見るに。まとはしとあしとあかき鳴の大きなる。この鳥蛤を好みてよく食けるなり。

漾々溶々一葉身。河邊秋景只懷春。自從在五詠歌後。流水飛禽愁殺人。

金澤

金澤の絶景は東州の佳境にて。事好むもの丹青の手をかりて屏風にうつし。市杵島天橋立にも。いかでかおとるべきなどもてなしあへり。北條氏天下の權をとる時に文庫を建て。金澤文庫といへる四字を。儒書には黒印を。佛經には朱印をつきてあさめ置ける。越後守平貞顯この所にて。清原教隆に群書治要を讀せける。余が見侍りしも。文選。清原師光が左傳。教隆が群書治要。齊民要術。律令義解。本朝文粹。續本朝文粹。續日本紀などのたぐひ。其外人家に所々ありけるも。一部と調たるはまれなり。一切經も取ほごして。纔残りて今に金澤にあり。古記典籍の厄に逢る事。いにしへより今にいたるまで。いくたびといふ事をしらず。蘇我氏が亂は我朝の一秦とも申べき。宅嗣が芸亭は名をだにもさかず。宇治の寶藏蓮華

王院の寶藏なども跡さへぞなき。誠に祝融にうばはれ。陽侯におぼるゝのみならず。兵燹にほろび馬蹄にふみ散さる。心あらん人むかしをおもひ出ざらんや。されば人のかたりしは。先聖先師九哲の影。六經の注疏。いまに足利にあり。小野篁が東國へまかりける時に。足利に讀書の堂を作りしが。今に残りてあるぞ是なるとなん。余もまかりて見むとのみあらましにて年月をすぐしぬ。

懷古淚痕羈旅情。腐儒早晚起蒼生。人亡書泯幾回歲。境致空留金澤名。

鎌倉

鎌倉にいたりて。あなたこなた見ありき侍りしに。賴朝の墓とて人のをしへければ。鴨の長明が草も木もなびさし秋の霜さへてといへる事を思ひ出て。

滿目鎌倉城郭亡。雲烟漠々樹蒼々。逍遙昔聽

遊龜谷。報賽今無詣鶴岡。草偃匣中三尺水。
苔深墓上五更霜。君公不識包桑計。千載英雄
淚濕裳。

江島

藤澤より馬にまたがり。海濱ちかき所にて。漁
父の舟をかり。江島に渡りて見れば。あなたの
海の岸の本に大なる岩窟あり。たい松をとも
してふかく入ほどに。百歩あまりにてやみぬ。
むかし龍神の棲ける所となんいひ傳る。この
島の辨才天女は世にかくれなき事なり。

借問島中人。不知此孰神。蛻々遺蹤在。君其
問水濱。

江島從來神女居。風鬟霧鬢駕雲輿。遊人若有
登仙意。水宿應傳柳毅書。

神世いかに今むつましみわたつ海の八重の
鹽路に言傳やらん

大磯

此所に曾我十郎が妾虎が舊跡ありとて。一の
石を人々あつまりみて。またげころばしなど
して。むかしより虎石と名づけ今にあり。

十郎慷慨愛於菟。血氣武人犀甲軀。妾婦當時
誓星否。隕成此石似望夫。

箱根

永仁四年に此山の鐘を鑄て銘をさざみし其序
に。當山蓋山嶽之神秀者也。孝謙皇帝御宇。天
平寶字年中。萬卷上人草創擇地。三所權現松塙
並菟といへり。中頃炎上せしを。北條氏再興し
て十二州の鎮守とす。山上に湖水あり。神靈の
すむ所なりとて。いにしへより人のつゝしみ
おそれて。今に入事も侍らず。舟をうかべてめ
ぐりありく事はありとなん。彼別當のかたり
しは。仙人四代この山に住て。駒形の深秘をあ
らはし。役小角も爰に來りて其跡をのこし。熊
野權現と此神と一体にてまします。くはしき

事は縁起にありと申さ。

長坂脩途不可攀。惟天設險甲東關。回頭木末待吾僕。信足湖邊濯容顏。鯨背浪高伊豆島。馬蹄雲起宮根山。相逢盡道歸耕事。歲々年々幾往還。

雪か花かあけぼのかすむ宮根路を越れば峯のあとのしら雲

走湯山

走湯山は伊豆の山の事にて侍る。爰にまします神をば走湯權現とぞ申ける。昔鎌倉右大將伊豆箱根を信じ。常に蘋蘩の禮をいたし給ふ。二所參詣といへるは是なり。此ところに出湯あり。石ばしる瀑のごとし。走湯の名も溫泉によりての故にや。又一里斗西に溫泉あり。その所を熱海と名づく。人のよろづの病あるもの。浴すればたゞ驗あり。先年余も人にさそはれて湯に入侍りし。其湧所をみるに。潮の進退に

よりて。岩の間より烟むしあがりて。人の近づくべくもあらぬほどあつさに。熱湯わき出て流れはしるを。笕をかけて家々にとり。槽に湛へて人々に入せけり。

絶境靈蹤亘古今。尋名吾輩亦登臨。走湯權現救人處。便是驪山神女心。

三嶋

伊豆の三嶋はむかし伊豫の國よりうつして。大山祇神といわひまつる。いづぞや相國の御前にて。三嶋と富士とは父子の神なりと。世久しくいひ傳たりと沙汰ありければ。さては富士の大神をば木花開耶姫と定申さば。日本紀のころにもかなひ申べきなり。竹取物語とやらんにいへるかぐや姫は。後の代の事にてや侍らん。凡三嶋といへるは。豫州攝津この國と三所にあらはれますすよし。神名帳にありと覺へ侍る。

祭儀如在幾千年。青幣相連引白綿。天下神明垂跡處。流行似得地中泉。

蛭小島

平治の亂に兵衛佐源賴朝この所に流されて。廿余年の間仇を報ひ事をはかりしに。治承壽永の頃兵をおこし。平氏を攻滅し。安徳帝福原を落させ給ひて。西國にてうせ給ひし事を思出て。

包羞忍恥左迁身。養虎遣患只此人。吹起多年東國燼。福原城闕作烟塵。

大島

術ありとてたのむべからず。役優婆塞が鬼神をつかひしも。廣足が讒によりて流され。力ありとてたのむべからず。鎮西の八郎が大弓をひきしも。信西がはかりごとにてうつさる。されば此島は伊豆の沖にありて大島と名づけ。いにしへより風浪のたよりまれなれば。迁客

投荒の所とす。近頃 仙洞脱屣ましまさざりし時。宮女の和姦の罪によりて幽閉し。死を給ふべきなど。天氣しきりにありしを。大相國寛仁の心まし／＼しかば申宥られて。あまたの宮女をながしつかはれし新島も此澳にあり。松浦佐用姫か玉島山にひれふり。御息所の淡路の武島に住給ひしも。かくやらんと人々いひあへり。

迢々南海濱。舉目不知津。(俗語)小角來軀鬼。八郎謫化神。土人畜獸類。風浴混魚鱗。寄語一漁叟。天涯奈汝身。

富士沼

相國の御前にて平家物語の事のありしに。平氏鳥の羽音に驚てにげさりしは富士沼の事にて。今の善徳寺は其所なり。齋藤別當が東國に精兵の多き事をかたりしによりて。平家の兵ども臆病神のつきて。かくのごとくありける

なり。御前に侍りける某を御覽して。辯士をし
て敵の美を談しむる事なかれと。兵法にいへ
るは是なりと仰せける事も。只今の様に玉音
耳にとゞまりて覺へ侍る。

關國中分源與平。東方氣勢盡豪英。何須禱入
公山上。竿是旌旗木是兵。

富士山

富士山の名ひとり我朝に鳴のみなのみ。遠く
中華まできこゆ。赤人が歌は萬葉にのせ。都良
香が記は文粹に見へたり。徐福藥をたづねて
この山にとゞまり。是を蓬萊山と名づくる事
は。義楚六帖にあらはし。六月雪花翻素霧。何
所深林覓白鵬といへるは。宋濂が曲にあらず
や。加之羽客釋流の此山に跡を残す事は。役處
士がはじめて攀躋しより以來。空海圓珍岩石
をさざみて佛軀を彫もの山上におほかり。白
衣天女の形をあらはし。淺間大神の跡を垂ま

します。誠に我朝無双の名山なり。近代叢林の
詩僧この山を題せし中に。富山千仞雪峻嶒。幾
度思登病未能。送汝錫飛三伏裏。歸來分我一壺
氷といへるは信義堂なり。大地撮來無寸土。當
空還見此山成。海濶纔浸半邊影。多少漁舟載雪
行といへるは乾峯なり。絶頂雪殘春夏秋。暮烟
一抹畫眉修。吾疑上有望夫石。不耐閑愁獨白頭
といへるは岩惟肖なり。六月雲間積雪新。東遊
未踏玉嶙峋。畫師今有移山力。一洗京鹿困暑人
いふへるは惺瑞岩也。富士峯高宇宙間。崔嵬豈
獨冠東關。唯應白日青天好。雪裡看山不識山と
いへるは彥希世なり。富士耳聞身未遊。畫圖相
對興悠々。東關千里吟鞍上。晴雪赴人三五州と
いへるは沅南江なり。五須彌外有須彌。呼作士
峯吁是誰。六月雪飛寒徹骨。擘開芥子欲藏之
いへるは澤天隱なり。莫言北闕隔東關。富士朝々
如對顔。四海一家皆帝力。千秋白雪御前山とい

へるは三横川なり。士峯秀出海之東。名在景濂
詩句中。若把白鷗論白雪。扶桑六十一雕籠とい

へるは九萬里なり。天台四萬八千丈。若在吾邦
立下風といへるは瑾雪嶺なり。工拙は具眼の
人の知事なれば。書ならべてをき侍るなり。其
外騷人墨客の詠しもらせるはあるまじきに
や。此比人の作れるとて。青天忽見素羅笠。檐
中十五州といふ句を聞はんべるぞめづらしき
にや。我輩の今更口をひらかむ事は。人の涎を
舐て事あたらしきやうなれど。さりとていは
ざらんも。懶墮のちそれあれば。聊申つゞけ侍
る。かの不與浮雲齊といへるは此たかきにや。
嵌空大始雪とあるは此雪にや。衆山之崩施な
るをけるは。此山にのぼりての事にや。天下を
すこしきに歩する人もあるべきにや。蓮花は
早々崆峒は薄といへるも。此山に對しての事
にや。

一山高出衆峯巔。炎裡雪氷雲上烟。大古若同
仁者樂。蓬萊何必覓神仙。

富士川

我國に名を得たる大河はあまたあれど。とに
富士川は海道第一の急流なり。舟に乗て渡る
に。わたし守ちからを出して竿をさし。櫓をお
しいだすとき。岸より見るものはあはやとあ
やうくおもひ。船中の人は目まひ魂の消る心
地ぞしける。

往來停馬此踟躕。天下滔滔豈獨吾。河畔爲通
名利路。涪陵慚愧一樵夫。

薩埵山

尊氏直義中あしくなりて。此所にて合戦あり
し事をおもひ出て。

弟兄爭國亂如麻。萬馬奔馳薩埵涯。一樹東西
枝指後。海山風雨棣棠花。

奥津

奥津は多胡の浦の事にて侍るべし。湯井より薩埵を過。爰にいたるまでに。海濱鹵斥の地にて。小民賤女の鹽焼しわざを見るに。老杜が汲井歲櫓々。出車日連々といへるは。げにさる事にや。盤中の飡の皆辛苦たる事もおもひあはせられて。いよ／＼ありがたくぞ覺へはんべ

る。
蚩々海畔氓。鹵裡若煎烹。昔汲孔明井。今調（調神）傳說美。

清見關

延暦の比。奥州の逆賊高丸駿河國までせめ入。この關に陣をとりしを。坂上將軍打破りて。高丸奥へ逃退し事。久ければ語りもつたへ侍らず。此所に寺あり。京なる惠日山の爾長老の弟子開聖この寺をひらき。清見寺となづけ。又は巨鰲ともいへり。近頃妙心寺に屬するやうに聞え侍る。

經歷巨鰲山。入門心自閑。禪徒今住寺。寇賊昔攻關。三保窓櫺裏。大洋机案間。起鞭征馬去。斜日照人顏。

三保

此所にまします明神は。神籍にのする所の美穗神社是なり。羽衣の松とて。むかし天より乙女のくだりて。此松原に羽衣をわすれしを。漁父のひろひ得たる事。いづれの文に有やらんと人のたづねしに。かの能因法師が有度濱に。天の羽衣むかしきてとよめるはこれなるべし。三保は駿河國有度郡にあればなり。

綽約冰肌神女容。聞名自古問遺蹤。漁人洗耳是何曲。仙袂飄々風入松。

久能山

この山の狀を見るに。海岸孤絶の所にて。觀音老人堅坐の地なれば補陀洛山とも申なり。一里あまり東に寺あり。久能寺となづく。聖一國

師藁科の産にて。この寺の堯弁法師を師として台教を學びしが。入宋後達磨宗をつたへて。

東福寺の第一祖たり。世の人猶も久能の爾長老とて稱しける。宋より渡しける瑪瑙の羯鼓を此寺へ送られける。又源豫州も薄墨といへる横笛を寄進せられしが。いづれも池魚の殃にうせけるとなん。寺僧の書をけるとて。勸進帳のありけるを見侍りしに。あら／＼かくなむありける。其外推古天皇の御時草創せしなどあれど。大やう疑しければ。よく心をとめずわすれ侍ぬ。

遠尋幽寺到斜陽。過客居僧談兩忘。身是此山清淨色。何求無垢在南方。

久能宮

寂然長隱久能宮。明德惟馨神國風。億兆小臣望不及。帝鄉路遠白雲中。

何圖忽輟國中春。哀慕憑誰寫御容。臣妾叩頭

將伏拜。雲車高駕鼎湖龍。

駿河文庫

餘烈遠遺賢聖風。能令術業有專攻。誰言馬上治天下。只聽爐前讀雪中。寒水月明千歲意。日星道行六經功。請君更勿問他事。人是儒門五尺童。

狐崎

源賴家の梶原平三景時を誅せんとせられければ。正治二年正月。梶原相模國一宮を逃出て。駿河國清見關にいたる。折節的場よりかへりける甲乙人行あひてあやしみおもひ。矢を射かけ追ければ。梶原狐崎にて返し合せ。蘆原小次郎。飯田五郎。吉香小次郎とあひ戦て。景茂うたれぬ。國內の兵どもあつまり責ければ。景國。景宗。景則。景連も死ぬ。景時。景季。景高はうしろの山にてうたれしを。山中より其首をさがし出して。道路に梟しける。梶原は弁口あ

りとして武勝の近習なりしが。廷尉の事を常にあしく申せし事。人のあまねくいふ事なり。

源君兄弟本連枝。何事一朝恩愛衰。猶有讒人遺誠在。不投豺虎死狐崎。

淺間

和歌に志豆機山とよめるは是なりと聞へし。醍醐帝の時。富士本宮を爰に迂して。新宮と申よしかたり侍る。

乘興時々詣淺間。黄昏唯見一僧還。風光應是靈神愛。前有清流後有山。

臨濟寺

蘭若隔林隣府闕。遊人眼裡對孱顏。立談不及世間事。亦是浮生半日閑。

建穗寺

此寺はむかし役行者の草創せしやうにいひつたへなり。中比より密家の者移りゐて。今にいたるまであり。

此地元來法界宮。水雲心性似虛空。吟眸所々不知暮。石徑霜深古寺楓。

八幡

此神の垂跡國々にあり。とにいちじるさは。宇佐。筥崎。男山。譽田。鶴岡。その外もあまたおほし。此駿河國に勸請しけるは。いつの事にか侍るやらん。此秋河内の譽田の縁起を社僧江戸へ持下しを見侍る。神功皇后の縁起二卷。譽田の宗廟の縁起三卷。永享年中普廣院寄進せらる。五卷ともに土佐が繪にて。宗廟の三卷は普廣院親筆に事書をうつされけり。唯今爰の八幡をみて。かの縁起の事を思ひいだし聊しるし侍る。

無方變化本非恒。五彩靈鳩金色鷹。神不惑人々却惑。唯嫌巫祝有依憑。

久佐奈伎

延喜式に駿河國草薙神社といへるは是なり。

むかし日本武尊吾婦國に下給ひし時。この所にて夷賊おこり。原野に火を放て。尊を焼殺さんとしければ。尊はさ給へる劔をぬき。遠かたやしげさがもとをやい鎌のと。鎌をもちて打

はらふ事のごとく唱へ祓ひて。劔をふりたまひければ。あたりの草とくくなぎはらはれて。夷賊のかたへ烟りなびきて。尊は恙もましまさず。さてこそ初は天のむら雲の劔と申せしを。草薙の劔とは名づけけれ。尊これより奥へ下りて。東夷をたいらげのぼり給ふ時に。かの劔を熱田の神宮へおさめ給ふ。我國歴代傳寶の三種の神器の其一なり。其尊を焼むしける所をば焼津と名づけ。草をはらひたまふ所をば草薙と名づけて。何も駿河國にあり。

欲爲黎民解倒懸。東征到處幾山川。腰間一自虵龍動。雲氣吹消蔓草烟。

宇都山

在原業平この山を過し時。蔦楓いとしげりて道もなし。修行者にあひて。歌をよみて言傳ける事。人のあまねくしれる事なり。俗に内屋ともかけり。

山中回首費吟呻。遺愛蔦楓秋又春。今古冥々名與境。業平訶後更無人。

大井川

大堰河は駿河と遠江との境なり。明日香川ならねど。霖雨ふれば淵瀬かはる事たび／＼なれば。東の山の岸を流れて。島田の驛海原の中にある事もあり。西のかたに流れて。金谷の山にそふ事もあり。一すぢの大河となりて大木沙石をながす事もあり。あまたの枝流となりて。一里ばかりが間にわかる事もあり。さればいにしへより徒杠輿梁もなりがたきゆへに。往來の人馬。川の瀬をしらざれば金谷に待もあり。島田にとゞまるもあり。わたりかゝりて

ふぼるゝ者もあり。辛ふじてむかひの岸にいたるもあり。島田の民をのが家ゐたゝよひ流るれども。旅客の囊をむさぼるゆへに洪水をよるこぶ。賣炭翁が單衣にして年の寒さを待たことし。河水の家をながし田をそこなふゆへに。防鴨河使。防葛野河使ををかれしむかしの事も。唯今おもひ出ざらんや。

尋常揭厲必過腰。叱馬呼奴魂欲銷。來往就中何處苦。無舟無筏復無橋。

小夜中山

圓位法師がいのちなりけり佐夜の中山と詠しは。爰にての事なり。

坂道升降是早天。夢殘馬上不成眠。此山無限西行壽。能使詠歌千古傳。

西坂

西坂を新坂とも書り。此所の民わらび餅をうる。往還のもの飢を救ゆへに。いにしへより新

坂のわらび餅とて。其名あるものなり。或は葛の粉をまじへて蒸餅とし。豆の粉に鹽を加へて旅人にすゝむ。人その蕨餅なりとしりて。其葛餅といふ事をしらず。諸越に茯神を買て老芋を得たる人もありけるとや。

婆叫焦兮婦喚烘。停人鄙食在途中。憑誰救得西山餓。馬首吹來餅餌風。

中泉

見付濱松の間に中泉といへる所は。鳬鴈の多き所にて。遊獵によろしき地なれば。大將國としどに放鷹せさせ給ひてありしが。余も御供に侍りしに。芒碭雲一去。鴈驚空相呼と。此たび打誦すべしとは思べしやは。駿遠二州いまは中將殿のしらせ給ふ國なれば。封建のむかしも今にあらざらめかも。

春蒐冬狩跡猶遺。霜露凄々野草衰。鴻鴈自來還自去。更無人放決雲兒。

池田

美濃の青墓。遠江の池田。駿河の手越。いづれも長者遊君ありて。むかしは往還の武士輕薄の少年。鞍馬を門につなぎ。千金わらひを買ところなれば。彼江口の津にもいかておとり侍らん。矢島大臣のめされし湯谷も。此池田の宿のむすめにてはんべる事世にかくれなし。今は此宿天龍の河の東のはたに形ばかり残りて。わづかなる小民どもわたりを守りて居侍りける。大天龍小天龍とて二の河ありけるが。新田左中將の尊氏と戦負てのぼられける時。うき橋の桁のなかりけるを飛越られけるも爰のことなり。江都が輕捷の有けるにや。濱松のそばなる細流を小天龍の事なりと今ぞいふめる。

池田驛長本倡家。處子嬋娟天下誇。腰似楚王宮裏柳。面如巫女廟前花。古今不盡洪河水。

淵瀬相移兩岸沙。治亂興亡非我事。征鞍暫憩且嘗茶。

今切

遠州荒井の濱より奥の山五里ばかり。海となりて大舟も出入る。むかしは山につぎたる陸地なりしが。中比山よりほらの貝おびたくしくぬけ出て海へ入ける。其跡かくのごとく海となりて。今切と名づくるよし。古老いひつたへたり。我國は伊弉諾伊弉冊のうみ給ひ。大己貴少彥名のつくられけりといへば。其むかしいかゞ侍りけむ。もろこしの華山を巨靈が壁開して水をやりける事も侍るにや。

一葉扁舟寄旅身。潮波通信遠州濱。海山何借巨靈手。我國元來造化神。

潮見坂

白須賀より西のかたへのぼる一ツの坂あり。大洋眼前にあれば潮見坂となづく。余嘗詩を

作りて云。

波浪雲天俱一色。東南溟海更無山。聖門有術人何敢。潮見坂頭停馬看。

律にかゝらはず快活のやうなれども。山看の韻。世俗の思ところ。通韻はひろきがゆへにやすく。切韻はせばきゆへにかたしとなん。三百篇楚人の詞には協韻のみおほかり。いかにぞ聖人の刪修屈宋が文をしははずして。沉約江老のいやしきを學むとや。世間流布の韻鏡にも協通の音を專とし。洪武正韻洪武韻府にも。むかしにかへり。中比の韻をあらためたらずこゝろざしあらん人のいかでか我に同じからざらん。しかはあれど初學の律偶に拘る者は。先なやみて後にうべき事とおぼへ侍る。されば不律にあらんよりは先律をまもるべし。絶句を學むよりは先八句をつくるべし。意いたらず風高からざれば古にあらず。句いたらず

情深からざれば律にあらず。是詩學の捷徑なりと。さる人のかたりしは。まことにげにもとおぼしくて。耳にとゞまり侍る。

天地豈識幾會瀾。舒卷古人方寸端。滿月不遮潮見坂。大鵬飛盡水漫々。

參河國

しほ見坂より二河のあいだに纔なる溝あり。是なん遠江三河の境なりといふ。いつぞや菅野の眞道が史を見侍りしに。持統天皇三河國に行幸ありとするせれど。いづれの郡郷いづれの村里といふ事をしらず。眞道は光仁桓武の時なれば。世久敷してしらざるにや。事略して書もらせるにや口惜。

先王若要慰民生。定有壺漿簞食迎。遺恨翠華巡狩跡。未開行在頓宮名。

吉田

江戸より京までの間に大橋四あり。武藏の六

郷。三河の吉田。矢矯。近江の勢多なり。ひとり
矢矯のみ土橋なれば。洪水によりて絶る事も
あり。此比新に板ばしとなりけるにや。爰にし
も誰か周處が三害をやめて。留侯が一編を傳
ひや。

行々何日窮。相送數州風。馬過曉霜上。龍橫
道路中。川流無晝夜。人物有西東。一枕還郷
夢。家書久不通。

長澤

昔在轅門見玉鞍。豈圖今日淚闌干。林間應是
甘棠意。遺愛歲寒千百竿。

矢矯

矢作は岡崎の西一里ばかりにあり。建武の時。
足利氏鎌倉にありて。天子の命にたがひしか
ば。新田氏節刀使を奉て東征し。此所にて鎌倉
の軍兵と戦勝て。鷺坂まで逃るを追打て。官軍
利を得し所なり。後に箱根竹下の戦に官軍敗

績して。中書王のはしり給ひし事こそまことに
不幸ならずや。

森々白刃是昆吾。波激河邊千萬夫。恩賜旌旗
如日色。東隅雖得失桑榆。

八橋

三河國八橋は杜若の名所なる事。在中將の歌
にてかくれなし。今岡崎より池鯉鮒にいたる
道より北の方一里ばかりに。それなんむかし
の八橋なりとて。所の人をはるかに指をさして
をしへ侍る。久敷田となりて今は杜若なし。三
四年前余が作りける詩にも。古人遺跡鐵鑢歩。
只有三河杜若名となん。

六々歌中第幾仙。風流千歲慕幽玄。世間一瞬
皆陳迹。杜若爲薪澤作田。

熱田

日本武尊東よりかへり給ふ時。尾張の稻種宿
禰がむすめ宮簀媛が家に宿しましたすより。

此社の神といわひ申なり。然るに世俗の説に。熱田を蓬萊といふなれば楊貴妃を祭るといふ。されば宋大史が日東の曲にも。國に楊妃が祠ありといへり。是社のみならず。巫覡の託宣世間の傳説はおもふやうおぼつかなき事おほかる。

東征功就凱旋時。宿所曾徵宮簀姫。誰道馬嵬坡下鬼。一朝來此立靈祠。

桑名

熱田より海路七里渡りて伊勢國桑名にいたる。むかし清見原天皇吉野より潛幸ありし時。皇后も伴なひたまひて。天皇は此所より美濃國不破關に赴かせ給ひ。皇后は此地にとゞまり給ふ。天皇帝の王子と位をあらそひ。不破の關にて東西の兵相戦しに。天皇利を得させたまひて位につかり皇^みせ給ふ。天武天皇是後は天智天皇の娘。大伴王子と連枝にてまし

ます。女主にて後に持統天皇と申しゝなり。桑名におはせし頓宮。今はいづれの所なる事を。人にとへどもしれる者なし。又聖武天皇時。藤原廣繼西國にて野心をおこすと聞へければ。官軍をつかはし退治し給ふ。天皇は伊勢太神宮に參詣ましまして祈らせ給ひ。それより此桑名に渡御ありて。美濃にかゝり。近江路をへて還幸なりぬ。その間に廣繼伏誅のよし。捷書を馳て奏しける。日本紀續日本紀を見侍りし事を聊爰にしるしける。

曾聞二帝此停車。憾在吾邦未見書。今聞先蹤人不識。誰賡風土補方輿。

石藥師

四日市場より三里ばかり西に。藥師の石像ある所を石藥師と名づく。余が心に不圖おもふやう。浮圖をかさね五輪をささみ。退凡下乘をたて。佛菩薩を石にて造るは所くにおほけ

れど。碑銘墓誌、表などは一もなし。嵯峨の二

尊院に。源空沙門が行狀なりとて。苔蘚の間に文字纔に残りて侍る。誠に今の人の祖先を問に。曾高の名をだにもしらず。遠を追の心なきよりかなしき事なれ。諸州諸郡をありき見侍りしに。寺院佛閣はいかなる小民村里にもあまた侍れども。庠序學黌としては名をだにも聞ず。ましてむかしの礎もなし。延天の比までは。都には大學を建て。國郡には國學を立て。二仲の釋奠行はれしに。いつの時にかかくすたれけるぞや。足利の學校さへ。近頃まで誰にても得業の人居侍りしに。此四五十年より僧法師の住所のやうになりぬ。浮圖五輪のため名をさざまんよりは。螭首鬼跏を建よかし。蕃神黠胡の爲に堂を造らむよりは。精廬家塾をせよかしと。心あらん人の腹ふくるゝほどおもへども。いひ入べき穴をほらずや。

〔切歌〕
一地衆生承願思。溫公會比藥師尊。若磨此石作鍼去。甘草人參不足言。

庄野

石藥師の西龜山の東に庄野あり。此所の民家に火米をちいさき俵に入て。毎戸ならべてをく。其俵の大さこぶしのごとく。又は槌のごとくなるもあり。輪子のせいに包み縛へてあるを。旅人買とりて家つとにすといふ。先年余僮僕馬のあとにかけて來りしを見て。昔の伏波は薏苡を一車にのせ。伯顔は梅花を檐頭に挿みしに。今此小俵あまた取來ること。ほほゑむばかりおかしくて。彼法道仙人越智の大徳が俵米を飛せし事も思ひ出られてありしか。今又都にのぼり包苴の物とし。我をまつ小兒の歡笑を見むとのみにて行ぬ。

唐人詩句漢人書。記得燒耕火米畚。可慰孩提求口實。終朝咀嚼齒牙餘。

鈴鹿

關の地藏より鈴鹿の坂の下まであまたの河あり。八十瀬の河とは是なり。爰にまします明神は。天武天皇の行逢たまへる老人にてや侍らん。世の婦人小子の口遊める鈴鹿御前の物語とやらむはおぼつかなし。此所にあるし鬼を荻田丸が討したがへたりといふ。是もまたおぼつかなし。むかしより山賊ある所といひつたふれば。それを鬼とはいふにや。伊勢三郎も鈴鹿の山賊なりけるとなむ。

九折盤紆鈴鹿坡。行人征馬恐蹉跎。祇今四海恩風遍。八十瀬河無白波。

土山

土山といへど山はなし。鈴鹿より西の坂を下りて。二里ばかりにあり。釋詁毛傳などに。石山を土の山とよみ。土山をいしの山とよむ事をおもひて。

行李東西久旅居。風光日夜憶鄉閭。梅花繫馬土山上。知是崔嵬知是岨。

水口

去歲八月四日。大相國二條の御所を出御ありて。翌日此所に宿せ給ふ。其日より打續き雨ふりければ。三日逗留ましくけるに。夜更るまで御前に余も侍りし時。學而の篇をよめと仰ければ。跪きひらきはんべりしに。能竭其力。能致其身とある所をみづから御讀ありて。能といふ字に心をつくべきなり。なをざりにては忠孝たちがたし。親には力をつくし。君には身をいたすといつば。いづれかまされといふ評論あるべしと仰けるに。余もかの趙苞が故事を引て答へ奉りしが。只今わすれがたくて。すゞろに袂をしぼり侍る。

愛生從子親。義立自君臣。侍讀古年雨。淚痕今日人。

草津

石部より草津にいたりしに。馬につきたる奴隷共のかたりしは。近江國は本より相撲の者おほく有て。石邊。草津出合相撲をとるに。石邊かつ時もあり。草津かつ時もありといふを聞て。事のおこりを人のたづねしかば。當麻の蹶速野見宿禰より初て。那都羅良雄力をくらべ。俣野河津にいたるまで其名聞へ侍る。年中行事にも相撲の節會とて。内裏にも行はせ給ふなど。やうく物がたりし行ほどに。勢田にな。ぬ。相撲の詩を作れと人のいひければ。氣似鳥菟出野碕。力如鼈背戴方壺。龍紋絶贖今猶古。聞否少年相撲徒。

勢田

勢田は古戰場なり。承久の役には。皇輿の敗績して外に蒙塵ありし事をかなしみ。孝謙の御寓には。内相が奔らんとするに。橋絶て高島に

て亡し事をよろこぶ。是のみならず。日本紀を見れば。天智帝崩御あらむとする時。大弟は沙門とならせ給ひて吉野山に入せ給ふ。大友皇子その時は大政大臣にてありしが。天智の譲りをうけられしに。大弟吉野より潜に出て。和州伊賀いせを過。濃州不破關にて尾州の兵を召あつめ。皇子の兵と戰勝て。近江の瀬田まで責のぼり給ふ。皇子みづから此橋の邊に陣をとつて合戰ありしが。大弟の兵かつにのりて。皇子敗北して竹中に入て。伯林雉徑の跡をふめり。大弟は清見原天皇是なり。壬申の亂とは此時の事をいふなり。懷風藻は勝寶年中に編集せしが。其中に大友皇子は天智帝の長子なり。壬申の役に天命遂ずして薨ぬといへり。舍人親王は皇考王父のために文を婉て。南萱が筆をいかゞおもひけん。懷風藻は親王の時をさる事遠からざれば。其事の實を隠さるゝに

や。近頃大明に燕王が建文をころして。白帽子を戴けるも。異域同日の物語なるべし。

勝敗興亡憂更憂。千年人事落基楸。積骸爲磔血爲水。都入勢多橋下流。

比叡山

湖水の邊より比叡山を見て。いつぞや人の和韻をし侍る詩を爰にしるして。

興公昔作四明遊。能使遺文後世留。杉洞窟深蛭蟻動。竹生島泛浮萍幽。三朝烟草君王殿。一夜風波內相舟。只有舊時今不改。山雲湖影日悠悠。

一二は孫興公が天台山の賦の事を用ひ。三四は登覽の景をいひ。五六は懷古の感慨をのべ。尾句は景情を合せていふ。此詩を作りし時は。余が年二十七八にてやありけん。久しく公務の暇なくて。吟咏する事もなし。古人三日の間にも舌本こはしとこそいふに。まして余が筆

硯塵積てとしへぬれば。口中のむばら。いかてか詞林にまじはらむ。しかれども江山のたすけもあれかしとおもふ心のゆくにまかせて。紀行の詩今日までにて若干首に成ぬ。

良嶽從來守紫宸。先王立作國家鎮。雲波五色三津浦。星斗千年七社神。湖水朦朧空得月。山櫻寂寞自過春。好風景景非無意。吾亦東西南北人。

大津

大津をすぎて相坂にいたり。肩輿より清水の流れを見て。

九陌大津隈。忿々繁往來。一亭群馬聚。十里遠帆開。鮒上任公釣。鱸傳張翰盃。潺湲相坂水。烏帽掃塵埃。

元和二年十一月日

羅浮子

〔右丙辰紀行以賜蘆拾葉校合〕

高野の道の記

資慶卿

あすか河のながれてはやき月日も。又愁人のためにとどまらず。いつしか五七の日數も過ぬ。木をさざみておもかげをしたひ。つかにふして孝心をわすれずといへども。猶慈恩の報じがたき事を思ふ。今こゝにしれり。流轉三界中。恩愛不能斷。棄恩入無爲。其實報恩者と云事を。天曆の御願文を後江相公のかけるにも。去年初心只契延齡。今朝新變欲開出世之門こそ有けり。紀伊國高野の嶺は。弘法大師瑜迦定に入て。就卒をまち給ふ所にて。本朝の靈場最上の山なれ。さればにやとさ(たゞ脱歟)となくいやしきえらまず。老たるも若きも。菩提にこゝろ有もの。かの山に結縁むすばずといふ事なし。いまたらちめのなきあとに。おさめをくべき物などもあれば。たつさへもてまうでんとす。除服の宣たまはりて。おほやけにつかへば。をのが

袖の色をだに心にまかせてしたひ見るべくしもあらじ。五旬はてざらんほどよとおもひたちぬ。永源の僧立印。法雲の住祖因は。此ほどの喪にこもりて。やうく山にかへりいりなるといへるを。よしなをとまひてこそといざなひて。けふ卯月廿日あまり二日といふに都をたつ。空はれたり。難波わたり迄は舟にてくだるべければ。伏見よりとて人々いざなひゆく。めづらしくもあらぬ道のほどなれど。そここゝとりあつめて。思ひ出る事おほかるに。げになにとかは人のかたみならざらん。いまさらふり出るなみだに。袖はしぼりつゞけぬ。みすといふところより。舟にのりてさしいづるほど。水とをく見渡す川波に。見し世の春さへ霞のこりて。こゝろにうかぶ事のみおほし。汀の芦あをくおひしげれる中に雉子の啼を。是だに折ふしあわれにて。

資慶

たらちめのむかしをしればこをおもふ野邊
のきゝすのなくねかなしき

とひそかにずしなどするに。けふみちのほど
にて賦しけるとて。

祖因

欲往南州探舊蹤。 農騎鞭殿出河東。

今隨長者多奴僕。 不與昔時行脚同。

伏見は金湯の地なりといふ事をおもひて。

祖因

禾黍離々歩不通。 城隍何處認遺蹤。

豐臣曾失苞桑計。 盖代功名也作空。

淀のわたりを過行ほどに。時鳥はなどいひて。

泉南僧

ひとこゑはむかしをおもへほとゝぎすきい
はやすべきよどのわたりに

狐河にいたりぬ。こゝは壽永のみだれに。平忠

度朝臣駒引かへして。和哥のなげき申されし
所とかやいひつたふるとて。

立印

ひとすぢに引かへしける弓とりのあとをた
づねてけふきつね川

和韻す。

資慶

決死更回鞭。 留歌意雅然。

莫疑千載後。 名籍泛狐川。

全。

後衆著歸鞭。 勇心最凜然。

功名流不盡。 十載在斯川。

かくいへば。はやあとこ山のふもとを行。

立印

あとこ山和光のかけもうつりけりたれもの
り見よよどの川ふね

資慶

いはし水にごりにしまぬちかひあればあを

がざらめやいむ身なりとも

水無瀬の洲崎を過ぬれば。うとのゝあし。葉分
涼しく風渡りて。はるく／＼とみへわたるに。ひ
んがしはなぎさの院なり。

立印

をりかざしながめしひともしく花もいまは
なぎさのあとのしら波

舟中にてつくれる。

祖因

刺舟下渡頭。

人與 悠々。

觸石灘聲惡。

沈波山影流。

鯉魚搖尾樂。

鷗鳥浴翎浮。

縱有逝川欲。

勝遊好解愁。

魚水操舟兩岸中。

澱青徹底鑑塵容。

回眸回顔逢窓下。

是盡雲山幾萬重。

資慶

見るほども波にまかするふねよりもつるに

とまらぬ身をばわすれて

やう／＼ながれゆくほどに。佐太の宮を一里
斗過て。川の西にちいさき森のみへたるは江
口なり。遊女の舊跡とてなんあるといふを見
むとて。指寄てのぼりぬ。川堤を一町ばかり行
て。わかやのこなたに二間四面の堂あり。普賢
堂なるべし。前にふりたる碑有。よりてみれば
彌陀の名號をすへて其下に。世をいとふ人と
し聞ばかりの宿に心とむるなと思ふばかりぞ
とかけり。右には攝州西成郡中島江口と見ゆ。
左は文字きえたり。

資慶

おもへたゞたれもさこそはかりのやどにて
ゝろをとめず名をばとゞめじ

立印

こゝろある人のつらさはなか／＼に聞つた
へてもなさけとぞなる

祖 因

江口渡頭繫小船。

各催感慨古墳前。

姓人亦有出塵心。

一首和哥百世傳。

大坂にさしつけたれば。日は三竿ばかりになりぬ。久寶寺といふ所に知人有て待となん聞ば。いそぎ馬よせて行ほどに。やゝ暮渡る田面のさなへはやうへわたして。末葉風になびくほどなるを。都のほとりにはいまだなわしろにてこそとあもふに。こゝはみなみなればにや。

資 慶

むめがへもまづさくかたぞむべこゝにさつきもまたでさなへとりけり
くれすぐるまゝに。螢ほのかにともしそめて。
あぜつたひのしるべがほなり。

祖 因

難波城外夜行時。

村落縱横多路岐。

螢火亂飛井田水。 琉璃盤上引金糸。

やどりにつきぬれば。あすの道のほどなどとはせぬ。よろしきついでなれば。かわの太子(たちばな親王)にまうづべきよしへば。あるじこそ道のたよりもよしあり。譽田の御陵もそのあたりなり。あなひ申さんといふ。やがてまくらをとる。

廿三日。けふも空はれたり。都のやどりに霞日亭とてかまへ置たるにのぼりて。

祖 因

苔竹叢中處士居。 奇花異草遶庭除。

村名久寶價無盡。(無盡) 檐外風光盡不如。

久寶寺を出て道明寺の前をすぐ。十町ばかりゆきぬれば八幡宮なり。友まちて樓門のほとりにやすらふほどに。年四十にたらぬとみゆるかたいのふしたるが。人のをとにめさまして物こはんとす。けふはことに片岡山のむか

しさへおもひいでずしもあらねば。うちより
て物語などして。もと何人にかとへば。やが
て此ほとりの寺に出家して佛につかへしは。^{〔か懸〕}

十年ばかりがほど。中風になやみてなんかく
なりぬるなどいふ。今雨風にはだへをまか
せ。土にふし石をまくらとす。やめる事いかに
と問。今は中々さも侍らずといふ。さらばなど
かむかしの身にならざらん。僧は慈悲の行あ
れば。もとめによりて薪こり水汲わざのみは
さこそゆるしもあらんを。さおもはゞ我いま
そてらに此よしいひてといへど。さる事い
でやこれしともおもはぬけしきなれば。今の^{〔う懸〕}
ほどの命つぐべき施行してわかれぬ。調達が
地獄の樂しみ思ひつゞくるに。今煩惱苦海の
衆生さえに遠離の心なく。昨日を送りあすを
待なん。なにか是にことならむと。はかなき事
を思ひてやすらへば。みな來れり。宮は南むき

なり。はゞかりあれば本地彌陀堂などおがみ
めぐり。廻廊の西よりおくの院にまいる。御は
しのうちの院はみな律の僧すめるになん。御
廟も南にむかひて樓門あり。うちに常灯ほの
かにかゝげて。惠日のひかりをつげり。門のそ
なたに扉をたてゝ。そのうしろは山なり。山は
はるかに見しも。たゞひとつはなれて。みさゝ
ぎにつきたるなるべしと見ゆ。これ長野のみ
さゝぎなり。樓のほかよりかよひて御廟にゆ
うづ。山の中央に三重の石の塔あり。こけしろ
くたかさひて。幾世の宿といふ事をしらず。あ
となきに小笹を分入。しゐておがみ奉りぬる
に。いとまかしければ。

資 愛

いまもなをみつのころもにかけとめてこの
山のはにありあけの月

印 立

月かげはながのゝみねにいりぬれどひかり
をのこすのりのともしび

祖因

聞説先王曾此崩。

松杉陰翳譽田陵。

窓鶯悽愴神如在。

唐裡長挑一點灯。

下向すとて。かたはらの僧に物がたりなどして。そもこれはかしこくも吾國第一の宗廟。百王の御守り。いづれの靈跡かこゝにしかん。再興のさななどもなきにやといへば。いまはさる事おもひたつ事にも侍らず。むかし頼朝卿尊氏卿などは信じ參らせられたるよし聞傳へたりといふ。石清水の社僧等もまうずる事なしとかたる。それより伊駒のたけを左に見て。すゑに國府の川ながれ出たり。川にのぞみてちいさき山あり。これなん片岡山なりとをしゆ。行はかのそばづたひなり。

資愛

ふぢごろもかたおかやまのふるごとをきて
とふわれもあはれおやなし

立印

このたびはとはですぐるもはかなしなかの
かたおかなのりのみちしば

頓阿法師は大和國に有よししるしたり。片岡の達广寺といふも大和國とぞ聞。哥枕名所には河内の國に入たり。班鳩富緒川も河内なり。太子につきぬれば。まづ別當なにかしの院にもとめよりたるに。靈寶もとり出らる。其中に多寶塔の下より。回祿ののち堀出たりとて。佛舍利十二粒ふたつにはかりて。一方は黄金蓮肉形三の足あり。一方は水晶の塔に安置せり。各たかさ一寸ばかり。ふたつをあはせて。ひとつ銀のうつはもの。蓮房のかたちにして入り。八方に銘をほりたり。其銘に云。
毎日作是念。 以何令衆生。

得入無上道。

(遠敷)
連成就佛心。

建曆元年四月廿三日 沙門證空造之。

其外は青銅なり。おなじ蓮房なり。銘云。

是法住法位。

世間相常住。

於道傷知己。

導師方便説。

又外の二重蓮花形鐵なり。すべて五重にしてうづみ置たり。二重の鐵は朽て。中に水のたまりてありけるとなん。銀はすこしさびたり。黃金は不變なり。古人の心ざしはかくあさからざりける事を感ずるの銘の。四月廿三日と有をおりしもあれとて。

資慶

しるしをくあとも卯月の廿日あまりみつるえにしをおもふけふかな
やがて法衣うちかけて御廂にまうづ。入よりいとかしこく。すじろになみだうかびて廊門をいりぬ。櫓長後といへり。まへに拜堂あり

て。御廂は小山のこたかく物ふりたうときけしき。見ぬ人のはかりしるべくもあらず。神前は岩窟のうちに石壇を疊みたる廊に。かはらのやね軒山につけておくへ入事三丈餘り。常灯しづかにてらして。不滅の惠光をあらはす。香をたき禮拜して。西行法師がかたじけなさにといひけんなみだに。しばらく袖はなし。まして緇衣の身をやとて。

立印

此國につたへし法のまもりぞとおもへばぬるゝ墨染の袖

祖因

庭僧兼創寺。 万世別無人。
南嶽再生祖。 東漸應化身。
瑞楠枯又茂。 古碣倒長泯。
靈廂戀瞻久。 拜來淚濕巾。

資愛

法の水わが國ひろくつたへ置て末の世めぐ
む人のあとぞみれ^(こゑ)

御山はひとつはなれたり。上宮太子のこゝを
されかしこをされと宣ひしはこの陵なり。め
ぐりを石のそとばにてかこへり。爪字をすく
られたり。四十九院と云。弘法大師千日參籠し
て。三地の薩埵にのぼり給ふ。そのときにて給
ひしとなん。行めぐる石疊みは幾世の人のふ
みならしけん。影うつるばかりみがゝれてみ
ゆ。廟廊のやねにそひふして楠のあるを。これ
なん大乘木といへり。太子の御はゝをほうぶ
り參らせられし時。太子みづから御棺をかき
まいらせて。その木のはしをさしをかれたり。
吾大乘法此國にさかへば。此木根を杭せよと
ちかひ給ひしとなん。終に枝葉繁榮せり。世に
たえぬみのりの寶樹ぞと。

立印

立よりてあふげばいとゞかげたかしくちぬ
しるしの法のこのもと

この木回祿の時もえて。いとなりて中はうつ
ろにてぞあんなる。ひこばへ立さかへて皮肉
くひぜをつゝめり。後の五百年いまだなかば
なるにやとたのもし。かの火は惟任日向守光
秀が惡逆となん。鎮守九所權現御廂の東なり。
其南に淨土堂とてあり。彌陀の三尊を安置す。
弘法大師の御廂の内へ入て見給ふに。池水あ
りておくに石の座あり。石の輿三所を安置す。
是太子と母后と夫人となり。三尊の化身なる
事を石壁にしるしをかける文を。大師うつ
し取て出給ひぬとなん。この御廂の圖は眞言
に相傳する事となり。偕此三尊をつくりをか
れけるこそ今は新佛なり。御影堂聖靈堂はく
はしく畫圖して前にしるす。けふは河内國三
日市といふ所にとまり。

廿四日。空くもる。やどりを立とて三日市と云事を。

立印

すつる身はうき立雲かゆくみづかいちのもりやのみくしとまらで

祖因

行路迢々日欲昏。

指呼同友宿山林。

晨炊蓐食俶装闌。

又逐晴嵐出市門。

是より山路なり。やうく入山のあはひ。うつ
の山におもかげおもひあはせられて。いづれ
夢ぞとたどる。若ばあをやかにしげりたるに。
うの花咲まじりてかぢかなく水のおちあひな
り。涼しく山はたは色付て。秋の霜をいそくそ
ひへたる峯の庵。世はなれたる賤が柴のかこ
ひ。えにもおよぶまじく。たゝめる山の入あひ
たるは。山鳥のおをかはせるがごとし。

祖因

一條徑路傍溪斜。過了羊腸又犬牙。

倒嶺橫峰景千變。山河處處有人家。

こえ行峰のかくれに。炭がまのかりほあれて。
たささしたる跡などみて。

資慶

ふみ分て雪にはあとや見へつらん草葉に埋
むすみ竈の庵

さかしき所にまさがすれおちて。一筋見ゆる
道有。是は山人の柴きりためて岑よりくだす
なり。柴みちとこそいへとて。

立印

あやうきにこりはてぬ身をいかせんみね
よりくだす賤がしばみち

資慶

山がつの峰よりくだす柴くるまといひるか
たもなきこゝろかな

又

立印

みねつとふしば人よりもなか／＼に世にいづる身はあやうかりけり

紀の見の峠にこえかゝる。道に木たかくふりたる松三本ぞたてる。故あるさまなるをとへば。紀の國河内の境のしるしといふ。

資慶

たよりあらば紀のちのさかひけふこえてしるしの松もみきとつげばや

峠にのぼりぬれば。旅人の爲にむすびをけるいほりあり。やすらひてそこらとひきけば。此山なんかつらぎの峰つゞきにて。むかひのしげれる嶽にても。行者のおこなひすなるといへば。

資慶

しら雲のよそにかけこしかつらぎのみねのつゞきをけふぞこえぬる

立印

かつらぎや峰のしら雲分てこしよそにのみしてうらみはてじと

祖因

人倦馬疲懶躋攀。途中遙見葛城山。

溟濛雲雨晴何晚。又似靈神掩醜顏。

橋本のすくにひるの舍りに詔らひて行末の事などとふ。雨は猶やまず。高野の峰にのぼらむは。九折いとはげしく人馬やすからず。けふは此所にやどりて。あすなんはるべきをなどいふ人々もあれど。しむてのぼらんとす。

資慶

たかの山さらでも袖はしけるべきけふふる雨ぞわがこゝろなる

なにをしておやのみしよのむくひけんと思ふにぬるゝ墨ぞめのそで

立印

時のまもあふぎみるべきねがひとて山にも

こゆるやま路なりけり

雨ふればあやうきみちといさむれどやどし
てわたるはしもとのさと

とて出て。紀の川のわたり舟にのる。

是よりぞ高野の麓なる。慈尊院ははるかに南
のかたなるべし。道八方よりのぼるといへり。
やゝのぼりてかぶろのすくを過て。兼といふ
所に至る。雨猶やまず。やがて白雲の中に分入
ぬ。左右茫々と白て。さきだつはかへりみる友
をうしなひ。をくるゝはしるべにまよふ。風の
ゆきゝにやまきの梢^(一懸)あとかげばかり見へかく
れて。しるべにせん松だにもなし。まして一鳥
の聲だに聞へず。御山はいづこならんとあふ
ぎて。

資 慶

ねがひこしてゝろのそらは晴行をたかのゝ
峯のなにくもるらむ

すこしくだりてかみやといふ所に至る。爰は
かみすく所なり。猶のぼれば行末やゝ晴て。感
應のしるしがほなり。かつは随喜す。

祖 因

あまの川せきくだしゝもとどむるものい
る人のこゝろなるらん

不動坂を見やれば。杉檜雲にそびへて峨々と
聳たり。こなたに四寸五分と云難所あり。輿も
通ず。まして馬などは此道よりはのぼらぬ成
べし。かちより行に。巉巖左右にいてゝ道をさ
しはさめるほど。やゝふみ渡りて不動坂にい
たる。

祖 因

九折盤回路險危。目眩足流歩行遅。

巍然不動碧山面。^(散敷)千載散人仰大臥。^(傳教)

行めぐれば。吹すかしたる雲のはづれより。し
げれる嶽の顯たれる。金剛峯なるべし。かく山

ふかく入居給ひて。道侶いくばくの人をわたし給ふらんと思ふに。いとかたじけなしといへば。

立印

たか野山こゝろふかくもわけをきてたれも入べき道となしける

此あたりは杉ひの木さて檜など。末をあらそひ雲をしのぎ。所せくおひたちて松はなかりけり。下葉のもとよりよそひあらためて峻徳院といふ坊に入ぬ。

廿五日。空はなをくもれり。

立印

吾くにの山ともさらにおもはれずやへたつ空を分てきぬれば

晴間まちてけふはまづ御堂にまいる。中門は南にむかひたり。入て兩所御神明尊の御前過て。次第におがみめぐる。所から堂塔のふりたうと

きに。大塔高く九輪雲をすぎて。莊嚴さらにうるはし。三鈷の松は陰ふりて。御影堂の前に枝しんくそなれたれ。所々のつとめ今にたへず。三昧堂は美福門院の御願にて。西行上人いまだ良清といひしとき。奉行して建られたる下知の狀など寶藏にのこれり。庄園にとな殿もよせられしとなり。常に供僧ありて日行おこたる事なし。道長公夢想を感じて一步三禮して參詣し給ひて。終に大師に逢奉られしとなり。其後白河の法皇匡房卿の執奏により御幸をぞ催されける。慈尊院より御步行。三日にしてまゐりつかせ給ひけり。龜山後宇多の法皇も參り給ひしと聞ぞいともかしこきや。巡禮をはりて後院にかへりぬ。

蹈斷白雲登絶嶺。箇中境致別開天。

凌空鴈塔翼然聳。架谷僧房鱗次連。

兜卒梵宮移下界。廬峰精舍在那邊。

大師貳化密非密。遺德燠今八百年。

立印

わがやまをふかしとみてややみなましたかのゝおくにたづねいらすば

白雲はうづむとすれど聲すなりたか野のてらのいりあひのかね

廿二日。雨やみて雲はれず。けふおさめ奉るべき物の箱など。よくしたゝめたるに。

立印

なき人を思ひみだるとくろかみにそのきはよりも袖しぼるらんとあれば。

資慶

たのもしながき世迄もをちかみのおはりみだれぬすぢをみつれば

奥の院にまうづ。院々の前を過て。橋よりおくにはいほりもなし。道をさしはさめる杉の木

立末に。ふれ行雲の雫雨よりもことなり。左右はみな塔婆にて立ならべたるは。山の草木に數をあらそひ。貴い(上敷)きとなく賤きとなく。咫尺の地をあます事なし。ふりたるはたふれこけむし。其名もさながら消うせ。又幽に残るもあり。大方はみな此ごろの人とぞ見ゆる。こゝにみるだにかくそひゆくらん。なき數にいましてもれにける身の。かつはあはれに猶更に生死事大に參壽。

祖因

新舊累々幾變途。半傾半倒石浮圖。可憐大小英雄士。空沒蘚苔名亦無。

資慶

立ならぶ名もしら露のふるあとにかたぶく石もなをあはれなる

立印

高野山しるしの石も莓ふりてあはれたれと

も名だにしられず

左の山より細く流れ出て。道のかたはらを行水有。大師玉川の水と詠じ給ひしを是ぞといへど。さだかにさこそとも見えず。かくて三十余町が程はみなおなじことにて。山のそば谷のかげ。見る物はたゞふるあとなり。卒都婆はつみて山をかさね。きのふのはさながらけふうづめり。

立印

たれとでもつゐにはきえん露の身をたかの
ゝ苔に契りをかなん

御供所のうしろに木しげき峯あり。姑射山と云。人跡絶てふかし。此山に人の分入事なし。入ものはかへらずとなんかたる。そこを過ぬれば御廟の橋なり。世人あやまりて無明の橋といひて。無明煩惱の業ふかき人は渡る事をえずして罪障懺悔すとす。此川は御山廻りて

ながるゝ清淨の靈水なり。參詣給へ流灌頂と云とをしをきたるが。ながれよりたるは木隠れの岩根にたゞめり。水のさよければにや。さながら折すけにうつくつもるかびぬべし。燈籠堂は東西行二十間計とぞ見ゆる。四方格子にて敷瓦也。其中に堂にしたがひてすぢとをし。重々にかゞやきたり。中央に護戸の壇あり。めぐりて塗香して廊前にまいる。杉たかく生かこみたる中にぞおはします。玉がきの中には尋常に入事なし。石壇にかりに香爐すへて香焼。三拜して先妣精靈速證菩提。次にはをのが心願など申て。いとかしければ。露のいのちあらんほどに。今一度とぞむすびをさける。

ふかきよりふかきにいりてたか野やま妙な
るかどをたづねみしかな

祖 困

松檜森々山更深。

那伽定裡自安心。

却觀一念萬年事。

慈氏下世也即々。

立印

收影高山待下生。

那伽定裏六根清。

寂然堂内灯千點。

照破人間愚暗情。

さておさむべき箱取出て。いづくのわたりかといへば。引導の僧此所をかまへ置つとて。三十一町としるせる石のもとより西の山のかたに。杉のふる葉を分入てみれば。所もさりぬべしと。みづから地を成して納つ。しるしの石に哥仙大姉と刻み入たるわきに。

資慶

むすびをくえにしくちめやたかのやまその

あかつきをまつのした露

頌曰。

壽量未必比仙家。

長保法身意若何。

爪髮併埋靈地程。

化爲土塊待龍華。

我遺骨の後(か説)ならず此山に來らむ事を契りおきて。枝の下道わけいづるほど。いと名残さへ

そひぬ。ちかき代には甘露寺大納言親長卿此山にふたゝび參詣して入堂のつゐてに。

さきの世のちぎりやふかきたかのやまふたゝびわくる峯のしら雲

とよみけるよし。日記にしるしをかれたるをみしなども。うらやましく思ひあはせられて。かたはらの杉の本をけづりてかきつけける。

薩戒修行者

おなじくはいのちある世にふたゝびとちぎりていづる杉のしたみち

おなじところに。

立印

たかの山ふかきころの月かげはそのあかつきをまたでしも見む

かへるさの行てなれば。金剛三昧院にありと

いふ寶積經の短尺を披見す。それより南院にまかり。大師唐土にて歸朝の願につくられたる不動をおがみ奉る。又五筆禮讃は寶性院にあり。益田池の碑銘。釋迦文院の什物となり。うるはしく眞蹟なるべし。かへりぬれば日くれぬ。

資慶

たか野山なき名の數にけふもまたもれてききつるいりあひのかね

廿七日。今朝もはれず。けふこの山を別るべければ。峻徳院の廂に参りて。いさゝか心ざしをのべて。手向の香にそへぬ。其詞。

資慶

洛西常磐森の法に法雲といふは。院をかまへて我祖の遺跡とす。井伊拾遺直滋朝臣あなじ所にあとをしめらる。今こゝろざす事ありて此山に分入ぬるに。かの縁にひかれて峻徳院

と云によりて。とふべき人のしるしなどたてをくとて。一むらさめのかげならぬ事を思ひて。いさゝか手向する事になれり。

たかの山こけのしたまでむすびけりときはのもりの露のちぎりを

立印

なきあとに名のみのこりてたかのやまたれあらそはん弓矢とる身の

祖因

元は一輪天上月。野山太皐各分光。神靈來格有緣處。爲向廂前撮辨香。あるじに余波などいひて出るとて。

立印

こゝを出ていづくの山にとしふともかゝるあはれをわするべしやは

資慶

むすびをくこけぢの露のかり枕ながきよま

てのえにしともなれ

祖 因

泣雨杜鵑催不驚。

野山投宿忘歸程。

再來預恐易經歲。

佛閣僧房細聞名。(増補)

下乗のもとまで院の僧ども送り出て名残をし
みなどす。此あひだいたづらにしのびつるは。
いつのほどにあらはれぬるなり。花の水とも
てはやすも。おもてにかきすへてこそ。やゝく
だりぬれば。今朝をくりせし法師の中に。了玄
といひし人の哥讀しは。かたくなゝる事にも
こそあれ。ひそかにと申たりしかばとて。即叟
ふところより短尺とりいてたり。みれば。

おもひさやこの柴の戸を稀にあけておほみ
や人の袖をみんとは

やさしかりつるを。返しもせてといへどかひ
なくてやみぬ。猶空晴てかへり見る峯さやか
に。又いつかはとしぼらぬはなし。不動坂に至

りて見れば。晴ぬとみしは空よりうへなれば
にや。しもはたゞ白雲漫々とみたり。谷をうづ
むとみゆるは山々のたかねにて。みらくすく
なさいその石の。しほひにあらはるゝやうに
ぞ有ける。

資 慶

山うづむ雲をふもとの海にみてつゝらより
ゆく道のはげしき

祖 因

雨醒岑頭翠聳天。
雲埋山腹色始綿。(和歌)
忽然參得樊川句。
暗認人家下絕巔。

多謝輿僮勞隻肩。
山程路滑步難前。
只因自己脚跟定。
步嶮蹈危終不顛。

分つくして又橋本のすくにつく。やどりのま
へに紀の川ながれていと興ありとぞみるに。
やゝ暮行空猶雲まよひて雨もよほすけしきな

るに。

立印

いかなれば五月を空よりいそぐらむはれ間
だになき夕暮のあめ

といへるに。今日雲わけし道のほどにて思ひ
をさし題あるを。いざよまんとて。白雲盡處見
人煙といふ事を。

資慶

晴行かいほみへそめて山がつのゆふげのけ
ぶり雲にわかるい

立印

しら雲は風にうつりておちかたのけぶりぞ
のこる山がつのいほ

祖因

白雲重疊掩山巔。 遠近失程樵路懸。

忽着剛風何處去。 夕陽村落見炊烟。

又嶽色江聲暗結愁といふ句の心を。

立印

夕ぐれははれぬながめとなりにけり谷のひ
ききも山のけしきも

資慶

水のをとほ袖のあめにもまさるかとながひ
る嶺に雲ぞかさなる

猶やみがたくて半夜灯前十年事。一時和雨到
心頭といふを題にて。

資慶

こしかたをかきつらねつゝよるの雨をすゞ
りにつくすともし火のもと

立印

こしかたをいかにおもへどあめもよのあく
るもおそきともしびのもと

祖因

夜雨蕭然欹枕頭。 旅簷起座一灯幽。

通宵耿耿難成夢。 記得新愁與舊愁。

なをねられずなどいひて。即叟硯をなして言
葉をかく。（田原）

むかし世をのがれて高野の山に上りし時。ゆ
き暮てこのさとに一夜のやどりをかる。比し
も秋の空なれば。夕のあらし身にしみ。夜半の
月心をすまして。いと旅寢の哀に。袖しぼり
し事を又。

立印

おもひ出ていまだにぬるゝたもとかなひと
りたびねの夜半のむかしを

廿八日。雨そぼふる。橋本を出て山路をゆく。

祖因三首

數日行程山色奇。吟望處々欲題詩。

歸鄉風景人如問。把比實囊（此実）附與伊。

河内津陽衆紀間。（京橋）回頭指點幾孱顔。

野翁不解風流事。問我那心苦見山。

山路連朝帶雨行。幾多羈客促愁情。

我儂不是貪程切。只爲風光祈快晴。

ぬれ／＼て三日市につきぬ。ありしやどり尋
てやすらふ。あるじ出てけふぞ下向し給ける。
又は待いでん事もかたし。物かきてこゝに残
し給へといふ。いさやさるものには侍らず。修
行者のさすらへにいざなはれて。かく嘯きあ
りき侍れども。物かきをしわざなどはしらず
とけちやれど。しゐてゆるさゞりければ筆取
て。

資慶

笹のやのひと夜のふしをわすれじとかきの
こさんもあだし言の葉

かきすてゝいづみのかたへたどり行。山はつ
きて野べ廣し。末はるかに海原の見へ渡りた
るを。いとめづらしげなり。此野を小野芝と
云。

立印

太山わけはやまも今はつきぬらしながめは
れ行をのゝしばみち

祖 因

雨晴山亦盡。

忽忘路行難。

出野回吟睇。

笠檐天地寬。

みやこのかたも雲はれてみゆ。

資 慶

山ふかみはれぬゆふべのながめをしみやこ
は雲もかゝらざりける

福町といふところのみちのほとりに。五劫思
惟彌陀石の像あり。

祖 因

何年離淨國。

獨座此村邊。

稽首彌陀佛。

願輪與石堅。

堺にいたりてやどりもとむとて。同行のしる
べまどひして。

同

宜哉楊子哭。

岐路誤東西。

認得長安道。

決然不復迷。

廿九日。からうじて晴行。いそぎ立いづとて。
海のかたをながめて。

同

泉南一都會。

比屋近汀洲。

借問賈商客。

風光能愛不。

すみの江を行ほど。こぎ行舟のほのくゝとあ
けゆく浦波。松のひまに見へて。社のかたやう
やう日影さしそむるにありてやすらひぬ。思
ひ出る事松のはのかずゝにて。

資 慶

すみの江の松のむかしとなるひとによるて
ふ貝をひろひわびつゝ

かたみとて人の殘さぬうみやまもみればみ
しよを忘れやはする

可悦叟松かけより出きて。我いほは此わたり

にこそ。立より給はずやといへば。

立印

そむく身はこゝにはすまじ住の江やえもと
ぢはてじうらのけしきに

ひらかたにて渡しまつほど。過行舟をみて。

祖因

百丈操舟附魚流。(全勝) 激湍波惡上遲留。

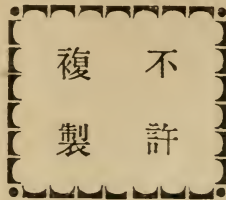
可憐易退却難進。恰似吾徒參話頭。

こよひはうとのゝこやにやどりて。あくれば

都にいりぬ。

以宮内省圖書寮所藏塙氏原本再校了 芝葛盛

明治四十四年十月廿一日 印刷
明治四十四年五月廿十日 發行
昭和十六年五月十一日 六版發行



發行者

東京市豊島區池袋二丁目一〇〇八番地
續群書類從完成會代表者

太田藤四郎

印刷者

東京市豊島區西巢鴨二丁目二五七四番地

丹羽誠次郎

印刷所

東京市豊島區西巢鴨二丁目二五七四番地

忠義堂印刷所

發行所

東京市豊島區池袋二丁目一〇〇八番地

續群書類從完成會

振替東京六二六〇七・電話大塚七一八

EAST-ASIAN LIB. UNIVERSITY OF TORONTO



3 1761 03043 3650